

北陸新幹線関係発掘調査報告書XIV

姫御前遺跡Ⅱ・竹花遺跡Ⅰ

2011

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

北陸新幹線関係発掘調査報告書XIV

ひめごぜ
姫御前遺跡Ⅱ・たけはな
竹花遺跡Ⅰ

2011

新潟県教育委員会

財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

北陸新幹線は、東京都を起点に上越新幹線高崎駅から分岐して、長野市・上越市・糸魚川市・富山市・金沢市・福井市を経て大阪府に至る総延長700kmの新幹線鉄道です。開通により北陸地方と首都圏・関西圏は短時間で結ばれ、日本海沿岸地域の産業・経済・文化の交流発展に多大な効果をもたらすものと期待されています。

本書は、この北陸新幹線建設に先立ち、平成20年度に実施した姫御前遺跡・竹花遺跡の発掘調査報告書です。調査によって、両遺跡とも古墳時代と室町時代の遺跡であることが明らかになりました。古墳時代には、姫御前遺跡では集落、竹花遺跡では水田が営まれたことが分かりました。集落と水田が近接して発見されたことは、当時の景観を知る上で、貴重な資料となります。室町時代には、周辺に水田が広がっていたことが分かり、そこで木製品を使った祭祀が行われていたことが明らかになりました。また、香や茶に関する道具や仏具などの高級品が多数発見され、付近に有力者が存在したことをうかがい知ることができました。

今回の調査資料と本報告書が、糸魚川地域の歴史を解明するための資料として広く活用され、埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この調査に関して多大な御協力と御援助をいただいた糸魚川市教育委員会、並びに地元住民の方々、また発掘調査から報告書刊行に至るまで格別の御配慮をいただいた独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構北陸新幹線第二建設局、同糸魚川鉄道建設所の皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成23年3月

新潟県教育委員会

教育長 武藤 克己

例 言

- 1 本書は、新潟県糸魚川市東寺町1丁目1060番地1ほかに所在する姫御前遺跡、糸魚川市寺町2丁目458番地ほかに所在する竹花遺跡の発掘調査記録である。なお、姫御前遺跡については平成18年度に調査し、『姫御前遺跡Ⅰ』として報告書を刊行している。したがって、本報告書を『姫御前遺跡Ⅱ』として区別する。また、竹花遺跡についても、平成21年度にも調査を行っており、『竹花遺跡Ⅱ』として報告書を作成している。したがって、本報告書を『竹花遺跡Ⅰ』として区別する。
- 2 この調査は、北陸新幹線の建設に伴い、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構（以下、鉄道・運輸機構）から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したもので、調査主体である県教委は財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を依頼した。
- 3 埋文事業団は、掘削作業等を株式会社古田組に委託して、平成20年度に発掘調査を実施した。
- 4 出土遺物及び調査に係る各種資料（含観察データ）は、一括して県教委が保管している。データの有無や閲覧希望は、県教委に問い合わせ願いたい。
- 5 遺物の注記は姫御前遺跡の略記号を「08ヒメゴ」、竹花遺跡の略記号を「タケハ」とし、出土地点や層位などを続けて記した。
- 6 本文の図中で示す方位は、すべて真北である。
- 7 遺物番号は種別に間わりなく遺跡ごとに通し番号とし、本文及び観察表・図面図版・写真図版の番号はすべて一致している。
- 8 引用文献は、著者及び発行年（西暦）を文中に〔 〕示し、巻末に一括して掲載した。また、作成した図版のうち、既成の地図を使用した場合は、それぞれにその出典を記した。
- 9 調査成果の一部は、現地説明会（平成20年10月11日開催）、『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成20年度』（平成21年10月20日発行）、『第17回 遺跡発掘調査報告会資料』（平成22年9月5日開催）、広報紙『埋文いいた』No.64（竹花遺跡、平成20年10月7日発行）・No.66（姫御前遺跡、平成21年3月2日発行）・No.72（姫御前遺跡、平成22年9月30日発行）、『新潟県考古学会連絡紙』第78号（姫御前遺跡、平成20年11月21日発行）、『第25回日本植生学会大会』発表要旨（姫御前遺跡、平成22年11月28日開催）で公開しているが、本書の記述をもって正式な報告とする。
- 10 自然科学分野の各種分析は、以下の機関に委託して行った。
 - 花粉分析・プラントオパール分析・珪藻分析・大型種実同定・動物骨同定：株式会社古環境研究所
 - 木製品等の樹種同定：東北大学学術資源研究公開センター（付属植物園 鈴木三男教授）
 - 放射線炭素年代測定：株式会社加速器分析研究所
 - 年輪解析：福島大学（共生システム理工学類 木村勝彦准教授）また、火山灰分析については新潟大学災害復興科学センター 卜部厚志准教授から執筆いただいた。
- 11 遺構図のトレース及び各種図版作成・編集は株式会社 セビアスに委託してデジタルトレースとDTPソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者へ入稿して印刷した。
- 12 本書の執筆は、加藤 学（埋文事業団 班長）、相羽重徳・渡辺大士（株式会社古田組 調査員）が当たり、編集は加藤が担当した。また、校正に藤巻正信調査課長が加わった。執筆分担は以下のとおりである。
 - 第1章、第2章、第3章1・2・3A・3C・3E（3）（4）、第4章1・2・3A・3C・3G、
第6章1B・1C・1E・2C・3：加藤
 - 第3章3B・3D、第4章3B・3D・3E、第6章2A・2B：相羽 第6章1A：相羽・加藤
 - 第3章3E（1）（2）、第4章3F、第6章1D：渡辺
- 13 図版中のトーンは、各図版に凡例を示した。また、断面スミ塗りの土器実測図は須器器を表す。
- 14 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くのご教示・ご協力をいただいた。ここに記して厚く御礼申し上げる。（敬称略、五十音順）
卜部厚志 岡村道雄 小川とみ 長田友也 木村勝彦 坂本 稔 鈴木三男 法井光輝
稲崎真陸 橋本博文 早津賢二 松永萬知 光谷拓実 宮本長二郎 山田昌久

目 次

第I章 序 説

1 調査に至る経緯	1
2 試掘・確認調査の結果	2
A 姫御前遺跡	2
B 竹花遺跡	2
3 姫御前遺跡における工事立会	5
A 工事立会の体制	5
B 工事立会に至る経緯と結果	5
4 本発掘調査と整理作業の経過	6
A 調査・整理の体制	6
B 調査の経過	6
(1) 姫御前遺跡	6
(2) 竹花遺跡	7
C 整理作業の経過	8

第II章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境	9
2 歴史的環境	10
A 周辺の遺跡	10
B 『越後下向日記』と観音寺	14

第III章 姫御前遺跡II

1 調査の概要	15
A グリットと調査区の設定	15
B 基本層序	15
(1) 平成18年度調査区の基本層序との整合	15
(2) 基本層序の記述	16
(3) 局所的な基本層序の記述	17
C 調査の概要	18
2 遺 構	19
A 概 要	19
B 記述の方針	20
(1) 遺構名の付し方	20
(2) 土層の記述方法	20
(3) 遺構の記述方法	20
(4) 建物・溝の軸方向	21
C 各 節	21
(1) 近世の遺構	21
(2) 中世の遺構	23
(3) 古墳時代前期の遺構	23
(4) 弥生時代後期の遺構	34
3 遺 物	34
A 概 要	34
B 土器・陶磁器	35
(1) 中世～近世の陶磁器	35
(2) 古代の土器	41
(3) 弥生時代～古墳時代の土器	41

C	石製品・石器	50
(1)	中近世の石製品	50
(2)	古墳時代の石製品	50
(3)	古墳時代の石器	53
(4)	縄文時代～弥生時代の石器	58
D	金属製品・鍛冶関連遺物	58
E	木製品	59
(1)	記述の方針	59
(2)	各説	60
(3)	木製品の年代	64
(4)	樹種構成	64

第IV章 竹花遺跡 I

1	調査の概要	65
A	グリットと調査区の設定	65
B	基本層序	65
C	調査の概要	66
2	遺構	67
A	概要	67
B	近世の遺構	68
C	中世の遺構	69
(1)	水田状遺構	69
(2)	箸状木製品等の出土状況	70
D	弥生時代終末期～古墳時代前期の遺構	72
(1)	畦 群	72
(2)	溝	74
(3)	遺物集中範囲	76
3	遺物	76
A	概要	76
B	土器・陶磁器・漆器・土製品	77
(1)	中世～近世	77
(2)	古代	83
(3)	弥生時代～古墳時代	84
C	石製品・石器	85
(1)	中世～近世	85
(2)	弥生時代～古墳時代	86
D	金属製品	86
E	鍛冶関連遺物	86
F	木製品	87
(1)	中世の木製品	87
(2)	古墳時代前期の木製品	89
G	小 札	91

第V章 自然科学分析

1	姫御前遺跡における自然科学分析	92
A	花粉分析	92
B	植物珪酸体分析	100
C	畦深分析	104
D	大型種実同定	107
2	竹花遺跡における自然科学分析	111
A	花粉分析	111
B	植物珪酸体分析	116
C	畦深分析	119
3	姫御前遺跡及び糸魚川・上越地域の遺跡における古墳時代の火山灰層	122
A	はじめに	122

B	火山灰分析	122
C	試料の分析結果	123
D	考 察	128
4	新潟県姫御前遺跡及び竹花遺跡出土木材の樹種	130
A	はじめに	130
B	同定された樹種	130
C	姫御前遺跡・竹花遺跡の出土材の樹種組成	140
D	姫御前遺跡の埋没林の組成	140
E	姫御前遺跡・竹花遺跡の古墳時代と中世の木材利用	142
5	姫御前遺跡における放射性炭素年代 (AMS 測定)	143
A	測定対象試料	143
B	測定の意義	143
C	化学処理工程	143
D	測定方法	143
E	算出方法	143
F	測定結果	144
6	姫御前遺跡出土木材の年輪、ウイグルマッチングを用いた年代学的研究	148
A	はじめに	148
B	試 料	148
C	方 法	149
D	結 果	151
E	考 察	155
7	動物遺存体の同定	161
A	はじめに	161
B	姫御前遺跡における動物遺存体	161
C	竹花遺跡における動物遺存体	162
第VI章 ま と め		165
1	弥生時代～古墳時代	165
A	姫御前遺跡における弥時代後期～古墳時代前期の土器の年代	165
B	姫御前遺跡における周溝を有する平地建物 SI216 について	167
C	竹花遺跡・姫御前遺跡における弥生時代終末期～古墳時代前期の水田耕作	174
D	竹花遺跡における木製農耕具の形態組成と地域性	179
E	姫御前遺跡における玉作	183
2	中 世	183
A	姫御前遺跡・竹花遺跡から出土した中近世陶磁器の組み合わせ	183
B	加工円盤の分類と用途	189
C	竹花遺跡と観音寺	192
3	姫御前遺跡・竹花遺跡周辺の環境変化と遺跡の消長	193
A	遺跡形成以前	193
B	縄文時代～平野への進出と鬱蒼としたスギ林	193
C	弥生時代後期～スギ林の開墾	193
D	弥生時代終末期～古墳時代前期～集落の形成と水田耕作の開始	195

E 弥生時代終末期～古墳時代前期中葉の火山活動—指標火山灰の検出—	196
F 古墳時代中期初頭—草本質泥炭の形成と水田復旧—	198
G 古代—II b 層の堆積開始年代—	200
H 中世—観音寺と周辺の景観—	200
I 近世—集約的な水田耕作と洪水被害—	201

《要 約》	202
-------	-----

《引用・参考文献》	203
-----------	-----

《観 察 表》

姫御前遺跡II遺構観察表	
平地式建物・掘立柱建物	209
土 坑	211
姫御前遺跡II遺物観察表	
中近世陶磁器	212
石 製 品	219
銭 貨	221
竹花遺跡I遺物観察表	
中近世陶磁器	223
弥生時代～古墳時代土器	228
銭 貨	230
漆 器	228
石製品・金属製品	229
木 製 品	230
姫御前遺跡6区SR・竹花遺跡出土自然木・樹種同一一覧	233

挿 図 目 次

第1図 北陸新幹線の路線と調査遺跡の位置	1	第21図 扁平礫の重さ	57
第2図 確認調査トレンチ位置と本発掘調査対象範囲	3	第22図 姫御前遺跡における鉄滓・羽口出土分布	58
第3図 竹花遺跡における試掘調査状況	4	第23図 竹花遺跡における中世祭祀遺物の出土位置	71
第4図 竹花遺跡の本発掘調査対象範囲	5	第24図 竹花遺跡における鉄滓・羽口出土分布	86
第5図 姫御前遺跡・竹花遺跡の位置と周辺の地形	10	第25図 姫御前遺跡の花粉・胞子・寄生虫類	93
第6図 姫御前遺跡周辺の主な遺跡	11	第26図 姫御前遺跡の26B25地点における花粉ダイアグラム	95
第7図 遺跡間・調査区間における基本層所の対応関係	16	第27図 姫御前遺跡の30B2地点における花粉ダイアグラム	96
第8図 混入物の含有量	20	第28図 姫御前遺跡の37A13地点における花粉ダイアグラム	98
第9図 遺構の平面形態と断面形態の分類	21	第29図 姫御前遺跡の植物珪酸体(プラントオーバー)	101
第10図 姫御前遺跡における中世祭祀遺物の出土位置	22	第30図 姫御前遺跡の26B25地点における植物珪酸体分析結果	102
第11図 城ノ川の位置と旧蓮台寺川の推定位置	32	第31図 姫御前遺跡の30B2地点における植物珪酸体分析結果	102
第12図 流路における自然木出土状況図	33	第32図 姫御前遺跡の37A13地点における植物珪酸体分析結果	102
第13図 加工皿盤分類図	40	第33図 姫御前遺跡の珪藻	105
第14図 管状土鉢分類図	41	第34図 姫御前遺跡の37A13地点における主要珪藻ダイアグラム	106
第15図 土器の分類(1)	42		
第16図 土器の分類(2)	44		
第17図 貝殻状剥片の大きさ	54		
第18図 貝殻状剥片の剥離軸	55		
第19図 研磨整形された石包丁様の横刃形石器	56		
第20図 扁平礫の大きさ	57		

第 35 図	姫御前遺跡の種実……………	108
第 36 図	姫御前遺跡の 37A13 地点における種実ダイアグラム……………	110
第 37 図	竹花遺跡の花粉・寄生虫卵……………	111
第 38 図	竹花遺跡の 63B12 地点における花粉ダイアグラム……………	113
第 39 図	竹花遺跡の 73B16 地点における花粉ダイアグラム……………	114
第 40 図	竹花遺跡の植物珪酸体 (プラントオーバー)……………	116
第 41 図	竹花遺跡の 63B12 地点における植物珪酸体分析結果……………	117
第 42 図	竹花遺跡の 73B16 地点における植物珪酸体分析結果……………	118
第 43 図	竹花遺跡の珪藻……………	119
第 44 図	竹花遺跡の 73B16 地点における主要珪藻ダイアグラム……………	120
第 45 図	各遺跡の古墳時代の層位に含まれる火山ガラスの化学組成……………	128
第 46 図	各遺跡の古墳時代の層位に含まれる火山ガラスの化学組成 (TiO ₂ - K ₂ O 図) ……	128
第 47 図	サワラ・アスナロ・スギの顕微鏡写真……………	131
第 48 図	アカマツ・カバノキ属・アサダの顕微鏡写真……………	133
第 49 図	クリ・ブナ属・アカガシ亜属の顕微鏡写真……………	135
第 50 図	ケヤキ・モクレン属・カエデ属の顕微鏡写真……………	137
第 51 図	トチノキ・トネリコ属・ガズミ属の顕微鏡写真……………	139
第 52 図	暦年較正年代グラフ……………	146
第 53 図	スギ自然木 14 個体の年代関係と年輪変動……………	153

第 54 図	トリネコ属 3 個体の年代関係と年輪変動、個体間同調性を示す t 値……………	153
第 55 図	木柱列 SA199 を構成する木柱 SX224、P420、P421 の相対年代関係と年輪変動、個体間同調性を示す t 値……………	153
第 56 図	ウイグルマッチングによって推定された各試料の表層年輪断年代の確立分布……………	154
第 57 図	ウイグルマッチング結果と較正曲線 (IntCal) の比較……………	154
第 58 図	スギ自然木、木柱列 SI199、平地式建物 SI216 の歴年代関係……………	157
第 59 図	埋没林全体の平面図と年輪クロノロジーに組み込まれたスギ個体の位置……………	158
第 60 図	姫御前遺跡の動物遺存体……………	161
第 61 図	竹花遺跡の動物遺存体……………	163
第 62 図	姫御前遺跡における弥生時代～古墳時代の土器の変遷……………	166
第 63 図	新潟県内の沖積地における縄溝を有する建物の変遷……………	172
第 64 図	姫御前遺跡・竹花遺跡における建物・溝・畦畔の主軸……………	176
第 65 図	直柄罫の分類……………	179
第 66 図	新保遺跡出土ナスビ形柄罫……………	180
第 67 図	弥生時代後期～古墳時代前期の鹿柄罫……………	181
第 68 図	罫の装飾様式図……………	182
第 69 図	各遺跡における 1m ² あたりの土器・陶磁器出土破片数……………	184
第 70 図	姫御前遺跡・竹花遺跡出土の土器・陶磁器組み合わせ (供膳具)……………	187
第 71 図	姫御前遺跡・竹花遺跡出土の土器・陶磁器組み合わせ (供膳具以外)……………	188
第 72 図	笛吹田遺跡における工作用特殊ビットと出土土器……………	197

挿表目次

第 1 表	作業工程表……………	8
第 2 表	中世土器器皿の分類……………	37
第 3 表	加工円盤の分類……………	40
第 4 表	玉作関係資料の数量と出土位置……………	51
第 5 表	各遺跡における出土銭貨数量……………	59
第 6 表	姫御前遺跡における花粉分析結果 (26B25 地点)……………	94
第 7 表	姫御前遺跡における花粉分析結果 (30B2 地点)……………	96
第 8 表	姫御前遺跡における花粉分析結果 (37A13 地点)……………	97
第 9 表	姫御前遺跡における植物珪酸体分析結果……………	

……………	……………	101
第 10 表	姫御前遺跡における珪藻分析結果……………	106
第 11 表	姫御前遺跡における種実同定結果……………	109
第 12 表	竹花遺跡における花粉分析結果 (63B12 地点)……………	112
第 13 表	竹花遺跡における花粉分析結果 (73B16 地点)……………	113
第 14 表	竹花遺跡における植物珪酸体分析結果……………	116
第 15 表	竹花遺跡における珪藻分析結果……………	120
第 16 表	採取試料の構成鉱物……………	126
第 17 表	姫御前遺跡・竹花遺跡出土木材の樹種……………	140
第 18 表	姫御前遺跡・竹花遺跡出土木材の時期別樹……………	

	種組成	141
第 19 表	姫御前遺跡・竹花遺跡の加工材の樹種構成	142
第 20 表	SI216・SA199・自然木の測定結果	144
第 21 表	暦年較正年代	145
第 22 表	年輪解析対象として選んだ自然木リスト	151
第 23 表	年輪解析対象とした自然木の概要	151
第 24 表	木柱の年輪計測結果	152
第 25 表	自然木スギ個体間の相関を示す t 値	152
第 26 表	放射性炭素年代測定結果	154
第 27 表	種名表	161
第 28 表	姫御前遺跡の動物遺存体	162
第 29 表	種名表	163
第 30 表	竹花遺跡の動物遺存体	164
第 31 表	弥生時代～古墳時代の編年と実年代	165

第 32 表	新潟県内の沖積地における縄濶を有する建物の変遷	185
第 33 表	中近世土器・陶磁器の産地・器種別出土破片数(竹花・II b 層)	185
第 34 表	中近世土器・陶磁器の産地・器種別出土破片数(姫御前 I・II a・II b 層)	185
第 35 表	中近世土器・陶磁器の産地・器種別出土破片数(姫御前 II・II a 層)	186
第 36 表	中近世土器・陶磁器の産地・器種別出土破片数(姫御前 II・II b 層)	186
第 37 表	中近世土器・陶磁器の産地・器種別出土破片数(竹花・II a 層)	186
第 38 表	姫御前遺跡・竹花遺跡出土の加工円盤集計表	190
第 39 表	姫御前遺跡・竹花遺跡における層位の対応関係と環境の変化	194

図版目次

【図面図版】

図版 1	姫御前遺跡・竹花遺跡全体図
図版 2	姫御前遺跡全体図
図版 3	姫御前遺跡 II 基本層序
図版 4	姫御前遺跡 II 5 区道構分割図 (1)
図版 5	姫御前遺跡 II 5 区道構個別図 (1) (道構分割図 (1) 1-1' ~ 13-13')
図版 6	姫御前遺跡 II 5 区道構個別図 (2) (道構分割図 (1) 14-14' ~ 31-31')
図版 7	姫御前遺跡 II 5 区道構個別図 (3) (道構分割図 (1) 32-32' ~ 42-42' 遺物出土遺物状況図)
図版 8	姫御前遺跡 II 5 区道構分割図 (2)
図版 9	姫御前遺跡 II 5 区道構個別図 (4) (道構分割図 (2) 1-1' ~ 14-14')
図版 10	姫御前遺跡 II 5 区道構個別図 (5) (道構分割図 (2) 15-15' ~ 33-33')
図版 11	姫御前遺跡 II 5 区道構個別図 (6) (道構分割図 (2) 34-34' ~ 55-55')
図版 12	姫御前遺跡 II 5 区道構個別図 (7) (道構分割図 (2) 56-56' ~ 78-78')
図版 13	姫御前遺跡 II 5 区道構個別図 (8) (道構分割図 (2) 79-79' ~ 95-95')
図版 14	姫御前遺跡 II 5 区道構分割図 (3)
図版 15	姫御前遺跡 II 5 区道構個別図 (9) (道構分割図 (3) 1-1' ~ 17-17')
図版 16	姫御前遺跡 II 5 区道構個別図 (10) (道構分割図 (3) 18-18' ~ 30-30')
図版 17	姫御前遺跡 II 5 区道構個別図 (11) (遺物

出土状況図

図版 18	姫御前遺跡 II 5 区道構分割図 (4)
図版 19	姫御前遺跡 II 5 区道構個別図 (12) (道構分割図 (4) 1-1' ~ 13-13')
図版 20	姫御前遺跡 II 5 区道構分割図 (5)
図版 21	姫御前遺跡 II 5 区道構個別図 (13) (道構分割図 (5) 1-1' ~ 11-11')
図版 22	姫御前遺跡 II 5 区道構分割図 (6)
図版 23	姫御前遺跡 II 5 区道構個別図 (14) (道構分割図 (6) 1-1' ~ 17-17')
図版 24	姫御前遺跡 II 5 区道構個別図 (15) (道構分割図 (6) 18-18' ~ 23-23'), (道構分割図 (7) 24-24' ~ 32-32')
図版 25	姫御前遺跡 II 6 区道構分割図 (7)
図版 26	姫御前遺跡 II 6 区道構分割図 (8)
図版 27	姫御前遺跡 II 6 区道構個別図 (16) (道構分割図 (8) 1-1' ~ 19-19')
図版 28	姫御前遺跡 II 6 区道構分割図 (9)
図版 29	姫御前遺跡 II 6 区道構個別図 (17) (道構分割図 (9) 1-1' ~ 20-20')
図版 30	姫御前遺跡 II 6 区道構個別図 (18) (遺物出土状況図)
図版 31	姫御前遺跡 II 6 区道構分割図 (10)
図版 32	姫御前遺跡 II 6 区道構個別図 (19) (道構分割図 (10) 1-1' ~ 7-7, 遺物出土状況図)
図版 33	姫御前遺跡 II 流路における遺物・自然木出土状況図
図版 34	姫御前遺跡 II 中近世の陶磁器 (1)
図版 35	姫御前遺跡 II 中近世の陶磁器 (2)

- 図版 36 姫御前遺跡Ⅱ 中近世の陶磁器 (3)
- 図版 37 姫御前遺跡Ⅱ 中近世の陶磁器 (4)、土製品、古代の土器
- 図版 38 姫御前遺跡Ⅱ 弥生時代～古墳時代の土器 (1)
- 図版 39 姫御前遺跡Ⅱ 弥生時代～古墳時代の土器 (2)
- 図版 40 姫御前遺跡Ⅱ 弥生時代～古墳時代の土器 (3)
- 図版 41 姫御前遺跡Ⅱ 弥生時代～古墳時代の土器 (4)
- 図版 42 姫御前遺跡Ⅱ 弥生時代～古墳時代の土器 (5)
- 図版 43 姫御前遺跡Ⅱ 弥生時代～古墳時代の土器 (6)
- 図版 44 姫御前遺跡Ⅱ 弥生時代～古墳時代の土器 (7)
- 図版 45 姫御前遺跡Ⅱ 弥生時代～古墳時代の土器 (8)
- 図版 46 姫御前遺跡Ⅱ 石製品・石器 (1)
- 図版 46 姫御前遺跡Ⅱ 石製品・石器 (1)
- 図版 47 姫御前遺跡Ⅱ 石製品・石器 (2)
- 図版 48 姫御前遺跡Ⅱ 石製品・石器 (3)
- 図版 49 姫御前遺跡Ⅱ 石製品・石器 (4)
- 図版 50 姫御前遺跡Ⅱ 石製品・石器 (5)
- 図版 51 姫御前遺跡Ⅱ 石製品・石器 (6)、鉄・銅製品、製鉄関連遺物
- 図版 52 姫御前遺跡Ⅱ 銭貨
- 図版 53 姫御前遺跡Ⅱ 木製品 (1)
- 図版 54 姫御前遺跡Ⅱ 木製品 (2)
- 図版 55 姫御前遺跡Ⅱ 木製品 (3)
- 図版 56 竹花遺跡Ⅰ 全体図と基本層序
- 図版 57 竹花遺跡Ⅰ R5 区遺構分割図・遺構個別図
- 図版 58 竹花遺跡Ⅰ R5 区 SX215 遺物出土状況図
- 図版 59 竹花遺跡Ⅰ R6・7 区遺構分割図 (1)、遺構個別図 (1)
- 図版 60 竹花遺跡Ⅰ R6・7 区 SX33 個別図
- 図版 61 竹花遺跡Ⅰ R6・7 区 SX33 遺物出土状況図 (1)
- 図版 62 竹花遺跡Ⅰ R6・7 区 SX33 遺物出土状況図 (2)
- 図版 63 竹花遺跡Ⅰ R6・7 区遺構分割図 (2)、遺構個別図 (2)
- 図版 64 竹花遺跡Ⅰ R6・7 区遺構分割図 (3)、遺構個別図 (3)
- 図版 65 竹花遺跡Ⅰ R6・7 区遺構分割図 (4)、遺構個別図 (4)
- 図版 66 竹花遺跡Ⅰ R6・7 区 SX30・SX39 遺物出土状況図
- 図版 67 竹花遺跡Ⅰ R6・7 区 SX38 (最下層) 遺物出土状況図
- 図版 68 竹花遺跡Ⅰ R5 区 IV 2 層上面遺構分割図・遺構個別図
- 図版 69 竹花遺跡Ⅰ R5 区 V 1 層～VII 層上面遺構分割図 (1)
- 図版 70 竹花遺跡Ⅰ R5 区 SX 119 平面図 (上面)
- 図版 71 竹花遺跡Ⅰ R5 区 SX 119 断面図
- 図版 72 竹花遺跡Ⅰ R5 区 SX 119 平面図 (下面)、断面図 (下面)
- 図版 73 竹花遺跡Ⅰ R5 区 V 1 層～VII 層上面遺構分割図 (2)、遺構個別図
- 図版 74 竹花遺跡Ⅰ R5 区 SX 119 上面遺物出土状況図 (木製品)
- 図版 75 竹花遺跡Ⅰ R5 区 SX 119 中面・下面遺物出土状況図 (木製品)
- 図版 76 竹花遺跡Ⅰ R5 区 SX 119 遺物出土状況図 (土器・石器)
- 図版 77 竹花遺跡Ⅰ 中近世の陶磁器 (1)
- 図版 78 竹花遺跡Ⅰ 中近世の陶磁器 (2)
- 図版 79 竹花遺跡Ⅰ 中近世の陶磁器 (3)
- 図版 80 竹花遺跡Ⅰ 中近世の陶磁器 (4)
- 図版 81 竹花遺跡Ⅰ 中近世の陶磁器 (5)
- 図版 82 竹花遺跡Ⅰ 中近世の陶磁器 (6) 土製品、古代の土器
- 図版 83 竹花遺跡Ⅰ 弥生時代～古墳時代の土器 (1)
- 図版 84 竹花遺跡Ⅰ 弥生時代～古墳時代の土器 (2)、石製品・石器 (1)
- 図版 85 竹花遺跡Ⅰ 石製品・石器 (2)、鉄・銅製品、銭貨
- 図版 86 竹花遺跡Ⅰ 製鉄関連遺物、木製品 (1)
- 図版 87 竹花遺跡Ⅰ 木製品 (2)
- 図版 88 竹花遺跡Ⅰ 木製品 (3)
- 図版 89 竹花遺跡Ⅰ 木製品 (4)
- 図版 90 竹花遺跡Ⅰ 木製品 (5)、その他
- 【写真図版】**
- 図版 91 姫御前遺跡・竹花遺跡遠景 姫御前遺跡近景 (1)
- 図版 92 姫御前遺跡遠景近景 (2)
- 図版 93 姫御前遺跡Ⅱ 5 区遺構写真 (1)
- 図版 94 姫御前遺跡Ⅱ 5 区遺構写真 (2)
- 図版 95 姫御前遺跡Ⅱ 5 区遺構写真 (3)
- 図版 96 姫御前遺跡Ⅱ 6 区遺構写真 (1)
- 図版 97 姫御前遺跡Ⅱ 5 区遺構写真 (4)
- 図版 98 姫御前遺跡Ⅱ 基本層序 5 区近景 6 区遺構写真 (2)
- 図版 99 姫御前遺跡Ⅱ 5 区遺構写真 (5)
- 図版 100 姫御前遺跡Ⅱ 5 区遺構写真 (6)
- 図版 101 姫御前遺跡Ⅱ 5 区遺構写真 (7)
- 図版 102 姫御前遺跡Ⅱ 5 区遺構写真 (8)
- 図版 103 姫御前遺跡Ⅱ 5 区遺構写真 (9)
- 図版 104 姫御前遺跡Ⅱ 5 区遺構写真 (10)
- 図版 105 姫御前遺跡Ⅱ 5 区遺構写真 (11)
- 図版 106 姫御前遺跡Ⅱ 5 区遺構写真 (12)
- 図版 107 姫御前遺跡Ⅱ 5 区遺構写真 (13)

- 図版 108 姫御前遺跡Ⅱ 5区遺構写真(14)
- 図版 109 姫御前遺跡Ⅱ 5区遺構写真(15)
- 図版 110 姫御前遺跡Ⅱ 5区遺構写真(16)
- 図版 111 姫御前遺跡Ⅱ 6区遺構写真(3)
- 図版 112 姫御前遺跡Ⅱ 6区遺構写真(4)
- 図版 113 姫御前遺跡Ⅱ 6区遺構写真(5)
- 図版 114 姫御前遺跡Ⅱ 6区遺構写真(6) 遺物出土状況(1)
- 図版 115 姫御前遺跡Ⅱ 遺物出土状況(2)
- 図版 116 姫御前遺跡Ⅱ 遺物出土状況(3)
- 図版 117 姫御前遺跡Ⅱ 中近世の陶磁器(1)
- 図版 118 姫御前遺跡Ⅱ 中近世の陶磁器(2)、土製品
- 図版 119 姫御前遺跡Ⅱ 古代の土器、弥生時代～古墳時代の土器(1)
- 図版 120 姫御前遺跡Ⅱ 弥生時代～古墳時代の土器(2)
- 図版 121 姫御前遺跡Ⅱ 弥生時代～古墳時代の土器(3)
- 図版 122 姫御前遺跡Ⅱ 弥生時代～古墳時代の土器(4)
- 図版 123 姫御前遺跡Ⅱ 弥生時代～古墳時代の土器(5)
- 図版 124 姫御前遺跡Ⅱ 弥生時代～古墳時代の土器(6)
- 図版 125 姫御前遺跡Ⅱ 弥生時代～古墳時代の土器(7)、石製品・石器(1)
- 図版 126 姫御前遺跡Ⅱ 石製品・石器(2)
- 図版 127 姫御前遺跡Ⅱ 石製品・石器(3)
- 図版 128 姫御前遺跡Ⅱ 石製品・石器(4)
- 図版 129 姫御前遺跡Ⅱ 石製品・石器(5)、鉄・銅製品
- 図版 130 姫御前遺跡Ⅱ 石製品・石器(6)、製鉄関連遺物、銭貨
- 図版 131 姫御前遺跡Ⅱ 木製品(1)
- 図版 132 姫御前遺跡Ⅱ 木製品(2)
- 図版 133 姫御前遺跡Ⅱ 木製品(3)
- 図版 134 竹花遺跡Ⅰ 遺跡近景(1)
- 図版 135 竹花遺跡Ⅰ 遺跡近景(2) R5区遺構写真(1)
- 図版 136 竹花遺跡Ⅰ R6・7区遺構写真(1)
- 図版 137 竹花遺跡Ⅰ R6・7区遺構写真(2)
- 図版 138 竹花遺跡Ⅰ R8区遺構写真(1)
- 図版 139 竹花遺跡Ⅰ R8区遺構写真(2)
- 図版 140 竹花遺跡Ⅰ R5区遺構写真(2) R6・7区遺構写真(3) R6・7区基本層序
- 図版 141 竹花遺跡Ⅰ 主な出土遺物
- 図版 142 竹花遺跡Ⅰ R5区遺構写真(4) R4区完掘写真 R6・7区遺構写真(4)
- 図版 143 竹花遺跡Ⅰ R6・7区遺構写真(5)
- 図版 144 竹花遺跡Ⅰ R6・7区遺構写真(6)
- 図版 145 竹花遺跡Ⅰ R6・7区遺構写真(7)
- 図版 146 竹花遺跡Ⅰ R6・7区遺構写真(8)
- 図版 147 竹花遺跡Ⅰ R8区遺構写真(3)
- 図版 148 竹花遺跡Ⅰ R8区遺構写真(4)
- 図版 149 竹花遺跡Ⅰ 中近世の陶磁器(1)
- 図版 150 竹花遺跡Ⅰ 中近世の陶磁器(2)
- 図版 151 竹花遺跡Ⅰ 中近世の陶磁器(3)
- 図版 152 竹花遺跡Ⅰ 中近世の陶磁器(4)
- 図版 153 竹花遺跡Ⅰ 中近世の陶磁器(5)、土製品、古代の土器、弥生時代～古墳時代の土器(1)
- 図版 154 竹花遺跡Ⅰ 弥生時代～古墳時代の土器(2)
- 図版 155 竹花遺跡Ⅰ 弥生時代～古墳時代の土器(3)、石製品・石器
- 図版 156 竹花遺跡Ⅰ 鉄・銅製品・銭貨
- 図版 157 竹花遺跡Ⅰ 製鉄関連遺物、木製品(1)
- 図版 158 竹花遺跡Ⅰ 木製品(2)
- 図版 159 竹花遺跡Ⅰ 木製品(3)
- 図版 160 竹花遺跡Ⅰ 木製品(4)
- 図版 161 竹花遺跡Ⅰ 木製品(5)
- 図版 162 竹花遺跡Ⅰ 木製品(6)、その他

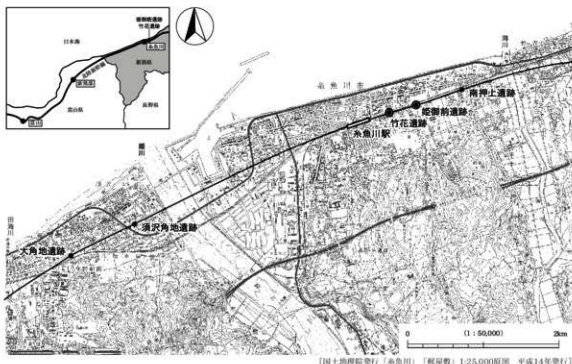
第I章 序 説

1 調査に至る経緯

北陸新幹線は、全国新幹線鉄道整備法に基づき建設される新幹線鉄道である。東京を起点とし、上越新幹線高崎駅で分岐して、長野市・上越市・糸魚川市・富山市・金沢市・福井市等の主要都市を經由し、新大阪に至る延長約700km（うち東京・高崎間105kmは上越新幹線と共用）の路線である。このうち、高崎・長野間は、平成9年10月から営業運転している。北陸新幹線の全通により、北陸地方と首都圏・関西圏を短時間で結び、日本海沿岸地域の産業・経済・文化の交流発展にも多大な効果をもたらすものと期待されている。

上越市から富山市までの約110kmの区間は、平成5年9月に糸魚川市～魚津市間が新幹線道規格路線としての工事実施計画が認可され、平成13年4月には上越～糸魚川間の新規着工及びフル規格化が決定した。これを受けて、鉄道・運輸機構と県教委との間で、建設用地内における埋蔵文化財の分布調査、試掘・確認調査等に関する協議が本格化した。

平成13年5月、鉄道・運輸機構から分布調査の依頼を受けた県教委は、同年10月に分布調査を実施した。その結果、周知の姫御前遺跡で土器断片を採集したこと等から、周辺地域の試掘・確認調査が必要である旨を報告した。これを受けて平成17～19年度に試掘・確認調査を行い、姫御前遺跡6,720m²、竹花遺跡2,600m²について本発掘調査が必要と判断した。このうち、平成18年度に姫御前遺跡3,120m²について本発掘調査を完了した。



第1図 北陸新幹線の路線と調査遺跡の位置

2 試掘確認調査の結果

平成 20 年度の本発掘調査対象地は、鉄道・運輸機構、県教委、埋文事業団の三者で取扱い協議を行い、姫御前遺跡の残り 3,600m²と竹花遺跡 1,400m²（調査対象範囲 2,600m²のうちの掘削施工部分）となった。その後、鉄道・運輸機構から 3 月 18 日付け調査依頼文書を受け、正式に調査対象地が決定された。姫御前遺跡は 4 月当初から調査に着手できたものの、竹花遺跡は現鉄道路路敷にあるため、協議と事前準備に時間を要し、調査着手は 5 月にずれ込んだ。また、4 月には竹花遺跡隣接地で用地買収されていなかった範囲について追加の確認調査を行い、1,080m²について本発掘調査が必要と判断した。この結果を受けて、1,080m²のうち市道迂回部分 375m²について、平成 20 年度に追加で調査することとなった。

2 試掘・確認調査の結果

A 姫御前遺跡

北陸新幹線建設に伴う姫御前遺跡の確認調査は、平成 17 年 5 月・11 月、平成 18 年 7 月、平成 19 年 9 月～10 月に実施した。調査の結果、総延長 425m にわたる 6,720m²について本発掘調査が必要と判断したが、ここでは、平成 20 年度の本発掘調査対象範囲に関わる平成 18・19 年の確認調査結果を記載する。

(1) 調査の体制

調査期間	平成 18 年 7 月 21 日、平成 19 年 9 月 26 日～10 月 12 日		
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤克己）		
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団		
総括	波多 俊二（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 事務局長）平成 18 年度		
	木村 正昭（同 事務局長）平成 19 年度		
管理	富藤 栄（同 総務課長）		
庶務	長谷川 靖（同 班長）		
調査総括	藤巻 正信（同 調査課長）		
調査担当	田海 義正（同 担当課長代理）		
調査職員	田中 一穂（同 嘱託員）		

(2) 調査の結果と取扱い

調査対象地に 12 か所の調査坑を任意に設定し、重機（バックホー）および人力による掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無を確認した。その結果、古墳時代の遺物包含層が、平成 18 年度本発掘調査範囲の西端から、平成 19 年度確認調査 4T までの間に存在することが確認された。平成 18 年度本発掘調査範囲から古墳時代の遺跡が延長すると判断し、第 2 図に示す 3,600m²について本発掘調査が必要と判断した。

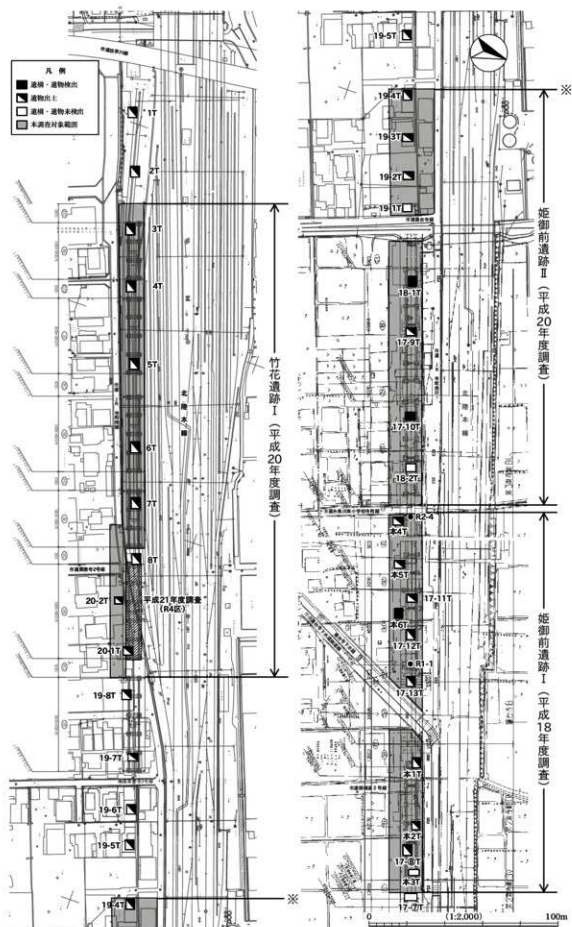
なお、本発掘調査開始後に対象範囲のわずかな増減があり、最終的な対象面積は 3,680m²となった。

B 竹花遺跡

(1) 調査の体制

【平成 19 年度 試掘調査】

調査期間	平成 19 年 11 月 12 日～15 日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤克己）



第2図 確認調査トレンチ位置と本発掘調査対象範囲

2 試掘確認調査の結果

調 査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団		
総 括	木村 正昭 (財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 事務局長)		
管 理	斎藤 栄 (同	総務課長)
庶 務	長谷川 靖 (同	班長)
調査総括	藤巻 正信 (同	調査課長)
調査担当	加藤 学 (同	班長)
調査職員	斉藤 準 (同	嘱託員)

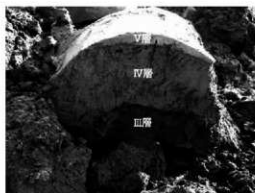
【平成 20 年度 確認調査】

調査期間	平成 20 年 4 月 8 日～ 15 日		
調査主体	新潟県教育委員会 (教育長 武藤克己)		
調 査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団		
総 括	木村 正昭 (財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 事務局長)		
管 理	斎藤 栄 (同	総務課長)
庶 務	長谷川 靖 (同	班長)
調査総括	藤巻 正信 (同	調査課長)
調査担当	田海 義正 (同	担当課長代理)
調査職員	田中 一徳 (同	嘱託員)

(2) 調査の結果と取扱い

【平成 19 年度 試掘調査 R5～R9 区】

調査対象地 3,750m² に 8 か所 (157m²、試掘率 4.2%) の調査坑を任意に設定し、重機 (バックホー) 及び人力による掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無を確認する方法を計画した。しかし、盛土の除去後にポンプで揚水できないほどの湧水があったため、土層の観察や、遺構・遺物の有無を確認することができなかった。そこで、掘削土を取り上げて表面を精査し、各深度の土質や層厚を把握することとした。この調査を繰り返すことで、おおむねの土層堆積状況を把握し、掘削土を層位ごとに精査して遺物の有無を確認した (第 3 図)。

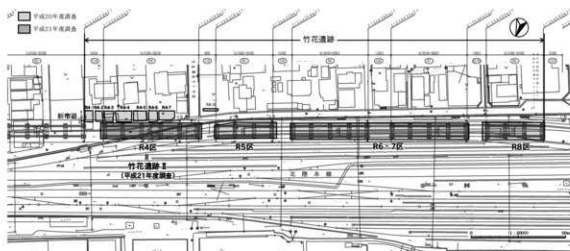


第 3 図 竹花遺跡における試掘調査状況

調査の結果、著しい湧水のため遺構を確認できなかったものの、II層 (暗灰色砂質シルト) と III層 (暗褐色シルト) に中世～近世 (14 世紀～17 世紀) の遺物が多数含まれることが分かった。さらに、下位の IV層 (褐色ガツボ質シルト) からは、部分的ではあるが古墳時代の土師器が出土した。特に、II・III層における遺物の出土点数は 103 点と多く、他所からの流入とは考えにくい状況にあり、遺跡が存在する可能性が極めて高いと判断された。また、西方に向かって傾斜しており、西端の 1T・2T(R9 区) は出土遺物が少なかった。これらの状況から、3T～8T (R5～R8 区) の間には、隣接する周知の竹花遺跡の広がりが存在すると考えられ、STA213km299m37～STA213km490m37 間の 2,600m² のうち、施工時に掘削する範囲について本発掘調査が必要と判断した (第 4 図)。

【平成 20 年度 確認調査 R4 区】

調査対象地 1,080m² に 2 か所 (34.3m²、確認率 3.2%) の調査坑を任意に設定し、重機 (バックホー) 及



第4図 竹花遺跡の本発掘調査対象範囲

び人力による掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無を確認した。その結果、2か所の試掘坑とも遺構は出土しなかったものの、古墳時代と中世の遺物が26点出土した。このうち棒状木製品1点は、地面に突き立てられた状態で検出した。遺物の数量と検出状態から集落縁辺部であると考えられ、調査対象地1,080㎡について本発掘調査が必要と判断した(第2・4図)。

3 姫御前遺跡における工事立会

A 工事立会の体制

調査期間	平成20年3月25日～3月26日		
調査主体	新潟県教育委員会(教育長 武藤 克己)		
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団		
総括	木村 正昭(財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 事務局長)		
管理	斎藤 栄	同	総務課長
庶務	長谷川 靖	同	班長
調査総括	藤巻 正信	同	調査課長
指導	寺崎 裕助	同	担当課長代理
調査担当	加藤 学	同	班長

B 工事立会に至る経緯と結果

北陸新幹線事業用地内において、ガス・水道の切り直し工事が行われることとなった。施工範囲は、姫御前遺跡の本発掘調査対象地に当たるが、掘削幅が1m以下と狭小な施工であるため、工事立会の措置をとることとなった(図版2・14)。

工事立会は、幅1m、長さ25mの施工において実施した。その結果、地表下80～120cmの間に褐色シルトが存在し、ここから古墳時代と中世の遺物が出土した。出土遺物は古墳時代土師器11点、中世青花1点・珠洲焼1点・銭貨(熙寧元寶)1点・土師器1点・羽口1点である。確認した厚さ約40cmの遺物包含層は、古墳時代と中世に細分できるものと考えられる。遺物包含層の厚さ、遺物の出土量は、隣接する本発掘調査範囲の結果と調和的である。

4 本発掘調査と整理作業の経過

A 調査・整理の体制

調査期間	姫御前遺跡 平成20年4月14日～12月16日				
	竹花遺跡 平成20年5月8日～8月5日、9月24日～10月28日				
整理期間	姫御前遺跡・竹花遺跡 平成20年12月17日～平成21年3月31日				
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）				
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団				
総括	木村 正昭（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 事務局長）				
管理	斎藤 栄（同 総務課長）				
庶務	長谷川 靖（同 班長）				
調査総括	藤巻 正信（同 調査課長）				
指導	寺崎 裕助（同 担当課長代理）				
調査担当	加藤 学（同 班長）				
支 援	株式会社 古田組				
	現場代理人 竹内一喜				
	調査員	相羽重徳	渡辺大士	田川 良（平成20年5月～12月）	
	調査員補	藤田 登（平成21年2月～3月）			
	補助員	青山道子	安達鉄雄	宇田登志子	風間 梢 小池美奈子 渋谷ハナ子 丸山伸子 萩原美恵子

B 調査の経過

(1) 姫御前遺跡

姫御前遺跡を担当する調査班は、200m西側に位置する竹花遺跡の調査も行うこととなった。当初の計画においては、姫御前遺跡と竹花遺跡の調査と併行して行うこととしていたが、鉄道・運輸機構、県教委、事業団の三者協議によって、施工を急ぐ竹花遺跡の発掘調査を優先することとなった。しかし、竹花遺跡には支障物件があり、4月当初から着手することができず、姫御前遺跡から着手することとなった。

姫御前遺跡の調査区は、地下道（市道蓮台寺線）を挟んで東西に分かれており、18年度調査区と隣接する東側の5区から着手することとした。一方、西側の調査区（6区）は、竹花遺跡の排土置き場とすることから、春から着手することができなかった。4月15日から5区の表土掘削を開始し、5月8日から作業員による作業を本格化させた。これと併行して竹花遺跡の支障物件解消についての協議・作業を進めた。5月上旬には竹花遺跡の発掘調査が本格化し、これに伴い姫御前遺跡の調査を中断することとなった。竹花遺跡の調査の進捗に合わせて、6月中旬に一時的に作業を行ったが、本格的な再開は7月上旬からである。9月2日からは、6区の表土掘削を開始し、5区と6区の調査を併行して進めた。

5区からは古墳時代前期の集落跡が検出され、住居が良好な状態で残存することが明らかになった。その重要性を鑑み、平成20年10月30日には、東北芸術工科大学 宮本長二郎名誉教授から、住居構造について建築学的見地からの調査指導を受けた。10月23・24日には5区の調査をほぼ終了させ、ラジコンヘリコプターと高所作業車から全体写真を撮影した。なお、5区西端は、渡辺設備工業株式会社と隣接することから、資材の運搬通路を確保しながら調査を進める必要があった。調査区を分割して出入口を

確保しながら、調査・埋め戻しを繰り返し、12月1日に5区の調査・埋め戻しが完了した。

6区においては、流路もしくは後背湿地の縁辺部が検出され、そこに多数の木材が含まれていた。この木材について、11月11日に六反田南遺跡の調査指導で糸魚川市に滞在していた首都大学東京 山田昌久教授から調査指導を受けた。出土した木材は、単なる自然の産物ではなく、開発行為に伴い産出した残材であるとの指摘を受けた。また、地域の開発史や植生史を知る上で重要な遺跡であることから、植物学の専門家から指導を仰ぐ必要性を指摘された。これを受けて、11月18日に東北大学植物園 鈴木三男教授から指導を仰いだ。鈴木教授からは、木材は開発行為に関連する可能性が高く、記録作業とサンプル採取（樹種同定・放射性炭素年代測定・年輪年代測定に使用する円盤状の試料）の必要性について指導を受けた。その後、木材の図面・写真記録とサンプル採取を行い、12月上旬には調査が完了した。埋め戻し作業と補足調査を併行して行い、12月16日に調査が完了し、12月29日に事務所を撤収した。

(2) 竹花遺跡

当遺跡の本発掘調査対象範囲は、全長240m・幅10mの細長い範囲である。加えて、遺跡が現地表下2～2.5mに存在し著しい湧水が想定されること、近接する北陸本線への影響が想定されることから、オープンカットによる掘削は不可能と判断した。調査に当たっては鋼矢板による土留めが必要であったが、JR北陸本線の営業線に近接することから、調査側で土留め施工することは期間的・技術的に困難と判断された。そこで、鉄道・運輸機構、県教委、事業団の三者協議によって、施工時に用いる鋼矢板を調査前に打設して発掘調査を行うこととなった。したがって、調査範囲は鋼矢板に囲まれた3つの調査区（第4図R5区、R6・7区、R8区）に区切られることとなった。このような経緯により、本遺跡の調査は、本発掘調査対象範囲2,600m²のうち、施工時に掘削する1,400m²を対象とすることとなった。

3月27日に鉄道・運輸機構、県教委、埋文事業団の三者で協議し、施工の順番に合わせてR6・7区→R8区→R5区の順序で調査を行うこととなった。そして、現地調査終了後は調査区ごとに順次、埋め戻して引き渡すこととなり、すべての調査区を8月末までに終了させることとなった。また、調査対象地は鉄道線路敷にあり、北陸本線に近接する工事になる可能性が考えられた。そこで、西日本旅客鉄道株式会社糸魚川地域鉄道部と協議を重ね、4月23日付けて『埋蔵文化財発掘調査計画書』を提出し、安全を確認のうえ調査着手の了解を得た。

調査の着手は、4月中を予定していたが、鋼矢板の打設が遅れたため、R6・7区の表土掘削の開始は5月7日にまでずれ込んだ。その後、R6・7区の調査の進展と合わせ、5月27日からR8区の調査に着手した。引き続きR5区に着手しようと計画したが、新幹線本体工事の安全祈願祭の実施場所に予定されたため調査開始が遅れ、6月20日から調査に着手した。

調査を開始すると、上層（中世）と下層（古墳時代）の2層の遺跡が確認され、特に下層からは水田の畦畔が良好な状態で検出されたため、調査は当初の予定よりも難航した。また、調査範囲が線路敷にあることから、飛散の恐れが想定される養生シートの利用が制限されたため、現場の管理にも苦慮した。調査区ごとに調査を進め、R6・7区は6月20日、R8区は7月24日、R5区は8月5日に調査・埋め戻しを終了させて引き渡した。

平成20年4月には、本発掘調査対象地隣接地の確認調査が別班により実施され、R4区について本発掘調査の実施が必要と判断された。この結果を受けて、鉄道・運輸機構からR4区についても平成20年度中に本発掘調査を終了させるよう依頼された。その後、鉄道・運輸機構と県教委で協議を重ねた結果、

R4区のうちライフラインの切り直し工事を急ぐ市道迂回部分(南側の幅6m、375m²)について、平成20年中に現地調査を終了させることとなった。R4区の本発掘調査は、9月24日から調査を開始したが、住宅の玄関・車庫出入口に面すること、ガス・水道・排水の配管が調査区を密に横断していることから、調査範囲を8か所に区切って調査せざるを得なかった(第4図R4-1～R4-8区)。そして、住民生活に極大支障が生じないよう、調査区ごとに調査・埋め戻しを繰り返し、10月28日までにR4区のうち市道迂回部分の調査を完了させた。

C 整理作業の経過

整理作業は、現地調査と併行して開始した。遺構の記録類については、現地で基礎整理を進め、現地作業終了後に本格的な整理作業に着手した。遺物は、現地で水洗・乾燥・注記・選別を行った後に、上越市柿崎区に所在する古田組遺跡調査研究室に運搬した。遺物実測は5月から、トレースは11月から開始し、現地作業終了時には土器・陶磁器類の実測を7割程度終了させた。現地作業がほぼ終了した12月中旬から本格的に作業に着手し、1月から遺構図面の整理と木製品・石器・石製品等の実測・トレースを行った。それぞれの作業終了後、順次、図版を入稿した。整理の過程において、平成21年1月27日・28日には、首都大学東京 山田昌久教授から出土木製品について整理指導を受けた。

自然科学分析は、平成20年度と21年度に実施した。20年度には、花粉分析・植物珪酸体分析・珪藻分析・動物骨分析を株式会社古環境研究所に委託した。21年度には、木製品等の樹種同定を国立大学法人東北大学(学術資源研究公開センター植物園 鈴木三男教授)、柱根・自然木の年輪解析を国立大学法人福島大学(理工学部共生システム理工学 木村勝彦准教授)と受託研究の契約を締結した。また、現地指導をいただいた国立大学法人新潟大学災害復興科学センター 部厚志准教授から、火山灰分析に関する原稿を執筆いただいた。これらの分析結果は、第VI章に掲載した。自然科学分析の成果を踏まえ、平成22年度までに編集・校正を行い、印刷・刊行した(第1表)。

なお、報告書の編集作業(本文・図版のレイアウトを含むすべての編集)は、事業団の報告書作成基準書により、株式会社セビアスに委託し、デジタルデータ(DTP)で納品を受けた。セビアスには、以下の資料を支給した。

本文・挿図：テキスト形式、エクセル形式データ、挿図原図、図案。

遺構図面図版：原図、レイアウト図案、文字データ。

遺物図面図版：トレース図、拓影、レイアウト図案、文字データ。

遺構・遺物写真図版：データ(CD)、レイアウト図案。

	平成20年度												平成21年度												平成22年度
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4~3
発掘調査報告書編纂																									
竹花遺跡発掘調査																									
遺物洗滌・片記																									
遺物結合・復元																									
遺物実測																									
遺物トレース																									
遺物写真撮影																									
遺物図面：写真図版作成																									
遺構図面図版整理																									
遺構図面：写真図版作成																									
自然科学分析委託																									
編集・校正																									
印刷・刊行																									

第1表 作業工程表

第二章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

姫御前遺跡・竹花遺跡が所在する糸魚川市は、新潟県の最西端に位置する。市域の北は日本海に面し、南は長野県、西は富山県と接する。糸魚川は、国史跡・松本街道の起点として知られている。「塩の道」と呼ばれるこの古道は、糸魚川から長野県松本までのおよそ30里(120km)に及ぶ峻険な山越えの道であり、海をもたない内陸部へ塩や魚介類を送る生命線として重要な役割を担ってきた。現在も姫川沿いに長野県に通じる国道148号線・JR大糸線と、海岸線沿いの北陸自動車道・国道8号線・JR北陸本線の交点に当たる交通の要所となっている。

糸魚川市には、ほぼ南北に流れる姫川とほぼ一致するように、フォッサマグナの西縁に当たる「糸魚川―静岡構造線」が分布する。この構造線を境界にして、地質学的に西南日本と東北日本に分けられている。構造線以西の地層は、主に古生代石炭紀～ペルム紀に至る青海―蓮華変成岩帯など、古生代・中生代の堆積岩・火成岩から成り立っている。青海―蓮華変成岩帯は、その断層面に蛇紋岩・輝緑岩・変はんい岩などが介在する複雑な構造を有しており、ヒスイ輝石岩・青海石・奴奈川石など希少な岩石が含まれている。中でも、ヒスイ輝石岩は小滝川や青海川で産出されることが知られており、「小滝川の硬玉産地」「青海川の硬玉産地」が国の天然記念物に指定されている。一方、この構造線以东の地層は主に新第三紀・第四紀の新しい時代の堆積岩・火成岩から成り立っており、構造線の東西で地質が大きく異なる。このことが、地形・動植物の分布に相違を生み、さらに言語・民俗文化にも影響を与えることとなったと言われている。

市域の南側には、飛騨山脈と西頸城山地がある。飛騨山脈には、県内最高峰の小蓮華山(2,769m)をはじめとして2,000m級の山々が連なる。その主稜は日本海に進むにしたがって高度を急速に減じ、日本海に没している。この急崖が「親不知・子不知」であり、東西文化の障壁となった。石灰岩からなる黒姫山(1,221m)・明星山(1,188m)では山岳カルストが発達しており、日本最深の白蓮洞(513m)など多数の洞穴が存在する。市域には、ここから産出する石灰岩を資源とした化学工業地帯が形成されている。

西頸城山地は、新第三紀以降の堆積層が隆起した丘陵と、長野県との県境をなす雨飾山(1,963m)や海谷山地など火山性岩石を主体とする山塊から構成されており、さらにその背後には本県唯一の活火山である焼山(2,400m)がある。標高400m以下の小起伏山地域は、主に新第三紀の砂泥岩層から形成されており、地下水量が増大する融雪期、梅雨期、初冬などには、崩落・地滑りが発生する〔鈴木2000〕。地滑り等防止法制定のきっかけとなった櫛川地滑り(1947年発生)など、地滑り地が多い地域である。

これらの山地を源流にして、青海川・田海川・姫川・海川・早川などが北流し日本海に注ぐ。中でも姫川はこの地方最長の一級河川であり、全長約60kmに及ぶ。河川沿いには河岸段丘が見られるが、特に姫川と海川の河口岸に発達している。この段丘は高位の洪積段丘から低位の沖積段丘まで6段に細分されている〔鈴木1983〕。高位の段丘には縄文時代～弥生時代、低位の段丘には縄文時代～古代、沖積段丘には古代の遺跡が分布しており、遺跡の時期が下がるにしたがって高位から低位へとその分布する主体面を移動させている〔寺崎1988〕。

河川はいずれも急流で、かつ海底が深いこともあり、沖積平野は発達していない。最も広い沖積地は姫



第5図 姫御前遺跡・竹花遺跡の位置と周辺の地形（「糸魚川市都市計画図 1:10,000」をもとに作成）

川と海川の河口間に形成された扇状地で、この扇状地を中心に狭い海岸平野が広がる。このほかの平地は、河川沿いにわずかな谷底平野が細長く形成されるのみである。また、北東－南西に広がる海岸線沿いには砂丘列が形成されており、姫川河口左岸の須沢では最大幅 300m、最大高 11.5m を測る [鈴木 1983]。市街地や主要幹線は、この砂丘上と沖積地など、限られた平坦地に細長く立地している。

姫御前遺跡・竹花遺跡は、この限られた平坦地に位置し、地形区分上は砂丘列と丘陵に挟まれた沖積地に立地する。この三角州は、姫川・海川によって形成された地形であり、扇状地のような形成過程をたどったものと考えられる。遺跡周辺の平坦地においては、海岸砂丘と接する範囲に北国街道が築かれており、その周辺に近世集落が築かれている。本遺跡周辺は、この集落よりも 1m ほど標高が低く、近世以降は水田として利用されてきた範囲に相当する。

2 歴史的環境

A 周辺の遺跡

糸魚川市域における古墳時代～中世の主な遺跡分布は、第5・6図のとおりである。姫川右岸の糸魚川地区では標高 100m 以下の緩傾斜の丘陵が発達し、特に標高 50m 前後の河岸段丘上に遺跡が多く分布する。また、近年、北陸新幹線建設に伴う発掘調査等によって、狭い平野部においても遺跡分布が濃密であ



第 6 図 坂野町遺跡周辺の主な遺跡（加賀街道の位置は [上田 1991] による。）

ることが明らかになっている。居住に適した平坦地に限られるため、土地利用が特定の範囲に集中した結果と考えられる。ここでは、姫御前遺跡・竹花遺跡に関連する古墳時代～中世の遺跡について概観する。

古墳時代

古墳時代の遺跡は、玉作りに関連する遺跡が特徴的に発見されている。

笛吹田遺跡(22)は、前期を中心とする滑石製玉類を製作した玉作遺跡で、白玉・勾玉・管玉・砥石等が出土し、玉作用の特殊ビットや方形周溝墓と見られる遺構が検出されている[安藤¹⁸⁾1978]。また、近年、都市計画道路建設に伴う糸魚川市教育委員会による発掘調査が断続的に行われ、竪穴住居や埴や木製釣瓶を伴う井戸の検出や琴柱状石製品の出土など注目されている。なお、笛吹田遺跡は、昭和37(1962)年時点では「姫御前遺跡」として登録されており、昭和50(1975)年に別個の遺跡とされるまでは、本遺跡と同一の遺跡として捉えられてきた経過がある[土田1978]。両遺跡の間に遺跡の空白が存在することが確認されているようであるが、年代的に重複することから無関係とは考えられない。また、昭和13(1938)年に記録された相馬御風氏の身辺雑記には「六月五日私はKIを伴うて糸魚川町内の田圃中から沢山の弥生式土器や祝部土器の破片の出たという場所に見に出かけた。(中略)たまたまそこへ田の水を見廻りに来た老人によって、そのあたりの字名が神楽田、笛吹田、姫御前などであることを知り得た。」[相馬1938]とされている。笛吹田・姫御前周辺に古墳時代の遺跡が存在することが、昭和13年にすでに知られていたことになる。

大角地遺跡(5)は、昭和10(1935)年の朝日新聞に「石器時代の玉作り遺跡か。倉若七郎氏が青海町で発見した考古学上の宝庫」と紹介されている。その後、青木重孝氏によって蓄積された資料が契機となり、学会で注目されるようになり、勾玉の製作過程「オガクチ技法」[寺村1966]の標識遺跡としても知られるようになった。昭和45・48(1970・73)年には、都市計画道路建設に伴い青海町教育委員会による発掘調査が行われ、工作用特殊ビットを持つ玉作工房跡が検出され[寺村・安藤¹⁸⁾1979]、前期～中期の滑石製玉類の製作関連資料が多数出土した。また、平成17(2005)年には北陸新幹線建設に伴う発掘調査が行われ、勾玉・白玉の製作関連資料が出土した[加藤¹⁸⁾2006b]。

田伏遺跡(34)は、中期～後期の遺跡である。昭和45(1970)年に行われた発掘調査では、滑石製の白玉・管玉・勾玉・子持勾玉や紡錘車の製作関連資料が多数出土しており、玉作遺跡であることが明らかにされている[関1972]。また、祭祀系土器の出土や滑石製模造品の大量出土から、玉作に伴う祭祀が行われた可能性が指摘されている[糸魚川市史編さん委員会1986]。

一の宮遺跡(18)は、天津神社境内に所在する。大正8(1919)年に高橋健自氏によって発掘調査されており、後期の土器とともに有孔門版・勾玉・白玉等の祭祀遺物が多数出土した[糸魚川市史編さん委員会1986]。祭祀遺跡と見られる一の宮遺跡(18)[稲山1972]から出土した玉類は、笛吹田・田伏・大角地等、近隣の製作遺跡との関連性が指摘されている[関1972]。なお、天津神社境内の奴奈川神社は、『延喜式』に掲載される「奴奈川神社」に比定されるものと考えられており、奴奈川姫が祀られている。

このように糸魚川地域では、滑石やヒスイを用いた玉作が盛んに行われた遺跡が多数存在する。また、北陸新幹線建設に伴い発掘調査された本遺跡(21)、横マクリ遺跡(前期)(29)、六反田南遺跡(前期)(27)においても玉作の存在が確認されている。小規模な集落においても、数は多くないものの未成品を含む玉類がほぼ例外なく出土しており、小規模な玉作が行われていたと考えられる。ヒスイ・滑石等の石材原産地を控える当地域においては、縄文時代以来、伝統的に玉作が盛んに行われたといえる。

古 代

古代には、新潟県一带は越国の一部であった。『日本書紀』持統6(692)年9月の条に「越前国司」の記述があることから、越国は越前・越中・越後に分割されていたと見られている。この頃の越後国は阿賀野川以北を指しており、頸城郡は越中国に属したものと考えられている。『続日本紀』大宝2(702)年の3月の条に越中国の4郡を越後国に分割したことが記されている。この4郡は、頸城郡・古志郡・蒲原郡・魚沼郡を指すものと考えられている。さらに和銅元(708)年に越後国に設置された出羽郡が、和銅5(712)年に出羽国として分立され、これにより、佐渡を除く現在の新潟県の領域が定まったと考えられている。なお、『和名類聚抄』には「国府在頸城郡」とあり、頸城郡内に越後国府があったと考えられる。

頸城郡は越後国の最南西端に位置し、天平勝宝4(752)年10月造東大寺司牒(正倉院文書)に頸城郡の郡名が初めて見えるが、『和名抄』(東念本)には「久比支」の訓を付している。天平勝宝年中(749～756)の東大寺正倉院御物の庸布墨書には「久疋郡」と記されている。頸城郡の郷は10郷が記されており、姫御前遺跡・竹花遺跡は頸城郡沼川郷に含まれる。沼川郷は、『和名抄』では高山寺とも「奴乃加波」の訓を付しており、吉田東伍の『大日本地名辞書』(1907年)では沼川郷を現在の市振から早川谷までの地と推定し、室町時代の「沼河保」とほぼ同じ地域と考えている。

『延喜式』には越後の駅・伝馬として、「滄海8疋、鶺鴒石・名立・水門・佐味・三嶋・多太・大家各5疋、伊神2疋、渡戸船2艘、伝馬頸城・古志郡各8疋」と記されている。滄海駅は青海に比定できる。北陸道越後国駅馬の越後国最初の駅として「滄海馬8疋」とある。他駅が5疋に対して、越中国佐味駅と並んで8疋と多い。海岸沿いは急崖をなす親不知・子不知の難所であり、古代では上路を通る山道が使われていたと推定される。また、海路も重要な交通路として利用されていたと考えられる。

青海地区(旧青海町域)における古代の遺跡は、集落跡と窯跡が検出されている。姫川河口近くに位置する須沢角地遺跡(7)は、昭和62(1987)年・平成19(2007)年の発掘調査によって、7世紀末～9世紀前半の集落跡であることが明らかにされている【土田^注1988、今村^注2008】。また、須沢角地遺跡の西南西1kmの丘陵裾には西角地古窯跡(6)が存在する。窯体の一部・窯壁・焼土とともに多量の須恵器が出土しており【寺村・安藤^注1979】、8世紀末～9世紀初頭前後の窯跡と考えられている【春日1998】。

糸魚川地区(旧糸魚川市域)の道者ハバ遺跡(10)では、掘立柱建物や井戸といった遺構とともに、多量の須恵器・土師器のほか、灰軸陶器・緑軸陶器が多く出土しており、当地方の中心的役割を担った遺跡と推定されている。このほかに8世紀末～9世紀に土師器生産が行われた小出越遺跡(33)【鈴木^注1988】、多数の製塩土器が出土した立ノ内遺跡(41)【高橋1988】、数百点に及ぶ土師器の廃棄土坑が注目される山崎A・B遺跡(30・31)【木島2007】などの調査事例がある。

中 世

青海地区では、山城跡や経塚の存在が知られている。勝山城跡は、標高328mの勝山山頂に築かれている。天正年間(1573～1582)頃、越中への前進基地として築城されたといわれており、戦国時代は同方面を押さえる要衝であったと考えられている【平野・渡辺1968】。寺地の南方、松山の尾根上に南北500mにわたって築城された松山城跡(2)は、標高170mの地点に本丸跡があり、空堀や帯曲輪・裾曲輪で幾重にも固められている。石垣に所在する天神山経塚(1)は、大正8(1919)年に調査され、仁安2(1167)

年の銘のある珠洲焼の経筒が発掘されている〔金子 1975〕。

糸魚川地区では、御山遺跡 (9)・中平遺跡 (15)・古川遺跡 (16)・水穂観音堂境内 (44)・北平遺跡 (25)・クワノ町遺跡 (24)・竹花遺跡 (17)・山崎 A・B 遺跡 (30-31) 等が知られており、観音菩薩立像 (重要文化財) を安置する水穂観音堂境内からは中世陶磁器類を出土していることから、水穂寺跡との関係が考えられている〔山岸・田村 2004〕。また、段丘～丘陵上には、中世後期～近世初期の原山十三塚 (14) や山崎三十三塚 (26)〔木島 1989〕が分布する。

当地域における中世の集落については、北陸新幹線建設に伴う発掘調査によって、平野部に多数存在することが明らかになってきた。特に、山岸遺跡 (37) においては、鎌倉時代 (13 世紀) の大型の掘立柱建物や庭園が検出され注目されている。出土した銅製品には傘紋が施してあり、鎌倉北条氏一族の名越氏を示す家紋である可能性がある。文献資料によれば、13 世紀末頃に越後国沼河郷の地頭として「備前々司殿」と記述があり、この「備前々司殿」は能登・安芸の守護などを兼任した名越宗長と推定される。これらから、沼河郷地頭の名越氏と深く関係のある中心的な屋敷と考えられている〔飯坂 2007〕。

また、多量の木製品が出土する実態が、山岸遺跡 (37)〔渡邊 2007〕、寺地遺跡 (4)〔相羽 2002〕、姫御前遺跡、竹花遺跡の調査事例によって明らかにされつつある。木製品が特定の範囲から多量に出土する上、箸状・棒状の製品が地面に突き立てられて検出されている。この特異な出土状況の解釈については多角的な検討を要するが、特徴的な祭祀が行われていたことをうかがい知ることができる。今後の調査の進展によって、糸魚川地域における中世社会の一端が明らかにされていくものと期待される。

B 『越後下向日記』と観音寺

竹花遺跡の北側 200m に所在する「観音寺」は、歌人冷泉為広によって著された『越後下向日記』に登場する。明治 36 (1890) 年・貞享 4 (1687) 年の絵図 (文政年間の写本) からは、観音寺が加賀街道沿いの現在地とほぼ同じ場所に所在したと考えられる (第 6 図)〔山岸 2001〕。

『越後下向日記』は、延徳 3 (1491) 年 3 月、管領 細川政元にしたがって越後に下向した際に、冷泉為広によって著されたものである。旅の目的は東北の馬を集めることにあった。したがって、冷泉為広の私的な旅ではなく、管領家の公的な旅であり、京から越後までの旅中、各地の領主が朝食・昼休・夕食・宿所・人馬・宴会を取り仕切ったとされる〔矢田 2005〕。

日記によれば、3 月 17 日、細川政元一行は向かいに一宮という寺院がある観音寺に着き、宿泊したとされる。そして、越後守護 上杉房定が迎えの人夫と馬を差し向け、翌 3 月 18 日に観音寺から次の宿泊地の能生まで細川一行を案内したとされる。また、帰路も、観音寺に宿泊している。

公的な人物の旅の行程で地域の支配者が接待をする行為は、その接待を行ったその空間領域が自らの支配地域であることを公人に認知させる作業であったという〔矢田 2005〕。『越後下向日記』の記載からは、当地が越後守護 上杉房定の支配下にあったことを読み取ることができる〔矢田 1993〕。

詳しくは後述するが、竹花遺跡においては、質量ともに豊富な中世の遺物が出土している。茶や香に關する陶磁器に加えて祭祀遺物が多数認められ、高級品を保有できる階層が付近に暮らしていたことを推測できる。調査対象地は、検出遺構や自然科学分析の結果から水田域であることが明らかであり、観音寺そのものが存在したわけではない。しかし、遺物の内容や人骨片 (燒骨) が多数認められることを勘案すれば、観音寺に近い地点を調査した可能性がある。いずれにしても、『越後下向日記』と竹花遺跡の出土遺物は、中世糸魚川町の隆盛ぶりを物語っている。

第三章 姫御前遺跡Ⅱ

1 調査の概要

A グリッドと調査区の設定

平成20年度調査区(姫御前遺跡Ⅱ)は、平成18年度調査区(姫御前遺跡Ⅰ)の西側に隣接することから、連続して調査区名を付すこととした(以下、「20年度調査区」「18年度調査区」とする)。20年度調査区は、市道蓮台寺線(地下道)を挟んで、東側と西側に分かれる。東側を5区、西側を6区と呼ぶこととした(図版1)。

グリッドも18年度調査区と連続して設定することで、相互の位置関係を把握できるようにした。なお、調査対象地の幅が17~21mほどと細長く、地形や方位に合わせて調査時にグリッドを誤認する恐れがあったため、法線と平行するようにグリッドを設定することで作業の効率化を図った(図版1)。グリッドの主軸は、新幹線法線のセンター杭R2-4(世界測地系X=115906.5398, Y=-55596.2477, 17Bグリッド北西隅)とR1-1(世界測地系X=115931.7057, Y=-55523.6880, 10Bグリッド北側ライン上)を結んだラインとし、杭R2-4を基点とした(図版1)。主軸は真北から70度52分19秒東偏する。なお、20年度調査区26Bグリッド北西隅の座標はX=115877.048, Y=-55681.279、37Bグリッド北西隅の座標はX=115841.001, Y=-55785.205である。

グリッドは大小2種あり、大グリッドは10m四方を単位とし、小グリッドは大グリッドを2m四方に25分割したものである。大グリッドの呼称は、センター杭の方向を算用数字、それと直交する方向をA・B・Cとし、両者の組み合わせにより表示した。小グリッドの番号は、1~25の算用数字で表し、北隅を1、東隅を5、西隅を21、南隅を25となるように付した。これらを組み合わせて「29B13」等と表した。なお、西側140mに所在する竹花遺跡との位置関係を示すため、姫御前遺跡と連続してグリッド番号を付した。

B 基本層序(図版3)

(1) 平成18年度調査区基本層序との整合

20年度調査(姫御前遺跡Ⅱ)においては、18年度調査(姫御前Ⅰ)で付した層位との整合性を図ることに努めた。その結果、基本層序は18年度調査区と基本的には一致した。Ⅱa層(近世)・Ⅱb層(中世)・Ⅲ層(古墳時代)・Ⅶ層(漸移層)・Ⅷ層(地山)を層位的に検出し、矛盾することなく整合した。一方、流路部分(SR)においては、層厚が厚いことから、層序を細分することができ、Ⅲ層を上下に二分した。これに加えて、火山灰と草本質泥炭という層位を対応する上で重要な指標を検出したことから、一部、18年度調査区の所見を変更する必要性が生じた。その対応関係を模式的に示したのが第7図である。

まず、Ⅲ層であるが、5区26B・27Bグリッド付近で、火山灰の二次堆積物Ⅲc層を挟み、古墳時代前期の遺物包含Ⅲ層を上下に細分できることが判明した。下位からは新潟シンボジウム編年5期[滝川2005](以下、「新潟シンボ編年」とする)、上位からは6期以降の遺物が出土しており、火山灰の降下年代を土器の細分形式において特定することができた。これに伴い、Ⅲ層をa~dに細分した。そして、

1 調査の概要

Ⅲb層が18年度調査のⅣ層に対応すると判断した。

また、火山灰が集積して白色粘土化している範囲は局所的であったものの、流路のⅣ下層、竹花遺跡のⅣ2層からも火山灰を検出した。Ⅳ下層・Ⅳ2層は、Ⅲc層のように局所集積も粘土化もしていないものの、全体的に白色を帯びており、火山ガラスを含むことを現地調査の段階で想定することができた。竹花遺跡Ⅳ2層及び上位のⅢ層においては、古墳時代前期の遺物が出土しており、

火山灰の降灰年代を古墳時代前期に位置付けることができた。

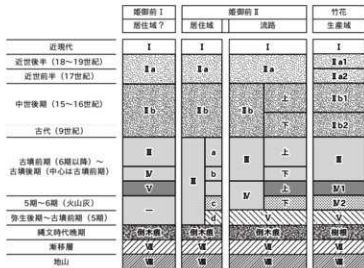
草本質泥炭は、低地のみで検出した極めて特徴的な層序である。したがって、上下の層序を対比する上で、確実な指標として利用することができる。20年度調査区の流路ではⅣ上層、竹花遺跡ではⅣ1層と命名した。この特徴的な層位を18年度調査区の層位と比較すると、Ⅴ層とした層位と対応する可能性が高いため高い。このⅤ層は、地山直上で検出した倒木痕と色調が似ることから、対応関係にあるとした。そして、倒木の放射性炭素年代測定結果(2900±40年BP(BC1130～1010年))と出土石器の形態から縄文時代晩期に位置付けた。色調の共通性から、倒木痕とⅤ層を対応させたが、結果的には判断に誤りがあったと考えられる。したがって、18年度調査のⅤ層と倒木痕は対応関係にないこと、Ⅴ層の年代は古墳時代前期、倒木痕の年代は縄文時代晩期とここに訂正する。

なお、18年度調査区のⅣ層は、上位のⅢ層が古墳時代の遺物包含層であること、下位のⅤ層が縄文時代に比定できると考えられたこと、出土した板材の放射性炭素年代測定の結果(2150±40年BP、BC210～160年)を総合的に判断し、堆積時期を弥生時代とした。しかし、先述のとおり、Ⅴ層の年代評価に誤りがあったことから、Ⅳ層の年代についても古墳時代前期に訂正する。そして、放射性炭素年代測定の結果は、弥生時代に生育した木材を伐採し、利用した結果と考えた。すなわち、放射性炭素年代測定の結果を、単純に層位の年代に比定したことによって、誤った解釈をしたといえる。

このように、草本質泥炭と火山灰をセット関係で理解することで、それらがいずれも古墳時代前期の堆積物であると考えることができた。そして、調査区間、遺跡間の層序を対応する上で重要な指標とすることができた。

(2) 基本層序の記述

5区・6区とも基本堆積は、おおむね一致する。宅地造成時の盛土(0層)を除去すると旧地表面(1層)が現れ、そこから地山(Ⅶ層)までの厚さは50～150cmほどであった。この間に、近世(Ⅱa層)・中世(Ⅱb層)・古墳時代(Ⅲ層)の遺物包含層を層位的に検出した。ここでは、すべての調査区に共通した基本層序を記述する。



第7図 遺跡間・調査区間における基本層序の対応関係

- 0 層 盛土** 宅地造成時の盛土。
- I 層 旧表土** 近代以降の出土品を含む。II a 層との層理面には鉄分が著しく沈着しており、水田の床土であったと考えられる。層厚は、15～50cm ほどである。
- II a 層 暗黄灰色細砂 (2.5Y5/2)** 粒子のやや粗い細砂を基調とし、直径 5mm ほどの礫をまばらに含むことから、洪水性の堆積物と考えられる。花粉分析・植物珪酸体分析の結果からは、II a 層段階において水田稲作が行われていたことが明らかであり、比較的、水の影響を受けやすい環境にあったことがうかがえる。また、II b 層との層理面には足跡等、旧地表からの圧迫によって形成されたと考えられる凹凸が多数観察されるが、これは耕作時の足跡である可能性が高い。II a 層には 17 世紀前半を主体とし、18 世紀前半までの遺物が含まれており、近世に形成された層序と考えられる。層厚は、10～20cm ほどである。
- II b 層 黒褐色細砂混じりシルト (10YR3/2)** 腐植を含むシルトを基調とし、砂を介在することから湿地性の堆積物と考えられる。花粉分析・植物珪酸体分析の結果からは、II b 層段階において水田稲作が行われていたことが明らかになっており、比較的水の影響を受けやすい環境にあったことがうかがえる。15～16 世紀の遺物を多数含むことから、主に中世後期に形成された層序と考えられる。なお、最下位からは古代 (9 世紀) の遺物がわずかに出土しており、II b 層の堆積開始年代を反映すると考えられる。また、6 区で検出した流路においては、II b 層を上下に二分することができた。層厚は、10～20cm ほどである。
- III 層 褐灰色粘質シルト (10YR4/1)** II b 層に比べてやや粘性が強い。ただし、地点によっては、ほとんど土質・土色に違いがなく、壁面精査で逆立つ部分を II b 層、滑らかな部分を III 層と判断することもあった。II b 層において精査面が逆立つのは、砂を介在するためである。すなわち、III 層のほうが、より均質なシルトといえる。直径 10mm 以下の炭化物をわずかに含み、弥生時代後期・古墳時代前期～後期の遺物包含層である。III 層は、低地部分ほど厚く堆積しており、層厚は 15～30cm ほどである。III 層は 5 区 26B・27B グリッド周辺と 6 区の流路 SR において細分することができた。
- VI 層 灰色砂質シルト (10YR2/1)** 漸移層。VII 層を基調とするものの、黒褐色粘質シルトを斑状に、炭化物粒子をごくわずかに含む。層厚は、10cm ほどであるが、存在しない部分も広く認められる。
- VII 層 灰色砂質シルト (5Y4/1)** 今回の調査において地山と判断した層序であり、遺構検出面である。均質な砂質シルトで、混入物は認められない。VII 層上面においては、遺構とは覆土が異なり、より粘性が強い部分的な落ち込みを多数検出した。掘削すると木の根を検出したこと、断面形が斜めに細く潜り込んでいること、落ち込みが不規則な放射状に分布すること等から、人為的な掘り込みではなく、樹根痕や倒木痕と判断した。根の年代を測定すると、縄文時代晩期に相当する値を示すことから、遺跡形成以前に生育していた樹木 (スギ林) の痕跡と考えた。

(3) 局所的な基本層序の記述

調査区内においては流路やその岸辺を検出し、土層が厚く堆積していることを確認した。各層が厚く認められるうえ、先述の基本層序には見られない特有の層序を確認した。

[5 区 26B・27B グリッド周辺 (土器集中区)]

- III a 層 : 褐灰色粘質シルト (10YR4/1)** 基本層序の III 層と連続し、遺物が多量に出土した。土師器の年代は、新潟シンボ年 6～7 期に位置付けられる。

1 調査の概要

- Ⅲ b 層：灰褐色シルト（7.5YR6/2）非常に硬くしまる。炭化物、直径3mmの地山粒をわずかに含む。上下の層序と比べると遺物が著しく少ない。
- Ⅲ c 層：褐色粘質シルト（10YR6/1）炭化物多く含む。灰白色粘土の集積が部分的に見られるが、降下した火山灰が、風雨により窪地に二次堆積したものと考えられる。火山灰の二次堆積物は、一部の遺構覆土（SK229-2層、SD236-1層）にも認められる。なお、火山灰が風化し、粘土化しているが、実顕顕微鏡下で火山ガラスを認めることができた。
- Ⅲ d 層：褐色粘質シルト（10YR/4/1）火山灰の二次堆積物層の下位から検出した遺物包含層。Ⅲ c 層より色調が暗く、炭化物をわずかに含む。土師器を多く包含する。土師器の年代は、新潟シボ編年5期のものであり、Ⅲ c 層上位の遺物よりも古く位置付けられる。

【6 区流路堆積物】

- Ⅲ 上層：黒褐色粘質シルト 古墳時代前期の遺物包含層である。Ⅲ 下層よりも暗い色調で、遺物をより多く含む、混入物は少ない。
- Ⅲ 下層：褐色粘質シルト 粘性・しまりがやや弱く、腐植をわずかに含む。古墳時代前期の遺物包含層であるが、遺物量はごくわずかである。出土遺物は、比重の大きなヒスイの原石や大型の砥石に限られることから、本来的にはⅢ 上層に含まれる遺物が沈降した可能性も考えられる。
- Ⅳ 上層：褐色草本質泥炭 ヨシ等の腐植からなる特徴的な層位である。スギを主体とする木材を多数含むが、加工痕や伐採痕は認められない。特に枝を多く含むが、根元には切り落とした痕跡は見られず、自然落枝したものと見られる。Ⅲ 下層との境界には、スギのほか、トネリコ属、モクレン属、コナラ属アカガシ亜属等の湿地林の倒木が多数認められた。本層に含まれる木材の年輪年代測定によって、枯死年代は、弥生時代（AD60～AD90頃）に集中するとされた（第V章6）。しかし、竹花遺跡においては、草本質泥炭の下位から古墳時代前期の遺物が出土している。また、草本質泥炭の下位から火山灰を検出したが、先述のとおり火山灰を挟んで上下から古墳時代前期の遺物が出土している。したがって、年輪年代による年代観は、調査所見と整合せず、課題を残す。
- Ⅳ 中層：黒色粘質シルト 局部的に認められる層序で、Ⅳ 下層をブロック状に多量に含む。色調が暗いⅣ 中1層と、明るいⅣ 中2層に細分できる。遺物は含まない。
- Ⅳ 下層：灰黄褐色粘質シルト 混入物が少ない。テフラの二次堆積物層と考えられ、5区26B・27Bグリッド周辺で検出したⅢ c 層に対比できる。なお、流路岸の35B10・15グリッド付近では、Ⅳ 下層に対応する層位から火山灰の集積が認められた。図版24 24 - 24'の断面図からは、Ⅳ 上層に含まれる木材の下位から検出されたことが明らかである。
- V 層：黒褐色シルト 粘性弱く、腐植を多く含む、しまりが弱い。

C 調査の概要

姫御前遺跡は、現海岸線から400m内陸の沖積地に立地し、遺構検出面の標高は約4～4.5mほどである。平成18・20年度に延べ6,800m²を発掘調査し、上層から室町時代（15～16世紀）、下層から古墳時代前期（4世紀）の遺構・遺物を検出した。

上層では、建物等の遺構を検出できなかったが、木製の箸や棒が地面に突き立てられており、18年度調査区と同様に、何らかの祭祀が行われた場であったと考えられた。また、陶磁器には、日常雑器のほか、に香や茶に関する道具等の高級品が目立つことが特徴的であった。

下層では、5区において平地建物4棟、掘立柱建物3棟を検出したことから、調査対象地周辺に集落が存在したと考えた。遺構の分布状況から、居住域は調査区外南側に広がると想定される。検出した4棟の平地建物のうち、SI216の残存状況は特に良好で、建物の在り方を知る上で貴重な事例となった。また、火山灰の二次堆積層を積み、上下から古墳時代前期の遺物が出土した。今後、古墳時代前期の年代決定において、重要な指標になる。これらの土器に伴う玉作関連資料（ヒスイ・緑色凝灰岩・滑石）と工具が出土したが、数量は少なく、集約的な生産がなされた拠点とは考えにくい。

一方、6区では流路の左岸を検出した。ここから出土した多数の自然木192点について樹種同定を行った結果、スギが主体で、トネリコ属、モクレン属、コナラ属アカガシ亜属等が認められた。総じて、スギが下位、その他の樹木が上位から検出される傾向にあった。なお、これらの自然木について年輪解析を行った結果、スギにおいて281年分の年輪パターンを読み取ることができた。そして、枯死年代が、30年ほどの間に集中することが分かった。花粉分析・プラントオパール分析からは、古墳時代前期の層位からスギが減少し、水田化していく様子が認められる。このことを裏付けるかのような結果といえる。また、自然木を包含する草本質泥炭層の下位からは火山灰を検出しており、その直後に草本質泥炭が堆積することも明らかになった。

なお、姫御前遺跡の南東側350mには同時期中核的な集落である笛吹田遺跡、東側300mには玉作が大規模に行われた南押上遺跡、西側140mには生産域である竹花遺跡が存在する。笛吹田遺跡・南押上遺跡と姫御前遺跡は、同時期に営まれた遺跡であるものの、遺構密度や性格、玉作の程度に相違が見られ、相互の関係について検討する必要がある。そして、4遺跡を総合的に評価することで、糸魚川地域の古墳時代前期の土地利用の実態が明らかになると考えられる。

2 遺 構

A 概 要

検出した遺構は、大きく近世・中世・古墳時代前期・弥生時代後期の4時期に区分することができる。

近世においては、5区東側に墓坑を検出した。中でもSK200は、冥銭と漆器が出土しており、供物と考えられる。周囲からは、中世の五輪塔がセット関係で出土した。中世から、周辺が墓域として継続的に利用された可能性が考えられる。

中世においては、掘り込みを有する遺構を検出できなかったが、祭祀関連遺物が多数出土した。18年度調査区と同様に箸状木製品や棒状木製品を地面に突き立てた遺構を検出した。しかし、18年度調査区と比べると数量が著しく少なく、標高の低い部分に偏って分布した。遺物は多数出土したものの、建物等は検出できず、居住域の存在は確認できなかった。植物珪酸体の分析結果を踏まえれば、周辺地域が水田として利用されたと考えられる。

古墳時代前期は、当遺跡の中心時期である。平地建物4棟、掘立柱建物3棟のほか、溝や土坑を検出した。特に、平地建物SI216は残存状況が良好な上、ほかの遺構との重複がなく、実態を把握しやすい状況にあった。壁溝の検出によって明らかとなった建物の規模は、1辺7mの隅丸方形で、県内でも最大クラスである。また、建物の周囲には断続的に巡る周溝を検出し、有力者の建物が存在したことが想定された。平地建物は5区東側に分布し、さらに標高がより高い南側に遺構が集中する傾向にあった。集落の核心部分は、5区の南側に広がっていた可能性が高い。

弥生時代後期の遺構は、不整形の土坑 SX284 がある。当初、倒木痕と考えて調査を進めたが、遺存状態がよい土器やヒスイ原石が出土したことから、何らかのかたちで人が関わった穴であると認識した。このほかに明らかに弥生時代に帰属すると判断できた遺構はなかった。当遺跡における開発の初期段階を示す遺構と考えられる。

B 記述の方針

(1) 遺構名の付し方

遺構名は、遺構種類の略号と通し番号を組み合わせて表記した。遺構番号の略号は、平地建物 = SI、掘立柱建物 = SB、ピット = P、土坑 = SK、溝 = SD、墓 = ST、性格不明遺構 = SX とした。番号は、遺構種別・検出層位に関わりなく通し番号を付した。調査後に欠番が生じた場合でも、その後の混乱を避けるため、番号の付け直しを行っていない。したがって、遺構番号の数が、遺構の数を示しているわけではない。なお、20 年度調査においては、遺構番号を 5 区では 198 番から付した。

(2) 土層の記述方法

土層注記に当たっては客観性を確保するため、次の共通認識の下、記述することとした。調査中も試行錯誤を繰り返しながら客観性の確保に努めたが、調査員間で必ずしも十分な共通認識を持ってなかった面もある。そのような状況にあっても、上下の土層との相対的な相違を表現することに留意した。

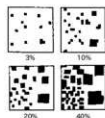
色 調 農林水産省農林水産技術会議事務局・(財)日本色彩研究所監修『新版 標準土色帖』(2003 年度版)を使用した。色調は乾燥の度合い、空気に触れた後の変色によって著しく変化する。できるだけ水分を含んだ新鮮な状態で色調を判断するよう留意した。また、『土色帖』の分類上、同じ色調である場合、上下の土層と比べて相対的に「より明るい」または「より暗い」と併記することとした。

土 質 当遺跡の土質は、基本的には「シルト」であり、粘性の強い部分と弱い部分がある。より粘性の強いシルトを「粘質シルト」と区別した。一方、より砂質の土層を「砂質シルト」とし、より粒子が粗い砂層を「細砂層」として区別した。また、植物遺体を主体とする腐植層については、「草本質泥炭層」または「ガツボ層」と呼称した。

しまり しまりについては、極めて感覚的要素が多い記述である。

特に、乾燥の度合いによって記述内容が左右されることがあるため、上下の土層との相対差を示す場合に記述することとした。

混入物 混入物には、炭化物、地山ブロック、礫、植物遺体等が認められた。混入物の含有率(第 8 図)について 10 ~ 20% 程度を基準とし、これより多い場合は「多量」、40% を超える場合は「極めて多量」とした。一方、基準よりも少ない場合は「まばら」、3% を下回る場合は「極めてまばら」と区別した。また、混入の状態は、ブロック状、粒子等の状態や、粒径も併記することとした。



第 8 図 混入物の含有量
(『新版標準土色帖』から作成)

(3) 遺構の記述方法

遺構の説明には、本文・観察表・図面図版・写真図版を用いる。

本文は、遺構の種類ごとに提示することとする。ここでは、個別の記述は行わず、観察表で示しきれない情報を盛り込むことを基本とした。したがって、個別遺構の情報については、観察表を参照されたい。

観察表は、遺構種類ごとに提示した。遺構の内容を等質的かつ的確に示すべく工夫した。平面形態及び断面形態の分類は、第9図に示す分類〔加藤1999〕にしたがった。遺構の切り合い関係については、不等記号を用いて「新>旧」のように示した。

図面図版は、1:800及び1:500全体図、1:100分割平面図、1:40のセクション図・エレベーション図を基本とし、状況に応じて1:20を採用した。図版中に添付してあるスケールを確認されたい。遺構の個別平面図は、分割平面図をもって提示することとしたため、分割平面図とセクション図とを対照する構成となっている。

写真図版は、特に重要な遺構、遺存状態の良い遺構、特徴をよく捉えられるカットを選択して掲載したため、すべての遺構を網羅してはいない。また、図面図版に反映できなかった情報を補完する観点からも選択した。

(4) 建物・溝の軸方向

建物・溝の軸方向は、遺構の時期を決定する上で重要な要素である。すなわち、集落は無計画に構築されたのではなく、一時期に一定の軸方向を意識して計画的に構築されている場合が多い。したがって、建物・溝の軸方向を比較することで、同時期に存在した遺構を抽出できる可能性がある。そこで、建物・溝の軸方向を記述することとした。ただし、建物と溝とは計測の視点がやや異なる。

建物は、長軸方向を単純に比較すると、同じ軸方向を示す場合においても90°異なる値を示すことがある。そこで、建物同士を比較する場合は、より北方向に近い軸を主軸とすることとした。したがって、建物の主軸方向は、長軸のみを指すのではなく、短軸を指すこともある。一方、溝は長軸方向を示すこととし、必要に応じて90°を加えて、建物の主軸方向と比較することとした。

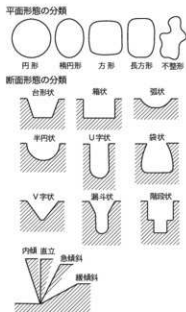
C 各 説

(1) 近世の遺構

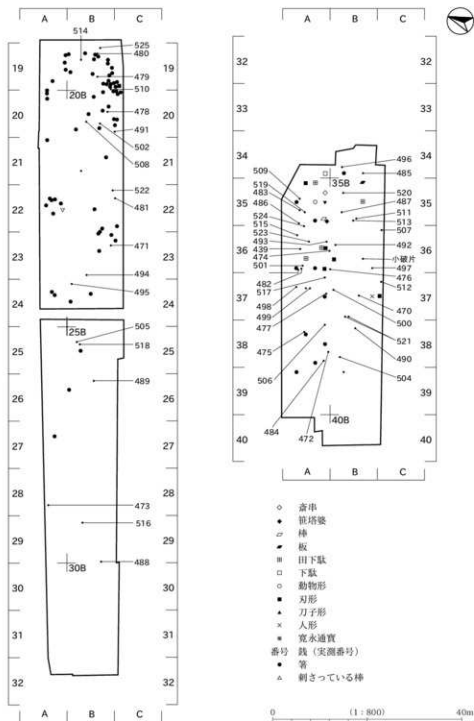
近世の遺構と判断したものは4基である。

SK200(図版4)は揺鉢状の土坑で、II a層を基調とする覆土であることから近世の遺構と判断した。底面付近からは、冥銭と考えられる寛永通寶(526)と漆器の断片が出土しており、近世墓である可能性が高い。

ST225・226・264(図版8)は、21B・22Bグリッドで検出した。長方形のプランの浅い土坑で、II a層を基調とする覆土であることから近世の遺構と判断した。このうちST225・226の2基は並ぶように検出した。大きさは、ST225が3.3×1.1m、ST226が2.6×1.2mであり、幅の値が近似する。また、長軸はST225がN4°W、ST226がN5°Wであり酷似する。長軸がほぼ南北方向を示すこと、遺構の形状・



第9図 遺構の平面形態と断面形態の分類



第 10 図 姫御前遺跡における中世祭祀遺物の出土位置

大きさが寝棺と近似することから、墓である可能性を想定した。しかし、冥銭等の葬送に関する遺物は出土していない。また、ST264は、長軸がN63°EとST225・226とは大きく異なるが、大きさが2.6×0.9mで近似すること、近接して位置することから同様の性格を想定した。

これらの遺構とほど近い19BCグリッド周辺の3mの範囲では、中世の五輪塔（空風輪350、火輪351、水輪352）がまとめて出土した。5区の東端部付近は、中世～近世にかけて墓域として利用された可能性が考えられる。

(2) 中世の遺構

18年度調査区においては、中世の遺構と明確に判断できるものはなかったが、多数の遺物が出土した。特に、中世段階において、古代の斎串と同様の役割を果たしたと考えられる箸状木製品〔四柳 1987〕(526～536)が62点出土したことが注目される。しかし、18年度調査区では658点出土しているから、それから比べれば著しく少ない。その分布は、5区東端と6区北側の低地に偏って分布する(第10図)。5区東端は、18年度調査区からの分布の連続と考えることができる。6区北側は、流路部分に集中しており、水気のある範囲で遺存したものと考えられる。流路部分では、地面に突き刺した状態で出土するものもあったが、SX512・515・517・518・519・524・526等、わずかであった(図版27・115)。また、「く」の字や、「ム」の字にあえて折り曲げているものも特徴的であった(図版115)。完形の箸状木製品が少ない理由は、このような事情によるものであろう。この「箸を折る」ことに意味があったと考えられる。「箸折り」は、一度、使用した箸にその人物の霊魂が宿るとされ、その魂を再び自分の元へ返すために箸を折るという祭祀行為である。このような背景のもと、「箸折り」が行われたといわれる。箸状木製品を利用した祭祀の詳細は、第三章3E(2)(60ページ)に記載した。

また、箸状木製品の分布は、銭貨(470～524)・人形(537)・刀形(539～545)・動物形(538)・斎串(546)・笹塔婆(547)・下駄(555～559)・五輪塔(350～353)といった祭祀に関連する遺物と重なる(第10図)。平成18年調査でも報告したとおり、水辺の祭祀が行われたことを推察できる。

(3) 古墳時代前期の遺構

20年度調査区のうち5区東側においては、4棟の平地建物が並ぶように検出されたことから、居住域を調査したと考えられる。建物は、わずかに高い調査区南側を選んで建てられている。一方、低い土地の遺構密度が希薄であったことから、調査区が居住域の縁辺部に相当する可能性が高い。居住域の核心部は、5区の南側に広がっている可能性が高い。

a 平地建物

S1216(図版4・5・93・94・97・99～102)

平地建物S1216は、19A・Bグリッドで極めて良好な状態で検出した。細く浅い溝(幅・深さ5cmほど)が1辺約7mの隅丸方形に巡ることが確認され、板壁の痕跡と認識した。板壁の痕跡と認識した場合、床面積は49m²(プランメーターにて計測)で約15坪(3.3m²/坪)の広さとなる。建物の規模は、県内でも最大クラスに相当し、有力者の存在をうかがい知ることができる。また、複数時期の遺構が重複しておらず、遺構の形態を把握しやすいことにおいて、良好な資料となる。

上屋を支えた主柱穴は、4本が1辺3.5mほどの正方形に配置された。柱を結んだ主軸方向は、南北軸から11度西偏する。柱根は4本とも腐らずに残っており、南側2本は細く根入れが浅く、北側2本は太く根入れが深いことが明らかとなった。南東のP245は太さ20cm・根入れ56cm、南西のP248は太さ20cm・根入れ48cm、北東のP246は太さ30cm・根入れ68cm、北西のP247は太さ25cm・根入れ74cmであった。南側2本は太さ20cm・根入れ50cmほど、北側2本は太さ25cmと30cm・根入れ70cmほどであり、その相違は明らかであった。このような柱材・根入れの相違は、日本海から吹きつける北西の季節風への対策と見られ、建物構造を知る手掛かりとなる。柱根の材質は、いずれもスギで

ある。当時、周辺地域にはスギ林が広く存在したことが、自然科学分析によって明らかになっており、近隣で容易に入手できる木材が利用されたと考えられる。なお、6区で多数検出した自然木との年輪年代の相関は認められず、放射性炭素年代測定によって自然木が枯死した後に生育した樹木を伐採して利用したものと考えられた（第V章6、148ページ）。

また、柱穴内の柱根上部にヒスイや玉の未成品が出土した。P246からは蛇紋岩製の勾玉未成品2点（361・362）、P245からはヒスイ原石（398、図版93）が出土した。SI216を構成するビットではないが、SA429を構成するP259からはヒスイ原石（図版104）、単独で検出したP380からはヒスイ原石（408、図版24・110）が出土した。遺物包含層中における出土頻度と比べると、異常に多く特徴的である。P259・P380については柱根が残存しなかったものの、いずれも覆土上位からの出土であることで共通する。すなわち、建物建築時に埋め込まれたのではなく、柱を根元で切断した後、あるいは柱の抜き取り後の堆積物に含まれると考えられる。偶然としては異常な出土頻度であり、建物廃絶時に何らかの祭祀が行われた可能性が考えられる。

建物の入口は、北辺で板壁跡が途切れていることから、ここが相当する可能性がある。しかし、冬季の北西の季節風を直に受ける位置関係にあり、南側に入口が設置された可能性も否定できない。また、北側は擾乱が深く及んでいたため、全体的に深く面下げしている。したがって、これにより壁溝のものを掘り抜いてしまった可能性が高い。床面が平らであるとすれば、部分的に残存していた壁溝の底面は、南側より深いことが分かる（図版5 1-1'、2-2'）。柱の太さ・根入れと同様に、季節風への対策とも考えられよう。一方、南辺中央に建物と主軸を同じにする小規模な掘立柱建物SB198が存在する。深さが5～15cmほどと浅く、貧弱な構造であるが、6本の柱穴（P265・266・267・423・424・425）の配置は東西で対称関係にある。偶然の一致とは考えにくく、SI216との位置関係を積極的に評価すれば、ここが入口施設であった可能性もある。しかし、まったく別個の建物である可能性も否定できない。

建物内の施設は、中央部に地床が、東壁溝と直交する間仕切り、間仕切りの北側には土坑（SK253）を検出した。建物内の空間利用を知る上で、貴重な事例といえる。建物の外側には、断続的な溝（SD201、SD204、SK210、SX211、SD214、SD215、SX218、SD223）が建物の周囲を巡っていることが明らかになった。いずれも浅く不整形な形態で、底面には凹凸が顕著であった。また、それぞれの規模・形態が異なることから、当初は建物との関係を積極的に捉えなかった。しかし、断続的ではあるが建物の周囲を巡ること、ほかの時期の遺構が重複しないことから、SI216に伴う周溝と考えた。建物の内と外を示す区画という性格のほか、地下水位が高い沖積地に立地するため床面を乾燥させる目的があったのであろう。また、SD207はSI216と平行するように掘削されているものの、建物範囲を超えて存在する。SD207が存在する南側は、より標高が高く、建物内への雨水の侵入を防ぐ目的があったのかも知れない。ただし、SD207は18年度調査区のSD2と連続する可能性が想定される。SD2は、出土土器（18年度報告 図版17-255・256）から新縄文シンボ編年7期に位置付けられる。SI216から出土した遺物は6期であることから、時期が異なり、SI216の付属施設とは評価できない。ただし、SD207からの出土遺物は少なく、SI216との共存関係は不明としておきたい。時期が異なるのであれば、SD207の外側（調査区外）に断続的な周溝が巡っていたと考えられる。同様の周溝は、北陸地方の弥生時代中期～古墳時代前期にかけての沖積地に存在することから、地域的な特徴と捉えることができる。

周溝からは多数の遺物が出土しており、その年代は古墳時代前期前半（新縄文シンボ編年6期）に位置付けられる。なお、P246の柱根から採取した試料（最も外側から3番目の年輪）の放射性炭素年代測定は1780

± 30yrBP であり、弥生時代後期から古墳時代前期頃に当たる（第V章5）。土器の年代観よりも数十年古い値と見られるが、ほぼ調和的な分析結果といえる。

なお、SI216が、古墳時代前期の建物であることは遺物の出土状況から明らかであるが、先述のとおり柱材は地上部が切り取られて再利用された可能性が考えられる。したがって、弥生時代から使用されてきた木材である可能性も考え得る。しかし、ウイグルマッチングによって明らかになった柱根の表層年輪の暦年代は3世紀前半前葉（第V章6）であり、土器の年代観と調和的である。したがって、柱材は伐採後に時間をおかず、利用されたと考えられる。

SI401（図版8・10・95・97・102）

21BC・22BC グリッドで検出した。P230・231・SD232の一部・SD239の一部が主柱穴と考えられる。やや歪であるが、1辺2～2.5mの正方形である。また、4本の柱の中心（建物の中心、対角線の交点）にはP261も存在し、これも上屋を支えた柱穴である可能性がある。SI216よりも1辺が1m以上小さく、一般的な規模の建物と考えられる。柱穴を巡るように細い溝SX238が認められることから、平地建物である可能性が高い。ただしSX238は、柱穴の北西側から西側を巡っているものの、SI216のように均整のとれた形態ではない。また、東側では検出できなかったが、ピットが不規則に存在するものの一部が、その連続と理解できるかもしれない。これらを壁溝とした場合、4本の主柱穴と主軸が異なることとなる。これらを壁溝ととらえた場合、建物内のP230とSD239の柱穴を結んだラインの中間点東側にSK229が存在する。SI216建物内の東端にも土坑（SK253）が配置されており、偶然の一致とは言えないかもしれない。また、SD239とSD232の柱穴を結んだラインの中間点西側にもSK235が存在する。これらは、建物内に設置された施設である可能性がある。

SI401は、SI216と並ぶように検出したが、建物の軸は著しく異なる。柱穴を結んだ主軸は、N33°Eであり、北方向から大きく東偏する。しかし、壁溝と見られるSX238の主軸は、N20°Wであり、北方向からやや西偏する。このように主軸で柱穴の配列と壁溝の関係を見ると、全く異なるといっても過言ではない。しかし、壁溝のちょうど中央部に柱穴が配置されており、また、両者以外の組み合わせを考え得る素材もない。したがって、柱穴と壁溝をセット関係として考えることとした。建物の時期は、年代を特定し得る遺物はないが、検出層位・遺構覆土の観察、建物の形態を考慮すれば、古墳時代前期に位置付けられる。

SI402（図版8・9・11・13・95・97・102）

22BC・23BC グリッドで検出した。P277・P290・P292・P296の4本の柱穴が正方形に並ぶ建物で、その周囲には壁溝と考えられる細い溝とその残痕と見られるピット列が存在する。建物の中央やや東側に地床炉を設置し、基本的な建物構造はSI216と共通する。ただし、柱穴は2通りの組み方が可能であり、P205・P240・P276・P292を組み合わせることもできる。これらを結んだ形状は台形であるが、炉が中心に位置し、壁溝との位置関係も違和感がない。いずれの組み合わせを考えた場合でも、壁溝との位置関係を見ると、柱が東側に偏って分布することとなる。そして、大きく広がる西側の空間にSK227が設置されている。壁際に土坑が設置される点においては、SI216・SI401と共通する。

建物の年代は、炉から出土した土師器（172）があるものの、古墳時代前期ということ以上に言及することはできない。一方、SI402の壁溝の一つであるSD236の覆土最上位からは、火山灰の二次堆積物が認められた（図版11 43 - 43'）。すなわち、SI402は火山灰が降灰する以前の5期に位置付けられる。

なお、建物内を横断するようにSD203が認められるが、切り合い関係からP205より新しいことが明

らかである(図版 11・41 - 41')。溝内からは、緑色凝灰岩製の碎片が多数出土しているが、その分布範囲は SI402 と重複する範囲に収まる。すなわち、SD203 から出土した玉作関係の資料は、本来は SI402 に伴うものである可能性が高い。SI402 は、玉作に関連する建物である可能性を指摘しておきたい。

SI410 (図版 8・10 ~ 13・95・102・105)

22AB・23AB グリッドで検出した。SX250・P256・P273・P403 の 4 本の柱穴が長方形に配置される建物である。建物の主軸は N27°W で、西偏する。柱間は、南北が 1.6m、東西が 2.7m である。ほかの平地建物とは異なり、東西に長い長方形を呈することが分かる。建物の周囲を巡るように、不整形の土坑や溝・ピットを検出した。ただし、ここには壁溝と周溝が混在する可能性がある。図版 8 においては、破線で建物の外周を示したが、このうち東縁の SD412・P418・P287、西縁の P407 を含むピット列(図版 12・72 - 72')は、壁溝の可能性が高い。ピットは、底面に凹凸がある溝の底部が残存したものと考えられ、これも壁溝の一部として理解することができよう。一方、北縁の SK208・SK243 は、東縁・西縁と比べると規模が大きく、相互の連続性も見られない。SD412 が北端で西側に屈曲するが、ここが壁溝のラインを示す可能性も考えられる。そうであれば、SK208・SK243 は建物の周囲を断続的に巡る周溝と理解すべきであろう。特に、SK208 については、不整形な形態であること、遺物が多量に含まれることにおいて、SI216 の周溝に共通する。

SK208 からは多数の土器が出土したが、いずれも碎片であった。出土した土師器(180 ~ 182)の年代は、新瀨シンボ編年 6 ~ 7 期頃の所産と考えられる。周溝の残存状況から判断すれば、SI410 は、SI402 に切られているようにも見える。しかし、SI402 の壁溝 SD236 の覆土最上位から火山灰が認められたことから、SI402 は火山灰が降灰以前の 5 期に位置付けられる可能性が高い。したがって、SI402 → SI410 という変遷を想定することができる。

b 掘立柱建物

SB370 (図版 14・15・95・107)

25B グリッドで検出した。2 列の柱軸(南北軸)が平行することから掘立柱建物と認識したが、北端の 2 つの柱穴(P348・P360)は南北軸と直交しない。また、南西隅の柱穴が存在すると想定される範囲は、攪乱によって破壊されている。したがって、掘立柱建物と認識することに躊躇する面もあるが、南北軸が平行関係にあること、P344 と P345、P355 と P356 が対になる位置関係が明らかであることから、積極的に認識することとした。建物主軸は N25°E と東偏し、SB370・SD522 と主軸が一致する。

SB341 (図版 22・23・109)

31A・31B・32A・32B グリッドで検出した。5 区南西端で検出した流路 SR730 の北側 5.5m に位置し、その岸辺と平行するように建てられている。主軸は N20°E と東偏する。おそらくは、流路と並存・関連する建物と考えられる。建物の規模は、1 間(3m) × 3 間(4.5m)であり、細長い。床面積は 13.5㎡であり、約 4 坪の広さである。居住するには狭く、周辺には小型の建物しか存在しないことから、倉庫等として利用された可能性も考えられよう。なお、検出した柱穴 7 か所のうち P340(遺物番号 387)のみで柱根が残した。樹種は、ほかの柱根と同様にスギである。

SB399 (図版 22・23)

SB399 は、31B グリッドで検出した小型の掘立柱建物である。西辺の中間点近くに柱穴を検出できたが、東辺では検出できなかった。おそらくは 1 間(2.3m) × 2 間(3.3m)を基本とした建物であったであろう。

当遺跡では最も小型の建物で、居住域とは離れて存在する。柱穴も浅く、簡易な建物であることから、小屋のような性格が想定される。なお、隣接するSB341とは主軸が大きく異なり、N17°Wである。主軸の相違を考えれば、両者の並存は考えにくい。

c 杭列・柱列

SA199 (図版4・6・103)

21A グリッドで検出した。長軸はN80°Eと東偏する。P420・SX224・P421から構成され、3本とも柱根が残存していた。そして、それらが直線上に等間隔に並ぶことから、建物を構成する柱である可能性が高いと考えた。そこで、P420と対になる柱穴の検出が想定される部分について、調査対象地を可能な限り北側に拡張した。しかし、柱穴・柱根を検出することはできず、杭列とした。3本の柱根について年輪解析を行ったところ、すべてがほぼ同時期に伐採されていることが明らかになった(第V章6)。ウィグルマッチングによる暦年代推定(P421表層年輪)では、3世紀前半に伐採されたことが明らかになった。これにより、弥生時代中期～後期に生育した木材であることが分かった。南側に隣接する土坑SX284からは、弥生時代後期(新潟シンボ編年2期)の遺物(174～176)が出土しており、SA199が建物であるとすれば、SX284が断続的に巡る周溝の一部であると考えたが、年代が異なり、その可能性は極めて低い。

SA429 (図版8・11・95・104)

22A グリッドで検出した。長軸はN44°Eと東偏し、北東から順にP254・P255・P259・P404が直線上に並ぶ。建物の一部であることを想定して調査を進めたが、対応する柱穴を検出することができず杭列とした。また、P259では、柱根の最上部からヒスイ原石が出土した。SI216を構成するP245・P246と同様に、廃絶時に何らかの祭祀が行われた可能性を示唆する遺物といえる。

SA430 (図版14・16・102)

24B グリッドで検出した。長軸はN59°Wと西偏し、南東から順にP414・P415・P416が直線上に並ぶ。建物の一部であることを想定して調査を進めたが、対応する柱穴を検出することができず杭列とした。

SA369 (図版18・19)

28A グリッドで検出した。長軸はN44°Eと東偏し、北東から順にP304・P306・P308が直線上に等間隔(2.3m)で並ぶ。建物の一部であることを想定して調査を進めたが、対応する柱穴を検出することができず杭列とした。

SA559 (図版26・27・112)

37A・B グリッドに位置する板杭列である。長さ1.5mにわたって、板杭が連続的に打設されており、長軸はN45°Eと東偏する。途中、調査のための排水溝によって途切れるが、本来は連続的に打設されていたと考えられる。SA559は、SD520が流路に合流する部分に位置し、SD520の延長上西縁に沿うように板杭が打たれている。SA549・SA550のように流路岸に護岸のように打たれているものとは異なり、明らかに流路内に存在する。また、板杭の根入れが深い点においても、SA549・SA550とは異なる。SD520からの水の流れを誘導するような性格が想定されよう。なお、板杭の樹種は、573がスギと同定されている。このほかについては切片による観察はしていないものの、スギである可能性が高い。

SA549 (図版28・29・112)

37・38B グリッドに位置する板杭列である。長軸はN89°Wで、ほぼ東西方向である。流路(SR)との境界部分に5mにわたって、板杭が連続的に打設されていた。等間隔ではないものの、一直線上に板杭

が認められた。ただし、板杭は先端部のみしか残存しておらず、間隔がより広く開いている部分にも、本来は板杭が等間隔で存在した可能性もある。したがって、本来は確認した状況よりも密に板杭が打設されていたとも考えられる。また、SA550とは若干の間隔があり軸も異なるが、岸辺のラインに沿うことから、一連の遺構と評価できる。地形との位置関係から、護岸や土地利用の境界を示す遺構と考えられる。なお、板杭の樹種は、切片による観察はしていないが、いずれもスギである可能性が高い。

SA550 (図版 28・29・112)

37B グリッドに位置する板杭列である。長軸は、N61°Eで東偏する。流路(SR)との境界部分に1.3mにわたって、板杭が連続的かつ一直線上に打設されている。板杭は先端部のみが残存していることから、間隔がより広く開いている部分にも、本来は板杭が存在した可能性がある。ただし、SA549と比較すると密に打ち込まれており、より本来的な姿を留めていると考えられる。先述のとおり、SA550とは、一連の遺構と評価でき、護岸や土地利用の境界を示す遺構と考えられる。なお、板杭の樹種は、切片による観察はしていないが、いずれもスギである可能性が高い。

SX553 (図版 31・32・114)

39A グリッドで検出した板杭列である。長軸は、N32°Wで西偏する。板杭は、流路SRとSD522が合流する手前に位置し、SD522と直交するように打ち込まれている。あるいは、水路の「堰」のような役割を担った施設かもしれない。隣接して、設置桶SX554が存在するほか、SX554の南西40cmのSD522内からは壺(191)が高い残存率で出土した。溝・板杭列・設置桶・壺の四者は水と関連する遺構・遺物と理解することができ、セット関係で存在した可能性が高い。なお、壺は新潟シンボ編年の5～7期に含まれるものである。なお、板杭の樹種は、切片による観察はしていないが、いずれもスギである可能性が高い。

d 溝

SD207 (図版 4・7・101)

調査区の南端に沿うように、わずかに蛇行する溝である。規模・位置関係を見ると、18年度調査で検出したSD2と連続する可能性が高い。SD207からは年代を特定できる遺物は出土していないが、SD2出土の土器(18年度報告 図版 17・255・256)の年代観を考慮すれば、新潟シンボ編年7期に位置付けられる。SI216の周溝である可能性も考えられたが、ほかの周溝から出土した遺物の6期であり異なる。したがって、SI216の周溝とは考えにくい。長軸方向は、5区内ではN69°Eである。

SD213 (図版 4・6)

調査区の南端に沿うように認められるSD207と直交する直線的な溝である。周囲は著しく攪乱されており、SD207との切り合い関係(図版 7・36・36')はなく、併存したものと考えられる。溝は北側に延びるものの、攪乱部分で取戻するものと見られる。長軸方向はN19°Wで、SD207と直交する。時期は、切り合い関係が見られず、直交関係にあるSD207と同時期と見られる。

SD257・SD258 (図版 8・11・95)

両者ともSI401とSI402の間に存在する。SD257は、途中、2か所で途切れているが一連の溝と考えた。平面形態は、弧状を示しており、平行する。そのカーブする様子は周辺の平地建物の壁溝と考えられる溝と共通する。また、幅・深さともに、建物の壁溝と近似する。見出すことができなかつた平地建物の壁溝である可能性も考えられよう。

SD203 (図版 8・9・11・14・16・102・106)

SD203は、22Bグリッドから24Aグリッドに延びる溝である。平成20年3月に工事立会を行った範囲の西側にまで延びると考えて調査したが、延長部分を検出できなかった。工事立会範囲内で、溝は途切れるのであろう。SD203は、途中、SI402を横断するように認められるが、切り合い関係からP205よりも新しいことが明らかである(図版11 41-41')。溝内からは、緑色凝灰岩製の管玉や砕片、滑石製の白玉の製作関連資料が多数出土したが、その分布はSI402と重複する範囲に収まる。すなわち、SD203から出土した玉作関係の資料は、本来はSI402に伴う可能性が高く、SI402→SD203の変遷が考えられる。なお、SI402からは時期を特定できる土器は出土していないものの、壁溝の覆土最上位に新潟シンボ編年5期以降、6期以前に降灰した火山灰を検出した。このことから炉から出土した土器(172)、及びSI402を5期に比定することができる。したがって、SD203からは時期を特定できる土器が出土していないものの、6期以降に比定できる。

SD206 (図版 8・11・14～16・107)

SD206は、SR202の北側に沿うように掘り込まれた、幅20cm・深さ10cmほどの小規模な溝である。底面にピット状の凹凸が顕著であることから、SR202沿いに設けられた杭列・柵の類であったかもしれない。途中、24Bグリッドで途切れるが、杭列・柵列であれば、ここが通路となったと考えられる。また、西端は擾乱によって延長部分を確認できないが、SD209まで延びない。SR202を意識して掘られていることは確実であり、同時期の遺構と考えられる。

SD209 (図版 14・15～19・95・97・108)

SD209は、SR202の西端25Bグリッドから調査区北縁の28Aグリッドまで延びる長い溝である。溝の長軸方向は、26・27列境界付近で緩やかに屈曲し、「く」の字を呈する。屈曲部よりも東側はN82°E、西側はN74°Wである。幅80cm・深さ20cmほどの部分が多いが、部分的に幅が広くなり深くなる部分がある。特に26Bグリッドでは、幅240cm・深さ35cmほどと規模が大きくなり、遺物も集中的に出土した(図版17)。26Bグリッドで多数出土した土器(195～214)は、新潟シンボ編年6期を中心とする時期であり、遺構の年代を反映すると考えられる。新潟シンボ編年5期に位置付けられるⅢd層を切っており(図版16 19-19')、切り合い関係と土器編年が整合する。また、蛇紋岩製の勾玉未成品(363)、滑石製の玉作未成品(384)、ヒスイ原石(395・396)、横刃形石器(441)、貝殻状剥片石核(446)、瓢箪形の礫(453)等の石器・石製品も多数出土した。

なお、SD209はSD203・SD206と平行しており、またSD203・SD206はSR202の縁と平行関係にある。したがって、これらと同時期と見ることができると考えられる可能性が高い。しかし、SD209とSR202の切り合い関係は明瞭に把握できなかった。図版16 29-29'の断面図を見ると、SD209がSR202を切っているように見えるが、SD209の覆土を掘り上げた時点での断面であり、切り合い関係については言及できない。一方、SR202内までSD209のプランが延びないことを平面・断面で確認している。すなわち、両者の切り合い関係は不明瞭であるものの、SR202をSD209が切る積極的な根拠はない。したがって、両者は併存、またはSR202がより新しいと考えた。なお、SD209と平行するこれらの遺構から年代を特定できる遺物は出土していないが、SD203は新潟シンボ編年5期のSI402を切っており、SD209と同時期と見ても矛盾はない。

SD300 (図版 14・16・18・95・108)

25・26Bグリッドで検出した幅40cm・深さ10cmほどの溝である。途切れる部分があるものの、北

側が開く弧状を呈し、長軸はN80°Eである。新潟シンボ編年5期の遺物包含層であるⅢd層を切っており(図版16・19・19')、新潟シンボ編年7期の遺物(193・194)が出土した。基本層序との関係と遺物の年代観に矛盾はない。なお、6期に位置付けられるSD209とほぼ平行するものの、若干の相違がある。出土遺物の年代の相違、長軸方向の相違から、SD300はSD209に後出する遺構と考えられる。

SD374～SD377(図版20～22・109)

SD374～SD377は、29・30Bグリッドで検出した、幅30cm・深さ15cmほどの細長い直線的な溝である。一定の間隔(約1.2～1.4m)を保ちながら平行するように検出したことから、畑作溝と考えた。居住域と隣接する地点での検出であり、土地利用の在り方を知る上で重要な遺構である。このような想定のもと、溝内の土壌(SD375)を花粉分析したが、栽培作物を検出することはできなかった。長軸方向は、N79°W～N84°Wと極めて近似した値を示す。また、SD376の北西側に存在する浅いL字の溝があるが、これもまた軸を同じにする。あるいは、耕地の区画を示す溝であるかもしれない。また、SD375の東端は、ほかの溝よりも手前で収束している。ここには縄文時代のもと考えられる樹根があり、これを避けるかのような位置関係にある。樹根を掘り起こすことには労力を要することから、畑作溝を掘らずに畝を作った可能性もあろう。なお、畑作溝はSD209とほぼ平行しており、同時期に築かれた可能性がある。畑作溝から時期を特定できる遺物は出土していないものの、SD209は新潟シンボ編年6期に位置付けられている。耕作時期を、これと同時期と見てもできよう。

SD520(図版28～32・96・98・111・113)

37～40列で検出した流路SRにつながる溝である。覆土の上位をⅢ層が覆っていることが複数の断面図から明らかであり(図版32・1-1'・2-2')、古墳時代の遺構であることは確実である。規模は幅120cm、深さ35cmほどであるが、流路に近い部分では幅広となり、テラス状の平坦面を持つ部分もある。溝は、一旦、調査区外に出るが、西側に向きを変えて再び調査区内に現れる。蛇行しているため、長軸方向は部分ごとに示すことしかできないが、流路との合流点付近ではN57°Eで、38B13グリッド付近で南側に大きく方向を転換しN24°Eとなる。若干のカーブを描きながら調査区外に延びていき、この延長部分と思われる西側は、N89°Eとほぼ東西方向となる。また、SD520内で検出したSX555・SX556(図版28・29・113)は井戸状の落ち込みであるが、遺物は含まれていなかった。いずれも地山ブロックの間に、黒色の腐植が帯状に認められた(図版29・4-4')。SX555においては、層位の逆転現象のように見える部分もあり、倒木痕等の可能性も考えられる。遺物を多量に含むSD520の覆土とは明らかに異なり、人為的な掘り込みとでは明らかでない。

SD520からは多数の土器が、良好な遺存状態で出土した(245～278)。土器の年代は、当遺跡の主体である新潟シンボ編年5～6期が多いが、弥生時代後期～8・9期の遺物まで認められる。遺構の底面近くからは8・9期の遺物が出土しており、これらが遺構の年代を反映するものと考えられる。石器・石製品の出土も多く、ヒスイ原石(399～403)、メノウ原石(412)、筋砥石(416)、敲石(428・429)、凹石(432)、横刃形石器(434)、貝殻状剥片石核(448)が出土した。底面付近には木製遺物も出土しており、篋(566)、天秤棒(579)が認められた。このように当遺跡で、最も多様な遺物が、多数出土したことが特筆される(図版30)。

SD522(図版31・32・98・111・114)

39・40列で検出した断面皿状の浅い溝である。ほぼ直線的であり、長軸はN25°Eと東偏する。調査区北端39Aグリッドには、板杭列SX553と設置桶SX554があり、流路と合流する直前にこれらの施設

が複合する点が注目される。また、SX554の南西40cmのSD522内からは、壺(191)が高い残存率で出土した。溝・板杭列・設置桶・壺の四者は、水と関連する遺構・遺物と理解することができ、セット関係で存在した可能性が高い。壺は、新潟シンボ編年の5～7期に含まれるものであり、SD522の年代を反映するものと考えられる。

e 土 坑

土坑は、平地建物の屋内に設置されたものや周溝のほかには、ほとんどない。また、土坑としたもの一部には、倒木痕の可能性の残るものも多い。したがって、形態分類上は土坑としたものの多様なものが含まれ、また、時期についても明らかでないものが大半である。特に、覆土の観察から縄文時代の樹痕の可能性が高いものが含まれる。SK312(図版18)、SK342(図版18・19)・SX361(図版18・19)、SX362(図版14・15)、SK381(図版20・24)、SX396(図版109)等は、土坑と見ることもできるが、覆土は18年度調査区で縄文時代晩期の倒木痕としたものの覆土に酷似する。また、これらは遺構・遺物の分布が希薄な範囲に認められる傾向にある。したがって、土坑と判断せずに性格不明遺構として取扱うこととし、古墳時代前期の土坑とは一線を画すこととする。このようなものを除外していくと、遺物を伴い、明らかに古墳時代前期の土坑といえるのはSK705のみとなる。

SK705(図版20・21)

SK705は、30Bグリッドで単独で検出した。楕円形で長軸116cm・短軸88cmで、深さは30cmである。底面は、部分的に凹凸が認められる。覆土には炭化物、土師器片が多量に認められ、平地建物の周溝とよく似た状況にある。出土土器(184～187)から、新潟シンボ編年5～6期に位置付けられると考えられる。なお、SK705は畑作溝SD374～377の中に存在する。畑作溝は、平行するSD209の土器の年代から、新潟シンボ編年6期に位置付けた。SK705と同時期と見ることができ、耕作に関連して掘られた土坑と考えることもできる。

f 流 路

SR202(図版8・14・16・95・107)

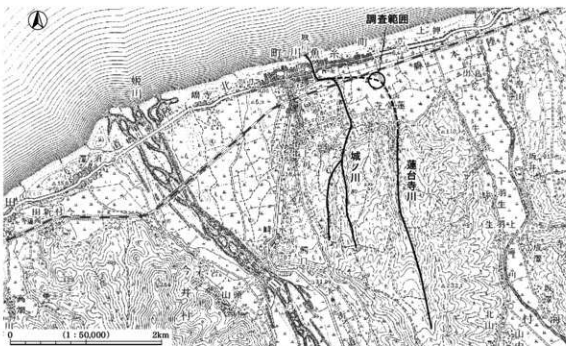
23BC～25BCグリッドにかけて検出した。工事立会範囲が横断すること、南側が調査区外に広がることから全貌が明らかでないが、極めて特徴的な遺構である。SR202は、もともとの斜面地を人工的に改変した可能性が高く、外周は垂直に近く急角度に落ち込み、その底面には細い溝が巡る。おそらくは、護岸のための板杭が打ち込まれた跡であろう。地山のシルトは水による浸食が顕著であり、調査時には湧水と雨水によって壁面が崩落することがあり、土留めを行った。したがって、人工的な掘り込みであれば、護岸を行ったことは想像に難くない。検出範囲の西端には、テラスを検出した。目的は定かでないが、水面に近付くための施設と考えられる。また、流路内の南端側は、再び標高が若干高くなることも特筆される。すなわち、外周に沿って溝状に落ち込んでいるのである。外周部分に沿うように、一定の幅(約2.5m)をあえて深く掘り込んでいるようにも見える。かなりの地形改変であり、集落における重要な施設であったと考えられる。流路の岸辺であるとなれば、舟を係留するような施設であった可能性が考えられる。また、SD206との間には深さ40cmほどのP357がある。周囲のピットと比べると明らかに深く、直径も40cmほどと大きい。舟を係留するのに打ち込まれた杭の跡と想定することもできよう。なお、SD206は、SR202と平行するように掘られており、相互の関連性を想定できる。SD206は底面の凹凸が著しく、

SR202 沿いに設けられた杭列・櫓の類であったかもしれない。SR202 の時期は、最下層から出土した土器 (294 ~ 297) から弥生時代後期に位置付けられる。しかし、その数は少数であり、6 期に位置付けられる SD209 との切り合い関係は不明瞭である。したがって、SR202 は弥生時代後期 ~ 古墳時代前期初頭という時期幅をもって捉えておきたい。相当な労力を費やして構築された施設であると考えられることから、あるいは弥生時代後期に構築され、古墳時代前期初頭まで継続的に使用された可能性も考えられよう。

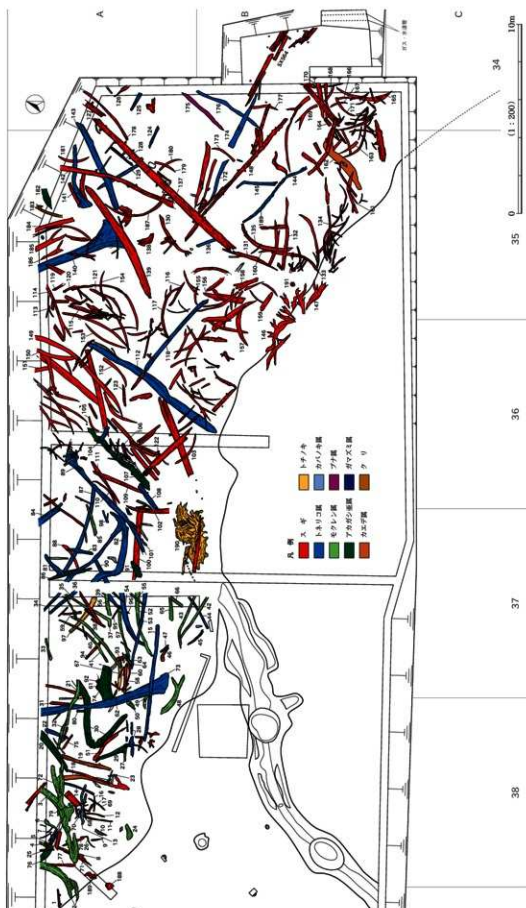
SR・SR730 (図版 1 ~ 3・22・24 ~ 26・28・96・98・111・112・116)

5 区と 6 区の間には、幅 20m ほど・深さ 1.5m 以上の流路と見られる落ち込みを検出した。当初、6 区の北西側に落ち込み (SR) を検出した時点では砂丘の後背湿地との境界と考えたが、その後、5 区の南西隅に SR と平行する対岸の落ち込み (SR730) を検出した。両者の基本堆積は一致しており、同時に存在し、同時に埋没していく過程を確認することができた。このことで両者の同時性が保証され、対応関係にあると考えた。流路と考えた場合、調査区付近で大きくカーブする (図版 1) が、外側に相当する SR730 は急斜面、内側に相当する SR は緩斜面であった。このことは、水が流れる「流路」であったとする仮説を支持する。この流路の上流部は、市道蓮台寺線に沿うように遡れると考えられる。位置関係から想定すれば、蓮台寺集落からフォッサマグナミュージアム方面へ遡る蓮台寺川の旧流路である可能性が高い (第 11 図)。旧蓮台寺川が、海岸砂丘に阻まれ、調査区付近で流路を西側に大きくカーブさせたものと考えられよう。この延長上には城の川があり、合流して日本海へと注いだのであろう。

SR においては、自然木が多数出土したことが特筆される。地域住民の話によれば、5 区と 6 区の間には存在する市道蓮台寺線の地下道建設時に、多量の木材が出土したとのところである。これは、SR と連続する自然木と考えることができる。自然木 192 点について樹種同定を行ったところ、スギが大半であり、ほかにトネリコ属、モクレン属、コナラ属アカガシ亜属等が認められた (第 12 図)。これらの出土層位は、Ⅲ下層下部 ~ Ⅳ上層に集中する。Ⅳ上層ではスギにほぼ限定されることが特徴的であり、総じてスギが下



第 11 図 城ノ川的位置と旧蓮台寺川の推定位置 (破線部分)
(大日本帝国陸地測量部大正 3 (1914) 年発行「1:50,000 糸魚川」を一部改定)



第12図 流路における自然木出土状況図

位、その他の樹木が上位から検出された。花粉分析の結果では、IV中層～V層ではスギが卓越し、スギ花粉が1cc中に100万個を超える高密度で検出されている。そして、その後、IV上層ではコナラ属アカガシ亜属の照葉樹林の増加が報告されている。自然木の出土状態は、花粉分析の結果と調和的である。また、自然木を多数含むⅢ下層下部～IV上層には人工遺物(板材・杭・砥石・ヒスイ原石)が数少ないながらも混在した(図版33)。特に調査区東端で検出した板材SX564は、左右に杭が打ち込まれており、「木畦畔」と判断できる。なお、SX564の長軸は、屈折しており、N83°WとN63°Wである。帰属時期は、草草質泥炭を覆っている(図版114最下段左)ことから、新潟シンボ編年11～12期以降に位置付けられる。

いずれの樹種も、基本的にはその地で自生していた樹木と考えられるが、樹根が著しく少なく、幹の数とアンバランスである。また、多数出土したスギの枝は、首都大学東京・山田教授、福島大学・木村准教授の御教示によれば、「自然落枝」である可能性が高いという。花粉分析の結果から想定される鬱蒼としたスギ林が広がっていたものと想定される。これらの自然木については、樹根に関わらず190点について年輪解析を行った。その結果、スギにおいて281年分の年輪パターンを読み取ることができた。そこで、暦年代を明らかにするためにウイグルマッチングを行った。考古学的な所見とは異なる結果となったが、弥生時代に生育した樹木であると考えられた。また、年輪からみた枯死年代が、AD60～90年頃の30年の間に集中することが明らかになった。自然木のスギについては、伐採痕跡が明らかでないものの、弥生時代後期の特定の時期に枯死したものと考えられる。一斉に枯死した要因は定かでないが、自然(環境変化)・人為(伐採)の双方の可能性が考えられる。花粉分析・植物珪酸体分析からは、古墳時代前期の層位からスギが減少し、水田化していく様子が認められている。自然木の根元部分が腐蝕しているため、明らかな伐採痕跡は認められなかったが、あるいは水田化に伴う人為干渉と関係する可能性も考えられる。

(4) 弥生時代後期の遺構

弥生時代後期の遺構は、5区北東部で検出した。SX284は、21Bグリッドに位置する。ドーナツ状のプランが検出されたこと、地層の逆転現象が観察されたこと、平面形が不整形であること、底面の凹凸が顕著であることから倒木痕と考えて調査を進めた。しかし、覆土中からは遺存状態が良好な弥生土器(174～176)、ヒスイ原石5点(392～394)が出土した。18年度調査においては倒木痕を多数検出したが、遺物が出土したのは石礫1点のみであった。したがって、ほかの倒木痕とは別途に取扱う必要があり、性格不明遺構とした。なお、本遺構から出土した土器は、新潟シンボ編年2期に位置付けられ、唯一の弥生時代後期の遺構といえる。

3 遺 物

A 概 要

出土遺物は、主に弥生時代後期～古墳時代前期と中世～近世がある。Ⅱa層からは17世紀代、Ⅱb層からは15～16世紀、Ⅲ層からは弥生時代後期～古墳時代前期を中心とする遺物が出土した。

Ⅱa・Ⅱb層からは中近世の陶磁器が多数出土しており、その破片数はⅡa層で435片、Ⅱb層で2013片である。陶磁器は破片であるもののバラエティーに富み、14～17世紀代の生活雑器から香道具や茶道具、瓦器が含まれていた。調査地点は、自然科学分析の結果から、当時、水田であったと想定できるものの、茶や香を嗜むことができる比較的財力のある階層の付近に存在することをうかがい知ることが

できる。また、地上と他界をつなぐ祭祀品とされる箸状木製品、人形、動物形、刀形、斎串、笹塔婆、下駄といった祭祀遺物の存在が特徴的である。特に、箸状木製品は地面に突き立てられたような状況にあり、水辺の祭祀が行われたことを示している。多数出土した銭貨も、これらの木製品と同様の性格を持ったものと考えられる。これらのことを裏付けるかのように、5区南東部からは中世の五輪塔が出土した。空風輪・火輪・水輪が3mの範囲からまとまって出土しており、大きさ・石質も類似することから、組み合わせ関係にあると考えられる。その出土地点に近いSK200からは、銭貨(寛永通寶)と漆器の断片が出土しており、墓坑の可能性が推察される。中世～近世にかけて、調査区周辺に墓域や祭祀場が形成された可能性が考えられる。

弥生時代後期～古墳時代前期の土器は、コンテナ79箱出土した。それらは細片が多く、器形を復元できる土器は少ないが、遺構出土資料は比較的遺存率が高く、一括性の高いまとまりとして捉えることができた。報告個体は、遺構内から出土した資料を中心に選択し、遺物包含層出土資料を補足した。また、26B・27B グリッド周辺では、遺物包含層を複数に細分でき、火山灰の二次堆積層を介在した。この一帯からは多数の土器が層的に出土しており、「土器集中区」として取りあげた。当該期の玉作資料も認められたが、その数は極めて少ない。ヒスイ・蛇紋岩・緑色凝灰岩・滑石等の玉作関連資料が認められ、ヒスイ・蛇紋岩は勾玉、緑色凝灰岩は管玉、滑石は白玉に加工される様子が理解できた。一方、ヒスイの原石・剥片が多数出土しているものの、それが二次加工されたものは数点に留まる。石屑や工具である砥石も出土していることから、遺跡内で玉作が行われていることは確かなものの、周辺の笛吹田遺跡や南押上遺跡と比べると、小規模な生産であったといえる。このような状況は18年度報告と同様である。横刃形石器・打製石斧が製作・使用された実態も、18年度報告に続き明らかになった。また、古墳時代前期以前から存在した流路においては木質遺物の遺存状況が良く、建築部材のほか、天秤棒・割物桶・準構造船舷側板等、稀有な出土品も認められた。

B 土器・陶磁器

(1) 中世～近世の陶磁器

中世～近世の土器・陶磁器の記述に当たっては、青磁：[上田1982]、白磁：[森田1982]、15世紀代の青磁・白磁：[水澤2004]、青花：[小野1982]、李朝陶器：[森本・片山2000]、船載天目：[水澤2005a]、瀬戸焼・美濃焼(以下、「瀬戸美濃」とする)：[藤澤2008]、珠洲焼(以下、「珠洲」とする)：[吉岡1994]、越前焼(以下、「越前」とする)：[田中・木村2005]、瓦器：[水澤1999]、越中瀬戸焼(以下、「越中瀬戸」とする)：[宮田1997、相羽2003]、肥前系陶磁器：[大橋1993]、中世土師器：[水澤2005b]の分類・年代観をを参考とした。

実年代については、瀬戸美濃は古瀬戸後期様式Ⅰ期＝1360～80年頃、Ⅱ期＝1380～1420年頃、Ⅲ期＝1420～1440年頃、Ⅳ期古段階＝1440～60年頃、Ⅳ期新段階＝1460～80年頃、大窯Ⅰ期＝1480～1530年頃、大窯Ⅱ期＝1530～60年頃、大窯Ⅲ期＝1560～90年頃、大窯Ⅳ期＝1590～1610年頃である。珠洲は吉岡Ⅱ期＝13世紀前半、Ⅲ期＝13世紀後半、Ⅳ期＝14世紀第Ⅰ四半期～第Ⅲ四半期、Ⅴ期＝14世紀第Ⅳ四半期～15世紀前半、Ⅵ期＝15世紀後半である。肥前系陶磁器はⅠ-1期＝1580年代～1594年、Ⅰ-2期＝1594年～1610年代、Ⅱ期＝1610年代～1650年代、Ⅲ期＝1650年代～1690年代である。それ以外の年代については文中に示した。

a 椀類 (図版 34・117-1~26)

1~5は天目茶椀である。1は船載天目で、灰白色を呈するやや粗い胎土で、ピンホールが多数認められる。器壁は薄く、内外面の括れ部よりも下位に禾目が認められる。2は船載天目と考えられるものの、褐色を呈する粒子の細かい胎土で、石英を含むなど瀬戸美濃窯の製品とも共通する。1・2は、14世紀後半~15世紀前半の所産である。3~5は瀬戸美濃である。3・4は古瀬戸後期様式Ⅲ期に比定される。5は小天目で、古瀬戸後期様式Ⅰ期の所産と考えられる。

6~19は龍泉窯系青磁である。6~10は無文の端反椀である。6と7は軸葉を薄く掛けるタイプで、器表には口クロ痕が明瞭に認められる。8~10は比して軸葉を厚く掛けるタイプである。前者は上田分類D1群、水滸分類の薄軸端反椀である。後者は上田分類D2群、水滸分類の厚軸端反椀である。製作年代は薄軸端反椀が厚軸端反椀に先行し、薄軸端反椀が14世紀初頭~15世紀前半、厚軸端反椀が1430年代~15世紀代である。11~15・17・19は蓮弁文椀である。11・17は弁幅の広いもので楕は入らない。12は外面に単位が不明確な蓮弁文を連続的に配し、内面には割花文を配する椀である。片刃彫りによる施文の幅は広い。13~15・19は直縁篋描蓮弁文椀である。13は蓮弁の単位と天頂の山形文の単位が概ね合致するが、14・15は両者の単位が合致しない。このタイプは15世紀後半以降16世紀前半の所産である。13が14・15に先行する。13・14は被熱している。16は直縁雷文帯椀である。外面口縁部付近に雷文を配し、外面胴部下半と内面に粗い割花文を配する椀である。1440年代以降の所産である。18は端反椀の底部と考えられ、見込み中央に印花文を配する。高台は断面台形を呈し、豊付と高台内は無軸である。

20~24は瀬戸美濃の平椀である。すべて、灰胎が施されている。20~22の口縁部は比較的まっすぐに外に開き、古瀬戸後期様式Ⅱ期の所産である。23・24は口縁部が屈曲し、古瀬戸後期様式Ⅲ期の所産と後出する。25は瀬戸美濃の志野椀で、内外面に長石軸を厚く施す。大窯4期末の所産で、1600~1610年頃に位置付けられる。

26は、中国製の青花椀底部で、内外面に染付けされる。豊付は両端からカットされ、断面三角形となり、やや内側に砂が着着している。口縁が端反となる小野B群椀の底部と考えられ、15世紀前半の所産である。

b 皿類 (図版 34・35・117-27~74)

27~29は龍泉窯系青磁である。27は端反篋描蓮弁文皿である。1440年代~15世紀後半の所産であり、12の椀とセット関係で流通する。28・29は厚軸端反皿である。1430年代~15世紀代の所産であり、8~10の椀とセット関係で流通する。

30・31は李朝陶器である。30は底部片で、全面に薬灰軸を掛ける。見込みと豊付に砂目が認められる。どちらも大粒の砂礫を多く含み、器表にまで現れている。

32~43は白磁である。32は口禿となる白磁Ⅸ類の底部と考えられ、13世紀中頃~14世紀初頭頃の所産である。内面の胴部境を沈線でごく区画する。無高台で、軸は全面に施軸するが、底部には布で拭き取られたような痕跡が認められる。33~36は内湾皿である。いずれも軟質な胎土で、外面の胴部下半は無軸となる。33・34は比較的薄手であり、軸調は光沢を帯びる。35は全面にススが認められ、軸も被熱してカセていることから、灯明皿として使用された可能性が高い。いずれも、15世紀代の所産であるが、33は34~36と比して大型であり、15世紀第Ⅰ四半期を中心とする古手に位置付けられる。37は端反の皿である。灰白色のやや軟質な胎土で、光沢のある緑色を帯びた軸が内面と外面上半に施される。内

面の胴部境は明瞭に区分されている。38・39は扶高台全面施軸皿の底部で、高台を4単位のアーチ状に作出する。4つの突起をほかの皿の内面に乗せて重ね焼きをするため、見込みには同数の4つの重ね焼き痕が認められる。15世紀後半の所産である。41も4つのアーチ状突起を有する扶高台皿であるが、高台付近が無軸であるため、33～36のような内湾皿の底部と考えられる。41は、高台内には「吉」と漆書きされる。40・42・43は底部片である。40は白色に近い硬質で精良な胎土を有し、釉薬も光沢があり斑がない。外面の胴部下半は無軸である。高台は畳付けの外側を斜めにカットしており、丸みを帯びた作りとなる。畳付けの内側半分の平坦な部分には釉薬が付着しており、重ね焼きの痕跡と考えられる。42は軟質な胎土で平高台となるが、41と同等な作りであり、内湾皿の底部と考えられる。高台内には墨書が認められる。43は42よりもやや硬質な胎土を有し、釉薬も白色の精良な色調を示している。高台の作りは42と類似しており、内湾皿の良質な一群の底部と判断される。高台内には全面に黒漆が塗布されている。内湾皿の高台内に墨書や漆字が記される例が多く、特徴的である。

44～46は青花で、小野B群の皿である。高台は内側が直立気味になり、外側は内傾する。畳付には白色の砂礫が付着する。45の高台内には放射状カンナ痕が認められる。いずれも、15世紀後半～16世紀前半の所産である。

47～56は瀬戸美濃である。47～50は、口縁部だけに施軸する緑軸小皿で、47～49は灰軸、50は鉄軸である。前者は軸境が軸垂れをおこさず、直線的になるのに対し、50は軸垂れが顕著である。48・49の器表にはスガが付着し、灯明皿に使用されていたものと考えられる。47は低い高台を作出しているものとも見られ、仏供の可能性もあろう。50は直線的な立ち上がりで、口縁端部を丸く作ることから、ほかの緑軸小皿とは一線を画す。別の器形の口縁部である可能性もある。いずれも、大窯1期の所産と考えられる。18年度調査区でも大窯1期の緑軸小皿を灯明皿として使用しており、20年度調査区においても同様の使用方法を指摘できる。51は端反皿である。全面に灰軸を施す。大窯1期前半の所産である。52・53は丸皿である。全面に灰軸を施すもので、どちらも被熱している。大窯4期の所産である。54は全面に灰軸を施すもので、内底に印花文をスタンプする。55は折縁皿で、全面に灰軸を施す。内面には丸ノミ状工具でソギを入れる。被熱している。大窯4期の所産である。56は卸皿である。口縁部に灰軸を施す。古瀬戸後期様式Ⅳ期古段階の所産である。

57～70は土師器の皿(土師皿)で、いわゆる「かわらけ」である。当遺跡から出土した多様な土師皿は、製作技法の面から、大きく「手づくね成形」のもの、「ロクロ成形」のものに二分される。ここでは、後述する竹花遺跡及び姫御前遺跡18年度調査出土のものも含めて分類を試みた。分類基準は第2表のとおりである。57～62は手づくね成形の土師皿である。57・58は2類である。やや厚手の器

成形技法	分類	口径
	手づくね成形	1類
2類		9～10cm前後
3類		10～11cm前後(浅身)
4類		10～11cm前後(深身)
5類		14～16cm前後
6類		19cm前後
ロクロ成形	1類	6.5cm前後
	2類	7～10cm前後
	3類	11cm前後
	4類	13～17cm前後

第2表 中世土師器皿の分類

壁で、胴部に指頭圧痕を有するが、58の内面はナデ消す。ともにスガが付着しており、灯明皿として使用されたと考えられる。59～61は3類である。59・60は厚手で、61は薄手である。60と61は胴部中央のナデが強くなされ、屈曲が強い。いずれも胴部に指頭圧痕を残すが、59の内面はナデ消されている。60は胴部屈曲部よりも上位の口縁部にかけても指頭圧痕が残る。61にはスガが付着する。62は5類である。薄い器壁で、胴部のナデは弱い。63～70はロクロ成形の土師皿である。いずれも、底部を回転系切り技法によって切り離されている。63は1類である。小型で器壁が立つ断面箱形のタイプである。64～66は2類である。64・66は器壁が薄く、65は厚い。また、64・65は器高が低く、66は器

高が高いことから将来的には細分が可能かもしれない。64・65にはススが付着する。67・68は3類である。胴部がやや内湾しながら立ち上がる器形で、深身である。18年度報告の図版12-75に類似する。69と70は4類である。69にはススが付着する。

土師皿の年代は、ロクロ成形3類(67・68)が14世紀後半で、その他のロクロ成形のものは15世紀代の所産と考えられる。手づくね成形のものは大半が15世紀後半と考えられ、一部器壁の厚いタイプ(59)が16世紀にまで下る可能性がある。土師皿の中にはススが付着し、灯明皿として使用されたと考えられるものが多いが、その中でも手づくね成形2類とロクロ成形2類に多い。両者は口径が7～10cmと小型のタイプであり、大きさが似る。

71・72は肥前系陶器である。71は厚手の溝縁皿で内面と外面上半に灰軸が掛かる。72は鉄軸の掛かる皿である。底部は平高台で、回転糸切り技法によって切り離される。使用痕は認められないが、形態から灯明皿か。72は大橋Ⅱ期、73は大橋Ⅲ期の所産である。

73・74は越中瀬戸である。いずれも、高台は削り出す。73は内外面に鉄軸と灰軸を交互に掛け分ける。74は向付である。内外面に鉄軸を掛け、露胎部を方形に残す。73も遺存部が少ないが、同様のデザインと考えられる。ともに、17世紀中頃の所産と考えられる。

c 鉢・盤(図版36・117-75～81)、小杯(図版36・118-82・83)、茶入(図版36・118-84・85)、蓋(図版36・118-86・87)、香炉(図版36・118-88・89)、瓶・花瓶(図版36・118-90～93)、瓦器(図版36・118-94～98)

75・79・80は龍泉窯系青磁の盤である。75は内面にソギを有する端反の盤である。被熱して、器表は変色している。79・80は底部片で、高台内を輪状に軸割ぎする。80の内底に印花文をスタンプする。

76・77は瀬戸美濃の大型の皿である。76は内外面に灰軸を施し、内側にかえしを有する大皿の口縁部で、内面胴部下半に卸目が付く可能性がある。77は折縁深皿の口縁部片で、内外面に灰軸を施す。被熱し、表面はややかせている。76は古瀬戸後期様式後Ⅳ期古段階、77は古瀬戸後期様式Ⅲ期の所産である。

78・81は肥前系陶器の鉢である。78は内面と口唇部付近は無軸である。口縁形態から、片口鉢になる可能性がある。タタキ成形で、内面には同心円状当て具痕が見られることから、16世紀末～1630年代の所産である。81は大碗形の鉢で、内面と外面上半に灰軸を施す。灰軸の軸調から大橋Ⅱ期の所産と考えられる。

82は白磁の多角杯である。胴部を面取りし、高台部付近は無軸である。高台は平高台である。内面にはやや赤みを帯びた漆が付着し、高台内には判読不明の漆書きが施される。胎土は灰白色で緻密かつ精良なもので、軸調も光沢を帯びている。1460年～15世紀代の所産である。

83は青花で、腰部が張り、口縁端反の小杯である。高台内には黒漆が塗布されている。

84は中国産茶入の底部である。赤灰色の緻密な胎土で、白色の砂礫がわずかに混入する程度の精良な作りである。内外面には鉄軸を施し、底部は回転糸切り技法によって切り離される。これらの諸特徴から、福建省周辺の窯の製品である可能性が高い。

85は瀬戸美濃の灰軸肩衝茶入の肩部片である。細片のため、詳細な年代は絞り込めないが、古瀬戸後期様式Ⅰ～Ⅲ期の所産であろうか。

86は瀬戸美濃の合子の蓋である。上面に灰軸を施し、肩部と組み合う凸部の底部は回転糸切り技法によって切り離される。古瀬戸後期様式Ⅲ～Ⅳ期古段階に位置付けられる。

87は青磁の蓋である。返りの部分は、無軸である。上面には摘みを付し、上面観が花卉状に見えるように細工されている。

88・89は瀬戸美濃の香炉である。ともに鉄軸が施されている。88の口唇部は軸が剝離している。88は袴腰香炉が古瀬戸後期様式Ⅳ期新段階、89は筒形香炉が大窯段階の口縁部付近である。

90・91・93は瀬戸美濃である。90は花瓶または燭台の脚部で、外面に灰軸が施される。91は瓶子の胴部片があるが、内面は無軸で、外面灰軸が施される。外面には横位沈線とともに草花文が刻まれる。梅瓶形を呈する瓶子Ⅱ類の一部と考えられる。93は口縁がラッパ形に開く花瓶Ⅲ類の頸部と考えられる。外面に灰軸を施す。いずれも、細片のため詳細な年代は与えられないが古瀬戸後期様式に位置付けられるものと考えられ、90は後Ⅲ～Ⅳ期古段階に、91は後Ⅰ期の所産と考えられる。

92は珠洲の水注と考えられる胴部片である。胴部から肩部への変換点(最大径)と肩部上位に篦描波状文を施す。

94～98は瓦器である。94は筒形の香炉または火入の口縁部で、外面に縦長の三重菱形紋を連続的にスタンプする。95は口縁が直立する円形浅鉢Ⅳ類で、外面には二重の突帯の間に雷紋を連続的に巡らす。96は口縁部が内湾する円形浅鉢Ⅲ類で、外面に二重突帯の間に乳状突起を連続的に巡らす。97は風炉の口縁部と考えられ、口縁最上端に突帯を巡らせ、その下位を縦位の櫛歯状工具で施文する。98はやや外に開きながらまっすぐに立ち上がる口縁形態で、円形浅鉢Ⅳ類に分類される。施文方法は96と共通する。いずれも、胎土の混入物などは共通するもの、94が軟質で、97がやや硬質である。15世紀～16世紀の所産であろう。

d 壺・甕類 (図版36・118～99～110)

99～105は珠洲の甕である。99を除き胴部には斜位の印目が認められ、タタキ成形であることが分かる。口径は30～40cmと50～60cmに二分され、前者は中甕(99～101)、後者は大甕(102～105)に該当する。101の頸部付近には寛書きが認められ、窯印であろうか。口縁形態から、100～103が吉岡Ⅳ期、104・105が吉岡Ⅴ期に比定される。99は口縁端部が垂下し、やや古い様相を示す。吉岡Ⅱ～Ⅳ期の所産か。

106は越前の大甕である。外反する口縁には、口縁部下段に突帯を巡らせ、内面には太い沈線が巡る。木村編年のⅢ-3期で15世紀前半に比定される。

107～110は珠洲の壺である。107はタタキ成形、108～110はロク口成形である。109は小型の壺である。110は壺に分類したが、脚付きの瓶の可能性もある。内面は調整が粗い。107は吉岡Ⅲ期、108・109は吉岡Ⅴ期に比定される。

e 片口鉢・播鉢類 (図版37・118～111～128)

111～126は珠洲である。111～114は吉岡Ⅳ期、115～123は吉岡Ⅴ期、124～126は吉岡Ⅵ期に比定される。123は小型の片口鉢である。118・121・124・125は口縁端部に波状文を有する。124・126は軟質で、作行きが粗雑である。

127は越前である。内面に太い沈線が一条巡り、節目はその下位に配される。沈線から上位の平坦面は平滑になっており、研削具として使用された可能性がある。Ⅴ-3期に比定され、16世紀末頃の所産である。

128は肥前系陶器である。内側に突出する口縁部を有する。口縁部付近にのみ鉄軸を施す。大草野窯期に比定され、大橋Ⅱ期の中でも1620～30年代に位置付けられる。

f 加工円盤 (図版 37・118 - 129 - 138)

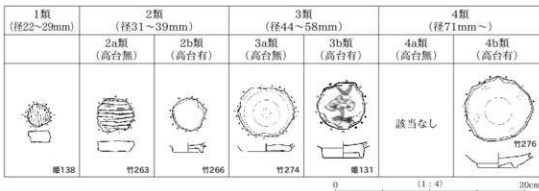
129～138 は土器・陶磁器類の破片を素材とし、側縁に連続的な剥離を施し、平面形を略円形に仕上げる、いわゆる「加工円盤」である。直径、及び高台の有無で分類した(第3表・第13図)。なお、剥離面の打点は、裏から表の場合は「▼」、表から裏の場合は「▽」で示した。

直径	高台	分類
22～29mm	-	1類
31～39mm	無	2a類
	有	2b類
44～58mm	無	3a類
	有	3b類
71mm～	無	4a類
	有	4b類

第3表 加工円盤の分類

138 は珠洲のタタキ成形の甕を素材とするもので1類である。135～137 は2a類である。素材はそれぞれ異なり、135が越前の壺または甕の胴部片、136は青白磁の皿底部片、137は138と同様に珠洲のタタキ成形の甕が用いられる。129～131・133・134は3類である。2類と同様に素材は統一的不是な。133は瀬戸美濃の灰軸が施された皿底部を利用して、平底で3a類に分類できる。図の下方の側縁に磨った痕跡が認められ、使用方法の一端を示す可能性がある。しかしながら、加工円盤の大多数は、剥離が明瞭に残されたままである。129～131・134も椀皿類の底部片であるが、高台を有する。129は白磁皿D群、130は青磁椀、131は漳州窯系青花の椀、134は瀬戸美濃の灰軸を施す皿からの転用である。132は李朝陶器の皿底部を素材とするもので、4b類である。

素材となる土器・陶磁器類には規則性を見いだせない。珠洲や越前など当遺跡から大量に出土している身近な製品から転用する場合もあれば、稀少な漳州窯系青花や青白磁を使用する場合もある。

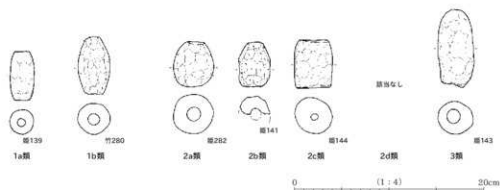


第13図 加工円盤分類図 (■=姫御前遺跡、竹=竹花遺跡)

g 土鍾・陶鍾 (図版 37・118 - 139 - 146)

土鍾及び陶鍾は42点出土しており、そのうち完形に近いもの及び特徴的なものを図化した。

139～144は管状土鍾である。土鍾は形状及び調整方法から分類した(第14図)。139・140・142は1類である。1類は長さが50～60mm程度の土鍾で、139は胴部が張らず、細身のもので1a類である。対して、140・142は胴部中央付近で直径35mm程度の最大径を測るもので1b類である。141・144は1類に対して短胴で、45～50mmほどの長さを測り、2類としたものである。141はほかの土鍾が手で握って作成した際の指頭圧痕を明瞭に残すのに対し、全面にヘラケズリを施すことから2b類としたものである。144は両端部に幅広の面を持ち、孔径が小さく、胴部の張らない形状を呈するもので2c類とした。地山(Ⅴ層)直上のⅢ層からの出土であり、Ⅱb層を中心とするほかの土鍾と形状及び胎土が異なることから、古墳時代の所産である可能性が考えられる。143は80mmほどの長さを測る長胴のもので3類である。両端の面は未調整で、歪な形状を呈する。145は越中瀬戸の陶鍾である。作陶の際の指頭圧痕を残すものの、その上から一部鉄軸を施す。寺地遺跡[佐藤ら2002]など、糸魚川地域の近世遺



第14図 管状土鍾分類図(姫=姫御前遺跡、竹=竹花遺跡)

跡で散見されるが、糸魚川以外の県内では出土例がない。当遺跡では、この1点のみの出土である。146は扁球土鍾であるが、ほかの管状土鍾とは形状を異にする。扁平で、平面円形を呈し、中央に円孔を有する。円孔の上方には溝状の切れ込みが彫られ糸掛かりとする。焼成は極めて良好で、硬質な焼き上がりである。

なお、管状土鍾1～3類ともに最大径25～50mmを測ることから、[関1990]の大型または中間型に属し、細型は出土していない。また、2c類を除き土鍾の大半がⅡb層及びⅡa層からの出土であることから中世から近世初頭の所産である可能性が高い。

(2) 古代の土器 (図版37・119～147・148)

147は須恵器の無台杯である。内外面にススが付着し、特に内面には厚く付着している。産地は不明であるが、[春日1999]のⅢ-1期に比定され、9世紀前半に位置付けられる。出土層位はⅡb層中でも、深部からの出土である。148は製塩土器である。輪積み法によって作出される。外面には指頭圧痕が認められ、接合部は丁寧に調整しない。Ⅱb層中からの出土であるが、新潟県においては中世に入ると土器を用いての製塩は行わないとの見解[高橋1999]により、古代に含めた。

(3) 弥生時代～古墳時代の土器 (図版38～45・119～125・149～349)

a 土器の分類

弥生時代～古墳時代の土器の分類は、[滝沢2005]に基づくこととした。定点観察の蓄積が重要と判断し、分類名称は本報告で独自に付かず、滝沢分類を踏襲することとした。器種は、甕・壺・鉢・高杯・器台・蓋があり、それぞれ器形により分類した。なお、姫御前遺跡と約140m離れた竹花遺跡では同時期の土器が出土しており、同一の分類を使用した(第15・16図)。

【甕】

出土量が最も多い器種であるが破片が多く、全体の器形を復元できる資料は少ない。部位のうち、最も経年変化が著しいと口縁部片を中心に図化した。なお、当遺跡出土の甕には法量による差異が明らかに認められ、細分が可能である。細分にあたっては、胎内市西川内南遺跡の分析[野水^{注5)}2005]でおこなわれているように、器高及び胴部最大径に基づく法量分布による細分が有効と考えられるが、当遺跡においては分析に耐えられる資料が少ないため、細分しなかった。

甕A類 有段口縁で、口縁外面に擬凹縁を有する甕。

甕B類 有段口縁で、口縁外面が無文の甕。

甕C類 口縁形態が「く」字状、あるいは「コ」字状を呈する甕。口縁端部の形状から3分類できる。

- C1 類 口縁部が外反した後、口縁端部が上方に直立に近い状態で伸びるもの。いわゆる「付加状口縁」の甕。
- C2 類 口縁端部を面取りしたもの。
- C3 類 口縁端部が丸いもの。
- 甕E類 受口状口縁を有する甕。近江系。口縁上端部は面を持つ。
- 甕J類 台付き甕。

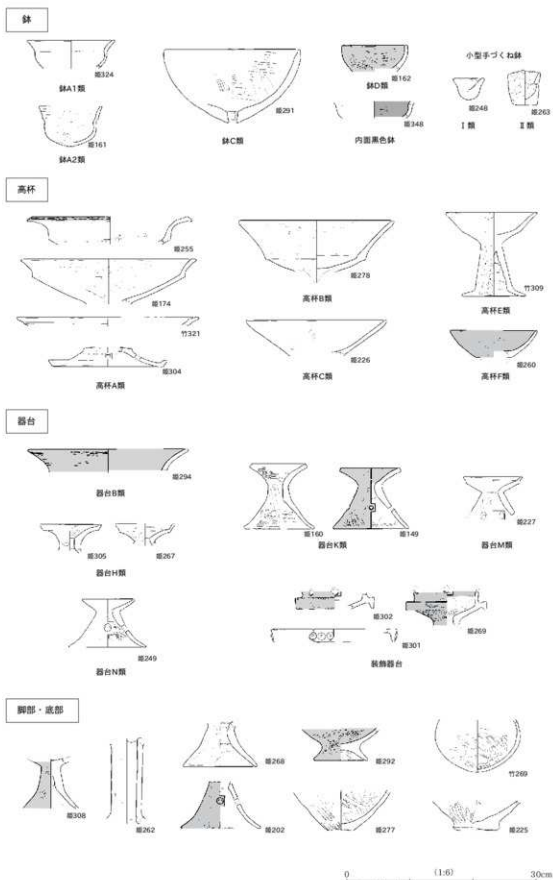
【甕】

甕ほどの出土量はないが、バリエーションが豊富である。

- 壺A類 無頸壺。
- 壺G類 小型の増である。畿内系。
- 壺H類 やや内湾する細い口頸部と、球形ないしは下膨れの胴部からなる。いわゆる東海系「ひさご壺」及びそれを模したのもの。
- 壺I類 大型で広口の壺。口縁部は外反するものが多い。口縁部は長いもの（I-I類、竹花285）と短いもの（I-II類、姫御前II 191）がある。
- 壺K類 細口で有段口縁を呈し、口縁部下段が長いもの。
- 壺L類 細口で有段口縁を呈し、口縁部下段が短いもの。口縁部に擬凹線が施される場合（姫御前II 296）がある。大型のものと小型のものがある。
- 壺M類 頸部が直立し、口縁部が大きく外反する畿内系二重口縁壺である。口縁有段部に刺突文を巡らせるもの（姫御前II 152）がある。
- 壺N類 口縁が二重に外反するもの。畿内系二重口縁壺。
- 壺O類 口縁が内湾するもの。東海系二重口縁壺。
- 壺S類 頸部が短く、直口する壺である。厳密には口縁部はやや内傾するもの（竹花315）や外傾するもの（姫御前II 338・竹花314）等、バリエーションがある。また、火に掛けられているもの（姫御前II 338）もある。
- 壺ZⅦ類 球胴・丸底で、若干内湾するやや長い口頸部を有する壺。県北で近年多く出土例が報告されてきている。

【鉢】

- 鉢A類 有段口縁の鉢。鉢と認識できうる個体の中では最多の出土量である。脚の付くものと付かないものが知られているが、当遺跡において有脚のタイプは識別できない。
- A1 類 器高に比して身が浅いもの（姫御前II 324）。現状では、新潟シンボ編年8期以降に出現するといわれる〔滝沢2005〕の鉢I類との区分に課題を残す。
- A2 類 器高に比して身が深いもの。
- 鉢C類 底部有孔鉢。〔滝沢2005〕では全体の器形で二分し、「身が浅く、口縁部の立ち上がりは内湾するもの」をCⅡ類とした。
- 鉢D類 椀形の鉢で、有脚のものと無脚のものが知られている。
- 小型手づくね鉢 〔滝沢2005〕には設定されていないもので、本稿で新たに設定した分類である。手づくね成形による小型の鉢で、器形によって2分できる。
- I 類 尖底のもの。内外に指頭圧痕が認められる。



第16図 土器の分類(2) (炬=炬御前遺跡、竹=竹花遺跡)

Ⅱ 類 平底のもの。指押さえによる成形（姫御前Ⅱ 283）と器表をヘラナデするもの（姫御前Ⅱ 329）がある。

内面黒色鉢 分析対象の相違から〔滝沢 2005〕には設定されていない分類である。内面を黒色処理・ミガキ調整した鉢で、古墳後期の所産である。糸魚川地域では「田伏Ⅱ式」と呼称される。

【高杯】

高杯 A 類 口縁部が有段で、外反または外傾して端部に至るもの。

高杯 B 類 杯部が有段で、鉢形のもの。口縁部は外反または外傾する。

高杯 C 類 内湾する杯部を有するもの。東海系高杯。

高杯 E 類 畿内系屈折脚を有する高杯。

高杯 F 類 小型高杯。〔滝沢 2005〕では口縁部の形状で二分し、口縁部が内湾するものを F-Ⅱ 類とした。

【器台】

装飾器台の一部（姫御前Ⅱ 301）と器台 B 類は大型器台、装飾器台の一部（姫御前Ⅱ 269・302）と器台 H 類～N 類は小型器台である。

装飾器台 装飾された北陸系の器台である。

器台 B 類 受部と裾部が有段のもの。擬凹線が施されるもの（姫御前Ⅱ 294）は B-Ⅱ 類とされ、口縁部と裾部に擬凹線が施されることが多い。

器台 H 類 胴部から大きく外反して、有段の口縁部に至る小型器台である。北陸型と呼称される。

器台 K 類 受部が外反する小型器台。

器台 M 類 受部が直線的に外へ開き、上端でわずかに摘み上げられた小型器台。

器台 N 類 受部が内湾して立ち上がる小型器台。

【蓋】

蓋と考えられる多種多様な製品を含む。摘みや円孔の有無などバリエーションがある。

b 各 説

149～170 は平地建物 SI216 関連遺構から出土したものである。149 は建物プラン内の壁溝付近（調査時に認識できなかったが位置関係から覆土中であつたと判断される）から出土したもので、器台 K 類である。外面と内面口縁部付近を赤彩する。150～155 は西側の周溝 SD215 から出土したものである。150・152 は壺である。150 は壺 K 類で、内外面をミガキ調整し、赤彩する。152 は畿内系二重口縁壺で、壺 M 類である。頸部が細く、有段部に刻目を連続的に還らせる。151・154・155 は甕である。151 が甕 C2 類、154・155 が甕 B 類である。154・155 はともに有段部の稜が削れてきており、新相に位置付けられる。153 は鉢 A 類で、口縁部はやや内湾する。内外面をミガキ調整し、ほぼ全面が赤彩される。156・157 は SD215 の東側に隣接する SD214 から出土したものである。156 は甕 C3 類でナデが強く、頸部に面を持つ。157 は甕 C2 類である。内外面をハケメ調整する。158～160 は北西側の周溝 SD223 から出土したもので、158 が甕 C2 類である。内外面をハケメ調整する。159 が高杯脚部で、外面が赤彩される。160 は器台 K 類であるが、149 と比較すると頸部が長い。赤彩はされていないが、外面をミガキ調整、内面裾部をハケメ調整する点、口縁端部に面を持つ点など共通点が多い。161・162 は北東部の周溝 SD204 から出土したものである。161 が鉢 A2 類である。精良な胎土で、ミガキも丁寧である。有段が明瞭であり、やや古相に位置付けられる。162 は碗形の受け部を持つ鉢 D 類である。内外面がミ

ガキ調整され、赤彩される。163は南東部の周溝SX211から出土したもので、口縁部が内湾する器台N類である。器表は丁寧にミガキ調整され、赤彩される。164～168は北側の周溝SD201から出土したものである。164が壺L類、165が甕C2類、166が器台脚部である。167は高杯B類であるが、内面に明瞭な稜を有することから古相に位置付けられる。168はやや内湾する大型の受け部を持つ東海系高杯で、高杯D類である。169・170はSI216内の土坑SK210から出土したものである。169が甕C3類で、170が壺または甕の底部である。底部はハの字状に張り、台状を呈している。底部外面は横位にヘラナデを行っている。以上、SI216関連遺構から出土した149～170は、新潟シンボ編年6期に位置付けられる一括性の高い資料と考えられる。

171・172は有段で内湾する口縁を有する、壺O類である。171は杭列SA429(P404)から出土したもので、172はSI402の炉から出土したものである。172の外面はミガキ調整されるが、171は風化しており、調整が不明瞭である。173はSK229から出土したもので、甕B類である。頸部を細かなハケメで調整する。174～176はSX284から出土したもので、174が高杯A類、175が壺A類、176が甕E類である。174は精良な胎土で、焼成が良好な大型の高杯で、内外面をミガキ調整する。175は無頸壺で、外面はミガキ調整する。174と共通した胎土である。176は近江系の甕で、受け口状の口縁を有する。口縁外面と肩部には斜位の刺突文が巡り、更に肩部に沈線が巡る。調整は内外面ともにハケメ調整される。174が古相で1期まで遡る可能性があるが、新潟シンボ編年2期に位置付けられることから、SX284を弥生時代後期の遺物群といえる。177～179はSD233から出土したものである。177・178は甕C3類で端部は丸みを持つ。新潟シンボ編年の6期以降に多く見られる。179は有稜の高杯A類である。177・178より古手で、新潟シンボ編年4～5期頃に位置付けられようか。180～182はSK208から出土したもので、180が甕C2類で、181は器台脚部、182は東海系ひさぎ壺である壺H類である。新潟シンボ編年6～7期頃の所産と考えられる。183は掘立柱建物SB370を構成するP348から出土したもので、甕C2類の口縁部片である。口縁部にはススが厚く付着している。184～187はSK705から出土したものである。184は甕C3類で、内外面をハケメ調整する。185は甕C1類で、外面はハケメ調整、内面はヘラナデである。186は甕C2類で頸部内面がハケメ調整されている。187は甕B類である。内面の頸部上面を横位のヘラナデを行う。いずれも、新潟シンボ編年5～6期に含まれると考えられるが、185は器形が古手の付加状口縁で、弥生後期まで遡る可能性がある。188はSD375から出土したもので、有段鉢形の杯部をもつ高杯B類である。調整は不明瞭であるが、内外面を赤彩する。189はSD522から出土したもので、甕B類である。有段部が退化しており、新潟シンボ編年5～6期に位置付けられる。190はSX554から出土したもので、甕C1類である。器形から弥生後期に位置付けられる。191はSD552から出土したもので、広口の壺I類である。新潟シンボ編年の5～7期に含まれる。

192はSD207から出土したもので、壺または甕の底部である。厚手で、内面にはハケメ調整が認められる。193・194は、SD300から出土したものである。193は甕C2類で外面をハケメ調整する。194は有段口縁の甕B類であるが、有稜部がますます退化した特徴は新相を示し、193・194ともに新潟シンボ編年7期頃に位置付けられる。

195～214は、SD209から出土したものである。195・196は包含層直下の1層から出土したものである。195は高杯B類、196は甕B類である。194に比べると稜が明瞭で、新潟シンボ編年6期に位置付けられよう。197～214は最下層である3層からの出土である。197～199は鉢A2類である。有段口縁を持つ小型の鉢であるが、有稜部が崩れてきており、新潟シンボ編年6期頃に位置付けられる。

200 は壺 N II 類で、内外面をハケメ調整している。201・202 は器台の脚部である。202 は円形の透かしを持ち、赤彩される。203 は有孔鉢である鉢 C II 類である。204・205 は壺または甕の底部である。206 は小型の甕であるが、口縁部が「く」字状を呈しており甕 C3 類である。207 も小型の甕であるが、口縁端部に面を持つことから、甕 C2 類に分類される。208～211 は甕 C1 類、212 は甕 C2 類である。214 は大型の壺の胴部である。外面をハケメ調整し、内面は頸部を横位のハケメ調整、胴部をヘラナデする。SD209 は、甕では C 類が卓越すること、196 や 197～199 の形状などから新潟シンボ編年 6 期を中心とする時期と見られる。

215～244 は土器集中区からの出土である。26B・27B グリッドの一部は、古墳時代前期の遺物包含層であるⅢ層をⅢ a～Ⅲ d 層に分層した。火山灰の再堆積層(Ⅲ c 層)を挟み上位のⅢ a・Ⅲ b 層(遺物はⅢ層として記述して取り上げた)とⅢ d 層に大別できる。この範囲では土器がまとまって出土したこと、層位的に遺物を取り上げることができたことから、Ⅲ a 層～Ⅲ b 層とⅢ d 層を分けて掲載する。

215～225 はⅢ a 層～Ⅲ b 層からの出土である。215 は有段高杯の高杯 A 類で有段部には刻目が連続的に巡る。調整方法は明瞭でなく、ハケメが薄く見える。内外面は赤彩されている。216 は蓋の摘み部分である。外面は赤彩され、天井は凹む。天井が凹む形状は新潟シンボ編年 5 期に見られる。217 は器台 K 類である。口縁端部には面を持ち、受け部外面はミガキ調整される。218～220 は器台の脚部である。218・219 は外面ミガキ調整され、赤彩される。218 には円形の透かしを持つ。220 は粗い単位のミガキがなされるが、ヘラナデとすべきかもしれない。221 と 222、224 は甕で、221 は甕 C2 類、222 は甕 B 類である。222 の縁は崩れてきている。224 は甕 C1 類で、薄手の口頸部を持つ大型の甕である。223 は台付き壺または鉢の脚部で、外面をミガキ調整する。225 は壺または甕の底部である。外面の底部付近は粗いヘラナデを横位に行う。

226～244 はⅢ d 層からの出土である。先述のⅢ a 層～Ⅲ b 層(215～244)より下位、かつテフラの再堆積層よりも下位から出土したものである。226 は大型の杯部を有する東海系の高杯で、高杯 C 類である。227 は外反する受け部と上方に引き出された口縁部を持つ、器台 M 類である。円形の透かしを有し、内外面をミガキ調整する。228 は壺 E 類である。内外面を赤彩する。229 は壺または鉢の脚部である。頸部外面を縦位にヘラナデする。230 は器台の脚部で、円形の透かしを持つ。外面はミガキ調整するが、下地のハケメが薄く残る。231 は厚手の鉢 A I 2 類である。232～234・236～244 は甕である。232～234・236・238・239 は有段無文口縁の甕 B 類である。縁はやや崩れてきているものの、縁と認識することができ、比較的古相に位置付けられる。また、239 は受け口状口縁を呈するものの口唇部に面を持たず丸みを帯びていることから、近江系甕の影響を受けたないしは模倣した甕 B 類と判断した。237・243 は甕 C1 類である。口縁部は上方に長く伸びる。242・244 は口縁端部に面を持つ甕 C2 類であり、内外面ともにハケメ調整する。240 と 241 は甕 C3 類である。240 は口縁の下端が膨らみ古相を示す。235 は精良な胎土を有する二重口縁壺の壺 N I 類である。

Ⅲ d 層とⅢ a～Ⅲ b 層から出土した土器群を比較すると、明瞭な相違を認識できないものの、Ⅲ d 層の方が概して古手の様相を示す。このことはⅢ d 層がⅢ a～Ⅲ b 層の下位に位置することから矛盾しない。Ⅲ d 層は上記の土器の特徴から新潟シンボ編年 5 期を中心とする時期と判断され、Ⅲ a～Ⅲ b 層は 6 期頃と考えられた。ただし、両者の土器様相に明瞭な時期差を見いだすだけの特徴を有さないことから、両者は比較的近接した時期に埋没した可能性が高いといえる。

245～278 は SD520 から出土したものである。245～248 は遺構内に落ち込んでいる遺物包含層(Ⅲ層)

中から出土したものである。245は壺Ⅰ類で、口縁端部に面を持ち、内外面をハケメ調整する。246は甕A類で口縁に擬凹線を有し、弥生後期の資料と考えられる。247は甕CⅠ類である。胎土や調整の共通性から同一個体と判断し、口縁から胴部中央付近の破片と、底部の破片を図上で合成した。やや内湾する口縁部を有し、胴部中央付近に最大径がある。底部は平底である。胴部外面は縦位、頸部内面は横位のハケメ調整を施すが、胴部はヘラケズリである。248は小型手づくね鉢である。尖底で、指押さえて製作される。

249～256は1層からの出土である。249は内湾する受け部を持つ器台N類で、円形の透かしを有する。外面は風化し、調整は明瞭ではないが、一部にミガキ調整が見られる。内面はハケメ調整である。250は畿内系屈折脚を有する高杯E類である。外面は縦位のミガキである。251は器台脚部である。外面はミガキ調整で、内面は上位をミガキ、裾部を横位のハケメ調整を行う。252は小型の甕B類である。外面は粗いハケメで、内面はヘラナデを施す。253は甕C3類であるが、頸部の括れが固く、胴部の張りも少ない。概して新相を呈し、新潟シンボ編年8期以降の所産であろうか。254は壺または甕の底部である。外面は粗いハケメで、252に似る。内面は横位に指ナデされており、器表に凹凸が激しい。255は大型で有稜の高杯A類である。弥生時代後期に位置付けられる。256は甕C2類である。口縁端部を面取りするが、面の中央が凹み平坦ではない。胴部中央付近やや下位で最大径を迎え、ほぼ尖底となる。外面は斜位のハケメを施し、内面は粗いハケメを横位に施す。新潟シンボ編年5～6期に位置付けられ、畿内系屈折脚高杯(250)等の遺物の年代と整合しない。

257は2層からの出土で、鉢AⅡ類である。脚付きの有稜口縁鉢の胴部と考えられる。外面はミガキ調整され、赤彩される。内面はナデ程度の簡易な調整で、赤彩はされていない。

258～277は3層からの出土である。258は東海系ひさぎ壺である壺H類である。内外面をミガキ調整するが、外面は縦位に、内面は横位に研磨する。外面と内面口縁部付近に赤彩する。259は桃形杯部を有する高杯B類で、内外面をミガキ調整及び赤彩する。260は東海系小型高杯と考えられる高杯F類である。内外面をミガキ調整及び赤彩する。高杯F類は時期が下るにつれ、大型化していく。本品はF類のなかでも大型であることから、新潟シンボ編年6～8期に位置付けられる。

261・262は畿内系高杯の棒状脚である。中空で、外面は縦位のミガキ調整を行う。新潟シンボ編年9期以降と考えられる。263は小型手づくね鉢である。口縁部を内側に折り返し、内外面は指で押さえて調整する。264・265は壺GⅠ類である。外面を細かいヘラナデ、内面は粗いヘラナデを施す。266は形状から蓋と考えられるが、天頂部が空いており、疑問が残る。また、摘みと考えられる部分に1対の円孔が穿たれているが、その用途も判然としない。267～270・272は器台である。267は北陸系の器台H類で、内外面にミガキを施す。268は器台の脚部で、外面に横位の細かいミガキを施す。269は外面を赤彩した装飾器台である。鈎を持ち、水滴形と推定される透かしを持つ。鈎の下方はヘラケズリされ、内面は横位にヘラナデを加える。270は高杯の脚部で円形の透かしを有する。外面はミガキ調整され赤彩される。内面はハケメ調整である。272は器台の脚部であるが、外面は細かなミガキ調整を行う。271・273～276は甕である。271は甕C3類で、内外面をハケメ調整する。273は台付きの甕J類である。外面は胴部が風化し判然としないものの、頸部と台部はミガキ調整が見られる。内面はハケメ調整である。274・275は甕C3類であるが、274は大型の甕、275は小型の甕である。274は頸部の長いプロポジションを呈し、新相に位置付けられる。外面はハケメ調整、内面は横位のヘラナデと一部ハケメ調整する。275は外面を縦位、内面を斜位のヘラナデを行う。276は甕C2類である。外面をハケメ、内面をヘラナデにより調整する。277は壺または甕の底部である。外面を細かなハケメ、内面を細かな

ヘラナデにより調整する。278は最下層の4層からの出土で、高杯B類である。上層である3層と比較すると内面の稜が明瞭であり、古相を示す。内外面にミガキを施すが、下地のハケメが消えていない。

SD520は当遺跡の主体である新潟シンボ編年5～6期と共通する遺物を多く含むが、畿内系棒状脚や、壺G類、畿内系屈折脚高杯など新しい要素も見られ、8～9期の遺構と判断される。

279～293はSR730からの出土である。279～291はⅢ上層からの出土で、279は壺NまたはM類の口縁部である。内外面に横位のミガキを施す。280・281は器台の脚部である。280は内外面にハケメ調整するが、281は外面をミガキ調整し、赤彩する。282は畿内系屈折脚である高杯E類の脚部と考えられる。外面をミガキ調整し、赤彩する。283は壺の胴部である。細頸で、胴部は球胴を呈する。外面をミガキ調整し、赤彩する。284は蓋である。天頂部は凹まない。外面をミガキ調整する。285は直線的に開く長い口縁部を有する壺I類である。内外面にハケメ調整する。286は器種不明である。厚手で大型の製品の肩部と考えられ、内外面にハケメ調整する。ハケメはほかの壺と異なり、単位の細いハケが用いられる。肩部には直径3cm程の円孔が穿たれている。288～290は壺である。287・289・290は壺C3類であり、287は小型である。いずれも、内外面にハケメ調整を施す。288は壺C2類で、内外面にハケメ調整を施す。291は鉢CⅡ類である。いわゆる有孔鉢である。内外面を粗いハケメで調整する。体部はやや内湾しながら立ち上がり、口縁部は細くなる。

292はⅢ下層からの出土で、台付き壺または鉢の脚部である。内外面をミガキ調整し、赤彩する。293はⅣ上層からの出土で、壺C3類である。内外面をハケメ調整する。これらは、原位置を保っていない可能性、または把握できなかった遺構からの出土である可能性もある。

294～297はSR202の最下層からの出土である。294は口縁部に沈線を持つもので、器台BⅡ類またはCⅠ類である。内外面に赤彩する。295は壺ZⅦ類である。薄手で、口縁部はやや内湾する。296は高杯の脚部で弥生時代後期のものである。297は壺C3類で、内外面をハケメ調整する。

298～336は土器集中区を除く遺物包含層Ⅲ層からの出土である。298は壺N類で、内面をミガキ調整する。外面は赤彩する。299は器種不明である。内外面をミガキ調整し、口縁部に向かい内湾する。300は有段高杯の高杯A類で、301・302は装飾器台である。301は鈎の部分と判断され、外面に円形浮文を貼り付ける。302は透かしを持ち、鈎部の上下縁に連続刻目を有するものである。外面は赤彩される。303は器台M類で、内外面をミガキ調整し赤彩する。304は高杯A類の脚部である。305・307は器台H類であるが、有段部の長さが異なる。また、305は赤彩されないが、207は赤彩される。いずれも、内外面をミガキ調整する。306・308～310は高杯脚部である。311は器種不明の製品で、大型の製品の一部と考えられ、図の下方で稜を持つ。中央付近には径2.5cm程の円形の孔が穿たれる。外面は有段部から斜め上方にハケメ調整し、内面は横位にハケメ調整する。312～317・323・325は壺である。312は壺K類、313は壺LⅡ類、314・315は壺I類、316はNⅡ類、317は頸部に棒状浮文を持つ頸部、323は壺NⅡ類、325は壺H類である。318～322は壺で、すべて壺C2類である。324・326は鉢で、ともに鉢AⅠ類である。326は内外面ともにミガキ調整され、赤彩される。327は台付き壺または鉢の脚部である。328～331は小型手づくね鉢である。335は壺GⅠ類である。332～334は蓋の摘み部であるが、天頂部が平坦なもの(332)と凹むもの(333・334)があるが前者が後者に後出する。336は壺または壺の底部である。

337・338はⅢc層からの出土である。337は壺C2類、338は壺S類である。338の外面はススが付着する。339～346はⅢd層からの出土である。339は蓋で天頂部が凹む。340は壺C3類、341は

壺H類、342・343は器台脚部、344・345は壺C2類、346は壺C3類である。347はIV層からの出土で、壺あるいは壺の底部である。外面の底部付近は縦位の粗いヘラナデ調整を行う。

348と349は遺物包含層IIb層からの出土である。IIb層は中世後期の遺物包含層であることから、混入品と考えられる。348は内面黒色の鉢で、古墳時代後期である。349は水注である。古墳時代と考えたが、縄文後期・晩期の所産である可能性もある。

C 石製品・石器

(1) 中近世の石製品 (図版46・125～350～354)

中世の石製品は、五輪塔(350～353)、温石(354)、砥石片が認められた。

五輪塔は、角閃石安山岩製の空風輪・火輪・水輪・地輪が認められた。空風輪(350)は、空輪部の高さが12.6cm、風輪部が8.4cmであり、高さの比は1.5:1である。空輪の最大幅は高さのほぼ中間にあり、丸みを帯びる。風輪は半球形に近い。これらの特徴は、鎌倉期～南北朝に位置付けられる[立教大学博物館学講座1967]。火輪(351)は、屋根の高さに比べて軒が厚く、四隅の軒の上部が反っており厚みがある。これらの特徴は、鎌倉期～南北朝に位置付けられる[立教大学博物館学講座1967]。水輪(352)は、上辺部と下辺部がわずかに凹み、正面には月輪と大日如来を表す種字「バン」の陰刻が認められる。最大幅が高さの中間より若干(約6%)上部に位置する特徴は、南北朝～室町期に位置付けられる[立教大学博物館学講座1967]。地輪(353)は、上下面の調整の状態に相違があり、調整が雑な側を底面とした。しかし、底面とした側には円形状のわずかな凹みが認められ、水輪を受ける部分である可能性もある。これら五輪塔の形態的特徴からは、南北朝(14世紀)の前後に位置付けられるが、伴う陶磁器の年代観を考慮すれば、これよりやや新しい15世紀代に位置付けられる可能性もある。

なお、五輪塔のうち空風輪・火輪・水輪は、19BCグリッド周辺の3mの範囲からまとまって出土した。まとまって出土した350～352は、石質も類似しており、組み合わせ関係にあると考えられる。これらの出土地点に近接するSK200からは、銭貨(寛永通寶、図版52・130～525)と漆器の断片が出土しており、墓坑の可能性が高い。中世～近世にかけて、周辺に墓域が形成された可能性が考えられよう。

温石(354)は、破片が1点認められたのみである。石質は滑石である。本来の形状を推測できる遺存率ではないが、2cmほどの厚さは竹花遺跡の温石(図版84・155～324)に近い値である。

(2) 古墳時代の石製品 (図版46～48・125～127～355～414)

20年度調査区においては、玉作関連資料が310点出土した(第4表)。18年度調査区と比べると滑石の利用が少なく、緑色凝灰岩・ヒスイ・蛇紋岩の多用が特徴的である。出土した土器の年代観は、18年度調査区は前期後半、20年度調査区は前期前半が主体である。緑色凝灰岩の多用が弥生時代以来認められる一方、滑石の多用は古墳時代中期以降に特徴的であり、前期前半と後半で、玉作の石材利用に変化が生じた可能性が高い。

製作関連資料は、勾玉・白玉・管玉の成品・未成品がある。勾玉にはヒスイ・蛇紋岩、白玉には滑石、管玉には緑色凝灰岩が特徴的に用いられる。成品と判断できるものは滑石製の勾玉(355)と白玉(364～367)のみで、ほかは明らかな未成品である。しかし、緑色凝灰岩において石核・剥片・砕片が認められるほかは、製作時の残滓が認められない。すなわち、未成品が存在するものの、調査区内で玉作が盛んに行われたとは考えにくい。

なお、玉作関連資料は、土坑・溝・遺物包含層のほか、ピット上位から特徴的に出土した。SI216の主柱穴P245からはヒスイ原石(398)、P246からは勾玉未成品(361・362)が出土した。いずれも腐蝕した柱根上面の上位からの出土であり(図版93)、建物構築時に埋納されたものとは考えられない。建物の廃絶後に、偶発的に覆土中に混入した可能性もあるが、遺物包含層中と比べると出土率が著しく高い。先述のとおり、P205・240・259・285・286・380・394の覆土上位からヒスイ原石が出土していることを勘案すれば、建物廃絶時の祭祀に伴う遺物とも考えられる。

勾玉

355～363は勾玉とその未成品である。石質は、蛇紋岩が5点(356・360～363)、ヒスイが2点(358・359)、滑石が2点(355・357)である。

355は滑石製の成品である。扁平・薄手であり、ほかの未成品の石質・形態と異なる。当遺跡では、少数ではあるが中期・後期の土器も出土しており、後出的なものと考えられる。

356～363は、勾玉の未成品である。大きさは様々であるが、いずれも平面「D」字形に整えられた段階の資料である。前後の工程資料は認められず、特定の段階の資料のみが認められることが特筆される。

なお、これらは特定の範囲からまとまって出土することはなく、製作の痕跡も積極的に認められなかった。勾玉の製作が調査区内で行われたとしても、小規模であったと考えられる。

白玉

364～368は、白玉とその未成品である。成品5点と未成品1点が出土したのみであり、18年度調査区と比べると点数が少ない。白玉(364～367)は、いずれも直径5.5～6mm、厚さ2～4mm、孔径1mmほどである。厚みにバラエティーが認められるが、いずれも算盤玉状に仕上げられることが特徴的である。357は未成品であり、板状の素材が穿孔部付近で破損している。穿孔時に、破損して廃棄されたものと考えられる。

管玉

管玉は未成品のみが認められた。369・370は穿孔段階、371は研磨整形段階、372～374・376・377は剥離成形段階、375・378が剥片、379・380が核である。石質はいずれも緑色凝灰岩で、中でも376・378はガラス質で、剥離面に強い光沢を持つ。凝灰岩は糸魚川地域でも産出するが、ガラス質のものは認められず、肉眼観察上は佐渡産に酷似する。

出土位置	形態・石質	玉作関係資料										合計
		ヒスイ	蛇紋岩	滑石	滑石	緑色凝灰岩	ヒスイ	緑色凝灰岩	鉄石(赤銅玉)	メノウ(石英)	滑石	
SI216	P245						1					1
	P246		2									2
	SD201										1	1
	SK211		1					1				2
	SK215									1		1
SI402	和							10				10
	SD236							17		2	1	20
	SD203			1	5	3	4	25			1	39
							1			2		3
P205								2			2	
P240											2	
P259							3				3	
P285							1				1	
P286							1				1	
P380							1				1	
P394							1				1	
SK229									1		1	
ST264							2				2	
SK284							8				8	
SD206										1	1	
SD209			1				2	1		1	1	5
SD233							1				1	
SD300							2				2	
SD520							10	1		3	1	15
SD522							1				1	
SR202							1	3			1	5
SR730							1	1			2	
遺物包含層		2	1	1	1	5	67	21	22	47	10	177
合計		2	5	2	6	9	107	83	23	58	15	310

第4表 玉作関係資料の数量と出土位置

なお、緑色凝灰岩製の未成品や破片は、SD203の覆土中から最も多く出土したが、その分布が濃密な範囲はSI402と重複する。SD203は、SI402を切るように構築されており、本来的にはSI402に伴う可能性がある。また、SD402の地床や周溝と見られるSD236からも、緑色凝灰岩の剥片・破片が多数出土している。これらの状況から判断すれば、S402において、緑色凝灰岩を用いた玉作が行われた可能性がある。

穿孔段階 369は、多角柱の素材に穿孔している段階の資料である。多角柱の状態では穿孔することは、素材を固定する上で合理的である。穿孔は、実測図上側から器体の2/3まで達している。他端は、中央部に1mmに満たないごく浅い凹みと、深さ1mmほどの穿孔途中の回転痕が認められるのみであり、作業開始直後に穿孔を断念したものと考えられる。なお、浅い凹みには明確な回転痕が認められず、穿孔時の「あたり」であった可能性がある。穿孔時に錐部が「あたり」から外れて、深さ1mmほどの孔が形成された可能性がある。この程度のアクシデントであれば、端部を再成形すれば、再利用できたと考えられるが、作業を放棄している。370は、風化が著しい。断面が円形に仕上げられており、破損した成品の可能性もあるが、穿孔位置が中心から大きくずれている。穿孔時破損品と考えた。

研磨整形段階 371は、研磨段階の資料である。剝離調整によって角柱状に整えられた素材を、長軸方向に研磨している。なお、実測図裏面の下端には、短軸方向の研磨痕が認められるが擦切技法の痕跡と考えられる。また、371は上下両端からの剝離面が顕著である。擦切面を利用して分割した際、上下両端から衝撃が伝わったことが想定される。

剝離成形段階 372～374・376・377は剝離成形段階の資料である。素材剥片の縁辺に調整剝離を施し、角柱状に成形している。376・377が成形開始後、間もない資料、372・374は研磨整形の直前段階の資料と考えられる。

剥片剝離段階 剥片は、縦長・横長双方が認められるが、形態的バラエティーに富む。横長剥片375・377は、剝離角が90度ほどである。石核379においても、剝離角が90°に近く、373・375・377の剝離角と一致する。厚手の剥片を断ち切る、あるいは折り取るように剥片が剝離された可能性がある。横長剥片を素材とする玉作は、弥生時代後期から継続的に認められる技術である。また、373の素材剝離面には、点状をなす打点が認められる。針状工具を用いた剝離技術〔久田・馬場2003〕を示す可能性がある。

紡錘車

滑石製の紡錘車が1点出土した(381)。18年度調査で出土した紡錘車と比べると薄手である。表面の調整は、放射状に荒削りした後に、研磨整形している。

原石

当遺跡の玉類の石質には、ヒスイ・軟玉・滑石・緑色凝灰岩・鉄石英・メノウがある。石質ごとの特徴を記述する(緑色凝灰岩は管玉の項で記述)。

ヒスイ ヒスイは、107点の原石・剥片が出土した(388～409)。18年度調査分と合わせると、123点もの数になる。原石が圧倒的に多く、大きさは1～9cmほどとバラエティーに富む。いずれも亜角礫～亜円礫で、付近の海岸で採取できる漂石とよく似た形状・大きさである。海岸までは400mほど近く、ことさら河川や露頭まで採取に向いたとは考えにくい。したがって、当遺跡から出土したヒスイは、周辺の海岸で採取された可能性が極めて高い。剥片と明らかに判断できるものは389～391・401がある。また、408は、剥片剝離の作業面も見られ、石核と判断できるものである。402は、目的形態は定か

ないが、緑辺に剥離調整が施されている。このように、原石以外にも剥片剥離や調整剥離を経た資料がある。しかし、無加工の原石が圧倒的に多いこと、調整剥離時に生じる剥片・砕片がほとんどないことを勘案すれば、調査区内でヒスイの玉作は頻繁には行われていないと判断される。なお、分割に際しては、硬質であることから擦切技法が用いられた事例がある(388)。擦切技法が用いられた遺物は、糸魚川市大角地遺跡(古墳時代中期～後期)・上越市裏山遺跡(弥生時代後期)・富山県下老子笹川遺跡(弥生時代後期)があるが、稀有な事例である。なお、ヒスイの色調は緑色・白色がほとんどであるが、一部(398・402)は青色である。18年度調査においても青色のヒスイが出土しているが、出土品としては稀有な存在である。

軟玉(ネフライト・透閃石岩) 細粒の透閃石からなる軟玉は、ヒスイよりも澄んだ緑色を呈し、透明感がある。385・386は研磨面が認められ、玉の素材として搬入されたと考えられる。軟玉のほかにも蛇紋岩やロディン岩等、緑色の礫が多数出土しているが、玉の素材として搬入された可能性がある。

滑石 滑石は、剥片15点が出土した(382～384)。このうち384には研磨面が認められた。いずれも剥片の長幅比は1:1ほどであるが、形態はバラエティーに富む。軟質であること、葉片状の結晶構造からなることから、剥片剥離をコントロールすることは困難であったと考えられる。なお、軟質であるため、河川を流下して付近の海岸にまで到達したとは考えにくく、山地の露頭で採取されたものと考えられる。

鉄石英(赤玉石) 鉄石英は、赤玉石が見られた。ここに分類したものの一部は、赤色のチャートと区別が難しいが、朱色を呈した明らかな赤玉石が認められる(410・411)。赤玉石は、糸魚川地域でも産出するが、ややくすんだ色調のものが主で、出土品のように鮮やかな朱色をなすものは珍しい。緑色凝灰岩と同様に、佐波島産の可能性もある。

メノウ メノウ・石英は58点出土した。透明感の強いメノウは、387を除き、漂石(412～414)である。付近の海岸で採取されたものと見られる。387は、「ぶどう状メノウ」(ぶどうの房のようなメノウ)と呼ばれるものであり、漂石のように水磨していない。この種のメノウは、糸魚川周辺でも産出するが、良質な緑色凝灰岩が付着している。佐波島等、良質な緑色凝灰岩の産地からもたらされた可能性も考えられる。不透明の石英も多数出土した。緑色凝灰岩が多数出土したP205や設置桶SX554の内部からは、石英または石英片岩の剥片・原石が出土した。あるいは玉作に関する資料と考えられるかもしれない。

(3) 古墳時代の石器(図版48～51・127～129・415～449)

古墳時代の石器と判断したのは、古墳時代前期の遺物を包含するⅢ層から出土した石器である。Ⅲ層には、古墳時代前期の土器が多数含まれており、これに伴うものと判断した。

砥石

415～425は、砥石である。いずれも、420が細粒の凝灰岩であるほかは、砂岩製である。420は、石質が細粒で砥面が平坦であることから、金属器の研磨に使用された可能性がある。ほかは比較的粒子の粗い砂岩を用いており、粗砥に用いられたと考えられる。

415～420は平砥石であり、415・416・418～420は角柱状を呈する。417・418・421は大型であり、置き砥石と考えられるが、ほかは手に持っても使用できる大きさである。415・416・418・419は筋状の砥面が認められる。いわゆる筋砥石であり、玉作に用いられたと考えられる。417・421は、大型の平砥石である。周縁からの打撃による剥離面が認められ、421は貝殻状剥片を剥離した石核としての側面も持つ。ここから剥離された剥片は、422～425の砥石の素材として用いることができる。また、平滑

になった砥面の更新の意味もあるかもしれない。

422～425は、「浜山型内磨砥石」[寺村1966]や「石鋸」と呼ばれる形態である。砥面が表面から側縁、裏面へと連続的に分布し、広範囲に同方向の擦痕が認められるなど、これらとは異なった使用痕跡も示している。いずれにしても、手に持って使用された砥石であろう。

敲石

426～429は、敲石である。楕円礫の、上下両端に敲打痕が形成される特徴的な敲石は、上越市裏山遺跡[小池ほか2000]、糸魚川市六反田南遺跡・前波南遺跡[春日ほか2008]、横マクリ遺跡[渡邊ほか2008]等、弥生時代後期～古墳時代前期の遺跡に類例が見出される。また、427の上下左右の側面には、線状痕を伴う磨り潰し痕によって平坦面を形成している。特殊磨石にも似た使用痕であり、敲石と評価することは適当でないかもしれない。

凹石

430～432は、円礫の平坦面に大きな凹みを有する凹石である。430・432は片面、431は両面に凹みが形成される。用途は明らかでないが、428の敲打痕と凹みの大きさは対応関係にあり、セット関係で捉えられるかもしれない。これらはⅢ層(古墳時代の遺物包含層)から出土したため、古墳時代の遺物と判断したが、竹花遺跡においては同種の形態が中世～近世の遺物包含層(Ⅱb層・Ⅱa層)から出土している(図版84・155～330・331)。中世遺跡からも稀に出土する石製品であり、帰属時期は幅をもって捉えておく必要がある。

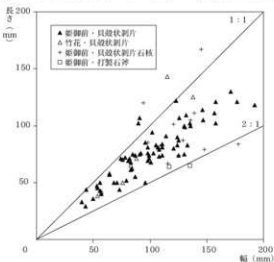
横刃形石器・貝殻状剥片

名称 背面に円礫面を有する剥片を素材とする石器が、18年度調査と合わせて82点出土した。中には剥離や研磨によって刃部を作出したものもの見られるが、同様の形態は弥生時代の北陸地方でしばしば認められ、「横刃形石器」と呼称されている。本報告ではこれに習い、「横刃形石器」の名称を採用する。なお、横刃形石器の素材剥片は、「円礫の外殻面に一度の打撃を加えて得られた貝殻状」を呈するが、糸魚川地域では縄文時代早期・前期以降、多量に製作された特徴的な形態である。本報告では[小池1986]にしたがい「貝殻状剥片」の名称を採用するが、いわゆる「貝殻状剥片(concoidal flake)」とはニュアンスが異なる。ここでは、当遺跡における形態的・技術的特徴を明らかにしておきたい。

素材剥片の形状 剥片の大きさは、長さ3～13cm、幅4～19cmほどと、バラエティーに富む(第17図)。

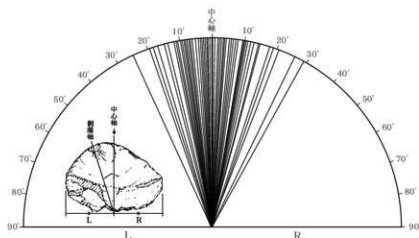
平面形は横長の楕円形であることが特徴的で、二枚貝の貝殻のような形状を呈する。長幅比は、その多くが1:1～2:1の範囲に収まり、大きさは異なっても相似形をなす。なお、縦長の剥片は、姫御前遺跡で2点(442)、竹花遺跡で1点(図版84・155～336)が認められ、全体数からみれば極めて低率であることが分かる。なお、縦長であるほかは、同様の技術によって剥離されたことは明らかである。石核形状と打点位置の関係によって、偶発的に作出された可能性がある。

素材剥片の剥離技術 18年度報告にも記述したが、素材剥片は、打点付近が著しく凹むことが特徴



第17図 貝殻状剥片の大きさ

的（実測図において▼印で図示）であり、74点中68点（91.9%）に認められた。この凹みは細かな剥離面が重複した結果であり、幅7～40mm、深さ1～6mmほどの大きさである。重複する剥離面の切り合い関係は不明瞭であり、一定の手順をもって剥離痕が重ね



第18図 貝殻状剥片の剥離軸

られた結果とは考えにくい。また、作業面が残る石核446・449の打点付近にも、貝殻状剥片と対応する剥離痕の重複が認められる。すなわち、石核・剥片双方の打点付近に同様の痕跡が認められるのである。したがって、この凹みが剥離後に二次加工として形成された可能性は極めて低く、剥離前に石核を繰り返して打撃することで形成されたものと考えられる。それにより、潜在的な割れを予め作出することで、剥片を剥離したのであろう。適当な剥離角を保持していない円礫から剥離するため、このような事前準備が必要であったと考えられる。446・447の端部3か所には著しい敲打痕がみられ、一見、敲石のようにも見えるが、剥離面の打点付近には凹みが認められる。貝殻状剥片にみられる技術的特徴と対応関係にあることから、石核と考えることができる。

主要剥離面は、バルブが未発達で比較的平坦であることが特徴的であり、末端部付近では大きな螺旋状剥離や階段状剥離を生じる傾向にある（443・437・440等）。末端部を確認できる資料75点中、55点（73%）にこのような特徴が認められ、55点中、25点については特に顕著であった。このような末端部の形状は、剥離速度の急速な低下によって引き起こされたものと考えられる〔山田・志村1989〕が、その出現頻度は極めて高い。目的剥片が横長であるため、破壊力とその伝達方向が拡散してしまい、剥離速度の急速な低下を招いたのであろう。また、先述のように剥離の事前準備作業において潜在的な割れ面が形成されていた可能性がある。それゆえに必要とする破壊力が小さかったため、剥離速度がもともと遅かったことが想定される。このことも剥離速度低下の一因であったかもしれない。

剥離軸が、剥片の中心軸と一致することが少ないことも特徴的である（第18図）。打点は、剥片の中心軸より、左右に10°ほどずれることが多いが、石核形状と打点の位置関係から生じた現象と考えられる。

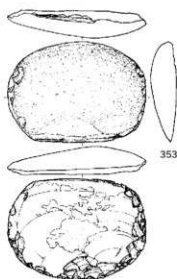
石質 石質は、砂岩が56点（68.3%）、安山岩17点（20.7%）、流紋岩4点（4.9%）、蛇紋岩3点（3.7%）、凝灰岩1点（1.2%）、粘板岩1点（1.2%）であり、18年度報告と同様に砂岩が圧倒的に多いことが特徴的である。砂岩の中には、細粒で緻密なものが39点、粗粒のものが17点ある。前者は横刃形石器、後者は砥石の素材として使い分けられた可能性がある。なお、石質を問わず原石は、礫面の形状から円礫であったと考えられる。また、特定の石質への依存度が比較的高いものの、接合関係は確認されておらず、明らかな母岩の共有関係も認められない。剥離時に副次的に生じる小さな剥片や破片が伴っていないことも勘案すれば、基本的には他所で剥離した剥片を当遺跡に搬入したものと考えられる。

加工 二次加工は、剥片の末端部に調整剥離が施されることが一般的である。調整剥離は、剥片の縁辺部に留まる浅いものが多く、素材剥片の形状を著しく変更するものではない（435・442）。また、微細剥

離痕が連続的に形成されるものがあるが(433・436・438・440)、使用痕の可能性もある。なお、18年度調査では研磨によって刃部が整形されたものがあつたが、20年度調査出土品には積極的な研磨整形は認められない。433の裏面平坦部に部分的な研磨面が観察されたのみである。

石器の機能 貝殻状剥片は、それ自体がtoolとして機能した場合と、打製石斧等の素材剥片であつた場合が想定されている〔小池1986〕。当遺跡から出土した資料においても、貝殻状剥片の縁辺部に微細離痕が連続する場合がある。縁辺部には鋭利な刃部が形成されることから、二次加工が施された横刃形石器と同様の機能を有した可能性がある。

435は、表裏面の広範囲に使用痕が観察される。いわゆるポリッシュのような光沢はもたず、表面が滑らかに摩耗している。凹部にも摩耗が侵入していることから、柔らかい対象物との接触によって形成されたと判断できる。18年度報告において石包丁のように研磨整形された石器(第19図)が出土していること、北陸地方における弥生時代の横刃形石器が収穫具や除草具の機能を果たしたとされていることから、農具として使用された可能性が想定されるが、顕微鏡観察等とおして詳細に検証する必要がある。



第19図 研磨整形された石包丁様の横刃形石器(S=1:3)

資料の帰属時期と分布 横刃形石器は、北陸地方の弥生時代にしばしば認められる形態である。〔久田1999〕の集成作業によって、石川県では古墳時代前期まで存在することが指摘されており、当遺跡においても古墳時代前期の遺物と理解した。この種の形態が古墳時代の遺物として報告されている事例はほとんどないが、多数の古墳時代前期の遺物とともに出土したこと、古墳時代前期の遺物包含層から出土したことから、古墳時代前期の遺物と判断した。また、当遺跡と同時期に築かれた生産域・竹花遺跡においても同様の石器が出土しているが、古墳時代前期に築かれた畦畔中に含まれる。古墳時代前期の遺物は、畦畔中とその周囲のみから出土したが、ここには古墳時代前期以外の遺物を含まない。また、木製農耕具や土器等とともに、畦畔中に埋め込まれたような状態で出土することが観察された。竹花遺跡の出土状況は、横刃形石器・貝殻状剥片が古墳時代前期の遺物であることを示すと考えられる。むしろ、ほかの時期の所産とする合理的な理解を提示することが困難である。

打製石斧

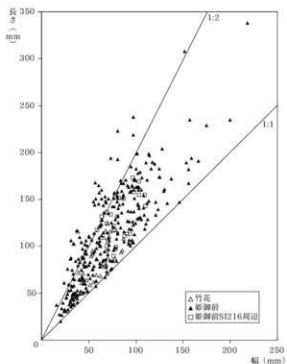
445は、打製石斧(石鏃)である。素材形状は、残置された素材剥離面の構成から横長剥片であつたと考えられる。素材剥片には、「①背面に円縁の転蹀面を有する。②主要剥離面の打点が中央からややずれる。③幅が12cmほど。」という特徴がある。これらは横刃形石器の素材である貝殻状剥片と共通しており、同様の素材が用いられた可能性が高い。二次加工はほぼ全周に施されるが、両側縁の加工は入念である。特に、中間部より基部側には抉りか形成されており、いわゆる「分銅形」に近い形状に仕上げられている。一方、基部部背面と刃部裏面の調整は素材形状を著しく変更するものではない。また、刃部周辺には使用痕とみられる摩耗が認められる。18年度報告においては、打製石斧の年代が古墳時代にまで下る可能性を指摘した。20年度調査区における出土状況等を踏まえても、この所見を変更する積極的な理由はなく、古墳時代前期の遺物である可能性が高いと考えた。ただし、縄文時代の遺物である可能性を否定する材料も十分ではなく、今後、共伴事例の蓄積によって裏付ける必要がある。

搬入礫 (図版 51・129 - 452 ~ 456)

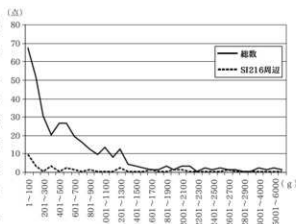
搬入礫は、玉類や石器の素材のほかに扁平礫が顕著に認められた。その大きさは長さ 5 ~ 20cm、幅 5 ~ 10cm ほどのものが多い(第 20 図)。大きさは様々であるが、相似形をなす扁平礫が選択的に搬入された可能性がある。石質は、安山岩 97 点 (28.7%)、流紋岩 58 点 (17.2%)、細粒砂岩 73 点 (21.6%)、粗粒砂岩 46 点 (13.6%)、頁岩 19 点 (5.6%)、蛇紋岩 19 点 (5.6%)、花崗岩 11 点 (3.3%)、凝灰岩・ホルンフェルス各 4 点 (各 1.2%)、閃緑岩 2 点 (0.6%)、石英・チャート各 1 点 (各 0.3%) である。火成岩である安山岩・流紋岩が 155 点 (45.9%)、堆積岩である砂岩・頁岩が 138 点 (40.8%) であり、特定の石材固執した構成が理解される。付近の海岸において最も多く存在する大きさ・形状・石質であり、容易に入手できる石材が搬入されたものと考えられる。

これらの扁平礫は、大きさ・形状・石質を助案すれば、貝殻状剥片の石核(446 ~ 449)や敲石(426 ~ 429)として利用可能なものである。しかし、石核・剥片の数量と比べると扁平礫の数量は著しく多い。調査区内で石器製作が頻繁に行われた形跡は認められず、石器の素材に直結するには問題がある。そこで、搬入した状態(未加工)のまま利用された可能性を検討した。SI216 周辺(断続的にめぐる周溝)からまとまって出土したことから、板葺き屋根の重石と考えたが、大半が 200g 以下と軽いものが多く(第 21 図)、その可能性は低いと判断した。

次に、編み物用錐具である可能性を考えた。重さを集計したところ(第 21 図)、大半が 1300g 以下であり、特に 700g 以下に集中することが分かった。〔渡辺 1981〕によれば、編み物用錐具の重さは、大部分が 100 ~ 450g の範囲に入る。当遺跡における扁平礫の分布のまとまりと近く、錐具として利用されたことも考えられるが、出土状態等からその可能性を類推することはできない。一方、編み物用錐具と考えたとき、453 ~ 456 の礫が目玉される。これらは、粗粒・細粒の砂が交互に堆積した砂岩であり、風化の過程で固結の弱い部分が抉れ、瓢箪形を呈したものである。この種の礫は 19 点出土している。付近の海岸で採取可能ではあるが稀有な存在であり、選択的に採取・搬入された可能性が高い。錐具には、紐をかける溝が刻まれるものがあるが、瓢箪形をなす形態にはこの溝に対応する形状が確保されており、紐をかけるのに適当な形態であったといえるかもしれない。根拠は十分でないものの、錐具としての利用を想定の一つとしておきたい。



第 20 図 扁平礫の大きさ



第 21 図 扁平礫の重さ

なお、452 は 453 ～ 456 と同質の砂岩である。4 か所に穴が見られるが、あたかも人の顔（目・鼻・口）を表現しているようにもみえる。しかし、穴の表面形状を顕微鏡下で観察すると、不規則な凹凸が著しく、人為的に穿たれたものとは考えられない。砂岩中に含まれる礫が抜け落ちる等して、自然に形成されたものと判断される。特異な形態の礫が遺跡に持ち込まれた可能性がある。

(4) 縄文時代～弥生時代の石器 (図版 51・129 - 450・451)

450 は、流紋岩製の石鐮である。先端部と茎部を発掘時に破損しているが、残存部分から有茎鐮であることは確かである。18 年度調査時には、放射性炭素年代測定によって縄文時代晩期に位置付けた風倒木痕から石鐮 1 点が出土しており、これと同じ年代となる可能性が考えられる。しかし、20 年度調査区からは弥生時代後期の遺物も出土しており、これに伴う可能性も想定しておかねばならない。

451 は、珪質頁岩製の石核である。貝殻状剥片等における剝離技術と異なること、玉作関連資料と石質選択が異なることから、縄文～弥生時代の遺物に分類した。したがって、積極的な評価をもとにした帰属時期の決定ではない。珪質頁岩は、糸魚川地域（虫川流域等）で採取可能であることを確認しているが、451 ほど珪化が著しく進行したものは確認できない。また、白色の流紋岩が付着するが、その状況は良質な緑色凝灰岩（376・378）に見られるそれと酷似する。あるいは、玉作関連資料に伴う可能性も考えられる。

D 金属製品・鍛冶関連遺物 (図版 51・52・129・130 - 457 - 525)

金属製品には鉄製品・銅製品・銭貨があり、調査区全域から鍛冶関連遺物が出土した。すべてⅡ a・Ⅱ b 層から出土しており、中世～近世の遺物と判断される。

457～463 は鉄製品である。457 は薄い鉄板を素材とし、正方形に加工したものである。器表には不規則に直径 1～3mm 程の細かい孔が認められる。現況では中央部が膨らみ、歪みが生じている。458 は用途不明で、やや厚手の鉄板の上方に鉤状の釣り下げ部らしき部位を取り付けられている。これにより、貫通する孔が設けられており、鍋などの耳の部分である可能性が考えられる。459 は鎌または鐮の可能性があり、図の上方は尖る。先端から中央に向かって徐々に末広がりに太くなるが、中央から下半は急激に細くなり、断面は円形から方形へと変わる。木製などの柄を取り付けたものと考えられる。460～463 は釘である。大小様々な規格があるが、いずれも断面が方形または長方形を呈する和釘である。460～462 は頭巻である。

464 は銅製品である。薄い銅板を素材とし、「L」字形を呈する。実測図表面の内側には浅い溝状の凹みが製品の縁に平行する。裏面（図の右方）にもわずかな稜線が認められ、溝状の凹みは本来、両面に存在した可能性もある。また、両面にはそれぞれの短軸に平行に細い溝が刻まれる。刻目の間隔はほぼ等し

40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19
2 19	2 192	8 296	9 492	12 238	7 647	1 38				4 312	4 103	1 8	3 36	5 81	1 6	3 87	2 24				2 21
	5 160	10 463	36 1162	23 921	18 873	1 168	4 39	3 158	10 343	12 374	1 18	3 39	14 389	4 273	1 5	3 153	1 54			1 9	1 ..
		1 144	4 200																		1 30

上段：個数 中段：重量 (g) 下段「J」羽口の個数

第 22 図 姫御前遺跡における鉄葬・羽口出土分布

いが、長さは一定していない。
緑青が著しく発達することから、青銅製品と考えられる。

465～469は鍛冶関連遺物

である。なお、姫御前遺跡からは、鉄滓が総量226点、8,027g出土し、そのうち、含鉄滓は164点(73%)、6,304g(79%)である。含鉄滓の比率の多さが特筆されよう。また、羽口の断片は88点出土した。465～468は鉄滓である。466～468は塊型滓で、いずれも含鉄滓である。469は羽口である。第22図は姫御前遺跡における鉄滓と羽口の出土分布であるが、一定の範囲に集中することが分かる。特に37Bグリッドを中心とする範囲には集中する。本調査区からは鍛冶に関連する遺構は見つかっていないが、供給源に近いことを想定できる。また、鉄滓の分布の濃淡と羽口の分布の濃淡は似ており、鉄滓と羽口の関連性の高さがうかがわれる。

470～525は銭貨である。銭貨は55点出土した(第5表)。525は寛永通寶(新寛永)で、SK200からの出土である。SK200は播鉢状の土坑で、Ⅱa層を基調とする覆土であり、漆器の細片を伴っている。銭貨は525の1枚しか出土していないが、冥銭と考えられ、近世墓の可能性が高い。470～524はⅡb層を中心として出土しており、中世の所産と考えられる。最新は永樂通寶(1405年初鋳)である。

E 木製品

(1) 記述の方針

木製品は18年度調査同様、古墳時代前期の建物から出土した柱根等、一部例外を除き、大半が中世後期(14世紀後半～17世紀)に属するⅡb層から出土した。また古墳時代前期に属するⅢ層から出土した遺物については、箸状木製品や杭状木製品のようにⅡb層から突き立てるような状態で検出したものがあり、こうした遺物についてはⅡb層に帰属するものとして扱った。なお、18年度報告において素材形状から大きく3分類しており、以下に転載する。

A類 板状木製品：扁平な長方形を基調とする素材から作り出されたもの。形状及び加工方法から10類に細分することができる。

B類 棒状木製品：厚みのある円柱状または角柱状を基調とする素材から作り出されたもの。形状及び加工方法から5類に細分することができる。

C類 その他製品：遺存している部分から本来の器形と用途が推定可能な木製品。

さらにA・B類の細分は次のとおりである。

A-1類 板状材の長軸の上方寄りに両側面から抉りを入れるもの。人物の側面、ないし正面を表現したと考えられるものが認められ、人形として使用された可能性を指摘できる。細かな調整の差異により、更にa～c類に分類できる。

a：上半を両側から斜めに細かく削り出していき、抉りを入れることで頭部を表現するもの

b：直線的な胴部から抉りを入れ胴部と頭部を区分けし、頭部に細かな加工を加えて人物を表現したと見られるもの

c：直線的な胴部から抉りを入れ胴部と頭部を区分けしただけのもの

A-2類 板材の長軸の上方寄りに一側面から抉りを入れるもの。人物の側面を表現したのと考えられ、人形として使用された可能性がある。

	唐銭	五代十国	北宋銭	南宋銭	元銭	明銭	不明・無文銭	合計
姫御前Ⅰ	0	0	8	1	0	4	0	13
姫御前Ⅱ	4	0	37	2	0	6	0	55
竹花	3	1	31	2	1	3	8	49
合計	7	1	76	5	1	13	14	117

第5表 各遺跡における出土銭貨数量

- A-3 類 やや厚みのある板材に方形の孔を穿つ等の加工を施すもの。
- A-4 類 やや厚みのある板材を素材とし、側面観がL字状になるよう抉りを入れ、頂部に向かって細く削り出すもの。ほかの部材と組み合わせて一つの製品を構成する組材と考えられる。
- A-5 類 方形基調の板材を素材とし、一側面から反対の側面上端に向かい弧を描きながら尖らせる。刀を模倣した形状を呈し、刀形として使用した可能性を指摘できる。
- A-6 類 方形基調の板材を素材とし、先端を尖らせるもの。
- A-7 類 小型の方形基調の板材を素材とし、端部を加工しないもの。
- A-8 類 方形基調の板材を素材とし、素材の縁辺に大幅な加工を行わず方形を維持しつつ、円孔または木釘によりほかの材と組み合わせて使用するもの。
- A-9 類 方形基調の板材を素材とし、素材の縁辺に大幅な加工が行われないもの。
- A-10 類 小型の板材を素材とし、縁辺に加工を施し多様な平面形を呈するもの。
- B-1 類 150mm～270mmを測る細い棒状木製品を素材とし、断面多角形に表面を面取りし、片端ないしは両端を尖らせるもので「箸状木製品」である。
- B-2 類 角柱状の棒状木製品を素材とし、先端を一側面から反対の側面端に向かい直線的に斜めに削り取って尖らせる。
- B-3 類 角柱状、または円柱状の棒状木製品を素材とし、先端を中心軸に向かい連続的に削り出し尖らせるもの。いわゆる「杭状木製品」である。
- B-4 類 円柱状の棒状木製品を素材とし、上方に抉りを巡らせるもの。形状から布巻または経巻具の可能性もある。
- B-5 類 円柱状の棒状木製品。加工を加えていない棒状の木製品である。

18年度報告においては上記のように分類・記述したが、今回報告する木製品はC類が多数を占めるため、器種ごとに記述し、上記分類に該当するものについてのみ言及する。なお、木製品の分類は『木器集成図録 近畿古代編』・『木器集成図録 近畿原始編』[奈良国立文化財研究所 1985・1993]を参照した。また、器種の鑑定については宮本長二郎氏、山田昌久氏から多大な御教示をいただいた。

(2) 各 説

箸状木製品 (図版 53～55・131～133・526～536)

B-1 類に相当するもので、526～536 が該当する。遺存状態が悪いものが多いため図示したものは少ないが、18年度調査で 658 点、20年度調査区では 5 区東側と 6 区北側の低地を中心に 62 点出土した。箸状木製品に見られる特徴的な出土傾向として、SX500～507 (図版 29・115) のように地面に突き立てた状態で検出される例がある。糸魚川地域では寺地道跡 [相羽^{ほか} 2002]、山岸遺跡 [渡邊 2007] 等で類似が見られ、古代における畜車と同様の役割を果たした祭祀行為 [四柳 1987] の一端と考えられる。また、こうした箸状木製品の樹種がスギで占められている点に着目してみると、スギが入りやすく柾目が通ることから割りやすく、加工しやすいという要素が大きかったと考えられる。このほかに、箸杉信仰の存在も考えられる。これは日本各地に見られる空海や蓮如といった高名な僧が地面に箸を突き立てたところ、芽を出してスギの太木となったとする伝承から箸を御神木のシンボルとみなすもので、「箸杉信仰」あるいは「箸立信仰」と呼ばれている [一色 1998]。もちろん、これらはあくまで伝承や民話の類であり、出土事例と短絡的に結びつけられるものではないが、一つの説として考え得る。

次に箸の形態を見てみると、一端を尖らせ他端を平らに加工する片口箸（528・532・535）と、両端を尖らせる両口箸（526・527・529～531・533・534）、また536は棒状木製品B-5類に比定されるが、寸胴箸〔一色1998〕ではないかと考えられる。箸状木製品の多くは欠損しているためどちらの形態となるか判然としにくいものが大半だが、多数の箸状木製品が良好な状態で出土した石川県坂町遺跡〔四柳1987〕では、出土点数143点のうち片口箸3点、両口箸140点と、後者により偏っていることが分かる。そこで、片口箸・両口箸、それぞれの箸の持つ意味合いに注目したい。

片口箸は、近世以降広く用いられた俵形箸に見られるように、通常の食事に用いられた可能性が考えられる。これに対し両口箸は「膳の場」で用いられるものとされる。こうした前提を踏まえれば、多数を占める両口箸が祭祀的な性格を持つ製品と考えるのが妥当であろう。このほか箸に関する慣習として「箸折り」がある。これは一度でも使用した箸にはその人物の靈魂が宿るとされ、その魂を再び自分の元へ返すために箸を折るというものである。現在でも、食後に折る箸を折るのは、この風習によるものとされている。また先に触れたように塗箸や削り箸が普及する近世以前の箸は手近にある枝などの素木などから食事の度に作っていたとされ〔向井¹³⁾2001〕、基本的には使い切りであった。こうした状況が今回の事例にも当てはまるのであれば、欠損した多量の箸状木製品の中には日常生活、あるいは饗応などに用いられた片口箸が箸折り後大量に廃棄されたものが含まれているとは考えられないだろうか。つまり箸状木製品の用途として祭祀的性格を帯び、地面に突き立てた「両口箸」、日用品として消費され続けた「片口箸」の二つを想定したうえで、地面に突き立てた状態で出土したものとそうでないものの比率や形態といった要素を検証する必要がある。

祭祀具（図版53・131～537～547）

537は人形である。18年度調査でも人形と見られる製品は見られるが、板材の側面を扶ることによって人物の側面及び正面を表現していたのに対し、立体的な表現がなされている。上端に見られる斜めの削り出しは鳥帽子等を意識して作り出されたと見られる。

538は動物形である。小型の板材を素材とし、側縁に加工を施す。下端部が欠損しているため全容はつかめないが、形状は鳥形に似る。鶏冠などを表現したものとも考えられるが、管見の範囲では頂部を尖らせる形状が見られなかったため、動物形とした。

539～545は刀形である。一側面から反対の側面上端に向かい直線、あるいは弧を描きながら尖らせるものでA-5類にあたる。539は下端部が欠損している。切っ先は尖らせず丸みを帯びている。540は刃部の削り出しが粗く稜を残す。表面には斜位に走る平行線が見られる。541は細い板材の切っ先を尖らし、片面に刃を作出する。表面に細かな削りが施されている。刃がやや内湾しており、鉋や鎌などを模した形代の可能性も考えられる。542は頂部にかけて緩やかな曲線で丸みを帯びた切っ先を作出する。543は下端部にかけて段を作り、柄と刀身を明確に区別している。形状から刀形というよりは刀子形と言えるかもしれない。544・545は方形の板材を斜めに削るのみの簡易的な加工がなされている。

546は斎串である。細い板材の両端を尖らせる。側面に切れ込みを入れたものが主流だが、そうした痕跡は見られない。前述の箸状木製品と同様に地面に突き立てることで外部との結界として悪気を遮断するもの、または神を降ろす依代として用いられたとされる。

547は笹塔婆である。下端部及び片側が欠損しているが、圭頭状の上部を持ち、側縁は切り込みが2段入る。表裏に墨痕は見られない。笹塔婆は浦廻遺跡〔本間¹⁴⁾2003〕等で多数の出土例がある。浦廻遺

跡出土例の筐塔婆の最大量目が長さ 365mm、幅 42mm、厚さ 4mm なのに対し、当遺跡出土のものは現存部分で長さ 385mm、幅 84mm、厚さ 9mm となり、浦廻遺跡出土のものと比較して大型の製品と言える。

容器類 (図版 53・131 - 548 ~ 553)

548 ~ 551 は曲物底板である。18 年度調査では表面に黒漆を塗布したものが出土しているが、今回こうした製品は見られない。548 は直径 150mm を測る底板の一部である。549 は直径 163mm を測る底板で表面にわずかな加工痕を残す。550 は直径 114mm を測る底板で、側面に側板を固定するための木釘穴が 3 か所見られる。551 は直径 89mm を測る底板である。周縁の面取りが粗く稜を残す。552 は桶または瓶などの蓋である。方形の板材を基調とし、表面には連続的な削りの痕跡を残す。全体に欠損しているが本来的には円形を呈すると見られ、中心部に円孔が穿たれる。553 は栓である。円柱状の棒状木製品を上端から縦方向に細く削る。552 などの蓋の孔を塞ぐものと思われる。

天秤棒 (図版 53・54・131・132 - 554・579)

554・579 は天秤棒である。554 は両端が欠損しているため、全体の長さは不明だが天秤棒に特徴的に見られる蒲鉾形の断面を呈す。紐掛けや擦痕等は見られない。579 は蒲鉾形の断面形を呈し、両端には紐等を掛けたと見られるわずかな伏りを確認できる。

下駄 (図版 53・131 - 555 ~ 559)

555・556 は方形の板材に 1 か所ないし 2 か所の孔が穿たれており、田下駄と見られる。共に完形品ではなく、欠損部にも穿孔があった可能性がある。558・559 についても孔の数や位置等不明瞭な要素があるが田下駄に属する製品と推定される。また、558 は A-8 類に該当する。557 は方形板材から作り出した連歯下駄である。鼻緒を通す孔が中央付近に一孔だけ見られるもので、大武遺跡 [春日 2000] に類例を見ることができ、また、下駄に関しては地上と他界をつなぐ祭祀品であるとする説 [秋田 2002] があり、箸状木製品、形代類等、他の祭祀遺物との関連性が想定される。

板状木製品 (図版 53・131 - 560 ~ 564)

560 は、残存部分の上位を斜めに削って上端に丸みを持たせ、もう一方を板杭状に尖らす。また、中央部分に方形の穿孔が見られる。実測図下端に見られる板杭状の加工は二次的なもので、何らかの部材からの転用品と考えられる。561 は方形基調の板材を素材とし、両端を加工する。表面には複数の円孔と線状痕が多数認められる。562 は欠損が激しいが方形の板材に長円形の孔が見られる。組み合わせ材の一部であろうか。563 は下端部が欠損しているが、561 と同じように上端を加工し丸みを持たせたもので、上方には径 10mm 程の円孔が見られる。564 は方形の小型板材の片側面を鋸歯状に加工するものである。延命寺遺跡 [山崎 2008] や平城宮 [奈良国立文化財研究所 1985] でも類似した製品が報告されているが、用途は不明である。

柄 (図版 53・131 - 565)

565 は下端部が欠損しているが、形状から農耕具の柄と考えられる。SA549 とした杭列に含まれるもので、柄とみた場合の先端部が地面に突き立てた状態で出土した。杭への転用品と考えられる。

籠 (図版 53・131 - 566)

566 は籠である。柄に当たる部分がやや丸みを帯びた棒状であるため籠とした。先端の板状部は欠損しており全容はつかめない。なおこうした形状に類似した製品として中世末から近世に見られる蒲鉾板がある [古泉 2001]。蒲鉾板とされる製品は全長が 100mm ~ 200mm の範囲に収まるのに対し、566 は

300mmを超える。柄の部分は因襲裏に差すために串状となるが、平坦に作り出すといった相違点も見られる。可能性の一つとして挙げておきたい。

部材 (図版 53・54・132 - 568・571・572)

568は指物の脚部である。中央やや上に天板などを指した納孔が確認できる。椅子や机などの部材であると考えられる。571は舷側板である。欠損が激しいが、一定間隔で梁を支えた納孔が確認できる。古墳時代前期に属するIV1層からの出土であり、当該期に準構造船が存在したことがうかがえる。572は1406mmを測る方形基調の板材に2か所の穴が開けられている。ほかの部材と組み合わせるための納孔の類と考えられ、建築材の一種と推察される。

桶 (図版 54・132 - 569・570)

569・570は刳物桶である。一木を刳り抜いて作られたもので、針葉樹を用いる場合には亀裂が生じるため、底板は別材で作られる。県内では大武遺跡などで類例が見られる。569は内面に底板を固定するための楔を打ち込んだと見られる切り欠きが2か所見られる。また、上面は欠損しており耳や把手は確認できない。器高が現存部で452mmを測り、刳物桶としても大型であることが分かる。また、こうした刳物桶は井戸側として転用される例〔石川2005〕が多いが、当遺跡出土のものは流路岸に据え置かれるように出土した(図版32・98)。570は器高964mmを測る大型品である。内外面に加工痕をわずかに残すが底面ほど顕著ではない。底板を固定するための棧孔、楔孔などは確認できない。あるいは、板を切り出した残滓である可能性も考えられる。

杭状木製品 (図版 53・54・131・132 - 567・573 - 578)

B-3類に該当する。567は角柱状の棒状木製品の先端を連続的に削り尖らせる。地面に突き立てた状態で検出した。573・578は先端部が炭化している。全体にそれほど丁寧な削り出しは行っておらず、板材の両側面を中心に向かい削るか(573・575)、数回の大きな面取りで先端を細く仕上げるものである(567・574・576・577)。578は上方にほかの部材と組み合わせに用いたと見られるコの字型の切れ込みが入る。いずれも6区の低地からの出土であり、粗雑な作り出しでも機能に差し支えは無かったのであろう。578は上方にほかの部材と組み合わせたと考えられる「コ」の字の切れ込みが見られる。

柱根 (図版 55・133 - 580 - 587)

580・582が芯持ち材、581・583～587が芯外し材を用いる。側面にはほとんど加工はされていないが、底面はおおむね平坦に仕上げられており、側面と底面が直角に交わる。切り離し後に二次加工が行われたと見られる。580～583はSI216の柱根である。580は縁辺から中心に向かい加工を施し、中心近くに一部未加工の部分を残す。581は縁辺の2方向から加工を施し、全面に加工痕が見られる。582は全体に摩耗が激しく不明瞭であるが、周縁から中心に向かい加工されている。583は中心部が未加工で縁辺に加工が施されるが、方向や切り合いは判然としない。584～586はSA199の柱根である。584・585は全面に加工を施している。584で一部求心的な加工が確認できるが、摩耗が激しく切り合いや方向は不明瞭である。586は中心から縁辺に向かうものや、縁辺から中心に向かうものなど複数方向の加工が見られる。587はSB341を構成するP340の柱根である。全体に摩耗しているが周縁に一部未加工の部分が見られ、わずかに未加工部分に向かう削りが確認できる。なお、580～586の接地面(底面)は、平坦であることが特徴的である。明瞭な切り残り痕も認められず、伐採後、加工によって平坦な接地面が作出されたものと判断される。

(3) 木製品の年代

年代決定の方法

木製品の年代決定は、出土層位から判断することとした。Ⅱb層から出土したものは中世、Ⅲ層以降から出土したものを古墳時代の木製品と判断した。ただし、中世の箸状・棒状木製品は、地面に突き立てた状態で検出したものもあった。これらはⅢ層中から出土したが、本来の遺構検出面は古墳時代前期の遺物包含層(Ⅲ層)上面である。したがって、Ⅱb層に帰属する遺物として取り扱うこととし、中世の遺物と判断した。また、SD520内においては、共存土器の年代から古墳時代前期に位置付けた。古墳時代前期と中世の木製品とでは劣化の状態が異なる。前者は黒ずんで加工痕が明瞭でなく、後者は加工痕がより明瞭であった。出土状態から判断に迷うものもあったが、このような相違によって容易に判断できるものもあった。

中世の木製品

526～557・559～561・563を中世の木製品と判断した。箸状木製品(526～536)、人形(537)、動物形(538)、刀形(539～545)、斎串(546)、笹塔婆(547)、曲物底板(548～551)、桶または瓶などの蓋(552)、栓(553)、天秤棒? (554)、下駄(555～557・559)、板状木製品(560・561・563)がある。地上と他界をつなぐ祭祀品とされる箸状木製品、人形、動物形、刀形、斎串、笹塔婆、下駄といった祭祀遺物の存在が特徴的である。

古墳時代前期の木製品

558・562・564～587を古墳時代前期の木製品と判断した。板状木製品(562・564)、農耕具の柄(565)、篋(566)、椅子や机等の部材(568)、割物桶(569・570)、準構造船舷側板(571)、建築部材(572)、杭状木製品(567・573～578)、天秤棒(579)、柱根(580～587)がある。柱根・杭・割物桶(569)以外は、遺物包含層から出土したものであり、多様な種類が認められる。

(4) 樹種構成

樹種は、中世・古墳時代を問わずスギの利用が卓越する。中世の曲物底板(551)がサワラ、桶底板(552)がクロベである以外は、すべてスギである。サワラ・クロベは、ヒノキ科の針葉樹で、中部地方にも自生する。スギが多用される中、2点のみ異なる樹種が用いられることは特異であり、他地域からの搬入品である可能性がある。特にクロベは、本州中部～四国の山地に自生する樹木である。比較的、温暖な地域の植物であることから、搬入品である可能性が高い。

糸魚川平野には、縄文時代晩期以来、スギ林が広がっていたことが推測されている。古墳時代の幕開けとともに、狭小な平野に生育していたスギが伐採され、水田化が進むことも分かっている。古墳時代には、このときに伐採した木材を建築材として利用したこともあろう。中世には平野部の水田化が更に進むものの、周囲の山林にはスギが自生していたことが推測される。このような環境において、スギが多用されたのであろう。

第IV章 竹花遺跡 I

1 調査の概要

A グリッドと調査区の設定

当遺跡の本発掘調査対象範囲は、第1章2B(2)第4図に記述したとおり鋼矢板に囲まれた3つの調査区に区切られた。調査区の名称は、新幹線構造物の名称を用いて、東側からR5区、R6・7区、R8区と呼称することとした(図版1・56)。また、追加調査となった東端の市道施工部分については、隣接する新幹線構造物の名称からR4区と呼称し、さらに調査工程上、分割した区画をR4-1区～R4-8区とした。

グリッドの設定は、近接する姫御前遺跡との位置関係を示すために、姫御前遺跡と連続して付すこととし、主軸は真北から70度52分19秒東偏する。設定の詳細は、第III章1A(15ページ)を参照されたい。なお、当遺跡は52～76列が相当し、R6・7区65Bグリッド北西隅の座標はX=115749.247、Y=56049.744、R8区73Bグリッド北西隅の座標はX=115723.031、Y=56125.327である。

B 基本層序(図版56)

竹花遺跡における基本層序は、姫御前遺跡との共通性が見出された。そこで、相互の関係を理解しながら層序を付すことに留意した。しかし、竹花遺跡のほうが2mほど低位に立地することもあり、より多くの層序が厚く確認された。結果的に整合を図れない部分も生じたが、大枠では一致する(第7図)。

O 層 盛土 北陸本線(引込み線)造成時の盛土。

I 層 旧表土 近代以降の出土品を含む。層厚は、10～25cmほどである。

II a1 層 暗黄灰色粗砂混じりシルト(2.5Y5/2) 18～19世紀以降の遺物包含層。やや黄色を帯びたシルトブロックが多い。しまり弱く、粘性ややあり。層厚は、5cm～15cmほどである。

II a2 層 黒褐色シルト混じり粗砂(2.5Y3/1) 17世紀初頭～末の遺物包含層。年代的には、姫御前遺跡のII a層に対応する。粒径0.5～1mmと比較的粗い砂を基調とし、シルトが混じる。色調は、下位のII b層よりも明るく、やや青色を帯びる。しまり・粘性ともに弱い。層厚は、10cmほどである。

II b 層 黒色細砂混じりシルト(2.5Y2/1) 中世(15～16世紀)の遺物包含層で、姫御前遺跡のII b層に対応する。II a2層と似ているが、混ざる細砂が少なく粒径が小さい。色調は、II a2層よりもやや明るい。しまり弱く、粘性やや強い。層厚は、10cm～20cmほどである。

III 層 褐褐色粘質シルト(10YR4/1) 姫御前遺跡における層位との対比から、古墳時代前期の遺物包含層に相当すると考えられた。しかし、古墳時代の遺物はほとんど含まれず、一部に中世の遺物が含まれることが確認された(図版60 9・9右隅)。上下の土層の特徴を勘案すれば、中世遺物は数点のみの局所的な混入(水田耕作時に上部から踏み付けて沈下か)であり、基本的には姫御前遺跡III層と対応できるものと考えた。

IV 1 層 黒褐色草本質泥炭(10YR3/2) アシと見られる草本類の腐植が主体となる。より低位となる西側ほど草本質の比率が高い。粘性なく、しまり弱い。極めて特徴的な土層であり、姫御前遺

1 調査の概要

跡IV上層と対比する上で重要な指標とした。しかし、姫御前遺跡IV上層に含まれる自然木の年輪年代はAD60～90年という結果が出ている(第V章6)のに対し、当遺跡では下位から弥生時代終末期の遺物が出土しており、年代的に大きな齟齬がある。層厚は、10cm～20cmほどである。

IV 2 層 褐灰色シルト(10YR4/1) 弥生時代終末期(新潟シンボ編年5期)の遺物包含層で、R8区では木製品を多く含む。やや粘性の強いシルトを基調とし、IV 1層ほどではないが草本類の腐植を多く含む。しまりは、上下の土層と比べるとやや強い。白味を帯びた色調であることから、火山灰を含むことを想定して調査を進め、分析によって火山灰を含むことを確認できた(第V章3、123ページ)。層厚は、10cm～20cmほどである。

V 1 層 オリーブ黒色シルト(5Y2/2) R6・7区西端～R8区に局所的に存在する。IV層と同様に草本類の腐植を多く含むが、色調がより暗い。しまり・粘性とも、やや強い。層厚は、10cm～25cmほどである。

V 2 層 オリーブ黒色シルト(5Y3/1) V 1層を基調とするが、地山(VⅧ層)ブロックを混交する。水田の耕作によって形成された可能性があり、SD40の両側の盛土もV 2層からなる。出土遺物は、IV 2層と同じく、弥生時代終末期(新潟シンボ編年5期)に位置付けられる。V 2層～IV 2層の間の堆積速度の速さがうかがえる。層厚は、5cm～15cmほどである。

Ⅶ 層 灰色砂質シルト(10YR2/1) 漸移層。Ⅶ層を基調とするものの、黒褐色粘質シルトを斑状に、炭化物粒子をごくわずかに含む。層厚は、5cmほどであり、存在しない部分も広く認められる。

Ⅷ 層 灰色砂質シルト(5Y4/1) 地山と判断した土層である。均質な砂質シルトで、混入物はほとんど認められない。上位層との層界面には凹凸が認められた。遺構が、部分的な落ち込みか判断することは難しいが、軟弱地盤であることから上部からの圧痕とも考えられる。なお、Ⅶ層を部分的に深掘りした結果、シルト・細砂・粘質シルトの互層から構成されることが明らかであった。また、新幹線建設工事に深さ別の掘削土を観察したが、同様の土質が数m続き、その下位には礫層が存在した。これらの状況を総合すれば、水成堆積物が厚く堆積していることが理解でき、Ⅶ層以深に遺物包含層が存在する可能性は考えにくい。

以上が、竹花遺跡の基本層序である。姫御前遺跡との相違点は、大きく2点ある。

1点目は、近世の遺物包含層であるⅡa層が、竹花遺跡では上下2層に細分できた点である。上位をⅡa1層、下位をⅡa2層とした。両者とも粗砂を多く含むことから、洪水性の堆積物と考えられるが、遺物の年代からⅡa1層は18～19世紀以降、Ⅱa2層は17世紀初頭～末に位置付けられる。すなわち、Ⅱa層は一度に堆積したのではなく、複数回の洪水によって堆積した土層と評価することができる。

2点目は、より低位に立地することもあり、Ⅲ層より下位に多くの土層が検出できた点である。IV層は、西側ほど厚みを増し、より低位のR6・7区の西端とR8区にIV 1・IV 2・V 1・V 2層が局所的に分布した。姫御前遺跡よりも低位に位置すること、たびたび氾濫したという城ノ川に近いことから、より多くの土砂が堆積したのであろう。

C 調査の概要

竹花遺跡は、糸魚川駅の東側400m、現海岸線から350m内陸の沖積地に立地する。1,400m²を発掘調査し、中世と古墳時代前期の水田を検出した。

基本層序は前節で触れたとおり、Ⅱ a1 層 (近世)・Ⅱ a2 層 (近世)・Ⅱ b 層 (中世後期)・Ⅲ層 (古墳時代前期)・Ⅳ 2 層 (弥生時代終末期) の 5 枚の遺物包含層を層位的に検出した。このうち中世～近世に位置付けられるⅡ a1 層・Ⅱ a2 層・Ⅱ b 層からは、多くの種類の遺物が多数出土した。

近世に位置付けた層位は、姫御前遺跡Ⅱ a 層と対応する。姫御前遺跡では、17 世紀前半を主体とし 18 世紀までと幅をもって理解したが、竹花遺跡ではⅡ a 層を 2 枚に細分できた上、Ⅱ a1 層を 18～19 世紀、Ⅱ a2 層を 17 世紀初頭～末に細分することができた。Ⅱ a2 層が、姫御前遺跡のⅡ a 層に年代的には対応関係にあると言える。これらの遺物包含層は、粗砂を基調とすることから、遺跡の西側を流れる城ノ川の氾濫等を契機として、短期間で多量の土砂が堆積したものと考えられる。寛政 4 (1792) 年 9 月の文献からは、竹花遺跡・姫御前遺跡が立地する丘陵縁と砂丘間の沖積地一面が水没したことが分かる。また、地域住民の話によれば、城ノ川は河川改修が進む以前まで、冬季の荒波によって川の水が海に流出せず、竹花遺跡周辺がたびたび水没したという。城ノ川の上流部は急勾配であるが、沖積地に入ると勾配が極めて緩やかで、海岸に達する前には砂丘列を横断する。もともとこのような環境にあるため、洪水を起こしやすい河川と考えられ、砂丘裏の沖積地が水没しやすかったといえる。このような背景から、短期間に多量の土砂が堆積したのであろう。近世の遺物は、質量ともに充実しているが、遺構は土坑 SK216 を検出したのみである。土壌分析の結果を踏まえれば、水田として利用されていたと考えられる。

中世後期に位置付けたⅡ b 層は、水田遺構が検出されたほか、地面に突き刺さった状態で箸状・棒状・板状の木製品が出土した。多数出土した遺物は、日用雑器のほか香や茶に関する道具など的高級品が多いことが特徴的である。古銭や形代等の祭祀遺物やヒトの焼骨片が多数出土しており、遺跡内で祭祀が行われた可能性がある。およそ 200m 北側に所在する観音寺との関連が想定される。

古墳時代の遺物包含層に対応するであろうⅢ層からは、遺物はほとんど出土しなかった。中世の遺物が一部で混在したが、姫御前遺跡における層序との対応関係を考慮すれば、中世に行われた水田耕作等によって、上位から混入したものと判断すべきであろう。植物珪酸体分析の結果や、土層に乱れが認められる(下位の層位の混在)ことを踏まえれば、水田として利用されたと考えられるが、畦畔等は検出できなかった。

草本質泥炭Ⅳ 1 層の上下からは、おおむね 10m または 20m 間隔で平行するように配置された畦畔を検出した。これは、Ⅳ 1 層との切り合い関係の把握から、大きく 2 時期に細分することができる。畦畔には、土を盛って構築したものと、板を敷き詰めて足場を確保したものが認められた。前者の盛土中には、板材や木製品が芯材として埋め込まれたことが分かった。後者は、板が沈下しないように枕木を敷き、両側を杭で固定する等の工夫が見られた。なお、敷き詰められた板は、建築部材を再利用したものが多く、当時の建築を知る資料として注目される。畦畔を形作る盛土や足場板を剥ぎ取ると、下位からは木製の農耕具(耒・鋤)が良好な状態で出土した。中には、ほぼ完全な形の高杯と一緒に出土するものもあり、畦畔を構築する際に、祭祀が行われた可能性が考えられる。当遺跡で検出した古墳時代前期の畦畔とそれに伴う遺物は、当時の水田耕作の実態を知る上で貴重な資料といえる。また、東方 140m に位置する集落・姫御前遺跡と時期が重複することから、相互の関連が想定される。

2 遺 構

A 概 要

検出した遺構は、近世・中世・古墳時代前期・弥生時代終末期がある。層位の堆積状況が良好な R6・

7区西端とR8区では、古墳時代前期と弥生時代後期の遺構を層位的に検出することができたが、それ以外はすべてⅧ層上面まで掘削して検出した。ただし、本来的な遺構検出面が何層にあるのかを、基本層序との切り合い関係、基本層序と覆土の比較、出土遺物の年代を総合的に判断し、遺構の年代を特定した。

近世の遺構は、平面円形の土坑を1基検出したのみである。性格は不明であるが、姫御前遺跡で墓坑と理解したSK200に形態・規模が共通する。

中世の遺構は、水田の小区画を検出した。調査対象地が水田であったことは、植物珪酸体分析からも裏付けられている。当時の集落が築かれていたと考えられる加賀街道沿いの海岸砂丘列上の標高は5.5mほどであり、これよりも3m低い竹花遺跡周辺に水田が築かれていたことになる。遺構検出面は、本来はⅢ層上面であるが、黒色系の地山で黒色系の覆土の遺構を検出することは困難であったため、Ⅷ層上面で検出することとなった。もともと浅い遺構であったことが推測される上、検出面までの掘削深度が深くなってしまったため、部分的な検出に留まった。一方、足跡らしき凹凸は調査区全面に断片的に認められた。このことから、中世期に調査区周辺一帯で水田耕作が行われていたと考えられる。また、箸状木製品や棒状木製品等が地面に突き刺された状態で検出したことから、調査対象地で水辺の祭祀が行われたことが想定される。

弥生時代終末期～古墳時代前期の遺構において注目されるのは畦畔である。自然科学分析によって、当時、調査対象地が水田であったことが裏付けられているが、小区画を検出することはできなかった。しかし、層理面の乱れが顕著であり、足跡のような痕跡も見られたことから、水田耕作が行われたと考えられる。検出した畦畔は、大区画を示す畦畔または畔道である。畦畔には、板を敷き詰めて足場を確保するものと、盛土によって構築されたものが認められた。前者は、板材を敷き詰めて足場の沈降を防ぐもので、軟弱地盤で見られる工法である。足場板の沈降を防ぐため直交方向に短い板を敷き、左右に動くことを防ぐために杭を打設する工夫も見られる。当時の土木技術を知る上で貴重な事例といえよう。後者は、Ⅳ1層（草本質泥炭）が覆っていたために検出できた。通常の堆積環境では、検出は困難であったと思われる。検出時の高さは10～15cmほどであるが、構築時はこれより高さがあったものと考えられる。また、盛土中には土器片・木製農耕具・礫・自然木が含まれていた。畦畔周辺以外からは遺物はほとんど出土しておらず、意図的にそれらが埋め込まれた可能性が高い。自然木や板材は、畦畔の芯材としての役割を果たしたと考えられるが、木製農耕具は板材や盛土の最下位から出土した。例えば、SX39においては、ナスビ形曲柄鍬の完形品(467)と半損品(468)が並ぶように出土した。偶然の出土状況とは考えにくく、木製農耕具が意図的に埋め込まれた可能性が考えられ、ほかの自然木等と同様に芯材として扱うには問題がある。あるいは水田構築時の祭祀行為を示している可能性を考えるべきであろう。

B 近世の遺構

近世の遺構は、R5区59BグリッドにおいてSK216(図版57)を検出したのみである。長径80cm、短径78cmの正円形で、深さは10cmである。当初、中世の遺構と考えたが、底面付近から近世陶器が出土したため、近世の遺構と判断した。古墳時代の畦畔と同一面でも検出されたため、本来の遺構検出面よりも20cmほど下位で検出したことになる。したがって、実質的な深さは30cmほどあったものと考えられる。墓坑と考えられた姫御前遺跡SK200(図版4・7・110)と形態・規模が類似しており、集落から離れた地点に単独で存在することにおいても共通する。あるいは、同様の性格を想定することができる。

C 中世の遺構

(1) 水田状遺構

SX30 (図版 65・66・137・145)

R6・7区の西端で検出した。幅1m、深さ5cmほどの浅い溝で、14m×8m(外側・推定)ほどの不整形長方形に廻る。覆土はⅡb層から構成されること、古墳時代前期の畦畔SX36を切るように構築されていることから中世の遺構と判断した。このような溝は、新潟市沖ノ羽遺跡で「堀田」[石川^{ほか}1994、星野^{ほか}1996]・新潟市細池遺跡で「凹地遺構」[小池^{ほか}1994]とよばれた溝と共通する。両遺跡の報告においては、これらを水田と捉えており、SX30についても水田区画の外周を巡る溝と想定することができる。ただし、溝というほどの深さは認められず、耕作時の足跡圧痕の連続が溝状に検出されたものと考えられよう。なお、水田であれば底面が平坦であることが想定されるが、西側ほど田面が最大で70cmほど低いことが分かった。もともと、基盤層が傾斜している部分に当たり、上位に堆積する2m以上の盛土等の堆積物による土圧で、周囲より厚く堆積した草本質泥炭等を含む軟弱地盤の部分が、後世に自然沈下した可能性が考えられる。しかし、そのことを差し引いたとしても著しい傾斜である。水の管理が行き届いた現代の水田のようなものではなく、湿田のような状態にあったと想定できる。SX30の東隅コーナー部分では、木製品を集中的に検出した。中には地面に突き立てたような状態で検出されたものもある(図版65・66・137)。水口祭祀等に伴うものと考えることができよう。区画の主軸方向はN15°Wであり東西南北軸を意識して構築したとも考えられるが、海岸砂丘列とおおむね平行しており、地形を意識して構築した可能性がより高い。

なお、足跡の圧痕と見られる落ち込みは、調査区の広範囲にまばらに観察された。ただし、その分布にSX30のような規則性は見られず、水田耕作の痕跡を積極的に認めることはできなかった。水田耕作に伴う圧痕であるかは必ずしも明らかでないが、周囲が軟弱な地盤であったがゆえに形成された痕跡と評価できる。また、調査終了後に写真整理をしている段階で、SX34の南西側にも同様の遺構が存在することに気付いた(図版136下段)。推定で幅が2m、短辺が5～6mの方形区画で、SX30より規模が一回り小さい。この区画の北西隅には中世の木製品が多数出土しており(図版64)、SX30と遺物の出土状況も共通する。区画の長軸は、SX35とやや異なりN40°Wほど(SX34とほぼ平行)であり、より西偏する。また、本来の遺構検出面はⅢ層上面であるが、黒色系の地山で黒色系の覆土の遺構を検出することは極めて困難で、Ⅴ層上面まで掘削しないと、この種の遺構を検出することができない。結果、遺構の深度がもともと浅い上に、このような状況も相俟って、検出することが困難であったが、周辺地域一帯に同様の区画が存在した可能性を指摘できる。ただし、多数出土した陶磁器や祭祀遺物の存在を考慮すれば、何らかの祭祀場であった可能性も考えられる。植物珪酸体分析の結果から、中世に水田耕作が行われていたことは確実視されるが、これと併せて祭祀も行われており、遺構の性格については明言できない。

SX103 (図版 68・147)

R8区で幅1m、深さ5cmほどの「L」字状の浅い溝を検出した。Ⅱb層が落ち込むように検出したが、極めて微妙な根拠による。あるいは、自然の窪地で人為的な遺構ではないかもしれない。長軸はN16°Eであり、SX35とは異なる。また、SX34と隣接するように検出した遺構の主軸とも異なり、三者三様である。整然と整備された水田ではなかった可能性も考えられる。

(2) 箸状木製品等の出土状況

a 平面分布

中世段階において、古代の畜車と同様の役割を果たしたと考えられる箸状木製品〔四脚 1987〕(403～417)が786点出土した。膨大な数量である上、破損品も多数認められることから、数えきれないものもある。おそらくは、1,000点を超える点数が出土していると考えられる。

箸状木製品は調査区のほぼ全面から出土しているが、分布に粗密が認められる(第23図)。調査区ごとの内訳は、R5区54点、R6・7区597点、R8区135点である。調査区の面積がそれぞれ異なり、単純に比較することはできないが、第23図を見ると標高が低い西側(R8区側)ほど多数出土する傾向にある。また、63～67列周辺においては、直径10mほどのまとまりを見出すことができる。一定のまとまりをもって祭祀が行われた可能性を指摘できる。

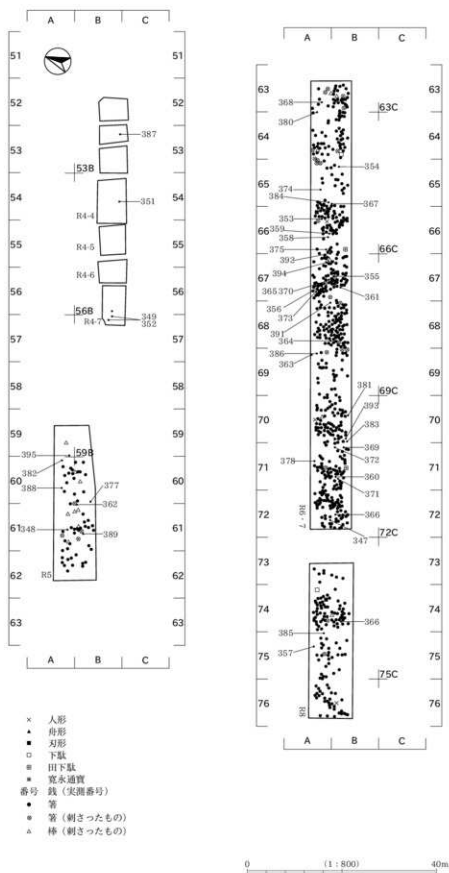
箸状木製品は、祭祀に関連する遺物と考えられる。銭貨52枚(347～395)・人形3点(418～420)・刀形2点(421・422)・舟形2点(423・424)・下駄5点(555～559)・五輪塔1点(329)とともに出土した(第23図)。また、出土した陶磁器は、いずれも破片ではあるが、その質の高さ、量・種類の多さは、県内でも有数である。茶や香、座敷飾りに使用された奢侈品が多数出土したことに加えて、城館や寺院などに特徴的に認められるであろう瓦器も出土しており、遺物組成は一般的な集落の在り方とは異なる。加えて、多数のヒトの焼骨が破片の状態でごく散漫に出土したことも特筆される。このことは、近隣に葬送に関する場が存在したことを示している。これらの状況を総合すれば、姫御前遺跡と同様に、竹花遺跡で祭祀が行われたとみることができよう。

b 出土状況

多数出土した箸状木製品・棒状木製品の多くは破損しており、Ⅱb層中から横たわるような状態で出土した(図版145等)。しかし、27点については地面に突き刺したような状態で検出した。垂直に突き刺したSX209(図版57 10・10')・SX26(図版65 3・3')、斜めに突き刺したSX7・15(図版63 2・2'・3・3')がある。また、SX2は、両口箸の一端から地面に突き刺したものの、その際に折れた残りの他端に地面に突き刺したようである(図版64 7・7')。あるいは、あらかじめ箸を折って、2方向から突き刺した可能性も考えられる。同様の事例は、姫御前遺跡の18年度調査区において検出している(SX1)。このような状況から、古墳時代前期の遺物包含層(Ⅲ層)出土の箸状木製品は、地面に突き刺されたものも含まれると考えられる。

また、13点の棒状木製品も地面に突き刺したような状態で検出した。棒状の杭や板等が、地面に打ち込まれた様子も認められる。棒状の杭が打ち込まれたものは、SX3・4・21・22(図版59)、SX9・13・19(図版63)、SX6・11・12(図版64)、SX25(図版65)があり、垂直というよりは斜めに地面に突き刺すものが多い。SX9は、有頭状の木製品であるが、これは人形と見ることができ、祭祀的な要素を見出すことができる。板を打ち込むものは、SX1・20(図版63)、SX23(図版65 2・2')がある。古墳時代前期の板杭のように先端を尖らせず、端部を平坦に断ち切った板を突き刺している。

以上のように、いずれも地面に突き刺すことにおいて共通することが分かる。祭祀遺物の出土も考慮すれば、当遺跡を単なる廃棄場として理解すべきではない。



第 23 図 竹花遺跡における中世祭祀遺物の出土位置

D 弥生時代終末期～古墳時代前期の遺構

(1) 畦 畔

SX215 (図版 57・58・135・140・142)

R5区でIV1層に覆われて検出した。黒色の草本質泥炭に覆われていたため、灰色の盛土頂部を帯状に目視できたことにより検出できた。したがって、層的にIV1層よりも古い段階に位置付けることができる。裾の幅は2.5mほどであるが、中央部分が1.2mの幅で1段高く盛り上げられている。盛土の厚さは15cmほどであるが、圧密がかかった結果であり、当時はより高い盛土であったと推定される。盛土材は、地山よりも粘性の高いシルトが用いられており、芯材と見られる自然木が含まれていた。このような状況は、羽羽村西谷遺跡における弥生時代後期の「木道状遺構」〔滝沢ほか1992〕と共通する。しかし、西谷遺跡ほど芯材が多量に埋め込まれることはない。芯材には人工的な遺物はほとんど認められなかったが、鍬身(469)・板材(470・471)・土師器(291～294)・横刃形石器(337)・礫がわずかに含まれた。特に鍬身は、ほかの芯材よりも深い盛土の最下部から出土した。土師器の残存状況は良好で、器形を復元することができ、丸底壺が多いことが特徴的であることが明らかになった。また、SX215の盛土頂部付近には、杭が打込まれていた(図版57 3-3'～6-6'・8-8')。4-4'～6-6'付近に集中する傾向にあり、3-3'と8-8'の杭が離れて単独で存在する。杭の長さや間隔はまちまちであり、目的は定かでないが、民俗事例では耕作者の境界を示すことがある。検出した畦畔の長さ17m間の主軸方向はN87°Eであり、ほぼ東北方向である。出土した土師器(291～294)の形態からは、前期中葉(新高シホ編年8～9期)に位置付けられる。したがって、IV1層の堆積時期は前期中葉以降ということになる。

SX33 (図版 59～62・136・140・142～144)

R6・7区で検出した。本遺構は、足場を確保するために板材を敷き詰めた木畦畔であり、掘り込みや盛土は認められなかった。一見、羽羽村西谷遺跡における木道状遺構〔滝沢ほか1992〕と似るが、盛土が認められないこと、板材が敷き詰められていることにおいて大きく異なる。自然木でなく、板材を敷くことで、平坦な足場を確保することができ、盛土する必要がなかったのであろう。本遺構においては、幅1.5mほどの間に、建築材を中心とする板材(535～538)が、直線上に複数枚重ねられていた。使用を経て、沈むたびに板を重ねた結果と考えられる。主軸方向は、N37°Wと西偏し、65A9グリッド付近で東西方向の木畦畔(N72°E)と交差する。この交差する木畦畔は西側に延伸するのみで、東側には広がりが認められなかった。両者は直交関係にないものの「T」字状に交わり、主軸を超えて延びないことから併存した可能性が高いと考えた。

当遺構においては、当時の土木技術等を知る上で貴重な所見も得られた。足場となる板材が左右に動かないように、要所に杭が打たれていた(図版60)。板材を剥がすと、その下部からは、多数の自然木を検出した(図版61下面)。おそらく、足場板の沈降をあらかじめ防ぐための芯材であったと考えられる。また、足場板の下位からは自然木のほかに、土器片(303～311)・木製農耕具(519～523)・ヒスイ原石(333)・横刃形石器(334)が出土した。特に、畦畔の交点付近には、ほぼ完形の高杯(309)とセット関係にある鍬身(520)・鍬柄(523)が出土したことは注目される。遺構の重要な変換点において、これらの遺物が出土したことを偶然的な事象と捉えずに、祭祀行為を意味すると積極的に捉えたい。なお、このような出土状況は、異なる主軸方向の畦畔が併存すると判断した根拠の一つとした。また、蓋と判断した311は精巧な作りで、県内でもほとんど類例をみない器形であり、特異性を見出すことができる。土器片は、畦畔

の低位以外からは出土しておらず、畦畔構築時に意図的に撒かれた可能性がある。同様の事象は、時代が異なるが平安時代（9世紀）の水田にも見られ（村上市西部遺跡〔土本²⁰⁰⁸、村田²⁰⁰⁹〕）、何らかの意図を読み取る必要があろう。むしろ、これらの出土状況を偶然の結果と捉えることは合理的でなく、構築時の祭祀に伴う遺物である可能性を考えるべきであろう。

検出層位は、図版 60 9・9'～11・11'の断面図からも明らかとなり、IV 1層上面～IV 2層中位にかけて板材が存在する。本来の遺構検出面はIV 2層上面にあり、IV 1層堆積後まで継続的に利用されたと考えられる。IV 1層の堆積年代を新潟シンボ編年 8～9期以降に位置付けることができる。一方、IV 2層の堆積時期は、後述する SX119 において弥生時代終末期（新潟シンボ編年 5期）に位置付けられる。そこで SX33 から出土した土器を見ると、弥生時代後期～古墳時代前期後葉の時期幅の土器（303～311）が認められる。この中で、最も新しい時期に比定できる高杯 309 は、新潟シンボ編年 11～12期に相当する。遺存率が最も高い個体でもあり、これが遺構の年代を反映すると考えられる。したがって、IV 1層の堆積年代を中期初頭（新潟シンボ編年 11～12期）以降に位置付けられる。この個体は、板材下位のIV 2層から出土したものであるが、IV 2層の堆積年代と整合しない。本来の出土層位は、IV 4層の下面または上面にあったものの、軟弱地盤であるため沈んだ板材の上に別の板材を重ねられたことにより、原位置より沈下したものと考えられる。なお、SX33 から出土した土器の年代幅は、供給源となる遺跡の存続年代を示すと考えられる。隣接する姫御前遺跡出土土器の年代幅とも重複しており、相互の関係を想定できる。

SX34（図版 64・136・144）

R6・7区で検出したスギの倒木を転用した木畦畔である。IV 2層を覆い、IV 1層に覆われるように検出した。基本堆積IV 2層上面が遺構検出面であり、若干、沈降しているものと考えられる。断面図上は、畦畔周辺を盛土しているようにも見えるが、耕作時の踏み込み等によって周囲の田面（IV 2層）が沈降した結果と想定される。主軸方向はN41°Wであり、SX33とほぼ同じ軸（4°のずれ）で、約20mの間隔を以て形成される。底面側が平坦になっており、あるいは偏平割材または削り出し材〔猪狩 2004〕を敷いた可能性がある。上面は、やや平坦であるが、腐蝕が著しく加工の有無は確認できなかった。同様の木畦畔は、刈羽村西谷遺跡（弥生時代後期）に類例が見出される。出土遺物はなく当遺構の年代は定かでないが、IV 2層は新潟シンボ編年 5期、IV 1層は 11～12期以降に堆積したと考えられることから、この間に位置付けられる。SX33と主軸方向が一致することを考慮すれば、11～12期に位置付けられる可能性がより高い。

SX39（図版 65・66・137・144）

R6・7区で検出した盛土によって構築された畦畔である。IV 2層を覆い、IV 1層に覆われるように検出した。黒色の草木質泥炭であるIV 1層に覆われていたため、灰色の盛土頂部を帯状に目視できたことにより検出することができた。したがって、層位的にIV 1層より古い段階に位置付けることができる。また、中世の水田遺構 SX30 に切られていることが明らかであった。SX30 に破壊されたと考えられる SX36 の西側延長上にトレンチを設定したが、SX30 の残存部分を検出することはできなかった。規模は幅 90cm、厚さ 10cm ほどで、長さは検出範囲で 10m である。盛土には、数少ないながらも芯材とした板材や礫・土器片が含まれていた。また、盛土の低位からは、ナスビ形曲晒椀が 2 点、並ぶように出土した。これらの状況は、SX215 の状況に酷似する。同様の過程を経て、構築された様子を理解できる。主軸方向は、N89°E とほぼ東西方向を示し、SX215 とほぼ平行する（2°のずれ）。古墳時代前期と判断できる

土師器 (301・302) が出土したものの、時期の詳細は明らかでない。IV 2 層上面が遺構検出面であること、SX215 と平行関係にあることから古墳時代前期中葉 (新潟シンボ編年 8 ~ 9 期) に位置付けたい。

SX119 (図版 69 ~ 76・138・139・147・148)

R8 区で検出した。本遺構は、足場を確保するために板材を敷き詰めた木畦畔であり、掘り込みや盛りは認められない。SX33 と同様、明らかな人工品である板材が敷き詰められた事例である。途中で途切れる部分はあるものの、直線上に幅 20 ~ 30cm ほどの板材が 3 枚分 (重複している部分があり、足場板として機能したと推定されるものは 9 枚ほど) が並べられていた。73・74 列の境界周辺が、損壊しているが、SD109 の北側に沿うように直線上に並ぶ様子を理解できる。主軸方向は、N80° E である。

板の下部には、直交するように枕木が敷かれており、沈下防止の対策が講じられていたことが分かる。特に、図版 71 の 2 - 2' 及び 3 - 3' の断面は、棒を地面に突き刺した後に 90 度折り曲げ、その上に板を載せていることが分かった。このことにより、枕木を固定することができる。また、地面に突き刺している両側は、SD109 に向かって傾斜している。突き刺して、折り曲げることによって 8cm ほどの高さが設けられており、これにより足場板の水平を維持することができる。これらの効果を期待して枕木を設置したものと想定できる。また、足場板の両側には杭が打設されていた。杭の位置は不規則であるが、板の横ずれを防止することを目的としたのであろう。

SX119 の北側には深さ 10 ~ 15cm ほどの浅い窪地が広がり、その範囲に杭や板杭が多数、打ち込まれていた。特に、配置に明瞭な規則性は見出されないものの、いずれも最も深い部分に直線上に並ぶ傾向にある。目的は定かでないが木畦畔と直交する位置にあり、相互の関連性を想定できる。木畦畔や木道のような施設の一部、または水田の境界を示す可能性が考えられよう。

SX119 から南側に存在する SD109 側には、多数の木製品 (472 ~ 518)・自然木が出土した。木製品には、木製農具 (一木鋤・払い鋤・鋤風の柄・田下駄)・建築材 (梁桁材・垂木・台輪・板垣根材)・椅子の脚部・割物容器・天秤棒・板杭・板状木製品・棒状木製品があり、バラエティーに富む。木製農具が含まれる点は、ほかの畦畔と同様の状況にあるといえる。これらの木製品は、畦畔部分を除けば雑然とした分布を示しており、SD109 へ投棄されたようにも見える。目的は定かでないが、何らかの意図をうかがい知ることができる。出土遺物の大半は木製品であるが、ほかに数少ないながらも土器 (295 ~ 300)・貝殻状剥片 (326)・勾玉未成品 (332) も認められた。遺物の出土状況 (図版 74 ~ 76) を見ると、同一個体が上面から下面にかけて存在することが分かる。上下での時期差が存在する可能性は低く、一括性の高い遺物群と考えることができる。

検出層位は、火山灰を含む IV 2 層 ~ V 1 層であり、草本質泥炭 IV 1 層の明らかに下位である (図版 71・138)。出土した土器 (295 ~ 300) は、遺存率が低く年代を明瞭に把握することは難しいが、最も残存状況が良好な 300 は、新潟シンボ編年 5 期に位置付けられ、296 もそれに類似するものと評価できる。前期前葉に下としても、弥生時代後期の土器の系譜にある一群であり、当遺跡において最も古い段階に位置付けることができる遺構である。姫御前遺跡居住域の火山灰包含層 III c 層は、下位から 5 期、上位から 6 期の遺物が出土している。これらの状況を総合的に判断すれば、火山灰を含む IV 2 層を 5 期に位置付けることができる。したがって、SX119 を弥生時代終末期に相当する 5 期に位置付けたい。

(2) 溝

SD32 (図版 59 ~ 63・142)

R6・7 区の東側に位置する SD32 は、幅 60cm、深さ 10cm ほどの浅い溝で、検出範囲の長さは 15m

ほどである。長軸方向は N85° E とほぼ東西方向を示し、畦畔 SX39 (N89° E)・SX215 (N87° E) とほぼ同一の軸に掘られている。SD32 の上には板を敷き詰めた畦畔 SX33 が乗るように構築されていること、SX33 の前後で SD32 が途切れないことから、SD32 → SX33 という変遷をたどることができる。先述のとおり、SX39・SX215 は新潟シンボ編年 8～9 期、SX33 は 11～12 期に比定できる。この切り合い関係と遺物の年代観を踏まえれば、SD32・SX39・SX215 (8～9 期) → SX33・SX34 (11～12 期) という変遷を理解できる。また、SD32 については、主軸の共通性から SX39・SX215 と同様に畦畔である可能性も考えた。しかし、断面観察で盛土が認められないこと、覆土中に遺物を含まないことにおいて、畦畔とは検出状況が異なる。東端が途切れているため（検出できなかったため）、性格について言及することは難しいが、水田耕作に伴う水路または排水路と考えられよう。なお、平行関係にある SX39 は南側約 19m、SX215 は北側約 15m に位置する。SD32 は、SX39 と SX215 のおおよそ中間に位置するといえ、これらが同時期に築かれた可能性が高いと考えられる。

SD40 (図版 65・67・144)

R6・7 区の西端、Ⅷ層上面で検出した。北端ではⅧ層まで掘り込まれない部分もあるが、この部分以外ではⅧ層を 5～10cm ほど掘り込んでいる。また、図版 65 12・12' の断面図からも分かること、SD40 の両側にはⅤ 1 層を基調とし地山 (Ⅷ層) ブロックを混交するⅤ 2 層が幅 80cm、厚さ 20cm 盛土されている。この盛土を平面上で検出することはできなかったが、本来はこれら高さも加わると考えられる。SD40 掘削時に生じた土砂で盛土したのであろう。遺構の時期は、出土遺物が底部 313 のみであり、時期の詳細を比定することはできない。一方で、Ⅴ 2 層よりも下位に検出面があることは確実である。Ⅴ 2 層の堆積時期が新潟シンボ編年 5 期であることから 5 期以前といえ、弥生時代後期の遺構と位置付けることができる。

SD102 (図版 68・147)

R8 区で検出した「S」字に蛇行する溝である。規模は、幅 120cm、深さ 15cm ほどである。溝の両側には、高さ 10cm、幅 150cm ほどの盛土が認められた。盛土中及び溝の壁面には、板材や自然木が含まれており、盛土の強度を増すために意図的に混入させた芯材と考えられる。SD102 は、Ⅴ 1 層上面で検出した SD109 とほぼ同じ位置に存在する。洪水等で短期間のうちに埋没し、掘り直された溝が SD102 と考えられる。Ⅴ 1 層に覆われており、草本質泥炭の堆積直前まで機能した溝と判断できる。したがって、SX119 と近い層準に位置付けられる。しかし、SX119 はⅤ 2 層中に含まれており、SD109 はⅤ 2 層を覆土とする。したがって、SX119・SD109 がⅤ 2 層堆積段階に、SD102 がⅤ 2 層堆積後かつⅤ 1 層堆積以前に位置付けることができる。

長軸方向は、蛇行するため、より長い範囲で計測したところ N87° W であった。4°～8° ほどのずれはあるが、草本質泥炭であるⅤ 1 層に覆われた畦畔 SX39 (N89° E)・SX215 (N87° E)、溝 SD32 (N85° E) と長軸方向が一致し、検出層位と調和的に理解することができる。Ⅴ 1 層が盛土を覆われ、Ⅴ 2 層を覆うこと、SX39・SX215 から出土した土器の年代観から、新潟シンボ編年 8 期に位置付けることができる。

SD109 (図版 69～76・139・147)

R8 区で検出した「S」字に蛇行する溝である。溝の規模は、幅 130cm、深さ 40cm ほどである。先述のとおり、SD102 とほぼ同じ位置に認められるが、Ⅴ 2 層・Ⅴ 1 層を覆土としており、Ⅷ層上面が遺構検出面となる。隣接する SX119 はⅤ 1 層の上位で検出したことから、厳密に言えば SD109 より新しく位置付けることができる。すなわち、SD109 の掘削後に周辺一帯にⅤ 1 層が堆積し、SX119 が構築さ

れたと考えられる。このとき SD109 は埋まり切っておらず、足場板から 10cm 以上の深さがあつたことから、溝としての機能は果たしていたと考えられる。また、下流部 (SX119 の西側) には V 1 層が堆積していないことから、V 1 層が除去された可能性が考えられる。出土遺物はないが、IV 2 層が弥生時代終末期 (新潟シンボ編年 5 期) に位置付けられることから、それ以前に位置付けることができる。したがって、SD40 とともに、当遺跡で最も古い段階に位置付けることができる。なお長軸方向は、蛇行するため、より長い範囲で計測したところ、ちょうど東西方向を示した。

(3) 遺物集中範囲

SX38 (図版 65・67・144)

畦畔を検出した IV 層よりも下位の V 1 層において遺物の集中範囲が認められた。V 1 層は、R6・7 区西端の斜面部分と R8 区にのみ、局所的に存在する層である。SD40 は平坦部と斜面部の境界付近で検出したが、SX38 の立地は斜面地に相当する。斜度 19° と急傾斜である上、地山が粘性を帯びていたため、記録作業・遺物の取り上げ作業には難渋した。遺物の分布は、等高線に沿うように細い板材が直線上に配置され、これと直交する板材も一部に認められた。等高線に沿うように配置された板材の主軸方向は、N27° W で西偏する。樹種は、一部しか同定していないものすべてスギと見られる。何らかの施設と思われるが、設置の目的は明らかでない。畦畔と同様に、木製農耕具が伴うことが特徴的であった。農耕具の柄 2 点 (465・466) が、向きを同じにして折り重なるように出土しており、原位置を留めていると見られた。何らかの意図をもって、据え置かれたものと考えられる。

3 遺 物

A 概 要

竹花遺跡では、II a 層から 17 世紀代、II b・III 層から 15～16 世紀代、IV 層から古墳時代前期を中心とする遺物が出土した。140m 西側の姫御前遺跡の層位と対応し、出土遺物の年代も一致する。

II a、II b 層中の出土品でもっとも多いのは中近世の陶磁器で、II a 層中から 545 点、II b 層中から 2294 点出土した。陶磁器は破片であるもののバラエティーに富み、14～17 世紀代の生活雑器のほか、茶や香、座敷飾りに使用される奢侈品が多数出土したことに加え、城館や寺院などから特徴的に出土する瓦器も認められた。自然科学分析により調査地点は、中世～近世にかけて水田であったと想定できるものの、茶や香を嗜むことができる財力のある階層が付近に存在したことをうかがい知ることができる。また、地上と地界をつなぐ祭祀品とされる箸状木製品・人形・動物形・刀形・斎串・笹塔婆・下駄といった祭祀遺物の存在が特徴的である。特に、箸状木製品は地面に突き立てられたような状況にあり、水辺の祭祀が行われたことを示している。多数出土した銭貨も、これらの木製品と同様の性格を持ったものと考えられる。このような遺物の構成は姫御前遺跡の状況に類似するが、竹花遺跡のほうが質・量ともに上回る。加えて、五輪塔や多数のヒト焼骨が破片の状態で散漫に出土したことも特筆される。このことは、近隣に葬送に関する場が存在したことを考えさせる。竹花遺跡の北側 200m には冷泉為広が宿泊した観音寺 (14 べり) があり、相互の関係が想定される。

IV 層からは、弥生時代終末期～古墳時代前期の遺物が出土した。ほぼ畦畔部分のみからしか出土しなかった。姫御前遺跡 20 年度調査区と同様の年代観を示す遺物が多いが、総じて古手の遺物が多く、弥生

時代終末期の遺物が目立つ。しかし、古墳時代前期の遺物と混在している場合が多く、遺構そのものの年代は、古墳時代前期のものが多く、しかし、層位的に深いIV 2層からは弥生時代終末期(新潟シンボ編年5期)の遺物のみしか含まれておらず、古墳時代前期の遺構と区別することができる。当該期の遺物として特に注目されるのは、木製遺物である。畦畔の芯材や足場板として利用されたもので、建築材・木製農具・形代・部材・杭等、多様な遺物が認められた。特に木製農具は、県内でも有数の良好な資料であり、注目される。木製農具の樹種は、柄の一部と田下駄にスギが利用されているが、農耕具においてはアカガシ亜属3点、アサダ7点であった。アサダの多用は、他地域では見られない特徴的な用材といえる。また、畦畔中には横刃形石器が含まれていた。同様の石器が出土すると、縄文時代の遺物の混在と理解されがらだが、古墳時代前期まで継続的に利用されることを裏付ける事例といえる。

B 土器・陶磁器・漆器・土製品

(1) 中世～近世

掲載の方針及び、分類・年代観を参考とした論考は姫御前遺跡Ⅱ(第Ⅲ章3B1)に同じである。

a 椀 類 (図版77・149-1~46)

1~15は天目椀である。1・2は中国産の舶載天目椀で、ともに精良な胎土で器壁が薄い。14世紀後半~15世紀前半に位置付けられる。3~13は瀬戸美濃である。11~14は無軸部に鉄槌を施す。4・5・10は被熱している。年代は、3は古瀬戸後期様式Ⅱ期、4~7は古瀬戸後期様式Ⅲ期、8・9・13は古瀬戸後期様式Ⅳ期、10~12は大窯4期、14は高台胎に平坦面を有していることから古瀬戸後期様式~大窯段階に位置付けられる。15は肥前系陶器である。内外面に灰軸を施す。灰軸の軸調は緑味を帯びており、大橋Ⅰ期の特徴を示しているが、器壁が薄く、大橋Ⅱ期まで下る可能性がある。

16~31は龍泉窯系青磁である。16~22は端反の無文椀である。16~19は軸葉を薄く掛けるタイプで、薄軸端反椀である。器表にはロクロ痕が明瞭に認められる。20~22は比して軸葉を厚く掛けるタイプで、厚軸端反椀であり、16~19に後出する。年代は前者が14世紀初頭~15世紀前半、後者は1430年代~15世紀代である。17・20は被熱している。17は見込みの内底に沈線が一条巡る。23は内面に割花文が施される椀で、12世紀中頃~後半の所産である。24~28は外面に蓮弁文を施すもの。24~26は片刃状工具により蓮弁を作出する。24・25は蓮弁の中央に筋を有する。26は幅広の蓮弁で筋を持たず、24・25に後出する。27・28は蓮弁を籠描きするもので、27は蓮弁の単位と上位の山形文の単位が合致しない粗雑なものである。28の内面には割花文を配する。29~31は底部である。いずれも、細い高台を有し、高台内は無軸となる。31の見込みには印花文がスタンプされる。

32・33は白磁である。32は端反の椀で、森田C群と考えられ、いわゆるピロースクタイプである。灰白色の緻密で硬質な胎土である。33は内面に籠描割花文を有する椀である。いずれも、内外面に横位の擦痕が多量に認められ、特に内面に多い。

34は李朝陶器と考えられる。内外面に葉灰軸が掛かる。高台は「ハ」の字状に開く削り出し高台で、畳付は糸切りの痕跡が認められる。李朝陶器は初期肥前系陶器と類似した作陶技術を有しており、両者の識別は難しく、肥前系陶器の可能性も否定できない。

35は青花である。外面に圏線一条と飛雲文、内面に四方禪文を配する。小野B群と考えられ、14世紀末~15世紀前半の所産である。

36～42は瀬戸美濃である。36～39は平椀である。36は口径の小さなもので、口縁部が強く屈曲する。被熱しており、年代不詳である。38は外面に窯着物が認められる。37・38は古瀬戸後期様式Ⅱ期、39は古瀬戸後期様式Ⅲ期の所産である。40～42は山茶椀と考えられる。いずれも灰白色の精良な胎土を有し、全面無軸である。胎土は古代の東濃系灰軸に類似することから、東濃系山茶椀と考えられる。41は第9型式、42は第9～10型式、40は第11型式に比定される。

43は越中瀬戸の丸椀である。内外面に鉄軸を施す。17世紀代の所産と考えられる。

44は肥前系陶器である。腰張りの椀であろうか。向付の可能性もある。高台を除き、内外面に長石軸と灰軸を混ぜ合わせた施軸を行う。軸測から大橋Ⅱ期に位置付けられる。

45・46は漆器椀である。45は底部片で、全面に黒漆を塗布する。畳付の部分は剥落しているが丸みを帯びており、使用している間に摩耗したものと考えられる。46は胴部下半で屈曲する器形で、内外面に黒漆を塗布するが、見込み中央には赤漆で手描きによる笹文を上描きする。

b 皿 類 (図版 78・79・149～151 - 47～160)

47～53は青磁である。47は厚軸端反皿で、1430年代～15世紀代の所産である。48・49は端反篋描蓮弁紋皿で、1440年代～15世紀代の所産である。47・48は被熱している。50・51は稜花皿である。ともに口唇部を輪花状にし、波状文を施す。15世紀末～16世紀前半の所産である。52・53は底部である。52は薄軸端反皿の底部で、見込みに印花文を施す。14世紀～15世紀前半の所産である。53は腰折皿で、見込みには双鱼文を陰刻する。15世紀後半の所産である。52・53はどちらも、高台内は無軸となる。

54は青白磁である。薄い器壁で、端反となり、外面に細い篋書きで蓮弁紋を施す。

55～64は白磁である。55は口縁が小玉緑状を呈する。内面には口縁部直下と底部境に沈線を巡らせる。色調は灰オリーブ色を呈する。白磁Ⅶ類と考えられ、山本Ⅱ期後半の所産で、12世紀後半に位置付けられる。56は端反の皿で、森田C群と考えられ、いわゆるピロースクタイプである。灰白色の緻密で硬質な胎土である。椀32とセット関係にあると考えられる。57・58は内湾皿である。いずれも、軟質な胎土で、外面胴部下半は無軸であり、15世紀代の所産である。59は口縁が内湾する皿で、口唇部は玉緑状を呈する。灰色の緻密な胎土で、内外面の色調は灰色掛かったオリーブ色を呈する。55と作行きが似る。天地逆で、蓋の可能性もあろうか。60は小玉緑状口縁を有する皿で、小野E群に比定され、16世紀代に位置付けられる。61は端反皿で、被熱している。小野C群に比定され、16世紀前半に位置付けられる。62は端反の皿であるが、器壁が薄い。16世紀末～17世紀初頭の所産である。63は小野E群の底部と考えられる。畳付周辺を丁寧に軸割し、高台内には放射状カンナ痕が認められる。被熱している。64は挾高台内湾皿の底部と考えられる。高台をアーチ状に作出し、高台付近には軸を掛けない。高台内には漆で「〇」を描く。15世紀代の所産である。65・66は李朝陶器である。どちらも、全面に薬灰軸を掛け、内外面に砂目積の痕跡を残す。66はやや大型で器壁も厚いことから、平椀型の底部の可能性もある。

67～72は青花である。67～71は景德鎮窯系である。67・70は端反皿で、小野B1群に比定される。68・69は鉢筒底で、高台付近の軸を割ぎることから、小野C群である。71は小野E群の底部と考えられ、16世紀後半の所産である。72は漳州窯系である。白濁した軸測を呈し、只須の発色も悪い。漳州窯系青花の胎土は一般的に陶質のものが多く、本品は磁質である。畳付は軸割ぎせず、窯床の砂が付着する。16世紀末～17世紀前半の所産である。

73～93は瀬戸美濃である。73～76・78は折縁小皿ないしは折縁皿である。74・75はその可能性

のあるものである。73～76は古瀬戸段階のもので、平底で外面には口縁部のみ灰軸を施す。78は大室段階のもので、高台を持ち、灰軸を全面に掛ける。73は古瀬戸中期様式Ⅲ期、75・76は古瀬戸後期様式Ⅱ期、74は古瀬戸後期様式Ⅱ～Ⅲ期、78は大室4期前半の所産である。77は稜皿である。高台を削り出し、内外面の胴部に鉄軸を施す。大室4期の所産である。79はヒダ皿で、大室3～4期の所産であろう。80～83は縁軸小皿である。80は古瀬戸後期様式Ⅳ期古段階、81～83は大室1期前半の所産である。81・83は口縁部や内面にススが付着しており、灯明皿として使用されたと考えられる。140m離れた姫御前遺跡でも瀬戸美濃大室1期の縁軸小皿を灯明皿に使用している例が多々見られることから、当該期にそうした慣習が存在したと想定できる。84は丸皿で、全面に灰軸を施す。内面には丸ノミ状工具でソギを入れる。大室2期前半の所産である。87と88は端反皿である。ともに灰軸を全面に掛ける。88は被熱する。88は大室1期後半、87は大室2期後半の所産である。89～91は卸皿である。89・90はともに古瀬戸後期様式Ⅱ期と考えられるが、口縁形態が異なることから、時期差があるのかもしれない。91は古瀬戸後期様式におさまると考えられる。92は志野皿である。内外面に長石軸を厚く掛ける。大室4期末の所産である。93は瀬戸美濃で、灰軸が内底面まで掛かる皿型の底部である。底部には、回転系切り痕が認められる。器種は不明であるが、釉調から古瀬戸後期様式か。

94～136は中世土師皿である。姫御前遺跡Ⅱと同様、大きく「手づくね成形」と「ロクロ成形」に二分され、さらに主に法量により細分されるが、分類基準は第2表と同じである。94～110はロクロ成形の土師皿である。いずれも底部を回転系切り技法によって切り離される。94・95は1類である。器壁が直立に近い箱形を呈する小型の皿である。96～107は2類である。97・98・100・107などは口径に比して器高が高く、2類の中でも細分できる可能性がある。96・99・100・102・104にはススが付着しており、灯明皿として使用されたと考えられる。108～110は4類である。口縁は、内湾するもの(108・110)と緩く外反するもの(109)がある。110にはススが付着する。111～136は手づくね成形の土師皿である。111～113は1類である。111は底径が広く厚手で、底部境にのみ指頭圧痕が認められる。112も厚手であるが、底径は小さい。113は器壁が薄く、ススが付着する。114～121は2類である。120はほかと比して厚手で、混入物も多い。いずれも、胴部に指頭圧痕が認められるが、114・116・118・119・121の内面はナデ消している。119と121は胎土が精良であり、119の底部は上げ底状になる。114・116・118～121にはススが付着する。122～125は3類である。いずれも薄手で、内面は指頭圧痕をナデ消している。123のみススが付着する。134～136は4類で、深身の皿である。134は内外面ともに横方向のナデを施す。135は厚手で、胎土に混入物が多い。120(2類)に似る。126～131は5類である。126は厚手で、胎土の混入物の多さは120に似る。胴部中央の屈曲は、127・131は強いが、128～130は無いまたは弱い。126にはススが付着する。132・133は6類である。132は器壁が薄く、133は厚い。どちらも、胴部に指頭圧痕を有している。土師皿の年代は、手づくね1類の中で形状の異なる111が14世紀代で、ロクロ成形のものは15世紀代の所産と考えられる。111を除く手づくね成形のものは、大半が15世紀後半と考えられ、一部器壁の厚いタイプ(102・120・126・133・135)が16世紀にまで下る可能性がある。土師皿の中にはススが付着し、灯明皿として使用されたと考えられるものが多々あるが、その中でも、手づくね成形2類とロクロ成形2類に多い。両者は口径が7～10cmと小型のタイプであり、大きさが似る。この状況は姫御前遺跡Ⅱと同じである。

137・138は漆器皿である。137は大口径の皿である。内外面の全面に黒漆を塗布した後、赤漆を広範囲に上塗りしている。そのため、赤漆の下から下地である黒漆が透けて見える部分が多々ある。高台

内には赤漆により三つ星紋が施されている。138は底部片で、全面に黒漆を塗布する。畳付の部分は剥落しているが丸みを帯びており、使用している間に摩耗したものと考えられる。見込みには段を有する。45・46(椀)と137・138(皿)の漆器の一群は、①輪高台を有する、②赤漆を用いた装飾の存在、③内面有段の皿の存在、④器壁が薄く器高の低い椀と皿の中間の器形などの特徴から、大武遺跡報告書で示された編年という9期～10期(14世紀～15世紀後半)[春日2000]に比定できる。

139～150は肥前系陶器である。139～141・143は口縁が内湾する丸皿である。143は口縁端部を打ち欠くが、スガが付着しており、灯明皿として使用されたと考えられる。139・141・143は木灰軸を、140は藁灰軸を掛けるが、いずれも外面胴部下半は無軸となり、胎土目は観察されない。一方、144は底部片であるが、見込みに胎土目を認めることができる。大橋Ⅰ期の所産である。142は端反碗である。外面胴部下半は無軸で、木灰軸を掛けることから大橋Ⅰ期に作りかたが似るが、胎土及び器形は大橋Ⅱ期のものに似る。ここでは、大橋Ⅰ～Ⅱ期の所産としておく。145～149は溝緑皿である。145・146・150は見込みに砂目認められる。また、148・149には鉄絵の可能性のある装飾が施される。大橋Ⅱ期の所産である。

151～160は越中瀬戸である。151～158は丸皿である。高台はすべて削り出し高台である。151・153・157・158は鉄軸、それ以外は灰軸である。152と156の見込みに印花文が施される。151に内面には明瞭な軸止め段を有するが、それ以外は不明瞭である。159は向付である。160はヒダ皿である。いずれも、17世紀前半～中頃の所産である。

c 鉢類・蓋・茶入・合子・瓦器・杯・香炉・瓶子・水注・灯明受皿・盤(志野)・匣鉢型容器(図版80・151・152・161～201)

161～168は鉢類である。161～166は瀬戸美濃である。161・162は大皿である。全面に鉄軸を施すもので、162は口縁部を打ち欠いている。スガが付着していることから灯明皿か、大窯期の所産である。163・164は碗形鉢である。内面と胴部外面上半に灰軸を施す。底部は貼り付け高台。163は古瀬戸後期様式Ⅰ期、164は古瀬戸後期様式Ⅲ期の所産である。165は卸目付大皿の口縁部と考えられる。内外面に灰軸を施す。166は折縁深皿である。内外面に灰軸を施す。古瀬戸後期様式Ⅲ期の所産である。167・168は肥前系陶器である。いずれも灰軸に鉄絵を施す、いわゆる「絵唐津」である。いずれも、口唇に帯状に施文するいわゆる「皮鯨手」で、167にはさらに内面に鱗状の文様を施す。167は八寸皿、168は碗形の鉢で向付か。いずれも大橋Ⅰ期の所産である。

169は瀬戸美濃の蓋で、合子の蓋と考えられる。上面に灰軸を施す。底部の凸部には回転糸切り痕が認められる。古瀬戸後期様式の所産である。170は瀬戸美濃の茶入の底部である。内面に鉄軸を施し、底部は回転糸切り技法により切り離される。古瀬戸後期様式か。171は青白磁の合子の胴部片である。内面は無軸であるが、肩部には一部施軸が見られる。外面には花文が隔刻される。172は瓦器である。遺存率が低く、全容は判然としないが、口縁上端は平坦で、口縁直下に一条の突帯を巡らせる。その下位には巴文が押印される。火鉢であろうか。

173～177は杯である。173～175は白磁である。173は腰折杯である。15世紀前半～中頃の所産である。174・175は端反杯である。173に後出するタイプである。174は腰部に屈曲部が見られ、腰折れ杯に分類すべきか。15世紀中頃～16世紀前半のものと考えられる。176は景德鎮窯系の青花で、端反の小杯である。内外面に沈線を施すもので、16世紀末～17世紀初頭の所産であろう。177は瀬戸美濃である。内湾する器高の低い小杯で、内面及び外面口縁部に鉄軸を施す。鉄軸の軸塗は天目碗のもの

と同類である。底部は回転系切り技法によって切り離される。古瀬戸後期様式Ⅲ期の所産である。

178～183は香炉である。178・179は青磁である。178は口縁部である。上端は平坦で、内側に突出する。179は胴部片で、八卦文が陽刻される。内面は無軸。180～183は瀬戸美濃である。180・181・183は袴腰香炉で、180・181は鉄軸、183は灰軸を施す。いずれも、内面と胴部下半は無軸である。182は底部片で、183とともに脚が付く。180は古瀬戸後期様式Ⅱ期、181は古瀬戸後期様式Ⅱ～Ⅲ期の所産で、183は古瀬戸後期様式と考えられるが、詳細は不明である。

184～196は瓶子類である。184～194は瀬戸美濃である。184～186は灰軸を施す瓶子の口縁部で、184・185は梅瓶型の瓶子Ⅱ類、186は広口の瓶子Ⅲ類と考えられる。年代は、184・185が古瀬戸中期Ⅲ期、186が古瀬戸後期様式Ⅳ期古段階である。187・188は外面に鉄軸を施すもので、花瓶の胴部と考えられる。古瀬戸後期様式の所産であろうか。189・190は外面に灰軸を施す瓶子の肩部である。189は無文、190は草花文を彫刻する。いずれも、古瀬戸中期様式～後期様式前半の所産であろう。191・192は花瓶の底部で、古瀬戸後期様式の所産である。底部には回転系切り痕が認められる。191の内面には窯着物が付着する。193は外面と内面口縁部付近に灰軸を施す広口の瓶子で、瓶子Ⅲ類である。古瀬戸後期様式Ⅲ期の所産である。194は瓶子Ⅲ類の胴部片であろうか。内外面に灰軸を施す。外面には沈線が一条巡る。195は白磁の瓶子または壺の胴部片で、中世前期の可能性があり、196は肥前系陶器の瓶である。青みの強い灰軸を施し、いわゆる「青唐津」である。大橋Ⅰ期の所産である。

197は瀬戸美濃の水注である。外面に鉄軸を施す。

198は肥前系陶器の灯明受皿である。内外面に鉄軸を施すが、外面底部は無軸となり、回転系切り痕が見られる。199は瀬戸美濃で、志野の盤である。内外面に長石軸を厚く掛けるが、高台内は無軸である。露胎部は緋色に発色している。高台は削り込みである。平面形が円形をなさず、歪んでおり、茶器や懐石の器として用いられたものであろうか。大型向付の可能性もある。

200と201は越中瀬戸の匣鉢形容器である。匣鉢は本来陶磁器を焼成する際の窯詰め用に用いられるもので、焼成したい製品を中に入れ、窯内の降灰から製品を守る役目を持つ窯道具である。したがって、それ自体は流通・消費されるものではないが、本製品は匣鉢と類似した形状を有し、鉄軸を掛けたり、使用痕が残されていたりとも明らかに使用されていることから、匣鉢形容器として取り扱った。200は内外面に鉄軸を施すもの。口唇部に連続的に敲打痕が認められることから、灰吹に使用されたものであろうか。201は灰白色の硬質な胎土を持つもので、越中瀬戸とするにはやや疑問も残るものである。内外面に鉄軸を施し、器表の両側から用途不明の円孔を穿つものであるが、貫通していない。

d 壺・甕類 (図版 80～81・152～202～231)

202～210・217～228は珠洲である。202～210は壺である。いずれも遺存率が低く、成形方法が分かるのは207(口クロ成形)のみである。口径の大きさには大きく二分され、9～12cmのもの(202～207)と16～18cmのもの(208～210)がある。年代は208が吉岡Ⅳ期に比定される他は吉岡Ⅴ期に比定される。217～228は甕である。224・228の成形方法は分からないが、そのほかはタタキ成形で、外面に平行印目が認められる。228は底部片であるが、内面には厚くススが付着している。底部は静止ヘラ切りである。口径の大きさには大きく二分され、35～43cmのもの(217～223)と60～70cmのもの(224～227)がある。前者は中甕、後者は大甕である。年代は、217はやや古手で吉岡Ⅱ～Ⅲ期、218～220・224・225は吉岡Ⅳ期、221・222は吉岡Ⅴ期、223・226・227は吉岡Ⅵ期である。

211～214は肥前系陶器の甕である。211は口縁部を内側に折り返し、T字状の口縁部を作出するもので、上端はやや丸みを帯びるが平坦となるものである。内外面に鉄軸を施すが口唇部は拭き取られ無軸である。17世紀後半頃の所産である。212は外面に炭灰軸と木灰軸との掛け付けによる文様を施すもの。内面には同心円状の当て具痕が認められ、1580～1630年代の所産である。213はロクロ成形で、内外面に灰軸を施す。口縁部は外側に大きく突出し、上端はやや外側に垂下しながらもおおよそ平坦である。上端部は軸が拭き取られている。頸部はやや内傾しながらまっすぐ立ち上がり、胴部との境を明瞭に分ける。これらの特徴は、高取焼に見られる。高取焼の甕は近年、新潟県を含む日本海側東北部で多く流通していることが判明しつつある〔関根 2009、相羽 2008〕。214は内外面に鉄軸を掛け、外面には粘土組による装飾を施すもの、内面には同心円状当て具痕が見られ、1580～1630年代の所産である。

215・216は越中瀬戸である。いずれも、内外面に鉄軸を施すが、口径が10cm程度と小型で、〔相羽 2003〕のA類に当たる。ただし、215は厚手で頸部が長く、軸調に光沢がなく粗雑な感じを受けるのに対し、216は薄手で頸部が短く、軸調も光沢があり差異がある。今後、細分が必要となろう。

229～231は越前の甕である。229・230は甕の口縁部で、平坦な口縁上端を呈し、口唇部直下に突帯を一条巡らせる。内面には沈線を一条巡らせる。230には自然軸が掛かる。231は底部片である。年代は、229が木村Ⅳ期後半、230が木村Ⅴ期前半に位置付けられる。

e 片口鉢・播鉢 (図版 81・82・152・153 - 232～259)

232～251は珠洲の片口鉢である。232は小型のタイプである。222・228・233・248にはススが付着する。240・245・247・248・249・250の口唇部には櫛播波状文が見られる。251は底部片であるが、焼成不良のため赤茶気している。年代は、232～239は吉岡Ⅳ期、240～250は吉岡Ⅴ期、251と252は吉岡Ⅵ期に位置付けられる。

253は瓦質の播鉢である。従来、県北での出土が目立っていたが、糸魚川地域でも流通していることが確認された。珠洲が衰退し、越前に取って替わられる15世紀中頃に流通する。

254～257は越前である。いずれも無軸の焼き締め陶器である。255～257は口縁部で、いずれも内面に太い沈線を持つが、257は口唇部直下である。255・256は木村Ⅳ3期、257は木村Ⅴ2期の所産である。254は底部片である。

258は肥前系陶器で、口縁端部を丸く作出するもの。鉄軸は内面と外面口縁部にのみ施す。大橋Ⅳ期前半に比定され、17世紀末～18世紀初頭の所産である。

259は越中瀬戸である。口縁部を肥厚させる。内外面に鉄軸を施す。17世紀前半の所産である。

f 加工円盤 (図版 82・153 - 260～276)

260～276は土器・陶磁器類の破片を素材とし、側縁に連続的な剝離を施し、平面形を略円形に仕上げ、いわゆる「加工円盤」である。姫御前遺跡Ⅱの分類を使用して記述する。分類に当たっては、直径及び高台の有無で区分した(第3表・第13図)。

260～262は1類である。いずれも越前の壺または甕の胴部片を素材としたものである。平面形が端正な円形をなさず、歪である。263～266は2類である。263～265は無高台のもので、2a類に分類される。263は珠洲のタタキ成形の甕を素材とするもの。264は越中瀬戸の播鉢を素材とするが、側縁

に磨り痕が認められる（実測図で矢印で示した範囲）。姫御前遺跡Ⅱ出土の133にも同様の痕跡が認められ、加工円盤の使用法の一つを示すものと考えられる。265は青磁碗の底部片であるが、本来は高台の付く製品である。高台の内側まで打ち欠き、円盤状に加工している。一方、266は高台を有する2b類に分類される。内面に灰釉が掛かる京焼の小杯底部を素材とする。素材の年代は17世紀後半の所産と考えられる。267～271・273・274は3類である。273・274はロクロ成形の中世土師器皿を素材とするもので、無高台の3a類である。このうち273は内面にスガが付着しており、灯明皿として使用されたものが転用されたと考えられる。267～271は高台を有する3b類である。267～269は瀬戸美濃の天目碗の底部を素材とする。267の剝離面にはスガが付着しており、円盤に再加工されたものに付着したものである。瀬戸美濃の天目碗高台付近を円盤に加工したものは、糸魚川市寺地遺跡でも出土している。270・271は瀬戸美濃の灰釉平碗の底部を素材とする。272・275・276は4類である。いずれも高台を有することから4b類に分類される。272は越中瀬戸の皿を素材とするもので、内外面にスガが付着する。273・274は肥前系陶器の皿を素材とする。見込みには胎土目が認められることから、素材自体は1594年～1610年代の所産である。

g 転用品（図版82・153～283～284）

283・284は本来の製品を転用して別の用途に使用しているものである。283は珠洲のタタキ成形の狭胴部片を転用した研磨具である。側面及び上面（平行叩き目痕がみられる面）に擦痕が見られる。持ち砥として使用したものと考えられる。類例は上越市杵山遺跡・用言寺遺跡など多数見られる。284は、転用碗である。器表に砂目積の痕跡が見られることから、本来は大橋Ⅱ期の肥前系陶器灰釉皿であったものである。縁辺を連続的に打ち欠き、大きき・形状を整えている。高台内に墨痕が認められ、転用碗としての用途を想定したが、海の部分が狭く、墨を磨るスペースがあまりない。転用碗であるかどうかも含めて、具体的な使用法については、検討の余地を残す。

h 土 鍾（図版82・153～277～282）

竹花遺跡からは59点の管状土鍾が出土した。その内、完形で形状の分かる資料6点を図化した。管状土鍾の分類は姫御前遺跡Ⅱと共通である（第14図）。277～281は1類である。277～279は胴部の張らない1a類であり、280と281は胴部中央付近で最大径を迎える1b類である。282は1類に比して短胴で、球状に近い胴部を持つ2a類である。いずれも、胴部に指頭瓦痕を明瞭に有し、手づくね成形されたものである。また、Ⅱb層及びⅡa層からの出土であることから中世から近世初頭の所産である可能性が高い。

(2) 古 代（図版82・153～285～290）

285～287は須恵器である。285と287は有台杯である。[春日1999]のⅢ-1期に比定され、9世紀前半頃の所産である。286は杯蓋である。288と289は土師碗である。288は内面黒色処理された有台碗で、9世紀後半以降に見られる。289は深身で底径が小型化してきていることから、[春日1999]のⅢ-2期に比定され、9世紀後半頃の所産である。290は製塩土器の底部である。外面には指頭瓦痕が認められる。遺存率が悪く、器形による年代の推定はできないが、新潟県においては中世に入ると土器を用いての製塩は行わないとの見解[高橋1999]があることから、古代に含めた。

(3) 弥生時代～古墳時代 (図版 83・84・153～155 - 291～321)

竹花遺跡からは、IV層中から弥生時代後期から古墳時代前期後葉ないしは中期にかけての土器が出土したが、コンテナ 5 箱分と多くはない。その多くは、古墳時代の畦畔に伴って出土したものである。畦畔の年代を知る手掛かりとなり、また、遺存率も比較的良好で土器の全容も分かることから、畦畔出土の遺物を中心に図化した。報告に当たっては、同時期の土器が出土した姫御前遺跡Ⅱと同一の分類基準 (第三章 3B3)、第 15・16 図) を使用した。

291～294 は SX215 からの出土である。291 は口縁部と底部の 2 点から図上復元した。両者は胎土の共通性から同一個体であると判断した。球状の胴部を持ち、口縁部はやや外反しながらほぼ直線的に外に開き立ち上がる。東海系のひさご壺である壺 H 類であろうか。292 は口縁が内湾する壺 Q 類または壺 R 類である。口縁部は内外面にミガキを施す。胴部の外面はミガキを施すが、内面は粘土紐の貼り付け部を指で押さえただけで未調整のままである。293 は壺 C3 類の口縁部である。294 は壺の底部で、外面をミガキ調整し、内面は細かいハケメ調整が残る。胴部は球胴を呈する。291～294 は古墳時代前期中葉 (新潟シンボ編年 8～9 期) に位置付けられよう。

295～300 は SX119 からの出土である。295 は壺 K 類、296 は壺 L 類である。296 の有段部付近には擬凹線が数条巡る。297～299 は壺 C 類で、297 は C2 類、298 は C1 類、299 は C3 類に分類される。300 は比較的遺存率が良く、図上で復元することが出来た。擬凹線を持つ有段口縁で、細く尖り気味な口縁部は強く外反する。胴部は中央やや下寄りて最大径を迎え、平底となる。外面の底部付近は細かなヘラナデで、内面は幅の広いヘラナデである。内外面ともに煤が厚く付着しているが、外面には胴部のほぼ全面、内面には下半に範囲が広がる。本品は月影式の影響を多分に受けた壺 A 類であるが、月影壺の指標となる口縁内側の指頭圧痕は認められない。また、頸部内面にはハケが若干認められるが、遺存率が良くないため図化しなかった。300 は新潟シンボ編年 5 期に位置付けられるが、共存する 295～299 の遺物の遺存率が低く、畦畔の構築年代は判然としなが、弥生時代終末期 (新潟シンボ編年 5 期) の中に収まるのであろう。

301 と 302 は SX39 からの出土である。301 は小型の壺 L 類である。器表が風化しており、調整等は不明である。302 は壺あるいは壺の底部である。台状に広がる。以上より、古墳時代前期の遺構と判断されるが詳細は明らかでない。

303～311 は SX33 からの出土である。303～305 は壺である。303 は口縁部がく字状に曲がる壺 C3 類である。304 は擬凹線を有する有段口縁で、壺 A 類である。弥生時代の土器である。305 は下影れの胴部で、短胴の壺であるが、有段口縁を有することから壺 B 類とした。外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ調整を行う。306～309 は畿内系屈折脚の高杯 E 類である。新潟シンボ編年 11～12 期に認められる。310 は下影れの胴部を持ち、受け口状の口縁を有する壺で、輪台底部となる。本品は、類例が少なく、分類を見送ったものである。口縁形態から近江系の影響も考えられる。また、下影れの胴部から壺 T 類との共通性も見いだせる。調整は外面がミガキで、内面は上半をヘラナデ、下半をハケメ調整し、口頸部は横方向のナデである。近江系弥生土器の系譜を引くとすると弥生時代まで遡る可能性もあるが、壺 T 類の一種であるとするならば新潟シンボ編年 7・8 期まで下る可能性もあり、現況では年代を絞り込めない。311 は蓋であるが、精良な胎土で、外面を丁寧にミガキ調整する。内面は細かくヘラナデする。上面には円孔が 2 か所対に開けられる。緒立 2 号住に類例があり、新潟シンボ編年 7 期頃に位置付けら

れる。SX33では弥生土器が認められる一方、遺存率の高い畿内系屈折脚高杯(307～309)が出土していることなど、まとまりを欠くが、最も新しく、土器の遺存率が高い309の年代から古墳時代中期初頭(新函シノ編年11～12期)と考えておきたい。

312と313はSD109からの出土である。312は鉢A類である。外面はハケメ調整のままである。313は壺または甕の底部である。内外面をハケメ調整する。共存遺物に恵まれず、詳細な年代は不明であるが、312が鉢A類の中でも後出的なプロポーションを呈していることから、弥生時代終末期(新函シノ編年5～6期)としておきたい。

314～318は遺物包含層(IV層)中からの出土である。IV層中からは、細片が散発的に出土する程度であり、図化できたものは少ない。314と315は直立する口縁を有する壺で、壺S類である。314が内外面ミガキ調整するのに対し、315はハケメが残る。316と317は壺で、316は口縁部が上方に伸びる壺C1類である。317は擬凹縁を有する有段口縁壺で壺A類である。318は大型の畿内系二重口縁壺の頸部と見られ、壺M類である。317～318は弥生時代後期～終末期に位置付けられる。

319～321は遺物包含層(IIb層)中からの出土である。IIb層は本来、中世後期の包含層であるが、該期の土器が若干混入しており、残りの良い3点を図化した。319は壺L類の口頸部である。320は付加状口縁で、壺C類である。321は弥生時代後期の高杯A類である。

C 石製品・石器(図版84・85・155～322～337)

(1) 中世～近世(図版84・155～322～331)

中世～近世の遺物包含層IIb層・IIa層からは、硯・温石・砥石・五輪塔が出土した。

硯(322・323)は、いずれも断片である。322は、海～陸にかけての部分である。陸の中央部が大きく凹んでおり、使用の進行が顕著である。323は、両側縁が残存する。幅が6.1cm、厚さが0.6cmであり、小形の硯である。

砥石(326～328)は、いずれも凝灰岩製である。使用の進行により、角柱状を呈する。また、326・327は、被熱による黒化が認められる。

温石(324・325)は、いずれも滑石製である。324は、平面形が方形で、扁平である。325は擦切技法によって折断されたものである。特殊な製作技術によって成形されていることから、古墳時代以前の所産とも考えられたが、出土層準は近世の遺物を主に含むIIa2層であること、324と石質が近似することから、温石の未成品と判断した。

五輪塔(329)は、水輪が単独で出土した。調査範囲の北端からの出土であり、セット関係にある部位が、調査範囲外に存在する可能性がある。石質は、姫御前遺跡の五輪塔(図版46・125～350～353)と同質の角閃石安山岩である。上辺部と下辺部がわずかに凹み、正面には月輪と大日如来を表す種字「バン」の陰刻が認められる。最大幅が中心部より上部に位置する特徴は、南北朝期から室町期にかけて位置付けられ[立教大学博物館学講座1967]、IIb層から出土している陶磁器の年代観と調和的である。

凹石(330・331)は、円礫(安山岩製)の表裏中央部に著しい凹みを形成する。同様の形態は、姫御前遺跡では、古墳時代前期の遺構から出土しているが、中世の遺跡においてもしばしば認められる。用途は定かでないが、IIa・IIb層からの出土であり、中世の遺物として分類した。

(2) 弥生時代～古墳時代 (図版 84・85・155 - 332 ~ 337)

畦畔に埋め込まれるように、貝殻状剥片とそれを素材とする横刃形石器、玉作関連資料が出土した。貝殻状剥片は、いずれも第三章 3B3) に示した姫御前遺跡と同様の特徴とを備えたものである。板を敷き詰めた畦畔 SX33 からはヒスイの原石 (333)、SX119 からは勾玉の未成品 (332) と貝殻状剥片 (335) が出土した。いずれも密集する板の下から、木製農耕具や土器片とともに出土した。盛土の畦畔 SX215 の近辺からは横刃形石器 (337) が出土した。剥片の末端部に鋸歯縁状の二次加工を施し、刃部を形成する。336 は、中世の遺構 SX111 から出土した。微細剥離痕を有する縦長の貝殻状剥片であり、本来的には古墳時代前期の所産と考えられる。

D 金属製品 (図版 85・156 - 338 ~ 395)

金属製品には銅製品、鉄製品、銭貨がある。II a 層から出土した 341 を除き、II b 層からの出土であることから、中世の所産と考えられる。

338 ~ 341 は銅製品である。338 は、左右に刺突突起を持つ半リング状の製品で、断面形は蒲鉾形である。中央部には紐を結んだかのような装飾があらわれる。引き出しの引手金具と考えられる。339 は薄い銅板の左右の縁を折り曲げ、ほかの部材に装着すると考えられる製品である。図の上方は突起を持ち、突起のやや下方に円孔が穿たれる。340 も薄い銅板を加工したもので、ほかの部材に装着する部品と考えられる。断面は毛抜き状を呈し、折り返し部分には切れ込みが入る。表面には表裏ともに精巧な細工が施してある。魚子地に篋紋を主文様とし、表裏ともに 3 か所に配する。341 は簪である。下半は二又に分かれ、上部には耳掻きが付く。II a 層からの出土で、近世の所産である。

342 ~ 346 は鉄製品である。342 は鉄釘である。断面が方形をなす和釘で、頭部は頭巻である。343 はボタン状の製品で、香炉や鍋などの脚ではないかと考えられる。344 は刀子である。中央付近で上方へ折れ曲がっている。断面は三角形に近く、実測図の下方が刃部である。345 は製品の耳部または鉤であろうか。ブーメラン形の平面形を呈し、左方はやや尖るように見える。素材は板状のものであるが、断面形はやや湾曲する。346 は鉄鍋の口縁部と見られる。口径に比して器壁が薄く、断定できない。

347 ~ 395 は銭貨である。中世の銭貨は 52 枚出土しており、そのうち銭種のはっきりした資料は 49 枚出土であった (第 5 表)。最新は永楽通寶 (1405 年初鑄) であり、陶磁器の年代と調和的である。

E 鍛冶関連遺物 (図版 86・157 - 396 ~ 402)

396 ~ 402 は鍛冶関連遺物である。竹花遺跡からは鉄滓は総量 53 点、1,612g 出土し、そのうち含鉄滓は 17 点 (32%)、747g (46%) である。また、羽口の断片も 21 点出土した。

396 ~ 398 は鉄滓 (塊形滓) であり、396・397 が含鉄滓である。399・400 は増塊である。手づくね

R8				R6・7								R5				R4		
76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	59~52
3 167		1		2 62	2 15	1 397	1 84		3 122		1 3	2 28	1 11		1 21			4 115
2 11		1 13			7 35	2 100		3 54	2 2	5 73		1 35		2 83	3 23	3 157		
上段：個数 中段：重量 (g) 下段「f」：羽口の個数																		

第 24 図 竹花遺跡における鉄滓・羽口出土分布

成形されており、器表には指頭圧痕が残る。内面が燻けている。401・402は羽口である。第24図は竹花遺跡における鉄滓と羽口の出土分布図である。調査区全域から満遍なく出土しており、集中する区域及びそれらの供給源などは判然としない。しかし、鉄滓と羽口が近接した地点から出土しており、両者の関係性が想定される。

F 木製品 (図版 86・90・157～162 - 403～538)

竹花遺跡では、中世後期(14世紀後半～16世紀)に比定されるⅡb層と、古墳時代前期のⅣ層から木製品が出土した。また、一部にⅢ層から出土したものがあるが、木製品をⅡb層から突き刺したのや、上部からの踏み付け等によって沈下したものと推察され、本来的にはⅡb層に含まれるものと判断した。

主体を占めるのはⅣ層から出土した古墳時代の木製品である。その大半が、畦畔の地盤沈下を防ぐために敷かれた板材である。板材を敷き詰めることで足場を確保する「木畦畔」であるSX33・119からは、形代・農具・運搬具・建築材・板状木製品・棒状木製品・杭状木製品と様々なものが出土した。このうち農具には、直柄平鍬・ナスビ形曲柄鍬・一木鋤・払い鋤・鋤鍬柄・田下駄等が見られる。また、建築材も台輪・床材・屋根材・垂木・板柱等が出土した。

隣接する姫御前遺跡の報告書においては、素材形状から大きく3分類して報告している(第三章3D1)が、今回報告する木製品はC類となる物が多数を占めるため、種類・器種ごとに詳述し、上記の分類については該当するもののみ言及することとする。木製品の分類は『木器集成図録 近畿古代編』『木器集成図録 近畿原始編』[奈良国立文化財研究所1985・1993]を参考とした。また、器種の鑑定については、宮本長二郎氏・山田昌久氏から御教示をいただいた。

(1) 中世の木製品 (図版 86・87・157・158 - 403～462)

箸状木製品 (図版 86・157 - 403～417)

150mm～270mmを測る細い棒状木製品を素材とし、断面多角形に表面を面取りし、片端ないしは両端を尖らせるものでB-1類に当たる。408・417は上端が欠損するため分らないが、一端を尖らせ他端を平坦にする片口箸(406・407・409・414・415)と、両端を尖らせる両口箸(403～405・410～413・416)が存在する。地面に突き刺した状態で出土するものがあり、410・412・416・417等は地面に突き刺した際の反発により曲がつた可能性がある。隣接する姫御前遺跡でも同様の事例が見られ、こうした行為が一带で広く行われた様子がうかがえる。欠損したものが多く、全容が分らないものが多いため図示したものは少ないが、調査区全体から791点(R4区5点、R5区54点、R6・7区597点、R8区135点)が出土した。

形代 (図版 86・157 - 418～424)

418～420は人形である。418・419は、立体的な表現がなされたものである。棒状木製品の一端を鳥帽子状に作り出し、首を細く削り、もう一端を杭状に尖らせる。地面に突き刺して使用したと考えられる。419は目・鼻・口を彫り込み、下部部を尖らせる。418と同様に、地面に突き刺した可能性がある。これに対し420は、方形基調の板材の側面に抉りを入れ人物の側面観、または正面観を表しているものでA-1類である。421・422は刀形である。一側面から反対の側面上端に向かい直線、あるいは弧を描きながら尖らせるものでA-5類に当たる。421は、方形基調の板材の片側に丸みを持たせて尖らせ、刃部を表現する。422は方形の板材の片側に斜めに削り刃部を表現したもので、421と比べれば粗雑な作

りといえる。423・424は舟形である。423は半裁した棒状素材の両端を尖らせ船首・船尾を表現する。中央部には袂りが入られ櫂座を表現していると思われる。削り抜きの丸木舟に類するものと推察される。424は棒状素材の両端を尖らせ、船首と船尾を作りだす。また、櫂座は直線的となるが、両端に凸部を設ける。船体構造上の何らかの部位を表現したものと考えられるが、詳細は不明である。

下駄 (図版 86・157 - 425 ~ 428)

425 ~ 427は下駄である。425は方形板材を素材として作り出すもので、歯は見られない。下端部が欠損しており、鼻緒を通す孔は一孔のみ確認できる。426・427は連歯下駄である。426は下端部が欠損するが、鼻緒を通した孔が3か所確認できる。また、前後の歯の間隔が30mm、現存部の幅が68mmとかなり小型であることから幼児用と思われる。427は欠損部分が多く全体像は不明瞭だが、歯が残り裏面が炭化している。また鼻緒を通した孔を1か所確認できる。428は田下駄である。方形基調の板材を素材とし、欠損している片側側面も含め4か所の孔が見られる。孔の位置がやや不揃いだが、円形枠付きの輪カンジキ型田下駄の足板に当たると考えられる。

曲物 (図版 86・157 - 429 ~ 437)

429 ~ 437は曲物底板である。429は平坦面に複数の円孔が穿たれた直径45cm(推定、以下同じ)を測る大型品である。430は直径21cmを測る中型品である。431は直径20cmを測る中型品で、表面に多数の線状痕を残す。432は直径13cmを測る中型品で、側縁の作りが粗く、稜を残す。433は直径8cmの小型品で、中央部に長径10mmの孔が見られる。欠損部分が多いが、形状的には紡錘車等に似る。434は直径7cmの小型品で、側縁の作りが粗く稜を残している。435は側縁及び中央に複数の円孔が穿たれるもので、直径7cmの小型品である。436は直径21cmの中型品で、表面には粗い加工痕を残す。437は直径26cmを測る中型品で、10mm程度の孔が見られる。433 ~ 435は、大きさを考慮すると曲物底板でない可能性もある。

その他の製品 (図版 86・87・157・158 - 438 ~ 440)

438は方形の材の四側面を面取りしたもので、上下面には切り離しの加工痕を残す。何らかの部材、または端材と考えられる。439は厚みのある方形板材の両側縁の中央部に袂りをいれたもので、木鍾と考えられる。440は火鑽白である。方形基調の板材の両側縁に一定間隔で火鑽の袂りを入れる。側縁は全体に炭化し、表面には筋状の切れ込みが四条見られる。

板状木製品 (図版 87・158 - 441 ~ 447, 458 ~ 462)

441・442は方形基調の板材を素材とし、片側の両側縁を斜めに削る。441の表面には対称となる位置に径3mmほどの小孔が穿たれている。443は方形基調の板材の片側側縁に袂りを入れるものである。先の分類に当てはめればA-2類に当たるが、18年度調査の姫御前遺跡で出土したものの(図版14・137~144)とは多少様相が異なる。姫御前遺跡のものが上方寄りに袂りを一か所入れ、下方にかけて若干の膨らみを持たせ人物の側面観を表しているのに対し、443は片側縁の上下対称となる位置に2か所の袂りを入れる。また袂りの中間は直線的であり、人形に当たるとは考えにくい。444・445は方形基調の板材の先端を尖らせるものでA-6類となる。444は両側縁を斜めに直線的に削る。先端部は欠損している。445は端部にかけて明瞭な段を作り柄状に先端を細くする。また上方、及び欠損した下方に円孔が見られる。組み合わせ材の一種であろうか。446・447は方形基調の板材を素材とする。端部に大幅な加工を行わず、表面に円孔が見られるものでA-8類に当たる。446は端部にやや丸みを持たせて加工し、器表に複数の円孔が穿たれ、加工痕が顕著である。447は端部に丸みを持たせ、片側側縁に円孔が見られる。

458・459 は方形基調の板材を素材とし片側の端部を尖らせるもので A-6 類に当たる。458 は片側が欠損し、もう一方の端部に複数回の削りを入れている。459 は一側面から先端に向かい細く尖らせるものである。460・461 は方形基調の板材を用い片側側面に抉りを入れるものである。何らかの組み合わせ材となる可能性がある。462 は全体に欠損が著しいが、厚みのある方形の板材を用い、表面には径 80mm の孔が見られる。建築材の一種であろうか。

棒状木製品 (図版 87・158 - 448 ~ 453)

448 は角柱状の棒状木製品を素材とし、中央と下端部に丸みを持たせて削りを入れ、背面がまっすぐ通る。糸巻きの棒木に類似した形態だが、特徴的に見られる凸部の柄孔は確認できない。449 は上方の作り出しや下方にかけての丸みを持たせた削り等 448 と類似した点が見られるが、幅・厚みなどを比べるとやや大型である。450 は栓である。棒状木製品を素材とし上方に抉りを巡らす。抉りよりも下方にかけて細く削り出す。451 は円柱状の棒状木製品を素材とし、上方寄りの一側縁に抉りを入れる。片側端部は欠損しているが、もう一方は丸みを持たせて削り出す。452 は棒状木製品を素材とし、片端を中心軸に向かい連続的に削り出し、杭状に加工する。また上方は厚み・幅を持って人頭状に削り出す。人形の可能性も考えられる。453 は天秤棒である。棒状木製品を素材とし両端に紐などをかける抉りを入れる。

杖状木製品 (図版 87・158 - 454 ~ 457)

454 は、くの字状に屈曲した枝の端部を大きな単位で削って尖らせ、杖状にしたものである。端部の加工が人工的なものであることは疑いないが、木材の確保がさほど困難とも思えない環境の中、あえてこうした枝を材として選択している点は考慮すべき点と言えるだろう。455 は芯持ちの丸木を用い、全体に面取りが見られる。表面に径 8mm の円孔が穿たれる。456 は芯外しの丸木を用い、上端は平坦に、下端は丸く加工されている。また、中間部付近には方形の孔が開けられていた可能性があるが、欠損のため不明である。455・456 とともに全体が炭化するという共通点が見られる。457 は直径 122cm を測る大型の杖状木製品である。上端に板などを差し込んだ仕口と見られる縦の切れ込みが確認できる。ほかの部材との組み合わせ材が、杭に転用されたと考えられる。

(2) 古墳時代前期の木製品 (図版 87 ~ 90・158 ~ 162 - 463 ~ 538)

遺物包含層出土資料 (図版 87・158 - 463・464)

463 は方形基調の板材を素材とし、片側端部を尖らせる。もう一端には方形の抉りを入れるもので、鈍形の一部と考えられる。SX119 付近からの出土である。

464 は横楕である。片側欠損するが平面台形を呈し、中央上方に当たると見られるか所に柄穴がある。また上方から下方にかけて薄く削り刃を作り出す。

SX38 出土資料 (図版 87・158 - 464 ~ 468)

R6・7 区西端の最下層斜面遺物集中域 SX38 からの出土である。465・466 は蹴動柄である。棒状木製品を素材とし端部に削りを入れて突起を作り出し、背面も斜めに削られる。両者は形態・大きさが酷似する上、2 点が重なるように出土した。

SX39 出土資料 (図版 87・158 - 図版 87 - 467 ~ 468)

467・468 はナスビ形曲柄楕である。467 は軸部に柄穴の類は見られず、緊縛固定したものと考えられる。468 は軸部に方形孔が確認できる。467 とは異なり、柄を差し込んで使用したものであろう。また両者を比較した場合、467 は軸部から刃部にかけて特徴的に見られる突起の張り出しが弱い。

SX215 出土資料 (図版 88・158・159 - 469 ~ 471)

469 は直柄平蹴である。上方には柄を装着するための隆起を持ち、柄穴は円形を呈する。肩部は下方にかけて薄くなり、刃部を作り出す。469 は東西に走る土盛り畦畔を掘削した下の面から出土しており、畦畔構築の際に埋められたものと考えられる。470 は板状木製品である。A-9 類に当たり、方形基調の板材を素材とし、縁辺に加工は加えられていない。471 は両端が欠損するが、方形基調の板材を素材とし、表面に長円形の孔が見られる。

SX119 出土資料 (図版 88・89・159 ~ 161 - 472 ~ 518)

472 は、楕円形の板状木製品である。全体的に剝落し不明瞭であるが、器表には複数の小孔が見られる。473 は方形基調の板材を素材とし、両端を斜めに削る。474 は方形の板材の片側縁に多様な加工を施すもので背面はまっすぐ通る。475 ~ 477 は A-6 類に当たる。方形基調の板材の側縁を斜めに削り先端を尖らせるもので、端部には平坦面を残す。板杭として使用されたものであろうか。478 は楔である。板材の片端を方形に削り、もう一方を細くする。479 は方形基調の板材を細く削り出し、端部に丸みを持たせる。欠損した下端部には孔が穿たれている。480 は棒状木製品の端部を加工したもので、農具等の柄と考えられる。481・482 は鋤鋤柄である。棒状木製品を素材とし、端部に削りを入れ突起を作りだし、背面も斜めに削る。481・482 とともに柄の部分に明瞭な削りが見られ、断面形が滑らかな円形にはならないことから未成品の可能性がある。483 は一本鋤である。刃部から柄にかけてはまっすぐ通らず、かなり屈曲している。木取り等に影響されたものか。484 は払い鋤である。權などに形態は類似するが、片側の刃部を薄く作り出すといった特徴が見られる。485 ~ 492 は杭状木製品である。491 は細かく削りを入れた丁寧な作りであるが、全般的には大きな削りを数回行って先端を尖らせる粗雑な作りのものが多い。493 は天秤棒である。擦痕や紐を掛ける挟りなどの加工は見られないが、蒲鉾形の特徴的な断面形を呈する。494 ~ 497 は角柱または円柱状の棒状木製品で、B-5 類に当たる。全体的に両端部を欠損しているため全容は不明だが、495・496 は柄等の可能性が考えられる。498 ~ 503 は板状木製品である。498 ~ 500 は素材の縁辺を大幅に加工をしないもので A-9 類に当たる。501 は表面に 1 か所の穿孔が見られる。実測図下側の腐蝕が進行している部分は、板葺き屋根の屋根材が表面に露出していた部分と考えられる。このことから板屋根材と考えたい。502 は片側縁の中央に隆起が見られるが、これは節などの影響によるものであり、人工的なものではない。503 は片側縁に切り欠きがあり、段差が作られる。504 は 197cm を測る棒状木製品を素材とし、端部を削り出して柄を作るもので、梁・桁材と考えられる。505 は側縁に挟りを入れ、端部を削った垂木である。506 は残存長 253cm の台輪である。上方に仕口が見られる。下方を鋭く尖らせて杭に転用したものである。507 は長さ 178cm を測る角柱状木製品で、片側面から先端に向かい尖らせている。何らかの建築材と考えられる。508 ~ 512 は板杭である。両側面から削り、尖らしている。先端を欠損しているものが多いが、508・511 は鋭利に尖らせている。また、両側面の加工はどちらか一方を長く削る様子が看取でき均一ではない。513 は指物の側板で、椅子の脚部に当たる。頂部には天板に差し込むための柄が作られ、中央にはほかの部材を差し込んだと見られる柄孔がある。514 ~ 517 は田下駄である。方形の板材の表面に複数の孔が開けられており、円形外枠を持つ輪カンジキ型の田下駄と推定される。514・515 は SX119 において並んだ状態で出土した。516・517 は SX119 からの出土品ではないが、近接地からの出土品であるためこちらに含める。518 は平面舟形を呈する剝物容器である。平坦な底部から斜めに立ち上がる境や外面に削りの痕跡を残す。

SX33 出土資料 (図版 90・161・162 - 519 ~ 538)

519・520 は平鍛である。519 は横幅 24cm を測る幅広のもので、逆三角形の隆起を持つ。上端は欠損するが残存部に柄穴の丸みを確認できる。520 は長さ 34cm と縦長で、上部に方形の隆起を持つ。また 519・520 とともに端部にかけて薄く削り出し、刃を付けている。521・522 はナスビ形曲柄鍛である。両者とも欠損が多いが、刃部の内側上方に丸みを持つことから又鍛と推定できる。521 は軸部から刃部にかけての突起が明瞭である。柄穴の類は確認できず緊縛固定によって柄を装着したものと想定される。522 は軸部から刃部にかけての突起が見られないタイプで、やはり柄穴の類は見られない。523 は鍛動柄と推定されるものである。520 とした平鍛と近い地点からの出土品で、実際に差し込んでみたところ 523 の先端部の突起と 520 の方形柄穴が合致した。樹種も同じアサダ属であり、両者は組み合わせ関係にある可能性が高い。ただし、ほかの鍛動柄と比較すると、断面方形のうえ持ち手部分の厚さが 14mm 程度しかなく、実用性という点では疑問を抱かざるを得ない。524・525 は方形基調の板材を素材とし、縁辺に加工を加えず器表に円孔を穿つもので A-8 類に当たる。524 は円孔が上方中央に一孔確認でき器表には削りの痕跡を残す。525 は上方に 2 か所の円孔が見られ、表面に線状痕が確認できる。ともに 516・517 のような田下駄の足板となる可能性を指摘できる。526～528 は角柱状の棒状木製品の先端を連続的に削って尖らせた杭状木製品で、B-3 類に当たる。全体に粗い作りで、大きな削りを複数回行うことで細くしている。なお 526・528 については垂木であった可能性が指摘でき、先端部の杭状の加工は二次的なものと考えられる。529・530 は芯持ちの丸木を用い、先端部を削ることによって先端を尖らせている。杭として見た場合、あまり先端を鋭く加工はしていないものの、地山にしっかりと打ち込まれていた。加工方法の類似から杭状木製品の範疇に含めておく。531・532・534 は板状木製品である。531 は残存部が少ないが、側縁に加工は加えられていない、断面形は平坦ではなく、中央の厚みがやや増す。532 は方形基調の板材の側縁に加工を加えて端部に向かい細くするもので、板杭の可能性もある。534 は方形基調の板材の側縁に複数の抉りを入れるもので、紐などをかけてほかの部材と組み合わせたと考えられる。533 は加工を加えない円柱状の棒状木製品で、B-5 類に当たる。柄などの可能性が考えられるが、詳細は不明である。535 は台輪である。厚さ 228cm を測る厚手の板材で、表面の上・下方寄りと片側側縁に対称となる形で 4 か所の円孔が見られる。また蹴放などの扉口材となる可能性も指摘できる。536 は長さ 314cm を測り、実測図の下側 4 分の 1 で腐蝕が顕著である。板屋根材の可能性が高い。腐蝕が進行した部分は、板屋根材同士が重ならず風雨にさらされた部分と見られる。上方には縄などを掛けたと考えられる孔が確認できるが、擦痕などは見られない。537 は 394cm を測る板材で、表面に手斧による加工の痕跡を残す。床板材に当たるものと考えられる。538 は 452cm を測る板材で、中央からやや下方に相欠きの仕口が見られる。仕口から上方に向かって細く削り、端部を矢羽根状に加工している。類例の無い形状であるが、宮本長二郎氏から特殊な高床建物（または祭殿）に用いられた板柱ではないかとの御教示を得た。そうであれば、下方の腐蝕部分は根入れ部分と考えられる。

G 小 札 (図版 90・162 - 539)

甲や鎧の一部である小札の塗膜と考えられる。小札は、鎧の主体部を構成する鉄製または革製の短冊状の小さな板で、表面には漆が塗られる。紐（威糸）でつなぎ合わせるための穴（鑑し穴）が板の左右に開けられる。出土品は、小札の塗膜のみである。塗膜全体が剥がれて残ったとは考えにくく、本体は腐蝕したと考えられる。鉄製であれば残存したと考えられ、革製の小札と考えられよう。威し穴は、左右両側縁（縦方向）に 6 か所、上下両側縁（横方向）に 3 か所の孔が認められる。

第V章 自然科学分析

1 姫御前遺跡における自然科学分析

A 花粉分析

株式会社古環境研究所 金原 正子

(1) はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もあり、分解も環境の指標になる。

(2) 試料

分析試料は、26B25 地点（居住域）で採取されたⅡ a 層（試料 1：近世）からⅣ層（試料 9：地山）の 9 点、30B2 地点（畑地）で採取された畝状遺構（試料 10：古墳時代前期）1 点、37A13 地点（流路）で採取されたⅡ a 層（試料 11：近世）から V 層（試料 30）の 20 点の計 30 点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図（第 26～28 図）に示す。

(3) 方法

花粉の分離抽出は、[中村 1973]の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から 1cm³ を採量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え 15 分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置
- 5) 水洗処理の後、水酢酸によって脱水し、アセトリスス処理（無水酢酸 9：濃硫酸 1 のエドマン氏液を加え 1 分間湯煎）を施す
- 6) 再び水酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 300～1000 倍で行った。花粉の同定は、[島倉 1973] 及び [中村 1980] をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節及び種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示す。イネ属については、[中村 1974・1977] を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。また、この処理を施すとクスノキ科の花粉は検出されない。

(4) 結 果

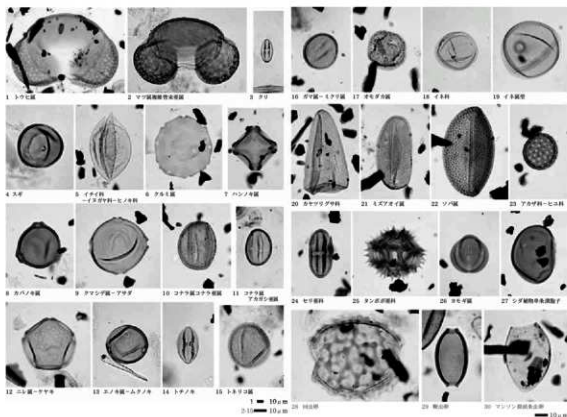
a 分類群

出現した分類群は、樹木花粉40、樹木花粉と草本花粉を含むもの6、草本花粉33、シダ植物胞子2形態の計81である。これらの学名と和名及び粒数を第6～8表に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを作成した(第26～28図)。なお、200個未満であっても100個以上の試料については傾向をみるため参考に図示した。主要な分類群は顕微鏡写真(第25図)に示した。また、寄生虫卵についても同定した結果、4分類群が検出された。以下に出現した分類群を記載する。

【樹木花粉】 マキ属、モミ属、トウヒ属、ツガ属、マツ属複雑維管束亜属、マツ属単維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤナギ属、クルミ属、サワグルミ、ノグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、アカメガシワ、サンショウ属、キハダ属、ウルシ属、モチノキ属、ニシキギ科、カエデ属、トチノキ、ブドウ属、シナノキ属、マタタビ属、ミズキ属、ハイノキ属、エゴノキ属、トネリコ属、タニウツギ属

【樹木花粉と草本花粉を含むもの】 クワ科-イラクサ科、バラ科、マメ科、ウコギ科、ゴマノハグサ科、ニワトコ属-ガマズミ属

【草本花粉】 トクダミ科、ガマ属-ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、マルバオモダカ、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ホシクサ属、イボクサ、ミズアオイ属、ネギ属、タデ属、タデ属サナエタデ



第25図 姫御前遺跡の花粉・胞子・寄生虫卵

節、ギンギン属、ソバ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、コウホネ属、キンボウケ属、カラマツソウ属、アブラナ科、ユキノシタ科、ノブドウ、キサシグサ属、アカバナ科、アリノトウグサ属-フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、シソ科、オミナエシ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

【シダ植物孢子】 単条溝孢子、三条溝孢子

【寄生虫卵】 回虫卵、鞭虫卵、マンソン裂頭条虫卵、不明虫卵

b 花粉群集の特徴

1) 26B25 地点 (居住域) 第6表・第26図

花粉構成と花粉組成の変化から、下位より4帯の花粉分帯を設定する。

・I帯 VII層～III d層 (試料9:地山～試料7:古墳時代前期)

地山(試料9)では、花粉密度が極めて低く花粉はほとんど検出されない。

試料8、試料7では、樹木花粉の占める割合が草本花粉より高く約80%を占める。特にスギが高率に出現し、クリ、トチノキなどが伴われる。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属などがやや低率に出現する。

・II帯 (III c層 (試料6:古墳時代前期))

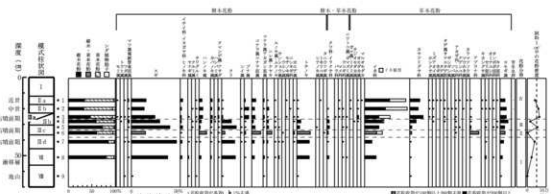
花粉密度が低くなり、草本花粉の占める割合が約35%に増加する。草本花粉ではイネ科にイネ属型が伴われ、アブラナ科が増加する。樹木花粉ではスギ、クリが半減し、コナラ属コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ、ハンノキ属がやや増加する。

・III帯 (III c層、III b層 (試料5:古墳時代前期、試料4:古墳時代前期))

樹木花粉の占める割合が高くなり、スギを主にクリが優占する。トチノキは減少し、カヤツリグサ科が増加します。

・IV帯 III a層～II a層 (試料3:古墳時代前期～試料1:近世))

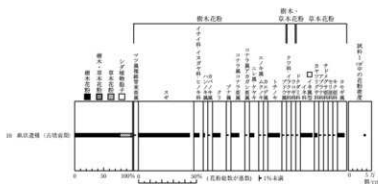
草本花粉の占める割合が約60%になり、イネ科(イネ属型を含む)の増加で特徴付けられる。他にカヤツリグサ科、オモダカ属、ホシクサ属、ミズアオイ属、コウホネ属などが伴われ、II b層(試料2:中世)ではソバ属も出現する。樹木花粉ではハンノキ属、ブナ属が増加し、スギ、クリ、トチノキが減少する。II b層では鞭虫卵が、II a層(試料1)では回虫卵と鞭虫卵がわずかに検出された。



第26図 姫御前遺跡の26B25地点における花粉ダイアグラム

2) 30B2 地点 (畑地)・(畝状遺構 (試料10:古墳時代前期) 第7表・第27図

樹木花粉が約75%を占める。スギが高率に出現し、トチノキ、クリ、コナラ属コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科などが伴われる。草本花粉ではイネ科(イネ属型を含む)、ヨモ



第27図 姫御前遺跡の30B2地点における花粉ダイアグラム

ギ属、カヤツリグサ科などが低率に出現する。

3) 37A13 地点 (流路)・(V層 (試料30) からII a 層 (試料11: 近世) 第8表・第28図

花粉構成と花粉組成の変化から、下位より3帯の花粉分帯を設定する。

(i) I帯 (V層 (試料30) からIV層中 (試料23: 古墳時代前期))

花粉密度は極めて高く、樹木花粉でほぼ占められる。樹木花粉ではスギが卓越し、草花粉のイネ科、カヤツリグサ科がわずかに出現する。また、樹木花粉の構成より次の3つの亜帯に細分する。

・I-a 亜帯: V層 (試料30)、V層 (試料29)

スギにトチノキ、エノキ属-ムクノキなどが伴われ、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アガシ亜属、ニレ属-ケヤキなどが低率に出現する。

・I-b 亜帯: V層 (試料28) からIV層中 (試料23: 古墳時代前期)

スギが増加する。

・I-c 亜帯: IV層上 (試料22: 古墳時代前期) では、トチノキ、コナラ属アガシ亜属が増加する。

(ii) II帯 IV層上 (試料21~試料19: 古墳時代前期)

花粉密度が極めて高く、1cc中に190万個以上になり、樹木花粉で占められる。スギが高率に出現し、コナラ属アガシ亜属、トチノキが伴われ、集塊も認められる。

(iii) III帯 III層下~II a 層 (試料18: 古墳時代前期~試料11: 近世)

草花粉の占める割合が上位に向かい高くなり、密度は低くなる。スギが減少傾向を示すのに伴い草花粉の構成が変化するため、次の4つの亜帯に区分する。

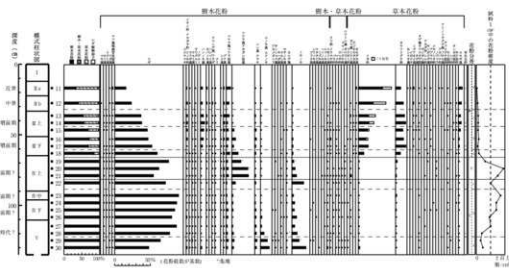
・III-a 亜帯: III層下 (試料18: 古墳時代前期))

スギにコナラ属アガシ亜属、コナラ属コナラ亜属が伴われ、草本のイネ科 (イネ属型を含む)、カヤツリグサ科が増加する。

・III-b 亜帯: III層下~III層上 (試料17: 古墳時代前期~試料15: 古墳時代前期)

分群別		30B2 地点
学名	指名	試料(試料11)
<i>Alnus pedunculata</i>	樹木花粉	—
<i>Fraxinus subgen. Diploxylon</i>	ワツタ属緑帯木亜属	2
<i>Corylus japonica</i>	スギ	186
<i>Taxus</i> <i>Cephalotaxoides-Cephusoides</i>	イチイ科-イチイ科、ヒノキ科	19
<i>Abies</i>	ハンノキ属	5
<i>Betula</i>	カバノキ属	1
<i>Corylus ovata</i>	カラ	28
<i>Fagus</i>	ブナ属	2
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	29
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アガシ亜属	1
<i>Ulmus-Zelkova aceris</i>	ニレ属-ケヤキ	16
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ	1
<i>Acer</i>	カエデ属	1
<i>Arctostaphylos</i>	トチノキ	42
<i>Myr</i>	アビチロ属	1
<i>Artemisia / Nonarbutal pollen</i>	樹木-草花粉	—
<i>Moraceae-Urticaceae</i>	クワ科-イラクサ科	1
<i>Antennaria</i>	アユギ科	2
<i>Nonarbutal pollen</i>	草花粉	—
<i>Nasturtiaceae</i>	トクダイ科	1
<i>Geraniaceae</i>	イヌビロ	41
<i>Oxalis sp.</i>	イネ属型	2
<i>Cyperaceae</i>	カヤツリグサ科	10
<i>Cyperella</i>	アブチノ科	2
<i>Hibiscus-like</i>	オトコソウ科	1
<i>Apocynaceae</i>	セリ科	1
<i>Antennaria</i>	アユギ科	1
<i>Asteraceae</i>	カク草属	25
<i>Fern spore</i>	シダ植物胞子	9
<i>Molecular type spore</i>	単細胞胞子	—
<i>Trilete type spore</i>	多細胞胞子	9
<i>Arbutal pollen</i>	樹木花粉	334
<i>Arbutal / Nonarbutal pollen</i>	樹木-草花粉	3
<i>Nonarbutal pollen</i>	草花粉	34
<i>Total pollen</i>	花粉総数	471
<i>Pollen frequency of 1cm³</i>	試料1cm ³ 中の花粉密度	$\times 10^4$
<i>Unknown pollen</i>	未同定花粉	9
<i>Fern spore</i>	シダ植物胞子	11
<i>Heterothal spore</i>	多細胞胞子	(1)
<i>Diagonol cistena</i>	樹木-草花粉集塊	(1)
<i>Chemical treatment</i>	処理回数	(1)

第7表 姫御前遺跡における花粉分析結果 (30B2 地点)



第28図 姫御前遺跡 37A13 地点における花粉ダイアグラム

・ III -c 亜帯: III層上 (試料 14: 古墳時代前期), III層上 (試料 13: 古墳時代前期)

イネ属型が増加する。III層上では鞭虫卵、マンソン裂頭糸虫卵がわずかに検出された。

・ III -d 亜帯: II b 層, II a 層 (試料 12: 中世, 試料 11: 近世)

イネ科 (イネ属型を含む) が増加することで特徴付けられる。II b 層, II a 層では回虫卵、鞭虫卵がわずかに検出された。

(5) 花粉分析から推定される植生と環境

a 26B25 地点 (居住域)

花粉群集の特徴から分帯に沿って植生の復元を行う。

1) I 帯期 (VII層～III d 層, 地山～古墳時代前期)

地山 (試料 9) では、花粉密度が極めて低く花粉などの有機質遺体が分解されるような乾燥した堆積環境であったと考えられる。試料 8、試料 7 の層準では、周辺にはスギ林が分布し、周囲の湿潤な所にはトチノキが生育し、やや乾燥した所にはクリが生育していたと推定される。調査地点にはイネ科の草本が生育していたと考えられる。

2) II 帯期 (III c 層, 古墳時代前期)

イネ属型が出現し、周辺に水田の分布が示唆される。周辺のスギ林とクリ林が減少し、二次林性のコナラ属コナラ亜属やニレ属-ケヤキ、ハンノキ属が増加する。人為干渉が著しくなりスギやクリの森林が減少し、二次林が一時的に増加したと考えられる。

3) III 帯期 (III c 層, III b 層, 古墳時代前期～古墳時代前期)

スギ林とクリ林が再び増加し、コナラ属コナラ亜属やニレ属-ケヤキは減少し、森林の回復がみられる。水田雑草のオモダカ属、ミズアオイ属と共にイネ属型が出現することから、水田の分布が示唆される。

4) IV 帯期 (III a 層～II a 層, 古墳時代前期～近世)

草本花粉の占める割合が約 60% になり、イネ属型が増加し水田の拡大が示唆される。スギ林が減少し、トチノキ林、クリ林がほぼ消滅し、これらの森林域が水田化されたと推定される。堆積地はカヤツリグサ科、オモダカ属、ホシクサ属、ミズアオイ属、コウホネ属などの水生植物ないし抽水植物が生育し、湿地

から水域の環境が示唆される。II b 層（試料 2：中世）ではソバ属も出現し、ソバの畑作も示唆される。樹木花粉ではハンノキ属、ブナ属の湿潤ないし適潤を好む樹木がやや増加する。農耕に伴い蔓延するとされる回虫卵、鞭虫卵が検出され、生活汚染が認められる。

b 30B2 地点（畑地）・（畝状遺構、古墳時代前期）

堆積地周辺は、イネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科が生育する湿地であったと推定される。周辺は森林が多く、スギ林が優勢であり、他にトチノキ、クリ、コナラ属コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科などの森林が分布していた。なお、栽培植物は検出されなかった。

c 37A13 地点（流路）

花粉群集の特徴から、分帯に沿って植生の復元を行う。

1) I 帯期（V 層～IV 層中、古墳時代前期）

スギ林が卓越し、ほぼ森林状態である。

I -a 亜帯期（V 層下部、古墳時代前期）では、スギ林に、トチノキ林、エノキ属-ムクノキ林が伴われ、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキなども分布する。

I -b 亜帯期（V 層～IV 層、古墳時代前期）では、スギ林が増加し、トチノキ林、エノキ属-ムクノキ林は減少する。

I -c 亜帯期（IV 層上、古墳時代前期）では、トチノキ林を主にコナラ属アカガシ亜属林がやや増加する。

2) II 帯期（IV 層上、古墳時代前期）

スギ林が優勢であるが、コナラ属アカガシ亜属の森林が増加し、他にトチノキ林が増加する。花粉の集塊も認められ、コナラ属アカガシ亜属とトチノキは近隣に分布していたとみられる。

3) III 帯期（III 層下～II a 層、古墳時代前期～近世）

スギが上位に向かって減少し、イネ属型を含むイネ科が増加する。平野部に分布していたスギ林が、時期とともに水田化されていったとみなされる。

III -a 亜帯期（III 層下、古墳時代前期）では、周辺はスギ林であり、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属も生育し、水田の営みが開始された。

III -b 亜帯期（III 層下～III 層上、古墳時代前期）では、イネ属型に水生植物や、水田雑草のカヤツリグサ科、オモダカ属、サジオモダカ属、ミズアオイ属などが伴われることから、堆積地は水田ないし湿地の環境がやや拡大した。寄生虫卵が出現することから、近接して生活域が分布していたと推定される。スギ林は優勢ではあるが減少する。また、湿地の二次林とみなされるハンノキ属が増加する。

III -c 亜帯期（III 層上、III 層上、古墳時代前期）では、水田が大きく拡大する。伴ってスギ林は減少する。この時期でコナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、トチノキの森林はほぼ消滅する。

III -d 亜帯期（II b 層、II a 層、中世～近世）では、水田が著しく拡大し、集約的な水田稲作が行われるようになる。スギ林は著しく減少し、平野部ではほぼ消滅したと考えられる。

(6) ま と め

26B25 地点（居住域）では、下部より、I 帯期（VII 層～III d 層、地山～古墳時代前期）はやや乾燥した環境で、周囲にはスギ林とトチノキ林、クリ林が分布していた。III d 層（古墳時代前期）の時期にはイネ科が生育

していた。II帯期(III c層、古墳時代前期)になると周辺で水田が営まれたし、やや森林が減少し、二次林が一時的に増加する。III帯期(III c層、III b層、古墳時代前期~古墳時代前期)では水田は継続的に分布するが森林の回復がみられた。IV帯期(III a層~II a層、古墳時代前期~近世)は水田が拡大し、森林が大きく減少した。

37A13 地点(流路)では、I帯期(V層~IV層中、古墳時代前期)はスギ林が卓越し森林状態であり、II帯期(IV層上、古墳時代前期)になってコナラ属アカガシ亜属の照葉樹林が増加し、やや乾燥化が認められた。III帯期(III層下~II a層、古墳時代前期~近世)ではスギ林の減少と水田の増加が段階的に行われた。

以上のように、姫御前遺跡ではスギの原生林が分布するが、古墳時代前期より居住と水田化が始まり、スギ林、トチノキ林、クリ林が段階的に切り開かれ、水田化していった。

B 植物珪酸体分析

株式会社古環境研究所 杉山 真二

(1) はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸(SiO₂)が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定及び古植生・古環境の推定などに応用されている[杉山2000]。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である[藤原・杉山1984]。

(2) 試料

分析試料は、26B25グリッド(居住域)、30B2グリッド(畑地)、37A13グリッド(流路)の3地点から採取された計30点である。これらは、花粉分析に用いられたものと同一試料である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

(3) 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法[藤原1976]を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)
- 2) 試料約1gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加(0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射(300W・42KHz・10分間)による分散
- 5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

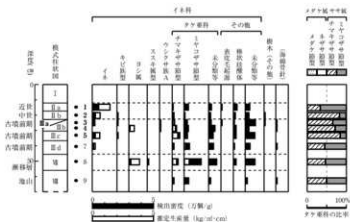
また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸

たり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している〔杉山2000〕。なお、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

1) 26B25グリッド(居住域、第30図)

II a層(試料1)からV層(試料9)までの層準について分析を行った。その結果、II a層(試料1)からIII d層(試料7)までの各層(III b層を除く)からイネが検出された。このうち、II a層(試料1)では密度が5,000個/gと高い値である。

したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。その他の層では、密度が700~2,200個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、及び上層や他所からの混入などが考えられる。



第30図 姫御前遺跡 26B25地点における植物珪酸体分析結果

2) 30B2グリッド(畑地、第31図)

古墳時代前期の畝状遺構(試料10)について分析を行った。その結果、イネは検出されなかった。



10 畝状遺構(古墳前期)

第31図 姫御前遺跡 30B2地点における植物珪酸体分析結果

3) 37A13グリッド(流路、第32図)

II a層(試料11)からV層(試料30)までの層準について分析を行った。その結果、II

a層(試料11)から

III下層(試料17)ま

での各層、及びIV上

層上部(試料19)か

らイネが検出され

た。このうち、II a

層(試料11)とII b

層(試料12)では密

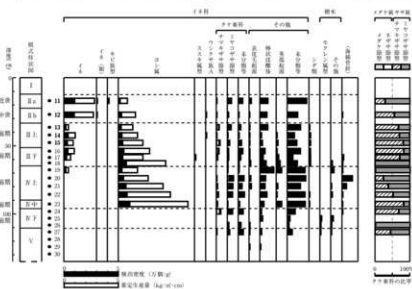
度が9,800個/g及

び9,400個/gと高

い値であり、III上層

(試料14)とIII下層

(試料16)でも3,600



第32図 姫御前遺跡 37A13地点における植物珪酸体分析結果

個/g及び3,300個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。IV上層上部(試料19)では、密度が1,400個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。

b イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型(ヒエが含まれる)、エノコログサ属型(アワが含まれる)、キビ属型(キビが含まれる)、ジズダマ属(ハトムギが含まれる)、オヒシバ属(シコクビエが含まれる)、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、キビ族型などその他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

c 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群の検出状況と、そこから推定される植生・環境について検討を行った。37A13グリッド(流路)の古墳時代前期の層単では、ヨシ属が比較的多く検出され、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型なども認められた。26B25グリッド(居住域)の同層単では、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が検出され、部分的にキビ族型、ヨシ属、ウシクサ族Aなども認められた。おもな分類群の推定生産量によると、37A13グリッド(流路)ではヨシ属が優勢であり、次いでイネが多くなっている。

以上の結果から、古墳時代前期の37A13グリッド(流路)周辺は、ヨシ属が生育するような湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して調査地点もしくはその近辺で水田稲作が行われていたと推定される。なお、稲作の開始以降もヨシ属が比較的多く見られることから、水田雑草としてヨシ属が生育していたことや、休閑期間中にヨシ属が生育していたことなどが想定される。また、26B25グリッド(居住域)周辺など比較的乾燥したところには、ササ属(チマキザサ節やミヤコザサ節など)をはじめ、キビ族やウシクサ族などが生育していたと考えられる。

(6) ま と め

植物珪酸体分析の結果、37A13グリッド(流路)のII a層(近世)、II b層(中世)、III上層(古墳時代前期)、及び26B25グリッド(居住域)のII a層(近世)では、イネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、37A13グリッド(流路)のIII下層(古墳時代前期)、26B25グリッド(居住域)のII b層(中世)、III c層(古墳時代前期)などでも、稲作が行われていた可能性が認められた。

古墳時代前期の37A13グリッド(流路)周辺は、ヨシ属が生育するような湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して調査地点もしくはその近辺で水田稲作が行われていたと推定される。また、26B25グリッド(居住域)周辺など比較的乾燥したところには、ササ属(チマキザサ節やミヤコザサ節など)をはじめ、キビ族やウシクサ族などが生育していたと考えられる。

C 珪藻分析

株式会社古環境研究所 岡山 邦子

(1) はじめに

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復元の指標として利用されている。

(2) 試料

分析試料は、37A13地点（流路）で採取されたII a層（試料11：近世）からV層（試料30：古墳時代前期）の計20点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。これらは、花粉分析ならびに植物珪酸体分析に用いられたものと同じ試料である。

(3) 方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

- 1) 試料から1cm³を採量
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら1晩放置
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドを水洗（5～6回）
- 4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下して乾燥
- 5) マウントメディアによって封入し、プレパラート作成
- 6) 検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって600～1500倍で行った。計数は珪藻被殻が200個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

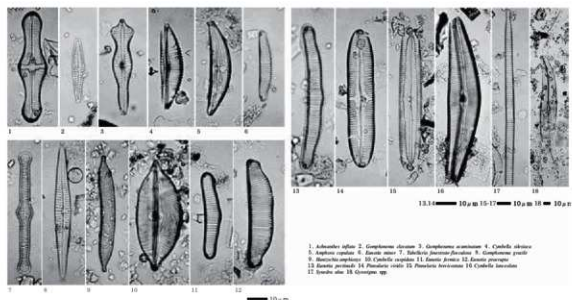
(4) 結果

a 分類群

試料から出現した珪藻は、貧塩性種（淡水生種）50分類群である。第10表に分析結果を示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定した珪藻ダイアグラムを第34図に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性は[Lowe1974]や[渡辺2005]等の記載による。陸生珪藻は[小杉1986]により、環境指標種群の淡水生種は[安藤1990]による。また、主要な分類群について顕微鏡写真（第33図）を示した。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記載する。

〔貧塩性種〕 *Achnanthes inflata*, *Amphora copulata*, *Anomoconeis sphaerophora*, *Cymbella cuspidata*, *Cymbella lanceolata*, *Cymbella silesiaca*, *Eunotia formica*, *Eunotia minor*, *Eunotia pectinalis*, *Eunotia praerupta*, *Eunotia* spp., *Gomphonema acuminatum*, *Gomphonema clavatum*, *Gomphonema gracile*, *Gomphonema sphaerophorum*, *Gomphonema* spp., *Gomphonema truncatum*, *Gyrosigma* spp., *Hantzschia amphioxys*, *Navicula confervacea*, *Navicula cuspidata*, *Navicula mutica*, *Navicula reinhardtii*, *Pinnularia*

brevicostata, *Pinnularia gibba*, *Pinnularia* spp., *Pinnularia viridis*, *Stauroneis phoenicenteron*, *Synedra ulna*, *Tabellaria fenestrata-flocculosa*



第33図 姫御前遺跡の珪藻

b 珪藻群集の特徴

37A13地点(流路)において、珪藻群集の構成と組成の変化から、下位よりⅢ帯の珪藻分帯を設定する(第10表・第34図)。

1) I帯 (V層(試料30:古墳時代前期)からIV層中(試料23:古墳時代前期))

いずれの試料も珪藻密度が極めて低く、ほとんど検出されない。

2) II帯 (IV層上(試料22~試料20:古墳時代前期))

試料22では貧塩性種(淡水生種)の珪藻がわずかに出現し、真・好止水性種が約80%を占める。真・好止水性種では真止水性種の *Cymbella lanceolata* が優占種であり、沼沢湿地付着生環境指標種群の *Tabellaria fenestrata-flocculosa*, *Eunotia minor*, *Gomphonema acuminatum* などが伴われる。流水不定性種では *Cymbella silesiaca* や、沼沢湿地付着生環境指標種群の *Eunotia pectinalis*, *Eunotia praerupta* などが低率に出現する。試料21と試料20では流水不定性種がやや増加し、真・好流水性種がわずかに出現するようになる。沼沢湿地付着生環境指標種群の *Tabellaria fenestrata-flocculosa*, *Eunotia minor*, 真止水性種の *Cymbella lanceolata*, 流水不定性種の *Gomphonema clavatum* が比較的優占し、*Eunotia* や *Gomphonema* の多様な沼沢湿地付着生環境指標種群が伴われる。好流水性種の *Achmanthes inflata* が低率に出現する。

3) III帯 (IV層上(試料19:古墳時代前期)からII a層(試料11:近世))

珪藻密度が極めて低くなり、流水不定性種の *Amphora copulata*, *Cymbella cuspidata*, *Gyrosigma* spp. などがわずかに出現する。

(5) 珪藻分析から推定される堆積環境

37A13地点(流路)における堆積環境を、4つの分帯にそって下位より推定する。

1) I帯 (V層、古墳時代前期からIV層中、古墳時代前期)

いずれの層準もほとんど珪藻が検出されず、乾燥した環境か乾湿を頻繁に繰り返す不安定な環境が示唆される。

2) II帯 (IV層上、古墳時代前期?)

真・好止水性種が多く、真止水性種の *Cymbella lanceolata* と沼沢湿地付着生環境指標種群の *Tabellaria fenestrata-flocculosa* が優占種で、*Eunotia minor* や流水不定性種の *Gomphonema clavatum* が伴われることから、水流がとまり滞りし、水草の繁茂したやや浅い池状の水域が示唆される。

3) III帯 (IV層上、古墳時代前期からIIa層、近世)

珪藻密度が極めて低くなり、流水不定性種の *Amphora copulata*、*Cymbella cuspidata*、*Gyrosigma* spp. などが見えなくなる。こうしたことから、珪藻の生育しにくい乾燥した環境や、乾湿を頻繁に繰り返す不安定な環境が示唆される。

(6) ま と め

37A13 地点 (流路) で珪藻分析を行った結果、I帯 (V層、古墳時代前期からIV層中、古墳時代前期) では、乾燥した環境か乾湿を頻繁に繰り返す不安定な環境が示唆され、II帯 (IV層上、古墳時代前期) では、滞りし水草の繁茂したやや浅い池状の水域が示唆された。III帯 (IV層上、古墳時代前期からIIa層、近世) では再び乾燥した環境か乾湿を頻繁に繰り返す不安定な環境が示唆された。

D 大型種実同定

株式会社古環境研究所 金原美奈子

(1) はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

(2) 試 料

試料は、37A13 地点 (流路、古墳時代前期) から採取されたIII層上部 (試料1)、III層下部 (試料2)、IV層上部 (試料3)、IV層中部 (試料4)、IV層下部 (試料5)、V層 (試料6) の6点である。

(3) 方 法

試料 (堆積物) に以下の物理処理を施して、抽出及び同定を行った。

- 1) 試料 500cm³ に水を加え放置し、泥化を行う。
- 2) 攪拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25mm の篩で水洗選別を行う。
- 3) 残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の同定計数を行う。

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴及び現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

(4) 結 果

a 分類群

樹木2、樹木・草本1、草本14の計17分類群が同定された。学名、和名及び粒数を第11表に示し、主要な分類群を写真(第35図)に示す。200cm³中の種実数をダイアグラムに示す(第36図)。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載する。

〔樹木〕

ヒメコウゾ *Broussonetia kazinoki* S. 種子 クワ科

茶褐色でやや角張る楕円形を呈す。基部に突起を持ち、表面にはいぼ状の突起がある。

キイチゴ属 *Rubus* 核 バラ科

淡褐色でいびつな半円形を呈す。表面には大きな網目模様がある。

〔草本〕

オモダカ *Sajitaria trifolia* L. 果実 オモダカ科

淡褐色～黄褐色で歪んだ倒卵形を呈す。周囲は翼状となり、上部は針状にとがる。

オモダカ属 *Sajitaria* 果実 オモダカ科

淡褐色～黄褐色で歪んだ倒卵形を呈す。周囲は翼状部が傷んでおり、その概形が判別できないため、属レベルの同定にとどめる。

イネ科 Gramineae 穎(破片)

穎は灰褐色～茶褐色で楕円形を呈す。腹面はやや平ら。背面は丸い。表面は滑らかである。

ホタルイ属 *Scirpus* 果実 カヤツリグサ科

黒褐色で、やや光沢がある。広倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。表面には横方向の微細な隆起があり、基部に4～8本の針状の付属物を持つ。

スゲ属 *Carex* 果実 カヤツリグサ科

茶褐色で倒卵形、扁平である。果皮は柔らかい。

カヤツリグサ科 Cyperaceae 果実

茶褐色で倒卵形を呈す。断面は扁平である。

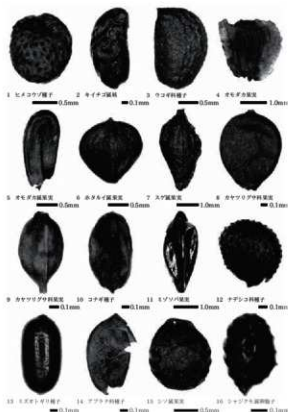
黒褐色で倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。

コナギ *Monochoria vaginalis* Presl var. *plantaginea* Solms Laub. 種子 ミズアオイ科

淡褐色で楕円形を呈す。表面には縦方向に7～9本程度の隆起があり、その間を横方向の密な隆線が走る。

ミゾソバ *Polygonum thunbergii* S. et Z. 果実 タデ科

黄褐色で三角状広卵形を呈し、基部に小突起がある。表面には微細な網目模様がある。



第35図 姫御前遺跡の種実

ナデシコ科 Caryophyllaceae 種子

黒色で円形を呈し、側面にへそがある。表面全体に突起がある。

ミスオトギリ *Triadenum japonicum* Makino 種子 オトギリソウ科

黒褐色で円柱状楕円形を呈す。表面に不明瞭な横長の網目が発達。堅い。

アブラナ科 Cruciferae 種子

茶褐色で楕円形を呈し、下端にへそがある。表面には長方形の網目がある。

シソ属 *Perilla* 果実(完形・破片) シソ科

茶褐色で球形を呈し、下端にへそがある。表面には大きい網目模様がある。

シャジクモ属 *Chara* 卵胞子 シャジクモ科

黒色で楕円形を呈す。断面は円形で、表面は右下がりの螺旋状の隆起がある。

b 種実群集の特徴

1) V層

樹木のヒメコウソウがごく少量検出された。

2) IV層

IV層下部では種実は検出されなかった。

IV層中部ではわずかにキイチゴ属が検出された。

IV層上部になるとスゲ属が最も多く、次いでミスオトギリが検出された。

3) III層

III層下部ではカヤツリグサ科が最も多く、次にホタルイ属、コナギ、ミスオトギリ、オモダカ属、オモダカ、スゲ属が続き、少量のシソ属、ごく少量のミゾソバ、アブラナ科、キイチゴ属、ナデシコ科、シャジクモ属が検出された。

III層上部ではホタルイ属が最も多く、次にカヤツリグサ科、コナギ、スゲ属、シソ属、オモダカ、ミスオトギリ、オモダカ属が続き、ごく少量のイネ科が検出された。

分類群		部位	37A13					
学名	和名		遺層		V層			
			上部	下部	上部	中部	下部	
Arbor	樹木							
<i>Broussonetia kazunoki</i> Sieb.	ヒメコウソウ	種子						1
<i>Rubus</i>	キイチゴ属	核		1				
Arbor - Herb	樹木・草本							
<i>Adiantum</i>	ウコギ科	種子				1		
Herb	草本							
<i>Sagittaria arifolia</i> L.	オモダカ	葉実	5	10				
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属	葉実	2	17				
<i>Giantella</i>	イネ科	稈(破片)	2					
<i>Sagax</i>	ホタルイ属	葉実	51	27				
<i>Carex</i>	スゲ属	葉実	15	12		32		
Cyperaceae	カヤツリグサ科	葉実	32	67				
<i>Monochoria vaginalis</i> Presl var. <i>plantaginifolia</i> Schott-Lamb.	コナギ	種子	17	32				
<i>Polygonum thunbergii</i> S. et Z.	ミゾソバ	葉実		2				
Caryophyllaceae	ナデシコ科	種子		1				
<i>Triadenum japonicum</i> Makino	ミスオトギリ	種子	5	25			20	
Cruciferae	アブラナ科	種子		2				
<i>Perilla</i>	シソ属	葉実	5	2				
	(破片)		2					
<i>Chara</i>	シャジクモ属	卵胞子		1				
Total	合計		136	199	52	1	0	1

(500cm³中0.25mm³)

第11表 姫御前遺跡における種実同定結果

2 竹花遺跡における自然科学分析

A 花粉分析

株式会社古環境研究所 金原 正子

(1) 試 料

分析試料は、63B12地点(水田?)より採取されたⅡ a1層(試料31:近世)からⅧ1層(試料42:地山)の12点、73B16地点(水田?)より採取されたⅢ層(試料43:古墳時代前期)からⅤ1下層(試料48:古墳時代前期)の6点の計18点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図(第38・39図)に示す。なお、花粉の分離抽出は、第V章1.A.(3)に同じである。

(2) 結 果

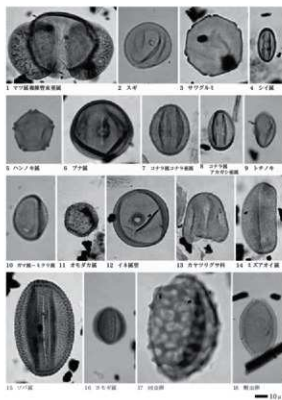
a 分類群

出現した分類群は、樹木花粉40、樹木花粉と草本花粉を含むもの5、草本花粉30、シダ植物胞子2形態の計77である。これらの学名と和名及び粒数を第12・13表に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを第38・39図に示す。主要な分類群は顕微鏡写真に示した(第37図)。また、寄生虫卵についても同定した結果、3分類群が検出された。以下に出現した分類群を記載する。

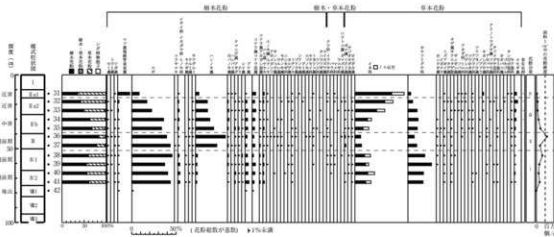
【樹木花粉】 モミ属、トウヒ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、マツ属単維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤナギ属、クルミ属、サワグルミ、ノグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、アカメガシワ、サンショウ属、キハダ属、ウルシ属、モチノキ属、ニシキギ科、カエデ属、トチノキ、ブドウ属、シナノキ属、グミ属、エゴノキ属、モクセイ科、トネリコ属、ツツジ科、タニウツギ属、スイカズラ属

【樹木花粉と草本花粉を含むもの】 クワ科-イラクサ科、バラ科、マメ科、ウコギ科、ニワトコ属-ガマズミ属

【草本花粉】 ガマ属-ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ホシクサ属、イボクサ、ミズアオイ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アザガ科-ヒユ科、ナデシコ科、コウホネ属、アブラ



第37図 竹花遺跡の花粉・寄生虫卵



第38図 竹花遺跡の63B12地点における花粉ダイアグラム

分類群	学名	和名	73B16 地点					
			Ⅰ層 (43)	Ⅱ層 (44)	Ⅲ上層 (45)	Ⅲ下層 (46)	V上層 (47)	V下層 (48)
Arboreal pollen		樹木花粉						
Alder		アlder属	1	1	1	1	1	1
Pine		トウヒ属			1	2	2	
Fagus		クワ属	1	1	1	2	2	
Pinus subgen. Dryoides		マツ属硬葉亜属	1	6	3	5	2	
Pinus subgen. Haploides		マツ属軟葉亜属	1	1			1	
Corymbium japonica		コウヤマキ	297	256	249	262	287	265
Sapindaceae			1	1				
Taxaceae Cupressales-Cupressaceae		イチイ科・イヌサヤ科・ヒノキ科	12	9	1	11	9	1
Ulmus		ウレシ	1	1			1	
Salix		カラス属	1	2	3	1	1	
Juglans		クルミ属	5	4	4	8	1	
Pterocarya alba		フタバヒ	1				1	
Pterocarya zosterifera		ハンノキ属	61	11	10	9	9	15
Alnus		カハノキ属	4	9	6	14	11	5
Betula		ハシロハス属	1					
Corylus		クルミ	5	6	7	7	4	3
Carpinus-Ostrya japonica		コナラ属・アザダ	3	1	4	1	1	
Castanea crenata		クワ	4	1	4	3	2	4
Castanopsis		シナノキ	24	14	21	28	20	24
Fagus		フナギ	31	21	28	17	30	16
Quercus subgen. Lepidobalanus		コナラ属コナラ亜属	7	3	13	9	12	7
Quercus subgen. Cyclobalanopsis		コナラ属アカコナラ亜属	6	6	3	8	7	13
Ulmus-Zelkova serrata		ニレ属・ヤナギ	2	2	2	2	1	2
Celtis-Aphananthe aspera		エノキ属・ムクノキ						
Mollisia japonica		アズキノシタ			1	2	1	1
Zosterophylon		サンシロノ属			1	2		
Phellodendron		キナガサ						
Bux		モウソウバコ属	1					
Acer		カエデ属	2	2	3			
Araliacae herbaceae		トウモロコシ			1	4	6	3
Vitis		ブドウ属						
Elaeagnus		グミ属	1					
Ferula		セリシユ		1	2	2	2	6
Arboreal Nonarboreal pollen		樹木・準木花粉	1	1	2	2	2	6
Mesocae-Utricularae		クワ科・イラクサ科			1	1	1	1
Ranunculaceae		アザミ科						
Lupinaceae		アズキ科	2	4				
Asplacaceae		クマザサ科						
Nonarboreal pollen		準木花粉						
Trifolium-Spermatophytes		アザミ・ミウナ	65	4	3	3	7	9
Sagittaria		オキザリ	2	1	3	3	4	2
Gramineae		イネ科	61	91	93	112	98	97
Oxys type		イネ属型	29	10	67	70	43	34
Cyperaceae		カヤツリグサ科	72	143	91	72	97	52
Equisetaceae		ホウコウ草属	1					
Asteraceae heliopsis		イヌカサ					1	
Monocotyle		イヌアザミ	1	2	8	5	5	3
Polygonum		アザミ	2	2	2	4	1	2
Polygonum sect. Persicaria		アザミ	2	2	2	4	1	2
Compositaceae-Asteraceae		アザミ科・ヒヨドリ		1	1			
Caryophyllaceae		アザミ科						
Cuciferae		アブラナ科	2	1			2	1
Scrophulariaceae		ユキノシタ科						
Asclepiadaceae Asclepiadoideae		アサドク					1	1
Hydrocotylaceae		オミナエ草科			1			
Aquifoliaceae		セリシユ	1	1		2	1	2
Anemone		オミナエ草	5	1				
Anemone		オミナエ草	12	3	3	6	4	7
Fern spore		シダ植物胞子	6	7	8	13	6	12
Moss-like spore		蘚植物胞子	2	1				
Arboreal pollen		樹木花粉	470	353	372	396	414	379
Arboreal Nonarboreal pollen		樹木・準木花粉	2	5	1	1	5	3
Nonarboreal pollen		準木花粉	253	259	263	279	264	213
Total pollen		花粉総数	725	617	636	676	683	695
Pollen frequencies of 1cm ³		試料1cm ³ 中の花粉数	1.5 × 10 ³	7.0 × 10 ²	1.6 × 10 ³	1.4 × 10 ³	1.8 × 10 ³	1.8 × 10 ³
Utricularae pollen		準木花粉	6	5	2	5	5	3
Fern spore		シダ植物胞子	8	8	8	12	6	12
Heliothis eggs		蚕下虫卵						
Heliothis eggs		不明虫卵					1	0
Total			0	0	0	0	1	0
Heliothis eggs frequency of 1cm ³		試料1cm ³ 中の発生虫卵数	0.0	0.0	0.0	0.0	1.5	0.0
Diplolepis rimosa		樹から出る蜂の糞	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Clavate fragments		菌類胞子殻	(++)	(+++)	(+)	(+)	(+)	(+)

第13表 竹花遺跡における花粉分析結果 (73B16 地点)

b 花粉群集の特徴

1) 63B12 地点 (水田?) 第 12 表・第 38 図

花粉構成と花粉組成の変化から、下位より 4 帯の花粉分帯を設定する。

・ I 帯 (VII 1 層～IV 1 層 試料 42～試料 38: 地山～古墳時代前期)

樹木花粉の占める割合が草本花粉より高く、約 60% を占める。スギが高率に出現し、ブナ属、コナラ属コナラ亜属などが低率に伴われる。草本花粉ではカヤツリグサ科、イネ科 (イネ属型を含む) が多く、ミズアオイ属、オモダカ属、サジオモダカ属などが出現する。VII 1 層 (地山) では、密度が極めて低く花粉はほとんど検出されない。

・ II 帯 (III 層 (試料 37、試料 36: 古墳時代前期))

樹木花粉の占める割合が高くなり、ハンノキ属の増加で特徴付けられ、花粉密度が極めて高くなる。

・ III 帯 (II b 層～II a2 層 試料 35～試料 32: 中世～近世)

草本花粉の増加に伴い花粉密度が低くなる。下位で優占していたスギ、ハンノキ属が上位に向かい減少する。草本花粉ではイネ科 (イネ属型を含む) が増加傾向を示し、カヤツリグサ科、ヨモギ属が伴われる。II a2 層では、ソバ属も出現し、II b 層、II a2 層では回虫卵、鞭虫卵などがわずかに検出される。

・ IV 帯 (II a1 層 (試料 31: 近世))

草本花粉が約 65% を占めるようになる。特にイネ科 (イネ属型を含む) の増加で特徴づけられ、樹木花粉ではマツ属複雑管束亜属が増加する。

2) 73B16 地点 (水田?) 第 13 表・第 39 図

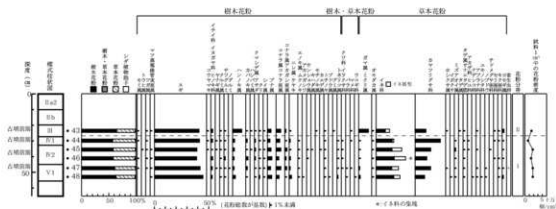
花粉構成と花粉組成の変化から、下位より 2 帯の花粉分帯を設定する。

・ I 帯 V 1 下層～IV 1 層 (試料 48～試料 44: 古墳時代前期)

樹木花粉の占める割合が草本花粉より高く、約 60% を占める。樹木花粉ではスギが高率に出現し、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、ハンノキ属などが伴われる。草本花粉ではイネ科 (イネ属型を含む)、カヤツリグサ科が優占する。

・ II 帯 (III 層 (試料 43: 古墳時代前期))

樹木花粉の占める割合がやや高くなる。ハンノキ属が増加し、草本花粉ではガマ属～ミクリ属が増加する。



第 39 図 竹花遺跡の 73B16 地点における花粉ダイアグラム

(3) 花粉分析から推定される植生と環境

それぞれの地点において花粉群集の特徴から分帯に沿って植生の復元を行う。

a 63B12 地点 (水田?)

1) I 帯期 (VII 1層~IV 1層, 地山~古墳時代前期)

下部のVII 1層(地山)では、花粉などの有機質遺体が分解されるような乾燥した堆積環境であったが、堆積時間が速かったことなどが考えられる。

イネ属型が出現し、水生植物のカヤツリグサ科や水田雑草のミズアオイ属、オモダカ属、サジオモダカ属などが伴われることから、水田の分布が示唆される。周辺には、スギ林が分布し、ブナ属、コナラ属コナラ亜属などの落葉広葉樹も生育していた。

2) II 帯期 (III層, 古墳時代前期)

優勢なスギ林とともに、周辺にはハンノキ属が増加し、草本域が減少した。水田が一時的に衰退したと思われる、ハンノキを主とする湿地林が形成されたと考えられる。

3) III 帯期 (II b層~II a2層, 中世~近世)

水生植物のカヤツリグサ科や、水田雑草のミズアオイ属、オモダカ属、サジオモダカ属などを伴ってイネ属型が出現することから、堆積地は水田ないし湿地の環境が拡大していった。一方、ハンノキの湿地林、スギ林は減少する。回虫卵、鞭虫卵がわずかに出現することから、近接して生活域があったか、ソバなどの畑作における人糞施肥に起因する可能性が示唆される。

4) IV 帯期 (II a1層, 近世)

水田が拡大し、集約的な水田耕作が行われるようになった。スギ林、ハンノキ林は縮小し、アカマツ(マツ属複雑管束亜属)二次林が成立した。

b 73B16 地点 (水田?)

1) I 帯期 (V 1下層~IV 1層, 古墳時代前期)

水生植物のカヤツリグサ科や、水田雑草のミズアオイ属、オモダカ属、サジオモダカ属などを伴ってイネ属型が出現することから、堆積地は水田ないし湿地の環境であったと考えられる。周辺はスギ林が優勢で、ブナ属、コナラ属コナラ亜属などの落葉広葉樹も分布していた。

2) II 帯期 (III層, 古墳時代前期)

湿地林を形成するハンノキ属が増加し、草本ではガマ属-ミクリ属が増加し、水田はやや減少し沼沢地が拡大した。

(4) ま と め

竹花遺跡において花粉分析を行った結果、下部より63B12地点(水田?)のI帯(VII 1層~IV 1層, 地山~古墳時代前期)、73B16地点(水田?)のI帯(V 1下層~IV 1層, 古墳時代前期)は、地山を除き、水田の分布が示唆され、周辺にはスギ林が分布していた。63B12地点(水田?)のII帯(III層, 古墳時代前期)、73B16地点(水田?)のII帯(III層, 古墳時代前期)ではハンノキの湿地林が形成され、ガマ属-ミクリ属の増加がみられ、水田は減少した。過剰な低湿化により水田が衰退した可能性が考えられる。上部の63B12地点(水

田?)のⅢ帯(Ⅱb層~Ⅱa2層, 中世~近世)からⅣ帯(Ⅱa1層, 近世)にかけては水田が拡大していき、ハンノキの湿地林とスギ林が減少した。Ⅳ帯(Ⅱa1層, 近世)ではアカマツ二次林が成立したと推定された。

B 植物珪酸体分析

株式会社古環境研究所 杉山 真二

(1) 試料

分析試料は、63B12 グリッドと73B16 グリッドの2地点から採取された計18点である。これらは花粉分析に用いられたものと同一試料である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。なお、植物珪酸体の抽出と定量は、第V章1.B.(3)と同じである。

(2) 分析結果

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第14表及び第41図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真(第40図)を示す。

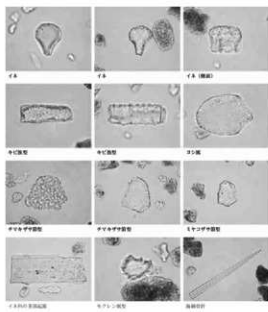
【イネ科】 イネ、イネ(穎の表皮細胞由来)、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型(おもにススキ属)、ウシクサ族A(チガヤ属など)

【イネ科-タケ亜科】 チマキザサ節型(ササ属チマキザサ節・チマキザサ節など)、ミヤコザサ節型(ササ属ミヤコザサ節など)、未分類等

【イネ科-その他】 表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来)、茎部起源、未分類等

【シダ類】

【樹木】 モクレン属型、その他



第40図 竹花遺跡の植物珪酸体(プラント・オパール)

植物群(単位: ×100個/cm ²)	63B12												73B16											
	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48						
イネ科	Detection																							
イネ	70	37	123	74	93	47	28	34	33	49	46		72	7	28	33	49	51						
イネ科類(穎の表皮細胞)	Other culm	6																						
イネ科類	Panicum type																							
イネ科類	Phragmites																							
イネ科類	Alcornoque type	8	6	7	7	20	18	7	7	7	7	14		12	19	25	27	14	27					
イネ科類	Andropogon type	8		7		7									7	7	7		7					
イネ科類	Restioid type																							
イネ科類	Stenactis, Noveboracensis									27	7	7	20		13	7	28	33	42	28				
イネ科類	Stenactis, Cretanensis	32	6	7	7	7	7			20	13	63	28		7	14	28	45	42	29				
イネ科類	Others	5		7	7	7	7			41	20	42	20		13	7	35	33	49	30				
イネ科類	Others																							
イネ科類	Stink leaf origin	29	31	27	7	20														15				
イネ科類	Red, angled	28	31	35	47	86	87	85		30	42	11								29				
イネ科類	Others	7																						
イネ科類	Others	31	30	24	74	105	47	49	37	40	14	33	8	137	49	63	114	130	20					
イネ科類	Others									14	7	7								13				
イネ科類	Others																							
イネ科類	Alcornoque type																							
イネ科類	Others	6	6	7	7	7	13	14					13		14	7	7	7						
イネ科類	Others																							
イネ科類	Stenactis	12	12	7	13	40	27	26	7	7				13	14	21	23	7	7					
イネ科類	Others	274	274	280	128	207	436	159	139	166	233	311	8	377	476	297	284	188	200					
イネ科類	Others																							
イネ科類	Others	2.05	1.09	3.04	2.18	2.72	1.38	0.63	1.00	0.97	1.43	1.94		2.11	0.21	0.82	0.96	1.43	1.50					
イネ科類	Phragmites	0.38	0.38	0.44	0.44	1.20	0.62	0.44	0.44	0.44	0.44	0.65		0.76	1.20	1.38	1.70	0.68	1.70					
イネ科類	Stenactis													0.08										
イネ科類	Stenactis, Noveboracensis									0.20	0.08	0.05	0.15		0.10	0.05	0.21	0.25	0.32	0.22				
イネ科類	Stenactis, Cretanensis	0.32		0.32		0.32		0.32		0.00	0.04	0.18	0.00		0.02	0.04	0.08	0.14	0.13	0.00				
イネ科類	Others																							
イネ科類	Stenactis, Noveboracensis	100	100	100	71			77	86	82	71			83	86	73	64	71	71					
イネ科類	Stenactis, Cretanensis	100	100	100	22	100		22	44	23	20			17	44	22	30	29	29					

第14表 竹花遺跡における植物珪酸体分析結果

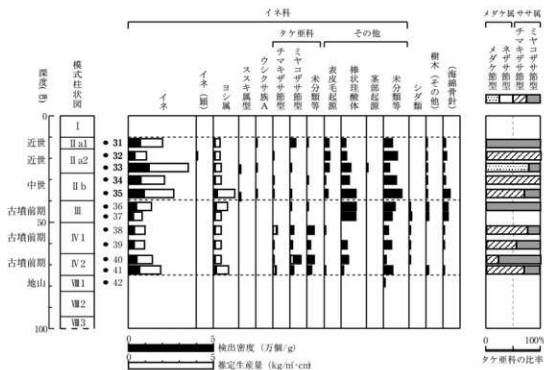
(3) 考察

a 稲作跡の検討

水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体(プラント・オパール)が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している[杉山2000]。なお、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

1) 63B12グリッド(第41図)

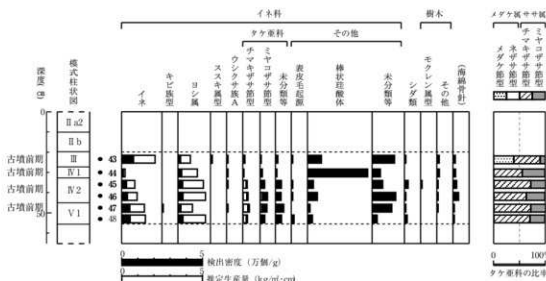
II a1層(試料31)からVIII層(試料42)までの層準について分析を行った。その結果、II a1層(試料31)からIV 2層(試料41)までの各層からイネが検出された。このうち、II a1層(試料31)、II a2層(試料33)、II b層(試料34、35)、IV 2層(試料41)では、密度が6,600~12,300個/gと高い値であり、III層(試料36)、IV 1層(試料38、39)でも3,300~4,700個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。



第41図 竹花遺跡63B12地点における植物珪酸体分析結果

2) 73B16グリッド(第42図)

III層(試料43)からV 1層(試料48)までの層準について分析を行った。その結果、これらの各層からイネが検出された。このうち、III層(試料43)とV 1層(試料48)では、密度が7,200個/g及び5,100個/gと高い値であり、IV 2層(試料46)でも3,300個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。IV 1層(試料44)では、密度が700個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、及び上層や他所からの混入などが考えられる。



b イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジューズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、キビ族型などその他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

c 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群の検出状況と、そこから推定される植生・環境について検討を行った。古墳時代前期の層準では、ヨシ属、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型などが検出され、シダ類、樹木（その他）なども認められた。中世から近世の層準では、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が減少し、シダ類は見られなくなっている。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねイネが優勢であり、部分的にヨシ属も多くなっている。

以上の結果から、古墳時代前期の調査区周辺は、ヨシ属が生育するような湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。なお、稲作の開始以降もヨシ属が比較的多く見られることから、水田雑草としてヨシ属が生育していたことや、休閑期間中にヨシ属が生育していたことなどが想定される。また、周辺の比較的乾燥したところには、ササ属（チマキザサ節やミヤコザサ節など）やシダ類などが生育していたと考えられ、遺跡周辺には何らかの樹木が分布していたと推定される。

(4) まとめ

植物珪酸体分析の結果、II a1層（近世）からV1層（古墳時代前期）までの各層（73B16グリッドのIV1層を除く）では、イネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。

古墳時代前期の調査区周辺は、ヨシ属が生育するような湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。また、周辺の比較的乾燥したところには、ササ属（チマキザサ節やミヤコザサ節など）やシダ類などが生育していたと考えられ、遺跡周辺には何らかの樹木が分布していたと推定される。

C 珪藻分析

株式会社古環境研究所 岡山 邦子

(1) 試料

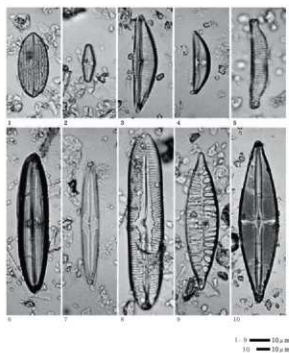
分析試料は、73B16地点（水田?）より採取されたⅢ層（試料43：古墳時代前期）からⅤ1下層（試料48：古墳時代前期）の計6点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。これらは、花粉分析に用いられたものと同一試料である。なお、珪藻の抽出と同定の方法は、第V章1.C.(3)に同じである。

(2) 結果

a 分類群

試料から出現した珪藻は、貧塩性種（淡水生種）29分類群である。第15表に分析結果を示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定した珪藻ダイアグラムを第44図に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性は[Lowe1974]や[渡辺2005]等の記載により、陸生珪藻は[小杉1986]により、環境指標種群の淡水生種は[安藤1990]による。また、主要な分類群について顕微鏡写真（第43図）を示した。以下にダイアグラムで表記した分類群を記載する。

〔貧塩性種〕 *Amphora copulata*, *Caloneis silicula*, *Cocconeis placentula*, *Cymbella cuspidata*, *Cymbella lanceolata*, *Cymbella silesiaca*, *Eunotia arcus*, *Eunotia bilunaris*, *Eunotia praerupta*, *Eunotia* spp., *Fragilaria brevistriata*, *Fragilaria construens*, *Frustulia vulgaris*, *Gomphonema parvulum*, *Gyrosigma* spp., *Hantzschia amphioxys*, *Navicula cuspidata*, *Navicula elginensis*, *Navicula mutica*, *Navicula* spp., *Neidium ampliatum*, *Neidium* spp., *Pinnularia microstauron*, *Pinnularia viridis*, *Rhopalodia gibba*, *Rhopalodia gibberula*, *Stauroneis anceps*, *Stauroneis phoenicenteron*, *Synedra ulna*



1. *Cocconeis placentula* 2. *Navicula mutica* 3. *Cymbella lanceolata* 4. *Amphora copulata* 5. *Eunotia praerupta*
6. *Navicula cuspidata* 7. *Pinnularia microstauron* 8. *Pinnularia viridis* 9. *Navicula cuspidata* 10. *Stauroneis phoenicenteron*

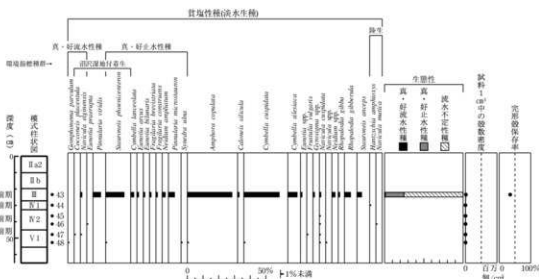
第43図 竹花遺跡の珪藻

b 珪藻群集の特徴

73B16地点（水田?）において、下位より珪藻構成と珪藻組成の変化の特徴を記載する（第44図）。

分類群	73B16地点					
	Ⅲ層 (43)	V1層 (44)	V2上層 (45)	V2下層 (46)	V1上層 (47)	V1下層 (48)
真・好流水性種						
<i>Amphora copulata</i>	29					2
<i>Caloneis silicola</i>	1					
<i>Cocconeis placentula</i>					1	
<i>Cymbella cuspidata</i>	23					2
<i>Cymbella lanceolata</i>	2					
<i>Cymbella silesiaca</i>	6					
<i>Eunotia arcus</i>	1					
<i>Eunotia bilunaria</i>	1					
<i>Eunotia praeangata</i>				1		
<i>Eunotia</i> spp.	1					
<i>Fragilaria brevistriata</i>	1					
<i>Fragilaria construens</i>	1					
<i>Fremontia vulgaris</i>					1	
<i>Gomphonema parvulum</i>						1
<i>Gyrodinium</i> spp.	1					
<i>Hantzschia amphioxys</i>		1		1		
<i>Navicula cuspidata</i>	1		2	2	6	5
<i>Navicula elginensis</i>	1				1	
<i>Navicula mutica</i>				1		
<i>Navicula</i> spp.						2
<i>Neidium ampliatum</i>	2					
<i>Neidium</i> spp.	2					
<i>Pinnularia microstauros</i>	4					
<i>Pinnularia viridis</i>	5					
<i>Rhopalodia gibba</i>	1					
<i>Rhopalodia gibberula</i>	4					
<i>Stauroneis anceps</i>	3					
<i>Stauroneis phoenicenteron</i>	12					
<i>Synedra alba</i>						2
計	192	1	2	5	8	16
未同定	1	0	0	0	0	0
割合	194	2	26	48	154	235
試料 1cm ² 中の総数(個)	1.4	4.0	8.0	1.6	2.0	2.8
	$\times 10^2$	$\times 10^2$	$\times 10^2$	$\times 10^1$	$\times 10^1$	$\times 10^1$
定形種保存率 (%)	34.7					

第 15 表 竹花遺跡における珪藻分析結果



第 44 図 竹花遺跡 73B16 地点における主要珪藻ダイアグラム

1) V1下層～Ⅲ層 (試料 48～試料 44：古墳時代前期)

珪藻密度が極めて低く、ほとんど検出されない。

2) Ⅲ層 (試料 43：古墳時代前期)

淡水不定性種が約 75% を占め、次いで真・好止水性種が占める。淡水不定性種では *Amphora copulata*, *Cymbella cuspidata* が優占種であり、*Cymbella silesiaca*, *Rhopalodia gibberula*, 沼沢湿地付着生環境指標種群の *Pinnularia viridis* などが伴われる。真・好止水性種では沼沢湿地付着生環境指標種群の *Stauroneis phoenicenteron* を主に、好止水性種の *Pinnularia microstauros*, *Neidium ampliatum* などが出現する。真・好流水性種では沼沢湿地付着生環境指標種群の *Navicula elginensis* が低率に出現する。

(3) 珪藻分析から推定される堆積環境

1) V1下層～IV1層 (古墳時代前期)

珪藻がほとんど検出されず、珪藻の生育できない乾燥した環境か、短期間に変遷する不安定な環境が推定される。

2) III層 (古墳時代前期)

流水不定性種では *Amphora copulata*, *Cymbella cuspidata* が優占し、*Cymbella silesiaca*, *Rhopalodia gibberula* が出現する。沼沢湿地付着生環境指標種群の *Stauroneis phoenicenteron* を主に真・好止水性種が伴われることから、停滞した止水性の水域が示唆されるが、水位は不安定であったと推定される。水田に多い *Amphora copulata* が多く、水田ないしその周辺環境が示唆される。

(4) ま と め

竹花遺跡で珪藻分析を行った結果、V1下層～IV1層 (古墳時代前期) は短期間に変遷する不安定な環境が推定され、III層 (古墳時代前期) は不安定な止水域が示唆され、水田かその周辺環境であったと推定された。

引用文献

- 安藤一男 1990 「淡水珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『東北地理』42 p.73-88.
- 伊藤良永・堀内誠示 1991 「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『珪藻学会誌』6 p.23-45.
- 笠原安夫 1985 『日本雑草図説』養賢堂 494p.
- 笠原安夫 1988 「作物及び田畑雑草種類」『養生文化の研究第2巻 養生業』雄山閣出版 p.131 - 139.
- 金原正明 1993 「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本 第10巻 古代資料研究の方法』角川書店 p.248-262.
- 小杉正人 1986 「陸生珪藻による古環境解析とその意義—わが国への導入とその歴史—」『植生史研究』1 植生史研究会 p.29-44.
- 小杉正人 1988 「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『第四紀研究』27 p.1-20.
- 鳥倉巳三郎 1973 「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録』第5集 60p.
- 杉山真二・藤原宏志 1986 「機動細胞珪藻体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—」『考古学と自然科学』19 p.69-84.
- 杉山真二 2000 「植物珪藻体 (プラント・オパール)」『考古学と植物学』同成社 p.189-213.
- 辻誠一郎 1984 「栃木県南部、二ノ宮町における立川期の植物遺体群集」『第四紀研究』23 p.21-29
- 中村 純 1973 「花粉分析」古今書院 p.82-110.
- 中村 純 1974 「イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として」『第四紀研究』13 p.187-193.
- 中村 純 1977 「稲作とイネ花粉」『考古学と自然科学』10 p.21-30.
- 中村 純 1980 「日本産花粉の標徴」『大阪自然史博物館収蔵目録』第13集 91p.
- 藤田 剛 1984 「南関東の第四紀化石5 (沖積世の珪藻化石2)」『日本化石集第27集 ATLAS OF JAPANESE FOSSILS』No.27-158.
- 藤原宏志 1976 「プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) —数種イネ科植物の珪藻体標本と定量分析法—」『考古学と自然科学』9 p.15-29.
- 藤原宏志・杉山真二 1984 「プラント・オパール分析法の基礎的研究 (5) —プラント・オパール分析による水田址の探査—」『考古学と自然科学』17 p.73-85.
- 町田洋・新井朋夫 2003 『新編火山灰アトラス』東京大学出版会 p.269

- 安田喜憲・三好教夫 1998 「関東地方の植生史」『図説日本列島植生史』朝倉書店 p.73-81
- 渡辺仁治 2005 「群集解析に基づく汚濁指数 DAIPo, pH 耐性能」『淡水珪藻生態図鑑』内田老鶴園 pp.666.
- Husteded, F. (1937-1938) Systematische und ologische Untersuchungen über die Diatomeenflora von Java, Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch. Hydrobiol, Suppl. 15, p.131-506.
- Lowe, R.L. (1974) Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. 333p., National Environmental Reserch. Center.
- K. Krammer・H. Lange-Bertalot (1986-1991) Bacillariophyceae・1-4.
- Asai, K. & Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophylic and saproxenous taxa. Diatom, 10, p.35-47.

3 姫御前遺跡及び糸魚川・上越地域の遺跡における古墳時代の火山灰層

新潟大学災害復興科学センター ト部 厚志

A はじめに

本稿は、新潟県糸魚川市において発掘調査された姫御前遺跡、竹花遺跡について火山灰分析を行い、火山灰層序を明らかにするとともに、周辺地域の遺跡の古墳時代の層位について比較検討を行い、古墳時代の火山灰層について対比を検討した。

B 火山灰分析

黒土層やローム層をはじめ、沖積層（沖積低地の遺跡）に含まれる火山灰は、鉱物組成、重鉱物組成、構成鉱物の屈折率などにより個々の火山灰を同定・対比を行うことができる。新潟地域の黒土層やローム層では、[新潟火山灰グループ 1981・1995]、[早津・新井 1981]、[信濃川ネオテクトニクス団体研究グループ 2002・2003] などの検討により、遺跡層序と指標火山灰の層序が明らかにされ、広域的な対比が行われている。また、沖積低地の遺跡においても、時代の異なる複数の火山灰層（火山ガラスの濃集層）が認められている。このうち、古墳時代の火山灰層については、新潟市北区（旧豊栄市）の正尺 C 遺跡や近隣の正尺 A 遺跡において同一の火山灰層が認められ、新潟県内の古墳時代の指標火山灰層として着目されてきた [新潟県教育委員会 2006]。

ここでは姫御前遺跡と竹花遺跡の試料の鉱物組成、重鉱物組成と火山ガラスの形態の検討から火山灰層（火山ガラス濃集層）を明らかにして、糸魚川・山岸遺跡、上越・下朝遺跡などの火山灰層序と比較検討しながら、特に古墳時代の火山灰層の比較・対比について検討した。

試料は、60、120、250 メッシュの篩を用いて水洗した。水洗した試料はそれぞれの粒度ごとに乾燥させた。構成粒度による構成鉱物の差異を考慮するため、120 メッシュ及び 250 メッシュの篩分試料を実体顕微鏡及び必要に応じて偏光顕微鏡により観察した。各試料の重鉱物組成と火山ガラスの形態は、それぞれの相対的量は第 16 表に示した。火山ガラスの形態は [吉川 1976] による区分を用いた。また、検討試料のなかで、火山ガラスが比較的多く含まれる層位については、火山ガラスの化学組成を測定し、同定・対比の検討を行った。火山ガラスの化学組成は、新潟大学の JXA-8600 型 X線マイクロアナライザー

を用い、加速電圧 15KV、試料電流 1.2×10^{-8} A、ビーム径 $5 \mu\text{m}$ で測定を行った (第 45・46 図)。

C 試料の分析結果

(1) 姫御前遺跡

試料は、遺跡発掘地内のメインベルト (37A13) において、連続的に採取されたもの及び 26B25 セクションにおいて火山灰層が濃集していた層位から採取した。層位区分は、遺跡発掘調査時のものである。以下に各試料の分析結果を述べる。

1) メインベルト (37A13)

層位区分: II a (試料番号 1): 近世

鉱物組成: 斜長石、重鉱物、岩片を多く含む。全体に砂質である。

重鉱物組成: 斜方輝石を含み、角閃石、鉄鉱物などをわずかに含む。

火山ガラスの形態: 火山ガラスは含まれない。

層位区分: II b (試料番号 2): 中世

鉱物組成: 斜長石、重鉱物、岩片を非常に多く含む。全体に砂質である。

重鉱物組成: 斜方輝石を多く含む、角閃石、単斜輝石をわずかに含む。

火山ガラスの形態: 火山ガラスは含まれない。

層位区分: III 上 (試料番号 3~5): 古墳時代前期

鉱物組成: 斜長石、岩片を含む、重鉱物をわずかに含む。全体に砂質で炭化物片も含む。

重鉱物組成: 斜方輝石をわずかに含む。

火山ガラスの形態: 火山ガラスは含まれない。

層位区分: III 下 (試料番号 6~8): 古墳時代前期

構成鉱物: 斜長石を含み、重鉱物、岩片をごくわずかに含む。炭化物片を多く含む。

重鉱物組成: 斜方輝石をごくわずかに含む。

火山ガラスの形態: 火山ガラスは含まれない。

層位区分: IV 上 (試料番号 9~12): 腐植土

構成鉱物: 斜長石をごくわずかに含む。植物片を多く含む。

重鉱物組成: ほとんど含まれない。

火山ガラスの形態: 火山ガラスは含まれない。

層位区分: IV 中 (試料番号 13)

構成鉱物: 斜長石をわずかに、火山ガラス、重鉱物、岩片をごくわずかに含む。植物片を含む。

重鉱物組成: 鉄鉱物をごくわずかに含む。

火山ガラスの形態: 扁平型 (Hb) の火山ガラスをごくわずかに含む。

層位区分: IV 下 (試料番号 14~16): 火山灰質

構成鉱物: 斜長石をわずかに含む。試料番号 16 では火山ガラスをごくわずかに含む。植物片を含む。

重鉱物組成: ほとんど含まれない。

火山ガラスの形態: 試料番号 16 では、扁平型 (Hb) の火山ガラスをごくわずかに含む。

層位区分: V (試料番号 17~20)

構成鉱物: 斜長石、重鉱物、岩片をわずかに含む。植物片をわずかに含む。

重鉱物組成：斜方輝石をごくわずかに含む。

火山ガラスの形態：ほとんど含まれない。

試料番号 20：火山灰質な部分の別採取試料

構成鉱物：斜長石をわずかに、火山ガラス、重鉱物、岩片をごくわずかに含む。

重鉱物組成：鉄鉱物をごくわずかに含む。

火山ガラスの形態：扁平型 (Hb) の火山ガラスをごくわずかに含む。

2) 26B25 セクション

層位区分：Ⅲ c (灰白色火山灰濃集部)：古墳時代前期 * 37A13 セクションのⅣ下層位に対比

構成鉱物：斜長石、重鉱物、火山ガラス、岩片をわずかに含む。

重鉱物組成：角閃石をごくわずかに含む。

火山ガラスの形態：中間型 (Cb)、扁平型 (Hb) の火山ガラスをごくわずかに含む。

層位区分：Ⅶ (火山灰質砂質シルト)：地山

構成鉱物：斜長石、火山ガラス、岩片をわずかに含む。

重鉱物組成：ほとんど含まれない。

火山ガラスの形態：中間型 (Cb) の火山ガラスをごくわずかに含む。

(2) 竹花遺跡

試料は、遺跡発掘地内の基本層序 (63B12) において、5cm 間隔で連続的に採取されたものを用いた。

層位区分は、遺跡発掘調査時のものである。以下に各試料の分析結果を述べる。

層位区分：Ⅱ a1 (試料番号 1)：近世

鉱物組成：岩片を多く、斜長石、重鉱物をわずかに含む。全体に砂質である。

重鉱物組成：斜方輝石、単斜輝石を含む。

火山ガラスの形態：火山ガラスは含まれない。

層位区分：Ⅱ a2 (試料番号 2～3)：近世

鉱物組成：岩片を多く、斜長石、重鉱物をわずかに含む。試料番号 3 は火山ガラスをごくわずかに含む。全体に砂質である。

重鉱物組成：斜方輝石、単斜輝石、角閃石をわずかに含む。

火山ガラスの形態：試料番号 3 は、扁平型 (Hb) の火山ガラスをごくわずかに含む。

層位区分：Ⅱ b (試料番号 4～5)：中世

鉱物組成：斜長石、重鉱物、岩片をわずかに含む。全体に砂質で、植物片を含む。

重鉱物組成：斜方輝石、角閃石をごくわずかに含む。

火山ガラスの形態：火山ガラスは含まれない。

層位区分：Ⅲ (試料番号 6～7)：中世

鉱物組成：斜長石をごくわずかに含む。全体に植物片を多く含む。

重鉱物組成：ほとんど含まれない。

火山ガラスの形態：火山ガラスは含まれない。

層位区分：Ⅳ 1 (試料番号 8～9)：古墳時代前期

構成鉱物：斜長石、岩片を多く含む。全体に砂質である。

重鉱物組成：斜方輝石をごくわずかに含む。

火山ガラスの形態：火山ガラスは含まれない。

層位区分：IV 2（試料番号10～11）：古墳時代前期

構成鉱物：斜長石を含み、重鉱物、岩片をわずかに、火山ガラスをごくわずかに含む。

重鉱物組成：角閃石、斜方輝石をごくわずかに含む。

火山ガラスの形態：扁平型（Hb）、中間型（Cb）の火山ガラスをごくわずかに含む。

層位区分：VII 1（試料番号12～13）：地山

構成鉱物：斜長石、重鉱物、岩片を多く含む。全体に砂質である。

重鉱物組成：角閃石、斜方輝石をわずかに含む。

火山ガラスの形態：火山ガラスは含まれない。

層位区分：VII 2（試料番号14～15）

構成鉱物：斜長石、岩片を多く含む。全体に砂質である。

重鉱物組成：ほとんど含まれない。

火山ガラスの形態：火山ガラスは含まれない。

層位区分：VII 3（試料番号16～17）

構成鉱物：斜長石、岩片を多く、重鉱物をわずかに含む。全体に砂質で、植物片を含む。

重鉱物組成：鉄鉱物をわずかに含む。

火山ガラスの形態：火山ガラスは含まれない。

層位区分：VII 4（試料番号18）

構成鉱物：斜長石、岩片を多くに含む。全体に砂質である。

重鉱物組成：ほとんど含まれない。

火山ガラスの形態：火山ガラスは含まれない。

層位区分：VII 5（試料番号19）

構成鉱物：岩片を多く、斜長石をわずかに含む。全体に砂質である。

重鉱物組成：ほとんど含まれない。

火山ガラスの形態：火山ガラスは含まれない。

層位区分：VII 6（試料番号20）

構成鉱物：岩片を多く、斜長石をわずかに含む。全体に砂質である。

重鉱物組成：ほとんど含まれない。

火山ガラスの形態：火山ガラスは含まれない。

(3) 下割遺跡

試料は、遺跡発掘地内の基本層序（14ライン東壁）において、連続的に採取されたものを用いた。層位区分は、遺跡発掘調査時のものである。以下に各試料の分析結果を述べる。

層位区分：V（試料番号1～6）

鉱物組成：岩片をわずかに含む。全体に砂質である。

重鉱物組成：ほとんど含まれない。

火山ガラスの形態：火山ガラスは含まれない。

火山ガラスの形態：火山ガラスは含まれない。

層位区分：IX 1b（試料番号9）

鉱物組成：岩片を多く含む。炭化物片をわずかに含む。

重鉱物組成：ほとんど含まれない。

火山ガラスの形態：火山ガラスは含まれない。

層位区分：IX 1b'（試料番号10）

鉱物組成：岩片を多く含む。炭化物片をわずかに含む。

重鉱物組成：ほとんど含まれない。

火山ガラスの形態：火山ガラスは含まれない。

層位区分：IX 2（試料番号11）：古墳時代前期

鉱物組成：斜長石を含み、岩片をわずかに、火山ガラスをごくわずかに含む。

重鉱物組成：ほとんど含まれない。

火山ガラスの形態：扁平型（Hb）の火山ガラスをごくわずかに含む。

層位区分：X（試料番号12）

鉱物組成：斜長石、岩片をわずかに、火山ガラスをごくわずかに含む。

重鉱物組成：ほとんど含まれない。

火山ガラスの形態：扁平型（Hb）の火山ガラスをごくわずかに含む。

（4）糸魚川・山岸遺跡（比較検討試料）

層位区分：中世の遺物包含層の下位で、層厚 20cm、粗粒～中粒砂サイズの軽石片、細礫サイズの岩片や中粒～粗粒砂を含む砂質シルト層。古墳時代相当。

鉱物組成：斜長石、岩片を含み、火山ガラスをわずかに含む。全体に砂質である。

重鉱物組成：ほとんど含まれない。

火山ガラスの形態：薄手の中間型（Cb）の火山ガラスをわずかに含む。

（5）糸魚川・南押上遺跡（比較検討試料）

層位区分：C区 13B5、SK38（粘土2）：古墳時代前期

鉱物組成：斜長石、重鉱物をわずかに含み、火山ガラスをごくわずかに含む。

重鉱物組成：角閃石をわずかに含む。一部に火山ガラスが付着している。

火山ガラスの形態：中間型（Ca、Cb）の火山ガラスをごくわずかに含む。

層位区分：2D区 16C1、SI01 ビット内粘土（⑧層）：古墳時代前期

鉱物組成：斜長石、火山ガラスをわずかに含む。

重鉱物組成：ほとんど含まれない。

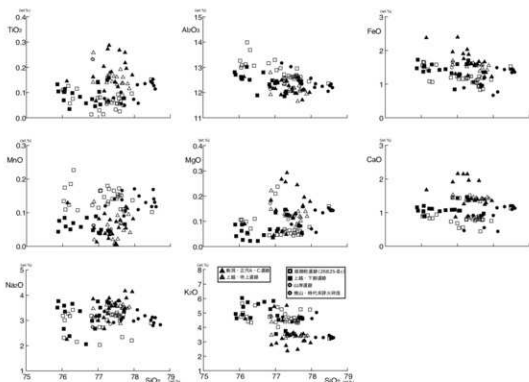
火山ガラスの形態：中間型（Cb）をわずかに、中間型（Ca）の火山ガラスをごくわずかに含む。

層位区分：2D区 16C7、SI01 1次炉底面粘土：古墳時代前期

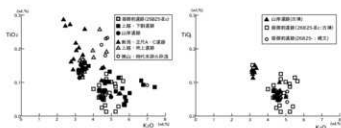
鉱物組成：斜長石、火山ガラスをわずかに含む。

重鉱物組成：ほとんど含まれない。

火山ガラスの形態：中間型（Ca、Cb）の火山ガラスをわずかに含む。



第45図 各遺跡の古墳時代の層位に含まれる火山ガラスの化学組成

第46図 各遺跡の古墳時代(晩文時代)の層位に含まれる火山ガラスの化学組成 (TiO₂ - K₂O 図)

D 考 察

(1) 糸魚川地域での古墳時代の火山灰層の対比

姫御前遺跡のⅢc層(灰白色火山灰濃集部)や37A13セクションのⅣ下層は、灰白色で全体に粘土化しているが、野外の層相では風化した軽石粒子を含んでいる。また、わずかではあるが火山ガラスを含んでいる。このことから、これらは降灰した火山灰(軽石を含む)を含む層位であると判断できる。姫御前遺跡、竹花遺跡、南押上遺跡は隣接した遺跡であり、古墳時代の遺物包含層との層序関係からみると、火山ガラスを含む野外での灰白色の粘土質な層位は、同一のものとして対比できるものと考えられる。さらに、これらの遺跡の東方に離れた地点に位置する山岸遺跡で見られる軽石の散在する層位に含まれる火山ガラスは、姫御前遺跡のⅢc層に含まれる火山ガラスと組成領域が一致することから、同一のものとして対比できる(第45-46図)。このことから糸魚川市街部で軽石の散在する層位は、軽石を含む火山灰の降灰があったものと考えられる。

(2) 古墳時代の火山灰層の広域対比

糸魚川地域の姫御前遺跡と山岸遺跡で見られる火山灰層の広域的な対比について検討した。比較検討を行ったのは、上越市の下割遺跡と吹上遺跡、新潟市の正尺遺跡のいずれも古墳時代の層位に含まれる火山灰試料である。これらに含まれる火山ガラスの化学組成領域の特徴から、例えばTiO₂が0.1～0.2wt%、K₂Oが2.8～3.4wt.%程度の組成領域(領域①)と、TiO₂が0.01～0.11wt%、K₂Oが4.0～6.0wt.%程度の組成領域(領域②)の2つに区分することができる(第46図)。

姫御前遺跡と下割遺跡の古墳時代の火山灰に含まれる火山ガラスは、領域②を示すものが多く領域①を示すものが少ない傾向にあり一致している。また、山岸遺跡の古墳時代の火山灰に含まれる火山ガラスは領域②と領域①を示しているが、2つの組成領域を有するという点では、姫御前遺跡、下割遺跡と山岸遺跡の古墳時代に含まれる火山ガラスは同一のものとして対比できる(第46図)。

一方、正尺遺跡と吹上遺跡の古墳時代の火山灰層に含まれる火山ガラスは、前述の領域①の組成を示すものが多い点で同一のものであると考えられる。これらにも領域②を示す火山ガラスも含まれることから、姫御前遺跡、山岸遺跡、下割遺跡、吹上遺跡と正尺遺跡の古墳時代に含まれる火山灰は同一のものである可能性がある。今後、各試料の火山ガラスの形態と組成領域について確認しながら、各遺跡の遺物包含層のより詳細な時代区分と火山灰層の層位関係を検討する必要がある。

これらの古墳時代の火山灰層は新潟県内の指標火山灰として有効である可能性が非常に高い。供給火山については、現在のところ明確ではないが、新潟地域ではシルト粒であるのに対して糸魚川地域で粗粒な軽石を含むことや、火山ガラスの付着した角閃石を伴うこともあることから、糸魚川地域の近傍である焼山の起源である可能性がある。焼山の火山活動については、[早津2008]などによって、噴火活動に起因したと考えられる縄文時代晩期の土石流(前川土石流)や9世紀ごろの早川火砕流の活動が知られている。焼山の古墳時代の活動については、[早津2008]などにより明確に示されていないが、山麓部では9世紀の火砕流の下位に、部分的に時代未詳の火砕流堆積物が分布しておりこれらとの対比について検討していく必要がある。

文献

- 早津賢二 2008 『妙高火山群』実業出版社 438p.
- 早津賢二・新井房夫 1981 「信濃川中流域におけるテフラ層と段丘形成年代」『地質学雑誌』87 791-805.
- 新潟火山灰グループ 1981 「新潟県下のローム層について そのI-信濃川ローム層について」『地球科学』35 294-311.
- 新潟火山灰グループ 1995 「新潟県下のローム層について そのII-信濃川ローム層の層序」『地球科学』49 188-202.
- 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2006 『馬見坂遺跡・正尺A遺跡・正尺C遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第165集 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XVII 133p.
- 信濃川ネオテクトニクス団体研究グループ 2002 「信濃川津南地域における第四紀末期の段丘形成と構造運動」『第四紀研究』41 199-212.
- 信濃川ネオテクトニクス団体研究グループ 2003 「信濃川中流域における第四紀末期の河成段丘面編年」『地球科学』57 95-110.
- 吉川周作 1976 「大阪群の火山灰層について」『地質学雑誌』82 497-515.

4 新潟県姫御前遺跡及び竹花遺跡出土木材の樹種

東北大学植物園 箱崎真隆・小川とみ・鈴木三男

A はじめに

姫御前遺跡と竹花遺跡は新潟県糸魚川市の日本海から400mほど内陸側の沖積地に立地する遺跡で、姫御前遺跡では弥生時代～古墳時代にかけての低湿地の埋没林と古墳時代の自然堤防上の住居跡群などがあり、竹花遺跡では古墳時代、中世の水田跡や木製遺物が発掘された。これらの木質遺物について徒手による切片を作成し、その樹種を調べた。その結果、下に記した樹種が同定され、当地における弥生～古墳時代の植生と古墳時代、中世の木材利用が明らかとなった。

B 同定された樹種

(1) サワラ *Chamaecyparis pisifera* Siebold et Zucc. ヒノキ科

顕微鏡写真：第47図 1a-c (NIG-2589)

水平・垂直樹脂道を欠き、仮道管、放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材で、早材部では断面ほぼ方形の仮道管が整然と並び、晩材部は幅狭く、早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞は晩材部付近に散在し、水平壁は数珠状を呈する。分野壁孔はスギよりも小さく、アスナロなどよりも大きい、中型のヒノキ型～スギ型で、ヒノキよりもやや孔口が大きく、開口部は水平に近く開く。1分野当たり普通2個存在する。以上の形質からサワラの材と同定した。

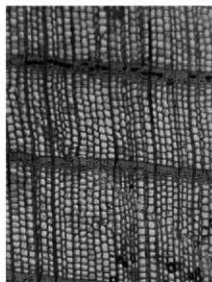
サワラは福島県から岐阜県にかけての本州中部の冷温帯から亜高山帯下部にかけて分布する針葉樹で、幹径1m、樹高40mになる。材は木理通直、肌目は緻密であるがヒノキより軽軟で、芳香・光沢はなく、また保存性にやや劣る。スギ、ヒノキ同様に建築材、建具、家具、各種器具に用いられるが水湿に強いので特に風呂桶などに重用される。姫御前遺跡からは曲物底板2点と桶底板1点、竹花遺跡からは曲物底板2点が出土した。

(2) アスナロ *Thuopsis dolabrata* (Lin. f.) Siebold et Zucc. ヒノキ科

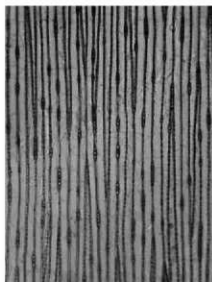
顕微鏡写真：第47図 2a-c (NIG-2647)

垂直・水平のいずれの樹脂道をも欠き、サワラによく似た針葉樹材で、年輪は明瞭で幅狭いものから広いものまである。早材部の仮道管はサワラ、スギより細く、晩材はサワラ同様幅狭く、材の大部分は早材が占め、早材から晩材への移行は急である。仮道管の内壁にらせん肥厚はない。樹脂細胞は早材の終わりから晩材にやや接線方向に繋がって散在し、黒褐色の樹脂をもち、水平壁は数珠状となる。放射組織は単列、柔細胞のみからなり、分野壁孔は小型のヒノキ型～トウヒ型で1分野に2～4個ある。これらの形質からアスナロ(変種のヒノキアスナロ=ヒバを含む)と同定した。

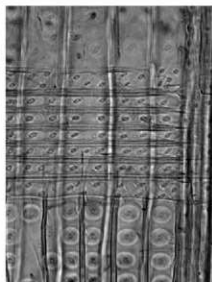
母種のアスナロは宮城・山形県南部から九州鹿児島県まで、変種のヒノキアスナロ(ヒバ)は北海道南部(渡島半島)から尾瀬、日光地域及び能登半島に分布し、いずれも樹高30m、幹径80cmになる。材はやや堅く、強靱できめ細かく、保存性が大変良い。建築材、各種器具材などに広く用いられる。竹花遺跡から曲物の底か蓋と思われるもの1点と下駄かと思われるもの1点のみが出土した。



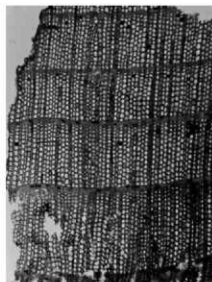
1a. サワラ NIG-2589, 木口×30.



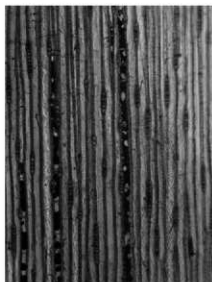
1b. 同 板目×60.



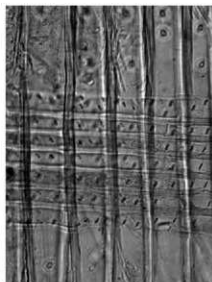
1c. 同 径目×300.



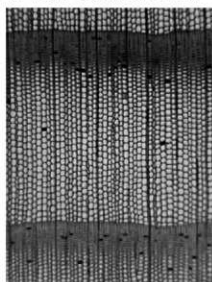
2a. アスナロ NIG-26479, 木口×30.



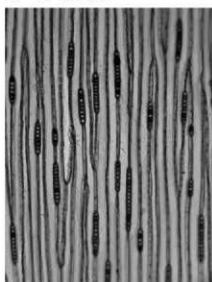
2b. 同 板目×60.



2c. 同 径目×300.



3a. スギ NIG-2393, 木口×30.



3b. 同 板目×60.



3c. 同 径目×300.

第47図 サワラ・アスナロ・スギの顕微鏡写真

(3) スギ *Cryptomeria japonica* (Linn. f.) D. Don スギ科

顕微鏡写真：第 47 図 3a-c (NIG-2393)

年輪が極めて明瞭な針葉樹材で、年輪幅は広いものから狭いものまで変異があり、広い年輪では早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部も幅広いのに対し、狭い年輪ではかなり急で、晩材部も狭くヒノキ科の材に似てくる。特に成長の悪い枝材では早材部仮道管径は細く、晩材部が少なくヒノキ科の材によく似る。樹脂細胞は晩材部に多く、黒褐色の物質が充填して目立ち、横断面での形状は接線方向に扁平で、やや接線方向に連なって散在する。樹脂細胞の水平壁は平滑で薄いが、時にやや厚く、多数珠状に肥厚する。放射組織は単列で柔細胞のみからなり、多くは 10 細胞高以上となるが、枝材などでは 1-3 細胞高のものが殆どを占める。放射柔細胞の垂直、水平壁は平滑、分野壁孔は大型の楕円形で開孔部は厚いレンズ状となり長軸がほぼ水平方向で、スギ型、枝材では壁孔径は小さく開孔部も狭い。1 分野に 1-2 個ある。以上の形質からスギの材と同定した。

スギは青森県の津軽地方南部から九州屋久島までの冷温帯から暖温帯に広く分布する針葉樹で、日本海側と関東南部以南の太平洋側に特に多い。幹径 2m、樹高 35m を超える大高木となり、材は木理直通で割裂性がよく、軽軟で強靱、加工性がよく仕上げは中位であるが、大材が得られるので、大型建築物から個人住宅までのさまざまな建築物のあらゆる部位、土木用材、さまざまな器具、細工物、指物など、国産材ではもっとも広い用途がある。姫御前遺跡の埋没林はこのスギを中心に構成され、また、姫御前、竹花両遺跡とも建築材、板材などの大材から箸のような小さい生活用具に至るまで、さまざまな用途に最も多く使われている。

(4) アカマツ *Pinus densiflora* Siebold et Zucc. マツ科

顕微鏡写真：第 48 図 4a-c (NIG-2646)

年輪が幅広く、幅広い晩材部を持ち年輪界が明瞭な針葉樹材であるが、若齢部では早材から晩材への移行ははっきりしない。水平・垂直の両樹脂道を持つ。樹脂道の周囲は壁の薄いエビセリウム細胞からなり、これが出土材ではほとんど壊れているので不定形の穴に見える。放射組織は単列と中央に水平樹脂道を持つ紡錘形の 2 種類があり、放射組織の上下の縁には 1- 数細胞層の放射仮道管があり、その水平壁の内面は、柾目面で見ると鋭角な歯状に肥厚している。放射柔細胞の水平壁は平滑で、分野壁孔は大型の窓状で 1 分野に一つある。以上の形質より、マツ属のアカマツの材と同定した。五葉松類（単位管束亜属）とは放射仮道管の内壁が厚く肥厚することで、同じ二葉松類（複維管束亜属）のクロマツとはその内壁の肥厚が鋭く鋸歯状になることで区別される。

アカマツは北海道南部から九州にかけての冷温帯から暖温帯の山野に普通に生える針葉樹で、特に二次林に多い。材は硬で樹脂が多く加工性は悪いが保存性はよく、建築材、特に水湿に強いことから土木用材によく用いられる。竹花遺跡から舟形と丸木の杭各 1 点が出土した。

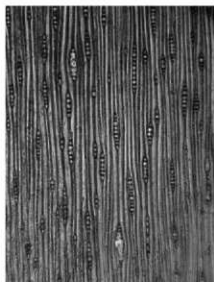
(5) カバノキ属 *Betula* カバノキ科

顕微鏡写真：第 48 図 6a-c (NIG-2381)

中～小型で楕円形の道管が、単独あるいは放射方向に数個複合して、均一に、しかも密度低く散在する散孔材で、道管の穿孔は 10 数本の横棒からなる階段状である。道管相互の壁孔はごく小さい孔紋で交互



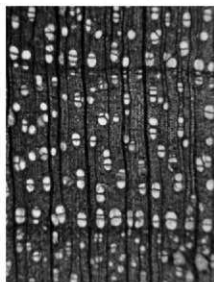
4a. アカマツ NIG-2646. 木口×30.



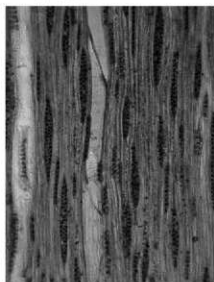
4b. 同 板目×60.



4c. 同 径目×300.



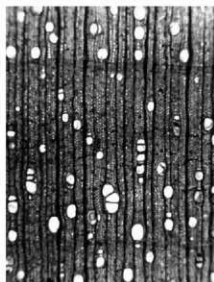
5a. カバノキ属 NIG-2381. 木口×30.



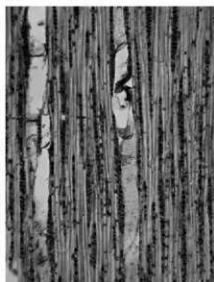
5b. 同 板目×60.



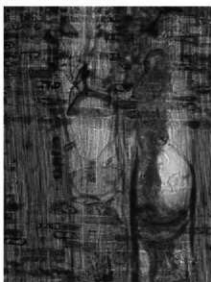
5c. 同 径目×120.



6a. アサダ NIG-2742. 木口×30.



6b. 同 板目×60.



6c. 同 径目×120.

第48図 アカマツ・カバノキ属・アサダの顕微鏡写真

状に極めて密に配列する。木部柔組織は短接線状で、晩材部でやや目立つ。放射組織は同性で1-3細胞幅、道管との壁孔はごく小さくて密にある。これらの形質からカバノキ属の材と同定した。

カバノキ属には亜高山帯のダケカンパから冷温帯のウダイカンパ、シラカンパなど多数の種があり、材構造は互いによく似ていて種の識別は難しい。材質はウダイカンパのように堅硬で木理緻密で優秀な木材からシラカンパのようにさほど材質の良くないものまでであるが、建築材、家具、各種器具、柄物、合板など広い用途がある。また、アズサ(別名ミズメ)は古来、梓弓に用いる木として知られている。姫御前遺跡から自然木2点が出土した。

(6) アサダ *Ostrya japonica* Sarg. カバノキ科

写真図版：第48図 6a-c. (NIG-2742)

単軸あるいは数個が放射方向に複合した中～小型の楕円形の道管が年輪の前半に密度高く均一に分布する散孔材で、年輪の後半部では道管が年輪界付近に向けて順次小さくなり、晩材部での道管密度は低い。木部柔組織は接線状で、晩材部でよく目立つ。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は小孔紋で交互状に密に並び、内壁には繊細ならせん肥厚がある。放射組織は1-3細胞幅の同性で、スマートな紡錘形をしており、時に単列の翼部が高くなる。これらの形質からアサダの材と同定した。

アサダは北海道から九州にかけての冷温帯の山間部に分布する幹径60cm、樹高20mになる落葉樹で、材はやや堅硬、強靱で割裂困難、磨くと綺麗な光沢が出て、床柱、敷居などの建築材、各種器具材、柄物、舟の櫓などの用途がある。竹花遺跡からは獣類7点と動物の骨1点が出土した。

(7) クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. ブナ科

顕微鏡写真：第49図 7a-c (NIG-2613)

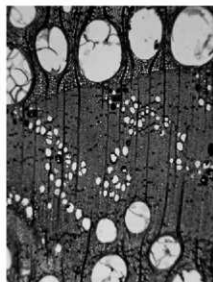
年輪のはじめに円～卵形の大道管が一列に並び、そこから順次径を減じ、晩材部では薄壁多角形の小道管が火炎状の紋をなす環孔材で、辺材部は茶褐色、心材部は漆黒になる。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔はやや大振りの小孔紋で交互状にやや隙間を開けて配列する。らせん肥厚はない。木部柔組織は周囲状及び単細胞幅の独立带状、放射組織は単列同性で背は低い。道管-放射組織間壁孔は不定形の楕円形で大振り、櫛状にきちんと並ぶことはない。これらの形質からクリの材と同定した。

クリは北海道石狩低地周辺から九州鹿児島までの冷温帯から暖温帯に広く分布する落葉高木で、幹直径1m以上、樹高30mほどとなる。材質は堅く、割裂が容易で耐久力、保存性は大変よい。大型建造物から一般の家屋の柱や土台回り、屋根葺き材(くれこぼ)などに用いられるほか、家具、農具、などさまざまな部分に用いられ、また水湿に強いことから土木用材や鉄道枕木などの特用があった。姫御前遺跡から杭と自然木が1点ずつ、竹花遺跡から木腫1点が出土した。

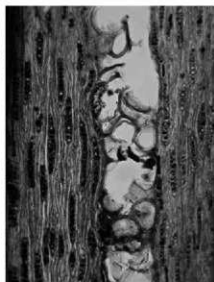
(8) ブナ属 *Fagus* ブナ科

顕微鏡写真：第49図 8a-c. (NIG-2474)

薄壁で多角形の小道管が密に均一に分布する散孔材で、道管の大きさは年輪界に向かって順次小さくなる。道管は数個が様々な方向に複合し、密にあるが、年輪界付近では小さくなるので密度が低く見える。穿孔は単一及び横棒が10本くらいと数の少ない階段状で、道管内壁にらせん肥厚はない。木部柔組織は散在状及び短接線状で、晩材部でやや目立つ。放射組織は1-数細胞幅の狭くて背の低いものから10細胞



7a. クリ NIG-2613. 木口×30.



7b. 同 板目×60.



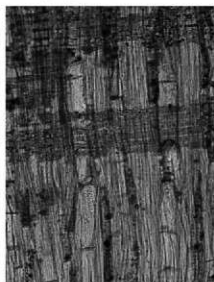
7c. 同 径目×120.



8a. プナ属 NIG-2374. 木口×30.



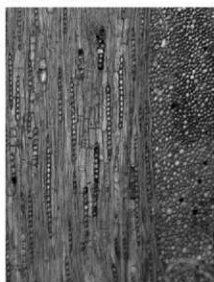
8b. 同 板目×60.



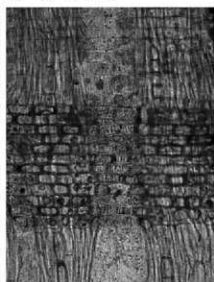
8c. 同 径目×120.



9a. アカガシ亜属 NIG-2388. 木口×30.



9b. 同 板目×60.



9c. 同 径目×120.

第49図 クリ・プナ属・アカガシ亜属の顕微鏡写真

胞以上となり肉眼で見えるほど幅広く背の高い大きなものまであり、ほぼ同性である。これらの形質からブナ属の材と同定した。

ブナ属には北海道南部から九州鹿児島県までの冷温帯に広く分布するブナと本州、四国、九州の冷温帯下部から暖温帯上部のおもに太平洋側に分布するイヌブナがあるが、材構造は互いによく似ていて識別は困難である。いずれも幹直径1m、樹高30mに達する落葉大高木である。ブナの材は坚硬緻密で割裂が容易で保存性は低いが加工性はよく、建築材、家具材、器具材など広く用いられるが、漆器碗の木地などの特用がある。姫御前遺跡から自然木が1点、竹花遺跡から漆器碗2点が出土した。

(9) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科

顕微鏡写真：第49図 9a-c. (NIG-2388)

中型で丸い厚壁の道管がゆるくまとまりながら放射方向に年輪を越えて配列する放射孔材で、木部柔組織は1-3細胞程度程度の独立帯状で接線状に多数配列してよく目立つ。道管の穿孔は単一、道管内壁にらせん肥厚はない。放射組織は単列のものや複合放射組織があり、柾目面では肉眼で見える特有の紋様をなす。これらの形質からブナ科のコナラ属のうち、常緑のカシ類であるアカガシ亜属の材と同定した。

アカガシ亜属(カシ類)はブナ科コナラ属のうち、アカガシ、シラカシ、アラカシなど常緑の樹種からなる亜属で、全国の暖温帯以南に広く分布し、照葉樹林の主要素である。多数の種があり、材構造による個々の種の識別は出来ていない。いずれの材も硬く緻密で強靱で粘りがあり、加工性には難があるが、建築材、各種器具材、車輛材、柄物など広い用途がある。姫御前遺跡からは自然木15点が出土し、竹花遺跡からは一木鋸、茄子形の鎌、それに鋸鎌の柄それぞれ1点ずつ出土した。

(10) ケヤキ *Zelkova serrata* Thunb. ニレ科

顕微鏡写真：第50図 10a-c. (NIG-2763)

年輪始めに大道管が通常1層並び、晩材部では小道管多数が塊状に集まって幅広い年輪では波状の紋をなす環孔材で、道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は小孔紋で交互状に密に配列し、小道管内壁には顕著ならせん肥厚がある。木部柔組織は周囲状だが目立たない。放射組織は紡錘形で、鞘細胞はなく、上下端に大きな結晶細胞を持つ。これらの形質からケヤキの材と同定した。

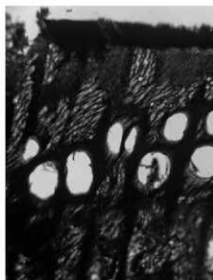
ケヤキは青森県から鹿児島県までの暖温帯から冷温帯にかけて広く分布する落葉広葉樹で、幹径1.5m、樹高30mを超える大木となる。材は坚硬強靱で弾力があり、材質に優れ、加工容易で大材が得られることもあって、大きな建造物の建築材に、木目が美しく加工が容易であることもあって、各種家具内装や大型彫刻物、臼、杵、太鼓、刳物容器、漆器木地など、実に多様に用いられる。竹花遺跡から漆器碗1点が出土した。

(11) モクレン属 *Magnolia* モクレン科

顕微鏡写真：第50図 11a-c. (NIG-2372)

薄壁多角形～楕円形の小道管が単独あるいは放射方向に2-4個複合して均一に分布する散孔材で、道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は階段状、らせん肥厚はない。放射組織は2-3細胞でスマートな紡錘形、同性である。以上の形質からモクレン属の材と同定した。

モクレン属には全国の冷温帯から暖温帯上部にかけて広く分布するホオノキ、それよりもやや標高の低



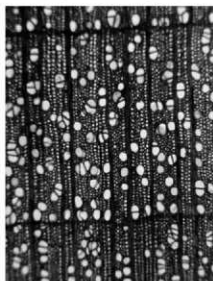
10a. ケヤキ NIG-2763. 木口×30.



10b. 同 板目×60.



10c. 同 柁目×120.



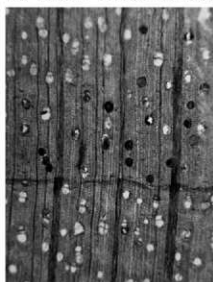
11a. モクレン属 NIG-2372. 木口×30.



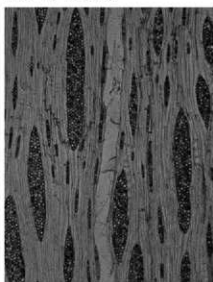
11b. 同 板目×60.



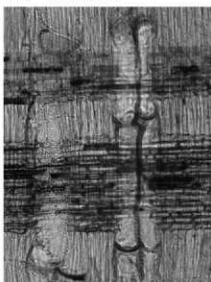
11c. 同 柁目×120.



12a. カエデ属 NIG-2386. 木口×30.



12b. 同 板目×60.



12c. 同 柁目×120.

第50図 ケヤキ・モクレン属・カエデ属の顕微鏡写真

いところに多いコブシ、コブシよりもやや標高が高く、また日本海側の多雪地帯に多いタムシバなどが分布する。ホオノキ、コブシは幹径 50cm、樹高 15m を超える落葉高木で、特にホオノキでは幹が通直で樹高は優に 20m を超える。ホオノキの材は軽軟緻密で木理通直、肌目は精で早晚材の差が少なく年輪が目立たないので加工性がよい良質の材である。建築、各種器具材に用いられるが、下駄、版木、小細工ものの特用がある。コブシも同様の用途があるがタムシバは材が小さいのであまり使われない。姫御前遺跡から自然木 32 点が出土した。

(12) カエデ属 *Acer* カエデ科

顕微鏡写真：第 50 図 12a-c. (NIG-2386)

薄壁楕円形の小道管が単独あるいは 2 個複合してまばらに、均一に分布する散孔材で、道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は小孔紋で交互状、内壁にはらせん肥厚がある。道管内にはしばしば透明感のある褐色物質が充填している。木部柔組織は散在状で目立たず、放射組織は 1 - 5 細胞幅の同性である。これらの形質からカエデ属の材と同定した。

わが国においては、カエデ属は北海道から沖縄までの亜高山帯から亜熱帯まで、沢山の樹種があり、新潟県地方にはウリカエデ、ハウチワカエデ、ヤマモミジ、ウリハダカエデ、イタヤカエデなど多くの種が多くある。材構造は互いに似ているので各樹種を識別するのは困難である。いずれも落葉の小高木から高木で材はやや柔らかいものから堅いものまであり、粘りがあり、木目も美しく、加工性も比較的良好である。建築材の裝飾的部分、和洋家具、刀の鞘や束、農具の柄、楽器（バイオリンの胴）、漆器木地、彫刻（こけし）などの多様な用途がある。姫御前遺跡から自然木 5 点が出土した。

(13) トチノキ *Aesculus truinata* Blume トチノキ科

顕微鏡写真：第 51 図 13a-c (NIG-2435)

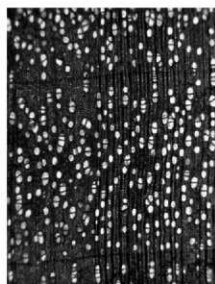
薄壁で楕円形の小道管が単独あるいは数個が放射方向に複合して散在する散孔材で、木部柔組織は目立たない。道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は小孔紋で交互状、放射組織は単列同性で背が低く、層階状配列する。単列の放射組織が層階状に配列することから横断面では放射組織が殆どない部分と、それが高密度で分布する部分が現れる。これらの形質からトチノキ科のトチノキの材と同定した。

トチノキは北海道南部から九州にかけての温帯の湿潤地に広く分布する落葉高木で、時に直径 2m、樹高 30m を超える巨木となる。種子は有毒のサポニンを含むがこれを晒して取り除けば優良なデンプンが多量に取れる。材は肌理細かく柔らかく、加工性に優れるが狂いが出やすく、また保存性も低い。しかし大材が得られるので建築の大きな板を必要とする部分、大型の刳物、挽物、漆器木地などに縄文時代から非常によく利用されてきている。姫御前遺跡からは弥生～古墳時代前期の自然木が 3 点、それに竹花遺跡から中世の漆椀 1 点が出土した。

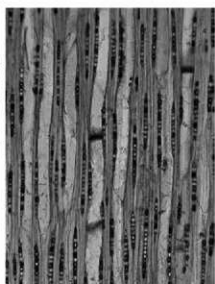
(14) トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科

顕微鏡写真：第 51 図 14a-c (NIG-2383)

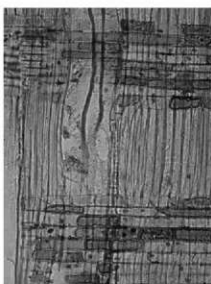
丸い大道管が年輪始めに 1 ~ 3 層に並び、孔圏外では厚壁の小道管が単独あるいは数個、放射方向に複合したものが均一に散在する環孔材で、小道管の壁は比較的厚く、周囲状柔組織をもち特に晩材部で目立つ。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は微小孔紋で密に分布し、螺旋肥厚はない。放射組織は 2、時に 3



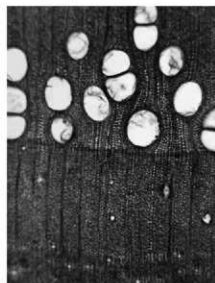
13a. トチノキ NIG-2435. 木口×30.



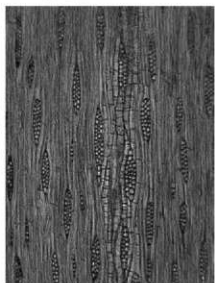
13b. 同 板目×60.



13c. 同 柁目×120.



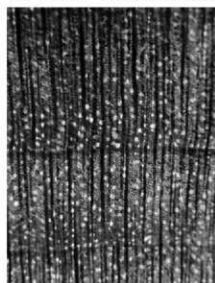
14a. トネリコ属 NIG-2383. 木口×30.



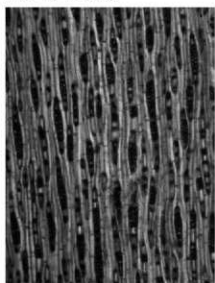
14b. 同 板目×60.



14c. 同 柁目×120.



15a. ガマズミ属 NIG-2751. 木口×30.



15b. 同 板目×60.



15c. 同 柁目×120.

第51図 トチノキ・トネリコ属・ガマズミ属の顕微鏡写真

列で同性、背は低い。これらの形質からトネリコ属の材と同定した。

トネリコ属には北海道から本州北部の冷温帯の山地に多いオダモ、湿地に多いヤチダモ、本州から九州の冷温帯から暖温帯に分布するヤマトオダモ、マルバオダモなど、いくつかの種があるが材構造での識別は困難である。しかし、後述するように、スギを主体とした湿地林の構成種であることから、ヤチダモの可能性が極めて高い。ヤチダモ幹径70cm、樹高25mの高大木となる。材は堅く強靱で弾力があり、木理通直で美しく、保存性が高く加工も容易な優秀な広葉樹材である。床柱、床板などの建築材、和洋家具、タンス、農具、船類、各種器具材、野球のバットやラケット枠、スキーなど運動具の用途がある。当遺跡出土材はすべて自然木で、弥生時代のもが3点、弥生時代～古墳時代前期にかけてのもが35点あり、スギに次いで多い。

(15) ガマズミ属 *Viburnum* スイカズラ科

顕微鏡写真：第51図 39a-c. (AOM-2625)

やや角張った小道管が、単独で均一に分布する散孔材で、年輪界は目立たず、道管径は年輪を通してほとんど変わらない。道管の穿孔は繊細な横棒が20本前後からなる階段状、隔壁の壁孔も階段状である。木部柔組織は散在状で、目立たない。放射組織は平伏細胞と上下端に長く伸びる直立細胞からなる異性で、1-3細胞幅からなり、背が高く、単列の放射組織は直立細胞のみからなる。これらの形質からガマズミ属の材と同定した。

ガマズミ属はサンゴジュなど暖温帯以南の樹種以外は落葉性の低木で、平野部に多いガマズミ、山地丘陵の沢沿いに多いヤブデマリ、深山の林内に多いオオカメノキなど、沢山の種類がある。ガマズミは樹高4m、幹径10cmほどになる低木で、しばしば根際から次々と萌芽枝がでて株立ちとなる。萌芽枝は伸びだしの時に2m以上になり、後にそれが太るので、通直な丸木の棒が得やすい。この材は堅く緻密で強靱で粘りがあって折れにくく、かんじきや船類、げんのうの柄などに特用される。竹花遺跡から芯持ち樹皮付の丸木材を用いた杭が2点出土した。

C 姫御前遺跡・竹花遺跡の出土材の樹種組成

第17表に見るように姫御前遺跡から255点、竹花遺跡からは141点、合計396点の木材の樹種が調べられた結果、姫御前遺跡ではスギ、トネリコ属、モクレン属、アカガシ亜属など11の樹種が、竹花遺跡からはスギ、アサダ、アカガシ亜属など11の樹種が識別されたが、その組成は以下に検討できるようにかなり違っている。

樹種	姫御前遺跡		竹花遺跡		合計		
	加工木	自然木	加工木	自然木			
サクラ	3	3	2	2	6		
アスナロ			2	2	2		
スギ	58	93	151	115	1	116	267
アカマツ			2	2	2	2	
カブノミ属	2	2				2	
アサダ			8	8	8	8	
クリ	1	1	2	1	1	3	
ブナ属	2	2	2	2	2	4	
コナラ属/アカガシ亜属	15	15	4	4	4	19	
ケヤキ			1	1	1	1	
モクレン属	32	32				32	
カツラ属	5	5				5	
トネリコ	3	3	1			1	4
トネリコ属	38	38				38	
ガマズミ属	2	2	2	2	2	4	
総計	62	193	255	140	1	141	396

第17表 姫御前遺跡・竹花遺跡出土木材の樹種

D 姫御前遺跡の埋没林の組成

第18表に示したように、自然木についてみると、姫御前遺跡では193点が調べられたが、うち47点が弥生時代であり、縄文時代と思われる2点を除いた残り144点が弥生時代～古墳時代前期のものである。それらの両時期の組成を見るとスギが優先することは同じであるが、弥生時代のもものと認定された埋没

樹はスギがほとんどを占め他の樹種はわずかにトネリコ属の3点などの他は5樹種5点に過ぎない。これに対して弥生時代～古墳時代前期の埋没樹はスギ52点に対し、トネリコ属が35点、モクレン属が32点、アカガシ亜属が14点、それにカエデ属(4点)、トチノキ属、カバノキ属、ガマズミ属(以上各2点)、それにブナ属1点となっており、スギ一辺倒でない多様性の多さが目立つが、いずれにしても弥生時代の試料数の不十分さから、大きな植生の違いとまでは言えないだろう。

そこで、これら両時期を合わせて姫御前遺跡の低地の植生としてみると、スギの卓越と、低湿地や湿潤地によく生えるトネリコ属、モクレン属の優勢さ、暖温帯性の代表選手である常緑樹のアカガシ亜属と、冷温帯性と言われる落葉樹のブナ属、カバノキ属の「同居」に特徴があるといえる。本州日本海側でのスギの卓越は縄文時代から宇生賀盆地や三方低地など、中国地方、北陸地方などではよく知られていることで、新潟県地方でもスギを多産している。これらのスギ林は、現在は水田となっているような低湿地に成立していたもので、伴する樹種としてヤナギ、ハンノキ類、それにヤチダモと思われるトネリコ属などが特徴的である。当遺跡ではスギに次いでトネリコ属が多く、他の埋没林と同様の傾向にある。現在のヤチダモは冷温帯の湿潤林の代表種とされ、落葉広葉樹林の主要構成要素であり、スギとのマッチングは現在では見ることが出来ない。しかし、ヤチダモが最終氷期以降の本州の低湿地の森林の主要なメンバーであったことは広い範囲で認めることが出来、それぞれの地域で異なった樹種の組み合わせとして捉えることが出来、本州日本海側地域ではスギとの組み合わせが卓越していると言える。

一方、姫御前遺跡の埋没林の大きな特徴にモクレン属とアカガシ亜属が多いことが挙げられる。当遺跡出土材となったモクレン属の樹種の候補は湿潤な林地に生えるホオノキ、湿潤地の特に出回りや川縁などに多いコブシ、山地に生えるタムシバが考えられるが、残念ながら木材構造での区別は出来ていない。遺跡が微高地の前面の低湿地にあることからコブシである可能性が高いと言えるかも知れない。そのような環境ではトチノキの存在も頷けるものである。これに対しアカガシ亜属の存在はかなり目立つ。アカガシ亜属は暖温帯性の照葉樹林の代表的樹種であるのに対し、最近までスギは冷温帯性の樹種であると看做されてきた。しかし、スギとアカガシ亜属の共存は既に静岡県登呂遺跡で知られ、この両者が同時に存在することが、その場所が冷温帯であることを意味しないことはようやく理解されてきている。また、一般には冷温帯性の樹種と看做されるブナ(同定されたブナ属とはブナであることでほぼ間違いないと思われる)とアカガシ亜属の共存は新潟県地方の遺跡出土材に見られる特徴でもある。当遺跡でも少ないながらブナ属の自然木が出土しておりこのことを裏付けている。このように、姫御前遺跡での埋没林は、現在はどこにも見ることができない、スギ-ヤチダモ-コブシ-アカガシ亜属-ブナという組み合わせの森林が存在していたことを示すと言える。

樹種	縄文時代 晩期?		弥生時代?		弥生時代～ 古墳時代前期		古墳時代前期		中世	総計
	自然木	自然木	自然木	加工木	自然木	加工木	自然木	加工木		
スギ	2	39	52	89	1	84				267
トネリコ属		3	35							38
モクレン属			32							32
コナラ属アカガシ亜属		1	14	3		1				19
アサダ				8						8
カエデ属		1	4							5
サワラ									5	5
ガマズミ属			2	2						4
トチノキ		1	2						1	4
ブナ属		1	1						2	4
クリ		1		1					1	3
アカマツ									2	2
アスナロ									2	2
カバノキ属			2							2
ケヤキ									1	1
総計	2	47	144	103	1	99				396

第18表 姫御前遺跡・竹花遺跡出土木材の時期別樹種組成

E 姫御前遺跡・竹花遺跡の古墳時代と中世の木材利用

両遺跡とも古墳時代前期と中世の木材・木製品が出土しているが、樹種を調べたのは姫御前遺跡で62点、その大部分をスギが占め、それにサワラが3点、クリが1点あるに過ぎない。一方、竹花遺跡では140点のうち115点がスギで、他にはアサダが8点、アカガシ亜属が4点など11の樹種がある(第19表)。

両遺跡でのスギ材の利用は桶、曲物類、橋、下駄、杵、人形、刀形、卒塔婆、布巻き、柄、田下駄、各種組み物・器具の部材、舟、板、柱などの建築材、杭などの土木用材と、あらゆる用途に使われている。これは姫御前遺跡でのスギが優先する埋没林の存在で示されるように、新潟県地方の低地における豊富なスギ資源の存在があつてのことと言える。このような中心樹種の存在は、それ以外の樹種の利用がしばしば限定された用途への利用となつて顕れる。

弥生時代から古墳時代にかけての木製農具の用材は、西日本ではアカガシ亜属であるのに対し、東日本ではクスギ類であることはよく知られている。それが移り変わるのは太平洋側で南関東から北関東にかけての地域であり、日本海側では富山県地方である。太平洋側では、そこを境に順次クスギ類へと綺麗に移り変わるのであるが、日本海側ではしばしばそれと異なる樹種が登場する。そのひとつがカバノキ科のアサダである。アサダは新潟県地方では山間地に生育する樹木で、材質は硬く粘りがあつて柄物や各種器具材に用いられるが、幹はあまり太くはないので幅の広い板などにはあまり向かない。しかし、当遺跡出土の鋤鍬類はアカガシ亜属が3点なのに対しアサダは7点もあり、明らかにこの樹種を多用していると言える。現在のアサダの分布と成長する大きさですべて推し量る危険性はあるが、それにしても農具にするほどの大きさの木は当時でも簡単には見つからなかったのではないかと推測され、山間の生産地から海岸部の当遺跡への移動を考慮する必要があると言える。

我が国では曲物・桶類は針葉樹が主に用いられ、特にヒノキの利用が多いが、ヒノキの分布しない地域ではそれぞれの地域の針葉樹が使われるのが一般的である。新潟県地方では当然のこととしてスギが用いられているが、竹花遺跡の中世の出土品にはわずかながらサワラ(5点)、アスナロ(1点)がある。これらの樹種は遺跡付近での自生はほとんど考えられず、他地域から持ち込まれた製品である可能性を指摘できる。

竹花遺跡からは4点の漆椀が出土した。その樹種はブナ属が2点とケヤキ、トチノキが各1点である。

これら3樹種は、中世から近世の漆椀木地のいわば御三家で全国的な傾向と合致する。

以上見てきたように、姫御前遺跡・竹花遺跡の古墳時代前期、中世の木材利用の様相は、スギ中心のものであり、その他の樹種はそれぞれの用途に合致した樹種が選択されたものと言える。

樹種	時期	桶	曲物	橋	下駄	杵	人形	刀形	卒塔婆	布巻き	柄	田下駄	舟	板	柱	杭	その他	計
スギ	古墳時代前期	3	3	1	3	2	6	6	12	1	13	17	22	89				
スギ	中世	8	35	17	1	7	1	4	6		9	1	3	84				
アサダ	古墳時代前期																	8
アサダ	中世																	0
サワラ	古墳時代前期																	5
サワラ	中世	5																5
アスナロ	古墳時代前期						3											3
アカガシ	古墳時代前期																	1
アカガシ	中世																	0
ケヤキ	古墳時代前期																	1
トチノキ	古墳時代前期																	1
トチノキ	中世																	0
ブナ	古墳時代前期																	2
ブナ	中世																	0
合計	古墳時代前期	3	3	1	3	2	6	6	12	1	13	17	22	89				
合計	中世	14	4	37	18	1	0	1	4	6	0	9	1	4	99			
合計	計	17	7	40	21	3	6	7	16	7	22	26	23	93				93

第19表 姫御前遺跡・竹花遺跡の加工材の樹種構成

5 姫御前遺跡における放射性炭素年代 (AMS 測定)

株式会社加速器分析研究所

A 測定対象試料

姫御前遺跡は、新潟県糸魚川市東寺町1丁目1060番地1ほか(北緯37°02'35", 東経137°52'23")に所在し、海岸線から400mほど内陸の沖積地に立地する。測定対象試料は、平地建物SI216のP246柱根より年輪に従って1年単位で採取された試料5点(1:IAAA-91857~5:IAAA-91861)、杭列SA199のP421柱根より1年単位で採取された試料5点(6:IAAA-91862~10:IAAA-91866)、自然木HGN170より1年単位で採取された試料6点(11:IAAA-91867~16:IAAA-91872)、自然木HGN122より1年単位で採取された試料1点(17:IAAA-91873)、合計17点である。

B 測定の意義

集落で検出された柱根と湿地林の倒木と見られる自然木の間で明らかにされた標準年輪パターンに対して、放射性炭素年代測定によるウイグルマッチングを行うための材料とする。

C 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- 2) 酸処理、アルカリ処理、酸処理(AAA: Acid Alkali Acid)により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸(80℃)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液(80℃)を用いて数時間処理する。なお、AAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAaAと記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸(80℃)を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- 3) 試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。
- 4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素(CO₂)を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(水素で還元)し、グラファイトを作製する。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

D 測定方法

測定機器は、3MV タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

E 算出方法

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する[Stuiver and Polach 1977]。
- 2) ¹⁴C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950

年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。この値は、 $\delta^{13}\text{C}$ によって補正された値である。 ^{14}C 年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差(‰)で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定した場合には表中に(AMS)と注記する。
- pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。
- 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma=68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma=95.4\%$)で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線及び較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal04 データベース (Reimer et al 2004) を使い、OxCalv4.1 較正プログラム (Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

F 測定結果

SI216 の P246 柱根より採取された試料の ^{14}C 年代は、1 が $1780 \pm 30\text{yrBP}$ 、2 が $1960 \pm 30\text{yrBP}$ 、3 が $1930 \pm 30\text{yrBP}$ 、4 が $1840 \pm 30\text{yrBP}$ 、5 が $1910 \pm 30\text{yrBP}$ である。弥生時代中期末から後期頃に相当する値を示した試料が多く、最も新しい1は弥生時代後期から古墳時代前期頃に当たる。

SA199 の P421 柱根より採取された試料の ^{14}C 年代は、6 が $1840 \pm 30\text{yrBP}$ 、7 が $1850 \pm 30\text{yrBP}$ 、8 が $1900 \pm 30\text{yrBP}$ 、9 が $1940 \pm 30\text{yrBP}$ 、10 が $1880 \pm 30\text{yrBP}$ である。弥生時代中期末から後期頃の年代値となっている。

自然木 HGN170 より採取された試料の ^{14}C 年代は、11 が $1980 \pm 30\text{yrBP}$ 、12 が $2090 \pm 30\text{yrBP}$ 、13 が $2050 \pm 30\text{yrBP}$ 、14 が $2170 \pm 30\text{yrBP}$ 、15 が $2190 \pm 30\text{yrBP}$ 、16 が $2180 \pm 30\text{yrBP}$ である。

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-91857	1	P246 (SI216) No.3 柱根	木片	AAA	-23.60 ± 0.53	1,780 ± 30	80.16 ± 0.33
IAAA-91858	2	P246 (SI216) No.20 柱根	木片	AAA	-23.35 ± 0.56	1,960 ± 30	78.38 ± 0.32
IAAA-91859	3	P246 (SI216) No.35 柱根	木片	AAA	-23.45 ± 0.47	1,930 ± 30	78.63 ± 0.32
IAAA-91860	4	P246 (SI216) No.50 柱根	木片	AAA	-23.46 ± 0.53	1,840 ± 30	79.49 ± 0.31
IAAA-91861	5	P246 (SI216) No.62 柱根	木片	AAA	-24.36 ± 0.57	1,910 ± 30	78.82 ± 0.31
IAAA-91862	6	P421 (SA199) No.8 柱根	木片	AAA	-26.33 ± 0.43	1,840 ± 30	79.48 ± 0.31
IAAA-91863	7	P421 (SA199) No.20 柱根	木片	AAA	-26.24 ± 0.55	1,850 ± 30	79.43 ± 0.32
IAAA-91864	8	P421 (SA199) No.28 柱根	木片	AAA	-26.90 ± 0.45	1,900 ± 30	78.95 ± 0.32
IAAA-91865	9	P421 (SA199) No.38 柱根	木片	AAA	-24.06 ± 0.66	1,940 ± 30	78.55 ± 0.31
IAAA-91866	10	P421 (SA199) No.49 柱根	木片	AAA	-23.97 ± 0.55	1,880 ± 30	79.10 ± 0.31
IAAA-91867	11	HGN170-No.1 層位: IV上層	木片	AAA	-23.28 ± 0.75	1,980 ± 30	78.11 ± 0.32
IAAA-91868	12	HGN170-No.8 層位: IV上層	木片	AAA	-22.59 ± 0.50	2,090 ± 30	77.09 ± 0.30
IAAA-91869	13	HGN170-No.16 層位: IV上層	木片	AAA	-22.07 ± 0.60	2,050 ± 30	77.46 ± 0.31
IAAA-91870	14	HGN170-No.24 層位: IV上層	木片	AAA	-22.64 ± 0.58	2,170 ± 30	76.29 ± 0.31
IAAA-91871	15	HGN170-No.33 層位: IV上層	木片	AAA	-24.24 ± 0.57	2,190 ± 30	76.12 ± 0.32
IAAA-91872	16	HGN170-No.41 層位: IV上層	木片	AAA	-26.52 ± 0.68	2,180 ± 30	76.28 ± 0.30
IAAA-91873	17	HGN122-No.1 層位: III下層	木片	AAA	-26.00 ± 0.65	2,000 ± 30	78.00 ± 0.31

第20表 SI216・SA199・自然木の測定結果

[#3277]

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-91857	1.750 \pm 30	80.39 \pm 0.32	1,776 \pm 33	214AD - 264AD (34.2%) 276AD - 332AD (34.0%)	135AD - 341AD (95.4%)
IAAA-91858	1.910 \pm 30	78.81 \pm 0.31	1,966 \pm 32	5AD - 77AD (68.2%)	39BC - 90AD (88.4%) 100AD - 124AD (7.0%)
IAAA-91859	1.910 \pm 30	78.88 \pm 0.31	1,931 \pm 32	28AD - 40AD (9.0%) 49AD - 90AD (41.3%) 101AD - 123AD (17.2%)	21BC - 12BC (0.9%) 1BC - 134AD (94.5%)
IAAA-91860	1.820 \pm 30	79.74 \pm 0.3	1,843 \pm 31	131AD - 216AD (68.2%)	85AD - 240AD (95.4%)
IAAA-91861	1.900 \pm 30	78.93 \pm 0.3	1,911 \pm 31	65AD - 127AD (68.2%)	20AD - 174AD (93.3%) 193AD - 211AD (2.1%)
IAAA-91862	1.870 \pm 30	79.26 \pm 0.3	1,844 \pm 31	130AD - 215AD (68.2%)	85AD - 239AD (95.4%)
IAAA-91863	1.870 \pm 30	79.23 \pm 0.3	1,849 \pm 32	128AD - 217AD (68.2%)	83AD - 238AD (95.4%)
IAAA-91864	1.930 \pm 30	78.64 \pm 0.31	1,899 \pm 32	66AD - 132AD (68.2%)	28AD - 40AD (2.5%) 49AD - 215AD (92.9%)
IAAA-91865	1.920 \pm 30	78.7 \pm 0.29	1,939 \pm 31	25AD - 85AD (64.0%) 110AD - 116AD (4.2%)	21BC - 12BC (1.3%) 1BC - 130AD (94.1%)
IAAA-91866	1.870 \pm 30	79.26 \pm 0.3	1,883 \pm 31	71AD - 139AD (59.0%) 158AD - 167AD (3.7%) 196AD - 209AD (5.5%)	61AD - 223AD (95.4%)
IAAA-91867	1.960 \pm 30	78.38 \pm 0.29	1,984 \pm 32	37BC - 30BC (8.2%) 21BC - 12BC (7.5%) 2BC - 65AD (55.5%)	50BC - 81AD (95.4%)
IAAA-91868	2.050 \pm 30	77.47 \pm 0.29	2,090 \pm 31	164BC - 128BC (26.1%) 122BC - 87BC (25.6%) 78BC - 55BC (16.5%)	198BC - 41BC (95.4%)
IAAA-91869	2.000 \pm 30	77.92 \pm 0.3	2,052 \pm 32	109BC - 20BC (61.5%) 13BC - 1BC (6.7%)	167BC - 19AD (95.4%)
IAAA-91870	2.130 \pm 30	76.66 \pm 0.3	2,173 \pm 33	354BC - 292BC (39.4%) 231BC - 175BC (28.8%)	366BC - 155BC (92.5%) 136BC - 115BC (2.9%)
IAAA-91871	2.180 \pm 30	76.24 \pm 0.31	2,191 \pm 33	356BC - 286BC (46.5%) 234BC - 199BC (21.7%)	371BC - 173BC (95.4%)
IAAA-91872	2.200 \pm 30	76.04 \pm 0.28	2,175 \pm 32	354BC - 292BC (39.9%) 231BC - 176BC (28.3%)	366BC - 160BC (93.4%) 133BC - 117BC (2.0%)
IAAA-91873	2.010 \pm 30	77.84 \pm 0.29	1,995 \pm 32	39BC - 29AD (58.7%) 39AD - 50AD (9.5%)	86BC - 80BC (0.8%) 54BC - 75AD (94.6%)

第 21 表 暦年較正年代

[参考値]

主に弥生時代中期頃に当たる測定結果で、最も新しい 11 は弥生時代中期末から後期初頭頃に相当する。

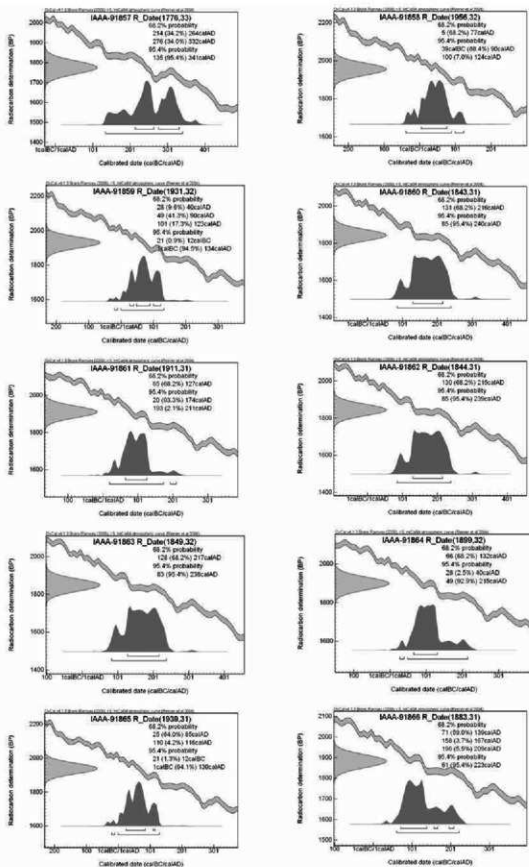
自然木 HGN122 より採取された試料 17 の ^{13}C 年代は $2000 \pm 30\text{yrBP}$ である。弥生時代中期末から後期初頭頃の値である。

これらの試料は樹木年輪を考慮して採取されたものであるため、測定結果と年輪との関係を利用したウイグルマッチングを行うことで、伐採年を絞り込める可能性がある。

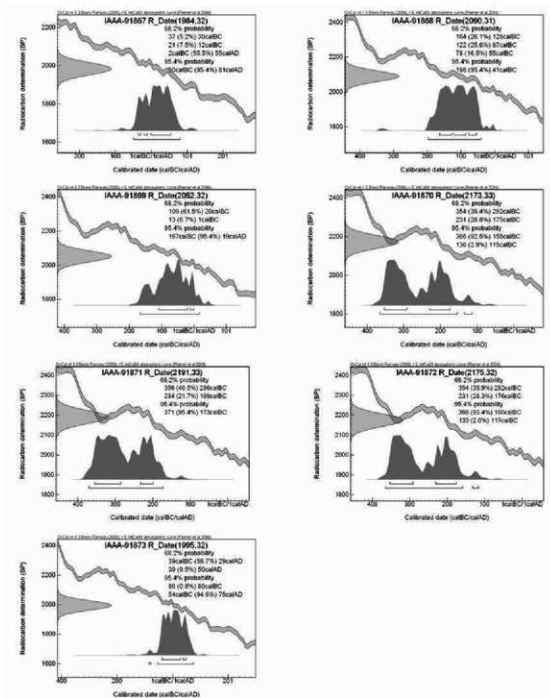
炭素含有率はいずれも 50% を超えており、化学処理、測定上の問題は認められない。

参考文献

- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19, 355-363
- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon 37 (2), 425-430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the radiocarbon calibration program, Radiocarbon 43 (2A), 355-363
- Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43 (2A), 381-389
- Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029-1058



第 52 図 (1) 暦年較正年代グラフ (1)



第 52 図 (2) 暦年較正年代グラフ (2)

6 姫御前遺跡出土木材の年輪、ウイグルマッチングを用いた年代学的研究

福島大学共生システム理工学類 木村勝彦・法井光輝

A はじめに

遺跡出土木材などの編年を行う上で年輪解析は有効な手段である。出土材などの年代関係を知る方法として、土層や切りあい、放射性炭年代による年代決定などがあるが、高い精度での年代決定は困難である。これに対し年輪を使った年輪年代では出土した木材の相対的な年代関係を原理的に年単位で明らかにすることが出来る。この際に作られる相互の年代関係のわかった年輪データセットはフローティング・クロノロジーと呼ばれ、これをもとに遺物の相対的な年代関係を高精度で知ることができ、同時代性や前後関係、変遷といった時間軸を明確にした議論が可能になる。

考古学で一般に認知されている年輪年代学は暦年標準バタンを用いた暦年代決定である。これにはスギ、コウヤマキ、ヒノキについて光谷〔1987〕により作成された暦年標準バタンが用いられる。欧米では多くの遺跡において年輪データが得られており、ヨーロッパでは各地の遺跡などから出土した膨大な量のナラ材の年輪で作成されたフローティング・クロノロジーをつなげることで何千年にもわたる暦年標準バタンが構築され〔Baillie1982〕、現在ではこれにマツの年輪を組み合わせることで12460年もの長いクロノロジーが作られている〔Friedrich et al.2004〕。このような年輪の物差しが多くの樹種、さまざまな地域で出来上がっていれば、条件が良ければ1点の遺物の年輪を計測しただけでその遺物の暦年代の決定が可能である。

しかし、日本ではデータの蓄積が十分ではなく、暦年代を決められる対象は限られたものになる。そこで、遺跡出土材で暦年代推定を行うためには、まず遺跡内の多数の年輪試料をもとに個体間の相対的な年代関係を決めてフローティング・クロノロジーを作成し、そこから切り出した試料の放射性炭素年代を測定して炭素年代で暦年を推定する方法がとられる。特に、年輪試料の場合は多点の試料をつかったC14ウイグルマッチング法を適用することで、高精度な年代推定がおこなえる。このような手順でフローティング・クロノロジーを構築・蓄積することは、より広範に遺跡間の年代差を検討し、さらには長い暦年クロノロジーの構築を進めるために必須のプロセスである。

姫御前遺跡Ⅱでは古墳時代前期と想定される3棟の建物のスギ木柱と、スギやトネリコなどの自然木からなる埋没林が出土した。埋没林は建物のある集落に隣接しており、当時の人々の生活環境や森林との関わりを知る上で興味深いものであるが、建物間や建物と埋没林の詳細な年代関係は明らかになっていない。本報告ではC14ウイグルマッチングを併用した年輪年代学的な解析により、これらの建物、埋没林の年代について検討した結果を示す。

B 試料

試料は姫御前遺跡Ⅱより出土した古墳時代前期の建物、木柱列を構成する8本の木柱、および埋没林の自然木191点(うち1点は竹花遺跡出土)である。自然木試料は発掘現場において新潟県埋蔵文化財調査事業団によって輪切りにされた厚さ5cm~20cmのディスク状試料である。全ての出土個体について、平面図の作成と簡単な層位の記載はなされているが、個体の識別、各個体の根元の位置などは明瞭には判

別でできていないため、同一個体を重複してサンプリングしたり、幹と枝が混在しており、森林を構成していた個体群を正しく反映しているわけではない。

自然木の個体自体には人為的な伐採や加工などの痕跡は認められていないが、同層位に古墳時代前期とみられる遺物とともにスギの板材が出土している。これら板材の一部は追加試料として年輪解析を実施したが、明確な結果が出ていないため、本報告では省略する。

木柱は全てスギで、掘立柱建物SB341の柱1本、平地式建物S1216の柱4本、木柱列SA199を構成する柱3本である。これらの木柱は製材所においてバンドソーによって横断面が見えるように1カ所で切断され、底面側を年輪解析試料とした。

C 方 法

(1) 年輪年代

a 年輪幅の計測

切り出された試料の切断面(木口面)を耐水サンドペーパー(粒度 400A)を付けた水研ぎ対応サンダー(リョウビSU-6300A)を用いて流水下で年輪が明瞭に見えるまで研磨した。研磨後、A3のフラットベッドスキャナ(エプソンES-10000G)に載せ、ガラス面と試料の間を水で満たしてから画像を取り込んだ。解像度は1200dpiを標準として、年輪が詰まっている場合は2400dpiとした。年輪の計測は画像上で複数方向の側線(原則として3方向a, b, c)をとり、自作の年輪計測ソフトを使って外側から中心へ向かって1年輪毎の幅を計測した。1200dpiの画像を用いた場合の測定精度は約0.02mmである。画像上で年輪界が判別しにくい場合は双眼実体顕微鏡でサンプルを直接観察して確認を行った。

散孔材(モクレン属ほか)で年輪のコントラストが低く、上記方法で確認できないものについては、木口面から薄い切片を切り出して透過光を読み取る方法を用いた。この場合、サンプルの最外側から中心へ向かって長さ2cm-3cmほどの複数の細長い切片を十分なオーバーラップがあるように採取した。その後、透過原稿ユニットを内蔵したスキャナ(エプソンGT-9800)で画像を解像度3200dpiで取り込み、前述した反射光画像と同様に計測した。

全ての年輪データは、個体内でとった複数の側線データをクロスデーティングソフト [Kimura 1995] を用いて検証した。検証で問題がないことがわかった個体については、側線データを平均化してその個体の平均年輪データを作成した。この際、個体内での相関が悪い個体は、偽年輪や不連続年輪、読み間違い等が無い画像上で年輪界をたどるなどで確認した。確認後も偽年輪等により、個体内の同調性に信頼性が無い個体についてはその後の解析からは除いた。

b 試料間の相対年代関係の決定

木柱や自然木の個体間の相対的な年代関係を調べるために、平均化した個体データを元に個体間でのクロスデーティングをおこなった。標準化処理には主に5年移動平均法を、クロスデーティングの信頼性には相関の有意性を示すt値を用いた [Baillie & Pilcher 1973, Baillie 1982]。本研究ではt値の基準として原則として5を超えることを目安とした。自然木に関しては同一樹種の個体間のほぼ全ての組み合わせで、木柱に関しては同一建物構成する木柱間、次いで異なる建物木柱間でクロスデーティングを行い、相対的な年代関係の検討・決定をおこなった。

個体間のクロスデーティングで十分な相関が得られ、3個体以上の間で矛盾のない相対的な年代関係が

得られた場合、これらの年輪パターンを平均化して暫定的な標準パターンを作成した。さらにこの標準パターンと他の個体とのクロスデーティングをおこない、新たに標準パターンに組み込む（あるいは、逆に問題のある個体を外す）作業を繰り返して、フローティング・クロノロジーを作成した。

(2) ウイグルマッチングによる暦年代推定

年輪年代では出土材の相対的な年代関係は求められるが、暦年標準パターンが整備されていない場合は暦年代決定を行うことが出来ない。そこで年輪年代で作成されたフローティング・クロノロジーに対して高精度での年代推定が可能な C14 ウイグルマッチング法による暦年代推定を行った。

一般に測定された C14 年代は校正曲線を用いて暦年代に変換される。校正曲線の変動はその凸凹した形状から wiggle と呼ばれるが、この wiggle のために、1 点だけの試料で C14 年代の年代校正を行った時、得られる暦年代が複数候補あったり、誤差が C14 年代に付加される統計的な土の誤差と比べ非常に大きくなったりする場合がある。しかし、1 試料内で年代間隔の分かった複数の試料を得ることが可能な樹木の場合、逆にこの wiggle を利用することによって高精度・高正度の年代校正を行うことができる [中村ほか 2003]。

a 試料の切り出しと炭素年代測定

ウイグルマッチング用試料として、まず年輪試料の木口面から丸ノコを使って 30° 傾斜した切れ目を 2 本入れ、正三角柱状にサンプルを切り出した。切り出したサンプルの年輪幅を計測し、個体平均の年輪パターンとクロスデートすることで、三角柱サンプルに含まれる各年輪が個体平均のデータの何番目に対応するかを確認した。その後、計測結果を参照し読み間違いが無いように三角柱状サンプルの頂点部分からカミソリを使って年輪界に沿って 1 年輪幅（年輪幅が小さく不可能な場合は 5 年輪幅）ごとに 1 辺 1cm ほどの三角形の板状サンプルを切り出した。

年代測定用サンプルは、想定される年代の校正曲線を見てサンプル間の年代幅を考慮した上で、切り出された木片の量が十分とれているサンプルを選出した。C14 年代測定は加速器分析研究所で加速器質量分析計 (AMS) にて行われた。

なお、三角柱状サンプルおよび、分析せずに残った三角形の板状サンプルは福島大学の冷蔵庫で保管してある。

b 推定暦年代の計算

測定された C14 年代値をもとに、各サンプルの推定暦年代を IntCal04 data set [Reimer et al. 2004] 及び CALIB Rev 5.0 [Stuiver and Reimer 1993] を用いて確率分布として算出した。i をサンプル番号、j を暦年代とするとサンプル i の暦年代が j である確率が $P_i(j)$ という確率分布の形で表せる。年輪からそれぞれのサンプルの年代差は分かっているため最外年輪の暦年代 n が P の積により確率分布で表される。試料番号が 1 ~ 5、最外年輪から数えた各試料の年数をそれぞれ a ~ e 年としたとき、最外年輪の推定暦年代 n の確率分布 $Q(n)$ は、次式に示される確率の積によって定義される。

$$Q(n) = P_1(n-a) \times P_2(n-b) \times P_3(n-c) \times P_4(n-d) \times P_5(n-e)$$

$Q(n)$ は総和が 1 になるように規格化し、最大値からの確率の和が片側 0.475 (0.95 ÷ 2) になる暦年代の範囲を求めた。これを 95% の確率で示される暦年代推定幅とした。

D 結 果

(1) 年輪試料の概要

a 自然木年輪試料の概要

自然木試料 191 点のうち、
細い枝など明らかに年輪解析に

不適なものを除く 114 点につ
いて、画像の取り込みをおこ
なした。このうち年輪が部分的
にでも計測できたのは 85 点で
ある。これらの 114 点の個体
別の情報を第 22 表に示した。

年輪が計測できた個体について
樹種毎にまとめると、スギが
58 点と一番多く、次にトネリ
コが 29 点、さらにモクレン属、
コナラ属アカガシ亜属がつづく
(第 23 表)。直径はスギとアカ
ガシ亜属に 50cm を超えるも
のが 4 点あった。

年輪数はスギが平均 80 年を
超え、最大 252 年に達した。
平均年輪幅は 1mm 程度であ
り、一般の自然林と比較して全
体的に成長の悪い林分であった

といえる。しかし、多くの個体が 0.7mm 前後の平均年
輪幅を持つのにに対して、一部個体は 2mm ~ 4mm の明
らかに良い成長を示しており、同所的ではあるが、異な
る年代に生育していた個体が含まれる可能性を示唆す
る。

b 木柱年輪試料の概要

木柱の年輪計測結果を第 24 表に示す。樹種は全てスギである。木柱の場合、樹皮直下の最外年輪は

個体番号	樹種	直径 (cm)	年輪数	平均 年輪幅 (mm)	個体番号	樹種	直径 (cm)	年輪数	平均 年輪幅 (mm)
HGN001	スギ	5.5	23	1.11	HGN110	スギ	8	40	0.49
HGN002	モクレン属	34	112	1.13	HGN111	スギ	8	42	1.03
HGN003	モクレン属	15	66	1.94	HGN112	トネリコ属	8	49	0.63
HGN007	トネリコ属	19	50	1.68	HGN113	スギ	9	76	0.65
HGN009	スギ	6.5	44	0.67	HGN114	スギ	8	62	0.65
HGN011	スギ	6	45	0.62	HGN115	スギ	7	58	0.60
HGN014	トネリコ属	9	25	1.50	HGN116	スギ	8	63	0.66
HGN018	カエデ属	18	55	1.07	HGN118	トネリコ属	16	25	3.08
HGN020	コナラ属アカガシ亜属	50	未計測	HGN119	スギ	8	63	0.63	
HGN021	モクレン属	15	未計測	HGN120	スギ	7	55	0.80	
HGN022	トネリコ属	11	34	1.36	HGN121	スギ	8	73	0.59
HGN024	モクレン属	20	34	1.36	HGN122	スギ	20	130	0.65
HGN029	コナラ属アカガシ亜属	23	未計測	HGN123	スギ	20	未計測		
HGN030	コナラ属アカガシ亜属	50	未計測	HGN124	トネリコ属	9	44	2.30	
HGN034	トネリコ属	11	30	1.86	HGN125	スギ	11	77	0.70
HGN035	トネリコ属	15	39	1.67	HGN127	スギ	21	28	3.90
HGN036	トネリコ属	15	39	HGN129	トネリコ属	11	23	2.21	
HGN040	モクレン属	9	未計測	HGN130	スギ	15	120	0.61	
HGN044	トネリコ属	9	33	1.11	HGN131	スギ	10	47	1.09
HGN045	コナラ属アカガシ亜属	未計測	未計測	HGN132	スギ	10	65	0.72	
HGN046	コナラ属アカガシ亜属	13	未計測	HGN133	スギ	11	95	0.51	
HGN048	モクレン属	36	94	1.77	HGN134	スギ	12	112	0.62
HGN051	スギ	15	142	0.40	HGN135	スギ	8	78	0.64
HGN052	モクレン属	15	62	1.17	HGN136	トネリコ属	16	102	0.63
HGN053	トネリコ属	15	40	1.79	HGN137	スギ	28	44	3.54
HGN054	トネリコ属	15	70	0.72	HGN138	スギ	30	45	0.41
HGN056	トネリコ属	12	68	0.79	HGN139	スギ	65	131	2.12
HGN057	トネリコ属	14	72	0.97	HGN140	トネリコ属	15	69	3.34
HGN058	コナラ属アカガシ亜属	未計測	未計測	HGN141	トネリコ属	15	29		
HGN059	スギ	6	63	0.96	HGN142	スギ	25	182	1.18
HGN071	スギ	11	97	0.63	HGN143	トネリコ属	24	120	1.18
HGN072	トネリコ属	50	68	3.12	HGN144	トネリコ属	13	49	1.37
HGN074	コナラ属アカガシ亜属	未計測	未計測	HGN146	スギ	19	39	2.84	
HGN075	スギ	35	65	2.54	HGN149	スギ	9.5	56	0.77
HGN076	コナラ属アカガシ亜属	50	未計測	HGN150	スギ	10	63	0.70	
HGN078	スギ	8	77	0.43	HGN151	スギ	9	75	0.62
HGN080	ヤマブキ属	22	100	0.8	HGN152	スギ	8	41	0.60
HGN081	トネリコ属	15	68	1.09	HGN158	スギ	13	90	0.73
HGN082	トネリコ属	16	77	0.95	HGN159	スギ	16	96	0.67
HGN083	トネリコ属	27	未計測	HGN161	スギ	6	40	0.89	
HGN084	トネリコ属	40	90	1.62	HGN162	コナラ属	22	201	0.86
HGN085	モクレン属	13	94	HGN163	スギ	6	32	0.75	
HGN086	コナラ属アカガシ亜属	25	未計測	HGN164	スギ	20	182	0.39	
HGN087	トネリコ属	16	32	2.03	HGN165	スギ	14.5	71	0.65
HGN089	トネリコ属	32	94	1.56	HGN168	スギ	4	53	0.40
HGN090	トネリコ属	13	76	0.95	HGN170	スギ	24	252	0.48
HGN091	コナラ属アカガシ亜属	未計測	未計測	HGN177	スギ	6	71	0.41	
HGN092	コナラ属アカガシ亜属	未計測	未計測	HGN178	スギ	10.5	77	0.62	
HGN096	コナラ属アカガシ亜属	未計測	未計測	HGN182	クワ	10	16	3.59	
HGN100	スギ	35	61	2.07	HGN184	スギ	14	72	0.93
HGN101	コナラ属アカガシ亜属	未計測	未計測	HGN185	スギ	13	71	0.65	
HGN102	スギ	20	未計測	HGN186	スギ	8	61	0.57	
HGN103	スギ	5.5	49	0.56	HGN187	スギ	13	64	0.76
HGN104	トネリコ属	12	36	2.96	HGN188	スギ	20	128	1.29
HGN107	コナラ属アカガシ亜属	未計測	未計測	HGN189	スギ	13	91	1.32	
HGN108	トネリコ属	14	41	2.07	HGN191	スギ	14	73	0.78
HGN109	スギ	17	未計測	THN S204	スギ(竹炭産物)	60	20	0.20	

第 22 表 年輪解析対象として選んだ自然木リスト

樹種	サンプル		平均年輪幅		年輪数	
	個体数	直径 (mm)	平均 (mm)	最大	平均	最大
スギ	58	1,105	21.9	32	252	23
トネリコ属	29	1,236	18.9	49	136	25
モクレン属	10	1,15	22.4	79	112	36
コナラ属アカガシ亜属	14	-	32.2	-	-	-
カエデ属	2	1.23	20.0	78	10	16
クワ	1	3.59	10.0	16	16	16
ヤマブキ属	1	1.32	22.0	101	101	101
合計・平均	115	1.12	22.0			

第 23 表 年輪解析対象とした自然木の概要

他の樹種の年輪数は最大で 100 年前後で、平均年輪幅はスギとほぼ同じ 1mm 程度である。クワは 1 点のみであるが、年数は少ないものの平均年輪幅が 3.6mm あり、成長が良い。コナラ属アカガシ亜属に関しては全てのサンプルで年輪界が不鮮明な部分が多く、年輪計測が不可能であった。

なお、どの樹種もほとんどの個体で樹皮が残っていない上に、表層年輪も削れているため、詳細な枯死年の比較はできない。

伐採年に相当するため重要となるが、残存していたのは建物 S1216 の P247 のみであった。年輪数は 30 年～72 年、平均 53 年と少なく、またスギ自然木と比較してみると平均年輪幅が 2.5mm で倍以上であり、直径も年数に対して大きく、成長が速い。ただし、この成長速度は現在の造林地のスギよりは遅く、天然スギと比較しても特に速いとは言えない。

No	建物番号	年輪数	平均年輪幅 (mm)	樹皮	中心
P340	SR141	30	3.09	なし	なし
SK224	SA199	45	2.71	なし	なし
P421	SA199	50	2.71	なし	なし
P400	SA199	45	2.68	なし	なし
P245	SZ116	68	1.44	なし	あり
P246	SZ116	72	2.98	なし	なし
P247	SZ116	58	1.80	あり	あり
P248	SZ116	62	2.79	なし	なし
平均		53	2.52	—	—

第 24 表 木柱の年輪計測結果

(2) 相対年代関係

a 自然木の相対年代関係

自然木で個体間のクロスデーティングの対象にできたのは個体数が多く、年輪計測が可能だったスギ、トネリコ属、モクレン属の 3 分類群である。このうちスギは多くの個体の組み合わせで高い年輪パタンの同調が見られ、14 個体の年代関係を決定することができた。14 個体の全ての組み合わせでの個体間の t 値を第 25 表に示した。HGN164 と HGN170 の相関が t 値 15.9 と非常に高い値を示し、出土位置からも同一個体の別部位であるものと判断できた。HGN164 は年数の少ない HGN127 以外の個体と t 値 4～6 で高い相関を示し、その他の個体も複数個体と 4 以上の値を示している。スギでは計測を行った 58 個体中比較的年数の多い 14 個体での 281 年分のクロノロジーが出来上がった (第 53 図)。

第 53 図を見ると残存する表層年輪の年代は 2 個体を除き 30 年以内に収まっていることが分かる。全ての個体で樹皮直下の最外年輪は失われているが、これらのスギは比較的短期間に枯死したものと考えられる。また、表層に向かって成長速度の低下は認められず、枯死前にスギの衰退があった形跡はない。一方、個体の定着時期に対応する材の中心部分を持つ個体は多いが、中心の年代に集中性は見られず、多くの個体が定着するような擾乱イベント等の存在を示唆する時期は見いだされなかった。なお、HGN130 は他の個体に比べて表層年代がかなり古いが、表層の保存状態は他の個体と比べてむしろ良い状態であり、個体間の年輪の相関も悪くないため、HGN130 の枯死年は他の個体に比べて 50 年程度古いものと考えられる。

スギ以外では、トネリコ属は計測した 29 個体中 3 個体のみで 100 年を超える個体を含むクロノロジーを組むことが出来た (第 54 図)。モクレン属では切片による年輪計測で、2 個体の相対年代が決められたが、年輪界の特定と計測、検証には時間を要し、十分な検討ができなかった。しかし、モクレン属は年輪数が比較的多く、個体内の年輪の同調も比較的良好いため、年輪年代の対象としては優れている面もあるため、さらなる解析を加えるべきであろう。

以上の結果からスギとトネリコ属の自然木クロノロジーを平均・標準化し、フローティング・クロノロジーを構築した。この際にスギ HGN127 の年数が少なく 2 個体以外との相関が悪く (第 25 表)、不確かなた

	HGN116	HGN165	HGN132	HGN135	HGN122	HGN164	HGN159	HGN131	HGN127	HGN191	HGN170	HGN158	HGN130
HGN075		2.9	5.4	3.5	-0.8	2.1	3.2	1.1	3.2	2.5	3.3	1.3	—
HGN116	3.4		3.7	5.0	4.7	2.2	2.3	4.8	2.6	3.2	3.6	1.8	0.3
HGN165				2.7	2.1	1.2	1.7	1.0	4.4	3.0	1.7	1.4	-0.3
HGN132					6.6	3.6	5.4	5.0	3.6	4.2	6.1	4.5	2.1
HGN135						1.6	4.3	5.1	2.6	1.7	2.5	3.8	0.8
HGN122							5.7	4.3	3.9	2.2	3.2	5.1	4.0
HGN164								5.4	2.9	1.0	4.2	15.9	6.4
HGN159									2.8	3.6	5.4	5.7	2.9
HGN131										3.7	3.2	2.3	0.1
HGN127											—	—	—
HGN191												3.7	1.5
HGN170													4.9
HGN158													
HGN130													

— はキー・パラグラフの年数が 20 年未満、太字は 1 個体が 3.5 以上を有す

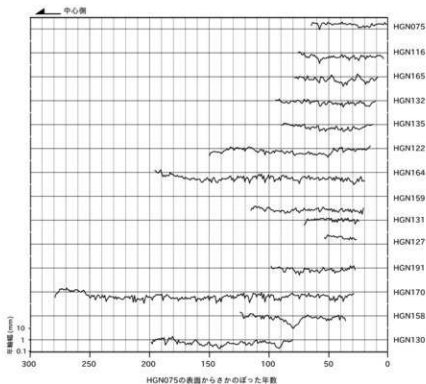
第 25 表 自然木スギ個体間の相関を示す t 値

め除きスギでは13個体を用いて281年分のフローティング・クロノロジーを作成した。

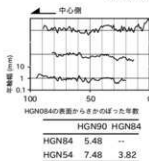
b 木柱の相対年代関係

木柱列 SA199 の3本の木柱間のクロスデーティングの結果、3本の相対年代関係が決められた(第55図)。年代の差はP421とSX224の表層年輪が同一年、P420が2年ずれとなった。3個体とも最外年輪は失われているため、伐採年は分からないが、ほぼ同時期に伐採されたものと考えられる。 t 値は3個体間で5.2、2.8、4.7でそれほど高くはないが、同一建物内であることを考えるとほぼ間違いのない信頼性のある結果であろう。平地建物 SI216 では木柱4本の間でクロスデーティングをおこなったが、年代の関係は得られなかった。なお、掘立柱建物 SB341 は1本のみで建物内での検討はできない。

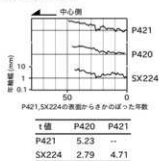
次に、異なる建物同士でのクロスデーティングを行ったが、各建物間での高い相関は得られなかった。主な原因としては木柱の年輪幅変動が変化に乏しかったこと、年数が少ないためと考えられる。なお偽年輪、不連続年輪等の問題のある年輪は見られず、年輪は明瞭に認識できた。



第53図 スギ自然木14個体の年代関係と年輪幅変動



第54図 トネリコ属3個体の年代関係と年輪幅変動(上)、個体間同調性を示す t 値



表層年輪はSX224、P421が不明、P420が2年ずれであるが、最外年輪の検出は不明のため伐採年は確定できない。

第55図 木柱列 SA199 を構成する木柱 SX224、P420、P421 の相対年代関係と年輪幅変動(上)、個体間同調性を示す t 値

個体番号	サンプル名	サンプルに含まれる年輪数	試料体の外径から年輪数	$\delta^{13}C$ 修正 (Libby Age - (yBP))	測定番号
P246 (SI216)	P246 No.3	1	3	1,780 ± 30	IAAA-91857
	P246 No.20	1	30	1,960 ± 30	IAAA-91858
	P246 No.35	1	35	1,930 ± 30	IAAA-91859
	P246 No.50	1	50	1,840 ± 30	IAAA-91860
	P246 No.62	1	62	1,910 ± 30	IAAA-91861
P421 (SA199)	P421 No.8	1	8	1,840 ± 30	IAAA-91862
	P421 No.20	1	20	1,850 ± 30	IAAA-91863
	P421 No.28	1	28	1,900 ± 30	IAAA-91864
	P421 No.38	1	38	1,940 ± 30	IAAA-91865
	P421 No.49	1	49	1,880 ± 30	IAAA-91866
HGN122	HGN122 No.1	1	1	2,000 ± 30	IAAA-91873
HGN170	HGN170 No.1	5	21 ~ 25	1,980 ± 30	IAAA-91867
	HGN170 No.8	5	56 ~ 60	2,090 ± 30	IAAA-91868
	HGN170 No.14	5	96 ~ 100	2,050 ± 30	IAAA-91869
	HGN170 No.24	5	136 ~ 140	2,170 ± 30	IAAA-91870
	HGN170 No.33	5	181 ~ 185	2,190 ± 30	IAAA-91871
	HGN170 No.41	5	221 ~ 225	2,180 ± 30	IAAA-91872

第26表 放射性炭素年代測定結果

c 自然木と木柱との年代関係

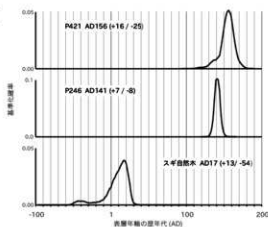
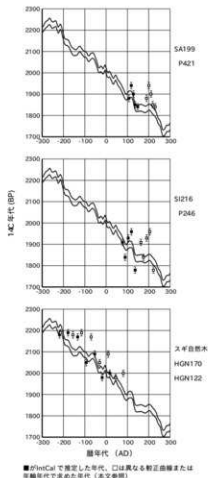
集落と近傍に存在した森林の同時代性を知るために木柱と自然木との間の年代関係の検討を行った。自然木としては、13個体から作製したクロノロジーだけでなく、全てのスギ自然木についてクロスデーティングをおこなったが、年輪年代学的に年代差を決めることはできなかった。

(3) ウイグルマッチングによる暦年代推定

ウイグルマッチング用の炭素年代測定サンプルは木柱については、SA199の建物の木柱P421から5点、年輪年代では手がかりが全く得られなかった平地建物SI216の木柱で最も年輪数の多かったP246から5点をそれぞれ10～15年間隔で選んだ。自然木については、スギ年輪フローティング・クロノロジーを構成する個体の中でも最も年数の多いHGN170から6点選び、より新しい方向にデータをのぼすためにHGN122の表層部分のサンプルを1点加えた。自然木の各サンプルの年代間隔は35～45年で、2個体合わせた年代幅は236年になった。木柱・自然木合わせて17点のサンプルを選び、炭素年代測定試料とした。なお、木柱から切り出したサンプル全てと自然木HGN122のサンプルは単年試料であるが、自然木HGN170は年輪が詰まっていたため、5年輪を含む試料である。

これらのサンプルのC14年代測定結果を第26表に示した。

木柱2本については、個体毎に各5点のC14測定値を用いてそれぞれの表層年代を推定した。自然木はHGN122とHGN170の年代差が14年であることが年輪年代で分かっているため、計7点のC14測定値を用いてHGN122の表層年輪の年代として推定をおこなった。なお、HGN170は年輪を5年輪単位で切り分けたため、暦年代の算出には中間の3年目をサンプルの年代として使用した。

スギ自然木は2個体合わせてあるが、表層とはHGN122の表層を示す
第25図 ウイグルマッチングによって推定された各試料の表層年輪暦年代の確率分布

第27図 ウイグルマッチング結果と比較曲線 (IntCal) の比較

第56図にウイグルマッチングで推定した試料の表層年代の確率分布を、第57図に最も高い確率の年代を採用したときの炭素年代測定値とIntCal 較正曲線との比較を示した。表層年輪の暦年代推定値(最大確率を示す年)はP246でAD141、P421でAD156、スギ自然木(HGN122の表層)がAD17となった。これらの年代は考古学的に想定されていた古墳時代前期という年代と整合しない結果となった。

E 考 察

(1) 年代推定の再検討

姫御前遺跡での年代推定の方法は、当初の計画ではD(2)に示した年輪年代による個体間の相対的な年代関係の解析と、D(3)に示した年輪年代関係の得られた試料に対するIntCalを用いたウイグルマッチングによる暦年代推定であった。しかし、その後追加で進められた分析で重要な問題点が明らかになったため、追加分析を加えて再検討を行った。

a 暦年標準年輪パターンによる暦年代決定

姫御前遺跡で得られたスギ自然木のクロノロジーは、13個体からなる280年分の比較的良質のデータセットであるため、年輪年代による暦年代決定ができる可能性がある。そこで、総合地球環境学研究所の光谷拓実氏に自然木クロノロジーを構成する主要な3個体の年輪計測データを送り、暦年代の鑑定をお願いした。その結果、自然木HGN122の表層年代がAD90、HGN164がAD85、HGN170がAD75という年代が得られた。これら3個体の年代差は我々が年輪解析により求めた自然木クロノロジー内の相互の年代関係と一致したが、ウイグルマッチングで得られた推定暦年代と73年ものずれがある矛盾した結果となった。しかし、それでも考古学的に想定されていた古墳時代前期とは大きな乖離がある。なお、木柱については、年輪数が少なく、年輪年代による暦年代決定はできていない。

b 異なる較正曲線でのウイグルマッチングの検討

D(3)では、IntCal 較正曲線を用いてウイグルマッチングをおこなった。しかし、日本産樹木ではAD100-200年付近でやや古い年代を示す[Sakamoto et al. 2003]等、IntCalとは異なった挙動を示す部分があり、国立歴史民俗博物館を中心に日本産樹木による較正曲線の構築が進められている[西本2009]。

姫御前遺跡の年代は上記のずれの予想される年代にあたるため、国立歴史民俗博物館の坂本稔氏にAMSで計測された生データを送り、構築途上で未公開の較正曲線を使ったウイグルマッチングの計算をお願いした。その結果、自然木ではIntCalを用いた結果とほとんど同じ1世紀初頭となったが、木柱2本では大きく新しい方へずれ、P246は3世紀前半前葉、P421が3世紀前半後葉となった(なお、較正曲線が未公表なため、最大確率を示す暦年代はここでは示さなかった)。

これらの再検討の結果、木柱2本については1-2世紀部分の較正曲線の違いを受けて50年以上新しくなり、考古学的に古墳時代として検討ができる程度の年代まで推定値がずれた。一方、自然木については年輪年代で決められた1世紀後半とのずれは解消されなかった。

(2) 年代推定結果の解釈

姫御前遺跡の年代については、同一試料に対するウイグルマッチング、年輪年代に関していくつかの異

なる結果が得られた。高精度な年代決定が可能なはずの分析で50年以上の年代のぶれが生じることは、重大な問題であるため、ここでは考古学的な解釈を加えずに木材自体の年代推定についてやや詳しい考察を行う。

a 較正曲線の違いによるウイグルマッチング結果のずれ

C14 ウイグルマッチングは単一試料の測定に比べて原理的に非常に高い精度での暦年代決定が可能である。北半球の様々な場所や時代において、年輪年代により年代が既知の試料の分析を実施した研究ではおおむね精度は10年程度以内におさまる事が報告されている。例えばFriedrich et al. [2004]では長いクロノロジーを作成する過程でナラとマツの年輪年代のSynchronizationができていたが、これは事前にウイグルマッチングで推定されていた年代とは8年差であった。これは地球上の大循環による大気の拡散で北半球の広い範囲で炭素14の濃度はほぼ地域差なく(過去にわたって)一定であり、ウイグルマッチングによる高い精度での年代決定が期待できる事を示している。

一方で、ウイグルマッチングの元になる較正曲線IntCalは北半球の比較的高緯度の北米とヨーロッパで生育していた樹木試料をもとに作成されているため、地球上の全ての地域に適用できるかどうかは検討を要する。実際に北半球と大気が混ざりにくく、海洋の影響の強い南半球ではC14濃度がやや異なる値(年代に換算するとやや古い年代)を示すため、南半球では較正曲線としてSHCal04が作成されている[McCormac et al.2004]。

また、北半球においても、低緯度地域では若干の問題がある事が知られている。例えば、地中海沿岸地域の試料は基本的にIntCalに沿った変動を示すが、紀元前800年前後の短い期間に限ってやや古い値を示す事が知られている[Kromer et al. 2001]。この事は北半球の中でも特に低緯度の地域ではlocal offsetが起こりうる事を示している。

日本はIntCalの試料の得られた地域から距離的にかなり離れており、さらに低緯度に位置しているため、地域的なoffsetのおこる事は十分に考えられる。Sakamoto et al. [2003]、Ozaki et al. [2007]は光谷により暦年代決定された試料を用いてC14年代の測定をおこない、この点についての検討をおこなった。その結果、日本産樹木での分析値が分析を実施したBC270年からAD900年の区間で基本的にIntCalの値とほぼ同じ傾向を持つ(同時に日本の樹木で作られた暦年代標準パタンに間違いのない事の検証がきている)一方で、AD100-200年の区間ではlocal offset(地域によるずれ)のある可能性が示された。

姫御前遺跡出土の2本の木柱の場合、ちょうどこのoffsetの顕著な時期に相当するため、年代が大きく新しい方へずれたことになる。この時期の較正曲線自体のoffsetはSakamoto et al. [2003]の図から見る限りせいぜい50炭素年未満であるが、較正曲線がややフラットになる時期であるため、今回のウイグルマッチングでの暦年代較正では50年を超えるずれとなった。

木柱の年輪数が60年以下と少ないこと、日本産樹木による較正曲線が現状では少数の試料に基づいていることを考慮すると木柱のウイグルマッチング年代の精度は十分なものとはいえないが、現在得られている情報から推定できる最も確からしい年代値として本報告では3世紀前半を採用する。

b 年輪年代とウイグルマッチングのずれ

自然木については年輪年代による暦年代が得られたが、ウイグルマッチングによる暦年代推定値は、較正曲線の違いに関わらず約70年も古くなった。これは、どちらかの推定値が間違っていることを示して

いる。

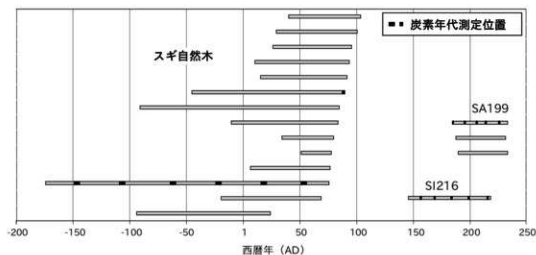
年輪年代の精度に関しては、光谷により年代の決められた様々な木材試料に対する詳細な炭素年代測定がおこなわれ、E(2)aで既に述べたように一部の年代区間を除き IntCal と矛盾のないことが明らかになっている。このことから、年輪年代に何十年ものずれのないことは確実であり、また、未公開ながら断片的に実施された年輪年代の検証でも、今のところ大きな問題は見つかっていない。したがって、年代のずれが年輪年代側に起因しているとは考えにくい。

一方でウイグルマッチングの精度は校正曲線に強く依存する。Nakamura et al. [2007] はヤクスギの詳細な炭素年代分析を行い、IntCal と極めて良く整合する時期と大きく乖離する時期があることを示している。このことは海洋の影響を強く受ける地域では年代が古くなるという単純な話ではなく、地球レベルでの大気循環の変動が比較的低緯度の日本周辺の C14 濃度変化をもたらし、時代によっては校正曲線が不安定になることを示唆している。Sakamoto et al. [2003] では姫御前遺跡の自然木の年代に相当する部分では IntCal と日本産樹木に明瞭な差は見いだされていないが、この年代区間の分析は 1 点の試料（箱根の逆さ杉）に基づいている。日本では C14 濃度に不安定要素があり、国内の地域による違いも予想されることから今後より多くの試料を分析して日本版の校正曲線を整備していく必要がある。なお、姫御前遺跡の自然木試料については現在追加の炭素分析を進めている。

以上のように、いくつかの問題点があるもの、本報告では現状で最も可能性の高い暦年代推定値として、自然木に関しては年輪年代により推定された HGN122 表層の AD90 年、建物木柱については日本産樹木の校正曲線を用いたウイグルマッチングで得られた 3 世紀前半を採用する。日本版校正曲線による年代を一方（木柱）では採用し、一方（自然木）では採用していないのは不統一であるが、今後の検証が可能であるため筆者らが現状で最も精度が高いと考えたものを選択した。

(3) 木材から見た遺跡の年代と編年

自然木と木柱の年輪年代推定、ウイグルマッチングによる暦年代推定結果をまとめて第 58 図に示す。年代が特定できた試料だけをもとにすると、自然木と木柱に関して以下のような時間的経緯を推察することができる。姫御前遺跡では、遅くとも紀元前 2 世紀初めには遺跡西部の低地にスギを主とした森林が



暦年代の推定値は自然木は年輪年代により、木柱はウイグルマッチングにより決められている。

第 58 図 スギ自然木、木柱列 SA199、平地式建物 SI216 の暦年代関係



第59図 埋没林全体の平面図と年輪クローノロジーに組み込まれたスギ個体の位置

成立していたが、紀元後1世紀の終わり頃から何らかの理由で徐々に枯死し、2世紀の初め頃には消滅した。その後、やや時間が空いて、場所は不明であるが、2世紀半ば～終わりに新たなスギの定着がおこり、低地のスギより速い速度で成長した。このスギが樹齢50-70年に達した3世紀前半に伐採され、少なくとも2棟の建物の柱材として利用された。建物2棟が3世紀前半に建てられた時期には自然木は集落の「裏山」の森林としては存在せず、既に100年以上前に埋没していたことになる。

一方で、姫御前遺跡の埋没林部分からは古墳時代前期の遺物が出土しており、出土状況からこれらの遺物は少なくとも一部の自然木の層位と対応するとされている。また、埋没林の自然木個体の平面図(第59図)を見ると、クロノロジーに組み込まれた14個体は全体的に分布するが、大型の自然木をあまり含んでいないことがわかる。D(1)aで述べた成長の良い個体はこの大型個体とある程度対応している。同所的に出土しながら成長速度が大きく異なることを考慮すると、年輪や炭素年代による証拠は得られていないもの、埋没林には年代の異なる自然木が含まれている可能性は捨てきれない。しかし、成長の良いグループは各個体に含まれる年輪数が少ないため、年輪年代学的に抽出しにくく、この点についての検討は難しい。

自然木の出土層位を見ると、埋没林のほとんどの自然木がⅢ層下部に含まれるのに対して、自然木のスギの一部で出土層位がⅣ層上部のものがある。年輪年代により抽出された14個体は両方の層位のものを含んでいて整合性は良くないが、Ⅳ層上部のものがやや多く、この14個体は埋没林の中でもスギを主体とする古い層位のグループに対応している可能性がある。その場合、14個体のクロノロジーに与えられた暦年代は、埋没林全てを反映したのではなく、埋没林の存続期間の中で主要な衰退が起きた時代を示しているだけかもしれない。

森林の消長と関連する花粉分析(第V章1A)の結果と合わせて考えると、自然木の消滅時期はスギ、アカガシ亜属の花粉の優占する森林植生を示すⅣ層上部からアカガシ亜属が急減、スギも減少してイネ科花粉が急増するⅢ層下部への移行部分に対応するようと思われる。つまり、水田の広がりに呼応してヒトの森林への働きかけがあった可能性が示唆されるが、その場合一番に考えられる人為的な伐採に関しては、自然木に伐採痕が認められていないことを説明しにくい。

以上のように現状では埋没林の変遷は不明な点が多く、スギの生長の良いグループとアカガシ亜属、トネリコ属などの広葉樹の年代的な位置づけが望まれる。

ところで、ここまでは樹木の枯死年と利用年を同一視してきたが、両者が異なる可能性も指摘しておく。姫御前遺跡で自然木の埋没林が出土しているように、特に針葉樹のスギなどでは堆積環境によっては古い材が良好に保存されることがある。このようないわゆる神代杉にはしばしば鉄斧痕が残されていて、埋没材を後世に利用していた証拠になる。この場合、樹木の枯死年よりも利用年の方が遙かに新しくなる。姫御前遺跡の木柱に関しては、SA199の3本は表層年輪がほぼ同一年であり、埋没材の利用だと生じやすい年代のずれがないことから、生木を伐採・利用したとの方が良いであろう。しかし、北陸の低地などでスギを扱う際には埋没材の利用の可能性は十分にあると思われ、注意を要する。

なお、自然木の年輪解析ではスギ13個体からなる280年分のクロノロジーを作成することができた。今後周辺地域の弥生時代のスギの年代を決めていくための物差しとして役に立つであろう。

引用・参考文献

- Baillie M.G.L. 1982 Tree-Ring Dating and Archaeology. The University of Chicag Press, 274pp.
- Baillie, M.G.L., and Pilcher, J.R. 1973 A simple crossdating program for tree-ring research, *Tree Ring Bull.* 33: 7-14
- Friedrich M, Remmele S, Kromer B, Hofmann J, Spurk M, Kaiser KF, Orcel C, Küppers M 2004 The 12,460-year Hohenheim oak and pine tree-ring chronology from central Europe — A unique annual record for radiocarbon calibration and paleoenvironment reconstructions. *Radiocarbon* 46: 1111-1122.
- Kimura, K. 1995 A simple and visual cross-dating program for dendrochronology. *Tree Rings - from the past to the future- Proceedings of the International Workshop on Asian and Pacific Dendrochronology*, 255-257.
- Kromer, B., Manning, S.W., Kuniholm, P.L., Newton, M.W., Spurk, M. & Levin, I. 2001 Regional 14CO2 offsets in the troposphere: magnitude, mechanisms, and consequences. *Science* 294:2529-2532.
- McCormac, F. G., Hogg, A. G., Blackwell, P. G., Buck, C. E., Higham, T. F. G., and Reimer, P. J. 2004 SHCal04 Southern Hemisphere Calibration 0 - 1000 cal BP. *Radiocarbon* 46, 1087-1092.
- 光谷拓実 1987 「わが国における年輪年代学の確立とその応用 (第1報) 現生木のヒノキによる年輪変動パターンの特性検討」『木材学会誌』33: 165-174.
- 光谷拓実 2001 『年輪年代学と文化財』日本の美術 No.421. 至文堂, 99pp.
- Nakamura, T., H. Miyahara, K. Masuda, H. Menjo, K. Kuwana, K. Kimura, M. Okuno, M. Minami, H. Oda, A. Rakowski, T. Ohta, A. Ikeda and E. Niu 2007 High precision 14C measurements and wiggle-match dating of tree rings at NagoyaUniversity, *Nucl. Instrum Meth B.* 259, 408-413.
- 中村俊夫・石塚友希夫・奥野充・木村勝彦・金伯祿・森脇広 2003 「白頭山火山の10世紀における巨大噴火の高精度AMS14C年代測定」『名古屋大学加速器質量解析計業績報告書(XIV)』
- 西本豊弘編 2009 『弥生農耕の起源と東アジア—炭素年代測定による高精度編年体系の構築、平成16年度～平成20年度文部科学省科学研究費補助金(学術創成研究) 研究成果報告書』52pp.
- Ozaki, H., Imamura, M., Matsuzaki, H., and Mitsutani, T. 2007 Radiocarbon in 9th to 5th century BC tree-ring samples from the Ouban I archaeological site, Hiroshima, Japan, *Radiocarbon* 49(2) : 473-479.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hoog, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Ramsey, C.B., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. *Radiocarbon*, 46, 1029-1058.
- Sakamoto, M., Imamura, M., van der Plicht J, Mitsutani, T., and Sahara M. 2003 Radiocarbon calibration for Japanese wood samples. *Radiocarbon* 45 (1) :81-89.
- Stuiver, M., and Reimer, P. J. 1993 Extended 14C database and revised CALIB radiocarbon calibration program, *Radiocarbon* 35:215-230.

7 動物遺存体の同定

A はじめに

一般に日本の国土は、火山灰に由来する酸性土壌に広く覆われ、高温多湿というモンスーン気候ともあいまって動物遺存体の保存状態には恵まれない。そのため、ほとんどの乾燥地遺跡では動物や植物性の遺物は分解されて保存されず、動物遺存体が出土する遺跡は、貝塚、石灰岩地帯の洞穴や岩陰が代表的である。近年では、湿地環境の遺跡や遺構からも多くの動物遺存体が報告されている。本遺跡のように乾燥した遺跡では、ほとんどの動物遺存体が腐食するが、例外的に消失を免れ、発掘で取りあげられるものもある。そうした断片的な資料を蓄積することによって、その遺跡を残した人々の動物利用、食生活などを解明する手掛かりとすることができ、ひいては当時の自然環境や人間の適応の歴史を明らかにすることができる。

B 姫御前遺跡における動物遺存体

京大学大学院人間・環境学研究科 菊地 大樹

(1) 試 料

試料は、姫御前遺跡Ⅱの中世包含層から出土した動物遺存体計5点である。1点をのぞきほとんどが焼骨の状態で検出されており、骨の表面や内部の劣化がいちじるしい。そのため、一部の資料は同定することができなかったものもある。

(2) 方 法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴及び現生骨格標本との対比によって同定をおこなった。

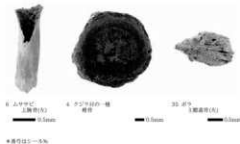
(3) 結 果

a 分類群

同定された学名、和名及び部位を第A表に示し、主要な分類群を写真(第B図)に示す。

- 脊椎動物門 Vertebrata
 硬骨魚綱 Osteichthyes
 ボラ目 Mugiliformes
 ボラ科 Mugilidae
 ボラ *Mugil cephalus* Linnaeus
 哺乳綱 Mammalia
 齧歯目 Rodentia
 リス科 Sciurus
 ムササビ *Petaurista leucogenys*
 クジラ目 Cetacea
 クジラ目の一種 Cetacea fam., gen. et sp. indet.

第27表 種名表



第60図 姫御前遺跡の動物遺存体

7 動物遺存体の同定

No.	シール番号	区	層/遺構	色 NO.	種類	部位	部分	左右	破片数	備考
1	1	22B8	Ⅲ		不明			-	1	焼骨
2	2	23B3	Ⅲ	144	不明			-	2	焼骨
3	3	30A15	Ⅱ b		ムササビ	上腕骨		L	1	焼骨
4	4	35B6	Ⅱ b		クジラ目の一種	椎骨	椎体	-	1	椎体径 38.94mm
5	35	33-39b	Ⅱ b		ボラ	主鱗蓋骨		L	1	焼骨

第 28 表 姫御前遺跡の動物遺存体

b 動物遺存体の特徴

ボラ 35～39B区Ⅱb層より主鱗蓋骨（左）が1点出土している。被熱しているため白色化し、表面や内部の劣化がいちじるしい。

ムササビ 30A15区Ⅱb層より上腕骨（左）が1点出土している。被熱しているため白色化し、表面や内部の劣化がいちじるしい。

クジラ目の一種 35B6区Ⅱb層より椎骨が1点出土している。他の資料と異なり被熱していないが、発掘後の乾燥により表面の劣化がいちじるしい。椎体の直径は38.94mmである。

(4) 所 見

中世のボラ、ムササビとクジラ目の一種を同定した。姫御前遺跡は海岸線から400mほどの内陸に立地し、過去の発掘調査及び土壌分析により、当時、遺跡周辺は一面に水田が広がっていたことがわかっていいる。今回同定したボラは、生息域を沿岸浅所や河川汽水域～淡水域としていることから〔中坊2000〕、これまでの分析結果を裏付ける資料のひとつとなろう。同定にいたらなかった資料も含め、ほとんどが焼骨の状態で見出されているが、クジラ目の一種の椎骨については、火を受けた痕跡がみられない。このことから、別の利用形態の可能性が考えられよう。

C 竹花遺跡における動物遺存体

京大大学院人間・環境学研究所 菊地 大樹
奈良文化財研究所埋蔵文化財センター 橋本 裕子

(1) 試 料

試料は、竹花遺跡の中世包含層から出土している動物遺存体33点である。すべて焼骨の状態で見出されており、骨の表面や内部の劣化がいちじるしい。そのため解体痕等の観察はできず、また、一部同定することができなかったものもある。

(2) 方 法

試料を肉眼及び双眼顕微鏡で観察し、形態的特徴及び現生骨格標本との対比によって同定をおこなった。

(3) 結 果

a 分類群

同定された学名、和名及び部位を第C表に示し、主要な分類群を写真（第D図）に示す。

- 脊椎動物門 Vertebrata
 硬骨魚綱 Osteichthyes
 スズキ目 Percidae
 タイ科 Sparidae
 マダイ *Pagrus major*
 哺乳綱 Mammalia
 食肉目 Carnivora
 イヌ科 Canidae
 タヌキ *Nyctereutes procyonoides*
 霊長目 Primates
 ヒト科 Homonidae
 ヒト *Homo sapiens*

第29表 種名表

b 動物遺存体の特徴

タイ科 70A14区Ⅱb下層より歯骨(右)が1点出土している。火を受けて白色化しており、表面や内部の劣化がいちじるしい。そのため、解体痕等の観察はできなかった。

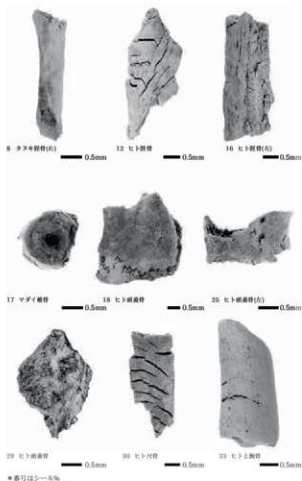
マダイ 68B7区Ⅱb層より椎骨が1点出土している。椎体径は14.98mmである。火を受けて白色化しており、表面や内部の劣化がいちじるしい。そのため、解体痕等の観察はできなかった。

タヌキ 61A25区Ⅱb層より脛骨(右)が1点出土している。火を受けて白色化しており、表面や内部の劣化がいちじるしい。そのため、解体痕等の観察はできなかった。

ヒト 脛骨(左1左右不明1)が2点、上腕骨、尺骨、椎骨(左右不明)が各1点、そのほか頭蓋骨片が8点の計13点が出土している。すべて火を受けて白色化しており、表面や内部の劣化がいちじるしく、殺傷痕等の観察はできなかった。頭蓋骨片のなかに、頭頂骨から後頭骨にみられるラムダ縫合〔橋本・松井2008〕の閉鎖状態が、プロカの1~2度であるものがみられ〔瀬田・吉野1990〕、また被熱にともなうて骨が収縮してはいるが、一定の厚みを残していることから、成人の個体が含まれていることがわかる。さらに、被熱の影響により骨がひび割れているが、頭尾方向の割れは確認できないことから、一度しか火を受けていないと推察できる。

(4) おわりに

中世のタイ科、マダイ、タヌキ、ヒトを同定した。出土した動物遺存体は火を受け白色化しており、すべて破片で検出されていることから、解体痕や殺傷痕などの観察はできなかった。同定できた資料のほとんどがヒトであり、Ⅱb層に集中している。出土した調査区域が広範囲なことから、複数の遺体が一帯に散乱していたと考えられる。当時の景観を復元するうえでも貴重な資料となろう。



第61図 竹花遺跡の動物遺存体

7 動物遺存体の同定

No.	シール番号	区	層/透視	他 NO.	種類	部位	部分	左右	破片数	備考
1	5	59A14	II b		不明			-	1	焼骨
2	6	59A24	II b		不明			-	1	焼骨
3	7	60A5	II b		ヒト	頭蓋骨	後頭骨	-	2	焼骨
4	8	61A25	II b		タヌキ	脛骨		R	1	焼骨
5	9	61B21	II b	1661	不明			-	1	焼骨
6	10	62B2	II b	1684	ヒト	脛骨	脛体	-	1	焼骨
7	11	63A15	II b		不明			-	1	焼骨
8	12	63A15	II b	3	ヒト	脛骨		-	1	焼骨
9	13	64A19	II b	93	不明			-	1	焼骨
10	14	66A14	II b	558	ヒト	頭蓋骨	額頭骨	-	1	焼骨
11	15	66B1	II b	230	不明			-	1	焼骨
12	16	68B2	II a2		ヒト	脛骨		L	2	焼骨
13	17	68B7	II b		マダイ	脛骨		-	1	焼骨 脛体径 14.98mm
14	18	68B11	II b		ヒト	頭蓋骨	後頭骨~頭頂骨	-	1	焼骨
15	18	68B11	II b		不明			-	1	焼骨
16	19	70A14	II b F	1118	タイ科	脛骨		R	1	焼骨
17	20	70B11	II b	917	硬骨魚綱	脛骨		-	1	焼骨
18	21	71A14	II b F	1079	不明			-	1	焼骨
19	22	72B6	II b		ヒト	頭蓋骨	額頭骨	-	1	焼骨
20	23	72B6	II b		不明			-	1	焼骨
21	24	72B17	II b		不明			-	1	焼骨
22	25	74A20	II b	1613	ヒト	頭蓋骨	額骨	L	1	焼骨
23	25	74A20	II b	1613	不明			-	1	焼骨
24	26	74B6	II b 2		不明			-	1	焼骨
25	27	74B16	II b	1327	硬骨魚綱	脛骨		-	3	焼骨
26	28	75A4	II b		ヒト	頭蓋骨	額頭骨	-	3	焼骨
27	28	75A4	II b		硬骨魚綱	鱗棘		-	1	焼骨
28	29	75A14	II b	1545	ヒト	頭蓋骨	眉弓	-	1	焼骨
29	30	75A25	II b 2		ヒト	尺骨		-	2	焼骨
30	31	84-3 (53B20)	II b		不明			-	1	焼骨
31	32	84-3 (53B20)	II b		ヒト	頭蓋骨	額頭骨	-	1	焼骨
32	33	84-5 (55B15)	II b		ヒト	上腕骨		-	1	焼骨
33	34	84-7 (57B4)	II b		不明			-	1	焼骨

第 30 表 竹花遺跡の動物遺存体

引用文献

- 瀬田季茂・吉野峰生 1990 『白骨死体の鑑定』令文社 p.182-198.
- 中坊徹次編 2000 『日本産 魚類検索 全種の同定 第二版 I』東海大学出版会 p.538
- 橋本裕子・松井章 2008 『第 10 章 人骨』『動物考古学』京都大学学術出版会 p.257-293.

第Ⅵ章 ま と め

1 弥生時代～古墳時代

A 姫御前遺跡における弥生時代後期～古墳時代前期の土器の年代

姫御前遺跡では弥生時代後期から古墳時代前期中葉にかけての土器群が出土した。そのうち、遺構のないしは層位一括資料でまとまりの良いと考えられる資料を提示する。

姫御前Ⅰ期

SX284を指標とする。この時期の遺物は点在するのみで、まとまった出土例は、当遺構のみである。ただし、SX284も土器については固化した3点のみで器種のバリエーションを把握できない。近江系甕(甕E類)と、無頸壺(壺A類)及び高杯A類から構成される。高杯A類は、口縁部の屈曲が強く古相で、新潟シンボ編年1期(猪橋式併行)まで遡る可能性がある。ただし、壺A類は頸城地域においては2期に出現し、3期に消滅するとされる〔滝澤2005〕ことから、SX284出土土器群は新潟シンボ編年1・2期のまとまりとして捉えておきたい。

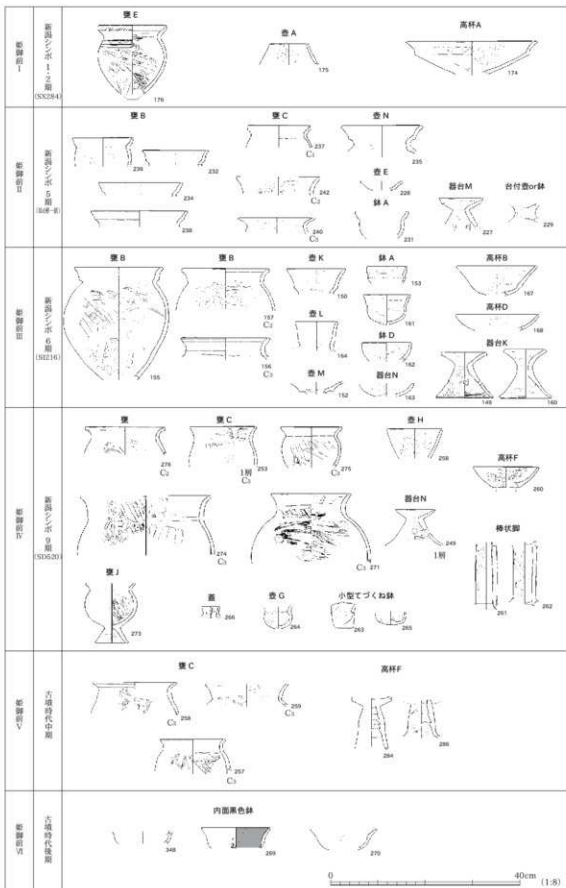
姫御前Ⅱ期

26B・27Bグリッド周辺の土器集中区Ⅲd層を指標とする。甕B・C1・C2・C3類、壺E・NⅠ類、鉢AⅠ2類、器台M類からなる。Ⅲd層は上面を火山灰の再堆積層(Ⅱc層)に覆われ、SD209に切られる。SD209は新潟シンボ編年6期(姫御前Ⅲ期)の遺構であり、それより古いことが層位的に確かである。北陸の系譜を引く有段無文口縁甕(甕B類)や「く」「コ」字状口縁甕(甕C類)のほか、東海系の高杯C類、畿内系の壺N類等、「外来系」の土器群が顕著に認められる〔滝澤2005〕時期である。甕につ

時代	実年代	滝沢 2005	川村 2000	田嶋 1986・1988	北陸(南西部)型式・様式	田辺 1981	姫御前
弥生時代	後期	AD0(14C)	1期		漆町1群	猪橋	I期
		AD100(14C)	2期		漆町2群	法仏	
		AD169(年輪)	3期		漆町3群	月影	
			4期		漆町4群		
	終末期	AD258(年輪)	5期	1段階	漆町5群	白江	II期
			6期	2段階	漆町6群		
			7期	3段階	漆町7群	古府クムビ	III期
			8期	4段階	漆町8群		
			9期	5段階	漆町9群		
			10期	6段階	漆町10群		
古墳時代	前期	AD400	7段階	漆町11群	高島	IV期	
			8段階	漆町12群			
			9段階	漆町13群			
			10段階				
	中期		11段階			TK72 TK216 ON46 TK208 TK23	V期
			12段階				
			13段階				
			14段階				
			15段階				
			16段階				
後期	AD500	12段階	漆町14群		TK47 MT15 TK10 MT85 TK43	VI期	
		13段階					
		14段階					
		15段階					

※AD169(年輪)は大友西SE18、AD258(年輪)は、二118のみあつたSX208による。

第31表 弥生時代～古墳時代の編年と実年代〔春日ほか2008、滝沢2010b〕をもとに作成



第 62 図 姫御前遺跡における弥生時代～古墳時代の土器の変遷

いては後出する姫御前Ⅲ期の様相と比べるとB類の有段部がより明瞭で、C3類の口縁下端部が肥厚したり、C2類の面取りが上下に引き出される等、概して古相を呈する。頸城地域においては当期に、「小型器台の出現」と「東海系高杯の波及」、「小型器台と有段鉢（小型短頸鉢）による新たな祭式土器のセットが成立」する。また、「有段口縁壺が減少」し、「内面ヘラケズリを行う無段無文口縁壺」が増加する〔笹澤 2005〕という。Ⅲd層一括土器群においては壺C類が多いものの、依然として壺B類も少なくはなく、県西部という地理的環境によって生成された様相と言えよう。新潟シンボ編年5期を当てておくが、下つても6期前半に取まる資料群である。

姫御前Ⅲ期

SI216 (147～170) を指標とする。遺物包含層(Ⅲ層)中からも該期の遺物が多く出土しており、当遺跡の主体となる時期である。壺B・C2・C3類、壺K・M・L類、鉢A12・D類、器台N・K類、高杯B・D類から構成される。頸城地域においては、「東海系高杯、小型器台、直口壺、小型短頸鉢の定着」、「口縁部つまみ上げ壺が主体」、「東海または畿内系二重口縁壺の普及」〔笹澤 2005〕という特徴が見られる時期である。当遺跡においても、同様な様相を示す。新潟シンボ編年6期を当てておく。壺B類155の口縁部は、厚手かつ直立気味で、胴部最大径は上位に認められる。この特徴は、〔田嶋 2006〕の4類に最も共通し、6期(津町6群)に位置付けられる。高杯Bは、御経塚ツカダ型式〔北野 1991〕や御付鉢〔橋木 1995〕と呼ばれているもので、4期～7期に認められる〔滝沢 2010b〕。稜部内面にもシャープな稜が残存し、その終末期の資料とは言えない。これらの形態的特徴を勘案すれば、6期の良好なまとまりとして評価することができる。

姫御前Ⅳ期

SD520-3層(258～277)を指標とする。新潟シンボ編年9期(古墳時代前期中葉)を当てておく。9期には畿内系屈折脚高杯と小型丸底土器が出現し、畿内の影響が高まる時期である。当遺跡においても、261・262等の畿内系の高杯が見られるようになる。また、壺Gや小型手づくね鉢が出現する。壺は、有段口縁(A類・B類)が姿を消し、壺C類のみとなる。壺C類は頸部が長く伸びる傾向にあり、次のV期へと引き継がれる。

姫御前Ⅴ期

18年度報告において笛吹田遺跡第Ⅳ期土器群に対応させた時期で、古墳時代中期に位置付けた一群。壺は口縁端部が丸まる壺C類で、頸部が短く、長胴化の傾向(最大径が下位へ移行)を見てとれる。また、畿内系屈折脚を有する高杯が引き続き見られるが、内面の調整は粗くなる。

姫御前Ⅵ期

明確に該期と分かる資料は内面黒色鉢のみである。18年度報告において、Ⅲ層から出土したものである。20年度調査区からも中世の遺物包含層Ⅱb層から1点が出土した。該期の遺構は検出されていない。

B 姫御前遺跡における周溝を有する平地建物 SI216 について

(1) 年代

平地建物 SI216 は、ほかの遺構との切り合い関係を持たず、建物構造を知る上で貴重な資料である。当遺構は、建物本体と付属施設である周溝から構成される。建物の時期は、周溝から出土した土器の年代観から、弥生時代終末期(新潟シンボ編年6期)に位置付けられる。また、P246柱根より採取した試料(最外から3番目の年輪)の¹⁴C年代測定値を日本版校正曲線を用いてウイグルマッチングしたところ、3世紀

前半期とされた（第V章6）。樹皮が残っていないものの、最外年輪付近の残存状況は良好で、この年代と伐採年代はほぼ一致すると見て良い。いずれにしても3世紀前半に伐採されたスギが、柱材として利用されたといえる。この年代を建物の構築年代と見ることができよう。周溝から出土した土器よりもやや古い年代値であるが、おおむね調和的といえる。むしろ、周溝から出土した土器が、建物の廃絶年代を示すと考えるべきであろう。周溝から出土した土器の実年代を知る上で貴重な資料となるのが、石川県二口かみあれた遺跡SX208の井戸柱材である。新潟シンボ編年6～7期に位置付けられる井戸柱材の枯死年代は、年輪年代からAD258年と推定されている〔光谷1995〕。SX208出土の土器は、6期からより新しい7期頃までの時期幅の中で捉えられており〔滝沢2010b〕、6期に限定できるSI216よりも幅広く捉えられていることが分かる。このことから、SI216から出土した土器の実年代をAD258年以前に位置付けることができる。このように考えると、建物の構築時期と廃絶時期では30年ほどの相違があるといえる。柱材が再利用されていないとすれば、建物の耐用年数を反映する結果とも言え、極めて重大な情報となる。柱材の経年劣化や一代20年とする考えを考慮すれば、存続年代はやや長いとも考えられるが、集落における中核的な建物と考えられ、一般的な建物とは区別して理解すべきかもしれない。また、近年の研究により、紀元前1世紀から3世紀のIntCal（世界版較正曲線）と日本産樹木の¹⁴C年代の違いは、大きなところで100年近くにもなることが明らかになっており〔尾壽2009〕、弥生時代～古墳時代前期の試料を測定する場合、慎重に評価する必要がある。

（2）建物の規模と形態

建物本体は、板壁溝と見られる幅・深さとも5cmほどの小規模な溝が、胴張りの隅丸方形に巡ることを確認した。規模は、1辺約7m、床面積は49m²で約15坪（3.3m²/坪）である。古墳時代前期におけるこの規模の建物は、三桑市吉津川遺跡（6～7期）〔田村^{ほか}2008〕、糸魚川市南押上遺跡（7期）、佐渡市浜田遺跡（8期）〔本間^{ほか}1975〕、長岡市五斗田遺跡（7～8期）〔島居^{ほか}2001〕、村上市下新保高田遺跡（9期）〔青木^{ほか}2010〕等、県内でも数例に留まる。建物の規模は、県内でも最大クラスに相当し、有力者の存在をうかがい知ることができる。また、7期に位置付けられる南押上遺跡の事例は竪穴建物であり、構造は異なるものの直線的な方形をなす〔小池2010〕。すなわち、姫御前遺跡との年代関係を整理すれば、弥生時代からの系譜をもつ胴張りの隅丸方形から直線的な方形へという建物プランの変遷を想定することができる。

上屋を支えた主柱穴は、4本が1辺3.5mほどの正方形に配置された。姫御前遺跡におけるほかの建物においては、正方形の配置とまでは言えないものの、4本柱を基本としている。4本柱からなる構造は、該期において一般的な状況と言える。柱間は、SI216で3.5m、他の建物で2.5mほどであった。SI216がほかの建物より一回り大きいことが、柱間からも読み取ることができる。〔岡本2006〕の集計によれば、建物の規模は柱間の2倍とされている。SI216の柱間は3.5m四方であるのに対し、壁溝は7m四方であり、この集計と調和的といえる。ほかの建物は、柱間が2.5m四方であることから、建物の規模は1辺5m程度であったと想定できる。およそ25m²の床面積を〔宮本1979〕の集計と対比すれば、該期の竪穴建物に共通する規模といえ、一般的な規模の建物と評価することができる。

（3）建物の構造

SI216は、幅・深さともに5cmほどの壁溝が認められた。竪穴が検出されなかったことから平地建物

と判断したが、本来、存在した竪穴部分を検出できなかっただけかもしれない。しかし、周辺の遺物包含層は厚さ5cmほどと薄く、竪穴が仮に存在したとしても、ごく浅いものであったと考えられる。後述するが、古墳時代に入ると周溝を有する建物に竪穴建物が伴わず、検出状況を鑑みても平地建物と認識することがより適当と判断した。周溝が除湿のために掘られたとすれば、その内側に床面を掘り下げて竪穴建物を構築することは合理的でなく、平地建物に移行した大きな要因の一つと考えられる。

主柱となった柱根は4本とも残っており、南側2本は細く根入れが浅く、北側2本は太く根入れが深いことが明らかとなった(図版5 1-1'、3-3')。北西に面する2本の柱が太く、根入れが深いことは、日本海から吹きつける季節風への対策と見られる。殊に海岸に近い糸魚川地域においては、北西から吹きつける冬季の季節風は猛烈であり、このような対策を講じる必要があったのであろう。また、いずれの柱根も底面が平坦に加工されていた(図版55)。これにより、柱の安定性を向上させたのであろう。気象条件と建物構造の相関関係を知る上で、稀有な事例といえる。

建物内では、炉・間仕切り溝・土坑を検出した。炉は地床炉で、建物のほぼ中央に配置される。地床炉はSI402にも認められるが、炉を持たない建物もあり、両者が併存した可能性がある。炉を持つ建物は、調査区内最大のSI216と、玉作が行われたと見られるSI402に限られる。炉の有無は、建物の存続期間の相違(短ければ焼土が形成されにくく炉と認識できない)や性格の相違等を反映するのであろう。東側壁溝の中間点付近には、直交して西側に延びる間仕切り溝を検出した。この北側には土坑SK253が掘り込まれており、相互の位置関係に有意性を見出すことができる。

出入口は、冬季の季節風を考慮すれば、南側または東側に設置することが望ましい。このうち東側は間仕切り溝によって空間が二分されることから、出入口の存在は考えにくい。また、北側では壁溝が途切れており、ここが出入口であったとする見方もできる。しかし、北側の壁溝付近は、本来存在したであろう床面よりも遺構検出面が10～15cmほど下がっている(図版5 1-1'～3-3')。したがって、本来は途切れていないと考えるべきで、むしろ東・西・南側よりも壁溝が深かったため、部分的に残存した可能性がより高い。壁溝が深いことも、季節風への対策であったと言えるかもしれない。このように考えると、出入口は南側に存在した可能性が高くなる。そこで注目されるのがSB198である。直径15cm・深さ10cmほどの浅く貧弱な6つの柱穴から構成される。その配置は東西対称形の台形であり、北側の2つの柱穴が隣接することも特徴的である。一方、柱穴の深さから考えると、独立して存在するか判断に迷う。主軸方向が一致することを考慮すれば、SI216の付属施設と考えるほうが合理的に理解できる。弥生時代の竪穴建物の出入口には「中軸線上の炉と反対側に主柱よりも掘形が浅く、径の細い支柱」が設置されるという[宮本1986]。炉は、建物のやや北側に位置するが、南側を出入口とした場合、中軸線上のやや奥側に相当する。このような状況を総合的に考えれば、SB198が入口施設を担った可能性を考慮することができる。

(4) 柱根の材質

柱根の材質は、いずれもスギであった。また、竹花遺跡から出土した多数の建築材もすべてスギであった。当時、周辺地域にスギ林が広く存在したことが、土壌分析(第V章1・2)及び6区流路(SR)の自然木の樹種構成(第12図、第V章4)から明らかになっており、近隣で容易に入手できる木材が利用されたと考えられる。この時期には、水田開発に伴う大規模な開墾が行われたことが、自然科学分析によって明らかになっている(第V章1・2)。狭小な平野部で多数伐採されたスギが、建築材として利用された可能性が高い。

なお、柱根に認められる加工痕は平面的かつ刃先の形状が直線的であり（図版 55）、石斧の加工痕とは異質である。日本海沿いには、弥生時代後期から鉄製品が顕著に認められ【村上 2001 など】、開墾や建築部材等の加工に、多様な鉄製品が導入された可能性がある。

（5）建物廃絶時の祭祀

SI216 の柱穴内、柱根上部からヒスイ原石や勾玉未成品が出土した。P246 からは蛇紋岩製の勾玉未成品 2 点（361・362）、P245 からはヒスイ原石（398、図版 93）が出土した。遺物包含層中における出土頻度と比べると異常に多く、意図的に埋め込まれた可能性を考えるべきである。そこで、注意したいのが柱根の上部から出土した点である。すなわち、建物構築時に埋め込まれたものでないことが明らかといえる。竹花遺跡出土の建築部材の観察からは、転用を繰り返した様子を読み取ることができた。柱材を再利用されたことを想定すれば、根元で切断して上部を再利用したことを想定することができる。切断によって形成された柱根上部の浅い穴に、供えるかのようにヒスイ原石や玉の未成品を埋納したと考えるのが、最も合理的と考えた。柱根上部は経年劣化し、これに伴って覆土が沈降して、出土状況のような条件が整ったのであろう。SI216 以外においても、SA429 を構成する P259 からはヒスイ原石（図版 104）、単独で検出した P380 からはヒスイ原石（408、図版 24・110）が出土した。これらは柱根が残存しないが、柱痕部分の上位から出土しており、柱材の抜き取り後の埋め戻しに伴い、埋め込まれた可能性が高い。このように考えると、柱材を根元で切断した後、あるいは柱材の抜き取り後に埋納するような祭祀が行われた可能性を指摘したい。

（6）周溝の形状と性格

SI216 の外周には、土坑や短い溝が断続的に巡る。それらを周溝としたものの、SD201・SD204・SK210・SX211・SD214・SD215・SX218・SD223 の 8 つに分断されており、さらに調査区外南側にも存在することが想定される。埴の検出高と土坑の検出高がほとんど変わらないこと、土坑同士の間隔が大きく離れていることを考慮すれば、遺構検出面を下げ過ぎたために途切れたと単純に考えることはできない。「周溝」と呼ぶには、あまりにも断続的であるが、前後の時期に存在する遺構との系譜を考慮し、「周溝」の一つの在り方と理解した（第 63 図）。

周溝の可能性を指摘した上記遺構は、単体で見れば「土坑」と呼ぶべき形態である。土坑状の周溝は、溝状のもの（SD201・SD215）、楕円形のもの（SK210・SX211・SD214）、不整形のもの（SD204・SX218・SD223）と多様である。当初は、浅く不整形な形状をなすものが多いこと、それぞれの規模・形態が異なることから、建物との関係を積極的に捉えなかった。しかし、ほかの時期の遺構が重複しない状況において、建物の周囲を巡ることから、SI216 に伴う周溝と考えた。この周溝は、建物の内と外を示すほか、地下水位が高い環境に立地するため建物の床面を乾燥させる目的があったのであろう。

周溝からは多数の遺物が出土したものの、破損品のみで完形品は認められなかった。各遺構とも、遺物は多数出土したものの、SD214・SD215 を除けば、土師器の破片が出土したのみであった。遺存状態が良好であった SD214・SD215 においても、スス・コゲの付着状況からは、使用頻度が極めて高いことが理解される（図版 94）。しかも、完形個体は皆無であり、不用品の廃棄場として位置付けられるかもしれない。むしろ、建物廃絶時に廃棄された一群と理解することがより適当であろう。すなわち、除湿の機能を有するのであれば建物が使用されていた間、出土した多数の土器片の大半は存在しなかったと考える

べきであり、先述のとおり出土土器の年代は建物の廃絶時期を示すと考えたい。

(6) 周溝を有する建物の変遷

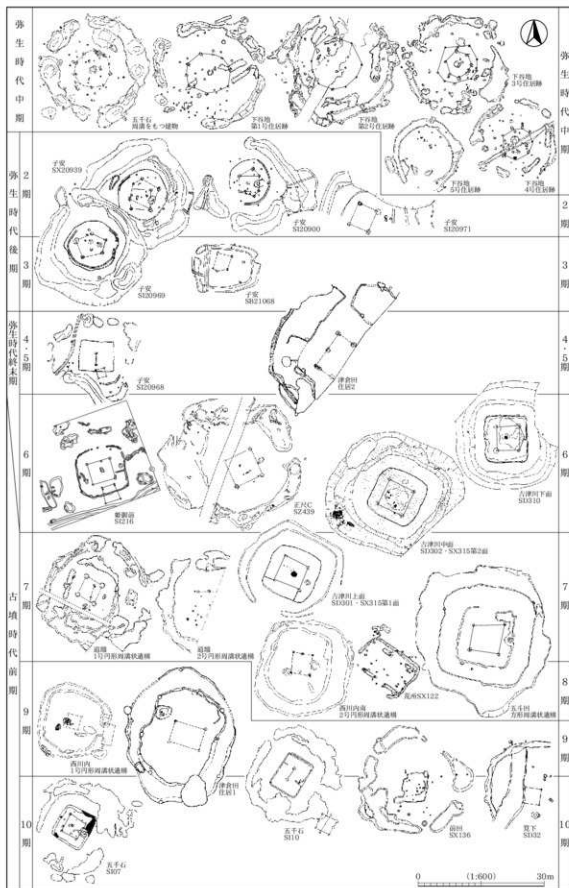
周溝を有する建物は、弥生時代～古墳時代前半の北陸地方において、しばしば認められる。近年、同様の建物が全国的な広がりを持つことが明らかにされており〔岡本 2003・2006、及川 1998・1999・2001 など〕、弥生時代中期～古墳時代前半において普遍的な存在であるとされつつある。そして、「この建物は恐らく低湿地のみに立地するもの」〔楠 1989〕であり、除湿の機能を持つものと推測されている〔高橋 1979〕。

新潟県内では、昭和 53 (1978) 年に調査された柏崎市下谷地遺跡 (弥生時代中期) 〔高橋 1979〕で見られたのを契機に、沖積地における建物形態の一つとして認識されるようになった。その後、同様の建物はおよそ 20 年間検出されなかったが、平成 8 (1996) ～ 11 (1999) 年に佐渡市平田遺跡〔坂上ほか 2000〕・上越市津倉田遺跡〔笹澤ほか 1999〕・新潟市正尺 C 遺跡〔土橋ほか 2006〕・長岡市五斗田遺跡〔鳥居ほか 2001〕で類例が相次いで検出された。特に、平田遺跡においては、建物と周溝の間に周堤が確認され (SB110)、低湿地における建物の在り方を知る上で重要な情報となった。これらの検出を契機に、同様の調査事例は急増する。村上市道端遺跡〔前川ほか 2005〕、胎内市西川内南遺跡〔野水ほか 2005〕、三条市古津川遺跡〔田村ほか 2008〕、長岡市・燕市五千石遺跡〔加藤ほか 2009、松島ほか 2010〕、上越市吹上遺跡〔笹澤ほか 2006〕、子安遺跡〔野村ほか 2009〕等、沖積地における多数の検出事例が報告された。特に、子安遺跡では弥生時代後期～終末期の周溝を有する建物 12 棟が検出され、それらの変遷観が具体的に説明されており注目される。周溝は、全周を巡るもの・断続的に巡るもの、均整な形状に掘られたもの・不整形に掘られたもの、深いもの・浅いもの等、実に多様である。そこで、北陸地方における周溝を有する建物を詳細に検討した〔岡本 2003・2006〕を参考に分類・変遷を検討し、姫御前遺跡 SI216 の位置付けを行いたい。

新潟県内の沖積地における主要な周溝を有する建物を第 63 図に示した。ここでは、糸魚川市姫御前遺跡、上越市津倉田遺跡・子安遺跡・前田遺跡〔小島ほか 1996〕・荒所遺跡〔新保 1998〕、柏崎市下谷地遺跡、長岡市五斗田遺跡、長岡市・燕市五千石遺跡、三条市古津川遺跡、新潟市正尺 C 遺跡、五泉市寛下遺跡〔山崎ほか 2004〕、胎内市西川内南遺跡、村上市道端遺跡の 13 遺跡、29 の建物を検討対象とした。このほかにもいくつかの事例が見られたが、時期が明らかでないもの、全体像が不明瞭なものであり、検討の対象から除外した。しかし、大局的な傾向を読み解く上では、支障のない範囲での集成となった。

第 63 図では、縮尺・方位を揃えて、新潟シンボ編年に沿うように周溝を有する建物を集成した。この図から分かるとおり、弥生時代中期～古墳時代前期までをとおして、広溝式平地建物が大半を占め、一部で広溝式竪穴建物が認められる。一方、狭溝式に分類できるのは、9～10 期に位置付けられる五泉市寛下遺跡 SD32 があるが、調査範囲の制限で全体像を把握できない。また、2 期に位置付けられる大慶寺御経塚 1 号竪穴建物〔小田ほか 2006〕、古津八幡山遺跡 SI03N02 〔渡邊ほか 2001〕では、台地上で狭溝式が検出されている。沖積地における周溝を有する建物との関係は明らかでないが、北陸地方の状況を鑑みれば、狭溝式が沖積地に存在しても不思議ではない。

しかし、沖積地においては広溝式が主体をなすことは明らかである。周溝の形態は土坑型が主体で、開口型・囲繞型が存在する。囲繞型についてはほかと区別することができるが、開口型と土坑型とは区別が困難なものがある。また、遺構検出面を下げ過ぎてしまえば、本来、囲繞型や開口型であったもの



第 63 図 新潟県内の沖積地における周溝を有する建物の変遷

が、土坑型となってしまうことも考え得る。一方、明らかに円錐型と認識できる吉津川遺跡SD310の周溝は深く、断面形は凹凸のない弧状を呈する。これに対して、土坑型は浅く、底面の凹凸が顕著な傾向にあり、結果として凹凸が著しい平面形態で検出される。断面形態を併せて検討することで、[岡本 2003・2006] はより効果的な分類となろう。

周溝の規模は、外周で11～25mと幅があるが、15～20mのものが大半である。一方、小型の子安遺跡SB21068や荒所遺跡SX122は、これらと比べると著しく規模が小さく、むしろ建物の壁溝と理解したほうが良さそうである。同様の建物は各時期に散見され、周溝を有する建物の一つとして認識されることがある。柱間から建物規模を推測し、壁溝と周溝を分別する必要があるだろう。また、周溝を有する建物の規模は、集落内のほかの建物よりも明らかに大きく、弥生時代終末期に入ると、1遺跡で1～2棟しか検出されていない。このことから、集落において中核的な建物と位置付けることができる。

主柱配列の変遷は理解しやすい。弥生時代中期に円形であったのが、弥生時代後期に入ると六角形または五角形となり、古墳時代前期に入って方形になる。柱の本数は、この配列と対応する。弥生時代中期が多主柱であるのが、後期には6本または5本、弥生時代終末期には4本となる。また、2本柱からなるものも散見される(子安SI20968・五千石SI110)が、主体的ではない。北陸地方では、弥生時代「中期では多主柱であり、後期には4本主柱に定型化する。」[楠 1989]とされているので、新潟県内の建物は1段階遅れて変化すると理解できる。

建物のプランは、主柱配列と対応するように変化する。弥生時代中期に円形であったのが、後期には隅丸多角形に変化する。子安遺跡SX20939・SI20969・SI20900は一見、円形にも見えるが、柱穴配列に沿うような隅丸多角形と見ることができる。同様の状況は、丘陵上に立地する上越市下馬場遺跡の竪穴建物SI7(2期)にも認められ[尾崎 2005]、これと関連付けて理解することができよう。弥生時代終末期に入ると一変して方形になる。そして、方形を基調とする在り方は、10期まで連続する。弥生時代終末期より見られる方形プランは、胴張りの隅丸方形から、各辺が直線的な隅丸方形へと変化する様子が見られる。この変化は、弥生時代中期の円形から、弥生時代終末期以降の方形へ変化する過程を示すものと考えられる。

建物構造は、基本的には平地建物であるが、弥生時代後期のみ竪穴建物が認められる。しかし、先述のとおり、平地建物と竪穴建物の相違は、調査の過程で認識に相違が生じることもある。遺構の認識が困難な沖積地で検出されていることを勘案すれば、厳密に両者を区別することによる効果を望むのは難しい。しかし、新しい時期になるにつれて平地建物に変化していくことは確実に見られる。

これらの傾向を[岡本 2003・2006]と比較すると、広溝式土坑型が各期とも卓越し、周溝の変化がほとんど見られないことが特徴的といえる。一方、建物構造は、変遷観をより明瞭に捉えることができた。ただし、取扱った事例が少ないことによって導かれた傾向である可能性も残る。今後の資料の増加によっては、変遷観を見直す必要も考えられようが、大局的な傾向は変更を要さないと見られる。

	建物構造	建物プラン	柱の配列	柱の本数	周溝の幅	周溝の形状(多い順に列記)
弥生時代中期	平地	円形	円形	多数	広溝	土坑型5・開口型1
弥生時代後期	竪穴・平地	隅丸多角形	六角形・五角形	6または5	広溝	開口型2・土坑型1
弥生時代終末期	平地	方形?	方形	2・8?	広溝	土坑型1・開口型1
古墳時代前期前葉	平地	隅丸方形(胴張り)	方形	4	広溝	土坑型3・円錐型4・開口型2
古墳時代前期中葉	平地	方形(直線的)	方形	4(2)	広溝・狭溝	土坑型3・円錐型1・開口型1

第32表 新潟県内の沖積地における周溝を有する建物の変遷

ここで改めて姫御前遺跡 SI216 を、上記の変遷観の中で確認してみる。SI216 は、[岡本 2003・2006] の分類で言う「広溝式平地建物」で「土坑型」に相当する。ほかの土坑型と比べると、それぞれの土坑の規模が小さいが、建物の全周（南側は調査区外のため不明）を断続的に巡っていることが分かる。建物形態は、胴張りの隅丸方形で、弥生時代から古墳時代への移行期に特徴的な形態といえる。また、4本の支柱は、建物形態と対応関係にあると言える。このように SI216 は、弥生時代終末期の周溝を有する建物の典型例の一つと言える。

C 竹花遺跡・姫御前遺跡における弥生時代終末期～古墳時代前期の水田耕作

(1) 糸魚川平野の開墾と水田耕作の開始

糸魚川平野においては、古墳時代の幕明け頃に集落が増える。集落を支えた水田が、これと同時に急増することが想定されるが、自然科学分析によってそのことを具体的に裏付けることができた（第V章1・2）。しかし、鬱蒼としたスギ林に覆われた平野部を開墾するには、相当の労力と時間を要したと考えられる。したがって、遺跡が増える時期よりも前に、開墾が始まったと考えるべきである。姫御前遺跡の流路から出土したスギの年輪解析によって、枯死年代がAD60～90年頃の30年ほどに集中することが明らかとなった（第V章6）。一斉に枯死するには自然的要因と人為的要因が考えられるが、その後の急速な開発を勘案すれば後者を想定すべきであろう。この時期の遺跡は、平野部・丘陵部ともほとんど見られず「謎の時代」とされている[木島 2010]。恐らくは本格的な集落・水田を形成する以前に、開墾する集団が先行して入植したと考えられる。その拠点は糸魚川周辺の何処にあると思われるが、現在のところ発見されていない。

本格的な水田耕作が開始されたのは、弥生時代終末期頃（新潟シンボ編年5期）からである。この時期になると、糸魚川平野に遺跡が点在するようになる。姫御前遺跡では、当該期の明らかな遺構は発見されていないが、遺物が散見される。このことから、周辺に集落が存在する可能性が高い。また、SI216は廃絶時期が6期であり、それ以前に構築されたと考えられる。竹花遺跡においては水田耕作が開始され、畦畔が構築されている。生産域が認められることは、耕作者が居住する集落が存在したことのも裏返しでもある。

古墳時代前期中葉（8～9期）には、竹花遺跡に本格的な畦畔が構築される。姫御前遺跡の集落はこれより早い弥生時代終末期（6期）から営まれているが、この段階の畦畔は見つかっていない。しかし、5期に相当するIV2層から8・9期の畦畔の構築面にかけて、植物珪酸体が連続的に検出されており、姫御前遺跡で集落が築かれた6～7期にも、竹花遺跡で水田耕作が行われた可能性が高い。

その後、流路の変化等によって低地部が水に浸かるような環境に一変した。低地にはアシ原が一面に広がるような景観が形成され、草本質泥炭層が堆積したが、この段階で水田耕作は行われていない。環境の激変により、一時的に耕地が放棄されたのであろう。草本質泥炭の堆積後、姫御前遺跡の流路岸周辺では、スギの枝や幹を沈める地盤改良を行い、水田化したようである。水田遺構は認められなかったが、植物珪酸体の分析結果からは草本質泥炭層の上位層で水田耕作が行われたと考えられ、水田耕作を行うために地盤改良されたと推測できる。

(2) 畦畔の構造

竹花遺跡から検出した畦畔は、いずれも土地の区割りを示す「大畦畔」と考えられる。水田耕作に伴う

ものであるとすれば、この内側に「畦畔」が存在したことも想定できるが、今回の調査では検出できなかった。「低湿地であればこそ地形が低平になりやすく、小区画をとらなくとも容易に滞水させることが可能」[坂井 1981] であり、小区画そのものが存在しないことも想定できる。いずれにせよ、植物珪酸体分析の結果を踏まえれば、検出した畦畔が水田耕作に伴うものと考えられることができる。また、層面が著しく乱れていること、ヒトや動物の足跡が見られることも、湿地で作業が行われたことを裏付ける事象と言える。畦畔の構築方法は、大きく2種類認められる。

第一は、盛土によって構築される「盛土畦畔」であり、SX215・39が相当する。軟弱地盤であるため、盛土中に板材等の木製品や自然木を混入することが特徴的である。盛土の沈降を防ぐことを目的とした、芯材と考えることができよう。芯材を盛土中に混入することは、漏水を招きかねないが、一帯が湿地帯であったため、湿地に近い状態であったと考えられる。したがって、漏水のリスクよりも、安定した足場の確保を優先させたのであろう。また、盛土畦畔には矢板や杭等の木材が打ち込まれていた。滞水する状態では、水によって畦畔が浸食され、崩落する。矢板や杭を打ち込むのは、盛土だけの畦畔を補強することには、その目的があると考えられる [坂井 1981]。このように、「水田に伴う畦畔は杭や矢板・板材等で補強して、土砂の流出を防いでいる。(中略)そして、畦畔の上面には板材を敷き砂等を置いて、通行の便が図られている。」[工業 1991] といえる。水田の区画という性格のほかにも、畔道のような性格も併せ持っていたと考えられる。

また、SX215においては、畦畔の中央に杭が連続的に打ち込まれていた。民俗事例を参考にすると、湿地で畦畔の役割を果たした「柳株を起こすと、底に境杭のあるのが普通であった。」[金塚 1970] という。また「アゼの部分はヨシヤチを刈り残してアゼとして、楊柳を植えて境にするか、杭を打って印とした。」[佐久間 1982] という。いずれも、蒲原平野における湿地の事例ではあるが、竹花遺跡の畦畔の高さは低いため、灌水した場合の田境の印と考えることもできよう。

第二は、板材等を敷き詰めて足場とする「木畦畔」(木道状道構)であり、SX33・34・119及び姫御前遺跡 SX564が相当する。足場板には、建築材等の大型部材を転用することを基本とする。板が沈下ないように枕木を敷き、要所の両側に杭で固定するものが見られた (SX119)。杭は、板材が左右に振れることを防ぐ目的があったと考えられる (SX33・SX119)。また SX119 においては、枕木を設置する際、地面に突き刺してから折り曲げていた。このことにより、足場板の水平を維持し、枕木そのものを固定する効果も見込まれる。また、足場板の下部に自然木が多く認められたが、沈下防止のための粗朶と考えられ、地盤が軟弱であるがゆえに行われた措置と見られる。SX33 においては、足場板が何重にも重なる様子が観察された。IV 1 層の堆積以前に形成され、IV 1 層の堆積後まで継続したようで、この間に沈んだ足場板の上に、新たな足場板を重ねられたと理解できる。

また、SX34 は板材を敷き詰めるものとは異なり、自然木を利用したものである。場合によっては扁平材または削り出し材を利用した可能性があるが、人為的な加工によるものかは定かでない。しかし、足場を確保するという意味においては、板を敷き詰める畦畔と同様の性格を想定できる。他の木畦畔のように、遺物が多数出土するような状況も見られないが、SX33 とほぼ平行関係にある。このような自然木を利用して足場を確保する事例としては、刈羽村西谷遺跡に類例があるが、盛土の芯材として利用されている [滝沢 1992]。盛土の有無という点では異なるが、自然木を利用する点においては共通する。いずれも大区画湿地の大畦畔として位置付けることができ、構造はやや異なるものの、目的は同じであったと考えられる。

畦畔または地割が構築されたと言える。そして、11～12期には主軸が東西方向からずれるが、同様の主軸を意識しているようである。

(4) 畦畔構築時の祭祀行為

畦畔の構造に関わらず、足場板や盛土の下位から遺物がまぎらまぎら出土した。遺物の出土は畦畔部分に限定でき、耕作面からの遺物の出土はほとんど見られなかった。畦畔の下位に埋め込まれた遺物には、土器、石器（横刃形石器）、石製品（勾玉未成品・ヒスイ原石）、木製品（建築材・農具等）、自然木、礫がある。このような遺物の出土状況は、長野県川田条理遺跡〔伊藤ほか2000〕等、善光寺平の水田遺跡と良く似る。

このうち建築材等の大型部材や自然木は、畦畔の芯材や足場板として理解できるが、ほかの遺物を同様に理解できるかといえは疑問が残る。特に、木製農具が畦畔最下部から、埋め込まれたかのような状態で出土した点は注目される。弥生時代中期後半以降、鉄製農具の出現とともに農具の所有は、首長のもとに集中されたと考えられている〔黒崎1970〕。首長のもとで管理されたであろう農具を、建築部材（庶材）や自然木の埋め込みと同様に取扱うことは適当と言えない。破損品であればまだしも、完形品や未成品も含まれる。特に、近隣では入手困難なアサダを素材とする農具を、意図もなく埋め込むことは考え難い。そして、除草や穂積みに利用されたことが想定される横刃形石器〔久田1999〕や田下駄も出土しており、農具が特徴的に存在することには注意を払うべきである。

また、畦畔の範囲のみに土器片が含まれる事例は古代にも存在するが、その目的は明らかでない。特にSX33の南北軸と東西軸の交点付近下位からは、高杯（309）がほぼ完形（残り部分は調査区外に残存する可能性あり）の状態で出土した。これと隣り合わせるように、鍬の身（520）と柄（523）がセット関係で出土した（図版61・62）。SX215では、遺存率が比較的高い丸底壺3個体（291・292・294）が認められた（図版58）ことも、集落における器種構成とは異なり特筆される。

このように考えると、芯材以外の遺物は、畦畔にあえて埋め込まれたと理解したほうが適当と考えられる。特に、農具（木製農具・田下駄・横刃形石器）と遺存率が高い土器（高杯・丸底壺）が含まれることは、偶然の結果とは考えにくい。水田構築時に、安全や豊作等を祈願して、これらが意図的に埋め込まれたと考えたほうが合理的である。類例の増加を待つて検証する必要があるが、可能性の一つとして提示しておきたい。

なお、姫御前遺跡18年度報告においては、貝殻状剥片が古墳時代前期の遺物である可能性が高いことを指摘した。このことについて批判的な意見もあるようだが、竹花遺跡においては古墳時代前期の遺物のみが埋め込まれた畦畔からも出土した。畦畔以外の地点から遺物は出土しておらず、それを偶発的な混入と理解するほうが不合理である。玉作技術を有する集団が、石材を効率的に利用したとすることは想像に難くない。伝統的に玉作が行われた地域において、同様の石器製作技術が継続されたものと理解すべきであろう。

(5) 蛇行する用水路の工夫

用水は、丘陵部から流れ出る河川から引き込んだと考えられる。丘陵部から遺跡が築かれた平野部までの距離は短く（第11図）、湧水地点から水田までの距離が短い。「湧水は水温が低いために、そのまま水田へ導くことはできないので、一定時間溜め置いたり、ある長さをもった導水路をつけて水を温める必要があった。」〔工業1991〕とされる。

このような視点で竹花遺跡・姫御前遺跡における溝を観察すると、蛇行するものが顕著に見られる。中でも姫御前遺跡SD520では途中で井戸状の深い穴が2か所(SX555・SX556)で設置されていた。この穴は、覆土が他の遺構と異なり、遺物が出土しなかったことから、人為的な掘り込みでない可能性もあるが、両者とも溝の中軸上に位置し、偶然に重複したとは言えない。これを人為的な掘り込みとすれば、水温を上昇させるために設けられた溜井であった可能性が考えられる。また、溝を蛇行させることは、水田に至るまでの距離を長くし、かつ水流を緩やかにする効果がある。あえてこのような造作を行うことで、用水の水温を上昇させたのであろう。また、SD520と水田域と考えられる低地部との境界付近には堰あるいは導水のための施設と見られる板板列SX563・SA559が認められた。これもまた、水温や水量を調整するための施設であった可能性が考えられる。このように溝をあえて蛇行させたことは、用水路として機能させるための工夫といえよう。

これらの用水路と見られる溝は、いずれも8～9期に属し、規則的な畦畔が形成された時期と一致する。8～9期頃に大規模な土地区画が行われ、生産性の高い耕作が行われるようになったと考えられる。

(6) 姫御前遺跡流路埋没範囲における地盤改良

姫御前遺跡で検出した流路は、弥生時代以前に流れていた旧連台寺川と見られる。流路が大きくカーブする内側部分に相当する6区SRでは、土砂の堆積によってIV下層が堆積した弥生時代終末期頃から流路そのものが北側に移動したと考えられる。すなわち、IV下層には火山灰が流れずに残っていたことから、この堆積段階で水流のある流路から湿地のような環境へ変化したと考えられる。その後は、湿地にアシ原が広がるような景観が形成され、草本質泥炭(IV上層)が堆積したと考えられる。草本質泥炭(IV上層)の厚さは20～40cmにも及び、地盤が極めて軟弱であったことは確実である。一方、IV上層の堆積直後から水田耕作が行われたことが植物珪酸体の分析から明らかになっている。この土地を利用するとすれば、何らかの地盤改良が必要であったと考えられる。自然木に混在するように検出した木柱群SX564(図版25・114最下段左)は、その可能性を裏付けている。

草本質泥炭は、竹花遺跡では新潟シンボ編年11～12期に位置付けられる畦畔SX33を覆うように検出したことから、古墳時代中期初頭以降に堆積したと考えられる。一方、流路の草本質泥炭に多数含まれる自然木の枯死年代はAD60～90年頃であり、草本質泥炭の堆積年代とスギの枯死年代とは100年以上の相違がある。また、スギの枯死年代は、30年ほどの間に集中しており、先述のとおり開墾に伴って伐採された可能性がより高い。しかし、周囲にはスギの樹根は2か所で認められたのみであり、多数出土した幹の本数とはアンバランスであった。また自然木には伐採痕は認められず、伐採時のチップも見られなかった。このような状況を合理的に理解する上で参考となる民俗事例がある。

糸魚川市青海地区の「山ざわと海岸砂丘にはさまれた所—青海のセリゴ、寺地のフカダ、今村のフカダ等は、ずっと近年まで深い沼田・深田であった。沈下地帯に湛水と泥の堆積があつて、これを田地に利用したのである。身を没にする深い泥田のため、青杉の枝を敷きこんで、その上に足を置いて田植えをしたり、フカダ板(幅一尺五寸×長さ一五尺×厚き一寸)にのったり、稲舟を使ったりした」[青木1966]。また、県内の山間部の開田においても、「埋め所が深い場合は、ボイ(柴木)をとところろに入れて層をつくる。」[佐久間1982]といった工夫が認められる。

いずれも地盤の悪さがゆえに、枝を沈めて足場の安定を図ったことが分かる。自然木のうち、草本質泥炭の上位からは幹が、下位からは枝が多数出土する状況にあった。スギの枝を下に敷き、その上に幹を重

ねること地盤の安定を図ったのであろうか。下位から出土したスギの枝の年代測定は行っていないが、幹と比べて残存状況が良好であったり、地盤改良の年代を反映する可能性がある。

蓄骨としたスギ林を開墾すれば、膨大な数量のスギの残材が発生する。スギは加工しやすく、また燃料材としても適するため、最大限に利用されたであろうが、それでも有り余る状況にあったことは想像に難くない。むしろ、スギの残材は何処かに集積されていたと考えるべきであろう。こうした残材を、湿地の地盤改良に利用したと考えるべきかもしれない。このように考えれば、幹に対して樹根が少ないこと、伐採の痕跡が認められないことを合理的に理解することができる。年代の離隔という重大な問題が残るが、可能性の一つとして提示しておきたい。

(7) 居住域と生産域の関係

姫御前遺跡・竹花遺跡の調査では、集落域と生産域を対のかたちで検出することができた。姫御前遺跡の西端と竹花遺跡の東端では約150m離れ、明瞭な居住域との距離となると350m以上離れる。連続的に調査していないため相互の関係について十分に言及できないが、両者は時期的に重複することから併存したと見られる。調査範囲が狭小であるものの、居住域と生産域をセット関係で検出したことは、当時の景観を知る上で貴重な情報となる。現在は、一面、平坦な平野に見えるが、今回の調査では旧地形が起伏に富むことが分かった。そして、居住に適した地域と、水田耕作に適した地域が存在し、それぞれ使い分けていることが明らかとなった。

また、姫御前遺跡の中でも5区東端が最も高く、6区に向かって徐々に低くなり、6区西端までの間で約1mの高差がある。6区からは、居住域を示す遺構を検出しておらず、水路と考えたSD520や地盤改良が行われた水田の存在を考慮すれば、居住域と生産域の境界を示す可能性がある。5区と6区の間には旧蓮台寺川が横断することから、ここが土地利用における重要な変換点であった可能性が高い。

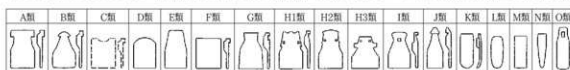
D 竹花遺跡における木製農耕具の形態組成と地域性

竹花遺跡からは大量の木製品が出土したが、古墳時代前期の畦畔から出土した農耕具類が特に注目される。新潟県内で最も充実した出土事例の一つとあり、器種構成は直柄平鍬・又鍬・一木鋤・払い鋤・鋤鍬柄等、多岐にわたる。以下、器種ごとの特徴を述べ、ほかの遺跡の類例と比較検討したい。なお、新潟県における当該期の農耕具の出土例が少ないため、隣接する富山県の資料も検討の対象とした。

(1) 農耕具の種類と形態的特徴

直柄平鍬

直柄平鍬はSX215出土の469、SX33出土の520が該当する。樹種はアサダ属が使用されており、残存形態から判断して狭鍬としてよいであろう。469は一定の身幅を持ち、上方には円孔を持つ着柄隆起が見られる。これに対し520は上方が広く、刃部に向い身幅が狭く作られる。着柄隆起は上方部に見られ、方形となる。ともに着柄隆起の作り出しは高く、明瞭な段をもつ。また北陸地域出土の直柄平鍬



第65図 直柄鍬の分類

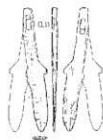
は、[石川 2008] によって A～O 類に形態分類されている (第 65 図)。石川分類によれば、469 が L 類、520 が N 類に該当する。ほかの遺跡の出土例として新潟県内では長岡市大武遺跡 [永井 1996]、佐渡市千種遺跡 [新潟県教育委員会 1953]、胎内市土居下遺跡 [細井 2006] 等で確認できる。大武遺跡では L 類、もしくは M 類に比定される狭楾 (第 67 図 24) が出土している。着柄孔は円形で明確な段を持たず、緩やかに盛り上がって厚みを増す作りとなっている。千種遺跡では平楾の未成品 (第 67 図 8) が出土しており、着柄隆起等は見られないが、形態的には広楾と考えるとよいであろう。また、千種遺跡では新潟県内では珍しい泥除けが認められる。土居下遺跡からは着柄隆起及び上方に泥除け装着のための方孔のみ残存する広楾が出土している。

横楾

464・519 の 2 点が出土した。464 は片側縁が欠損しているが、台形の平面形態を持つ。中央上方には円形の柄穴が穿たれているが、明確な隆起は見られない。519 は上方が欠損しており、欠損部中央に柄穴の痕跡と見られる凹みを確認できる。平面形は台形を呈し、逆三角形の隆起部を上方から刃部にかけて作り出している。樹種は 464 がスギ、519 はアサダ属である。県内では土居下遺跡 (第 67 図 23) に類例が認められる。上方が欠損し柄孔は確認できないが上端から刃縁に続く隆起が見られ、側面は斜めに広がる形態となる。

又楾

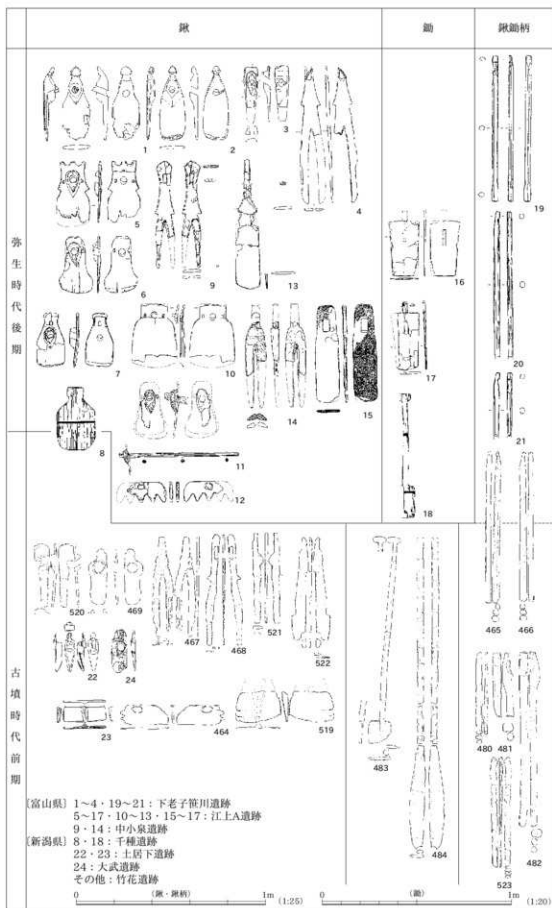
467・468・521・522 の 4 点が出土した。467・468・521 は軸部から刃部にかけて特徴的な突起を持つナスビ形曲柄楾である。このうち 468 は軸部に長円形の孔が見られ、柄を差し込んだものと考えられる。軸部に方形柄穴を持つ形態は北陸地域で特徴的に見られるもので、富山県中小泉遺跡 [富山県埋蔵文化財センター 1984] の例から弥生時代後期には用いられていたと見られる (第 67 図 9)。また、この種の形態は、北陸地域を経て関東地域にも伝播しており、群馬県の新保遺跡 (第 66 図) [佐藤 1986] 等で類例が確認されている。[樋上 1994] はこうした特徴を持つ方形柄穴のナスビ形曲柄楾を、北部九州型直柄平楾と山陰のナスビ形曲柄楾が融合して創出されたものとしている。これに対し 467・468・522 は軸部の楾表が丸みを持ち、反対側の楾裏が平坦に作られ、断面形は蒲鉾形となる。楾表に段や切れ込みは見られないが、緊縛によって柄を固定するものと考えられる。樹種はアカガシ亜属、アサダ属である。県内ではこのほか胎内市西川内南遺跡 [野水 ほか 2005] で出土例が見られるが刃部のみであり、「又楾か鋤」と報告され、器種は特定されていない。また、長岡市五千石遺跡 [駒形 ほか 2008] や南魚沼市北沖東遺跡 [飯坂 ほか 2006] では古墳時代後期のものが出土しており、ナスビ形楾が該期にも存続していることが分かる。



第 66 図 新保遺跡出土ナスビ形曲柄楾 (S=1:16)

鋤

483 は一本鋤である。先端が欠損しているが、ほぼ完成形で、断面が台形となる隆起を持ち、柄につながる。木取りに影響されたためか柄はねじれている。黒崎直氏は一本鋤の中でも身と柄がほぼ一直線に伸びるものを「直伸鋤」、湾曲した柄を作り出し、身と柄の間に角度が生じるものを「屈折鋤」としており、483 は典型的な屈折鋤と言える。県内では千種遺跡に類例 (第 67 図 18) が見られる。柄の握部は 483 と同様に T 字形に作られ、刃部から柄にかけて隆起は持たず直線的に繋がる直伸鋤である。また、長岡市五千石遺跡でも鋤 2 点が出土している。富山県江上 A 遺跡 [富山県埋蔵文化財センター 1984] においても鋤の出土例が見られるが、こちらは組み合わせ鋤である。484 は払い鋤と呼称されるやや特殊な農



第 67 図 弥生時代後期～古墳時代前期の農耕具

具である。一木から作り出され、柄から刃部までは明確な境は見られず、緩やかに広がり刃部が作られる。通常の鋤とは異なり、先端ではなく片側縁を薄く削り刃部としている。形状的には櫛、もしくは肩部の張り出しの弱い鋤等に類似する。こうした製品の中に、払い鋤として位置付けられるものがあると考えられる。樹種は一木鋤がアカガシ亜属、払い鋤がアサダ属である。

鋤鉄柄

465・466・480・481・482が鋤鉄柄である。県内では該期の鋤鉄柄の出土例は無いが、竹花遺跡例と類似した鋤鉄柄が富山県の下老子笹川遺跡〔町田2006〕(第67図19～21)で見られる。また、こうした鋤鉄柄が実際にどのような身に装着されるのかという問題がある。これまでの研究では、柄孔を持つ鋤鉄に差し込んで使用する、または突起を持つ部分の反対側平坦面に柄孔を持たない曲柄鋤の軸部を緊縛固定するという装着法が考えられている。これに対し〔山田1986〕は、これらの鋤鉄柄について鋤に差し込むものとしては482等先端の径が太すぎることや、緊縛固定と見た場合、鋤として用いるには鋭角すぎることを理由に、第68図のような鋤としての役割を持つ農具を提唱している。樹種はスギのみであるが、鈴木三男氏から農耕具の柄の可能性があると指摘を受けた451はアカガシ亜属である。



第68図 鋤の装着模式図

(2) 農耕具の地域的特徴

竹花遺跡出土の農耕具類を他遺跡出土のものと比較しつつ概観してきたが、まず直柄平鋤に関しては弥生時代後期から北陸地域で広く見られる柄孔両脇に泥除装着孔を持つ平鋤のH類の出土が見られないことが特徴的と言える。ただし、広鋤を再加工し、上記M類のような狭鋤として使用する事例〔石川2008〕もあるため単純に広鋤が用いられていないとは言えない。

ナスビ形曲柄鋤は、軸部に方形柄孔を持つ北陸型と呼ばれるものや、柄孔を持たない緊縛固定するものあり、弥生時代後期に位置付けられる下老子笹川遺跡・中小泉遺跡等の様相と類似する。このことから竹花遺跡出土のナスビ形曲柄鋤は、北陸地方の典型的な様相を示すと言える。

また、SX215からは盛土畦畔の下位から平鋤が出土した。畦畔構築時に埋設したものと考えられるが、〔樋上2000〕はこうした事例について、静岡県内の水田で多く見られるとし、水田耕作に用いられたものとするよりは、水田の造成や水路の掘削に使用されたものが畦畔の構築材として再利用されたものとしている。農耕具の研究は、形態や樹種の検討に終始するものが多い。農耕具の出土が溝や水路に廃棄されたものが主体を占める現状においてはやむを得ない面もあるが、今後は出土状況等も加味して検討することが求められる。

(3) 農耕具の樹種と形態

竹花遺跡における農耕具の樹種は、アカガシ亜属・アサダ属・スギがある。農耕具の用材は、アカガシ亜属が主体を占めるが、時期が下るにしたがって、それ以外の樹種も選択されるようになっていくとされる。先述の群馬県新保遺跡を例に挙げれば、出土した150点以上に及ぶ農耕具のうちアカガシ亜属の利用率は弥生時代で23%、古墳時代では13%となり、代替材としてコナラやクスギが使われている〔工業・黒崎1994〕。北陸地方では石川県で同様の傾向が見られるが、それまでの伐採や集落構築による需要の増加により、農耕具の良材であるアカガシ亜属の入手が難しくなったことが一因とされる。

姫御前遺跡 18 年度調査区の花粉分析では、アカガシ亜属が古墳時代前期前葉の V 層では 8%、古墳時代前期中葉の III～IV 層では 3%～1.3%と減少傾向にある。竹花遺跡ではこうした傾向が見られないが、姫御前遺跡 20 年度調査区でも水田の拡大に伴いアカガシ亜属が減少している。この減少傾向は、アカガシ亜属の利用に伴うものであろうか。

アカガシ亜属は農耕具に使用されているが、むしろアサダ属やスギの積極的な利用が特筆される。スギの利用は、入手が容易であったことによると考えられる。また、スギは木理が通り、割裂性が高く加工しやすいといった利点から新潟県域では広く用いられており、土居下遺跡でも大足に利用されている。アサダ属が農耕具に用いられた事例は少ない。長野県では古墳時代中期～後期にアサダ属が多く見られるが、管見の限り新潟・富山県域ではアサダ属は認められない。形態的な観点から見ると、竹花遺跡の農耕具は瀬戸内・北陸的な系譜であるのに対し、長野県の農耕具は東海系であり、こうした樹種選択が中部地方からもたらされたとは考えにくい。また、石川県ではアカガシ亜属の代替品としてコナラ属が用いられているが、竹花遺跡ではコナラ属を用いた農耕具は見られない。

このような状況を鑑みれば、竹花遺跡から出土した農耕具の樹種構成は、周辺地域の様相と比べると異質と言える。あるいは他所からの搬入品である可能性も考えるべきであろう。このような樹種選択を、竹花遺跡における特殊性と理解すべきか、地域性と理解すべきかは検討の余地がある。いずれにせよ新潟県内、ひいては北陸地方全体で見ても弥生時代～古墳時代の農具の出土事例は少なく、形態組成や地域的特徴は必ずしも明らかでない点が多い。出土事例の増加を待って、検討する必要がある。

E 姫御前遺跡における玉作

姫御前遺跡では、2 か年にわたる調査で弥生時代後期～古墳時代後期にかけての遺物が出土した。調査区間で土器の年代が異なり、これに対応するように玉類の石材利用に変化も見られた。18 年度調査区においては、古墳時代前期中葉(8～9 期)の土器に伴い、滑石製の玉作関連資料がまとめて出土した。一方、20 年度調査区では弥生時代終末期～古墳時代初頭(6～7 期)の土器に伴いヒスイ・緑色凝灰岩を主体とする玉作資料が認められた。7 期～8 期頃に、ヒスイ・緑色凝灰岩の利用から滑石の利用へと大きく転換したことが想定される。この流れは、中期以降の滑石製模造品の大量生産の基盤となったと考えられる。

また、ヒスイといえば、緑色をなすものが一般的であるが、実際には多様な色調のものが存在する。姫御前遺跡からは青色のヒスイが複数出土した。緑色のものと比べれば圧倒的に数が少ないが、SI216 の P245 における出土事例(398)、地山に突き刺さるような状態での出土事例(18 年度報告 343)を考慮すれば、宅地造成時の盛土から混在したとは考えられない。玉作の素材として認識のうえ、搬入していることは確実と見られる。これまで緑色をなさないため、石質名が誤認されていることも考え得る。青色のヒスイの利用についても、今後、注意が必要である。

2 中 世

A 姫御前遺跡・竹花遺跡から出土した中近世陶磁器の組み合わせ

姫御前遺跡・竹花遺跡からは II a 層・II b 層から、中近世陶磁器が 5,287 点出土した(第 33～37 表)。1m²当たりの土器・陶磁器の点数は、竹花遺跡が圧倒的に多く、離れるにしたがって徐々に減少する(第 69 図)。このことから、土器・陶磁器の供給源は、竹花遺跡により近いと考えられる。ここでは、主に図

化することができた資料を用いて、該期の陶磁器の組み合わせの推移を見ていきたい(第70・71図)。

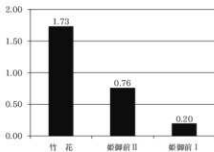
両遺跡は、層位がおおむね共通し、同一層位中から同時期の陶磁器が出土した。Ⅱb層からは15世紀～16世紀初頭を主体とする遺物群、Ⅱa層からは17世紀前半を主体とする遺物群が出土した。両遺跡から出土した陶磁器は遺構内からの出土ではなく、すべて遺物包含層中からの出土である。したがって、廃棄時期ごとの詳細な編年は明らかにし得ない。そこで、ここでは両遺跡から出土した中近世陶磁器を一括して取り扱うこと

とし、各遺物の生産年代を基軸に年代観を整理することで、両遺跡を含めた広範な陶磁器流通及び使用状況を明らかにしたい。なお、両遺跡の層別陶磁器組成の統計結果と所見は、第33～37表に示した。

両遺跡において、一定のまとまりが見られるのは14世紀後半からである。供膳具では、古瀬戸後期様式Ⅱ期(1380～1420年頃)に比定される瀬戸美濃の平椀や皿類が定量見られる。その他、ピロースクタイプと呼ばれる口縁端部を外反させる白磁があり、器高が低く、胴部下半に指頭丘痕が残る手づくねの土師皿等がある。また、瀬戸美濃古瀬戸後期様式Ⅰ期に比定される小天目や船載天目も見られるが、伝世する可能性もあり、該期に使用されたものかは判断し兼ねる。貯蔵具や調理具では珠洲がほとんどで、吉岡Ⅳ期(14世紀第1～3四半期頃)に比定される片口鉢や壺・甕類が定量見られる。以上、14世紀後半においては、供膳具・調理具・貯蔵具等の各用途の陶磁器が認められ、両遺跡の活動開始時期とすることができよう。ただし、青磁・白磁・青白磁・壺・甕類等で、14世紀前半以前の陶磁器類がわずかに出土している。これらは数量が少なく、精品(輸入陶磁器)ないしは耐用年数の長いもの(壺・甕類)である。両遺跡では、土師皿や播鉢等、耐用年数の短い製品に該期の遺物を含まないことから、14世紀前半以前の活発な土地利用は認めがたい。よって、これらの遺物群については、14世紀後半以降に伝世したもの、または混入品と考えたい。

15世紀前半代に入ると一層、陶磁器の質・量・種類ともに充実する。供膳具では、進弁の崩れた青磁椀や、端反で無文の青磁椀が多く見られる。特に後者は輸入陶磁器の椀類の中でも主体をなす。白磁は椀類が姿を消し、大型の内湾皿が見られるがその数は多くない。新たに青花の椀が登場する。漆器の椀皿は、[春日2000]の9～10期の特徴を有し、14世紀～15世紀代に比定される。瀬戸美濃では引き続き天目椀・平椀・皿類が見られる。なお、瀬戸美濃製品の中には無釉のいわゆる「山茶椀」(東濃系)が若干出土した。第9～11型式まであり、14世紀中頃～15世紀代に比定される。山茶椀は県内の中世遺跡でも散見されるが、複数型式に跨り、まとまって出土した例は稀であり、遺跡の性格・地域性を考える上で注目される。土師皿は手づくね成形からロクロ成形へと変化する。貯蔵具と調理具に関しては、引き続き、珠洲製品(V期)が大半を占め、壺のバリエーションが増える。甕では、越前(木村Ⅲ-3期)の大甕が1点出土しているが、まとまりを欠き、流通の主体を占める状況にはない。鉢では、瀬戸美濃の灰釉を施した製品が散見される。15世紀～16世紀にかけては瓦器が搬入されている。瓦器は城館や寺院等に特徴的に認められる遺物であり、両遺跡の性格を考える上で注目すべき遺物である。なお、天目椀や香炉・茶入・瓶・花瓶・合子・水注等、茶や香、座敷飾り等に使用される奢侈品も多数出土しており、瓦器の出土量と合わせて両遺跡の性格や使用者の階層を示す資料といえる。

15世紀後半に至っても、質・量・種類ともに引き続き充実している。15世紀代が両遺跡にとって、最



第69図 各遺跡における1m²当たりの土器・陶磁器出土破片数

地域	分類	産地	供膳具				調理具 鉢 鉢 鉢 (片口鉢)	貯蔵具				その他				不明	合計				
			天目	柄	皿	杯		鉢	鉢	徳	風	香砂型	赤入	蓋	右明皿			火入	風鈴 火鉢	押鉢	私用
中世	磁器	白磁	2	5	1												1	9	2231		
		白磁	95	16										3				6	120		
		白磁	8	32	6				1	1								4	52		
		青白磁		1										1					2		
		船形天目	5																5		
	陶器	李陵陶器		1	3														4		
		瀬戸美濃	35	20	97	1	14			5	33	13	3	1			4	8	234		
		珠洲						267										11	8	1122	
		越前																	4	72	
		石巻						9	59		6								6		
近世	磁器	天目			582			2										6	10	596	
		肥前系		5	6														3	13	63
		肥前系	10	11			1		3	1	1		1						3	31	
		越前瀬戸	2	5				3		5									3	18	
		瀬戸美濃																		0	
	陶器	京・石巻		1																1	
		越前																		0	
		越前																		0	
		京																		0	
		合計	40	144	757	8	0	15	281	916		35	17	3	2	0	0	4	0	25	47

第33表 中近世土器・陶磁器の産地・器種別出土破片数 (竹花・II b 層)

地域	分類	産地	供膳具				調理具 鉢 鉢 鉢 (片口鉢)	貯蔵具				その他				不明	合計				
			天目	柄	皿	杯		鉢	鉢	徳	風	香砂型	赤入	蓋	右明皿			火入	風鈴 火鉢	押鉢	私用
中世	磁器	白磁	2	1															3	383	
		白磁	19	3		1													1	24	
		白磁	1	9	1															11	
		青白磁																		0	
		船形天目	1																	1	
	陶器	李陵陶器		3										1						4	
		瀬戸美濃	12	6	32		2				1	4	3	1					1	62	
		珠洲						75											2	216	
		越前					1	11	17											29	
		石巻									5									5	
近世	磁器	天目			26														1	1	2
		肥前系	22	25	1		3													6	250
		肥前系	1	48	47		11	12	6	1	2			1						129	
		越前瀬戸	3	9				10			34								1	97	
		瀬戸美濃																		0	
	陶器	京・石巻		1	1										2			1		5	
		越前																		2	
		越前																		0	
		京																		0	
		合計	14	102	156	3	1	17	108	293		15	3	1	2	2	1	1	1	3	2

第34表 中近世土器・陶磁器の産地・器種別出土破片数 (新御前 I・II a・II b 層)

も中心となる時期といえる。供膳具では、青磁の錆のない崩れた蓮弁文碗と無文端反碗が引き続き見られ、そのほかに雷文帯を有する青磁碗も加わる。また、碗の他に皿も少量見られる。青磁皿では、無文端反碗とセットで流通した端反皿があり、碗と共通する蓮弁文のスタイルを有する皿も見られる。白磁では、やはり碗は見られず、内湾皿が多い。内湾皿の口径は前代に比べると小型化している。内湾皿の中には高台をアーチ状に削り込む製品も見られる。青花は器高の低い皿 B1 群が主体をなす。また、李朝の碗・皿類が少量認められるが、16 世紀代まで下る可能性もある。瀬戸美濃製品では、引き続き天目碗と皿類がある。土師皿は前代に見られたロク口成形に加えた手づくねの皿も加わる。貯蔵具・調理具に関しては、前代に引き続き珠洲製品 (VI 期) が主体をなす。ただし、前代に比して質は低下しており、量も少ない。そこで、取って代わるように越前が登場する。また、珠洲と越前の交代期に当たる該期に瓦質擂鉢が若干量出土している。鉢には引き続き、瀬戸美濃が用いられている。

16 世紀代に入ると、遺物量は極端に少なくなる。供膳具では引き続き瀬戸美濃製品が多く出土しているが、まとまって出土したのは大室 1 期 (1480 ~ 1530 年頃) までである。大室 1 期の皿にはタールが付

時期	分級	遺跡 所在地	供養具					渡用具		貯蔵具		その他							不明	合計		
			天目	瓶	皿	杯	壺	鉢	注 鉢 (注口跡)	瓶	壺	瓶	赤砂質 赤土	蓋	石明瓦	赤土	瓦形 瓦片	瓦片			瓦片	
中世	前期	青瓦		2	9														3	12	194	
		青磁		11	2										1					14		
		白磁				8	1													9		
		青白磁																		0		
		船載天目	1																	1		
	後期	李朝陶器																		1	2	
		瀬戸瓦器	7		15			2	1											1	33	
		珠洲							29	14	4									37	67	
		越前							1	9										9	10	
		石室									1									1	1	
近世	前期	土師瓦																	1	1	44	
		越前系	18	20	3														1	2	65	
		肥前系	40	54	1		8	9	6											1	126	
		越中瀬戸		14				7													66	
		瀬戸瓦器			2																1	4
	後期	京・信楽																			0	
		越前																			0	
		珠																			0	
		合 計	8	72	167	5	0	10	-41	94		16	5	1	0	0	1	4		10	435	

第 35 表 中近世土器・陶磁器の産地・器種別出土破片数 (船御前Ⅱ・Ⅱa層)

時期	分級	遺跡 所在地	供養具					渡用具		貯蔵具		その他							不明	合計								
			天目	瓶	皿	杯	壺	鉢	注 鉢 (注口跡)	瓶	壺	瓶	赤砂質 赤土	蓋	石明瓦	赤土	瓦形 瓦片	瓦片			瓦片							
中世	前期	青瓦		3	4	1															8	1959						
		青磁		79	20		2	3								1					3	9	115					
		白磁		5	44	6		3													1	5	62					
		青白磁																				1	1					
		船載天目	5																		1	10						
	後期	李朝陶器																				1	3					
		瀬戸瓦器	34	26	68			12													4	7	185					
		珠洲							347	14	3										17	11	2	1	1108			
		越前							6	36														3	1	46		
		石室																							1	7	8	
近世	前期	土師瓦																										
		土師瓦			337																							
		越前系		5	5	1																						
		肥前系		9	13			1	2	3		3																
		越中瀬戸			2	4			1			5																
	後期	京・信楽																										
		越前																										
		珠																										
		合 計	42	128	497	8	2	16	356	841		24	11	3	2	0	1	7	0	25	50	2013						

第 36 表 中近世土器・陶磁器の産地・器種別出土破片数 (船御前Ⅱ・Ⅱb層)

時期	分級	遺跡 所在地	供養具					渡用具		貯蔵具		その他							不明	合計							
			天目	瓶	皿	杯	壺	鉢	注 鉢 (注口跡)	瓶	壺	瓶	赤砂質 赤土	蓋	石明瓦	赤土	瓦形 瓦片	瓦片			瓦片						
中世	前期	青瓦		2	1																	3	179				
		青磁		10	5			1														1	17				
		白磁			10																		1	12			
		青白磁																					0				
		船載天目																					0				
	後期	李朝陶器			2																		1	3			
		瀬戸瓦器	4		14			2															1	23			
		珠洲							14	4	28													2	68		
		越前							3	9															1	12	
		石室																							1	2	
近世	前期	土師瓦																									
		土師瓦			43																						
		越前系		52	37	3		1																			
		肥前系		1	34	62			10	21	11	1	4														
		越中瀬戸			6	27			6			43															
	後期	瀬戸瓦器			1																						
		京・信楽			3	2																					
		越前																									
		珠																									
		合 計	5	105	205	6	0	14	46	107		16	1	0	4	2	2	1	8	21	545						

第 37 表 中近世土器・陶磁器の産地・器種別出土破片数 (竹花・Ⅱa層)

着しているものが多く見られ、該期に灯明皿として使用する傾向が認められる。青磁は引き続き蓮弁文碗が見られるが、徐々に蓮弁単位を意識せず線のみを簡便な紋様へと崩れていく。皿は稜花皿が新たに加わる。白磁は15世紀代に主流であった軟質の胎土を有する一群は姿を消し、硬質で大型・薄手の皿へと移り変わる。青花は鉢筒底のC群及び丸皿のE群皿が主体となる。土師皿は引き続き手づくね成形の皿が中心であり、前代との区分に課題を多分に残すが、器壁が厚くなる傾向がある。貯蔵具と調理具については、前代まで圧倒的出土量を誇った珠洲が姿を消し、越前が主体となる。その他、瀬戸美濃の大皿がわずかに見られる。大皿の中には口縁端部に打ち欠きとタールが付着しているものがあり、灯明皿として使用された可能性がある。以上、16世紀代の陶磁器様相を見てきたが、中葉以降の様相は判然としないう。この事象は、姫御前遺跡18年度調査でも同様の傾向が認められ、竹花遺跡まで含めた広範囲で同様の傾向を示す画期と言える。その後、遺物がまとまって出土するのは16世紀第4四半期に入ってからである。

16世紀末になると、再び遺物量は増加に転じる。供膳具では、再び瀬戸美濃製品の椀・皿類（大窯4期）が認められるようになる。天目椀・灰釉皿のほかに、新たに志野様式の椀・皿類が加わる。皿類には、歪んだ上面観を有する向付と考えられる上手の品もある。瀬戸美濃は中世を通じて大量に流通してきたが、大窯4期（1580～1610年）を最後に当地における大量流通は終焉を迎え、肥前系陶器及び越中瀬戸に代表される近世陶磁器へと取って代わる。青花にも変革は訪れ、中世段階における景徳鎮窯系一辺倒の流通様相から、新たに漳州窯系青花が加わる。貯蔵具・調理具においても、中世段階の主体であった珠洲・越前・瀬戸美濃の組み合わせから、肥前系陶器と越中瀬戸を中心とする近世陶磁器へと大きくその様相が変化する。これら近世陶磁器は17世紀前期を中心とし、18世紀以降の遺物は少ない。したがって、当地における積極的な土地利用は17世紀を最後に途絶えたと見られ、この見解は姫御前遺跡18年度調査の結果と一致する。

以上、中世及び近世初頭の陶磁器の組み合わせを見てきた。姫御前遺跡・竹花遺跡では、14世紀後半～16世紀第1四半期にかけてまとまって出土しており、16世紀第2～3四半期には希薄となる。16世紀末～17世紀代に再び増加し、18世紀以降は再び希薄となる。この消長は、姫御前遺跡18年度調査区でも見られた現象であり、これら3地点（延長約700m）を含む広範囲で同様の動向がうかがえる。

陶磁器の組み合わせに関しては、中世段階では時期により細かな変動・勃興は認められるものの、基本的に輸入陶磁器及び瀬戸美濃を中心とする供膳具と奢侈品、そして、珠洲及び越前が大半を占める調理具・貯蔵具で構成される。この組み合わせが大きく変わるのが17世紀初頭で、肥前系陶磁器が登場してからである。肥前系陶磁器は1580年代に生産が開始され、16世紀末から17世紀初頭に生産量が拡大すると日本海側に大量に流通し始める。肥前系陶磁器は様々な器種を生産しており、その物量と種類の多さでそれまでの中世的陶磁器様相を一変し、肥前系陶磁器一色に塗り替わる。この現象は北陸全域に共通して認められることであるが、そうした中で富山県に近い糸魚川地域では越中瀬戸が補的に使用されている。ただし、広口壺に代表される小型の壺に関しては、肥前であまり作られていないことから、数ある器種の中で唯一、越中瀬戸が圧倒的シェアを占めている。

B 加工円盤の分類と用途

加工円盤は土器・陶磁器類の破片を素材とし、側縁に連続的な割離を施し、平面形を略円形に仕上げる再加工品である。姫御前遺跡IIからは27点、竹花遺跡からは31点出土した。

加工円盤は県内外の中・近世遺跡から散見され、それ自体は決して珍しいものではない。本報告におけ

分類	素 材											合計		
	珠洲	越前	白磁	青磁	青白磁	青花	李 陶器	瀬戸 美濃	越前 瀬戸	中 戸	肥前系 陶器		京焼	土師器
1類	15	6												21
2a類	6	1		1	1					1				10
2b類												1		1
3a類								1					7	8
3b類			1	1		1		7						10
4a類	1							1						2
4b類				1			1		1	3				6
合計	22	7	1	3	1	1	1	9	2	3	1	7	58	

第 38 表 姫御前遺跡・竹花遺跡出土の加工円盤集計表

る出土数は 58 点に及ぶが、愛知県土田遺跡では 306 点もの報告例がある〔赤塚 1987〕。近隣の出土例は、糸魚川地域では姫御前遺跡 18 年度調査区〔陶片円盤〕と報告、寺地遺跡〔佐藤 2002〕でも出土している。また、上越市頸城区水久保遺跡〔高橋保雄 1996〕でも 1 片であるが出土している〔土器片円盤〕と報告。しかしながら、新潟県において今回のように数がまとまって出土した事例は稀であり、本報告では分類を試みた（第 3 表）。分類は直径及び高台の有無で分類している。また、形状による分類と素材との関係は第 38 表にまとめた。ここでは、それぞれの分類ごとの特徴を示しておくことにし、個々の詳細な事象については第三章 3（1）f、第四章 3（1）f を参照されたい。

1 類 姫御前 138、竹花 260・261・262 が該当する。素材は越前と珠洲のみで、無軸の焼き締め陶器を用いている。中世陶器で構成される点が特徴的である。平面形はきれいな円形を呈するものは少なく、歪なものも多い。竹花 260 がやや小振りであるが、直径 22～29mm のものである。厚さは 11～13mm と近似するが、重量は 5～17g とややバラツキのある数値を示す。

2 類 姫御前 135・136・137、竹花 263・264・265・266 が該当する。素材は珠洲・越前・越中瀬戸・京焼・青白磁・青磁と様々である。中世陶器の他に、青白磁のような稀少品や、青磁を用いている点が特筆される。竹花 264・265・266 はⅡ a 層（近世以降）よりも上面からの出土である。高台を有するもの（2b 類）には竹花 266 があり、それ以外は無高台（2a 類）となる。直径は 31～39mm のものである。厚さについては、2b 類の厚さは高台の分、9mm とやや厚いが、2a 類であっても 4～14mm とバラエティーに富む。重量についても 9～16g とややバラツキがある。高台を有する円盤（2b 類）の場合、高台と腰部の付け根の外側で打ち欠き、輪高台の円形プランを利用して、円形を作出するものがほとんどである。このことは後述する 3b 類・4b 類についても同様である。したがって、有高台の加工円盤の場合、直径は輪高台の径に規定される場合が多いと言える。使用痕については、竹花 264 の側縁を磨いているのが観察されるが、素材が播鉢であることにも起因するのであろうか。いずれにしても、264 以外に使用痕はとりたてて認めることができない。

3 類 姫御前 129・130・131・133・134、竹花 267・268・269・270・271・273・274 が該当する。素材は瀬戸美濃（天日輪・平輪）、土師器皿（ロクロ成形）・白磁・青磁・漳州窯系青花からなる。直径は 44～58cm である。2 類と同様に、高台のあるものもないものがあるが、無高台のもの（3a 類）には姫御前 133 及び竹花 273・274 があり、それ以外は高台を有する（3b 類）。2 類と比べると無高台のものより、高台を有するものの比率が高い。素材の選択に関しては、1・2 類が珠洲・越前といった焼き締め無軸陶器を中心に選択しているのに対し、土師器の 7 点を除けば、施釉の陶磁器を使用している。硬・軟質の具合や色調はバラエティーに富み、青花の見込み文様を中心に据えた製品もある。重量は、3a 類が 23g 程度、3b 類が 19～83g である。3b 類には姫御前 130（青磁）が 83g と飛び抜けて重いが、それ以外

は19～38gと比較的まとまりがある。姫御前130は厚さも、ほかが9～16mmとまとまるのに対し、22mmと厚く、ほかとは区別して考えた方がよいかもしれない。使用痕については、姫御前133の側縁に磨り痕があり、竹花264(2a類)と同様に、研削具として使用されているようだ。また、竹花273の側縁剥離面にはススが付着している。円盤に加工された後の付着であることを示している。

4類 姫御前132、竹花272・275・276が該当する。素材は越中瀬戸・肥前系陶器・李朝陶器・珠洲・瀬戸美濃からなるが、1～3類と異なり、近世陶磁器が主体をなす。2類と同様に、高台のあるものとなんがあるが、無高台のもの(4a類)で図化したものはない。すべて、高台を有するもの(4b類)である。全容の分かる竹花276は直径71mm、厚さ15mmで、重量は60gである。1～3類に比して大型である。素材の選択については、3類同様、施軸陶磁器が中心となるが、3類に比して、落ち着いた色調のものが多いように思える。

用途について ここまで加工円盤を4類に分類し、それぞれの特徴を示してきたが、共通項は「円形」ということだけで、重量・大きさ・高台の有無・厚さ等において、まとまりを欠く。

仮にこれらすべて同じ用途を目的として作られたとすると、平面形が円形であるということに意義を見出すことができる。ただし、側面観が扁平なa類(無高台)と、厚みがあり高台内が凹むb類(有高台)を同一視することには躊躇する。また、色調の鮮やかなものとそうでないもの、硬質なものや軟質なもの、果たして同一用途によるものなのだろうか。むしろ、今回出土した加工円盤の中に一部、擦痕があるものや煤けているものが存在していることや、大きさや形状に複数のグループがあること等から、複数の用途を考えるのが適当に思える。

加工円盤の用途については諸説あるが、呪術具、冥銭、道具、飛礫〔赤塚1987〕、灯心抑え〔藤巻1989〕等が主流である。〔藤巻1989〕は、縄文時代の土器を用いた加工円盤(「土器円盤」と呼称)を研削具として位置付けた。本遺跡においても、側縁を磨っているものが2点見られ、時代は異なるが同様の用いられ方(研削する対象物は違えども)をしたと考えられる。また、本遺跡においては骨片や銭貨、信仰に関わる木製品(形代や箸状木製品等)が多数出土したことから、呪術具や冥銭という可能性も否定はできない。灯心抑えに関しては、被熱及び煤けているものがわずかであることから、主体的な使用方法とはいえない。

道具については、遊技の中には「まじない」と密接な関わりを持つものが多く、遊技具と呪術具を明確に区別することはできない。1類は大きさから考えて、双六等の遊技具の可能性も否定はできない。

飛礫については、中世に盛行した印地(つぶてに破塵・破邪の呪力をみて、寺社・祭礼に飛礫すること、13世紀中頃～15世紀第1四半期まで盛行)の可能性も検討されるべきである。ただし、IIb層の中心をなす15世紀後半には衰退し、5月の節句の行事として残っていったという〔中沢1981〕し、〔網野1993〕は「飛礫覚書」で南北朝に印地の遊技化を指摘している。〔柳田1963〕は小正月に行われる印地を「年古の系統に属する遊技」とした。本製品を飛礫=印地としてみた場合、通常の礫(自然石)との差異が問題となろう。IIa層～IIb層にかけては、多くはないが円礫が混入していた。それらは調査区に満遍なく散布し、量の多寡による密度の違いや混入の状況に特別な状況は観察されなかった。

以上、想定される諸説を検討してみたが、いずれも決め手に欠ける。実用的な側面もあれば、信仰に関わる用途についても伴遺物や遺跡の性格を考慮すると十分にあり得る。加工円盤は、該期における陶磁器の再利用ならびに信仰について知る手掛かりとなり得る物証であり、今後、周辺での事例の蓄積を待つて検討されるべき重要な問題と考える。

C 竹花遺跡と観音寺

第II章 2B に記載した「観音寺」は、竹花遺跡の北側約 200m に所在する。『越後下向日記』は、延徳 3(1491)年 3 月、管領家 細川政元にしたがって越後に下向した際に冷泉為広によって著されたものである。日記によれば、東北の馬を集めることを目的とした管領家の公的な旅の道中に、細川政元一行が観音寺に宿泊したとされる。管領家の宿とされたことは、糸魚川地域における観音寺の階層の高さを示している。

竹花遺跡における陶磁器の年代は、14 世紀後半～16 世紀第 1 四半期にかけてまとまって出土があり、16 世紀第 2～3 四半期には希薄となる。その後、16 世紀末～17 世紀代に再び増加し、18 世紀以降は再び希薄となる。特に、15 世紀代の陶磁器が、質・量・種類ともに最も充実しており、遺跡の中心となる時期であったと考えられた。すなわち、『越後下向日記』が著された 15 世紀後半は、竹花遺跡で遺物量が最も多い年代と一致しており、近接する観音寺との関係について注意を払わなくてはならない。

出土した陶磁器は、いずれも破片ではあるが、その質の高さ、量・種類の多さは、県内でも有数である。天目杓・香炉・茶入・瓶子・花瓶・合子・水注等、茶や香、座敷飾りに使用される奢侈品が多数出土したことに加えて、城館や寺院等に特徴的に認められる瓦器〔水澤 1999〕も出土した。陶磁器の構成から考えると、近隣に有力者が存在したことは確実に見られる。また、精巧な加工が施された銅製品（図版 85-338・340）や、祭祀との関連が想定される銭貨、箸・形代（人形・舟形・刀形）・下駄等の木製品（第 III 章 3E (2) 参照）の存在も注目される。これらの遺物組成は、一般的集落の在り方とは著しく異なる。加えて、多数のヒト焼骨が破片の状態で散漫に出土したことも特筆される。このことは、近隣に葬送に関する場が存在したことを示している。

調査対象地においては、中世（15 世紀代）の遺物包含層 II b 層が落ち込むように水田を検出した（SX30）。周辺に水田が広がっていたことは、自然科学分析（第 V 章 2）からも裏付けられており、調査対象地に観音寺そのものが存在したわけではない。すべての陶磁器類が破損品であること、焼骨にはヒトのほか魚骨（マダイ）・動物骨（タヌキ）も含まれることから、水田としての性格に加えて廃棄場と評価することもできる。しかし、箸状木製品が地面に突き立てられていたことに象徴されるように、祭祀遺物の多さも特筆され、単なる廃棄場とはいえない。

このように、竹花遺跡における遺物組成・遺物の出土状況を鑑みると、観音寺との関係を無視することはできない。観音寺との直接的な関係にまでは言及できないものの、竹花遺跡から出土した遺物の供給源は、その周辺であったことは想像に難くない。いずれにしても、中世糸魚川町の隆盛ぶりを示す遺物群といえる。近年、糸魚川地域では中世の遺跡が多数発見されている。北陸新幹線の路線上に設けた試掘・確認調査、本発掘調査地点の大半で、数量の多寡はあるものの中世の遺物が出土した。これまで明らかにされてこなかったが、県内においても有数の中世遺跡密集地域であることが判明しつつある。今後の発掘調査の進展、報告書の刊行をもって、実態が鮮明になることであろう。

また、15 世紀～17 世紀の間に、若干の断絶はあるものの、ほぼ連続的な遺物の存在が確認された。隣接する姫御前遺跡においても、竹花遺跡と同様の遺物の消長が観察され、その供給源が近隣であったことが想定された。竹花遺跡～姫御前遺跡にかけて断続的に遺物が出土したことは、北側 200m に存在する加賀街道沿いに町が形成され始めたことを意味する可能性がある。すなわち、15 世紀代に築かれた中世の町が、近世の町の礎となった可能性を指摘できる。現在、住宅地となっている加賀街道沿いに、中世の町並みが埋没しているのであろう。

3 姫御前遺跡・竹花遺跡周辺の環境変化と遺跡の消長

A 遺跡形成以前

姫御前遺跡・竹花遺跡で地山としたⅧ層は、砂質シルトである。花粉が少なく、堆積速度が早いか、乾燥した環境にあったことが推測される。また、確認調査及び本調査で深掘りしたトレンチでは、下位に土壌化した層序、炭化物を含む層序を確認できなかった。新幹線本工事時の杭打ちで得られた下位の土砂についても、同様の状況が認められた。なお、火山灰が認められたが、このような環境にあるため、一次堆積物またはそれに近い状態とは言えない。

B 縄文時代 —平野への進出と鬱蒼としたスギ林—

糸魚川平野においては、少なくとも縄文時代前期から開発が始まるようである。特に、海川右岸においては、北陸新幹線・一般国道8号糸魚川東バイパスに関連する調査で平野部への縄文人の進出が明らかにされた。

山岸遺跡(第6図37)は、丘陵の裾に相当する平野部に立地し、縄文時代前期の土器・石器が出土、土坑1基を検出した〔春日2009〕。遺跡の範囲・内容は、明らかでない面もあるが、丘陵上に立地する深谷遺跡〔春日ほか2009〕と時期が重複することから、相互の関係が注目される。

六反田南遺跡(第6図27)においては、縄文時代中期前葉の集落が検出されており〔細井ほか2010〕、本格的に平野に進出したことを意味する。現地表下約2mと深部で検出したものの、縄文時代の生活面は標高4m前後にあり、姫御前遺跡における古墳時代前期～縄文時代晩期の遺構検出面とほぼ同じ高さである。旧地形が低平であったとすれば、六反田南遺跡の立地は、極端な低地帯であったとはいえない。むしろ、姫御前遺跡が立地する海川左岸がより低地であり、丘陵が近くに迫り、より標高が高い右岸の平野部が先行して開発されたと考えられよう。いずれにせよ、平野部への本格的な進出は重要な事項であり、該期中核的な集落・長者ヶ原遺跡(第6図13)との関係が注目される。出土遺物と遺跡立地を鑑みれば、磨製石斧や玉作に関連する拠点の一つと考えられる。

姫御前遺跡18年度調査においては、多数検出したスギの樹根痕の中から有茎石籬1点が出土した。また、スギの樹根を¹⁴C年代測定したところ2,900±40BP(BC1,130～1,010年頃)(較正年代)という結果が得られた。寺地遺跡(第6図4)における花粉分析では縄文時代晩期にはスギが圧倒的に多く、草本花粉が極めて少ないことから、スギ林が広がっていたことが明らかにされている〔鈴木2002〕。縄文時代晩期に、糸魚川平野一帯にスギ林が広がっていたことは確実と見られる。寺地遺跡において、縄文時代晩期の柱材にスギが多用されており〔寺村ほか1987〕、これらが近隣のスギ林で調達されたと考えられる。姫御前遺跡周辺では、笛吹田遺跡で晩期(大洞A式)の土器片1点が出土しており〔安藤ほか1978〕、平野への進出が始まったと見られるが、極めて断片的な情報である。

C 弥生時代後期 —スギ林の開墾—

縄文時代以来、広がっていた鬱蒼としたスギ林は、弥生時代に本格的な開墾が始まるようである。花粉分析では、各層ともスギの優勢が確認されており、古墳時代以降、水田の増加と相俟ってスギが徐々に減少する傾向を読み取ることができる。中でも、本格的な開墾が始まる前後の姫御前遺跡6区Ⅷ層上部～

IV上層下部においては、1cc中にスギ花粉が100万個を超え（V下層上部～IV中層では180万個前後）、スギが圧倒的に優勢であったことが分かる。ただし、ほかの分析地点と比べると1桁多く、自然界のどのような環境で生じ得る事象であるのか検証を要する。

また、姫御前遺跡6区の流路から多数出土したスギは、年輪年代の結果から、AD60～90年頃の約30年の短期間に枯死したと見られる（第V章6）。短期間に枯死したことについては、自然的要因と人為的の双方の可能性を想定できるが、弥生時代後期～古墳時代前期前半に糸魚川平野で遺跡が急増する状況を鑑みれば、後者の可能性がより高い。したがって、弥生時代後期にスギ林の本格的な開墾が行われたと考えたい。

しかし、この時期の遺跡は糸魚川地域ではほとんど認められない。開墾時期に相当する新高シンボ編年1期の遺跡は、丘陵上に立地する後正山遺跡（第6図20）1・3号住居跡〔木島^{ほか}1986、木島2005〕のみである。ヒスイ製勾玉が製作されており、糸魚川地域を本格的に開発した意図がうかがえる。これに後続する2期に入ると、沖積地において遺跡が出現する。笛吹田遺跡溝状遺構C（第6図22、2期）〔千家1978、金子^{ほか}1999、木島2005〕、姫御前遺跡SX284（2期）、六反田南遺跡の旧河道5層（第6図27、2期）〔春日^{ほか}2008〕・SD604・605（1～2期、古墳後期の土器に混在）〔細井^{ほか}2010〕、田伏山崎遺跡Xc層（第6図42、2～4期）〔佐藤^{ほか}2009〕、横マクリ遺跡（第6図29、後期後半）〔渡邊^{ほか}2008〕があり、2期以降に遺跡が急増する様子を理解できる。しかし、いずれも遺物が少数出土する程度であり、大規模な遺跡が出現するわけではない。本格的な集落の展開に先立ち、開墾に従事するために入植した集団の存在をうかがい知ることができる。

中でも糸魚川地域における弥生時代後期～古墳時代前期の中核的な集落・笛吹田遺跡の開始年代に当たることは、平野部を開墾する上で重要な役割を果たしたと見られる。一方、姫御前遺跡SX284は地層の逆転現象が見られたことから倒木痕と考えた。しかし、出土土器の遺存状況は良好で（図版39・174～176）、8点のヒスイ原石も出土した。これらの出土状況を偶然の混入とは考えにくく、また周囲に同時期の遺構・遺物はまったく認められなかった。あるいは伐採・抜根に伴う祭祀行為の一環として埋め込まれた可能性も考えられよう。

D 弥生時代終末期～古墳時代前期 一集落の形成と水田耕作の開始

現在、海岸砂丘と丘陵の間には平坦地が広がり、ほとんど起伏が認められない。しかし、北陸新幹線・国道8号糸魚川東バイパス建設に伴う発掘調査によって、旧地形が起伏に富んでいたことが分かった。姫御前遺跡と竹花遺跡とでは、古墳時代の遺構検出面の高さが約2m異なる。姫御前遺跡が4～4.5m、竹花遺跡が2～2.5mほどで、姫御前遺跡のほうがより高いことが分かる。標高が高い範囲に居住域、低い範囲に水田が築かれており、明らかに地形を意識して土地を利用していたことが分かる。このことは、当時の景観を知る上で貴重な事例と言える。

土地の利用は、旧蓮台寺川（6区SR～5区SR730）を境に大きく変化する。標高が1mほど高い右岸（東側）に居住域が築かれ、左岸（西側）には生産域が広がっていたようである。また、右岸に築かれた居住域は、5区東端付近を境に、東側に建物群は広がりを見せない。18年度調査区3区で掘立柱建物SB2を検出したが、小型（1間／2m×5間／5m）で居住を目的とした建物とは考えにくい。一方、左岸に築かれた生産域は、断続的に竹花遺跡まで広がっていたと考えられる。

集落が本格的に構築され始めるのは、确实には6期頃からである。SI216が最も古い段階の建物とな

るが、焼酎年代が6期であり、柱根の¹⁴C年代の結果を踏まえれば、構築年代は5期に遡る可能性がある。すなわち、竹花遺跡の水田開発とほぼ同時期に築かれた建物と考えることができる。SI216の周囲には、一回り小型の建物が点在し、時期の詳細は明らかでないものの、遺物包含層や周溝から出土した遺物の年代を考慮すれば古墳時代前期の建物群と考えられる。これらの建物群の南西側には、ほぼ垂直に掘り込まれた川縁SR202を検出し、その底面縁辺部には細い溝が認められる。湧水層で崩落しやすい砂質シルトまで掘り込まれていることを考慮すれば、板杭を打ち込むなどで護岸したものと考えられる。西側には、階段状の施設が設けられている。何らかの作業を行う場であったと考えられる。また、流路の縁に沿うように幅2.5m前後のわずかな窪地が認められた。描述に判断することはできないが、船着場のような性格を考えることもできよう。29・30Bグリッドでは、平行するようにSD374～377を検出した。畑作溝と考えたが、花粉分析からそのことを裏付けることはできなかった。5区西端では、建物2棟を検出した。このうちSB341は旧蓮台寺川(SR730)の岸辺と主軸方向が平行するように建てられている。1間(3m)×3間(4.5m)であり細長く、床面積は約4坪と狭い。周辺には小型の建物しか存在しないことから、倉庫等として利用された可能性も考えられよう。

生産域である竹花遺跡においては、弥生時代終末期に位置付けられる5期から水田が耕作されることが明らかになった。畦畔の役割を果たしたと考えられる足場板の下には枕木を敷き、横ずれを防止するための杭も打たれていた。当時の土木技術を知る上で重要な所見を得られた。このように8～9期になると、整然とした盛土の畦畔が構築されるが、東西南北を強く意識した地割りの存在が明らかとなる。また、この時期の水路は、蛇行させたり溜め井を造作するといった工夫も行われており、生産性が向上した可能性がある。このように8～9期に築かれた水田には、計画的な水田耕作が行われた重大な画期を見出せる。しかし、この水田は長くは継続しない。11～12期には板を敷き詰める木畦畔が構築されるが、その後、間もなく草本質泥炭が堆積する。すなわち、滞水するような環境に一変するのである。滞水して盛土畦畔が水没したため、板を重ねることで足場を確保したのであろうか。しかし、自然木を利用したSX34は草本質泥炭の堆積と共に放棄されるようである。板材を敷き詰めたSX33は草本質泥炭の堆積後まで継続利用されるが、草本質泥炭中にはイネの植物珪酸体が認められない。すなわち、水没によって水田が放棄されたと考えることができる。

この頃、笛吹田遺跡・南押上遺跡といった中核的な集落と、横マクリ遺跡・六反田南遺跡等の小規模な集落が沖積地に集落が点在する状況となる。海岸砂丘と丘陵の間に形成された狭小な平野部に、居住域と生産域が形成されたと考えられる。砂丘上や丘陵上より安定した土地に居住域が築かれない理由ははっきりしないが、玉作が行われていることから水を得やすい範囲に居住域が築かれた可能性がある。また、水田と近接することから、耕作・管理の上でも好都合であったと言えよう。

E 弥生時代終末期～古墳時代前期中葉の火山活動 一指標火山灰の検出

弥生時代終末期に、糸魚川地域に火山灰が降灰したことが明らかになった。火山灰の降灰は、姫御前遺跡26・27Bグリッドにおける遺物の層位的出土事例から、新潟シンボ編年5期以降、6期以前に位置付けられた。また、火山灰を包含する竹花遺跡IV2層からは5期の遺物が出土した。このことから、火山活動は弥生時代終末期にあたる5～6期に位置付けられる。そして、竹花遺跡IV2層と対応関係にある姫御前遺跡流路のIV下層においても火山灰を検出した。また、18年度調査区の斜面部で検出したSX13灰白色シルト塊は、土質の共通性・検出層位から火山灰の集積である可能性が高い。

玉作のために必要な保水性にその目的を求めた。そして、Ⅷ層の分布が10cmほどの厚さで、南側の広範囲に広がるとした。さらに工作用特殊ピット内からは多数の遺物が出土しているのに対し、「粘土層内からは土師器細片3～4点を検出したにすぎない。」とし、「黄白色粘土は、付近の低湿地帯では得られず、南側丘陵地より搬出されたことは明らかである。」とした。当時の調査で、現地に堆積する洪水性の堆積物と一線を画して理解したことは、卓見であったといえる。しかし、姫御前遺跡における火山灰の産状と比較すれば、工作用特殊ピットが掘られる以前の遺構覆土と理解したほうが良さそうである。工作用特殊ピットから出土した土器の時期は9期以降であり、それより古い段階に位置付けられる火山灰とは年代的に整合する。おそらくは工作用特殊ピットよりも古い段階に掘られた遺構に、火山灰が風雨によって集積・埋没し、その後、一定の時間を置いてから工作用特殊ピットが掘られたのであろう。あるいは、このような粘質の地山であったがために、あえてそこに工作用特殊ピットが掘られた可能性も考えることもできよう。

このように姫御前遺跡に代表される5～6期と、正尺C遺跡に代表される7～8期に火山活動があったことは確実と見られる。火山ガラスの化学組成領域の共通性を勘案すれば、数十年の間隔において噴火した一連の火山活動によるものと考えられる。給源は定かでないものの、少なくとも新潟県域においては指標火山灰として活用することができる。また、土器編年の検証という観点からも有効な指標となろう。

この火山活動によって、糸魚川地域に如何ほどの影響が生じたのであろうか。二次堆積物とは言え、窪地でピユアな状態で残存していたことから、相当量の火山灰が降灰したと想定される。姫御前遺跡居住域における花粉分析では、火山灰の二次堆積物層であるⅢc層でスギ林・クリ林が減少、人為干渉が著しくなり、二次林が一時的に増加したとされた。そして、その後堆積したⅢb層では、スギ林・クリ林が再び増加し、森林が回復したとされる(第V章1, 第39表)。花粉分析の結果では、Ⅲc層におけるスギ林・クリ林の減少要因を人為干渉に求めたが、これを火山活動の影響に置き換えることも可能であろう。そして、火山活動が一段落すると共に、スギ林・クリ林が回復したと考えられよう。このように、火山活動によって植生に変化が生じた可能性がある。換言すれば、植生に影響を及ぼすほどの火山活動であったとも言える。火山活動が近傍であれば、地震活動もあったであろうし、当時の住人にとっては天変地異と捉えられたかもしれない。

F 古墳時代中期初頭 — 草本質泥炭の形成と水田復旧 —

姫御前遺跡の流路部分から竹花遺跡にかけての低地部では、草本質泥炭(姫御前遺跡Ⅳ上層・竹花遺跡Ⅳ1層)の堆積が確認された。極めて特徴的な土層であるため、遺跡間・調査区間を対比する上での重要な指標とした。この特徴的な層位は、新潟シンボ編年11～12期に位置付けられる竹花遺跡の畦畔SX33を覆っており、その堆積時期は古墳時代中期初頭以降と考えられる。

草本質泥炭はアシの腐植からなり、一面が常時、水を湛える湿地帯に変貌したことを象徴する堆積物である。このような環境変化は、河川の流れが大きく変化したことに伴い、川の水が海へ流出しにくい環境になったことを反映する。例えば、流路の蛇行化・網目状化・狭小化や、河口の閉塞等を想定することができる。いずれも、多量の土砂が上流部から押し流されることによって、これらの状況が引き起こされると考えられる。

流路の変化については、弥生時代終末期の火山活動との相関も想定すべきかもしれない。火山灰の給源は明らかになっていないが、先述のとおり比較的近傍にあったことが想定される。仮に焼山であったとす

れば、火山活動によって山体が荒廃し、流域に土砂を供給する等、下流部に変化をもたらしたとも考えられる。海川の最上流部は焼山山頂部の西側斜面にある。火山活動との直接的な関係は別としても、上流部で何らかの自然災害が発生し、土砂を下流部に供給したと考えられる。

草本質泥炭の堆積と共に、標高の低い竹花遺跡は水没し、一面に広がっていた水田は一時的に放棄されたと思われる。竹花遺跡では、弥生時代終末期～近世に至るまで、連続的に水田耕作が行われたことが植物珪酸体分析から明らかになっているが、草本質泥炭が堆積した時期のみ、イネの植物珪酸体が激減する(第V章2、第39表)。急激な環境変化に対応できず、水田を放棄せざるを得なかったであろう。

草本質泥炭の堆積直前に機能していたと見られる木畦群 SX33・SX34のうち、SX34は放棄されたようである。一方、SX33においては草本質泥炭の堆積中も、連続的に足場板が積み重ねられていることが断面図(図版6)から理解できる。そして、草本質泥炭の堆積後まで継続的に利用されたようである。すなわち、足場板の上に腐植が堆積しては新たな板を敷くことを繰り返した様子を理解できる。なお、多数の足場板は、建築材の再利用である。建築材の時点でも、再利用が繰り返されており、最終的に足場板となっているようである。

草本質泥炭の堆積の終わりは、常時、水を湛えた湿地帯の減少を意味する。すなわち、川の水が円滑に海に流出するように変化したといえる。当時の土木技術を考えれば、河川改修が行われたことも想像に難くない。湿地帯の水が引くと共に、急速に水田化が進むことが花粉分析・植物珪酸体分析から明らかになっている(第V章1・2)。竹花遺跡で水田が復旧されると共に、姫御前遺跡6区の流路においても水田耕作が開始される。姫御前遺跡の流路においては草本質泥炭が20～40cmほど厚く、足場の悪さがゆえに、そのまま耕地とすることは困難であったと考えられる。そこで、スギの枝や幹を埋め込むことで地盤の安定を図ったと思われる(第VI章1C(6))。鬱蒼としたスギ林を開墾すれば、膨大な数量のスギの残材が発生する。スギは加工しやすく、また燃料材としても適するため、最大限に利用されたであろうが、それでも有り余る状況にあったことは想像に難くない。そのような状況において、スギの残材が地盤改良に利用されたと考えた。

また、スギ以外の樹木も地盤改良に利用されている。これらは、ことさら遠くから運搬するとは考えにくく、近隣に自生したものと推測され、当時の植生を反映すると考えた。流路出土の自然木193点を樹種同定したところ、現在ほどにも見ることができないスギ・ヤチダモ・コブシ・アカガシ亜属・ブナという組み合わせの森林が存在したことが明らかになった(第V章4)。これは植生史研究においても、貴重な情報といえる。

草本質泥炭の堆積の終わりと共に、水田域が徐々に拡大され、対照的にスギ林が減少していった。水田域は、最も低い竹花遺跡で最初に構築され、その後、姫御前遺跡6区の流路跡まで、古代～中世には姫御前遺跡5区まで拡大される。そして、砂丘と丘陵の間の沖積地は、一面に水田が広がるような景観へと変化していったのであろう。

なお、古墳時代中期以降の拠点的な集落である田伏遺跡(中期～後期)[関1972]や一の宮遺跡(後期)[糸魚川市史編さん委員会1986]は、丘陵先端部に立地する。沖積地の湿地化により、小高い環境に居住域を移動させたのであろう。一方、沖積地の水田が拡大し、集約的な生産を行う環境が整えられたと考えられる。少なくとも前期に見られたような、沖積地に集落が点在するような在り方から、一変したといえる。ただし、このような遺跡立地の変化の背景は、環境とともに社会組織の変化についても考慮する必要がある。

G 古 代 — II b 層の堆積開始年代—

姫御前遺跡・竹花遺跡とも、中世の遺物包含層とした II b 層の最下部から古代の遺物が出土した。その数量は極めて少ないが、いずれも 9 世紀代の遺物であり、II b 層堆積年代の初源を示すと考えられる。両遺跡とも、古代の遺構・遺物を検出していないが、遺物の存在は近隣での活動痕跡を裏付けるものである。調査対象地は、植物珪酸体分析から水田耕作が行われていたと考えられる。

糸魚川地域における古代の集落は、丘陵上の山崎 A 遺跡、扇状地上の須沢角地遺跡が知られている。いずれも大規模な集落であり、地域において中核的な役割を担った遺跡と考えられる。一方、海岸砂丘列と丘陵部に挟まれた狭小な平野部においては、遺物はわずかに出土するものの、遺構はほとんど検出されていない。山岸遺跡においては 9～12 世紀の水田が築かれており、平野部のほかの遺跡における植物珪酸体分析を踏まえれば、平野部には水田が広域に広がっていたと考えられる。

H 中 世 — 観音寺と周辺の景観—

中世後期に位置付けた II b 層では、竹花遺跡で水田遺構を検出したほか、姫御前遺跡・竹花遺跡で地面に突き刺さった状態の箸状・棒状・板状の木製品が出土した。地面にこれらを突き刺す行為は、古代における畜串と同様の役割を果たした祭祀行為 [四柳 1987] の一環と考えられる。これらは、いずれもスギが多用されており、箸杉信仰の存在が想定される。空海や蓮如といった高名な僧が地面に箸を突き立てたところ、芽を出してスギの太木となったとする伝承から箸を御神木のシンボルとみなすもので、「箸杉信仰」あるいは「箸立信仰」と呼ばれているものである [一色 1998]。また、糸魚川市上路では、飾りのついた削りかけの小正月の箸 12 本を炉の周囲に立て、その燃え方によって農事の大凶の占いをするという民俗事例がある [石田 1982]。このように、箸を地に突き刺すことは、祭祀行為とみなすべきであろう。また、箸状木製品には、「暗の場」で用いた両口箸が大半を占めた。そして、折られた箸が多いことも特徴的であった。「箸折り」は、一度でも使用した箸にはその人物の霊魂が宿るとされ、その魂を再び自分の元へ返すために行われ行為である。折損した多量の両口箸は、饗応等に用いられた後に廃棄された可能性が考えられよう。

箸状木製品のほかにも、祭祀遺物とされる畜串・笹塔婆・形代・下駄・銭貨の出土も特徴的であった。竹花遺跡においては、ヒトの焼骨片が多数出土していることも特筆される。焼骨が破片のみであることから、調査対象地で火葬が行われたとは考えにくい。むしろ火葬場で焼かれたうち、墓に埋葬できなかったものが散布されたかのようなのである。調査対象地周辺が水田であったことは、一部で検出した遺構の存在や植物珪酸体分析の結果から明らかであり、水辺の祭祀が行われた場でもあったと考えられよう。

一方、出土した陶磁器類には、日用雑器のほかに香や茶に関する道具等の高級品が多いことが特徴的であった。特に、竹花遺跡では高級品が多く、出土点数も多かった。そして、竹花遺跡から離れるにしたがって減少していく状況が確認された (第 69 図)。出土陶磁器の質の高さは、使用者の階層の高さをうかがえ、先述のとおり約 200m 北側に所在する観音寺との関連が想定される。中世には、海岸砂丘列上に走る加賀街道が存在し、これに沿うように中世の街が築かれたと想定される。そして、海岸砂丘と丘陵の間の沖積地には、一面に水田が広がり、集約的な水田耕作が行われたと考えられる。

I 近 世 ー集約的な水田耕作と洪水被害ー

近世の遺物包含層Ⅱa層は、植物珪酸体分析・花粉分析の結果から、集約的な水田耕作が行われたことが考えられる。しかし、耕作条件は、決して万全ではなかった。Ⅱa層は、粗砂を主体としており、洪水被害を受けたことが想定され、そのことを裏付ける記録が残されている。

寛政4(1792)年9月の大雨では、「海から高波が城の川へ打ちこみ、砂が溜まって川水が流れなくなった。おまけに大雨とあって、江筋の水が流れこみ、城の川橋の上まで、水が上がってしまった。」という。そして、町裏(竹花遺跡・姫御前遺跡周辺)が水たまりになった状況が、『町年寄 御用留帳』に次のように記されている〔青木1979〕。

「やがて水溜りは、善導寺辺より、南一の宮 森下、東は押上 裏まで水たまりこれあり候。湖水渺々にて、囲ひ材木、わらにお 等、残らず流れ、田んぼの間に浮き申し候て、追々、筏に乗り候て、主々ども取り入れ申し候通り、珍しき大変にごさ候。」

この文献からは、竹花遺跡・姫御前遺跡が立地する丘陵縁と砂丘間の沖積地一面が水没したことが分かる。また、地域住民の話によれば、城ノ川は河川改修が進む以前まで、冬季の荒波によって川の水が海に流出せず、竹花遺跡周辺がたびたび水没したという。城ノ川の上流部は急勾配であるが、沖積地に入ると勾配が極めて緩やかで、海岸に達する直前には砂丘列を横断する。もともとこのような環境にあるため、洪水を起こしやすい河川と考えられ、砂丘裏の沖積地が水没しやすかったと言える。特に標高が低く城ノ川に近い竹花遺跡では粗砂の堆積が厚く、洪水被害がより大きかったことを示している。

要 約

姫御前遺跡Ⅱ

- 1 姫御前遺跡は、新潟県糸魚川市東寺町1丁目1060番地1ほかに所在する。
- 2 調査は北陸新幹線の建設に伴い、平成20年度に実施した。調査面積は3,680m²である。
- 3 遺跡は、海岸線から350m内陸の沖積地に立地し、遺構検出面の標高は約4mである。
- 4 調査によって中世と古墳時代の遺構・遺物を検出した。
- 5 中近世の陶磁器は、青磁・白磁・青花・瀬戸美濃・珠洲・越前・越中瀬戸・肥前系陶器・瓦器・土師器がある。これらの年代は、14世紀後半～16世紀第1四半期頃と16世紀末～17世紀代にまとまりが認められた。植物珪酸体分析の結果、調査対象地周辺は水田であったと見られ、掘り込みを伴う遺構を検出することはできなかった。一方、多数出土した箸は、地面に突き刺したり、折り曲げられていた。人形・動物形・刀形・斎串・笹塔婆・下駄・銭貨といった祭祀遺物も認められることから、水辺で祭祀が行われた可能性が高い。
- 6 弥生時代後期～古墳時代前期の集落を検出した。平地建物4棟・掘立柱建物3棟を検出したが、特に周溝を伴う平地建物SI216は残存状況が良く、建物構造を知る上で多くの情報を提供した。
- 7 弥生時代後期～古墳時代前期の遺物包含層の間に火山灰層が介在し、下位から新潟シンボジウム編年5期、上位から6期の遺物が出土した。給源は定かでないものの、同一輪廻と見られる火山灰が新潟県全域に認められ、今後、遺跡の年代を特定する上で重要な指標となる。
- 8 5区と6区の間には蓮台寺川の旧流路を検出した。覆土には弥生時代後期～古墳時代前期の埋没林を示す多数の自然木を包含したため、古環境の復元及び年輪解析を行った。最も多く存在したスギにおいては、281年分の年輪年代を構築することができた。¹⁴Cウイグルマッチングも行ったが、当該期は校正曲線が不安定な時期に当たる。今後、福島大学及び国立歴史民俗博物館において継続調査することとなっており、日本版校正曲線の構築において活用される見込みである。

竹花遺跡Ⅰ

- 1 竹花遺跡は、新潟県糸魚川市寺町2丁目458番地ほかに所在する。
- 2 調査は北陸新幹線の建設に伴い、平成20年度に実施した。調査面積は1,775m²である。
- 3 遺跡は、海岸線から350m内陸の沖積地に立地。遺構検出面の標高は、約2mである。
- 4 調査によって中世と古墳時代の遺構・遺物を検出した。調査対象地には、弥生時代後期以降、近世まで水田が営まれていたことが分かった。しかし、古墳時代前期～中期初頭頃一带が水没し、耕作が放棄された時期が存在したことも明らかとなった。
- 5 中近世の陶磁器は、青磁・白磁・青花・李朝陶器・瀬戸美濃・珠洲・越前・越中瀬戸・肥前系陶器・瓦器・土師器がある。これらの年代は、14世紀後半～16世紀第1四半期頃と16世紀末～17世紀代にまとまりが認められた。調査対象地では水田遺構が検出された一方、多数出土した箸が、地面に突き刺されていたり、折り曲げられていた。人形・動物形・刀形・舟形・下駄・銭貨といった祭祀遺物も認められることから、水辺で祭祀が行われたと考えられる。また、出土した陶磁器の質の高さ、量・種類の多さは県内有数の内容であり、茶の湯や香を嗜むことのできる財力のある階層が近隣に存在したことが分かった。そして、調査対象地北側には、冷泉為広が宿とした観音寺が存在することから、相互の関係が想定された。
- 6 弥生時代後期～古墳時代前期の畦畔を検出した。畦畔は、構築方法により盛土によるものと、板材を敷き詰める「木畦畔」に分類できる。いずれも軟弱地盤であるがゆえの土木技術を垣間見ることができた。
- 7 畦畔中には、土器・木製農耕具・田下駄等が埋め込まれるような状態で出土した。土器の完形品や首長が所有した木製農耕具が偶然に混入するとは考えにくい状況にあり、何らかの祭祀が行われた可能性が考えられた。

引用・参考文献

- 相羽重徳 2003 「越中瀬戸広口壺に関する素描—県内出土報告例から—」『研究紀要』4 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 相羽重徳^{2003a} 2002 『北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅰ寺地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第113集。新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 相羽重徳 2008 「姫御前遺跡から出土した中近世の土器・陶磁器」『北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅶ 姫御前遺跡Ⅰ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第184集。新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 相羽重徳 2009 「新潟県における近世火葬骨蔵器の様相」『新潟県の考古学Ⅱ』新潟県考古学会
- 青木重孝 1966 『青海—その生活と発展—』新潟県青海町役場
- 青木重孝²⁰⁰⁹ 1979 『糸魚川市史4 近世3—江戸後期(中)—』新潟県糸魚川市役所
- 青木 学²⁰⁰⁶ 2006 『下新保高田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第218集。新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 秋田裕毅 2002 「下駄 神のはきもの」『ものと人間の文化史』104 法政大学出版局
- 赤塚美智代 1987 「加工内壺」『土田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第2集。愛知県埋蔵文化財センター
- 網野善彦 1993 「飛騨寛書」『異形の王権』平凡社
- 安藤文一²⁰⁰³ 1978 『笛吹田遺跡』新潟県糸魚川市教育委員会
- 飯坂盛泰 2007 「山岸遺跡」『埋文にいかた』61 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 飯坂盛泰²⁰⁰⁶ 2006 「北沖東遺跡 長束東遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第156集。新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 猪狩俊哉 2004 「第V章遺物 5木製品 A記述の方針」『青田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第133集。新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 石川考古学研究会 1997 『石川県考古資料調査・集成事業報告 祭祀具Ⅱ』石川考古学研究会
- 石川智紀²⁰⁰⁶ 1994 『神ノ羽遺跡Ⅰ(A地区)』新潟県埋蔵文化財調査報告書第58集。新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 石川ゆずは 2005 「弥生時代中期～古墳時代前期にかけての木製容器—小型容器・羽物桶を中心に—」『富山考古学研究』第8号。財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 石川ゆずは 2008 「東日本の農耕具 北陸」『季刊考古学』104 雄山閣
- 石田耕吾 1982 「西畑城郡」『新潟県の作神信仰—越後・佐渡の農耕儀礼調査報告書Ⅱ—』無形の民俗文化財記録第8集。新潟県教育委員会
- 一色八郎 1998 『箸の文化史』御茶の水書房
- 伊藤友久²⁰⁰⁶ 2000 『川田桑理遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書47。財団法人長野県文化振興財団長野県埋蔵文化財センター
- 糸魚川市史編さん委員会 1986 『糸魚川市史 資料集Ⅰ 考古編』新潟県糸魚川市役所
- 今村 克・山岸洋一 2008 『須沢角地遺跡発掘調査報告書』新潟県糸魚川市教育委員会
- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁樹の分類」『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会
- 卜部厚志・高濱信行 2001 「正尺A・正尺C遺跡から産出した火山灰層の鉱物組成と火山ガラスの化学組成」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成12年度』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 及川良彦 1998 「関東地方の低地遺跡の再検討—弥生時代から古墳時代前半の「周溝を有する建物跡」を中心に—」『青山考古』15 青山考古学会
- 及川良彦 1999 「関東地方の低地遺跡の再検討(2)—『周溝を有する建物跡』と方形周溝墓および今後の集落研究への展望—」『青山考古』16 青山考古学会

- 及川良彦 2001 『低地遺跡の再検討(3)－『周溝を有する建物跡』の再検討－』『青山考古』18 青山考古学会
- 大橋康二 1993 『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社
- 岡本淳一郎 2003 『『周溝をもつ建物』の基礎的研究』『富山大学考古学研究室論集 蟹気楼』六一書房
- 岡本淳一郎 2006 『周溝をもつ建物の分類と系譜』『下老子管川遺跡発掘調査報告書』富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第31集 財団法人富山県文化振興財団
- 尾崎高宏 2005 『下馬場遺跡・榎田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第152集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 尾壽大真 2009 『日本版較正曲線の作成と新たな課題』『新弥生時代のはじまり第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代』雄山閣
- 小田由美子^{aa)} 2006 『越巻4号塚・谷地製鉄跡・大慶寺御経塚』新潟県埋蔵文化財調査報告書第158集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小野正敏 1982 『15、16世紀の埴付碗、皿の分類とその年代』『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会
- 春日真実 1998 『西頸城地域における古代の土器様相』『研究紀要』2 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1999 『第4章古代 第2節土器編年と地域性』『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院
- 春日真実 2009 『山岸遺跡』『埋文にいがた』No.66 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実^{aa)} 2000 『大武造跡Ⅰ(中世編)』新潟県埋蔵文化財調査報告書第97集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実^{aa)} 2008 『六反田南遺跡・前波南遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第202集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実^{aa)} 2009 『深谷遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第198集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学 1999 『第V章上層の調査 1遺構 A記述の方針』新潟県埋蔵文化財調査報告書第93集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学^{aa)} 2003 『仲田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第128集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学^{aa)} 2006b 『大角地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第173集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学^{aa)} 2008 『姫御前遺跡Ⅰ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第184集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤由美子^{aa)} 2009 『五千石遺跡 3区発掘調査概報』新潟県長岡市教育委員会・株式会社大石組
- 金子拓男 1975 『新潟県青島町天神山経塚出土の陶製経筒と珠洲焼の成立について』『信濃』27-1 信濃学会
- 金子正典・滝沢規朗・丸山一昭 1999 『第3章 弥生時代・古墳時代 第2節 土器 第3項 弥生後期』『新潟県の考古学』新潟県考古学会
- 金塚友之 1970 『蒲原の民俗－新潟県民俗学会叢書－』野島出版
- 川村浩司 2000 『上越市の古墳時代の土器様相－関川右岸下流域を中心に』『上越市史研究』5 上越市史専門委員会
- 木島 勉^{aa)} 1986 『後生山遺跡』糸魚川市埋蔵文化財調査報告13 新潟県糸魚川市教育委員会
- 木島 勉 1989 『立ノ内遺跡・山崎三十三塚』糸魚川市埋蔵文化財調査報告書16 新潟県糸魚川市教育委員会
- 木島 勉 2005 『頸城32笛吹田遺跡 33後生山遺跡』『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』第2分冊 新潟県考古学会
- 木島 勉 2007 『山崎A・B遺跡』『第14回遺跡発掘調査報告会資料』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 木島 勉 2010 『スナカワの遺跡～糸魚川市内における遺跡発掘調査の成果と課題～』『第17回遺跡発掘調査報告会』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

- 北野博司 1991 「大型土坑について」『押水町冬野遺跡群』石川県立埋蔵文化財センター
- 楠 正勝 1989 「周溝を有する建物」『金沢市西念・南新保遺跡Ⅱ』金沢市文化財紀要 77 石川県金沢市・金沢市教育委員会
- 工業善通 1991 『水田の考古学』東京大学出版会
- 黒崎 直 1970 「木製農具の性格と弥生社会の動向」『考古学研究』16 - 3 考古学研究会
- 黒崎 直 1996 『古代の農具』日本の美術 第357号 至文堂
- 工業善通・黒崎 直 1994 「木工文化のはじまり」『季刊考古学』47 雄山閣
- 小池勝典 2010 「南押上遺跡—古墳時代前期の玉作集落」『第17回遺跡発掘調査報告会資料』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小池義人 1986 「第Ⅲ草遺跡各説 C. 岩野E遺跡 6. まとめ b. 石器について」『中原遺跡・岩野A遺跡・岩野E遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第45集 新潟県教育委員会
- 小池義人²²⁾ 1994 「細池遺跡・寺道遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第59集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小池義人²³⁾ 2000 「裏山遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第96集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 古泉 弘 2001 「VI江戸の生活文化 1食文化厨房具 5木製調理器具」『因説 江戸考古学研究事典』柏書房
- 小島幸雄²⁴⁾ 1996 『前田遺跡発掘調査報告書』新潟県上越市教育委員会
- 駒形敏朗²⁵⁾ 2008 『五千石遺跡—4・5区発掘調査概報』新潟県長岡市教育委員会・株式会社大石組
- 坂井秀弥 1981 「水田址からみた初期稲作技術—『不定形小区画水田』の一考察—」『関西学院考古学』7 関西学院考古学研究会
- 坂上有紀・高橋 保・田海義正 2000 『平田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第98集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 佐久間淳一 1982 「第一章 農耕生活」『新潟県史 資料編 22 民俗・文化財Ⅰ 民俗編Ⅰ』新潟県
- 笹澤正史 2005 「頸城地域における弥生時代後期から古墳時代前期の集落動態」『新潟県における高地性集落の解体和古墳の出現』第1分冊 新潟県考古学会
- 笹澤正史²⁶⁾ 1999 『津倉田遺跡』新潟県上越市教育委員会
- 笹澤正史²⁷⁾ 2006 『吹上遺跡』新潟県上越地域振興局・新潟県上越市教育委員会
- 佐藤明人 1986 「新保遺跡出土木製品・加工材」『新保遺跡Ⅰ』関越自動車道（新潟県）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第10集 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 佐藤敦史²⁸⁾ 2002 『寺地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第113集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 佐藤友子²⁹⁾ 2009 『田伏山崎遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第205集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 佐藤俊幸・田海義正³⁰⁾ 1992 『新潟県歴史の道調査報告書 第一集 加賀街道 松本街道』新潟県教育委員会
- 新保誠吾 1998 『荒所遺跡発掘調査報告書』新潟県古川町教育委員会
- 樺山林羅 1972 「神坂峠」『神道考古学講座 5 祭祀遺跡特説』雄山閣
- 鈴木郁夫 1983 「1 地形分類Ⅰ 地形概説」『新潟県上越地域土地分類基本調査 糸魚川』新潟県農地部総合整備課
- 鈴木郁夫 2000 「1 概説 1. 地形概説」『新潟県地質図説明書（2000年度版）』新潟県商工労働部商工振興課
- 鈴木 茂 2002 「第Ⅵ章 自然科学分析 1花粉分析」『寺地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第113集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木俊成³¹⁾ 1988 『小出越遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第51集 新潟県教育委員会
- 関 雅之 1972 『田伏玉作遺跡』新潟県糸魚川市教育委員会
- 関 雅之 1990 「古代細型管状土錘考」『北越考古学』3 北越考古学研究会
- 関根達人 2009 「北日本（北海道・青森県・岩手県域）における江戸時代後期の陶磁器の流通」『江戸後期におけ

- る庶民向け陶磁器の生産と流通（関東・東北・北海道編）第19回九州近世陶磁学会資料、九州近世陶磁学会
- 千家和比古 1978 「第4章 遺物 4 土器類」「第5章 総括 2 遺物について」『笛吹田遺跡』新潟県糸魚川市教育委員会
- 相馬御風 1938 「身辺雑記」『相馬御風一人雑誌 野を歩む者』46 野を歩む者の会
- 高橋 保 1988 『立ノ内遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第49集 新潟県教育委員会
- 高橋 保 1979 『下谷地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第19集 新潟県教育委員会
- 高橋 保 1999 『製塩』『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院
- 高橋保雄^{23a} 1996 「水久保遺跡」『北越北線関係発掘調査報告書 水久保遺跡 宮平遺跡Ⅱ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第79集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 滝沢規朗 1992 「西谷遺跡の水田について」『西谷遺跡発掘調査報告書』刈羽村埋蔵文化財調査報告書第1集 新潟県刈羽村教育委員会
- 滝沢規朗 2005 「土器の分類と変遷—いわゆる北陸系を中心に—」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』第1分冊 新潟県考古学会
- 滝沢規朗 2009 「新潟県における弥生時代の建物について」『三面川流域の考古学』第7号 奥三面を考える会
- 滝沢規朗 2010a 「新潟県弥生時代後期における北陸北東部系の高杯・器台について」『三面川流域の考古学』第8号 奥三面を考える会
- 滝沢規朗 2010b 「山元遺跡と北陸の弥生後期」『第5回 年代測定と日本文化研究 シンポジウム予稿集』シンポジウム事務局・株式会社加速器分析研究所
- 田嶋明人 1986 「漆町遺跡出土土器の編年の考察」『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター
- 田嶋明人^{23a} 1988 「漆町遺跡Ⅱ」石川県立埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 2006 「白江式」再考」『吉岡康暢先生古希記念論集 陶磁器の社会史』桂書房
- 田嶋明人 2007 「法弘式と月形式」『石川県埋蔵文化財情報』第18号 財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 田中照久・木村宏一郎 2005 「越前」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相—生産技術の展開と編年—』資料集 同実行委員会
- 田村浩司^{23a} 2008 「吉津川遺跡」三条市文化財調査報告書第21号 新潟県三条市教育委員会
- 土田孝雄 1978 「第2章 調査の経過 1 発掘調査に至るまで」『笛吹田遺跡』新潟県糸魚川市教育委員会
- 土田孝雄^{23a} 1988 「須沢角地A遺跡発掘調査報告書」新潟県青海町教育委員会
- 土本 匠^{23a} 2008 「西部遺跡V」新潟県埋蔵文化財調査報告書第178集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 寺崎裕助^{23a} 1988 「北陸自動車道糸魚川地区発掘調査報告書Ⅳ 原山遺跡 大塚遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第50集 新潟県教育委員会
- 寺村光晴 1966 「古代玉作の研究」吉川弘文館
- 寺村光晴・安藤文一^{23a} 1979 「大角地遺跡—飾玉とヒスイの工房址—」新潟県青海町教育委員会
- 寺村光晴・青木重孝・関雅之 1987 「史跡 寺地遺跡」新潟県青海町教育委員会
- 柳木英道 1995 「谷内・杉谷遺跡群」石川県立埋蔵文化財センター
- 土橋由理子^{23a} 2006 「馬見坂遺跡・正尺A遺跡・正尺C遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第165集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鳥居美榮^{23a} 2001 「五斗田遺跡」新潟県長岡市教育委員会
- 富山県埋蔵文化財センター 1984 「北陸自動車道遺跡調査報告—上市町木製品・総括編—」富山県上市町教育委員会
- 永井久美男 1994 「中世の出土銭—出土銭の調査と分類—」兵庫県埋蔵文化財調査会
- 永井久美男 1996 「日本出土銭総覧 1996年版」兵庫埋蔵文化財調査会
- 永井 学 1996 「大武遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報平成7年度』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

- 中沢 厚 1981 『ものと人間の文化史 44 つぶて』 法政大学出版局
- 奈良国立文化財研究所 1985『木器集成図録—近畿古代編』
- 奈良国立文化財研究所 1993『木器集成図録—近畿原始編』
- 新潟県教育委員会 1953『千種 新潟県文化財報告第1(考古編)』
- 野水晃子²²⁾ 2005 『西川内北道跡 西川内南道跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第146集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 野村忠司²³⁾ 2009 『子安道跡』新潟県上越市教育委員会
- 樋上 昇 1994 『耕作のための道具—ナスビ形農耕具を中心に—』『季刊考古学』47 雄山閣
- 樋上 昇 2000 『曲柄蹴の伝播と流通』『考古学ジャーナル』486 ニュー・サイエンス社
- 樋上 昇 2000 『木製農耕具』ははたして『農耕具』なのか『考古学研究』47巻第3号 考古学研究会
- 久田正弘 1999 『石製取穫具 打製石包丁』『農具』石川県考古学資料調査・集成事業報告書 石川県考古学会
- 久田正弘・馬場伸一郎 2003 『石川県羽市東の塚ヶノハナ道跡における弥生時代の管玉加工技術と角柱体の形成』『アルカ研究論集』1 株式会社アルカ
- 平野国三・渡辺秀雄 1968 『西頸城郡』『日本歴史地名大系 15 新潟県の地名』平凡社
- 深堀 茜 1999 『北陸の木製農耕具集成(1)』『富山考古学研究』紀要第2号 財団法人富山県文化振興財団文化財調査事務所
- 深堀 茜 2000 『北陸の木製農耕具集成(2)』『富山考古学研究』紀要第3号 財団法人富山県文化振興財団文化財調査事務所
- 藤澤良祐 1993 『瀬戸市史 陶磁史篇四』愛知県瀬戸市
- 藤澤良祐 2008 『中世瀬戸窯の研究』高志書院
- 藤巻正信 1989 『土器片円盤について』『新潟考古学談話会報』第3号 新潟考古学談話会
- 星野信明²⁴⁾ 1996 『神ノ羽道跡Ⅱ(B地区)』新潟県埋蔵文化財調査報告書第80集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 細井佳浩²⁵⁾ 2006 『土居下道跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第166集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 細井佳浩²⁶⁾ 2010 『六反田南道跡Ⅱ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第211集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 本間嘉晴²⁷⁾ 1975 『浜田道跡』新潟県真野町教育委員会
- 本間克成²⁸⁾ 2003 『蒲籠道跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第126集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 前川雅夫²⁹⁾ 2005 『道端道跡Ⅲ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第142集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 町田賢一 2006 『下老子笹川道跡』富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第31集 財団法人富山県文化振興財団文化財調査事務所
- 松島悦子³⁰⁾ 2010 『五千石道跡2区・4区西地区』燕市埋蔵文化財発掘調査報告書第6集 新潟県燕市教育委員会
- 水澤幸一 1999 『瓦器、その城館的なもの』『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第9集 帝京大学山梨文化財研究所
- 水澤幸一 2004 『15世紀前葉から中葉の貿易陶磁器様相』『貿易陶磁研究』24 日本貿易陶磁研究会
- 水澤幸一 2005a 『越後の様相』『中世北陸の茶道具』第18回北陸中世考古学研究会資料集 北陸中世考古学研究会
- 水澤幸一 2005b 『越後の中世土器』『新潟考古』16 新潟県考古学会
- 光谷拓実 1995 『二口かみあれた道跡出土木製品の年輪年代』『二口かみあれた道跡』石川県志雄町教育委員会
- 宮田進一 1997 『越中瀬戸の変遷と分布』『中近世の北陸—考古学が語る社会史—』北陸中世土器研究会編 桂書房
- 宮本長二郎 1979 『住生活』『日本考古学を学ぶ(2)』有斐閣

- 宮本長二郎 1986 『住居と倉庫』『弥生文化の研究 第7巻 弥生集落』雄山閣
- 宮本長二郎 2001 『原始・古代の住居の復元』日本の美術第420号 至文堂
- 宮本長二郎 2007 『出土建築部材が解く古代建築』日本の美術第490号 至文堂
- 向井由紀子・橋本慶子 2001 『著(はし)もの』と人間の文化史102 法政大学出版局
- 村上恭通 2001 『日本海沿岸地域における鉄の消費形態—弥生時代後期を中心として—』『古代文化』53-4 財団法人古代学協会
- 村田道博²⁰⁾ 2009 『西部遺跡Ⅳ・板林遺跡Ⅲ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第194集。新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 森田 勉 1982 『14～16世紀の白磁の分類と編年』『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会
- 森本朝子・片山まび 2000 『博多出土の高麗・朝鮮陶磁の分類試案—生産地編年を視座として—』『博多研究会誌』8 博多研究会
- 矢田俊文 1993 『延徳3年細川政元の越後下向と越後守護上杉氏の饗宴の場』『環日本海地域比較史研究』第2号 新潟大学環日本海地域比較史研究会
- 矢田俊文 2005 『戦国期北陸の本願寺と領主』『日本海域歴史大系 第三巻 中世篇』清文堂出版
- 柳田國男²¹⁾ 1951 『民俗学辞典』財団法人民俗学研究所編 東京堂出版
- 柳田國男 1963 『年古の二種』『定本 柳田國男集』第13巻 筑摩書房
- 山岸洋一 2001 『糸魚川遺跡地図』新潟県糸魚川市教育委員会
- 山岸洋一・田村公一 2004 『水越寺跡発掘調査報告書』糸魚川市埋蔵文化財調査報告書47 新潟県糸魚川市教育委員会
- 山岸洋一 2005 『平成16年度笛吹田遺跡発掘調査概要報告書』糸魚川市文化財調査報告書49 新潟県糸魚川市教育委員会
- 山岸洋一 2006 『平成17年度笛吹田遺跡発掘調査概要報告書』糸魚川市文化財調査報告書53 新潟県糸魚川市教育委員会
- 山崎忠良²²⁾ 2008 『延命寺遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第201集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 山崎 天²³⁾ 2004 『寛下遺跡』五泉市文化財文化財報告12 五泉市教育委員会・有限会社山武考古学研究所
- 山田しょう・志村宗昭 1989 『石器の破壊力学(2)』『旧石器考古学』39 旧石器文化談話会
- 山田昌久 1986 『くわとすきの来た道』『新保遺跡1』関越自動車道(新潟県)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第10集 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 吉岡康暢 1994 『日本海域の土器・陶磁器 [中世編]』六興出版
- 四柳嘉章 1987 『西川島 能登における中世村落の発掘調査』石川県・穴水町教育委員会
- 立教大学博物館学講座 1967 『新井市内における五輪塔の調査』『新潟県新井市における考古学的調査』立教大学学校・社会教育講座
- 渡邊明和²⁴⁾ 2001 『八幡山遺跡発掘調査報告書』新潟県新津市教育委員会
- 渡邊裕之 2007 『山岸遺跡—平安時代末—鎌倉時代の祭祀・信仰の場—』『第14回 遺跡調査報告会』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 渡邊裕之²⁵⁾ 2008 『横マクリ遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第188集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 渡辺 誠 1981 『編み物用鎌具としての自然石の研究』『名古屋大学文学部研究論集』LXXX 史学27 名古屋大学文学部

姫御前跡跡Ⅱ 遺構観察表(1) 平地建物・掘立柱建物

S1216 (同溝: SD201, SD204, SK210, SK211, SD214, SD215, SK218, SD223)

グリッド	19・20 B		平地建物		軒行 (m)	3.74	梁間 (m)	3.35	床面積	49㎡	時期	シンボ6期	主軸方向	-
柱穴番号	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	礎石高 (m)	礎石高 (m)	深さ (m)	柱穴間隔	差違 (m)	方位	N76°E			
P247	円形	扇半状	38	36	4.49	3.84	0.65	247-248	3.74				寄り合い関係	
P246	円形	扇半状	43	40	4.52	4.02	0.50	246-245	3.22					
P248	楕円形	扇半状	29	28	4.60	4.17	0.43	248-247	3.35					
P245	円形	扇半状	40	37	4.58	4.28	0.30	245-248	3.64					
出土遺物	土師器: 149 (SD201), 164 ~ 168 (SK201), 161 ~ 162 (SK204), 192 (SK207), 169 ~ 170 (SK210), 163 (SK211), 156 ~ 157 (SD214), 150 ~ 155 ~ 414 (SD215), 158 ~ 160 (SD223) 短土製土器: 392 (SK211), 391 (P246) ~ 392 (P246), ヒスイ原石: 398 (P245), 滑石片: 383 (SD201), 鏡状原石: 439 (P247), 柱根: 500 (P247-1-58) (P246)-582 (P245)-583 (P248)													

S1401

グリッド	21・22 B		平地建物		軒行 (m)	2.78	梁間 (m)	2.72	床面積	不明	時期	古墳前期	主軸方向	-
柱穴番号	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	礎石高 (m)	礎石高 (m)	深さ (m)	柱穴間隔	差違 (m)	方位	N25°E			
P231	不整形	扇半状	68	47	4.66	4.27	0.39	231-230	2.72				寄り合い関係	
P230	不整形	半円状	66	63	4.65	4.40	0.25	230-239	2.16					
SK232	円	半円状	36	35	4.57	4.40	0.17	232-231	2.78				出土遺物	
SK239	不整形	V字状	59	48	4.66	4.56	0.10	239-232	2.72					

S1402 (同溝: SD236 ?)

グリッド	23 B		平地建物		軒行 (m)	3.51	梁間 (m)	3.40	床面積	不明	時期	シンボ6期	主軸方向	-
柱穴番号	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	礎石高 (m)	礎石高 (m)	深さ (m)	柱穴間隔	差違 (m)	方位	N78°E			
P290	楕円形	半円状	51	33	4.51	4.31	0.20	290-292	3.51				寄り合い関係	
P292	楕円形	扇状	33	28	4.55	4.32	0.23	292-277	3.40					
P296	円形	U字状	35	30	4.58	4.22	0.36	296-290	3.35				出土遺物	
P276	円形	U字状	27	26	4.62	4.28	0.34	277-296	3.70					

S1410 (同溝: SD208 ?)

グリッド	22・22A・B		平地建物		軒行 (m)	2.88	梁間 (m)	1.60	床面積	不明	時期	シンボ6~7期	主軸方向	東長
柱穴番号	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	礎石高 (m)	礎石高 (m)	深さ (m)	柱穴間隔	差違 (m)	方位	N64°E			
P356	長方形	U字状	28	21	4.38	4.06	0.30	256-403	2.88				寄り合い関係	
P403	楕円	U字状	40	23	4.38	4.03	0.35	403-273	1.80					
SK250	半楕形	扇半状	40	37	4.38	4.09	0.29	250-256	1.60				出土遺物	
P273	半楕形	U字状	30	25	4.48	4.16	0.32	273-250	2.90				土師器: 172 (P273)	

SB198

グリッド	19B		掘立柱建物 (竪柱)		軒行 (m)	2.82	梁間 (m)	2.00	床面積	5.78	時期	古墳前期	主軸方向	-
柱穴番号	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	礎石高 (m)	礎石高 (m)	深さ (m)	柱穴間隔	差違 (m)	方位	N16°W			
P425	楕円形	弧状	32	26	4.58	4.50	0.08	425-285	2.56				寄り合い関係	
P265	円形	半円状	24	24	4.62	4.54	0.08	265-266	2.46				S1216の付属施設か	
P266	楕円形	弧状	20	20	4.64	4.58	0.06	266-423	2.56				出土遺物	
P423	楕円形	U字状	24	24	4.62	4.48	0.14							

SB370

グリッド	25 B		掘立柱建物 (竪柱)		軒行 (m)	6.8	梁間 (m)	2.0	床面積	13.6	時期	古墳前期	主軸方向	南北
柱穴番号	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	礎石高 (m)	礎石高 (m)	深さ (m)	柱穴間隔	差違 (m)	方位	N29°E			
P356	円形	扇半状	29	26	4.47	4.25	0.22	356-345	2.46				寄り合い関係	
P345	円形	U字状	30	30	4.35	3.97	0.38	345-360	3.00					
P360	楕円形	半円状	32	26	4.40	4.24	0.16	360-348	1.84					
P335	円形	扇半状	26	23	4.32	3.94	0.38	335-355	1.86					
P355	楕円形	半円状	26	21	4.55	4.43	0.12	355-344	2.54				出土遺物	
P344	円形	U字状	30	26	4.50	3.89	0.61	344-348	2.36					
P348	円形	U字状	26	23	4.48	4.38	0.10	356-355	2.04				1.塚跡: 183 (P348)	
								345-344	1.88					

SB341

グリッド	31 A・B		掘立柱建物 (竪柱)		軒行 (m)	6.1	梁間 (m)	3.0	床面積	18.5	時期	古墳前期	主軸方向	南北
柱穴番号	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	礎石高 (m)	礎石高 (m)	深さ (m)	柱穴間隔	差違 (m)	方位	N70°W			
P339	楕円形	U字状	42	36	4.33	3.95	0.38	339-327	1.55				寄り合い関係	
P327	楕円形	扇半状	35	33	4.38	4.00	0.38	327-326	1.90					
P326	楕円形	U字状	29	26	4.38	3.99	0.39	326-340	2.82					
P340	楕円形	V字状	28	23	4.38	4.08	0.30	340-339	3.05					
P339	円形	扇状	26	25	4.16	4.00	0.16	339-338	2.66				出土遺物	
P338	円形	U字状	33	32	4.39	4.01	0.38	338-337	1.62					
P337	楕円形	U字状	31	25	4.38	3.94	0.44	337-327	2.85				柱根: 587 (P340)	

観 察 表

姫御前遺跡Ⅱ 遺構観察表(2) 平地建物・掘立柱建物

SB399														
グリッド	31B		掘立柱建物(竪柱)		桁行 (m)	3.4	深間 (m)	3.3	床面積	7.82	時期	占領前期	主軸方向	南北
柱穴番号	平面形	断面形	直径 (cm)	知程 (cm)	礎礎高 (m)	柱底高 (m)	深さ (m)	柱穴間隔	溝幅 (m)	方位	N17°W			
P388	楕円形	U字状	26	22	4.32	3.96	0.36	388-385	2.10		掘り合い・遺構			
P385	楕円形	平円状	30	24	4.36	4.28	0.08	385-383	3.40					
P383	楕円形	楕状	24	22	4.34	4.14	0.20	383-386	2.30		出土遺物			
P386	円形	U字状	22	22	4.30	4.10	0.20							

SA199														
グリッド	27A		杭列(柱列)		桁行 (m)	-	深間 (m)	-	床面積	-	時期	占領前期	主軸方向	東西
柱穴番号	平面形	断面形	直径 (cm)	知程 (cm)	礎礎高 (m)	柱底高 (m)	深さ (m)	柱穴間隔	溝幅 (m)	方位	N85°E			
P421	円形	U字状	40	35	4.48	3.94	0.54	421-224	2.50		掘り合い・遺構			
P424	楕円形	U字状	50	40	4.46	4.02	0.44	224-420	2.90					
P420	円形	U字状	40	40	4.48	4.02	0.46				出土遺物			
柱組：S84～S86 (P420～S224)、P421														

SA369														
グリッド	27A		杭列(柱列)		桁行 (m)	-	深間 (m)	-	床面積	-	時期	占領前期	主軸方向	東西
柱穴番号	平面形	断面形	直径 (cm)	知程 (cm)	礎礎高 (m)	柱底高 (m)	深さ (m)	柱穴間隔	溝幅 (m)	方位	N47°E			
P308	円形	楕状	24	22	4.21	4.06	0.15	308-306	2.60		掘り合い・遺構			
P306	楕円形	V字状	40	36	4.31	3.91	0.30	306-304	2.60					
P304	円形	U字状	38	34	4.18	3.94	0.24				出土遺物			

SA429														
グリッド	22A		杭列(柱列)		桁行 (m)	-	深間 (m)	-	床面積	-	時期	占領前期	主軸方向	東西
柱穴番号	平面形	断面形	直径 (cm)	知程 (cm)	礎礎高 (m)	柱底高 (m)	深さ (m)	柱穴間隔	溝幅 (m)	方位	N45°E			
P404	円形	V字状	24	24	4.51	4.32	0.19	404-259	2.15		掘り合い・遺構			
P239	円形	U字状	34	34	4.49	4.20	0.29	239-255	1.45					
P255	円形	U字状	30	28	4.46	4.23	0.23	255-254	0.88		出土遺物			
P254	円形	U字状	28	27	4.50	4.18	0.32				土層部：171 (P404) ヒスイ石(重：404 (P259))			

SA430														
グリッド	31B		杭列(柱列)		桁行 (m)	-	深間 (m)	-	床面積	-	時期	占領前期	主軸方向	東西
柱穴番号	平面形	断面形	直径 (cm)	知程 (cm)	礎礎高 (m)	柱底高 (m)	深さ (m)	柱穴間隔	溝幅 (m)	方位	N66°E			
P416	円形	楕円状	32	30	4.52	4.35	0.17	416-415	1.08		掘り合い・遺構			
P415	楕円形	U字状	26	21	4.56	4.24	0.32	415-414	1.55					
P414	円形	平円状	30	32	4.40	4.40	0.18				出土遺物			

姫御前遺跡Ⅱ 遺構観察表(3) 溝

遺構番号	グリッド	長さ (m)	幅 (cm)	深さ (cm)	平面形	断面形	層上	方位	出土遺物		掘り合い・遺構
SD201	19A15-20	3.8	79	11	直線	溝状	単層	N90°	164～168・382		SD216<
SD203	22C-23B-24A	20.4	78	26	直線	溝状～楕状	水平	N58°W～N90°	357・364～367・370・372・373・397		P416>
SD204	19A5-10, 19B1-2-6	3.7	130	16	不規則	溝状	水平	-	161・182		SD216<
SD206	25B4-9-14	(6.0)	33	8	直線	溝状	単層	N62°E			P347, P355>
SD207	19～21C (2A,8)	8.5	12	62	蛇行	溝状	水平	N69°E	192		
SD209	25～27B-28A	32.8	180	30	蛇行	台形状	水平	N82°E～N74°W	195～214・363・384・395・396・441・446・453		P383, P335, SR202>
SD213	21B10	(5.4)	120	6	直線	溝状	水平	N19°W			SD213=
SD214	20B12-13	3.2	215	20	楕円形	溝状	斜め	N0°	156・157		SD216<
SD215	20B17～19	4.8	120	18	直線	溝状	水平	N21°W	150～155・414		SD216<
SD217	19B2-7	(4.8)	66	13	直線	台形状	水平	N49°W～N57°E			SD207=
SD219	21A15-20	(1.8)	140	26	不規則	溝状～扇斗状	水平	N73°E～N88°E			
SD220	21A25	4.04	140	26	不規則	扇斗状	単層	N88°E			
SD223	20A5	3.3	204	22	不規則	扇斗状	水平	N59°E	158～160		SD216<
SD232	21C21-22C1	(1.1)	(60)	12	不規則	溝状	斜め	N26°W			
SD233	22B3-13	2.0	56	31	不規則～蛇行	溝状～台形状	水平～斜め	N72°E	177～179・447		SD256<
SD234	20B3	2.0	44	11	蛇行	溝状	斜め	N29°W			
SD236	22B23	3.0	56	17	直線	台形状	水平	N22°E			SD406<
SD239	21B20	0.9	40	11	不規則	台形状	水平	N76°E			
SD249	23B	1.9	32	6	直線	溝状	水平	N0°			
SD257	22B	2.5	38	19	直線	溝状	水平	N45°W			

姫御前遺跡Ⅱ 遺構観察表(3) 溝

遺構番号	グリップ	長さ (m)	幅 (cm)	深さ (cm)	平面形	断面形	層上	方位	出土遺物	切り合い関係
SD258	2289	3.3	30	5	直線	弧状	新め	N45° W		SD233 >
SD294	2298	1.8	66	4	不整形	弧状	卑層	N88° E		
SD295	2298	1.3	32	17	直線	平円状	水平	N78° E		
SD300	25-26B	12.6	39	11	蛇行	弧状	水平	N84° E ~ N50° E	193・194・289	
SD347	2588-9	1.6	40	19	直線	弧状	水平	N17° W		
SD274 ~ 377	29-30B	10.0	50	10	直線	弧状	卑層	N81° W	188	
SD406	22823	(1.1)	40	18	(不整形)	平円状	水平	N61° W		SD236 >
SD409	2287	2.0	32	15	直線	平円状	水平	N53° E		
SD411	22817	1.5	36	9	直線	平円状	新め	N7° W		
SD412	25A20-25	0.7	32	15	不整形	平円状	水平	N79° W		
SD419	20824	1.56	55	5	不整形	弧状	新め	N83° E		
SD520	37 ~ 40B	30	120	35	蛇行	弧状~台形状	水平	N24° E ~ N89° E	245 ~ 278・299 ~ 402・ 412・416・428・429・ 432・434・448・566・579	
SD522	39A-40B	1.56	108	14	直線	弧状	水平	N25° E	189	

姫御前遺跡Ⅱ 遺構観察表(4) 土坑

遺構番号	グリップ	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面高 (m)	層上	出土遺物	切り合い関係
SK200	1994	楕円形	平円状	980	75	30	4.48	水平		
SK208	23A9-14	不整形	平円状	148	104	27	4.23	水平	180 ~ 182	SH10 =
SK210	20814-15	不整形	弧状	160	141	22	4.42	水平	169・170	SD216=
SK227	2189-14-19	楕円形	弧状	140	110	25	4.22	水平		
SK229	21819-24	方形	弧状	120	80	36	4.40	水平	173・425	
SK235	21825	不整形	弧状	82	56	20	4.45	新め		
SK242	21818	楕円形	弧状	88	60	15	4.48	水平		
SK243	22A24	不整形	弧状	80	44	20	4.26	水平		
SK253	19813	不整形	弧状	76	72	24	4.31	水平		
SK311	32A4-5	不整形	弧状	160	76	21	4.10	水平		
SK312	2897-8	不整形	弧状	136	60	15	3.98	卑層		
SK313	2897-8	楕円形	平円状	(24)	24	25	3.95	新め		
SK315	30A10	不整形	弧状	120	64	15	4.19	水平		
SK342	27823	不整形	弧状	108	80	14	4.06	卑層		
SK378	2997	楕円形	台形状	70	44	23	3.85	水平		
SK381	31B4	不整形	弧状	92	60	19	4.04	水平		
SK337	38816	不整形	弧状	88	68	36	4.64	水平	577	
SK541	39A4	円形	台形状	60	60	44	2.35	水平		
SK705	3089	不整形	弧状	116	88	30	3.85	水平	184 ~ 187	

姫御前遺跡Ⅱ 遺物観察表 中近世陶磁器 (2)

品目 番号	種類	形 態	寸法 mm	口径 mm	高さ mm	底径 mm	色調 外	色調 内	胎土 (土質・色調) 下段 (土人別)	製作時期	使用時期	備考				
45	青花	皿 (小野11番)	27	A	5	日 a	-	-	76 K/F 10YR/1	K/F 10YR/1	K/F N8/0 白	(内) 市田遺跡 (外) 磯山遺跡	(外) 船越ケツツケ (遺付) 磯山遺跡			
46	青花	皿 (小野11番)	23	A	13	a	-	-	88 明緑K 7.5YR/1	明緑K 10GYR/1	K/F N8/0 白	(内) 市田遺跡・磯山遺跡 (外) 磯山遺跡	15C前半～16C前半			
47	瀬戸瓦器	縁起小皿	38	B	25	日 b	104	25	42 K/F 2.5Y7/1	K/F 2.5Y7/2	K/F 2.5Y7/1 白	(内) 瀬戸 (外) 瀬戸表切	(内) 瀬戸表切	大塚1期後半 1480-1500年		
48	瀬戸瓦器	縁起小皿	23	A	25	日 b	120	25	64 K/F 5YR/2	K/F 2.5Y5/3	K/F 5YR/1 白	(内) 瀬戸	(内) スス少量	大塚1期 1480-1530年		
49	瀬戸瓦器	縁起小皿	40	A	5	日 b	100	-	-	黄灰 2.5Y6/1	黄灰 2.5Y6/1	K/F 2.5Y6/1 白	(内) 瀬戸	大塚1期後半 1500-1600年		
50	瀬戸瓦器	縁起小皿?	35	A	7	日 b	108	-	-	K/F 10YR8/2	明緑K 10YR2/2	明緑K 7.5YR7/1 白	(内) 瀬戸	大塚1期 1480-1530年		
51	瀬戸瓦器	縁起皿	26	B	22	日 a	118	-	-	浅黄 5Y7/4	浅黄 5Y7/3	K/F 5YR/1 白	(内) 瀬戸	大塚1期前半 1480-1500年		
52	瀬戸瓦器	丸皿	37	A	22	日 b	96	20	56 暗オリーブ 7.5Y4/3	暗オリーブ 7.5Y4/3	K/F 7.5Y7/1 白	(内) 瀬戸	瀬戸	大塚4期後半 1590-1600年		
53	瀬戸瓦器	丸皿	39	B	17	日 b	106	25	60 K/F 5Y7/1	K/F 5Y7/1	K/F 5Y7/1 白	(内) 瀬戸 (外) 瀬戸	瀬戸	大塚4期後半 1590-1610年		
54	瀬戸瓦器	皿	38	A	25	日 b	-	62 K/F 7.5Y7/2	浅黄 7.5Y7/3	K/F 7.5Y7/1 白	(内) 瀬戸 (外) 瀬戸	瀬戸	大塚1-2期 15C末-16C前半			
55	瀬戸瓦器	茶碗皿	26	B	3	日 a	132	-	-	浅黄 2.5Y7/4	明緑K 2.5Y6/3	K/F 2.5YR/1 白	(内) 瀬戸	瀬戸	大塚4期後半 1590-1600年	
56	瀬戸瓦器	茶碗皿	29	A	9	日 b	164	-	-	浅黄 7.5Y7/3	オリーブ黄 7.5Y6/3	K/F 2.5Y7/1 白	(内) 瀬戸	吉野川中流古墳群 1440～60年		
57	土師器	(平づくね)	23	A	4	日 b	80	-	-	黒 2.5Y2/1	黒 2.5Y2/1	黒 2.5Y2/1 土 産	(下) 瀬田田原	(内) スス		
58	土師器	(平づくね)	36	B	10	日 b	90	-	-	暗緑 N3/0	暗緑 N3/0	暗緑 N3/0 土 産	(下) 平手	瀬田田原	(内) スス	
59	土師器	(平づくね)	19	B	18	日 b	92	24	46 にがみ黄焼 10YR7/2	にがみ黄焼 5YR6/4	にがみ黄焼 7.5YR7/3 土 産	(下) 瀬田田原	瀬田田原			
60	土師器	(平づくね)	25	B	24	日 b	114	-	-	浅黄 10YR8/3	浅黄 10YR8/3	浅黄 10YR8/3 土 産	(下) 瀬田田原	瀬田田原		
61	土師器	(平づくね)	26	B	4	日 b	112	-	-	浅黄 2.5Y7/3	浅黄 2.5Y7/4	浅黄 2.5Y7/3 土 産	(下) 瀬田田原	(内) スス		
62	土師器	(平づくね)	36	B	5	日 b	134	-	-	にがみ黄焼 5YR6/4	にがみ黄焼 5YR6/4	にがみ黄焼 5YR6/4 土 産	(下) 平手	瀬田田原		
63	土師器	(ロウソク燭)	38	A	17	日 b	64	20	50 浅黄 2.5Y7/3	浅黄 2.5Y7/3	浅黄 2.5Y7/3 土 産	(外) 瀬田田原	瀬田田原			
64	土師器	(ロウソク燭)	26	B	2	日 b	72	16	50 にがみ黄焼 10YR6/4	にがみ黄焼 10YR6/4	暗緑黄 2.5Y2/2 土 産	(外) 瀬田田原	(内) スス			
65	土師器	(ロウソク燭)	24	A	4	日 b	84	17	60 黒 2.5Y2/1	黒 2.5Y2/1	黒 2.5Y2/1 土 産	(内) スス				
66	土師器	(ロウソク燭)	23	A	15	日 b	88	24	48 にがみ黄焼 10YR6/4	にがみ黄焼 7.5YR7/4	浅黄 10YR8/3 土 産	(内) 瀬田田原	瀬田田原			
67	土師器	(ロウソク燭)	22	B	3	日 b	111	28	62 にがみ黄焼 10YR6/4	にがみ黄焼 5Y5/2	浅黄 2.5Y7/3 土 産	(内) 瀬田田原	瀬田田原			
68	土師器	(ロウソク燭)	36	B	10	日 b	114	29	62 にがみ黄焼 10YR7/4	にがみ黄焼 10YR7/4	浅黄 10YR8/4 土 産	(内) 瀬田田原	瀬田田原			
69	土師器	(ロウソク燭)	36	A	7	日 b	-	100 にがみ黄焼 10YR7/3	暗緑 N3/0	にがみ黄焼 10YR7/3 土 産	(内) 瀬田田原	(内) スス				
70	土師器	(ロウソク燭)	19	B	10	日 b	168	40	104 黄灰 2.5Y7/2	黄灰 2.5Y7/2	K/F 2.5YR/2 土 産	(外) 瀬田田原	瀬田田原			
71	肥前系 陶器	縁起皿	36	B	21	日 a	119	-	-	K/F 5Y7/2	K/F 5YR/2 長 産	K/F 5YR/2 長 産	(内) 瀬戸	瀬戸	大塚1期 1610～40年代	
72	肥前系 陶器	皿	25	B	10	日 a	-	38 にがみ黄焼 7.5YR7/4	黄灰 10YR3/2	暗 5YR7/6 土 産	(内) 瀬戸 (外) 瀬戸表切	瀬戸	瀬戸	1650-90年代		
73	越中系 陶器	皿	34	B	18	日 a	-	64 にがみ黄焼 5YR6/4	にがみ黄焼 2.5YR6/4	にがみ黄焼 5YR6/4 土 産	(内) 瀬戸 (外) 瀬戸	瀬戸	17C第2～3期 前半			
74	越中系 陶器	内付	31	B	11	日 a	114	29	56 にがみ黄焼 5YR6/4	黄 7.5YR6/6	明緑K 7.5YR7/1 土 産	(内) 瀬戸	瀬戸	17C第2～3期 後半		
75	青磁	茶碗	32	B	21	日 b	382	-	-	明緑K 2.5Y7/6	K/F 2.5Y7/1 ナシ	K/F 2.5Y7/1 ナシ	-	瀬戸		
76	瀬戸瓦器	大皿	19	B	7	日 a	246	-	-	黄 N6/0	K/F N7/0 長 産	K/F N7/0 長 産	(内) 瀬戸	瀬戸	吉野川中流古墳群 1440-60年代	
77	瀬戸瓦器	茶碗縁起皿	36	B	4	日 a	332	-	-	オリーブ 5Y5/4	オリーブ 5Y5/4	K/F 5Y7/1 土 産	(内) 瀬戸	瀬戸	吉野川中流古墳群 1420-40年	
78	肥前系 陶器	茶碗口縁 (タタキ成)	37	A	18	日 a	188	-	-	黄 N6/0	黄 N5/0	K/F N5/0 土 産	(内) 瀬戸 (外) 肥前河内田原	瀬戸	16C末-1630年代	
79	青磁	茶碗	22	A	19	日 b	-	76 オリーブ黄 10Y5/2	オリーブ黄 10YR/2	K/F N8/0 白	(外) 瀬田田原	瀬田田原				
80	青磁	茶碗	36	C	1	日 b	-	84 オリーブ黄 7.5Y6/3	オリーブ黄 10YR/2	K/F 5Y7/1 白	(内) 瀬田田原	瀬田田原				
81	肥前系 陶器	鉢	24	A	18	日 a	-	64 浅黄 5Y7/3	オリーブ黄 5Y6/3	K/F 5YR/2 土 産	(上) 平～(内) 瀬戸	瀬戸	大塚1期 1610-50年代			
82	白磁	多角鉢	30	A	15	日 b	76	30	32 K/F N8/0	K/F N8/0	K/F N8/0 白	(外) 平手	瀬戸	(外) 瀬戸 (内) 瀬戸	1460-15C代	
83	青花	小鉢	37	A	9	日 b	69	40	29 明緑K 5R6Z/1	明緑K 7.5YR7/1	K/F N8/0 白	(内) 市田遺跡 (外) 磯山遺跡	(外) 磯山遺跡			
84	輸入陶器 (磁器)	茶入	31	B	19	日 b	-	22 黄灰 10YR3/1	黄灰 10YR3/1	赤灰 10R5/1 土 産	(内) 瀬戸 (外) 瀬田田原	瀬田田原	12-13C?			
85	瀬戸瓦器	茶碗縁起皿	32	B	4	日 a	-	-	オリーブ黄 5Y5/3	オリーブ黄 5Y5/3	K/F 5Y7/1 土 産	(内) 瀬戸	瀬戸	吉野川中流古墳群 1420-60年		
86	瀬戸瓦器	合子蓋	36	A	19	日 b	46	13	18 黄灰 2.5Y7/2	オリーブ黄 5Y6/3	K/F 2.5YR/2 土 産	(内) 瀬戸 (外) 瀬田田原	瀬田田原			
87	青磁	皿	31	A	20	日 b	32	20	10 オリーブ黄 5Y6/1	オリーブ黄 2.5Y6/1	K/F N7/0 白	-	-			

姫御前跡跡Ⅱ 遺物観察表 中近世陶磁器 (3)

品番	分類	形状	寸法	単位	口径 mm	高さ mm	底径 mm	色澤 特徴	色調 特徴	胎土 特徴	期工 (土質・色調) 下段 (土人別)	製作時期	使用時期	備考
88	瀬戸瓦器	四角鉢形	32 A 5 日 b	96	-	-	-	黒 2.5V2/1	黒 5V2/1	灰白 2.5V8/2	(内外) 熟焼	(白粉) 剥離	古瀬戸内陶磁館蔵 1460-80年代	
89	瀬戸瓦器	四角鉢形	22 C 6 日 a	96	-	-	-	黒 7.5V9/2	黒 7.5V9/2	灰白 5V7/1	(内) 熟焼	漆喰付	大塚蔵 1480-1610年	
90	瀬戸瓦器	浅鉢(脚付)	27 B 11 日 b	134	-	-	-	灰 0Y7/3	灰白 5V7/1	灰黒 2.5V7/2	(灰) 熟焼	-	古瀬戸内陶磁館蔵 1430~60年	
91	瀬戸瓦器	飯子皿	35 A 10 日 b	-	-	-	-	赤 5V6/3	灰黒 2.5V7/2	灰白 5V7/2	(赤) 熟焼・赤土文	-	古瀬戸内陶磁館蔵 1300-80年	
92	真洲	水引	26 A 10 日 b	-	-	-	-	灰 5V6/1	灰 7.5V7/1	灰白 N7/0	(赤) 濃灰文	-	-	
93	瀬戸瓦器	花瓶脚鉢	37 A 9 日 b	-	-	-	-	灰 7.5V7/2	灰白 5V7/2	灰白 5V7/1	(赤) 熟焼	-	古瀬戸内陶磁館蔵 14C末-15C	
94	瓦器	火入・香炉	36 B 24 日 b	87	-	-	-	灰黒 2.5V7/2	灰黒 2.5V7/2	灰白 2.5V8/1	(赤) 三垂蓋文	-	15~16C	
95	瓦器	内前瓦鉢 (口縁)	30 A 20 日 b	214	-	-	-	暗灰 N3/0	暗灰 N3/0	灰白 2.5V8/1	(赤) 二垂蓋文・格子文	-	15~16C	
96	瓦器	内前瓦鉢 (口縁)	37 B 23 日 b	283	-	-	-	濃灰 2.5V6/3	濃灰 2.5V6/3	洗灰 2.5V7/3	(赤) 二垂蓋文・乳状 文	-	15~16C	
97	瓦器	風炉	37 B 19 日 b	267	-	-	-	灰黒 2.5V6/2	灰黒 2.5V6/3	灰白 2.5V8/1	(赤) 懸流状文	-	15~16C	
98	瓦器	内前瓦鉢 (口縁)	38 B 18 日 b	428	-	-	-	灰 N4/0	灰 2V5/1	灰白 2.5V7/2	(赤) 二垂蓋文・乳状 文	-	15~16C	
99	真洲	中腰 (下縁)	22 B 25 日 b	322	-	-	-	灰 7.5V5/1	灰白 N7/0	灰白 10V9B/1	(赤) 二垂蓋文・格子 文	-	古瀬戸・N1期 13-14C/4	
100	真洲	中腰 (下縁)	30 A 4 日 b	402	-	-	-	灰 2.5V6/1	灰 5V6/1	灰白 5V7/1	(赤) 二垂蓋文	-	古瀬戸蔵 14C1/4~3/4	
101	真洲	中腰 (下縁)	28 A 9 日 b	377	-	-	-	灰 5V5/1	暗灰 10V9B/1	灰黒 2.5V6/1	(赤) ヘウ蘭文	-	古瀬戸蔵 14C1/4~2/4	
102	真洲	大腰 (下縁)	21 B 20 日 b	566	-	-	-	灰 N5/0	灰 N6/0	灰 7.5V6/1	(赤) 二垂蓋文	-	古瀬戸1~2期 14C前半	
103	真洲	大腰 (下縁)	22 B 20 日 b	512	-	-	-	灰 N5/0	灰 N6/0	灰 N6/0	(赤) 二垂蓋文	-	古瀬戸2~3期 14C2/4~3/4	
104	真洲	大腰 (下縁)	23 B 10 日 b	514	-	-	-	灰 N5/0	灰 7.5V6/1	灰白 7.5V7/1	(赤) 二垂蓋文	-	古瀬戸蔵 14C末~15C	
105	真洲	大腰 (下縁)	21 B 3 日 b	-	-	-	-	灰 N5/0	灰 N4/0	灰 5V6/1	(赤) 二垂蓋文	-	古瀬戸蔵 14C末~15C	
106	越前	大腰	29 B 22 日 b	608	-	-	-	濃灰 10V9B/4	濃灰 10V9B/4	濃灰 10V9B/3	(赤) 二垂蓋文	-	木村蔵 3期 15C前半	
107	真洲	腰 (口縁)	24 B 1 日 b	117	-	-	-	灰 N5/0	灰 N5/0	灰 赤 5V6/2	(赤) 二垂蓋文	-	古瀬戸蔵 13C後半	
108	真洲	腰 (口縁)	32 A 4 日 b	105	-	-	-	灰 N5/0	灰 N6/0	灰 N6/0	(赤) 二垂蓋文	-	古瀬戸蔵 14C末~15C	
109	真洲	腰 (口縁)	24 A 3 日 a	92	-	-	-	灰 5V6/1	灰 5V7/1	灰 5V7/1	(赤) 二垂蓋文	-	古瀬戸蔵 14C末~15C	
110	真洲	脚付鉢 (口縁)	36 A 24 日 b	-	156	-	-	灰 N5/0	灰 2.5V6/1	濃灰 10V9B/3	(赤) 二垂蓋文	-	古瀬戸蔵 14C末~15C	
111	真洲	月引鉢	27 B 15 日 b	302	-	-	-	灰 N5/0	灰 5V6/1	灰白 N7/0	(赤) 二垂蓋文	-	古瀬戸2~3期 14C2/4~3/4	
112	真洲	月引鉢	21 A 18 日 b	292	-	-	-	灰 7.5V6/1	灰 N5/0	灰 7.5V6/1	(赤) 二垂蓋文	-	古瀬戸1~2期 14C後半	
113	真洲	月引鉢	35 A 8 日 b	390	-	-	-	灰 2.5V7/2	灰白 2.5V7/1	灰白 2.5V8/2	(赤) 二垂蓋文	-	古瀬戸3期 14C3/4	
114	真洲	月引鉢	27 A 19 日 b	286	-	-	-	灰 7.5V7/1	灰白 10V97/1	灰白 10V97/1	(赤) 二垂蓋文以上	-	古瀬戸2~3期 14C2/4~3/4	
115	真洲	月引鉢	37 A 16 日 b	300	-	-	-	灰 2.5V5/1	灰 2.5V5/1	灰 2.5V6/1	(赤) 二垂蓋文以上	-	古瀬戸蔵 14C末~15C	
116	真洲	月引鉢	27 A 4 日 b	414	-	-	-	灰 5V6/1	灰白 5V7/1	灰白 5V7/1	(赤) 二垂蓋文	-	古瀬戸蔵 14C末~15C	
117	真洲	月引鉢	30 A 20 日 b	304	-	-	-	灰 5V6/1	灰 5V6/1	灰白 10V97/1	(赤) 二垂蓋文	-	古瀬戸蔵 14C末~15C	
118	真洲	月引鉢	26 B 11 日 b	340	-	-	-	灰 7.5V6/1	灰 N6/0	灰 7.5V6/1	(赤) 二垂蓋文	-	古瀬戸蔵 14C末~15C	
119	真洲	月引鉢	30 B 12 日 b	325	-	-	-	灰 5V6/1	灰 5V6/1	灰 5V6/1	(赤) 二垂蓋文以上	-	古瀬戸蔵 14C末~15C	
120	真洲	月引鉢	31 B 8 日 b	380	-	-	-	灰 7.5V5/1	灰 7.5V5/1	灰 5V6/1	(赤) 二垂蓋文以上	-	古瀬戸蔵 14C末~15C	
121	真洲	月引鉢	36 A 18 日 b	320	-	-	-	灰 N6/0	灰 N6/0	灰白 7.5V7/1	(赤) 二垂蓋文以上	-	古瀬戸蔵 14C末~15C	
122	真洲	月引鉢	20 B 4 日 b	352	-	-	-	灰 N5/0	灰 N6/0	灰 10V9/1	(赤) 二垂蓋文以上	-	古瀬戸蔵 14C末~15C	
123	真洲	月引鉢	30 A 14 日 b	262	70	134	-	灰 N6/0	灰 7.5V6/1	灰 7.5V6/1	(赤) 二垂蓋文	-	古瀬戸蔵 14C末~15C	
124	真洲	月引鉢	19 B 20 日 b	366	-	-	-	濃灰 10V97/4	濃灰 10V97/4	洗灰 2.5V7/3	(赤) 二垂蓋文	-	古瀬戸蔵 (15C後半)	
125	真洲	月引鉢	30 A 5 日 b	300	-	-	-	灰 7.5V6/1	灰 5V6/1	灰 7.5V6/1	(赤) 二垂蓋文	-	古瀬戸蔵 (15C後半)	
126	真洲	月引鉢	30 A 19 日 b	294	-	-	-	灰 2.5V8/2/4	灰 2.5V7/1	暗赤 2.5V8V2/2	(赤) 二垂蓋文	-	古瀬戸蔵 15C後半	
127	越前	風鉢	34 B 23 日 b	326	-	-	-	灰 10V95/2	灰 N6/0	灰 5V6/1	(赤) 二垂蓋文	-	中村・木村V-3期 16C末	
128	肥前系 陶器	風鉢	22 C 11 日 a	288	-	-	-	濃灰 10V93/2	濃灰 10V93/2	濃灰 2.5V8V3	(赤) 二垂蓋文	-	大塚蔵 14C末~80年代	
147	筑前系 陶器	飯子鉢	23 B 15 日 b	116	29	84	-	濃灰 10V93/2	濃灰 2.5V4/2	濃灰 2.5V4/1	(赤) 二垂蓋文	-	木村蔵 1期 9C前半	
148	土器	製塩土	26 A 3 日 b	264	-	-	-	暗灰 7.5V95/6	濃灰 10V95/4	濃灰 10V97/4	(赤) 二垂蓋文	-	古代	

姫御前跡跡Ⅱ 遺物観察表 弥生時代～古墳時代土器 (1)

[単位: 上=右長、下=左長、深=高さ、内=内径、外=外径]

発見 番号	種 別	形状 (土器)	器種 (分類)	器高 mm	器口 直径 mm	器口 形状	器口 高さ mm	器口 厚さ mm	器口 内径 mm	器口 外径 mm	色 澤		胎 土 (2段: 底・胎)		外 形	内 容	収 入 物	備 考	
											表面	内面	底	胎					
149	瓶白 (土器)	SD 216	10 B 13	110	94	96	118	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	2.5YR/3	5.0YR/4	ハケ	-	内径4.5cm 跡-1	
150	壺 (土器)	SD 215	20 B 17	2	39	120	-	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	ハケ	ハケ	ハケ	赤銅
151	壺 (土器)	SD 215	20 B 18	2	26	162	-	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	ナシ	ナシ	赤銅	
152	壺 (土器)	SD 215	20 B 17	23	17	23	-	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	ナシ	ナシ	赤銅	
153	鉢 (A 1 2 類)	SD 215	20 B 23	2	28	82	-	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	ナシ	ナシ	赤銅	
154	壺 (土器)	SD 215	20 B 17	2	37	161	寛文 205	66	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	(I) ナシ	ナシ	赤銅	
155	壺 (土器)	SD 215	20 B 18	2	10 - 11 - 19 - 2	15 - 32	184	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	(I) ナシ	ナシ	赤銅	
156	壺 (土器)	SD 214	20 B 13	2	24	184	-	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	(I) ナシ	ナシ	赤銅	
157	壺 (土器)	SD 214	20 B 13	2	5.7	183	-	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	(I) ナシ	ナシ	赤銅	
158	壺 (土器)	SD 223	20 A 5	1	8	163	-	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	(I) ナシ	ナシ	赤銅	
159	鉢 (土器)	SD 223	20 A 5	1	7	-	-	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	(I) ナシ	ナシ	赤銅	
160	瓶白 (土器)	SD 223	20 A 5	1	-	85	104	106	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	ナシ	ナシ	赤銅	
161	鉢 (A 1 2 類)	SD 204	19 B 1	1	11	41	100	64	8	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	ナシ	ナシ	赤銅	
162	鉢 (土器)	SD 204	19 B 1	1	1	100	-	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	ナシ	ナシ	赤銅	
163	瓶白 (土器)	SK 211	19 B 9	1	29 - 71	112	-	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	ナシ	ナシ	赤銅	
164	壺 (土器)	SD 201	19 A 15	20	1 - 107	87	-	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	ナシ	ナシ	赤銅	
165	壺 (土器)	SD 201	19 A 20	1	13	134	-	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	(I) ナシ	ナシ	赤銅	
166	瓶白 (土器)	SD 201	19 A 15	20	81 - 180 186	-	110	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	ナシ	ナシ	赤銅	
167	高杯 (土器)	SD 201	19 A 15	15	93 - 107	165	-	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	ナシ	ナシ	赤銅	
168	高杯 (土器)	SD 201	19 A 15	20	33 - 149	174	-	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	ナシ	ナシ	赤銅	
169	壺 (土器)	SK 210	20 B 15	1	-	200	-	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	ナシ	ナシ	赤銅	
170	壺 (土器)	SK 210	20 B 15	1	-	53	-	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	ナシ	ナシ	赤銅	
171	壺 (土器)	F 404	22 A 15	1	404	152	-	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	ナシ	ナシ	赤銅	
172	壺 (土器)	SK 402	23 B 9	10	2	160	-	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	ナシ	ナシ	赤銅	
173	壺 (土器)	SK 229	21 B 19	1	-	-	-	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	ナシ	ナシ	赤銅	
174	高杯 (土器)	SK 284	21 B 17	2	268	-	-	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	ナシ	ナシ	赤銅	
175	壺 (土器)	SK 284	21 B 21	22	-	78	-	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	ナシ	ナシ	赤銅	
176	壺 (土器)	SK 284	21 B 22	18	142	-	-	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	(I) ナシ	ナシ	赤銅	
177	壺 (土器)	SD 233	22 B 13	1	105	173	-	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	(I) ナシ	ナシ	赤銅	
178	壺 (土器)	SD 233	22 B 8	1	24	146	-	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	(I) ナシ	ナシ	赤銅	
179	高杯 (土器)	SD 233	22 B 13	1	86	-	-	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	ナシ	ナシ	赤銅	
180	壺 (土器)	SK 208	23 A 9	1	98	168	-	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	ナシ	ナシ	赤銅	
181	瓶白 (土器)	SK 208	23 A 9	1	190	-	-	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	ナシ	ナシ	赤銅	
182	壺 (土器)	SK 208	23 A 9	1	323	83	-	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	ナシ	ナシ	赤銅	
183	壺 (土器)	F 348	25 B 2	-	348	144	-	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	ナシ	ナシ	赤銅	
184	壺 (土器)	SK 705	30 B 9	1	157	-	-	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	(I) ナシ	ナシ	赤銅	
185	壺 (土器)	SK 705	30 B 9	1	152	-	-	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	(I) ナシ	ナシ	赤銅	
186	壺 (土器)	SK 705	30 B 9	1	163	-	-	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	ナシ	ナシ	赤銅	
187	壺 (土器)	SK 705	30 B 9	1	148	-	-	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	ナシ	ナシ	赤銅	
188	高杯 (土器)	SD 375	30 B 3	1	-	-	-	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	-	-	赤銅	
189	壺 (土器)	SD 522	39 A 24	1	160	-	-	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	ナシ	ナシ	赤銅	
190	壺 (土器)	SK 554	39 A 18	1	182	-	-	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	ナシ	ナシ	赤銅	
191	壺 (土器)	SK 563	39 A 7	11	4	133	234	60	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	(I) ナシ	ナシ	赤銅	
192	壺 (土器)	SD 207	21 C 1	2	-	72	-	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	-	-	赤銅	
193	壺 (土器)	SD 300	25 B 25	1	191	-	-	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	(I) ナシ	ナシ	赤銅	
194	壺 (土器)	SD 300	27 B 2	1	174	-	-	-	-	-	10YR6/3	10YR6/3	浅黄 石 瓦 敷	10YR6/3	10YR6/3	(I) ナシ	ナシ	赤銅	

姫御前跡Ⅱ 遺物観察表 弥生時代～古墳時代土器(2)

編年番号	種別	形状	器高	口径	底径	取付位置	11層 高さ	12層 高さ	13層 高さ	色	色澤		胎土(2段・色澤)		調査		炭化物	備考	
											表面	内面	外側	内側	外側	内側			
195	高杯 (B型)	SD	209	26	B	5	1	15-21	136	-	-	12-赤・黄褐色 10YR7/3	12-赤・黄褐色 10YR7/3	12-赤・黄褐色 10YR7/3	12-赤・黄褐色 10YR7/3	5等キ	5等キ	-	白磁土の一部 に赤磁土
196	高杯 (B型)	SD	209	26	B	5	1	19	170	-	-	黄褐色 7.5Y5/2	12-赤・黄褐色 10YR7/4	12-赤・黄褐色 10YR7/4	12-赤・黄褐色 10YR7/4	ナシ	ナシ	表面	-
197	鉢 (A 1.2層)	SD	209	26	B	14	3	137	-	-	-	12-赤・黄褐色 10YR7/2	12-赤・黄褐色 10YR6/4	12-赤・黄褐色 10YR7/3	12-赤・黄褐色 10YR7/3	5等キ	ナシ	ナシ	赤磁
198	鉢 (A 1.2層)	SD	209	26	B	14	3	124	120 (75)	23	-	2.5Y6/6 7.5Y6/6	7.5Y6/6 7.5Y6/6	7.5Y6/6 7.5Y6/6	7.5Y6/6 7.5Y6/6	(I) ナシ (II) ナシ	ナシ	ナシ	赤磁
199	鉢 (A 1.2層)	SD	209	26	B	9	3	-	119	-	-	12-赤・黄褐色 10YR6/3	12-赤・黄褐色 10YR7/2	12-赤・黄褐色 10YR6/1	12-赤・黄褐色 10YR6/1	(I) ナシ (II) ナシ	ナシ	(I) ヘラナシ	-
200	甕 (N 1層)	SD	209	26	B	10	3	149	177	-	-	12-赤・黄褐色 10YR7/4	12-赤・黄褐色 10YR7/4	12-赤・黄褐色 7.5YR7/4	12-赤・黄褐色 7.5YR7/4	ハク	ハク	ナシ	-
201	甕 (N 1層)	SD	209	26	B	15	3	131	-	107	-	7.5Y6/6 7.5Y6/6	7.5Y6/6 7.5Y6/6	7.5Y6/6 7.5Y6/6	7.5Y6/6 7.5Y6/6	5等キ	ナシ	ナシ	No.131
202	甕 (N 1層)	SD	209	26	B	10	3	149	-	121	-	12-赤・黄褐色 10YR5/2	12-赤・黄褐色 10YR7/3	12-赤・黄褐色 10YR7/3	12-赤・黄褐色 10YR8/2	5等キ	ナシ	ナシ	内孔3か所 赤磁
203	甕 (C 2層)	SD	209	26	A	15	3	100	-	13	-	黄褐色 10YR6/2	黄褐色 2.5Y5/2	黄褐色 10YR8/3	黄褐色 10YR8/3	ヘラナシ	ヘラナシ	ナシ	内孔
204	甕 (C 2層)	SD	209	26	B	10	3	142	-	47	-	12-赤・黄褐色 10YR5/2	12-赤・黄褐色 10YR5/2	12-赤・黄褐色 10YR6/2	12-赤・黄褐色 10YR6/2	5等キ	ヘラナシ	ナシ	-
205	甕 (C 2層)	SD	209	26	A	10	3	61	-	25	-	黄褐色 10YR5/2	黄褐色 10YR5/2	黄褐色 10YR6/2	黄褐色 10YR6/2	ハク	ヘラナシ	ナシ	-
206	甕 (C 2層)	SD	209	26	B	14	3	125	98 93	47	-	12-赤・黄褐色 7.5YR6/4	12-赤・黄褐色 7.5YR6/4	12-赤・黄褐色 7.5YR6/4	12-赤・黄褐色 7.5YR6/4	5等キ	ヘラナシ	ナシ	-
207	甕 (C 2層)	SD	209	26	B	10	3	134	104	-	-	12-赤・黄褐色 7.5YR6/4	12-赤・黄褐色 10YR5/2	12-赤・黄褐色 10YR4/1	12-赤・黄褐色 10YR4/1	(I) ナシ (II) ナシ	(I) ナシ (II) ナシ	ナシ	内側面
208	甕 (C 1層)	SD	209	26	B	9	3	209	229	-	-	12-赤・黄褐色 10YR7/3	12-赤・黄褐色 10YR6/4	12-赤・黄褐色 10YR6/2	12-赤・黄褐色 10YR6/2	(I) ナシ (II) ナシ	(I) ナシ (II) ナシ	ナシ	赤磁
209	甕 (C 1層)	SD	209	26	B	14	3	136	133	-	-	12-赤・黄褐色 10YR6/4	12-赤・黄褐色 10YR7/3	12-赤・黄褐色 10YR7/2	12-赤・黄褐色 10YR7/2	ナシ	ナシ	ナシ	-
210	甕 (C 1層)	SD	209	26	B	9	3	145	125	-	-	12-赤・黄褐色 10YR7/3	12-赤・黄褐色 10YR7/3	12-赤・黄褐色 10YR7/1	12-赤・黄褐色 10YR7/1	(I) ナシ (II) ナシ	(I) ナシ (II) ナシ	ナシ	赤磁
211	甕 (C 1層)	SD	209	26	B	14	3	128	138	-	-	12-赤・黄褐色 10YR7/3	12-赤・黄褐色 10YR7/3	12-赤・黄褐色 10YR6/3	12-赤・黄褐色 10YR6/3	ナシ	ナシ	(I) ナシ (II) ナシ	赤磁
212	甕 (C 2層)	SD	209	26	B	14	3	130	150	-	-	12-赤・黄褐色 7.5YR6/4	12-赤・黄褐色 10YR5/2	12-赤・黄褐色 10YR6/4	12-赤・黄褐色 10YR6/4	ナシ	ナシ	赤磁	赤磁
213	甕 (C 2層)	SD	209	26	B	10	3	150	288	-	-	7.5Y6/6 5YR6/6	7.5Y6/6 7.5Y6/6	7.5Y6/6 7.5Y6/6	7.5Y6/6 7.5Y6/6	ハク	ヘラナシ	ナシ	-
214	甕 (C 2層)	SD	209	26	B	9	3	120-143	-	-	-	12-赤・黄褐色 7.5YR7/4	12-赤・黄褐色 10YR7/4	12-赤・黄褐色 10YR7/1	12-赤・黄褐色 10YR7/1	ハク	ナシ	(I) ナシ (II) ナシ	赤磁
215	高杯 (A型)	1.8層	209	26	B	19	Ⅲ	-	-	-	-	12-赤・黄褐色 10YR6/3	12-赤・黄褐色 10YR6/3	12-赤・黄褐色 10YR7/2	12-赤・黄褐色 10YR7/2	(I) ナシ	ナシ	ナシ	赤磁
216	高杯	1.8層	209	27	B	18	Ⅲ	26	-	-	-	12-赤・黄褐色 2.5Y6/4	12-赤・黄褐色 2.5Y6/4	12-赤・黄褐色 2.5Y6/4	12-赤・黄褐色 2.5Y6/4	5等キ	ナシ	ナシ	赤磁
217	甕 (N 1層)	1.8層	209	26	B	19	Ⅲ	92	-	-	-	12-赤・黄褐色 7.5YR6/4	12-赤・黄褐色 10YR7/4	12-赤・黄褐色 10YR6/1	12-赤・黄褐色 10YR6/1	5等キ (I) ナシ	ナシ	ナシ	赤磁
218	甕 (N 1層)	1.8層	209	27	B	15	Ⅲ	-	-	-	-	7.5Y6/6 5YR6/6	7.5Y6/6 5YR6/6	7.5Y6/6 5YR6/6	7.5Y6/6 5YR6/6	5等キ	ナシ	ナシ	赤磁
219	甕 (N 1層)	1.8層	209	26	B	18	Ⅲ	-	-	-	-	12-赤・黄褐色 7.5YR6/4	12-赤・黄褐色 7.5YR6/4	12-赤・黄褐色 7.5YR7/4	12-赤・黄褐色 7.5YR7/4	5等キ	ナシ	ナシ	赤磁
220	甕 (N 1層)	1.8層	209	26	B	10	Ⅲ	-	124	-	-	12-赤・黄褐色 10YR6/4	12-赤・黄褐色 10YR6/4	12-赤・黄褐色 7.5YR7/4	12-赤・黄褐色 7.5YR7/4	5等キ	ナシ	ナシ	赤磁
221	甕 (C 2層)	1.8層	209	26	B	19	Ⅲ	153	-	-	-	12-赤・黄褐色 10YR6/4	12-赤・黄褐色 10YR7/4	12-赤・黄褐色 10YR7/4	12-赤・黄褐色 10YR7/4	(I) ナシ (II) ナシ	(I) ナシ (II) ナシ	ナシ	赤磁
222	甕 (N 1層)	1.8層	209	27	B	18	Ⅲ	173	-	-	-	12-赤・黄褐色 10YR7/4	12-赤・黄褐色 10YR7/3	12-赤・黄褐色 10YR8/4	12-赤・黄褐色 10YR8/4	ナシ	ナシ	ナシ	炭化臭しい
223	付付目録 (B型)	1.8層	209	27	B	5	Ⅲ	-	83	-	-	黄褐色 2.5Y5/2	黄褐色 2.5Y5/2	黄褐色 10YR6/1	黄褐色 10YR6/1	5等キ	ナシ	ナシ	赤磁
224	甕 (C 1層)	1.8層	209	26	B	25	Ⅲ	268	-	-	-	12-赤・黄褐色 10YR6/4	12-赤・黄褐色 7.5YR7/3	12-赤・黄褐色 7.5YR7/4	12-赤・黄褐色 7.5YR7/4	(I) ナシ	(I) ナシ (II) ナシ	ナシ	赤磁
225	甕 (C 1層)	1.8層	209	26	B	25	Ⅲ	-	68	-	-	12-赤・黄褐色 10YR5/3	12-赤・黄褐色 10YR5/2	12-赤・黄褐色 10YR6/2	12-赤・黄褐色 10YR6/2	ヘラナシ	ナシ	ナシ	赤磁
226	高杯 (B型)	1.8層	209	26	B	25	Ⅲ	219	-	-	-	12-赤・黄褐色 5YR7/4	12-赤・黄褐色 5YR6/6	12-赤・黄褐色 5YR6/6	12-赤・黄褐色 5YR6/6	5等キ	ナシ	ナシ	炭化
227	甕 (N 1層)	1.8層	209	26	B	25	Ⅲ	90	-	-	-	12-赤・黄褐色 10YR7/4	12-赤・黄褐色 10YR7/4	12-赤・黄褐色 10YR6/2	12-赤・黄褐色 10YR6/2	(I) ナシ (II) ナシ	ナシ	ナシ	内孔 白磁土
228	甕 (N 1層)	1.8層	209	27	B	4	Ⅲ	88	-	-	-	12-赤・黄褐色 7.5YR7/4	12-赤・黄褐色 10YR6/2	12-赤・黄褐色 10YR7/2	12-赤・黄褐色 10YR7/2	ナシ	ナシ	ナシ	赤磁
229	付付目録 (B型)	1.8層	209	27	B	13	Ⅲ	-	-	-	-	7.5Y6/6 5YR6/6	7.5Y6/6 5YR6/6	7.5Y6/6 5YR6/6	7.5Y6/6 5YR6/6	5等キ	ナシ	ナシ	赤磁
230	甕 (N 1層)	1.8層	209	27	B	3	Ⅲ	-	-	-	-	12-赤・黄褐色 10YR6/4	12-赤・黄褐色 10YR7/3	12-赤・黄褐色 10YR7/3	12-赤・黄褐色 10YR7/3	ヘラナシ	ヘラナシ	ナシ	内孔
231	鉢 (A 1.2層)	1.8層	209	27	B	19	Ⅲ	110	-	-	-	12-赤・黄褐色 10YR7/2	12-赤・黄褐色 10YR7/2	12-赤・黄褐色 10YR6/1	12-赤・黄褐色 10YR6/1	-	ヘラナシ	ナシ	-
232	甕 (B型)	1.8層	209	26	B	25	Ⅲ	136	-	-	-	12-赤・黄褐色 10YR6/4	12-赤・黄褐色 10YR6/4	12-赤・黄褐色 10YR6/4	12-赤・黄褐色 10YR6/4	5等キ	ナシ	ナシ	(内) 口 (外) 口-黒
233	甕 (B型)	1.8層	209	26	B	24	Ⅲ	150	-	-	-	オリーブ 2.5Y4/3	オリーブ 10YR5/2	オリーブ 2.5Y5/1	オリーブ 2.5Y5/1	ナシ	ナシ	ナシ	(内) 口-黒
234	甕 (B型)	1.8層	209	27	B	14	Ⅲ	174	-	-	-	12-赤・黄褐色 10YR7/3	12-赤・黄褐色 10YR7/4	12-赤・黄褐色 10YR8/2	12-赤・黄褐色 10YR8/2	ナシ	ナシ	ナシ	-
235	甕 (N 1層)	1.8層	209	27	B	13	Ⅲ	167	-	-	-	12-赤・黄褐色 10YR6/2	12-赤・黄褐色 10YR7/3	12-赤・黄褐色 10YR6/2	12-赤・黄褐色 10YR6/2	(I) ナシ (II) ナシ	(I) ナシ (II) ナシ	ナシ	赤磁
236	甕 (B型)	1.8層	209	27	B	5	Ⅲ	126	-	-	-	12-赤・黄褐色 10YR7/4	12-赤・黄褐色 10YR7/4	12-赤・黄褐色 10YR8/2	12-赤・黄褐色 10YR8/2	(I) ナシ (II) ナシ	(I) ナシ (II) ナシ	ナシ	(内) 口-黒
237	甕 (C 1層)	1.8層	209	27	B	4	Ⅲ	130	-	-	-	12-赤・黄褐色 10YR7/4	12-赤・黄褐色 10YR7/3	12-赤・黄褐色 10YR8/2	12-赤・黄褐色 10YR8/2	(I) ナシ (II) ナシ	(I) ナシ (II) ナシ	ナシ	(内) 口-黒 炭化臭しい
238	甕 (B型)	1.8層	209	27	B	14	Ⅲ	200	-	-	-	12-赤・黄褐色 10YR7/3	12-赤・黄褐色 10YR7/3	12-赤・黄褐色 10YR8/3	12-赤・黄褐色 10YR8/3	ナシ	ナシ	ナシ	-
239	甕 (B型)	1.8層	209	26	B	24	Ⅲ	143	-	-	-	12-赤・黄褐色 10YR7/3	12-赤・黄褐色 10YR7/3	12-赤・黄褐色 10YR8/3	12-赤・黄褐色 10YR8/3	(ナシ)	(I) ナシ (II) ナシ	ナシ	(内) 口

姫御前遺跡Ⅱ 遺物観察表 弥生時代～古墳時代土器(3)

編年番号	種 別	形状	器高	口径	口径/器高	器底径	器底高	器底形状	色 澤		土 質		出 土 状況		出 土 位置	備 考			
									表面	内部	形状	内面	層位	出土層位					
340	甕 (C3型)	土器 壺中	27	8	10	8	4	156	-	IC-6-1黄緑 10YR7/2	IC-6-1黄緑 10YR6/3	IC-6-1黄緑 10YR7/3	IC-6-1黄緑 10YR7/3	ハナ	ハナ	-			
341	甕 (C3型)	土器 壺中	27	8	13	8	4	161	-	IC-6-1黄緑 7.5YR7/3	IC-6-1黄緑 10YR6/3	IC-6-1黄緑 5YR7/6	IC-6-1黄緑 10YR6/3	(I)~(II) ナナ	(I) ナナ	(II) ハナナ			
342	甕 (C2型)	土器 壺中	27	8	9	8	4	176	-	IC-6-1黄緑 10YR6/4	IC-6-1黄緑 10YR7/4	IC-6-1黄緑 10YR6/4	IC-6-1黄緑 10YR7/4	(I) ナナ	(I) ナナ	(II) ハナ	(外・内) 口		
343	甕 (C2型)	土器 壺中	27	8	14	8	4	208	-	IC-6-1黄緑 7.5YR7/4	IC-6-1黄緑 10YR7/4	IC-6-1黄緑 10YR6/4	IC-6-1黄緑 10YR7/4	ナナ	ナナ	-			
344	甕 (C2型)	土器 壺中	27	8	5	8	4	181	-	IC-6-1黄緑 7.5YR7/4	IC-6-1黄緑 10YR7/4	IC-6-1黄緑 10YR6/4	IC-6-1黄緑 10YR7/4	(I)~(II) ナナ	(I) ナナ	(II) ナナ	(II) ハナナ		
345	甕 (C2型)	50 520	39	8	25	8	3	148	-	IC-6-1黄緑 10YR6/3	IC-6-1黄緑 10YR6/3	IC-6-1黄緑 10YR5/1	IC-6-1黄緑 10YR6/3	(I) ナナ	(I) ナナ	(II) ハナ	ハナナ		
346	甕 (A型)	50 520	39	8	25	8	3	143	-	IC-6-1黄緑 5YR6/4	IC-6-1黄緑 10YR5/3	IC-6-1黄緑 5YR6/3	IC-6-1黄緑 10YR5/3	(I) 藤原郡	(I) ナナ	(II) ナナ	ハナナ		
347	甕 (C2型)	50 520	38	A	23	8	3	184	250	51	IC-6-1黄緑 10YR6/3	IC-6-1黄緑 10YR6/3	IC-6-1黄緑 10YR7/3	IC-6-1黄緑 10YR6/3	(I) ナナ	(I) ナナ	(II) ナナ	藤原郡	
348	甕 (C2型)	50 520	39	8	25	8	3	44	34	2	IC-6-1黄緑 10YR7/3	IC-6-1黄緑 10YR7/3	IC-6-1黄緑 10YR6/1	IC-6-1黄緑 10YR7/3	藤原郡	藤原郡	藤原郡	藤原郡	
349	甕 (C2型)	50 520	38	8	24	1	9	83	76	120	IC-6-1黄緑 10YR7/4	IC-6-1黄緑 10YR6/4	IC-6-1黄緑 7.5YR7/4	IC-6-1黄緑 10YR6/4	藤原郡	ハナ	-	河内	
350	高杯 (C1型)	50 520	38	8	24	1	14	-	118	IC-6-1黄緑 7.5YR5/4	IC-6-1黄緑 7.5YR6/4	IC-6-1黄緑 7.5YR7/4	IC-6-1黄緑 7.5YR7/4	藤原郡	ハナナ	ハナナ	ハナナ		
351	高杯 (C1型)	50 520	38	8	24	1	8	-	110	IC-6-1黄緑 10YR6/3	IC-6-1黄緑 10YR6/3	IC-6-1黄緑 10YR7/3	IC-6-1黄緑 10YR6/3	藤原郡	藤原郡	藤原郡	藤原郡		
352	高杯 (C1型)	50 520	38	8	12	13	1	3	84	-	IC-6-1黄緑 10YR6/3	IC-6-1黄緑 10YR6/3	IC-6-1黄緑 10YR7/3	IC-6-1黄緑 10YR6/3	ハナ	ハナナ	ハナ	ハナナ	
353	甕 (C2型)	50 520	38	8	25	1	6	130	-	黄緑 7.5YR5/2	黄緑 10YR5/2	IC-6-1黄緑 10YR7/3	IC-6-1黄緑 10YR6/3	ハナ	ハナ	青銅	-		
354	甕 (C2型)	50 520	38	8	13	1	2	-	63	IC-6-1黄緑 10YR6/3	IC-6-1黄緑 10YR6/3	IC-6-1黄緑 10YR6/3	IC-6-1黄緑 10YR6/3	ハナ	ハナナ	ハナ	ハナナ		
355	高杯 (A型)	50 520	39	8	24	3	1	244	-	IC-6-1黄緑 10YR6/3	IC-6-1黄緑 10YR7/2	IC-6-1黄緑 10YR7/2	IC-6-1黄緑 10YR7/2	藤原郡	ハナ	ハナ	ハナ	ハナナ	
356	高杯 (C2型)	50 520	37	8	22	1	245	?	160	245	11	IC-6-1黄緑 10YR6/3	IC-6-1黄緑 10YR6/3	IC-6-1黄緑 10YR7/1	IC-6-1黄緑 10YR6/3	(I) ナナ	(I) ハナ	(II) ナナ	(外) (I)~(II) 藤原郡
357	高杯 (A型)	50 520	40	8	5	2	49	-	-	IC-6-1黄緑 10YR6/3	IC-6-1黄緑 7.5YR6/4	洗練 10YR6/3	IC-6-1黄緑 7.5YR6/4	藤原郡	ナナ	ナナ	ハナ	藤原郡	
358	高杯 (C1型)	50 520	37	8	17	3	195	113	-	黄緑 2.5Y/3	黄緑 2.5Y/3	洗練 2.5Y/3	IC-6-1黄緑 2.5Y/3	藤原郡	藤原郡	藤原郡	藤原郡		
359	高杯 (C1型)	50 520	37	8	17	3	154	164	-	黄緑 10YR6/2	IC-6-1黄緑 10YR6/3	IC-6-1黄緑 10YR6/3	IC-6-1黄緑 10YR6/3	藤原郡	藤原郡	藤原郡	藤原郡		
360	高杯 (C1型)	50 520	38	8	2	3	136	-	-	黄緑 2.5Y/2	黄緑 2.5Y/2	洗練 2.5Y/2	IC-6-1黄緑 2.5Y/2	藤原郡	藤原郡	藤原郡	藤原郡		
361	高杯 (C1型)	50 520	38	8	2	3	142	-	-	IC-6-1黄緑 10YR6/3	IC-6-1黄緑 7.5YR6/4	IC-6-1黄緑 10YR7/3	IC-6-1黄緑 10YR6/3	藤原郡	ナナ	ナナ	ハナ	藤原郡	
362	高杯 (C1型)	50 520	37	8	17	3	163	-	-	IC-6-1黄緑 10YR6/3	IC-6-1黄緑 10YR6/3	洗練 2.5Y/1	IC-6-1黄緑 10YR6/3	藤原郡	ナナ	ナナ	ハナ	藤原郡	
363	高杯 (C1型)	50 520	38	8	2	3	142	-	-	黄緑 2.5Y/2	黄緑 2.5Y/2	洗練 2.5Y/1	IC-6-1黄緑 2.5Y/2	藤原郡	藤原郡	藤原郡	藤原郡		
364	甕 (G1型)	50 520	38	8	3	3	122	-	6	黄緑 2.5Y/3	黄緑 2.5Y/1	IC-6-1黄緑 10YR6/3	IC-6-1黄緑 10YR6/3	藤原郡	ハナナ	ハナ	ハナ	(内) スス	
365	甕 (G1型)	50 520	37	8	17	3	171	-	19	IC-6-1黄緑 10YR6/4	IC-6-1黄緑 2.5Y/2	洗練 10YR6/2	IC-6-1黄緑 10YR6/2	藤原郡	ナナ	ナナ	ハナ	(内) ペンタ	
366	甕	50 520	37	8	17	3	176・187	36	-	IC-6-1黄緑 7.5YR7/4	IC-6-1黄緑 7.5YR7/4	洗練 10YR6/3	IC-6-1黄緑 7.5YR7/4	ハナナ	ハナナ	ハナ	ハナ	河内, 藤原郡	
367	甕 (H型)	50 520	37	8	17	3	168・188	92	-	黄緑 2.5Y/3	黄緑 2.5Y/2	洗練 10YR6/2	IC-6-1黄緑 2.5Y/2	藤原郡	藤原郡	藤原郡	藤原郡		
368	甕 (C1型)	50 520	37	8	13	3	196	-	114	オリーブ黄 2.5Y/3	黄緑 2.5Y/3	洗練 2.5Y/3	IC-6-1黄緑 2.5Y/3	藤原郡	ハナ	ハナ	ハナ	藤原郡	
369	高杯 (C1型)	50 520	37	8	17	3	155	-	-	IC-6-1黄緑 10YR6/3	IC-6-1黄緑 10YR6/3	洗練 10YR6/2	IC-6-1黄緑 10YR6/3	藤原郡 (手)	ハナナ	ハナ	ハナ	藤原郡	
370	高杯 (C1型)	50 520	38	8	2	3	140	-	130	IC-6-1黄緑 10YR6/3	IC-6-1黄緑 10YR6/3	IC-6-1黄緑 10YR7/3	IC-6-1黄緑 10YR6/3	藤原郡	ハナ	ハナ	ハナ	藤原郡	
371	甕 (C2型)	50 520	37	8	17	3	157	146	-	IC-6-1黄緑 10YR6/3	IC-6-1黄緑 10YR6/3	IC-6-1黄緑 10YR7/3	IC-6-1黄緑 10YR6/3	(I) ナナ (II) ナナ	(I) ナナ	(II) ナナ	(外) (I)~(II) 藤原郡		
372	甕 (C1型)	50 520	37	8	17	3	179	-	-	IC-6-1黄緑 7.5YR7/4	IC-6-1黄緑 7.5YR7/4	洗練 10YR6/3	IC-6-1黄緑 7.5YR7/4	藤原郡	ハナ	ハナ	ハナ	河内	
373	甕 (C1型)	50 520	38	8	7	3	107~120	103	127	67	洗練 7.5YR6/4	洗練 7.5YR6/4	洗練 5YR8/4	IC-6-1黄緑 7.5YR7/4	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	
374	甕 (C2型)	50 520	37	8	17	3	164	273	-	IC-6-1黄緑 7.5YR6/4	IC-6-1黄緑 7.5YR7/4	洗練 7.5YR6/4	IC-6-1黄緑 7.5YR6/4	ハナ	(I) ハナ	(II) ハナ	(III) ハナ	藤原郡	
375	甕 (C2型)	50 520	38	8	3	3	132	126	-	IC-6-1黄緑 10YR6/3	黄緑 2.5Y/3	洗練 10YR6/4	IC-6-1黄緑 10YR6/4	(I) ナナ	ハナ	ハナ	ハナ	藤原郡	
376	甕 (C2型)	50 520	37	8	22	3	148	168	-	黄緑 10YR4/2	IC-6-1黄緑 10YR5/3	洗練 10YR5/1	IC-6-1黄緑 10YR5/3	(I) ナナ	ハナ	ハナ	ハナ	藤原郡	
377	甕 (C2型)	50 520	37	8	17	3	193	-	40	洗練 10YR6/4	IC-6-1黄緑 10YR6/4	洗練 5YR7/6	IC-6-1黄緑 10YR6/4	ハナ	ハナ	ハナ	藤原郡		
378	高杯 (C1型)	50 520	37	8	17	4	206	242	-	黄緑 2.5Y/2	IC-6-1黄緑 7.5YR6/3	洗練 10YR6/3	IC-6-1黄緑 7.5YR6/3	藤原郡	藤原郡	藤原郡	藤原郡		
379	甕 (N1型)	58 730	31	8	25	8	163	-	-	IC-6-1黄緑 10YR6/3	IC-6-1黄緑 10YR6/3	IC-6-1黄緑 10YR5/4	IC-6-1黄緑 10YR6/3	藤原郡	藤原郡	藤原郡	藤原郡		
380	甕 (C1型)	58 730	31	8	25	8	163	-	128	IC-6-1黄緑 10YR6/3	IC-6-1黄緑 10YR6/3	洗練 10YR5/2	IC-6-1黄緑 10YR6/3	ハナ	ハナ	ハナ	ハナ	藤原郡	
381	甕 (C1型)	58 730	31	8	25	8	163	-	-	IC-6-1黄緑 10YR6/3	IC-6-1黄緑 10YR6/3	洗練 2.5Y/3	IC-6-1黄緑 10YR6/3	藤原郡	ハナ	ハナ	ハナ	藤原郡	
382	甕 (C1型)	58 730	32	8	4	8	163	-	103	IC-6-1黄緑 10YR6/3	IC-6-1黄緑 2.5Y/3	洗練 2.5Y/3	IC-6-1黄緑 2.5Y/3	藤原郡	ハナ	ハナ	ハナ	藤原郡	
383	甕 (C1型)	58 730	31	8	25	8	163	-	-	IC-6-1黄緑 10YR6/3	IC-6-1黄緑 10YR6/3	洗練 10YR6/3	IC-6-1黄緑 10YR6/3	藤原郡	ハナナ	ハナ	ハナ	藤原郡	
384	甕	58 730	31	8	25	8	163	-	32	IC-6-1黄緑 7.5YR6/4	IC-6-1黄緑 10YR6/3	洗練 10YR7/4	IC-6-1黄緑 10YR6/3	藤原郡	ハナ	ハナ	ハナ	藤原郡	
385	甕 (C1型)	58 730	31	8	25	8	163	-	150	IC-6-1黄緑 10YR6/4	IC-6-1黄緑 7.5YR6/4	洗練 10YR6/2	IC-6-1黄緑 7.5YR6/4	(I)~(II) ナナ	ハナ	ハナ	ハナ	藤原郡	

姫御前遺跡Ⅱ 遺物観察表 弥生時代～古墳時代土器(5)

発見番号	種 別	通称	サイズ 大 小 寸法	形状	取付口径 mm	口縁高 mm	底径 mm	色 澤		断面(1/2)色澤	調 整		炭化物	備考	
								外面	内面		外面	内面			
332	蓋		27 B 25	皿	22	-	-	に赤い黄斑 10YR6/4	に赤い黄斑 10YR7/4	洗剤付 10YR8/3 石 瓦 磨	七古寺	-	-	-	
333	蓋		28 B 2	皿	26	-	-	に赤い黄斑 10YR6/4	に赤い黄斑 10YR7/4	洗剤付 10YR8/3 石 瓦 磨	七古寺	ハケ	-	-	
334	蓋		26 A 13	皿	24	-	-	に赤い黄斑 10YR6/4	に赤い黄斑 10YR7/4	洗剤付 10YR8/3 石 瓦 磨	七古寺	-	-	-	
335	香 (G1型)		20 A 24 25	皿	-	-	-	洗剤付 10YR6/4	洗剤付 10YR6/4	洗剤付 2.5Y7/1 石 瓦 磨	七古寺	-	ハナ子	黒化	
336	黄やぶ (鼓部)		26 B 2	皿	-	71	-	に赤い黄斑 10YR6/4	に赤い黄斑 10YR6/4	洗剤付 10YR7/3 石 瓦 磨	七古寺	-	ハケ	輪白技法	
337	蓋 (C1型)		26 A 13	皿	162	-	-	に赤い黄斑 10YR6/4	に赤い黄斑 10YR7/3	洗剤付 10YR8/3 石 瓦 磨	(11) ナ子 (磨)	-	-	-	
338	蓋 (B型)		26 B 16	皿	128	-	-	に赤い黄斑 10YR6/3	に赤い黄斑 10YR6/3	洗剤付 10YR8/3 石 瓦 磨	ナ子	ハナ子	ハナ子	表面	
339	蓋		30 A 20	皿	30	-	-	洗剤付 2.5Y5/3 10YR6/4	洗剤付 2.5Y5/3 10YR6/4	洗剤付 2.5Y5/3 10YR6/4	七古寺	-	-	天田部赤印	
340	蓋 (C1型)		26 B 10	皿	-	-	-	洗剤付 10YR6/3	洗剤付 10YR7/3	洗剤付 10YR8/3 石 瓦 磨	七古寺	(11) ナ子 (磨)	ハケ	-	
341	蓋 (B1型)		29 B 5	皿	90	-	-	洗剤付 10YR6/4	洗剤付 10YR6/4	洗剤付 10YR8/3 石 瓦 磨	ハケ	-	ハナ子	-	
342	蓋 (鼓部)		29 B 3	皿	-	-	-	洗剤付 10YR6/3	洗剤付 10YR6/3	洗剤付 2.5Y7/3 石 瓦 磨	ナ子	-	-	黒化	
343	高脚 (鼓部)		27 A 5	皿	-	-	-	洗剤付 10YR7/2	洗剤付 10YR7/2	洗剤付 10YR8/3 石 瓦 磨	七古寺	-	七古寺	-	
344	蓋 (C2型)		29 B 5	皿	175	-	-	洗剤付 10YR6/4	洗剤付 10YR7/4	洗剤付 10YR8/4 石 瓦 磨	七古寺	-	-	黒化	
345	蓋 (C2型)		26 B 10	皿	137	-	-	洗剤付 10YR6/3	洗剤付 10YR6/3	洗剤付 10YR7/3 石 瓦 磨	ナ子	-	ナ子	表面	
346	蓋 (C3型)		30 A 5	皿	165	-	-	洗剤付 10YR6/4	洗剤付 10YR6/4	洗剤付 10YR7/4 石 瓦 磨	ハケ	-	(11) ナ子 (磨)	ハケ	表面
347	黄やぶ (鼓部)		34 B 21	皿	-	52	-	洗剤付 10YR7/4	洗剤付 2.5Y5/2	洗剤付 10YR7/2 石 瓦 磨	ハケ	-	-	-	
348	鉢 (内白褐色)		37 B 23	皿	-	-	-	洗剤付 10YR6/2	洗剤付 10YR6/2	洗剤付 10YR7/2 石 瓦 磨	七古寺	七古寺	彩色地蔵	古墳後期	
349	水引 (行)		22 C 11	皿	長径 40	短径 33	高さ 18	洗剤付 2.5Y5/2	洗剤付 2.5Y5/2	洗剤付 2.5Y5/2 石 瓦 磨	輪白技法	-	-	-	

姫御前遺跡Ⅱ 遺物観察表 石製品(1)

発見番号	種 別	分類	石質	通称	出土位置		長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ(g)	備考			
					層位	ドリット								
350	玉輪切	平輪切	内凹心取山岩	磨石	19	皿	5	21.5	148	125	3835			
351	玉輪切	大輪	内凹心取山岩	磨石	19	皿	C	1	155	273	248	1139		
352	玉輪切	大輪	内凹心取山岩	磨石	19	皿	C	4	145	207	204	5900		
353	玉輪切	輪切	内凹心取山岩	磨石	1	34	B	17	203	276	265	22100	No.5	
354	磨石			磨石	1	36	A	24	77	25	20	587		
355	匂玉	未成品	磨石	磨石	1	36	B	25	14	9	2	0.3		
356	匂玉	未成品	軟質岩	磨石	1	26	B	8	16	11	4	1.4		
357	匂玉	未成品	磨石	SK203	1	23	B	4	9	13	8	3	0.5	
358	匂玉	未成品	ヒスイ	磨石	1	27	B	10	23	18	7	4.8		
359	匂玉	未成品	ヒスイ	磨石	1	27	B	10	20	15	8	4.0	No.1B5	
360	匂玉	未成品	軟質岩	SK211	1	19	B	9	20	19	12	5.0	No.24	
361	匂玉	未成品	軟質岩	P246	4	19	B	17	22	16	5	2.5	SK216 S1	
362	匂玉	未成品	軟質岩	P246	1	19	B	17	11	11	5	0.9	SK216 粘着 52	
363	匂玉	未成品	軟質岩	SK209	3	26	B	10	13	8	3	0.5		
364	白玉	磨石	SK203	1	23	B	4	9	5.5	5.5	2	0.2		
365	白玉	磨石	SK203	1	23	B	4	3	6	5.5	2.5	0.2		
366	白玉	磨石	SK203	1	23	B	4	2	5.5	5.5	3.5	0.2		
367	白玉	磨石	SK203	1	23	B	9	7	5.5	5	4	0.3		
368	白玉	未成品	磨石	磨石	1	27	B	15	9	5	2.5	0.1		
369	碧玉	未成品	緑色硬質岩	P205	2	23	B	9	9	7	7	1.8		
370	碧玉	未成品	緑色硬質岩	SK203	1	23	B	9	7	16	5	0.1		
371	碧玉	未成品	緑色硬質岩	磨石	38	B	4	33	15	13	9.8			
372	碧玉	未成品	緑色硬質岩	SK203	1	23	B	4	9	22	13	9	3.4	
373	碧玉	未成品	緑色硬質岩	SK203	1	23	B	5	7	17	12	11	3.1	
374	碧玉	未成品	緑色硬質岩	磨石	23	B	4	30	10	8	2.3			
375	碧玉	未成品	緑色硬質岩	磨石	23	B	9	30	18	14	8.3			
376	碧玉	未成品	緑色硬質岩	磨石	37	B	14	44	25	23	23.6		ギラヌ敷硬質岩付着	
377	碧玉	未成品	緑色硬質岩	磨石	38	B	16	27	13	10	5.2			
378	碧玉	未成品	緑色硬質岩	磨石	37	B	23	41	28	22	16.3		ギラヌ敷硬質岩付着	
379	石鏡	緑色硬質岩	磨石	20	B	24	45	30	22	27.6		磨石か		
380	石鏡	緑色硬質岩	SK730	1	33	B	4	48	56	34	114.7			
381	粘着片	磨石	磨石	磨石	22	B	23	38	39	8	14.7			
382	鏡片	磨石	SK203	1	19	A	15	37	25	17	18.5	No.133		
383	鏡片	磨石	SK236	1	22	B	23	39	39	19	19.5	No.12		
384	鏡片	硬質岩あり	磨石	SK209	1	26	A	10	40	27	17	18.8		
385	鏡片	硬質岩あり	トフライト	磨石	26	A	8	32	28	13	17.3			
386	鏡片	硬質岩あり	トフライト	磨石	29	B	11	53	51	29	76.9			
387	鏡片	メノウ	磨石	磨石	38	B	9	39	39	23	38.7		緑色硬質岩付着	
388	鏡片	ヒスイ	磨石	磨石	36	B	25	29	19	18	12.5		輪白技法	
389	鏡片	ヒスイ	SK300	1	27	B	8	27	31	18	15.9			
390	鏡片	ヒスイ	P286	1	22	B	4	32	24	10	7.7			
391	鏡片	ヒスイ	磨石	磨石	28	B	4	35	62	9	15.1			
392	磨石	ヒスイ	SK284	2	21	B	17	36	28	11	21.3			
393	磨石	ヒスイ	SK284	2	21	B	22	75	45	30	121.6			
394	磨石	ヒスイ	SK284	2	21	B	22	38	30	22	41.0			

観察表

姫御前遺跡Ⅱ 遺物観察表 石製品(2)・金属製品

発出 番号	種類	分類	石質	遺期	出土位置			長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 (g)	備考	
					層位	グリッド	面						
395	礫石	ヒスイ	SK209	Ⅲ	26	B	9	18	17	13	6.4		
396	礫石	ヒスイ	SK209	Ⅰb	26	B	9	79	79	45	35.4	541	
397	礫石	ヒスイ	SK203	Ⅰ	23	B	12	55	39	20	48.7		
398	礫石	ヒスイ	P245	Ⅰ	19	B	19	29	22	11	14.4	SK216ST 青ヒスイ	
399	礫石	ヒスイ	SK202	Ⅱ	38	B	2	10.5	9.3	8.0	1.0	512	
400	礫石	ヒスイ	SK202	Ⅰ	38	B	18	36	15	15	12.1		
401	礫石	ヒスイ	SK202	Ta	38	B	25	35	28	15	37.4		
402	礫石	ヒスイ	SK202	Ⅰ	38	B	18	26	22	11	9.7		
403	礫石	ヒスイ	SK202	Ⅰ	40	B	5	32	35	15	18.1		
404	礫石	ヒスイ	P259	Ⅰ	22	A	10	30	18	18	17.0		
405	礫石	ヒスイ	SK202	Ⅰ	24	C	1	17	12	5.5	1.5		
406	礫石	ヒスイ		Ⅱ	26	B	13	31	21	21	16.6		
407	礫石	ヒスイ		Ⅱ	21	A	24	66	42	16	96.1		
408	礫石	ヒスイ	P380	Ⅰ	31	B	9	67	48	35	181.0		
409	礫石	ヒスイ	SK	Ⅱ	37	B	15	92	70	48	42.4		
410	礫石	赤玉石		Ⅱ	19	B	12	54	39	27	68.5		
411	心臓	赤玉石		Ⅱ	22	B	10	48	51	33	104.7		
412	礫石	メノウ	SK202	Ⅲ	37	B	17	47	36	28	61.4	SK1	
413	礫石	メノウ		Ⅱ	20	B	15	37	47	19	46.2	観測(黒化)	
414	礫石	メノウ	SK215	Ⅱ	21	B	18	35	23	23	24.2	SK7	
415	礫石	礫石	砂岩(観測)	Ⅰ	36	B	7	78	51	33	189.5		
416	礫石	礫石	砂岩(観測)	SK202	Ⅰ	38	B	24	43	61	61	252	
417	礫石	平砥石	砂岩(観測)	Ⅱ	25	A	4	406	283	199	32,500		
418	礫石	礫石	砂岩(観測)	Ⅱ	35	A	10	380	149	137	9,800		
419	礫石	礫石	砂岩(観測)	Ⅱ	27	A	25	128	71	39	470		
420	礫石	平砥石	凝灰岩	P245	Ⅰ	19	B	19	66	31	25	73.5	
421	礫石	平砥石	砂岩(観測)	P205	Ⅲ	23	B	9	243	209	71	4450	心臓か
422	礫石	内磨砥石	砂岩(観測)	Ⅱ	36	A	25	135	82	15	229		
423	礫石	内磨砥石	砂岩(観測)	Ⅱ	26	B	25	88	40	14	117.7		
424	礫石	内磨砥石	砂岩(観測)	P205	Ⅲ	23	B	9	159	72	18	205	
425	礫石	内磨砥石	SK229	Ⅰ	21	B	19	182	97	24	459	観測	
426	礫石	安山岩	SK730	Ⅱ	32	B	4	172	100	46	1122	心臓か	
427	礫石	内磨砥石		Ⅱ	31	B	13	117	69	33	407	心臓か	
428	礫石	安山岩	SK202	Ⅲ	37	B	22	110	67	41	450	観測(黒化) SK78	
429	礫石	砂岩(黒色観測)	SK202	Ⅲ	37	B	22	108	32	30	169.7	549	
430	門石	安山岩		Ⅱ	37	B	18	44	85	30	119.6		
431	門石	安山岩		Ⅱ	39	A	22	94	105	36	411		
432	門石	安山岩	SK202	Ⅲ	37	B	17	122	181	32	1,088	554	
433	貝殻状切片	黒曜岩(観測)・砂岩		Ⅱ	20	B	22	146	114	50	577		
434	貝殻状切片	砂岩(観測)	SK202	Ⅰ	38	B	24	51	69	11	45.7	SK2	
435	貝殻状石磨	砂岩(黒色観測)		Ⅱ	36	A	14	82	70	12	89.0	使用痕跡	
436	貝殻状切片	黒曜岩(観測)	砂岩(観測)	Ⅳ	25	A	13	73	98	13	96.3		
437	貝殻状切片	砂岩(黒色観測)		Ⅳ	25	A	8	77	108	21	197.7		
438	貝殻状切片	砂岩(黒色観測)		Ⅱ	26	B	19	92	61	16	120.3		
439	貝殻状切片	黒曜岩(観測)	砂岩(観測)	SK216中	Ⅱ	19	B	18	96	54	17	85.7	
440	貝殻状切片	黒曜岩(観測)	砂岩(黒色観測)		20	A	5	176	124	31	796		
441	貝殻状切片	砂岩	SK209	Ⅲ	30	A	10	92	61	15	92.0		
442	礫石(心臓)	砂岩(観測)		Ⅱ	30	B	22	107	91	20	229		
443	貝殻状切片	黒曜岩(観測)	砂岩(観測)		20	B	14	69	71	11	62.0	No.93	
444	貝殻状切片	黒曜岩(観測)	砂岩(黒色観測)	Ⅱ	38	A	23	45	43	6	14.3		
445	打製石斧	砂岩(観測)		Ⅲ	30	A	24	118	65	15	109.9		
446	心臓	砂岩(黒色観測)	SK209	Ⅰ	26	B	9-14	136	117	50	1290		
447	心臓	砂岩(観測)	SK233	Ⅰ	22	B	13	126	74	36	492		
448	心臓	黒曜岩	SK202	Ⅲ	38	B	24	128	87	29	439		
449	心臓	砂岩(観測)	SK202	Ⅱ	25	B	5	123	101	22	662		
450	心臓	黒曜岩		Ⅱ	38	A	20	23	12	6	1.5		
451	心臓	持貫貫岩		Ⅱ	31	A	19	40	66	40	101.5	流紋岩片層	
452	鎌状石	砂岩(黒色観測)		Ⅱ	19	B	2	62	59	23	113.6		
453	鎌状石	砂岩(黒色観測)	SK209	Ⅰ	26	B	4	79	73	34	226	SK29	
454	鎌状石	砂岩(黒色観測)		Ⅱ	25	B	5	72	57	23	89.4		
455	鎌状石	砂岩(黒色観測)		Ⅱ	40	B	4	71	68	41	238		
456	鎌状石	砂岩(黒色観測)		Ⅱ	18	B	23	43	52	24	106		
457	鉄製品	鉄		Ⅱ	19	B	5	70	73	1	14.0		
458	鉄製品	鋼		Ⅱ	29	B	20	118	268	19	4.2		
459	鉄製品	鋼		Ⅱ	26	A	10	106	12	7	16.1		
460	鉄製品	釘		Ⅱ	19	B	9	34	9	4	1.8		
461	鉄製品	釘		Ⅱ	20	A	5	48	13	13	13.9	No.27	
462	鉄製品	釘		Ⅱ	20	B	16	68	7	6	5.0		
463	鉄製品	釘		Ⅱ	37	A	18	172	7	6	19.5		
464	青銅製品	上字安全具		Ⅱ	25	A	20	61	60	2	20.9		
465	鉄片			Ⅱ	37	A	4	44	34	22	49.8	鉄片 No.129	
466	鉄片			Ⅱ	38	A	4	62	60	29	189.6	鉄片 No.155	
467	鉄片			Ⅱ	29	B	13	52	61	32	93.6	鉄片 No.59	
468	鉄片			Ⅱ	30	A	10	75	101	32	256	鉄片 No.97	
469	土製品	釘		Ⅱ	36	B	14	68	72	-	25	41.4	

姫御前遺跡Ⅱ 遺物観察表 銭貨

調査 番号	銭貨名	産地	王 朝	標高 (西暦)	出土位置			種類 mm	直径 mm	内径 mm	長さ mm	厚さ (T) ¹⁾	備考			
					層位	グリッド	方位									
470	開元通寶	高麗	唐	621	日 b	37	B	14	21.5	21.8	6.5	6.5	1.2	2.0	裏面・付着物・破損跡か	
471	開元通寶	高麗	唐	621	日	23	B	10	22.6	22.6	6.9	6.7	0.9	2.0		
472	開元通寶	高麗	唐	621	日 b	38	A	20	22.8	22.9	6.2	6.3	1.0	2.5		
473	開元通寶	高麗	唐	621	日 b	28	A	19	24.4	24.6	6.6	6.5	1.0	2.6		
474	淳化元宝	北宋	北宋	990	日 b	36	A	15	24.1	24.0	5.9	6.0	1.0	2.2		
475	淳化元宝	北宋	北宋	995	日	38	A	8	24.3	24.2	6.0	5.9	1.1	2.4		
476	咸平元宝	北宋	北宋	995	日 b	36	B	21	21.3	21.1	5.7	6.0	1.1	2.0	全面・磨耗跡か	
477	景德元宝	北宋	北宋	1004	日 b	37	A	15	24.1	24.1	6.2	6.2	1.0	2.9		
478	天聖元宝	北宋	北宋	1023	日	20	B	15	24.4	24.1	6.1	5.9	1.1	2.7	No.87	
479	天聖元宝	北宋	北宋	1023	日	19	B	9	25.0	25.0	7.0	6.7	1.3	3.6	No.66 背一銭	
480	阜寧通寶	北宋	北宋	1038	日	19	B	19	23.8	23.6	6.3	6.3	1.0	2.6	No.50	
481	阜寧通寶	北宋	北宋	1038	日 b	22	C	6	24.9	24.6	7.4	7.2	1.1	3.3		
482	阜寧通寶	北宋	北宋	1038	日 b	36	A	23	24.0	24.0	7.6	7.4	1.0	2.7		
483	阜寧通寶	北宋	北宋	1038	日 b3	35	A	17	24.5	24.2	6.4	6.4	1.1	3.3		
484	阜寧通寶	北宋	北宋	1038	日 b	38	A	25	24.7	24.7	7.2	7.2	1.0	2.7		
485	阜寧通寶	北宋	北宋	1038	日 b	34	B	24	23.9	23.5	6.5	6.4	1.1	3.1		
486	阜寧通寶	北宋	北宋	1038	日	35	A	22	24.7	24.1	6.9	7.3	1.1	3.4		
487	阜寧通寶	北宋	北宋	1038	日 b	35	B	17	24.0	24.6	7.2	7.5	0.9	3.0		
488	阜寧通寶	北宋	北宋	1054	日 b	30	B	24	23.9	24.2	7.1	7.1	1.1	3.0		
489	嘉祐通寶	北宋	北宋	1056	日	20	B	3	24.6	24.5	7.2	7.1	1.0	3.0		
490	嘉祐通寶	北宋	北宋	1056	日	38	B	3	19.7	20.4	7.2	7.5	1.0	1.5	破損跡	
491	嘉祐通寶	北宋	北宋	1056	日 b	30	C	21	24.1	24.2	7.2	7.1	1.1	2.9		
492	嘉祐通寶	北宋	北宋	1056	日 b2	36	B	11	23.8	23.8	7.1	7.3	1.0	2.2		
493	治平元宝	北宋	北宋	1064	日 b	36	A	10	23.8	23.8	7.2	7.0	1.2	3.2		
494	治平元宝	北宋	北宋	1064	日 b	23	B	23	24.0	23.6	6.9	7.2	1.1	2.3		
495	熙寧元宝	北宋	北宋	1068	日	24	B	1	23.3	23.3	6.2	6.1	1.2	2.9		
496	熙寧元宝	北宋	北宋	1068	日	34	B	17	23.5	23.5	6.6	6.6	1.1	2.8	SX564	
497	熙寧元宝	北宋	北宋	1068	日 b	36	B	25	24.0	23.8	6.3	6.3	1.2	2.2		
498	熙寧元宝	北宋	北宋	1068	日 b	37	A	7	23.9	23.9	6.3	6.3	1.2	4.1		
499	熙寧元宝	北宋	北宋	1068	日 b	37	A	8	23.3	23.3	6.0	5.9	1.2	4.3	破損跡か	
500	熙寧元宝	北宋	北宋	1068	日 b	37	B	6	23.9	23.6	7.3	7.3	1.1	2.1		
501	熙寧元宝	北宋	北宋	1068	日 b	36	A	23	23.3	23.2	6.2	6.1	1.4	3.7		
502	元祐通寶	北宋	北宋	1078	日 b	20	B	19	23.9	24.1	6.7	7.0	1.0	3.0		
503	元祐通寶	北宋	北宋	1078	日 b	36	A	22	23.3	23.6	7.1	7.0	1.1	2.6		
504	元祐通寶	北宋	北宋	1078	日 b	38	B	17	24.6	24.9	6.8	7.1	1.0	2.1		
505	元祐通寶	北宋	北宋	1080	日	25	B	7	24.3	24.4	7.0	6.7	1.2	2.5		
506	元祐通寶	北宋	北宋	1086	日	38	A	5	24.8	24.6	5.9	6.0	1.3	3.0		
507	大觀通寶	北宋	北宋	1107	日 b	36	C	1	24.0	24.0	6.2	6.2	1.1	2.3		
508	大觀通寶	北宋	北宋	1107	日	20	B	18	24.3	24.3	6.1	6.5	1.0	2.9	No.100	
509	政和通寶	北宋	北宋	1111	日 b	35	A	12	24.2	24.2	6.8	6.6	1.0	3.0		
510	紹興元宝	南宋	南宋	1190	日	19	B	25	23.6	23.4	6.3	6.3	1.4	3.1	背二	
511	紹興元宝	南宋	南宋	1190	日 b	35	B	23	22.7	23.2	6.1	6.1	1.2	3.1	背三	
512	洪武通寶	高麗	明	1368	日 b	37	C	1	22.5	22.5	5.6	5.6	1.8	3.7		
513	洪武通寶	高麗	明	1368	日 b	35	B	23	23.7	23.5	5.1	5.4	1.5	3.1		
514	洪武通寶	高麗	明	1368	日	19	B	7	21.5	22.1	4.7	4.6	1.0	2.2	No.48	
515	洪武通寶	高麗	明	1368	日 b	36	A	7	20.3	20.3	5.1	5.2	1.9	3.8	背一銭	
516	洪武通寶	高麗	明	1368	日 b	29	B	1	20.5	20.3	5.3	5.5	2.0	2.8	背一銭	
517	永樂通寶	高麗	明	1408	日 b	37	A	5	24.5	24.7	5.3	5.3	1.6	3.9	付着物	
518	不明	不明	北宋	-	日	25	B	7	24.8	24.9	6.2	6.4	1.8	3.8	「元●通寶」	
519	不明	-	-	-	日 b	35	A	18	23.1	23.1	7.6	7.6	1.0	2.5		
520	不明	-	-	-	日 b	35	B	7	22.6	22.7	6.1	6.4	1.2	2.7	●元寶	
521	不明	-	-	-	中泉	日 b	37	B	22	21.8	21.7	5.6	5.8	0.8	1.4	
522	不明	-	-	-	日	22	B	5	22.6	22.6	6.8	6.7	1.2	2.1		
523	無文銭	-	-	-	中泉	日 b	36	A	6	19.4	19.5	5.8	6.3	0.7	1.1	
524	無文銭	-	-	-	中泉	日 b	36	A	3	20.0	20.4	6.0	6.2	0.6	0.6	
525	背文不明	新羅	高麗	1607	日	19	B	4	22.7	22.7	6.5	6.5	0.9	2.5	No.2000 背上	

姫御前遺跡Ⅱ 遺物観察表 木製品 (1)

調査 番号	形状 形状	分類	図様・形状 記号	総本 番号	種類	本取り	出土位置			長さ mm	幅 mm	厚さ mm	備考		
							透視番号	No.	層位 グリッド						
526	算珠	B-1	算	NG-2563	木片	既出		日 b	35	A	12	20.2	7	5	
527	算珠	B-1	算	NG-2564	木片	既出		日 b	37	A	5	21.4	6	6	
528	算珠	B-1	算	NG-2565	木片	既出		日 b	38	A	15	19.9	5	6	
529	算珠	B-1	算	NG-2566	木片	既出	SX500	日 b	38	A	8	20.6	7	7	
530	算珠	B-1	算	NG-2567	木片	既出	SX524	日 b	36	A	24	19.2	5	5	
531	算珠	B-1	算	NG-2568	木片	既出		日 b	35	A	24	15.9	6	3	
532	算珠	B-1	算	NG-2569	木片	既出	SX515	日 b	36	A	22	17.8	6	4	
533	算珠	B-1	算	NG-2570	木片	既出		日 b	38	A	24	18.8	5	6	
534	算珠	B-1	算	NG-2571	木片	既出		日 b	34	B	22	22.0	7	7	
535	算珠	B-1	算	NG-2572	木片	既出		日 b	39	A	2	25.7	12	8	
536	算珠	B-1	算	NG-2573	木片	既出		日 b	35	A	25	27.0	13	13	
537	木片	-	-	NG-2574	木片	既出		日 b	37	B	15	9.9	13	12	
538	動物彫	-	-	NG-2575	木片	既出		日 b	35	A	14	47	61	7	
539	刀形	A-5	刀形	NG-2576	木片	既出		日 b	36	A	25	132	19	2	
540	刀形	A-5	刀形	NG-2577	木片	既出		日 b	37	A	3	121	34	5	
541	刀形	A-5	刀形	NG-2578	木片	既出		日 b	36	A	15	214	21	8	
542	刀形	A-5	刀形	NG-2579	木片	既出		日 b	19	C	21	200	28	5	
543	刀形	A-5	刀形	NG-2580	木片	既出		日 b	35	A	15	154	32	4	
544	刀形	A-5	刀形	NG-2581	木片	既出		日 b	37	B	15	120	28	4	

観 察 表

姫御前遺跡Ⅱ 遺物観察表 木製品(2)

観号 番号	品類 形状	分類	器種・形名 図本分類	図本 番号	種類	木取り	加工位置		長さ mm	幅 mm	厚さ mm	備考		
							遺物番号 No.	部位 ゾリッド						
545	方眼	A-5	方眼	NIQ-2582	天守	板打	口下	口下	30	B 16	125	22	3	
546	壺形		壺形	NIQ-2583	天守	板打	口下	口下	35	A 10	150	21	4	
547	箱状板		箱状板	NIQ-2584	天守	板打	口下	口下	35	A 25	265	84	9	
548	壺物底板		壺物底板	NIQ-2585	天守	板打	口下	口下	30	B 19	150	41	4	
549	壺物底板		壺物底板	NIQ-2586	天守	板打	口下	口下	39	A 5	163	69	6	
550	壺物底板		壺物底板	NIQ-2587	天守	板打	口下	口下	38	A 8	134	18	5	
551	壺物底板		壺物底板	NIQ-2588	宇ツク	板打	口下	口下	19	B 13	89	24	5	
552	楕圓板		楕圓板	NIQ-2589	宇ツク	板打	口下	口下	39	B 13	142	90	9	
553	枠		天守	NIQ-2590	天守	板出	口下	口下	22	A 4	62	32	28	
554	天守棒		天守棒?	NIQ-2591	天守	平丸板組	口下	口下	38	A 5	199	42	34	
555	皿下駄		厚材	NIQ-2592	天守	板打	口下	口下	36	A 18	400	115	10	円孔 直径 34mm
556	皿下駄		厚材	NIQ-2593	天守	板打	口下	口下	36	A 10	347	98	13	円孔 直径 20mm, 23mm
557	下駄		下駄	NIQ-2594	天守	板打	口下	口下	34	A 25	314	98	34	
558	下駄?	A-6	皿下駄	NIQ-2595	天守	板打	口下	口下	35	A 4	317	149	150	円孔 直径 12mm
559	下駄?		皿下駄	NIQ-2596	天守	板打	口下	口下	35	B 14	305	108	18	
560	板状		板状	NIQ-2597	天守	板打	口下	口下	35	B 4	300	69	20	
561	板状		板状	NIQ-2598	天守	板打	口下	口下	36	A 15	249	32	11	板状部多数 円孔複数あり
562	板状		板状	NIQ-2599	天守	板打	口下	口下	37	A 15	319	52	12	
563	板状		薄板状	NIQ-2600	天守	板打	口下	口下	22	A 3	114	28	6	
564	板状		不明	NIQ-2601	天守	板出	口下	口下	36	A 10	67	11	6	
565	圓筒形		厚材片	NIQ-2602	天守	なし	SA549	口上	38	A 5	188	36	37	
566	蓋		厚材	NIQ-2603	天守	板出	SD520	口上	38	B 7	304	43	7	W3
567	板状	B-3	舟形	NIQ-2604	天守	板出	SX662	口上	35	A 25	206	14	11	端部に突き刺さって焼付
568	舟形板状		厚材	NIQ-2605	天守	板打	口上	口上	36	A 1	224	348	22	
569	舟形板状		薄	NIQ-2606	天守	割り置き	SX554	口上	39	A 13	452	310	172	
570	舟形板状		薄	NIQ-2607	天守	割り置き	SH 44	口上	38	B 13	964	354	61	
571	舟形板状 板状		舟形板状 板状	NIQ-2608	天守	板打	SH 28	口上	34	B 22	2778	139	25	
572	榑形下		厚材	NIQ-2609	天守	板打	SX538	口上	36	A 22	1496	159	19	
573	板状	B-3	天板	NIQ-2610	天守	板打	SX559	口上	37	A 10	775	87	19	W3
574	板状	B-3	板	NIQ-2611	天守	舟形	SX557	口上	36	B 11	764	41	42	
575	板状	B-3	板	NIQ-2612	天守	薄	口上	口上	30	B 17	359	29	16	
576	板状	B-3	板	NIQ-2613	宇ツク	薄	SX516	口上	36	B 21	401	63	38	先端部破化
577	板状	B-3	板	NIQ-2614	天守	薄	SX537	1 ~ 2	38	B 16	477	56	45	
578	板状	B-3	丸棒	NIQ-2615	天守	板出	SH730	V	32	B 5	599	35	30	
579	天守棒		棒	NIQ-2616	天守	筒状平丸棒	SD020	口上	37	B 21	2168	50	35	
580	柱形		柱形	NIQ-2617	天守	丸木芯持ち材	P347	柱形	19	B 22	643	203	210	SD216
581	柱形		柱形	NIQ-2618	天守	丸木芯持ち材	P246	柱形	19	B 12	493	269	210	SD216
582	柱形		柱形	NIQ-2619	天守	丸木芯持ち材	P245	柱形	19	B 19	306	225	199	SD216
583	柱形		柱形	NIQ-2620	天守	丸木芯持ち材	P248	柱形	19	B 24	350	235	182	SD216
584	柱形		柱形	NIQ-2621	天守	丸木芯持ち材	P420	柱形	21	A 4	494	151	130	SA199
585	柱形		柱形	NIQ-2622	天守	丸木芯持ち材	SX224	柱形	21	A 9	590	190	136	SA199
586	柱形		柱形	NIQ-2623	天守	丸木芯持ち材	P421	柱形	21	A 14	590	193	136	SA199
587	柱形		柱形	NIQ-2624	天守	丸木芯持ち材	P349	柱形	21	B 11	183	111	98	SH241

観 察 表

竹花遺跡 I 遺物観察表 中世近世陶磁器 (2)

番号	品名	形状	寸法	部位	口径 mm	高さ mm	底径 mm	色澤	色澤	胎土 (土質・色調)	製作時期	使用時期	備考	
49	青磁	磁瓦筒	74 A 19	口	132	-	-	明オリーブ黄 5GV7/1	明オリーブ黄 5GV7/1	Kf1 5V9/1 白	(外) 遺構文	遺跡層	1440年代~15C	
50	青磁	磁瓦筒	74 B 6	口	132	-	-	明磁灰 7.5GV7/1	明磁灰 7.5GV7/1	Kf1 N8/0 白	(口内) 磁瓦	(口外) タタキ	15C末~16C前半	
51	青磁	磁瓦筒	71 A 20	口	126	-	-	明オリーブ黄 2.5GV7/1	明オリーブ黄 10V7/2	Kf1 7.5V9/1 白	(口内) 磁瓦・遺跡層 磁瓦文	-	15C末~16C前半	
52	青磁	磁瓦筒	64 A 14	口	114	-	-	40 明オリーブ黄 2.5GV7/1	明オリーブ黄 10V7/2	Kf1 N7/0 白	(内底) 磁瓦文	(内底) 蓋	14C~15C前半	
53	青磁	磁瓦筒	65 B 22	口	116	-	-	60 オリーブ黄 7.5V6/3	オリーブ黄 7.5V6/2	Kf1 10V9B/1 白	(内底) 磁瓦文	(内底) 無胎	15C後半	
54	青白磁	磁瓦筒	63 A 25	口	116	-	-	オリーブ黄 2.5GV7/1	オリーブ黄 2.5GV7/1	Kf1 N7/0 白	(外) 遺構文	-	山本口磁器半 12C後半	
55	白磁	磁瓦筒	64 A 20	口	116	-	-	Kf1 7.5V7/2	オリーブ黄 10V8/2	Kf1 5V7/1 白	(内) 焼線・金目	(口) 小瓦縁状	山本口磁器半 12C後半	
56	白磁	磁瓦筒	74 B 12	口	140	-	-	Kf1 5V7/1	Kf1 5V6/1	Kf1 N7/0 白	(内) 焼線	-	14C後半	
57	白磁	内内筒	74 B 1	口	98	-	-	Kf1 2.5V8/1	Kf1 2.5V8/1	Kf1 2.5V7/1 ナシ	-	-	15C	
58	白磁	内内筒	71 B 1	口	112	-	-	Kf1 10V9B/1	Kf1 10V9B/1	Kf1 10V9B/1 ナシ	-	-	15C	
59	白磁?	磁瓦筒	67 A 24	口	100	-	-	明オリーブ黄 5V6/2	明オリーブ黄 5V6/2	Kf1 2.5V6/1 ナシ	-	-	15C	
60	白磁	磁 (小野七郎)	64 A 2	口	132	-	-	Kf1 10V7/1	Kf1 5V6/1	Kf1 7.5V7/1 白	(口) 小瓦縁状	-	16C	
61	白磁	磁 (小野七郎)	59 A 24	口	130	-	-	Kf1 5V6/1	Kf1 5V7/3	Kf1 5V9B/1 白	-	-	16C前半	
62	白磁	磁瓦筒	72 A 14	口	130	-	-	Kf1 5V6/1	Kf1 5V9/1	Kf1 10V9B/1 ナシ	(磁付) 無胎	-	16C末~17C前	
63	白磁	磁 (小野七郎)	55 B 10	口	114	-	-	88 Kf1 10V8/1	Kf1 5V7/1	Kf1 10V9/1 白	-	-	16C	
64	白磁	枕高内内筒	73 B 17	口	122	-	-	36 Kf1 2.5V8/1	浅黄 2.5V7/3	浅黄 2.5V8/2	(磁付) フラット状	(磁) 遺跡層 (口)	15C	
65	李朝陶器	磁	60 A 15	口	116	-	-	40 Kf1 2.5V7/1	2.5V8/1	2.5V8/1	にのみ黄 5V9/4	(内) 無胎	-	15C後半~16C
66	李朝陶器	磁 (平瀬か)	64 A 19	口	116	-	-	42 にのみ黄 10V9B/3	浅黄 10V9B/2	にのみ黄 7.5V9/4	(内) 無胎	-	15C後半~16C	
67	青花	磁 (小野七郎)	75 A 5	口	102	92	-	明磁灰 10V7/1	明磁灰 10V7/1	Kf1 N8/0 白	(外) 遺構文	-	15C末~16C前	
68	青花	磁 (小野七郎)	76 A 14	口	116	-	-	28 Kf1 7.5V7/1	Kf1 10V7/1	Kf1 7.5V9/1 ナシ	(外) 磁瓦文	(内) 蓋	15C末~16C前半	
69	青花	磁 (小野七郎)	63 A 19	口	100	23	60	Kf1 10V7/1	明磁灰 10V9/1	Kf1 N8/0 白	(外) 磁瓦・割点文 ナシ	(内) 磁瓦・蓋文	15C末~16C前半	
70	青花	磁 (小野七郎)	66 A 15	口	114	-	-	明磁灰 10V7/1	明磁灰 10V7/1	Kf1 N8/0 白	(外) 磁瓦・割点文 ナシ	(内) 磁瓦・割点文	15C末~16C後半	
71	青花	磁 (小野七郎)	54 B 14	口	116	-	-	80 明磁灰 10V7/1	明オリーブ黄 2.5GV7/1	Kf1 5V8/1 白	(外) 遺跡層磁瓦文	(内底) 磁瓦文ナシ	16C前半	
72	青花	磁 (小野七郎)	55 B 20	口	114	-	-	72 Kf1 N8/0	Kf1 N8/0	Kf1 N8/0 ナシ	(内) 無胎	(磁付) 磁瓦	16C末~17C前	
73	瀬戸瓦器	若緑小皿	61 B 17	口	88	23	46	オリーブ黄 5V6/3	オリーブ黄 5V6/4	Kf1 10V9B/2 白	(口・内) 無胎	-	古瀬戸中層 1330-40年	
74	瀬戸瓦器	若緑小皿	66 A 4	口	83	-	-	Kf1 5V7/1	Kf1 7.5V7/2	Kf1 5V7/1 白	(口) 無胎	-	鎌江・初期 14C末~1440年	
75	瀬戸瓦器	若緑小皿	57 B 5	口	88	15	48	にのみ黄 7.5V9B/4	浅黄 2.5V8/3	Kf1 10V9B/2 白	(口・内) 無胎	-	古瀬戸中層 14C末~16C前	
76	瀬戸瓦器	若緑小皿	64 A 4	口	96	-	-	Kf1 10V9B/2	にのみ黄 10V9/3	Kf1 10V9B/2 白	(口・内) 無胎	-	古瀬戸中層 14C末~15C前	
77	瀬戸瓦器	磁	70 B 2	口	108	23	60	浅黄 2.5V8/2	浅黄 2.5V7/2	Kf1 5V9/1 白	(内) 小瓦一隅	-	大塚4層 1590~1610年	
78	瀬戸瓦器	磁	63 A 14	口	118	25	58	Kf1 2.5V8/1	Kf1 5V8/1	Kf1 5V9/1 白	(内) 無胎	-	大塚4層 1590~1600年	
79	瀬戸瓦器	ヒヤ磁	60 A 25	口	118	-	-	浅黄 2.5V7/2	浅黄 2.5V7/2	Kf1 2.5V8/2 白	(内) 無胎	-	大塚3~4層 1550~1600年	
80	瀬戸瓦器	緑釉小皿	70 B 16	口	125	27	70	浅黄 7.5V7/3	オリーブ黄 10V8/2	Kf1 N8/0 白	(口) 無胎	-	古瀬戸中層古殿 1440-60年	
81	瀬戸瓦器	緑釉小皿	70 A 24	口	118	22	74	浅黄 2.5V7/2	Kf1 10V9/1	Kf1 10V9/1 白	(口・内) 無胎	-	(内) 大塚1層 1480-1500年	
82	瀬戸瓦器	緑釉小皿	66 A 19	口	116	-	-	磁オリーブ黄 7.5V4/3	磁オリーブ黄 7.5V5/3	Kf1 2.5V7/1 白	(口) 無胎	-	大塚1層前半 1480-1500年	
83	瀬戸瓦器	緑釉小皿	70 A 25	口	112	-	-	オリーブ黄 10V8/4	オリーブ黄 2.5V4/4	Kf1 10V9B/2 白	(口) 無胎	-	大塚1層前半 1480-1500年	
84	瀬戸瓦器	瓦筒 (平瀬)	67 A 4	口	96	-	-	浅黄 7.5V8/3	10V7/2	Kf1 2.5V8/2 白	(内) 無胎	-	大塚1層前半 1530-60年	
85	瀬戸瓦器	緑釉小皿?	59 A 25	口	108	-	-	オリーブ黄 2.5GV6/1	オリーブ黄 10V9/2	浅黄 2.5V7/2 白	(上) 無胎	-	15C後半	
86	瀬戸瓦器	緑釉小皿	76 A 14	口	110	-	-	オリーブ黄 5V5/4	磁オリーブ黄 5V4/2	Kf1 2.5V8/2 白	(内) 無胎	-	16C	
87	瀬戸瓦器	磁瓦筒	60 B 12	口	140	-	-	オリーブ黄 7.5V6/3	浅黄 5V7/3	Kf1 2.5V8/2 白	(外) 小瓦一隅	-	大塚2層後半 1550~60年	
88	瀬戸瓦器	磁瓦筒	61 B 6	口	101	-	-	磁オリーブ黄 5V4/4	浅黄 2.5V5/4	Kf1 5V8/1 白	(内) 無胎	-	大塚1層後半 1500~1530年	
89	瀬戸瓦器	磁	72 A 15	口	168	-	-	浅黄 10V9B/4	にのみ黄 2.5V4/4	Kf1 2.5V7/1 白	(内) 無胎	-	古瀬戸中層 1380~1420年	
90	瀬戸瓦器	磁	76 A 15	口	146	-	-	Kf1 10V9/1	Kf1 2.5V7/1	Kf1 10V9/1 白	(口) 無胎	-	古瀬戸中層 1380~1430年	
91	瀬戸瓦器	磁	75 B 11	口	116	-	-	80 Kf1 10V9B/1	Kf1 7.5V9B/2	Kf1 10V9B/2 白	(内) 無胎	-	古瀬戸中層式	
92	瀬戸瓦器	志野磁	60 B 1	口	116	-	-	72 Kf1 7.5V8/1	7.5V8/1	Kf1 2.5V8/2 ナシ	(内) 瓦石	-	大塚1層後半 1600~1610年	
93	瀬戸瓦器	磁	68 A 15	口	116	-	-	60 Kf1 7.5V7/2	Kf1 10V9B/1	Kf1 7.5V9/1 白	(内) 無胎	-	古瀬戸中層 1380~1430年	
94	土師器	磁 (口内)	68 B 2	口	64	17	54	にのみ黄 10V9B/3	にのみ黄 10V9B/3	にのみ黄 10V9B/3 白	(内) 磁	-	古瀬戸中層 1380~1430年	

観察表

竹花遺跡Ⅰ 遺物観察表 中近世陶磁器 (4)

調査番号	分類	形状	寸法(mm)	部位	口径(mm)	高さ(mm)	底径(mm)	色塗	色塗	胎土(土質・色調)	製作時期	使用時期	備考			
143	肥前系陶器	丸瓶	75	φ	136	-	-	オリーブ黄 2.5Y6/3	灰オリーブ 7.5Y5/3	Kr1 7.5Y7/1	(内) 灰胎	(口筒) 又入	大橋Ⅰ層 1580～1610年代			
144	肥前系陶器	煎	67	φ	10	φ	44	灰白 5Y7/3	浅黄 5Y7/3	Kr1 5Y8/1	(内) 灰胎	(内) 煎胎	大橋Ⅰ・2層 1590～1610年代			
145	肥前系陶器	湯鉢類	75	φ	17	φ	128	32	44	浅黄 5Y7/3	灰白 5Y7/1	(内) 灰胎	大橋Ⅰ層 1610～50年代			
146	肥前系陶器	湯鉢類	64	φ	7	φ	132	-	-	にがし黄 10Y8/2	灰黄 2.5Y7/2	にがし黄 7.5Y8/7	白 土 土	(内) 灰胎	大橋Ⅰ層 1610～50年代	
147	肥前系陶器	湯鉢類	69	φ	15	φ	132	-	-	浅黄 2.5Y7/3	灰黄 2.5Y7/2	にがし黄 7.5Y8/7	白 土 土	(内) 灰胎	大橋Ⅰ層 1610～50年代	
148	肥前系陶器	湯鉢類 (磁器?)	63	φ	19	φ	128	-	-	灰白 5Y7/2	灰白 5Y7/2	にがし黄 5Y8/3	白 土 土	(内) 灰胎	大橋Ⅰ層 1610～50年代	
149	肥前系陶器	煎 (磁器?)	53	φ	20	φ	130	-	-	灰黄 2.5Y6/2	2.5Y6/2	Kr1 10Y8/1	(内) 煎胎	兼熟	大橋Ⅰ層 1610～50年代	
150	肥前系陶器	煎	68	φ	7	φ	149	-	-	灰白 5Y7/1	灰白 5Y6/1	Kr1 2.5Y7/1	ナシ	(内) 灰胎	大橋Ⅰ層 1610～50年代	
151	越中系陶器	丸瓶	61	φ	21	φ	110	35	60	高黄 2.5Y8/4	高黄 5Y8/2	にがし黄 5Y8/7	白 土 土	(内) 灰胎	17 既記層半～中層	
152	越中系陶器	丸瓶	72	φ	2	φ	98	27	44	Kr1 10Y7/2	Kr1 10Y8/1	Kr1 2.5Y8/1	白 土 土	(口)・(内)上層 灰胎	17 既記層半～中層	
153	越中系陶器	丸瓶	70	φ	11	φ	118	23	54	高黄 10Y8/1	2.5Y8/4	2.5Y8/7	白 土 土	(内) 煎胎	17 既記層半～中層	
154	越中系陶器	丸瓶	76	φ	14	φ	145	-	-	Kr1 10Y8/2	Kr1 10Y8/1	Kr1 10Y8/2	白 土 土	(内) 灰胎	17 既記層半～中層	
155	越中系陶器	丸瓶	68	φ	9	φ	104	27	52	Kr1 5Y6/1	Kr1 2.5Y7/1	高黄 2.5Y6/1	白 土 土	(内) 灰胎	17 既記層半～中層	
156	越中系陶器	丸瓶	75	φ	10	φ	112	23	40	黄 5Y8/6	浅黄黄 10Y8/4	浅黄黄 10Y8/3	白 土 土	(上) 煎胎	(内) 又入	17 既記層半～中層
157	越中系陶器	丸瓶	71	φ	11	φ	104	27	44	2.5Y7/6	高黄 2.5Y7/4	2.5Y8/7	白 土 土	(上) 煎胎	17 既記層半～中層	
158	越中系陶器	丸瓶	71	φ	10	φ	102	-	-	浅黄黄 10Y8/3	高黄 7.5Y8/4	高黄 10Y8/3	白 土 土	(上) 煎胎	17 既記層半～中層	
159	越中系陶器	向付	53	φ	20	φ	113	-	-	高黄 7.5Y8/4	高黄 7.5Y8/4	高黄 10Y8/1	白 土 土	(内) 灰胎	17 既記層半～中層	
160	越中系陶器	ヒヤ蓋	70	φ	11	φ	152	-	-	灰黄 2.5Y7/2	灰黄 2.5Y7/2	にがし黄 5Y8/7	白 土 土	(上) 煎胎	17 既記層半～中層	
161	瀬戸系陶器	大瓶	75	φ	21	φ	126	-	-	黄 2.5Y2/1	黄 2.5Y2/1	Kr1 2.5Y7/1	白 土 土	(内) 灰胎	大橋Ⅰ層 1480～1610年	
162	瀬戸系陶器	大瓶	75	φ	1	φ	217	-	-	にがし黄 2.5Y8/3	にがし黄 5Y8/3	Kr1 10Y8/1	白 土 土	(口筒) 又入	大橋Ⅰ層 1480～1610年	
163	瀬戸系陶器	煎形鉢	64	φ	4	φ	115	-	-	灰白 5Y6/1	オリーブ黄 7.5Y5/3	Kr1 5Y8/1	白 土 土	(内) 灰胎	古瀬戸Ⅰ層 1480～50年代	
164	瀬戸系陶器	煎形鉢	71	φ	1	φ	115	-	-	Kr1 10Y8/2	にがし黄 2.5Y6/4	Kr1 10Y8/1	白 土 土	(上) 煎胎	古瀬戸Ⅰ層 1440～50年代	
165	瀬戸系陶器	煎形鉢	75	φ	11	φ	138	-	-	オリーブ黄 7.5Y5/3	にがし黄 2.5Y7/3	Kr1 10Y8/1	白 土 土	(内) 灰胎	古瀬戸Ⅰ層 1480～50年代	
166	瀬戸系陶器	煎鉢類	65	φ	4	φ	106	-	-	高黄 2.5Y5/3	高黄 2.5Y5/3	にがし黄 7.5Y8/7	白 土 土	(内) 灰胎	古瀬戸Ⅰ層 1440～60年代	
167	肥前系陶器	中瓶 (六寸型)	70	φ	1	φ	234	-	-	灰黄 2.5Y6/2	灰黄 10Y8/2	Kr1 10Y8/2	白 土 土	(口筒)・(内) 煎胎	大橋Ⅰ層 1580～1610年代	
168	肥前系陶器	鉢	68	φ	15	φ	172	-	-	灰 5Y6/1	灰 5Y6/1	にがし黄 7.5Y8/7	白 土 土	(内) 煎胎	大橋Ⅰ層 1580～1610年代	
169	瀬戸系陶器	煎	71	φ	20	φ	48	12	16	Kr1 5Y6/1	灰オリーブ 7.5Y5/3	Kr1 5Y7/1	白 土 土	(内) 灰胎	古瀬戸Ⅰ層 1480～50年代	
170	瀬戸系陶器	煎入	66	φ	9	φ	115	-	-	Kr1 10Y8/1	10Y8/2	Kr1 10Y8/1	白 土 土	(内) 煎胎	古瀬戸Ⅰ層 1480～50年代	
171	白磁	合子	70	φ	19	φ	-	-	-	明黄 10Y7/1	灰白 5Y8/1	Kr1 2.5Y8/1	白 土 土	(内) 煎胎	兼熟	
172	白磁	火鉢	75	φ	25	φ	340	-	-	高黄 2.5Y8/4	にがし黄 10Y8/1	にがし黄 10Y8/1	白 土 土	(内) 煎胎	15C 中～16C 前半	
173	白磁	煎形鉢 (口筒)	63	φ	22	φ	80	-	-	Kr1 10Y8/1	灰白 2.5Y8/1	Kr1 7.5Y8/1	ナシ	-	15C 前半～中層	
174	白磁	煎形鉢	60	φ	2	φ	84	-	-	Kr1 5Y6/1	Kr1 5Y8/1	Kr1 2.5Y8/1	ナシ	-	15C 中～16C 前半	
175	白磁	煎形鉢	73	φ	17	φ	85	-	-	Kr1 10Y8/1	灰白 5Y8/1	Kr1 5Y8/2	ナシ	-	15C 中～16C 前半	
176	青花	小瓶	60	φ	16	φ	48	58	-	-	Kr1 5Y8/1	Kr1 5Y8/1	ナシ	-	16C 末～17C 初	
177	瀬戸系陶器	小瓶	74	φ	17	φ	53	17	36	高黄 7.5Y8/4	高黄 7.5Y8/4	Kr1 7.5Y8/2	白 土 土	(口)・(内) 煎胎	古瀬戸Ⅰ層 1440～60年代	
178	青磁	香炉	60	φ	20	φ	68	-	-	灰オリーブ 7.5Y5/3	灰オリーブ 7.5Y5/3	高黄 2.5Y6/1	白 土 土	(内) 煎胎	兼熟	
179	青磁	香炉	73	φ	24	φ	81	-	-	明黄 10Y7/1	灰 5Y6/9	Kr1 5Y7/1	白 土 土	(内) 煎胎	兼熟	
180	瀬戸系陶器	煎鉢類	76	φ	25	φ	92	-	-	高黄 2.5Y2/1	高黄 2.5Y2/1	Kr1 10Y8/1	白 土 土	(口)・(内)上層 煎胎	(口筒) 中全層	
181	瀬戸系陶器	煎鉢類	67	φ	15	φ	108	-	-	高黄 7.5Y8/2	高黄 7.5Y8/3	Kr1 10Y8/1	白 土 土	(上) 煎胎	古瀬戸Ⅰ層 1380-1440年	
182	瀬戸系陶器	煎鉢類	66	φ	15	φ	115	-	-	高黄 2.5Y2/1	明黄 7.5Y7/2	Kr1 2.5Y8/1	白 土 土	(内) 煎胎	(口筒) 又入	
183	瀬戸系陶器	煎鉢類	75	φ	15	φ	115	-	-	灰オリーブ 7.5Y5/3	灰白 7.5Y7/1	Kr1 5Y8/1	白 土 土	(内) 煎胎	兼熟	
184	瀬戸系陶器	煎鉢類	75	φ	25	φ	115	-	-	オリーブ黄 5Y6/3	にがし黄 2.5Y6/3	高黄 10Y8/4	白 土 土	(内) 灰胎	古瀬戸Ⅰ層 14C 末～15C 末	
185	瀬戸系陶器	煎鉢類	76	φ	2	φ	46	-	-	高黄 2.5Y6/3	高黄 2.5Y6/2	高黄 2.5Y5/1	白 土 土	(内) 灰胎	古瀬戸Ⅰ層 14C 前半	
186	瀬戸系陶器	煎鉢類	61	φ	7	φ	48	-	-	灰オリーブ 5Y6/3	高黄 5Y4/4	Kr1 5Y6/1	白 土 土	(内) 灰胎	古瀬戸Ⅰ層 1440-60年	
187	瀬戸系陶器	煎鉢類	75	φ	19	φ	115	-	-	高黄 7.5Y8/3	高黄 7.5Y8/1	Kr1 7.5Y8/2	白 土 土	(内) 煎胎	古瀬戸Ⅰ層 1440-60年	
188	瀬戸系陶器	煎鉢類	72	φ	2	φ	115	-	-	高黄 7.5Y8/4	高黄 7.5Y8/1	Kr1 7.5Y8/1	白 土 土	(内) 煎胎	古瀬戸Ⅰ層 1440-60年	

竹花遺跡Ⅰ 遺物観察表 中近世陶磁器 (5)

編年 番号	分類	器名	寸法 mm	形状	位置	口径 mm	高さ mm	底径 mm	色澤 外	色澤 内	胎土 成分	期1 (土質・色澤) 期2 (土質・色澤)	製作時期	使用時期	備考
189	瀬戸瓦器	瓦子	74	A	10	b	-	-	明灰陶 2.5Y6/6	黄灰 2.5Y7/2	Kr1 2.5Y7/1 G 瓦	(内) 瓦類			古瀬戸中期・後期様式 土質中 14C
190	瀬戸瓦器	瓦子	72	A	4	b	-	-	オリーブ灰 5Y7/2	暗オリーブ陶 5Y7/2	Kr1 5Y8/1 G 瓦	(内外) 瓦類 (内) 赤土			古瀬戸中期・後期様式 土質中 14C
191	瀬戸瓦器	瓦板	73	A	25	b1	-	92	Kr1 5Y7/1	黄灰 10Y82/2	Kr1 5Y8/1 G 瓦	(内) 瓦類・装飾物有 (内) 網目・筋状			古瀬戸後期様式
192	瀬戸瓦器	瓦板	59	A	24	b	-	70	黄灰 2.5Y6/3	Kr1 2.5Y6/3	Kr1 2.5Y7/1 G 瓦	(内) 瓦類・装飾物有 (内) 網目・筋状			古瀬戸後期様式
193	瀬戸瓦器	広口瓦子 田舎	70	A	23	b	102	-	暗赤灰 2.5Y5/2	Kr1 10Y87/1	Kr1 10Y87/1 G 瓦	(内) 瓦類	観跡		古瀬戸後期様式 1440～60年
194	瀬戸瓦器	瓦子 (即飯付)	75	B	7	b1	-	-	オリーブ灰 5Y6/4	オリーブ 5Y7/3	Kr1 5Y7/1 G 瓦	(内外) 瓦類			古瀬戸後期様式
195	白磁	瓶	65	B	10	B	-	-	7.5Y7/1	7.5Y7/1	Kr1 10Y7/1 白	(内) 無釉			中期前期
196	肥前系 陶器	瓶 (即飯付)	52	B	19	D	60	-	黒陶 2.5Y3/3	暗オリーブ陶 2.5Y3/3	Kr1 2.5Y7/2 2.5Y3/3	(内外) 瓦類			中期前期 1580～1610年代
197	瀬戸瓦器	水引	60	A	9	b	-	-	オリーブ灰 5Y3/1	黄灰 10Y84/2	G・灰・磁種 10Y87/3 10Y84/2	(内) 瓦類			
198	肥前系 陶器	灯明受皿	60	B	22	B	41	23	暗赤陶 10Y8/3	暗赤陶 10Y3/2	濃赤種 2.5Y8/4 10Y3/2	(上) 瓦類 (内) 網目・筋状			中期前期 1600～1610年
199	瀬戸瓦器	内付 (土器)	62	A	5	10	42	80	Kr1 5Y7/1	Kr1 5Y7/2	Kr1 2.5Y8/2 G 瓦	(内外) 瓦類			太田式前期 1600～1610年
200	越中瀬戸	萩原式瓦器	60	A	19	D	110	-	黄陶 2.5Y5/4	黄陶 10Y85/6	Kr1 10Y88/2 10Y85/6	(内) 瓦類 (内) 装飾物有			(土器) 通眼筒 打釘
201	越中瀬戸	萩原式瓦器	74	B	2	b	100	-	G・灰・赤陶 5Y8/5	黄陶 5Y8/5	Kr1 10Y88/1 白	(内外) 瓦類			
202	真洲	器 (土)	61	A	10	b	100	-	Kr 10Y8/1	Kr 10Y8/1	Kr1 2.5Y7/1 G 瓦	(内) 瓦類			古瀬戸期 14C 末-15C前半
203	真洲	器 (土)	76	A	10	b1	132	-	Kr 5Y3/1	Kr 5Y8/1	Kr1 2.5Y6/1 G 瓦	(内) 瓦類			古瀬戸期 14C 末-15C前半
204	真洲	器 (土)	72	A	19	b2	94	-	Kr 5Y6/1	Kr 5Y6/1	Kr 赤 骨 種	(内) 瓦類			古瀬戸期 14C 末-15C前半
205	真洲	器 (土)	72	A	20	b	118	-	Kr 10Y5/1	Kr 10Y5/1	Kr1 2.5Y4/1 G 瓦	(内) 瓦類			古瀬戸期 14C 末-15C前半
206	真洲	器 (土)	67	A	4	b	110	-	Kr N5/0	Kr 2.5Y5/1	Kr1 2.5Y5/1 G 瓦	(内) 瓦類			古瀬戸期 14C 末-15C前半
207	真洲	器 (土)	70	A	14	b	98	-	黄灰 2.5Y6/1	Kr 5Y6/1	Kr 2.5Y6/1 G 瓦	(内) 瓦類			古瀬戸期 14C 末-15C前半
208	真洲	器 (土)	64	A	20	B	172	-	黄灰 2.5Y6/1	黄灰 2.5Y5/1	Kr1 2.5Y5/1 G 骨 種	(内) 瓦類			古瀬戸期 14C 末-15C前半
209	真洲	器 (土)	75	B	7	b	164	-	Kr N5/0	Kr N6/0	Kr 2.5Y6/1 G 骨 種	(内) 瓦類			古瀬戸期 14C 末-15C前半
210	真洲	器 (土)	64	A	20	b	158	-	Kr N5/0	Kr N6/0	Kr N5/0 G 骨 種	(内) 瓦類			古瀬戸期 14C 末-15C前半
211	肥前系 陶器	甕 (オタテ成)	59	A	25	B	285	-	G・灰・赤陶 5Y8/5	G・灰・赤陶 5Y8/5	G・灰・赤陶 2.5Y8/4 5Y8/5	(内) 瓦類 (土) 網目・筋状			17C 後半期
212	肥前系 陶器	甕 (オタテ成)	76	A	15	B	106	-	G・灰・赤陶 5Y8/5	G・灰・赤陶 5Y8/5	G・灰・赤陶 10Y87/3 10Y87/3	(内) 瓦類・筋状 (内) 網目・筋状			1580～1630年代 17C 高段後半
213	肥前系 陶器	甕 (口付成)	63	B	21	B	201	-	暗赤陶 10Y83/4	暗赤陶 10Y83/3	暗 2.5Y6/6 G 骨 種	(内) 瓦類 (土) 網目・筋状			17C 高段後半
214	肥前系 陶器	甕	68	B	6	B	124	-	G・灰・赤陶 10Y85/4	G・灰・赤陶 10Y85/4	Kr1 10Y87/1 G 瓦	(内) 瓦類・筋状 土質中・打釘			1580～1630年代
215	越中瀬戸	広口壺 (A型)	64	A	8	A	108	-	暗赤陶 5Y8/4	赤陶 5Y8/4	G・灰・赤陶 5Y87/4 G 瓦	(内) 瓦類			
216	越中瀬戸	広口壺 (A型)	59	B	21	B	93	-	G・灰・赤陶 10Y84/3	陶 7.5Y84/3	Kr1 2.5Y7/2 G 瓦	(内外) 瓦類			
217	真洲	中樽 (土)	67	A	14	b	354	-	Kr 10Y5/1	Kr 5Y5/1	Kr 5Y5/1 G 骨 種	(内) 瓦類	漆跡		古瀬戸期 15C
218	真洲	中樽 (土)	56	B	9	b	384	-	Kr 5Y6/1	Kr 5Y6/1	Kr1 2.5Y6/1 G 骨 種	(内) 瓦類			古瀬戸期 14C2/4
219	真洲	中樽 (土)	72	A	20	b	334	-	明灰陶 7.5Y87/1	黄灰 7.5Y88/1	G・灰・赤陶 7.5Y87/3 G 骨 種	(内) 瓦類・筋状			古瀬戸期 14C2～3/4
220	真洲	中樽 (土)	75	A	15	b1	378	-	黄灰 2.5Y5/1	黄灰 2.5Y6/1	Kr1 2.5Y6/1 G 骨 種	(内) 瓦類			古瀬戸期 14C3/4
221	真洲	器 (土)	75	B	11	b1	374	-	黄灰 10Y85/1	黄灰 10Y85/1	Kr1 赤 骨 種 7.5Y88/3	(内) 瓦類			古瀬戸期 14C 末-15C前半
222	真洲	中樽 (土)	70	B	21	b	408	-	Kr 5Y5/1	Kr 2.5Y5/1	Kr 5Y5/1 G 骨 種	(内) 瓦類			古瀬戸期 14C 末-15C前半
223	真洲	中樽 (土)	76	A	20	b	426	-	Kr N4/0	Kr N6/0	Kr N6/0 G 骨 種	(内) 瓦類			古瀬戸期 15C 後半
224	真洲	中樽 (土)	71	B	21	b	426	-	Kr 5Y6/1	Kr 5Y3/1	Kr1 10Y86/1 G 骨 種	(内) 瓦類			古瀬戸期 14C 末-15C前半
225	真洲	大樽 (土)	68	A	15	B	-	-	黄灰 2.5Y4/1	黄灰 2.5Y6/1	Kr1 2.5Y7/1 G 瓦	(内) 瓦類			古瀬戸期 2～3期 14C2～3/4
226	真洲	大樽 (土)	67	B	17	b	-	-	Kr 5Y6/1	Kr 10Y8/1	Kr1 2.5Y6/1 G 瓦	(内) 瓦類			古瀬戸期 15C 後半
227	真洲	大樽 (土)	75	A	25	B	684	-	Kr N5/0	Kr N6/0	Kr1 N7/0 G 骨 種	(内) 瓦類			古瀬戸期 15C 後半
228	真洲	大樽 (土)	64	A	19	b	-	122	Kr N7/0	Kr N6/0	Kr1 N7/0 G 骨 種	(内) 瓦類			
229	越前	器 (土)	75	B	2	B	380	-	G・灰・赤陶 7.5Y85/4	G・灰・赤陶 5Y85/4	Kr1 2.5Y7/1 G 瓦	(内) 瓦類			木村式前期
230	越前	器 (土)	66	A	15	b	246	-	明灰陶 7.5Y87/1	明灰陶 7.5Y85/3	Kr1 10Y87/1 G 瓦	(内) 瓦類			木村式前期
231	越前	器 (土)	72	B	6	b	426	192	陶 10Y84/4	G・灰・赤陶 5Y85/4	Kr1 2.5Y6/6 G 骨 種	(内) 瓦類			
232	真洲	月形鉢	74	A	15	b1	220	-	Kr N6/0	Kr N6/0	Kr1 N7/0 G 骨 種	(内) 瓦類			古瀬戸 1～2
233	真洲	月形鉢	65	B	7	B	292	-	黄灰 2.5Y5/1	黄灰 2.5Y4/1	Kr1 7.5Y85/2 G 骨 種	期1: 8～9年単位 (内) 瓦類			古瀬戸 1～2 14C前半 5X33
234	真洲	月形鉢	64	A	25	b	288	-	Kr 7.5Y6/1	Kr 7.5Y6/1	Kr 2.5Y6/1 G 骨 種	期1: 4～8年単位以上			古瀬戸 2～3期 (14C後半 5Y8) 後半

観 察 表

竹花遺跡 I 遺物観察表 中世近世陶磁器 (6)

報告 番号	発 掘 種 類	遺 物 種 類	寸 法 大 小	部位	口径 mm	高さ mm	底径 mm	色 澤		胎土 (上段:色澤 下段:胎土)	製作時期	使用時期	備 考	
								外 面	内 面					
235	真洲	月白鉢	65	A	9	b	276	-	灰 5Y6/1	灰 5Y4/1	灰 5Y6/1 石 登 籠	-	-	古河2期 14C 末~14C 前半
236	真洲	月白鉢	67	B	2	b	292	-	黄灰 2.5Y6/1	黄灰 2.5Y6/1	黄灰 2.5Y6/1 石 登 籠	跡目: 9 条一単位	-	古河2期 14C 末~14C 前半
237	真洲	月白鉢	65	A	10	b	328	-	黄灰 2.5Y6/2	黄灰 2.5Y6/2	黄灰 2.5Y7/2 石 登 籠	跡目: 7 条一単位以上	-	古河2期 14C 末~14C 前半
238	真洲	月白鉢	78	A	25	b	352	-	灰 5Y5/1	灰 5Y5/1	灰 5Y5/1 石 登 籠	-	-	古河前期
239	真洲	月白鉢	63	A	20	b	358	-	灰 7.5Y5/1	灰 5Y6/3	黄灰 10Y96/3 石 長 登 籠	跡目: 9 条一単位以上	-	古河3期 14C 末~14C 前半
240	真洲	月白鉢	70	B	16	b	400	-	黄灰 2.5Y6/1	黄灰 2.5Y6/1	黄灰 2.5Y6/1 石 登 籠	跡目: 11 条一単位以上 (口内) 遺灰文	-	古河前期 14C 末~15C 前半
241	真洲	月白鉢	74	A	19	b	288	-	灰 7.5Y6/1	灰 5Y7/3	灰 5Y7/3 石 登 籠	-	-	古河前期 14C 末~15C 前半
242	真洲	月白鉢	64	B	21	b	298	-	黄灰 2.5Y6/2	灰 5Y7/2	灰 5Y7/2 石 登 籠	跡目: 8 条一単位	-	V期 134C 末~15C 前半
243	真洲	月白鉢	63	A	20	b	300	-	黄 N6/0	灰 7.5Y6/1	灰 5Y6/1 石 登 籠	跡目: 5 条一単位	-	V期 134C 末~15C 前半
244	真洲	月白鉢	76	B	2	b	325	-	灰 N6/0	灰 5Y7/1	灰 5Y7/1 石 登 籠	跡目: 4 条一単位以上	-	V期 14C 末~15C 前半
245	真洲	月白鉢	69	B	1	a	352	-	黄灰 2.5Y6/1	黄灰 2.5Y6/1	黄灰 2.5Y6/1 石 登 籠	跡目: 9 条一単位 (口内) 遺灰文	-	古河前期 14C 末~15C 前半
246	真洲	月白鉢	69	A	15	b	370	-	黄灰 2.5Y5/1	黄灰 2.5Y6/1	黄灰 2.5Y6/1 石 登 籠	跡目: 4 条一単位以上	-	古河前期 14C 末~15C 前半
247	真洲	月白鉢	72	B	2	b	384	-	灰 5Y6/1	灰 2.5Y6/1	灰 2.5Y7/1 石 登 籠	跡目: 8 条一単位 (口内) 遺灰文	-	古河前期 14C 末~15C 前半
248	真洲	月白鉢	75	A	5	b	396	-	灰 5Y6/1	灰 10Y5/1	灰 10Y5/1 石 登 籠	跡目: 5 条一単位 (口内) 遺灰文	(内) 又又	古河前期 14C 末~15C 前半
249	真洲	月白鉢	60	A	25	b	394	-	黄灰 2.5Y5/1	黄 N6/0	黄灰 2.5Y6/1 石 登 籠	跡目: 10 条一単位	-	古河前期 14C 末~15C 前半
250	真洲	月白鉢	67	A	4	b	490	-	黄灰 2.5Y5/1	黄灰 10Y84/1	灰 5Y5/1 石 登 籠	跡目: 11 条一単位 (口内) 遺灰文	-	古河前期 14C 末~15C 前半
251	真洲	月白鉢	70	B	2	b	246	-	黄灰 2.5Y5/1	黄灰 2.5Y6/1	灰 2.5Y7/1 石 登 籠	-	-	古河前期 15C 後半
252	真洲	月白鉢 (底面)	72	A	5	b	-	140	にがみ黄 10Y97/4	にがみ黄 10Y97/4	にがみ黄 7.5Y96/3 石 長 登 籠	跡目: 8 条一単位以上	-	古河前期 15C 後半
253	真洲	鉢鉢	75	A	25	b	h2	-	灰 5Y4/1	黄灰 10Y84/1	灰 10Y82/2 石 登 籠	跡目: 4 条一単位以上	-	15 世紀中頃
254	越前	鉢鉢 (底面)	71	A	25	b	-	204	にがみ黄 5Y97/4	浅黄緑 7.5Y88/4	浅黄緑 7.5Y88/6 石 登 籠	跡目: 9 条一単位	-	
255	越前	鉢鉢	59	C	6	b	284	-	黄灰 7.5Y84/1	黄灰 2.5Y6/2	灰 2.5Y6/2 石 登 籠	跡目: 7 条一単位以上	-	木村IV 3期
256	越前	鉢鉢	72	A	4	b	318	-	にがみ黄 7.5Y87/3	にがみ黄 5Y87/4	浅黄緑 10Y88/3 石 登 籠	跡目: 11 条一単位	-	木村IV 3期
257	越前	鉢鉢	74	B	6	b	350	-	浅黄緑 7.5Y86/3	浅黄緑 7.5Y88/3	浅黄緑 7.5Y88/3 石 登 籠	跡目: 11 条一単位	-	木村IV 2期
258	肥前系 陶器	鉢鉢	63	B	16	b	350	-	にがみ黄 7.5Y85/3	黄 7.5Y84/3	にがみ黄 10Y85/1 石 登 籠	跡目: 8 条一単位 (口内) 内 跳動	-	大崎陶器遺 17C 末~18C 前半
259	越前系 陶器 (下層)	鉢鉢	66	A	4	b	292	-	黄灰 7.5Y82/3	にがみ黄 10Y84/3	にがみ黄 10Y87/3 石 登 籠	跡目: 6 条一単位以上 (口内) 跳動	-	17 世紀前半
263	肥前系 陶器 (用配)	丸 鉢	63	A	15	b	高 81 底 51	黄 5Y5/1	黄 5Y5/1	黄 2.5Y6/1 石 登 籠	-	(内) 又又		
264	肥前系 陶器	丸 鉢	71	B	1	a	h1	-	にがみ黄 10Y87/4	灰 2.5Y6/1	浅黄緑 10Y88/3 石 登 籠	跡目: 1 条	大崎陶器	
265	肥前系 陶器	有台鉢	63	B	21	b	108	-	にがみ黄 5Y84/3	灰 5Y5/3	黄 7.5Y84/3 石 登 籠	跡目: 1 条	大崎陶器	
266	肥前系 陶器	蓋	61	B	6	b	-	-	灰 5Y6/1	黄灰 2.5Y6/1	黄 2.5Y6/1 長 籠	-	-	赤日III 1期 9C 前半
267	肥前系 陶器	有台鉢	66 67	A	23 8	b	114 38	36	黄 10Y96/1	灰 10Y87/1	灰 10Y87/1 石 登 籠	跡目: 1 条	(内) ヘナヤリ	赤日III 1期 9C 前半
268	土師器 (古代)	褐色有台鉢	54	B	15	h	-	-	にがみ黄 10Y86/3	黄 2.5Y2/1	にがみ黄 10Y87/2 石 登 籠	(内) 又又, 褐色胎土	-	赤日II 2期 9C 後半~
269	土師器	黒台鉢	68	A	20	b	h	-	浅黄緑 10Y86/4	にがみ黄 7.5Y87/4	浅黄緑 7.5Y88/6 石 登 籠	跡目: 8 条一単位 (内) 80%焼成	-	赤日II 2期 9C 後半~
270	土師器 (前期)	黒台鉢	72	A	20	b	h	-	にがみ黄 10Y87/3	にがみ黄 5Y86/4	にがみ黄 7.5Y87/4 石 登 籠	跡目: 6 条一単位以上 (内) ナヤリ	-	緑地

竹花遺跡 I 遺物観察表 漆器

報告 番号	器 名 (目録) 番号	分類	器種・形状	素材	木取り	出土位置		長さ・口径		幅	厚さ・高さ	備 考	
						遺物番号	層位	グリッド	mm				mm
45	NIQ-2761	漆器	瓶	ブナ材	縦木取り	II b	66	A	4	-	64	-	(内) 漆塗
46	NIQ-2762	漆器	腰懸陶	ブナ材	縦木取り	II b	67	A	5	-	-	-	(内) 漆塗+赤漆 [目録] (外) 漆塗
137	NIQ-2763	漆器	ヤヤケ	縦木取り	縦木取り	II b	60	B	11	144	-	-	(内) 漆塗+赤漆 [目録] (外) 漆塗+赤漆 [目録] (底) 三ツ足取 [目録]
138	NIQ-2764	漆器	有蓋注	トチノキ	縦木取り	II b	71	B	22	-	69	-	(内) 漆塗 No.1264

竹花遺跡 I 遺物観察表 弥生時代~古墳時代土器 (1)

報告 番号	種 類	遺物 番号	大 小	部位	口径 mm	高さ mm	底径 mm	色 澤		胎土 (上段:色澤 下段:胎土)		製作時期	使用時期	備 考				
								外 面	内 面	外 面	内 面							
291	壺 (口縁)	SN	215	69	A	9-14	1	106	(144)	26	黄灰 10Y96/2	黄灰 10Y96/2	黄灰 10Y95/1 石 長 籠	(口) ナヤリ (胴下) ナヤリ	(口) ヘナヤリ (胴下) ナヤリ	P4-5・6		
292	壺 (口縁)	SN	215	69	A	20-25	1	164	-	-	黄灰 10Y96/2	にがみ黄 10Y87/2	灰 10Y88/2 石 登 籠	7 条ヤリ	(口) 跳動 7 条ヤリ 命 (胴) 赤面 押さ文	P1/7/8/10/12 13/14/16/17 18/27/28		
293	壺 (口縁)	SN	215	69	B	11	1	194	-	-	にがみ黄 10Y85/3	にがみ黄 10Y85/3	黄灰 10Y86/3	ナヤリ ハヤ	ナヤリ	赤面	P97	
294	壺 (口縁)	SN	215	69	A	10-15	1	-	-	3	にがみ黄 10Y86/3	黄灰 10Y86/2	黄灰 10Y86/3	にがみ黄 10Y86/3 石 登 籠	7 条ヤリ	ハヤ	-	P11

竹花遺跡 I 遺物観察表 弥生時代～古墳時代土器 (2)

報告 番号	種 別	通称	遺跡 番号	グランド 大 小	全 径	口徑 mm	高さ mm	底径 mm	色 澤		胎土 (土質・色調)		装 飾		炭化物	備考	
									外面	内面	胎土	内面	外面	内面			
295	甕 (A型)	SK	119	74	B	12	IV-2	136	-	-	にのみ灰焼 10YR7/2	にのみ灰焼 10YR7/2	陶灰 10YR4/1 片 遺	ナデ	ナデ	-	PS81
296	甕 (A型)	SK	119	73	B	23	IV-2	162	-	-	にのみ灰焼 10YR7/2	にのみ灰焼 10YR7/2	陶灰 10YR4/1 片 遺	ナデ	-	-	No.46
297	甕 (C型)	SK	119	74	B	6・12	V-1	172	-	-	灰黒焼 10YR6/2	灰黒焼 10YR6/2	灰黒焼 10YR6/2 石 瓦 遺	ナデ	ナデ	(外) 口一 箇	PK25-613
298	甕 (C型)	SK	119	74	B	7・12	V-1	132	-	-	灰黒焼 10YR6/2	灰黒焼 10YR6/2	灰黒焼 10YR6/3 片 遺	ナデ	ナデ	-	P097-411 -304
299	甕 (C型)	SK	119	74	B	12	IV-2	180	-	-	にのみ灰焼 10YR6/4	にのみ灰焼 10YR6/4	にのみ灰焼 10YR6/4 角 遺	ハケ	ハケ	外面	P420
300	甕 (A型)	SK	119	74	B	6・7・ 12	IV-2	168	230	31	にのみ灰焼 10YR6/2	長胎 2.5Y/3	灰黒焼 10YR6/2 石 瓦 遺	(口) 龍形縁 (肩) ハケ 腹下部 ハ ナデ	ハラナデ	外・内面下 部	P240/242/ 322/405/406/ 408/415/420/ 443/598/600
301	甕 (土器小形)	SK	39	71	B	3	I	128	-	-	にのみ灰焼 10YR5/3	にのみ灰焼 10YR5/3	にのみ灰焼 10YR6/3 石 瓦 遺	ナデ	ナデ	-	P22
302	甕 (土器小形)	SK	39	71	B	6	I	-	70	-	にのみ灰焼 10YR6/3	にのみ灰焼 10YR6/3	灰黒焼 10YR6/2 石 瓦 遺	ナデ	ナデ	-	P9
303	甕 (C型)	SK	33	65	A	13	IV-2	166	-	-	にのみ灰焼 10YR6/3	にのみ灰焼 10YR6/3	にのみ灰焼 10YR7/2 石 瓦 遺	ハケ	ハケ	外面	P136
304	甕 (A型)	SK	33	65	B	2	IV-2	178	-	-	灰白 10YR8/2	にのみ灰焼 10YR7/2	にのみ灰焼 10YR7/2 石 瓦 遺	(口) 龍形縁 ナデ	ナデ	外面	P75
305	甕 (B型)	SK	33	65	B	1・6	IV-2	168	-	-	にのみ灰焼 10YR5/3	にのみ灰焼 10YR4/3	灰黒焼 10YR6/2 石 瓦 遺	ハラケズリ	ハラナデ	-	口縁部 P11/26/28 胴部 P7/14/ 12/15/26/28 /95/98
306	高砂 (土型)	SK	33	65	B	6	IV-2	-	135	-	灰黒焼 10YR6/2	にのみ灰焼 10YR6/3	にのみ灰焼 10YR6/3 石 瓦 遺	ミガキ	ナデ	-	P9
307	高砂 (土型)	SK	33	65	B	3	IV-2	-	-	-	にのみ灰焼 10YR7/3	にのみ灰焼 10YR7/3	灰黒焼 10YR7/4 石 瓦 遺	ミガキ	ハラナデ	-	P23 522 七岡一本
308	高砂 (土型)	SK	33	65	A	14 65	IV-2	-	118	-	にのみ焼 7.5YR6/4	にのみ焼 7.5YR6/4	焼 5YR6/6 焼 2.5YR7/3	ナデ	ハケ	-	P18-28-45
309	高砂 (土型)	SK	33	65	A	8	IV-2	143	132	96	浅焼 2.5Y/7	にのみ灰焼 10YR7/3	浅焼 2.5Y/7 石 瓦 遺	ミガキ	表面磨	-	P134-135
310	甕 (土型)	SK	33	65	B	2・6	IV-2	118	230	41	にのみ灰焼 10YR7/3	陶灰 10YR4/1	にのみ灰焼 10YR7/2 石 瓦 遺	ミガキ	ハケ	-	口・外 面(内) 磨下 部
311	甕	SK	33	65	B	2	IV-2	64	-	-	にのみ灰焼 10YR7/3	にのみ灰焼 10YR7/3	陶灰 10YR5/3 石 瓦 遺	ハラナデ	ハラナデ	-	PT7 四孔2個
312	甕 (A・L型)	SD	109	76	B	6・7・ 11・12	IV-2	114	-	-	にのみ灰焼 10YR6/3	にのみ灰焼 10YR6/3	焼 5YR7/6 焼 2.5YR7/6	ハケ	ハラナデ	-	P1-2
313	甕 (A型)	SD	40	76	B	4 16	-	-	63	-	灰黒焼 10YR6/2	にのみ灰焼 10YR6/2	焼 2.5YR7/6 片 遺	ハケ	ハラナデ	-	P1-2
314	甕 (S型)	67	A	14	IV-2	107	-	-	-	-	灰黒焼 10YR6/2	陶灰 2.5 Y 4/1 石 瓦 遺	ミガキ	ミガキ	-	-	
315	甕 (S型)	75	B	17	IV-2	98	-	-	-	-	にのみ灰焼 10YR7/2	にのみ灰焼 10YR7/2	灰黒焼 10YR7/2 片 遺	ナデ	ハケ	-	ナデ
316	甕 (C型)	83	A	15	IV-2	156	-	-	-	-	にのみ灰焼 10YR6/3	にのみ灰焼 10YR6/3	にのみ灰焼 10YR7/3 石 瓦 遺	ナデ	ナデ	-	ハラナデ
317	甕 (A型)	72	B	11	IV-2	132	-	-	-	-	にのみ灰焼 10YR7/3	にのみ焼 7.5YR7/3	にのみ灰焼 10YR7/3 片 遺	ナデ	ハラナデ	-	PT7
318	甕 (M型)	72	B	11	IV-2	-	-	-	-	-	にのみ灰焼 10YR7/3	にのみ焼 7.5YR7/4	長 遺	(口) 龍形縁 ナデ	-	-	編入
319	甕 (L型)	64	B	22	IV-2	72	-	-	-	-	にのみ灰焼 10YR6/3	灰黒焼 10YR6/2 石 瓦 遺	ナデ	ナデ	ハラナデ	-	ナデ
320	甕 (C型)	72	A	15	IV-2	156	-	-	-	-	にのみ焼 7.5YR7/3	にのみ焼 7.5YR6/4	陶灰 10YR4/1 片 遺	ナデ	ナデ	-	ナデ
321	高砂 (A型)	76	B	16	IV-2	282	-	-	-	-	にのみ灰焼 10YR7/2	灰黒焼 10YR7/3 石 瓦 遺	ナデ	ナデ	-	ナデ	

竹花遺跡 I 遺物観察表 石製品・金属製品 (1)

報告 番号	種 別	分類	メタリ名/石材	出土位置		長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 (g)	備考		
				通称	層位							
322	砥	粗灰岩	粗灰岩	B a2	69	B	1	98	50	20	94.6	
323	砥	粗灰岩	粗灰岩	B b	61	A	19	15	61	6	11.3	
324	砥石	磨石	磨石	B b	60	A	5	97	101	21	280	
325	砥石	磨石	磨石	B a2	71	B	16	51	42	24	80.0	
326	砥石	粗灰岩	粗灰岩	B b	74	B	2	58	23	19	38.0	
327	砥石	粗灰岩	粗灰岩	B b	64	B	1	58	42	28	151.3	
328	砥石	粗灰岩	粗灰岩	B b	59	B	7	86	27	24	65.9	
329	玉輪塔	水輪	向陽石(灰山岩)	B b	71	A	8・9	238	246	172	12600	
330	河石		灰山岩	B a	56	B	9	108	86	34	450.0	
331	河石		灰山岩	B b	74	A	14	81	52	42	178.3	
332	与玉	未成品	緑色粗灰岩	SK119	IV-2	74	B	7	10.5	6.0	28	0.3
333	磨石		ヒスイ	SK33	IV-2	65	B	2	11.0	7.0	3.0	0.5
334	貝殻片(貝)	磨削片(磨石)	砂岩(粗面)	SK33	IV-2	65	A	10	66	83	16	91.1
335	貝殻片(貝)	磨削片(磨石)	砂岩(粗面)	SK119	IV-2	74	B	12	71	90	20	151.3
336	貝殻片(貝)	磨削片(磨石)	砂岩(粗面)	SK111	IV-2	76	B	6	143	115	25	446
337	磨石(河石)	磨削片(磨石)	砂岩(粗面)	SK215	IV-2	60	B	7	125	131	27	503
338	銅製品	把手		B b	73	A	20	23	41	8	10.5	
339	銅製品	不明		B b	71	A	14	28	17	7	2.5	
340	銅製品	-					39	18	10	6.7	試験調査6トロンチ	
341	銅製品	鈴		B a1	71	A	10	145	8	1	7.2	
342	鉄製品	釘		B b	68	B	2	69	12	4	6.0	
343	鉄製品	針(針)		B b	68	A	10	22	24	11	5.6	
344	鉄製品	刀(刀)		B b	68	A	8	76	17	4	7.0	
345	鉄製品	不明		B	57	B	5	21	36	7	5.3	

観 察 表

竹花遺跡Ⅰ 遺物観察表 石製品・金属製品 (2)

報告番号	種類	分類	メタリウム / 材質	遺期	出土位置		長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 (g)	備考	
					層位	グリッド						
348	銅製品	鏃			II a2	69	B	11	11層 624	-		
396	鍔片	高砂洋			II b	76	A	9	36	26	16.3	鍔片 No.46
397	鍔片	高砂洋			II b	69	A	9	39	42	28	鍔片 No.31
398	鍔片	高砂洋			II b	70	A	9	96	101	67	294 鍔片 No.32
399	土製品	埴土			II b 1	76	B	12	56	-	-	12.7
400	土製品	埴土			II b 1	74	A	9	78	29	16	21.8
401	土製品	埴土			II b	70	B	22	外径 91 内径 24	40	140.8	
402	土製品	埴土			II b	64	A	14	外径 110 内径 30	43	127.3	No.208

竹花遺跡Ⅰ 遺物観察表 鉄貨

報告番号	銭貨名	遺物	上 期	初出年 (西暦)	出土位置		外径 mm	外径 mm	内径 mm	内径 mm	厚さ mm	重量 (g)	備考			
					層位	グリッド										
347	開元通寶	高砂	唐	621	II b 下	72	A	20	23.5	23.8	6.6	1.1	2.6	No.1234		
348	開元通寶	高砂	唐	621	II b	61	A	15	23.7	23.7	6.4	6.5	1.0	3.1		
349	開元通寶	高砂	唐	621	II b	57	B	4	25.7	25.9	6.7	6.7	1.0	3.3	大型	
350	唐咸通元寶	高砂	唐	869	II b	56	B	25	24.4	24.5	6.1	6.0	1.0	2.9		
351	太平通寶	高砂	北宋	976	II b	54	B	20	24.2	23.8	6.2	6.1	1.0	2.3	II 4-4	
352	太平通寶	高砂	北宋	976	II b	57	B	4	23.8	23.9	6.3	6.3	1.0	2.6		
353	淳化元寶	高砂	北宋	960	II b	66	A	9	23.6	23.6	6.0	6.0	1.0	3.0	No.479	
354	祥符元寶	高砂	北宋	1008	II b	65	B	1	24.3	24.3	6.5	6.0	1.1	3.4		
355	祥符元寶	高砂	北宋	1008	II b	67	B	11	24.9	24.9	5.7	5.6	0.9	2.8	No.310	
356	明道元寶	高砂	北宋	1032	II b	67	A	19	25.0	25.0	6.7	6.6	0.7	2.4	No.540	
357	景祐元寶	高砂	北宋	1034	II b	75	A	9	25.4	25.5	7.0	7.2	1.2	3.4	No.1815	
358	皇宋通寶	高砂	北宋	1038	II b	66	A	20	23.2	23.3	6.0	6.0	1.2	3.7	No.353	
359	皇宋通寶	高砂	北宋	1038	II a 2	66	A	15	24.3	23.9	7.3	6.8	1.0	2.6		
360	皇宋通寶	高砂	北宋	1038	II b	71	B	16	24.4	24.7	7.6	7.6	1.1	2.5	No.984	
361	皇宋通寶	高砂	北宋	1038	II b	67	B	16	24.1	24.3	7.2	7.3	0.8	2.3	No.337	
362	皇宋通寶	高砂	北宋	1038	II b	61	B	1	23.6	23.4	6.7	6.5	1.0	2.2	No.1706	
363	嘉祐元寶	高砂	北宋	1066	II b	69	A	4	24.9	24.7	6.0	6.1	1.1	3.3	No.383	
364	嘉祐元寶	高砂	北宋	1066	II b	68	A	25	23.4	23.2	6.0	6.1	1.4	2.9	No.708	
365	嘉祐通寶	高砂	北宋	1066	II b	67	A	15	24.0	24.1	7.1	7.0	0.9	2.5	No.404	
366	嘉祐通寶	高砂	北宋	1066	II b	74	B	17	24.8	24.6	7.1	7.0	0.9	2.4	No.1326	
367	熙寧元寶	高砂	北宋	1068	II b	65	B	21	23.9	23.5	6.8	7.0	0.9	2.0	No.1813	
368	熙寧元寶	高砂	北宋	1068	II b	63	A	20	24.0	24.1	7.1	7.2	1.0	2.5	No.150	
369	熙寧元寶	高砂	北宋	1068	II b	71	B	2	24.6	24.8	6.7	6.8	1.1	3.2	No.876	
370	元祐通寶	高砂	北宋	1076	II b	69	A	20	24.5	24.4	6.6	6.6	1.0	3.3	No.383	
371	元祐通寶	行清	北宋	1086	II b	71	B	16	24.0	24.0	7.5	7.4	1.1	2.4	No.872	
372	元祐通寶	行清	北宋	1086	II b	71	B	1	24.7	24.7	7.1	6.8	1.2	2.6	No.872	
373	元祐通寶	行清	北宋	1086	II b	67	A	19	24.9	24.7	5.5	5.8	1.0	3.0	No.870	
374	元祐通寶	高砂	北宋	1086	II b	65	A	19	24.0	24.7	6.5	7.2	1.2	2.2	No.478 跡のみ	
375	熙寧元寶	行清	北宋	1094	II b	66	A	25	24.5	24.5	5.6	6.6	1.0	3.1	SX08	
376	元祐通寶	行清	北宋	1096	II b	72	B	11	24.6	24.6	6.1	6.2	1.0	2.6		
377	大祐通寶	高砂	北宋	1107	II b	69	A	22	24.2	24.3	6.3	6.2	1.2	2.5	No.1707	
378	政和通寶	分館	北宋	1111	II b	71	A	9	22.5	23.1	6.0	6.2	0.9	2.7	No.945 反輪跡のみ	
379	政和通寶	分館	北宋	1111	II b	59	B	21	24.4	24.4	6.6	6.6	1.2	2.6	No.1763	
380	宣和通寶	分館	北宋	1119	II b	63	A	24	24.0	23.9	6.3	6.1	1.0	2.4	No.05	
381	宣和通寶	高砂	北宋	1119	II a 2	70	B	12	24.1	24.0	6.2	6.3	1.0	2.6	No.1816	
382	開元通寶	高砂	南宋	1196	II b	60	A	4	24.0	24.3	6.5	6.6	1.1	2.5	No.1231, 背-2	
383	紹興通寶	高砂	南宋	1228	II b	70	B	22	23.8	23.6	6.3	6.2	1.1	2.9	薄土 No.843	
384	寧宗通寶	高砂	元	1313	II b	65	A	25	23.4	23.3	5.5	5.5	1.9	3.9	No.217	
385	淳熙通寶	高砂	明	1368	II b	75	A	5	24.0	23.9	5.0	5.0	1.4	3.7	マ線跡のみ	
386	永樂通寶	高砂	明	1405	II a 2	69	A	4	24.6	24.5	5.7	5.7	1.4	3.3		
387	永樂通寶	高砂	明	1405	II b	53	B	5	24.8	24.7	5.9	5.7	1.5	3.3		
388	不明	高砂	-	-	II b	60	A	19	24.1	-	6.5	6.7	1.0	(1.4)	No.1715 (元●準貨)	
389	不明	高砂	-	-	II b	61	B	16	-	-	23.8	-	7.4	1.1	(1.8)	No.1690 (●準貨)
390	不明	-	-	-	II b	-	-	-	22.4	23.3	-	6.0	0.8	(1.1)	背付不明 (●準貨)	
391	不明	-	-	-	II b	68	A	6	24.0	23.8	6.8	7.0	1.0	2.4	No.607	
392	無文銭	-	-	-	中伊	66	A	25	22.0	22.3	6.3	6.3	0.8	2.7	No.415	
393	無文銭	-	-	-	中伊	70	B	22	-	-	-	-	-	-	1.6 逆面のみ見られる	
394	無文銭	-	-	-	中伊	67	A	5	23.4	23.3	6.5	6.6	1.3	3.2	No.504	
395	無文銭	-	-	-	中伊	69	A	25	21.5	22.0	6.7	6.7	0.7	1.6		

※ 407 と 413 は本表銭文が存在していたであろう文字の部分が反り磨り上がっている。銭文を磨り落とすことで、銭文が消失したものと考えられる。
※ 408 銅貨より銭文がほとんど見えない一品か?。マ・イネーノ銭銭か?。

竹花遺跡Ⅰ 遺物観察表 木製品 (1)

報告番号	種類	分類	図録 図本番号	図録 起号	種別	木取	出土位置		長さ mm	幅 mm	厚さ mm	備考			
							遺物番号	グリッド							
403	算珠	II-1	算	NIK-2625	天牛	焼出	SX30	40	II b	71	B	11	183	6	5
404	算珠	II-1	算	NIK-2626	天牛	焼出	SX15	II b	68	B	6	178	6	5	地面に突き刺さって焼出
405	算珠	II-1	算	NIK-2627	天牛	焼出	SX17	76	II b	67	B	16	202	9	4
406	算珠	II-1	算	NIK-2628	天牛	焼出	-	II b 下	72	A	5	198	7	4	
407	算珠	II-1	算	NIK-2629	天牛	焼出	SX30	43	II b	71	B	11	183	7	4
408	算珠	II-1	算	NIK-2630	天牛	焼出	SX17	30	II b	67	B	16	202	7	4
409	算珠	II-1	算	NIK-2631	天牛	焼出	-	II b	70	A	9	200	7	4	
410	算珠	II-1	算	NIK-2632	天牛	焼出	-	5.67	II b	66	A	24	196	6	5
411	算珠	II-1	算	NIK-2633	天牛	焼出	-	1.965	II b	76	A	9	172	8	4
412	算珠	II-1	算	NIK-2634	天牛	焼出	-	II b	72	A	9	190	6	6	
413	算珠	II-1	算	NIK-2635	天牛	焼出	-	II b	69	B	1	201	7	5	
414	算珠	II-1	算	NIK-2636	天牛	焼出	1302	II b	67	B	11	221	5	6	地面に突き刺さって焼出
415	算珠	II-1	算	NIK-2637	天牛	焼出	-	II b	63	B	17	185	5	6	

竹花遺跡 I 遺物観察表 木製品 (2)

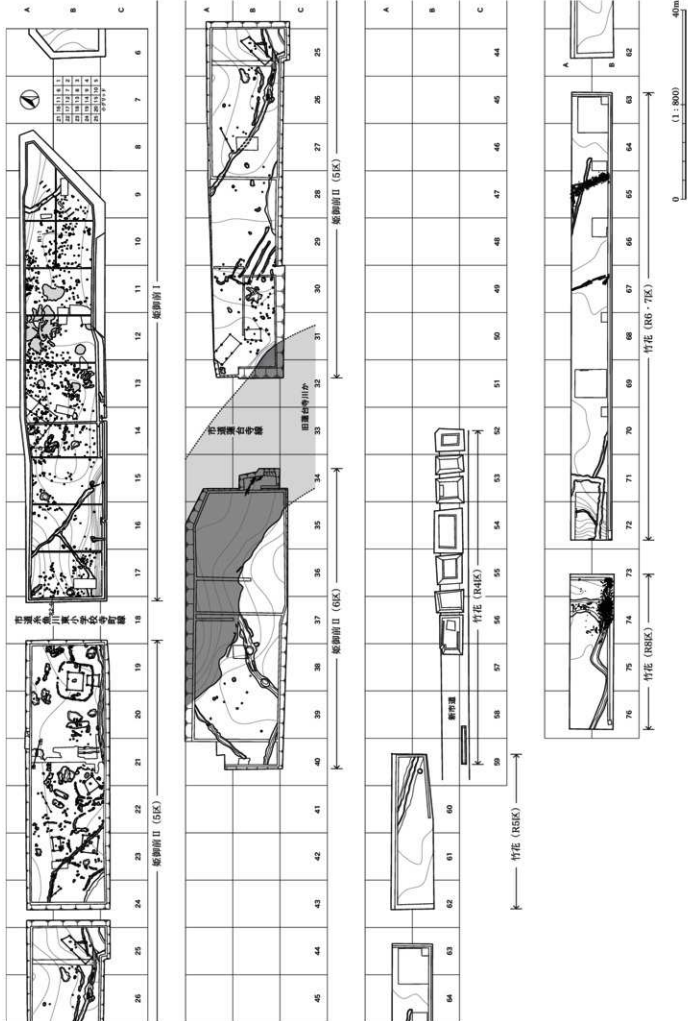
観号	品類	分類	遺物 記号	形状・ 寸法	材質	備考	木取り	炭1位値			炭2 mm	炭3 mm	炭4 mm	備考			
								炭1 No.	炭位	グロッド							
416	管状	B-1	管	NG-2638	木皮	削削		1323	II b	74	B	17	194	7	4		
417	管状	B-1	管	NG-2639	木皮	削削		SK16	II b	68	B	6	134	6	5		
418	人形		人形	NG-2640	木皮	削削		1675	II b	76	B	11	78	12	9		
419	人形		人形	NG-2641	木皮	削削			II b	70	A	14	133	15	13		
420	人形	A-1	人形	NG-2642	木皮	削削		1720	II b	66	A	10	82	30	5		
421	刀柄	A-5	刀柄	NG-2643	木皮	削削		835	II b	66	A	4	120	15	3		
422	刀柄	A-5	刀柄	NG-2644	木皮	削削		1415	II b	74	A	15	154	4	4		
423	舟形		舟形	NG-2645	木皮	削削		954	II b	70	B	21	176	26	16		
424	舟形		舟形	NG-2646	木皮	削削	丸木芯材	502	II b	67	A	5	229	22	15		
425	下駄		下駄?	NG-2647	木皮	削削			II b	64	B	22	194	68	16		
426	下駄		下駄	NG-2648	木皮	削削		1370	II b	74	A	4	103	68	26		
427	下駄		下駄	NG-2649	木皮	削削		889	II b	71	B	12	100	69	16		
428	下駄		下駄	NG-2650	木皮	削削			II b	68	B	22	311	85	11		
429	舟形		舟形	NG-2651	木皮	削削		1418	II b	74	A	14	283	64	8		
430	舟形		舟形	NG-2652	木皮	削削		1777	II b	59	A	23	161	44	7		
431	舟形		舟形	NG-2653	木皮	削削		1685	II b	61	B	22	155	42	5		
432	舟形		舟形	NG-2654	木皮	削削		973	II b	70	B	16	138	52	10		
433	舟形		舟形	NG-2655	木皮	削削		SK30	26	II b	71	B	12	66	74	9	
434	舟形		舟形	NG-2656	木皮	削削		378	II b	66	A	15	55	27	5		
435	舟形		舟形	NG-2657	木皮	削削			II b	63	B	16	68	28	7		
436	舟形		舟形	NG-2658	木皮	削削		SK17	59	II b	67	B	16	191	68	9	
437	舟形		舟形	NG-2659	木皮	削削		1051	II b	68	A	10	130	30	4		
438	舟形		舟形	NG-2660	木皮	削削		1028	II b	68	B	21	46	57	48		
439	木鏝		木鏝	NG-2661	木皮	削削		640	II b	68	B	22	203	70	25		
440	火鏝口		火鏝口	NG-2662	木皮	削削		SK108	32	II b	67	B	16	282	39	10	
441	板状		板状	NG-2663	木皮	削削			II b	72	B	16	64	185	6		
442	板状		板状	NG-2664	木皮	削削			II b	70	B	16	142	24	3		
443	板状	A-2	板状	NG-2665	木皮	削削		120	II b	63	B	11	82	10	6		
444	板状	A-6	板状	NG-2666	木皮	削削			II b	69	A	3	256	46	8		
445	板状	A-6	板状	NG-2667	木皮	削削		369	II b	66	A	5	140	20	12		
446	板状	A-8	板状	NG-2668	木皮	削削		581	II b	67	A	9	187	46	10		
447	板状	A-8	板状	NG-2669	木皮	削削		1641	II b	62	B	6	196	37	11		
448	舟形?		舟形?	NG-2670	木皮	削削			II b	64	B	22	182	17	16		
449	舟形?		舟形?	NG-2671	木皮	削削		1393	II b	73	A	19	139	29	29		
450	舟形		舟形	NG-2672	木皮	削削		951	II b	70	B	21	132	31	27		
451	棒状		棒状	NG-2673	木皮	削削		SK107	9	II b	75	B	18	127	31	20	
452	棒状		棒状	NG-2674	木皮	削削		SK9	II b	68	A	24	130	23	19		
453	木鏝		木鏝	NG-2675	木皮	削削		SK31	66	II b	71	B	12	598	29	28	
454	板状	B-3	板状	NG-2676	木皮	削削		SK13	II b	68	B	21	59	21	31		
455	板状	B-3	板状	NG-2677	木皮	削削			II b	64	B	6	146	29	21		
456	板状	B-3	板状	NG-2678	木皮	削削			II b	75	B	21	75	21	24		
457	板状	B-3	板状	NG-2679	木皮	削削		SK8	II b	66	A	25	1221	60	46		
458	板状	A-6	板状	NG-2680	木皮	削削			IV	75	B	7	791	69	26		
459	板状	A-6	板状	NG-2681	木皮	削削			IV	76	B	1	443	105	6		
460	板状		板状	NG-2682	木皮	削削		1627	II b	76	B	11	421	76	18		
461	板状		板状	NG-2683	木皮	削削			IV	68	A	24	345	80	11		
462	板状		板状	NG-2684	木皮	削削			IV	63	B	11	896	230	41		
463	舟形		舟形	NG-2685	木皮	削削			IV	74	A	20	100	27	8		
464	板状		板状	NG-2686	木皮	削削			IV	63	B	11	253	106	23		
465	板状		板状	NG-2687	木皮	削削		SK28	3	IV	72	A	14	810	40	33	
466	板状		板状	NG-2688	木皮	削削		SK28	4	IV	72	A	14	792	37	24	
467	舟形		舟形	NG-2689	木皮	削削		SK39	1	2	70	B	22	532	84	13	
468	舟形		舟形	NG-2690	木皮	削削		SK39	2	2	70	B	22	596	50	11	
469	舟形		舟形	NG-2691	木皮	削削		SK215	32	1	60	A	9	235	10	26	
470	板状		板状	NG-2692	木皮	削削		SK215	35	1	60	A	19	234	54	5	
471	板状		板状	NG-2693	木皮	削削		SK215	3	1	60	A	19	587	114	16	
472	板状		板状	NG-2694	木皮	削削		SK119	645	V	1	74	B	144	100	9	
473	板状		板状	NG-2695	木皮	削削		SK119	184	IV	2	74	B	11	147	19	5
474	板状		板状	NG-2696	木皮	削削		SK119	127	IV	2	74	B	21	174	30	15
475	板状	A-6	板状	NG-2697	木皮	削削		SK119	416	IV	2	74	B	12	371	44	10
476	板状	A-6	板状	NG-2698	木皮	削削		SK119		IV	2	73	A	11	122	25	8
477	板状	A-6	板状	NG-2699	木皮	削削		SK119	326	IV	2	74	B	12	111	48	10
478	板状		板状	NG-2700	木皮	削削		SK119	152	IV	2	74	B	17	142	45	18
479	板状		板状	NG-2701	木皮	削削		SK119	670	V	1	74	B	2	152	50	8
480	舟形?		舟形?	NG-2702	木皮	削削		SK119	310	IV	2	74	B	7	438	35	20
481	板状		板状	NG-2703	木皮	削削		SK119	528	IV	2	74	B	3	340	56	45
482	板状		板状	NG-2704	木皮	削削		SK119	136	IV	2	74	B	2	922	55	46
483	一本鏝		一本鏝	NG-2705	木皮	削削		SK119	329	IV	2	74	B	11	1106	121	17
484	板状		板状	NG-2706	木皮	削削		SK119	328	IV	2	74	B	12	111	48	10
485	板状	B-3	板状	NG-2707	木皮	削削		SK119	706	V	1	74	B	6	781	62	38
486	板状	B-3	板状	NG-2708	木皮	削削		SK119	709	IV	2	74	B	2	715	60	33

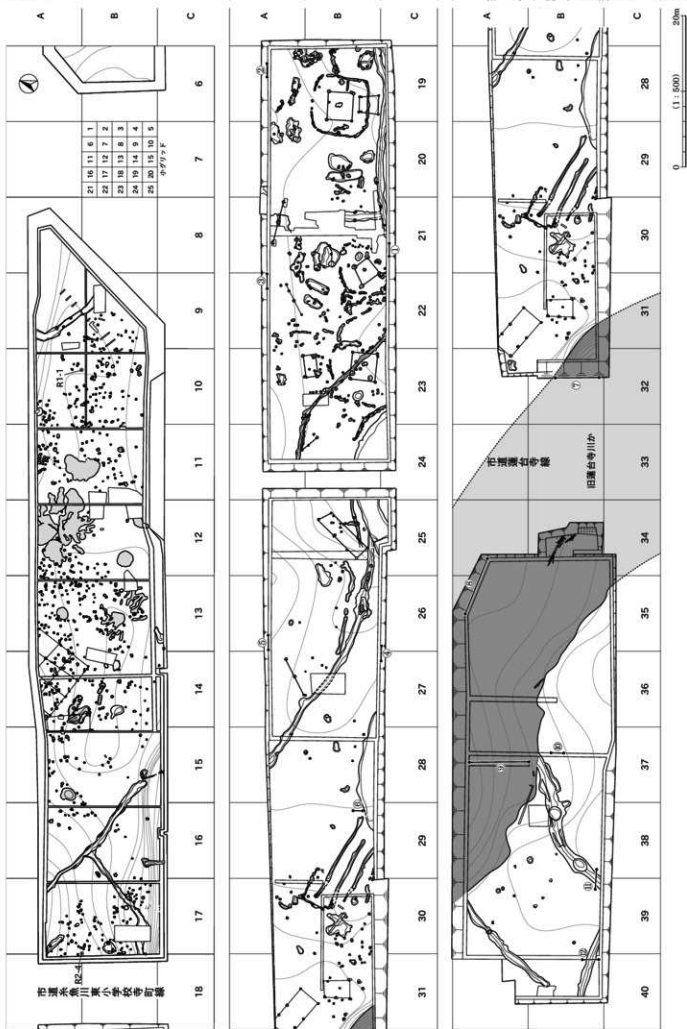
観察表

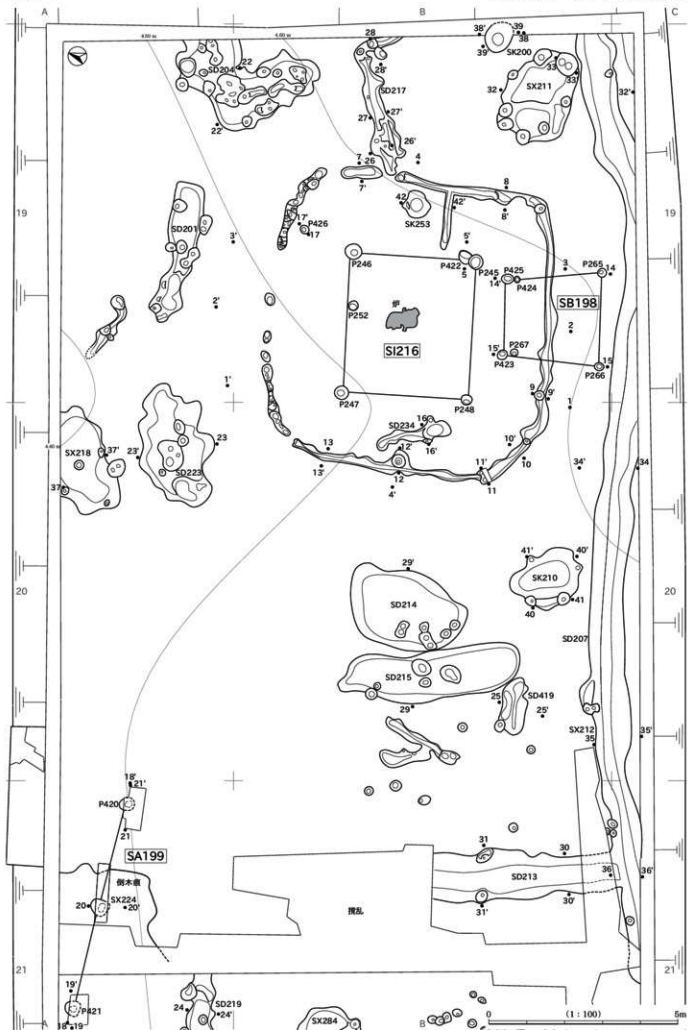
竹花遺跡 I 遺物観察表 木製品 (3)

編号	遺物 品名	分類	遺物 品名	形取 記号	基本 番号	種類	木取り	出1位置			高さ mm	幅 mm	厚さ mm	備考				
								遺物番号	No.	部位								
487	板状	B-3	板		NG-2709	天竹	溝	SX119	699	V 1	74	B	7	702	51	24		
488	板状	B-3	板		NG-2710	天竹	板目	SX119	375	IV 2	73	B	7	13- 66	571	57	18	
489	板状	B-3	板		NG-2711	天竹	四角溝	SX119	472	IV 2	74	B	7	7- 12	571	32	23	
490	板状	B-3	板		NG-2712	天竹	四角溝	SX119	403	IV 2	74	B	7	12- 17	283	27	16	
491	板状	B-3	板		NG-2713	天竹	四角	SX119	691	V 1	74	B	7	1160	57	49	上半部酸化	
492	板状	B-3	板		NG-2714	天竹	板目	SX119	299	IV 2	74	B	7	1083	63	25	全体に酸化	
493	天竹棒		天竹棒		NG-2715	天竹	平丸形溝跡	SX119	587	IV 2	74	B	7	1094	54	40	溝跡部の表面部を欠す	
494	棒状	B-6	四角棒		NG-2716	天竹	四角	SX119	263	IV 2	74	B	2	532	33	23		
495	棒状	B-6	四角棒?		NG-2717	天竹	四角棒	SX119	564	IV 2	74	B	2	510	25	17		
496	棒状	B-6	棒		NG-2718	天竹	四角丸棒	SX119	309	IV 2	74	B	7	456	22	19		
497	棒状	B-6	棒		NG-2719	天竹	四角	SX119	206	IV 2	74	B	12	409	37	24		
498	板状	A-9	板		NG-2720	天竹	板目	SX119	266	IV 2	74	B	2-3	412	96	12		
499	板状	A-9	板		NG-2721	天竹	板目	SX119	468	IV 2	74	B	7	341	143	18		
500	板状	A-9	板		NG-2722	天竹	板目	SX119	289	IV 2	74	B	7	967	194	20		
501	扁板材	A-9	板		NG-2723	天竹	板目	SX119	290	IV 2	74	B	7	1015	163	28		
502	板状	A-9	板		NG-2724	天竹	板目	SX119	165	IV 2	74	B	12- 17	1084	165	24		
503	板状	A-9	大板		NG-2725	天竹	板目	SX119	343	IV 2	74	B	11- 12- 16- 17	2320	342	35		
504	壁・柱材		天竹棒		NG-2726	天竹	片曲線状溝溝 -曲線状	SX119	855	IV 2	74	B	2-7	1969	74	53		
505	垂木		膠材		NG-2727	天竹	板目	SX119	649	V 1	74	B	2	591	42	18		
506	丸輪		柱		NG-2728	天竹	四角	SX119	271	IV 2	74	B	2-7 12	2535	155	72	板に板面	
507	壁材?		柱		NG-2729	天竹	四角	SX119	307	IV 2	74	B	7	1780	77	67		
508	板状	A-9	天板		NG-2730	天竹	板目	SX119	713	IV 2	74	B	18- 23	649	322	32		
509	板状	A-9	天板		NG-2731	天竹	板目	SX119	369	IV 2	73	B	17	514	14	23		
510	板状	A-9	板		NG-2732	天竹	板目	SX119	268	IV 2	74	B	7-8	634	150	15		
511	板状	A-9	天板		NG-2733	天竹	板目	SX119	19	IV 2	73	B	17	454	83	14		
512	丸柱		丸板		NG-2734	天竹	板目	SX105	4		74	B	16	697	213	18		
513	板状部		竹の断面		NG-2735	天竹	板目	SX119	877	IV 2	74	B	7	495	218	28		
514	田下駄		田下駄		NG-2736	天竹	板目	SX105	2		74	B	16	413	147	22		
515	田下駄		田下駄		NG-2737	天竹	板目	SX105	3		74	B	16	405	127	21		
516	田下駄		田下駄		NG-2738	天竹	板目	SX106	1		76	A	4	272	91	18		
517	田下駄		田下駄		NG-2739	天竹	板目		1566	IV	76	A	9	225	94	15		
518	中綱		棒		NG-2740	天竹	板目(溝)	SX119	658	V 1	74	B	2	323	135	49	表面に平毛	
519	中綱		板綱		NG-2741	天竹	板目	SX119	173	IV 2	65	A	9	189	241	27		
520	中綱		平綱		NG-2742	天竹	板目	SX33	10	IV 1	65	A	13	340	81	34		
521	曲柄又鍬		又鍬		NG-2743	天竹	板目	SX33	109	IV 1	65	A	10	479	55	16		
522	曲柄又鍬		又鍬		NG-2744	天竹	板目	SX33	151	IV 1	65	A	1-6	597	75	14		
523	曲柄又鍬		曲柄部		NG-2745	天竹	板目	SX33	182	IV 2	65	A	8-9	577	35	18		
524	田下駄?	A-8	田下駄?		NG-2746	天竹	板目	SX33	11	IV 1	65	B	2	236	70	12	穴孔、直径10mm	
525	田下駄?	A-8	田下駄		NG-2747	天竹	板目	SX33	12	IV 1	65	B	2	240	105	10	穴孔1.2mm×10mm 板状 板目?	
526	垂木		建築材		NG-2748	天竹	四角圓材	SX33	98	IV 1	65	A	9- 10	1990	56	55		
527	板		板		NG-2749	天竹	四角	SX33	171	IV 2	65	B	2-7	737	54	57	板?	
528	垂木		建築材		NG-2750	天竹	四角圓材	SX33	20	IV 1	65	A	14- 15	2117	60	41		
529	板状	B-3	板		NG-2751	天竹	平丸形溝跡材	SX33	167	IV 2	65	A	10	355	79	55		
530	板状	B-3	板		NG-2752	天竹	平丸形溝跡材	SX33	185	IV 2	65	A	8	489	71	63		
531	板状		板		NG-2753	天竹	約心	SX33	170	IV 2	65	B	6	279	64	13	板6	
532	板状		板		NG-2754	天竹	板目	SX33	166	IV 1	65	A	10	175	95	12	板3	
533	棒状	B-5	四角棒?		NG-2755	天竹	四角丸棒	SX33	149	IV 1	65	B	1-6	643	28	28		
534	板状		板		NG-2756	天竹	板目	SX33	175	IV 2	65	A	10	537	74	13		
535	丸輪		大板		NG-2757	天竹	板目	SX33	4	IV 1	65	A	8-9- 13- 14	2283	293	70		
536	扁板材		大板		NG-2758	天竹	板目	SX33	3	IV 1	65	A	8-9- 10	3140	274	35		
537	板		大板		NG-2759	天竹	板目	SX33	7	IV 1	65	A	10 11- 2- 6	3940	265	37		
538	柱材		大板		NG-2760	天竹	板目	SX33	1	IV 1	65	A	9- 10 11- 6	4518	250	59		

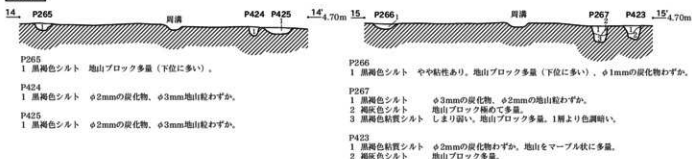
圖 版



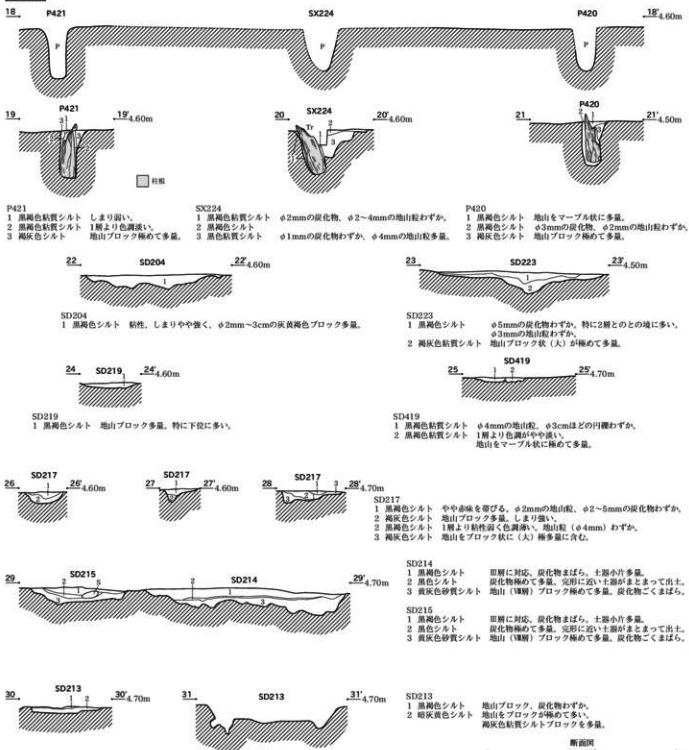


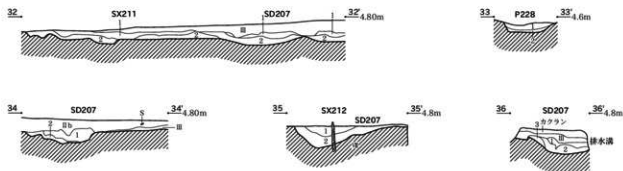


SB198



SA199





SD207

- 1 オリーブ黒色粘質シルト 黒褐色粘質シルトをブロック状に多く含む。φ2mm~5mmの炭化物わずか。田層に対応。
- 2 黒灰色粘質シルト 地山ブロックを稀の多く含む。
- 3 暗灰色シルト SD213の下位か、しまり強い。地山ブロックを多量。

SX211

- 1 黒褐色粘質シルト SD207:1層に似る。φ1mmの炭化物。φ2mm~5mmの地山粒わずか。
- 2 黒灰色シルト 地山をブロック状に稀の多量に含む。

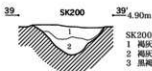
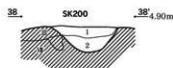
P228

- 1 黒褐色粘質シルト φ4mmの炭化物わずか。地山ブロック(小)多量。
- 2 黒灰色シルト 地山ブロック(大)多量。



SX218

- 1 黒褐色粘質シルト 地山をマール状に多量に含む。とくに下位に多い。φ2mm~7mmの炭化物わずか。



SK200

- 1 黒褐色粘質シルト IIa層を基調とし、炭化物まばら。シルトをレンズ状に含む。炭化物まばら。重土層等。漆黒燻土。
- 2 黒灰色粘質シルト
- 3 黒褐色シルト III層を基調とし地山ブロック散入。炭化物わずかに散入。



SK210

- 1 黒褐色シルト φ2mmの炭化物。φ5mmの地山粒わずか。
- 2 黒灰色シルト 地山ブロック多量。φ2mmの炭化物わずか。

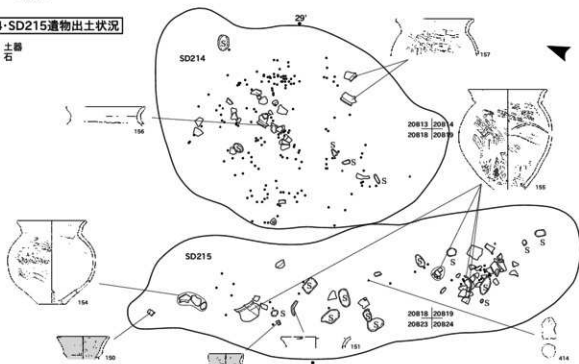


SK253

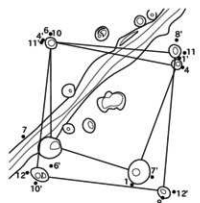
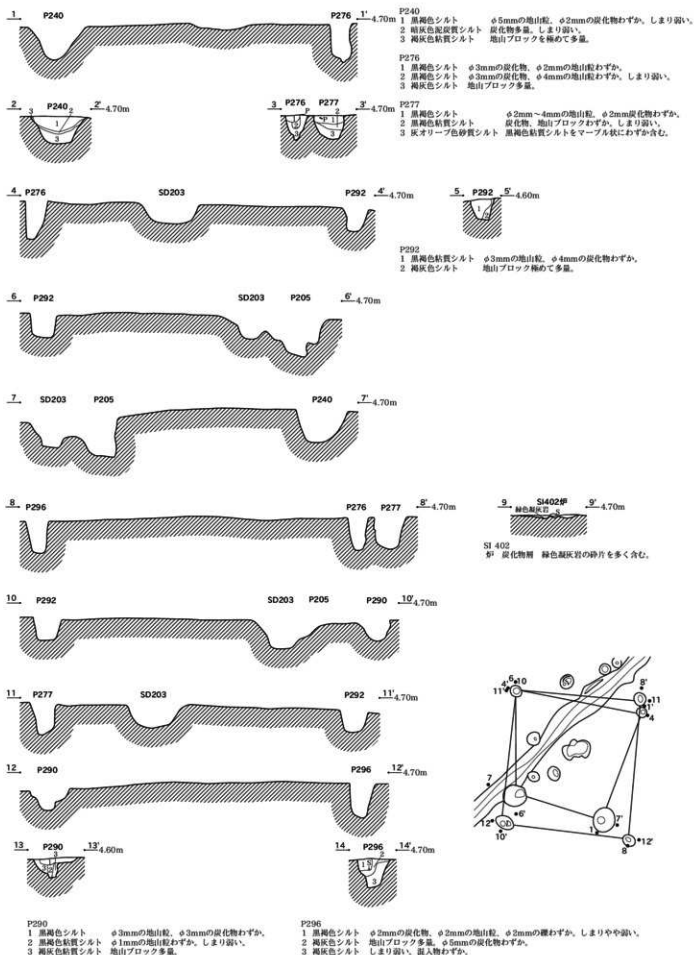
- 1 黒褐色シルト φ2mmの炭化物。φ2mmの地山粒わずか。
- 2 黒灰色シルト φ2mmの炭化物わずか。φ2mm~4mmの地山粒稀の多量。
- 3 黒褐色粘質シルト φ2mmの炭化物わずか。地山粒多量。
- 4 黒褐色粘質シルト 1層より強い。炭化物多量。地山粒わずか(下位に多い)。
- 5 黒灰色粘質シルト 炭化物わずか。地山ブロック多量。
- 6 黒褐色粘質シルト φ4mmの地山粒わずか。色調やや茶色い。

SD214・SD215遺物出土状況

- 土器
- ▲ 石



SI402

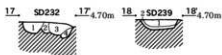


SI401



SD232

- 1 黒褐色粘質シルト しまり強い、φ1mmの炭化物わずか。
- 2 黒褐色粘質シルト しまり強い、1層より色調暗い、地山ブロック稀で多量。
- 3 褐色粘質シルト しまり強い、φ1mmの炭化物、地山ブロック(小)わずか。
- 4 褐色粘質シルト しまり強い、地山ブロック稀で多い。



SD239

- 1 黒褐色シルト 地山小ブロックわずか(下位に多い)。
- 2 褐色粘質シルト 地山ブロック多量。

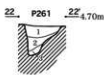
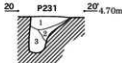
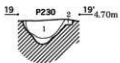


P230

- 1 黒褐色シルト φ2mmの炭化物、φ3mmの地山粒わずか。
- 2 褐色粘質シルト 地山ブロック多量。

P231

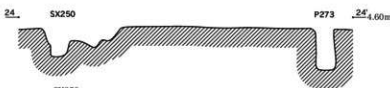
- 1 黒褐色シルト φ1mm~4mmの炭化物、地山ブロック(小)わずか、しまり強い。
- 2 褐色粘質シルト 地山ブロック多量、φ4mm~2mmの炭化物わずか、しまりやや強い。
- 3 褐色粘質シルト φ1mm~2mmの炭化物、地山ブロック(小)わずか、しまり中や強い。



P261

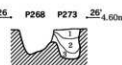
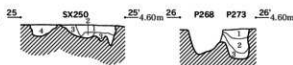
- 1 黒褐色シルト φ3mmの炭化物、φ1mm~3mmの地山粒わずか。
- 2 褐色粘質シルト 地山ブロック多量。
- 3 褐色粘質シルト 均質で炭化物なし。

SI410



SX250

- 1 黒褐色シルト φ2mmの地山粒わずか。
- 2 黒褐色粘質シルト φ2mmの地山粒わずか。色調やや暗い。
- 3 褐色粘質シルト 地山粒多量。
- 4 黒褐色粘質シルト φ2mmの地山粒わずか。



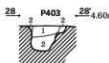
P273

- 1 黒褐色シルト φ5mmの地山粒、φ2mmの炭化物わずか。
- 2 黒褐色粘質シルト 地山ブロックわずか、しまり強い。
- 3 褐色粘質シルト 2層より色調が暗い、地山ブロック多量。



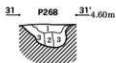
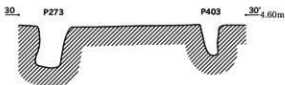
P403

- 1 黒褐色シルト φ2mmの炭化物、φ2mmの地山粒わずか(下位に多い)。
- 2 褐色粘質シルト 地山ブロック稀で多量。



P256

- 1 黒褐色粘質シルト 地山粒わずか。
- 2 黒褐色粘質シルト φ2mmの地山粒わずか。
- 3 褐色粘質シルト 地山ブロック多量、しまり強い。
- 4 褐色粘質シルト 地山ブロック稀で多量。



P268

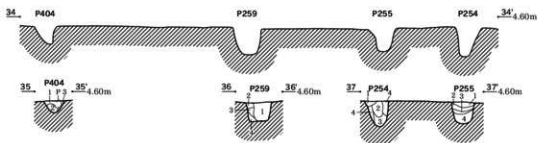
- 1 黒褐色シルト φ2mmの炭化物、φ3mmの地山粒わずか。
- 2 黒褐色粘質シルト しまり強く、1層より色調暗い、地山粒わずか。
- 3 褐色粘質シルト 地山ブロック多量。



P260

- 1 黒褐色粘質シルト φ1mmの炭化物わずか、しまり強い。
- 2 オリーブ黒色砂質シルト しまり強い。

SA429



P404

- 1 黒褐色粘質シルト 地山般わずか。
- 2 黒褐色粘質シルト 1層より色濃く、茶色味がかる。φ2mmの地山般わずか。
- 3 黒灰色シルト しまり強い。地山ブロック極めて多量。

P259

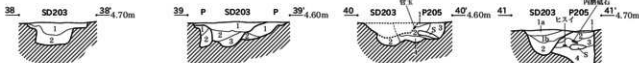
- 1 黒褐色粘質シルト φ3mmの地山般わずか。
- 2 灰オリーブ砂質シルト 硬質シルトブロック多量。しまり強い。
- 3 黒灰色粘質シルト 地山ブロックわずか。
- 4 黒灰色粘質シルト 山ブロック多量。

P254

- 1 黄灰色粘質シルト 地山般わずか。
- 2 黒褐色シルト φ4mmの地山般。φ2mmの炭化物わずか。
- 3 黒灰色シルト φ4mmの炭化物。φ2mmの地山般わずか。
- 4 オリーブ黒粘質シルト しまり強い。地山ブロック極めて多量。

P255

- 1 黒褐色シルト 5mmの地山般わずか。しまり強い。
- 2 黒灰色粘質シルト 濃い色調。地山ブロック極めて多量。しまり強い。
- 3 黒褐色粘質シルト φ2mmの地山般わずか。しまり強い。
- 4 黒灰色粘質シルト φ2cmの地山般多量。しまり強い。

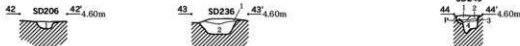


SD203

- 1 黒褐色シルト オリーブ褐色粘質砂わずか。φ3mmの地山般炭化物わずか。2層をマール状にわずか。
- 2 黄灰色粘質シルト しまり強い。地山ブロック多量。φ1cm程の炭化物(1層より大粒)をわずか。
- 3 黒褐色シルト 1層より強く砂質が強い。φ5mmの地山般わずか。
- 4 黒褐色シルト 黒褐色粘質シルトを層状にわずかに含む。φ2mmの地山般わずか。しまり強い。
- 1a 黒褐色シルト 黒褐色粘質シルトをブロック状に多く含む。しまり強い。
- 1b 黒褐色シルト 黒褐色粘質シルトをブロック状に多く含む。φ1mm~0.5cm程の炭化物。地山般(φ2mm)わずか。

P205

- 1 黒褐色シルト φ5mm~1mm程の地山般をわずか。
- 2 黒褐色粘質シルト 1層よりやや色濃淡い。地山ブロック多量(埋め戻し土か)。φ1mm炭化物わずか。
- 3 黒粘質シルト φ1~2mmの地山般わずか。
- 4 黄灰色シルト 地山ブロックが極めて多い。



SD236

- 1 黒褐色シルト φ5mmの地山般。φ4mm炭化物わずか。土師片、緑色凝灰岩チップ多く含む。火山灰の二次堆積が認められる。
- 2 黒褐色粘質シルト 地山ブロック多量。

SD249

- 1 黒褐色シルト φ3mmの地山般わずか。
- 2 黒褐色粘質シルト 地山ブロック多量。
- 3 黒灰色粘質シルト 地山般わずか。
- 4 黒灰色粘質シルト 地山ブロック極めて多量。

SD206

- 1 オリーブ黒粘質シルト 1層と地山をブロック状に多く含む(特に下位に多い)。炭化物φ1mm~1cmをわずか。器入物が多く、人為的な埋め戻しと考えられる。



SD257

- 1 黒褐色粘質シルト φ4mmの地山般。φ2mmの炭化物わずか。
- 2 黒灰色粘質シルト 地山ブロック多量。
- 3 灰オリーブ色砂質シルト しまり強く地山に包圍。黒褐色粘質シルトをわずかに含む。
- 4 黒褐色シルト 地山ブロック多量。しまり強い。



SD409

- 1 黒褐色粘質シルト 地山般わずか。
- 2 黒灰色シルト φ1mmの炭化物わずか。地山ブロック多量(下位に多い)。

SD412

- 1 黒褐色粘質シルト φ2mmの地山般わずか。
- 2 黒褐色粘質シルト φ4mm地山般。φ1mmの炭化物わずか。1層より色濃淡い。



SD220

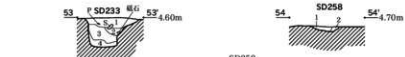
- 1 黒褐色粘質シルト 上位に黒褐色粘質砂が層をなしてわずかに含む。
- 2 黒褐色シルト 炭化物多量。
- 3 オリーブ黒粘質シルト 黒褐色シルトをマール状にわずかに含む。

SD406

- 1 黒褐色粘質シルト φ2mmの地山般わずか。
- 2 黒褐色粘質シルト 地山ブロック多量。

SD294

- 1 黒褐色シルト φ2mmの炭化物。地山ブロックわずか。



SD233

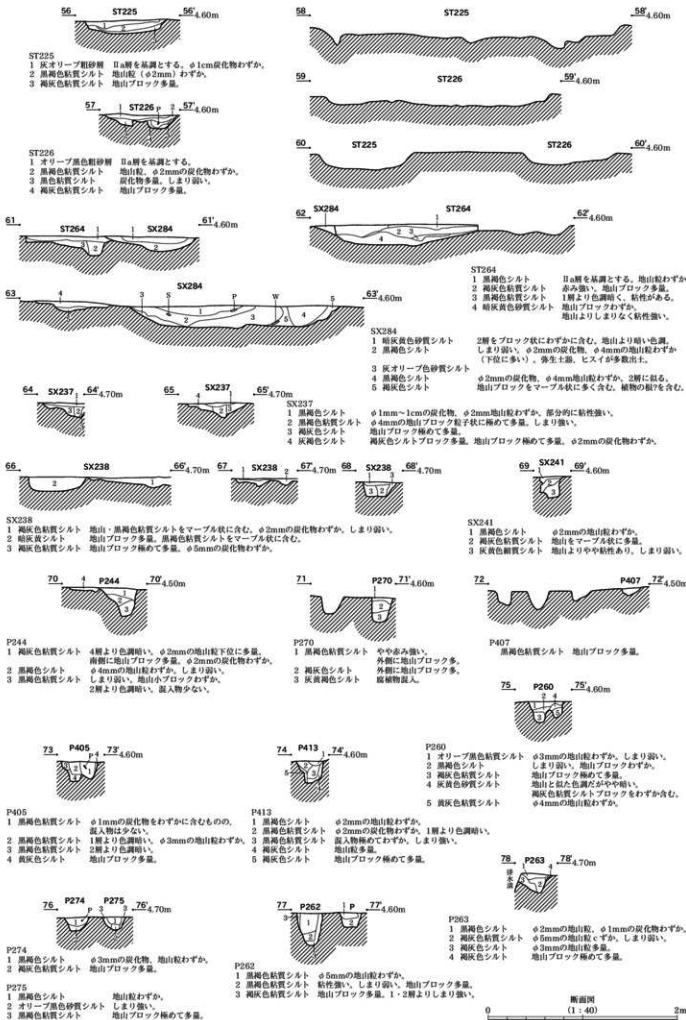
- 1 黒褐色シルト φ5mmの炭化物わずか。円礫を含む。
- 2 黒褐色粘質シルト 地山ブロック多量。
- 3 黒褐色粘質シルト 2層より色濃淡い。φ3mmの地山般わずか。
- 4 黒褐色粘質シルト 地山ブロック極めて多量。

SD258

- 1 灰褐色シルト φ5mmの地山般多量。φ2mmの炭化物わずか。
- 2 灰褐色シルト しまり強い。地山般わずか。

SD411

- 1 黒褐色粘質シルト φ3mmの炭化物わずか。
- 2 黒褐色粘質シルト 地山ブロック極めて多量。

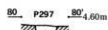




P251

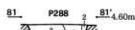
- 1 黒褐色粘質シルト
2 黒褐色シルト

しまり弱い、
地山ブロック多量。



P297

- 1 黒褐色シルト φ2mmの炭化物わずか、
2 黒褐色シルト 1層より色調暗く、砂質、地山較多量。



P288

- 1 黒褐色シルト φ3mmの地山較、φ5mmの炭化物わずか、
2 黒褐色粘質シルト 地山小ブロック多量、
3 褐灰色シルト 地山をブロック極めて多量。

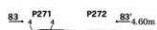


P287

- 1 黒褐色シルト しまり強い、φ1mmの炭化物、φ4mmの地山較わずか、
2 黒褐色粘質シルト φ1mmの炭化物わずか、地山較多量。

P418

- 1 褐灰色粘質シルト しまり弱い、φ3mmの地山較わずか、
2 黒褐色粘質シルト しまり強い、φ4mmの地山較多量、φ1mmの炭化物わずか、
3 黒褐色シルト φ3mmの地山較わずか、

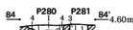


P271

- 1 黒褐色粘質シルト φ2mmの地山較わずか、
2 黒褐色粘質シルト 地山ブロックわずか、褐灰色粘質シルトブロック多量、
3 オリーブ黒色砂質シルト 黒褐色粘質シルトをマール状にわずか、しまり強い、
4 褐灰色シルト 地山ブロック多量。

P272

- 1 黒褐色シルト 均質で混入物ほとんどみられない、
2 褐灰色粘質シルト 地山ブロック極多、しまり弱い、
3 褐灰色粘質シルト 地山ブロックわずか、

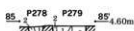


P280

- 1 黒褐色シルト φ2mmの炭化物、φ4mmの地山較わずか、
2 黒褐色シルト 1層より色調暗く、粘性あり、φ6mmの地山較、φ2mmの炭化物わずか、
3 黒褐色粘質シルト 地山ブロックが南側に多量、
4 褐灰色粘質シルト 地山ブロック極めて多量。

P281

- 1 灰褐色粘質シルト しまり強い、φ2mmの炭化物わずか、
2 黒褐色粘質シルト φ3mmの地山較わずか、
3 褐灰色粘質シルト 1層より濃い色調、
4 褐灰色粘質シルト 地山ブロック極めて多量。



P278

- 1 黒褐色シルト しまり弱い、φ2mmの地山較わずか、
2 褐灰色シルト 地山ブロック多量。

P279

- 1 黒褐色粘質シルト φ2mmの地山較わずか、
2 黒褐色粘質シルト φ4mmの地山較多量、
3 褐灰色シルト 地山ブロック極めて多量、φ2mmの炭化物わずか、



P282

- 1 黒褐色粘質シルト φ2mmの地山較、φ4mmの炭化物わずか、
2 黒褐色粘質シルト 1層より強い色調、φ3mmの地山較多量、
3 褐灰色シルト φ2mmの炭化物わずか、
4 褐灰色シルト しまり弱い、赤味が強い、
5 褐灰色シルト 地山ブロック極めて多量。



P291

- 1 黒褐色シルト φ2mmの地山較わずか、
2 黒褐色粘質シルト 地山較わずか、しまり弱い、
3 褐灰色シルト 地山ブロック極めて多量、しまり強い、
4 褐灰色シルト 3層より色調暗く、しまり強い。



P289

- 1 褐灰色粘質シルト φ3mmの炭化物わずか、
2 黒褐色粘質シルト 地山較わずか、しまり強い、
3 褐灰色粘質シルト 地山ブロック極めて多量、1層より色調強い、



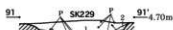
P286

- 1 黒褐色シルト 地山ブロック多量、炭化物わずか(異様に多い)、
2 褐灰色シルト 地山ブロック多量、φ6mmの炭化物わずか、
3 褐灰色シルト 混入物極めてわずか、
4 褐灰色シルト 地山ブロック多量、
5 褐灰色シルト 地山ブロック極めて多量、ヒスイ原石出土。



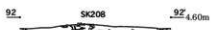
SK227

- 1 灰色シルト 珪層を極調とする、炭化物多量、遺物わずか、
2 黄灰色シルト 地山ブロック多量、炭化物ごくわずか、



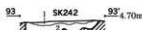
SK229

- 1 黒褐色シルト 土層源を多く含む、φ3mmの炭化物、φ3mmの地山較わずか、
2 褐灰色粘質シルト 炭化物(φ1mm)をわずかに含む、テフラの二次堆積がブロック状に認められる
3 黒褐色粘質シルト 1層より色調が暗く粘性強い、しまりは若干弱い、地山をロックを多量。



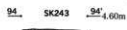
SK208

- 1 黒褐色粘質シルト 土層片を多量に含む、φ3mmの炭化物、
2 褐灰色粘質シルト φ3mmの地山較わずか、
地山ブロック多量、しまり弱い。



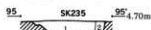
SK242

- 1 黒褐色粘質シルト φ1mmの炭化物、地山較わずか、
2 褐灰色粘質シルト 地山ブロック極めて多量。



SK243

- 1 黒褐色粘質シルト φ2mmの地山較わずか、混入物少なく、しまり強い、
2 褐灰色粘質シルト 地山ブロックわずか、しまり弱い、
3 黄灰色シルト φ2mmの炭化物、地山ブロックわずか、しまり強い、



SK235

- 1 黒褐色粘質シルト 地山ブロック(小)わずか、
2 褐灰色シルト 地山ブロック極めて多量。



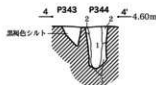
SB370



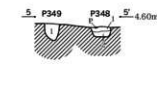
- P335
 1 黒褐色シルト φ3mmの地山粒わずか、しまり強い。
 2 黒褐色シルト 地山ブロック多量。
 3 黒褐色粘質シルト 地山ブロックわずか。
 4 黒褐色粘質シルト 混入物わずかで粘性强い、しまり強い。



- P355
 1 黒褐色シルト φ2mmの地山粒わずか。
 2 黒褐色シルト 黒褐色シルトと地山をブロック状に多量。



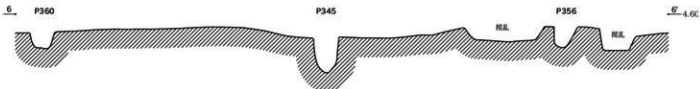
- P344
 1 黒褐色粘質シルトφ2mmの地山粒、φ1mmの炭化物わずか、しまり強い。
 2 黒褐色粘質シルト地山粒多量。
 3 黒褐色粘質シルト地山ブロック極めて多量。



- P348
 1 黒褐色シルト φ1mmの炭化物、φ1mmの地山粒わずか。
 2 黒褐色シルト 地山ブロック多量、φ1mmの炭化物わずか。

- P343
 1 黒褐色シルト φ2mmの地山粒わずか。

- P349
 1 黒褐色シルト φ2mm~4mmの炭化物、φ4mmの地山粒わずか。



- P360
 1 黒褐色粘質シルト 輝石をマール状にわずか。
 2 黒褐色シルト 輝石をマール状に多量、しまり強い。



- P345
 1 黒褐色粘質シルト φ3mmの地山粒わずか、しまり強い。
 2 黒褐色粘質シルト φ2~6mm地山粒多量、炭化物わずか。
 3 黒褐色粘質シルト 地山ブロック極めて多量。
 4 黒褐色シルト 赤味強い、φ6mmの地山粒わずか。
 5 黒褐色粘質シルト



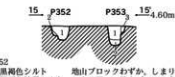
- P356
 1 黒褐色シルト φ2mmの地山粒、φ1mmの炭化物わずか。
 2 黒褐色粘質シルト φ2mmの地山粒わずか、しまり強い。
 3 黒褐色シルト 色調やや濃い、φ2mmの地山粒わずか。



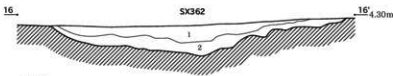
- P350
 1 黒褐色シルト 2層よりやや色調強い、地山ブロック多量。
 2 黒褐色シルト 地山粒わずか。



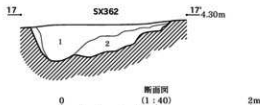
- P351
 1 黒褐色シルト φ2mmの炭化物、φ3mmの地山粒わずか、中位に黒色粘土を帯状に(幅9cm)を含む。



- P352
 1 黒褐色シルト 地山ブロックわずか、しまり強い。
 2 黒褐色粘質シルト しまり強い、地山ブロック多量。
 P353
 1 黒褐色シルト φ2mmの地山粒、φ1mm炭化物わずか。
 2 黒褐色粘質シルト 1層より暗い色調、混入物わずか。
 3 黒褐色粘質シルト 1層より濃い色調、地山ブロック多量、φ1mmの炭化物わずか。



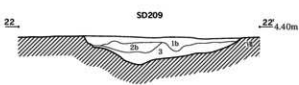
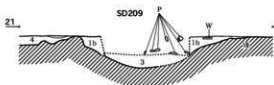
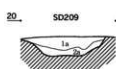
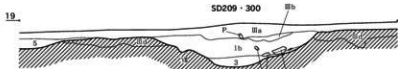
- SX362
 1 黒褐色粘質シルト φ2mmの炭化物、φ1~3mm地山粒わずか、薄鉄鉱の比着著しい。
 2 黒褐色シルト しまり強い、φ4mmの炭化物わずか、地山ブロック多量。



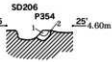
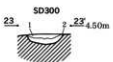
SA430



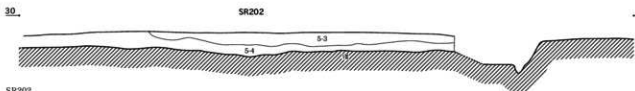
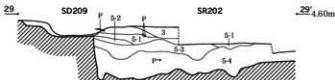
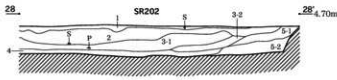
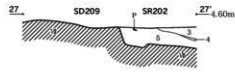
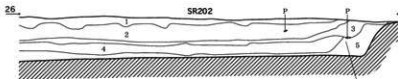
- P414**
 1 黒褐色シルト φ1mmの炭化物、φ4mmの地山粒わずか。
 2 褐色シルト しまり強い、3色より赤みが強い、地山粒わずか。
 3 褐色シルト 地山ブロック極めて多量。
- P415**
 1 黒褐色粘質シルト φ1mmの炭化物、φ4mmの地山粒わずか。
 2 褐色シルト 地山ブロック多量。
 3 褐色粘質シルト しまり弱い、地山ブロック極めて多量。



- SD209**
 1a 黒褐色粘質シルト φ2mm~5mm程の炭化物をわずか、下位に地山を小ブロック状にわずか。
 1b 黒褐色シルト φ2mm~1cmの炭化物、φ1mm~2cmの地山ブロック多量。SD209でも上層が大きく広がる地帯に広がる層土。
 2a 褐色粘質シルト 炭化物をまばらに含む。中、5mm~2cmの黒褐色シルトブロックを極めてまばらに含む。
 2b 褐色粘質シルト 粒度が粗く粗砂に近い。
 3 黒褐色シルト 1層に比べ粘性、しまりやや弱い、地山ブロック粒が多量含まれる。
 4 黒褐色シルト 地山ブロック、砂質シルトブロックとの間土。
 5 黒褐色シルト 炭化物をわずかに含む、褐色シルトブロックわずかに含む。



- SD300**
 1 黒褐色シルト 褐色シルトブロック、炭化物をまばら。
 2 褐色粘質シルト薄層ブロックを基調とし、黒褐色シルトブロック多量。
- SD347**
 1 黒褐色シルト φ1mmの炭化物、φ2mmの地山粒わずか。
 2 褐色シルト 地山粒多量。
- P354**
 1 黒褐色シルト φ2mmの地山粒わずか。
 2 黒褐色シルト 地山ブロック極めて多量。

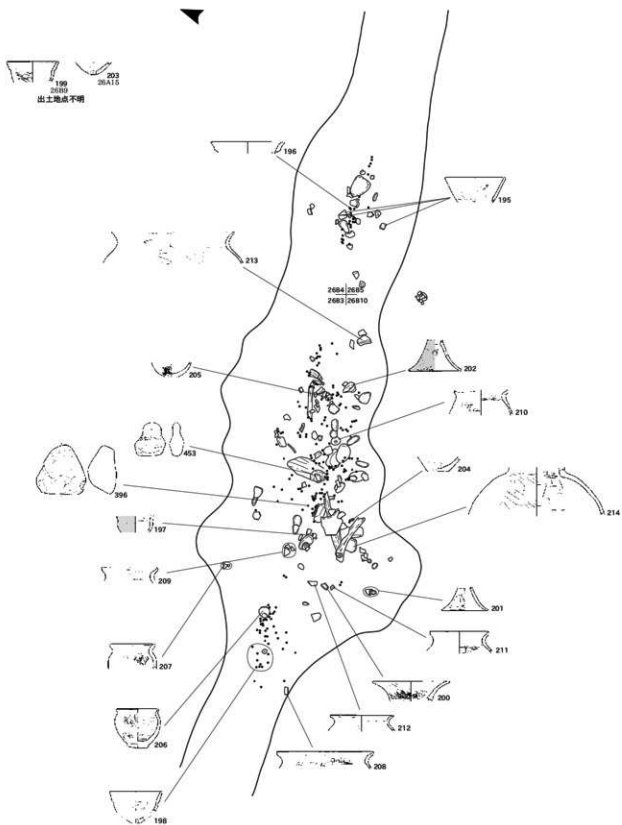


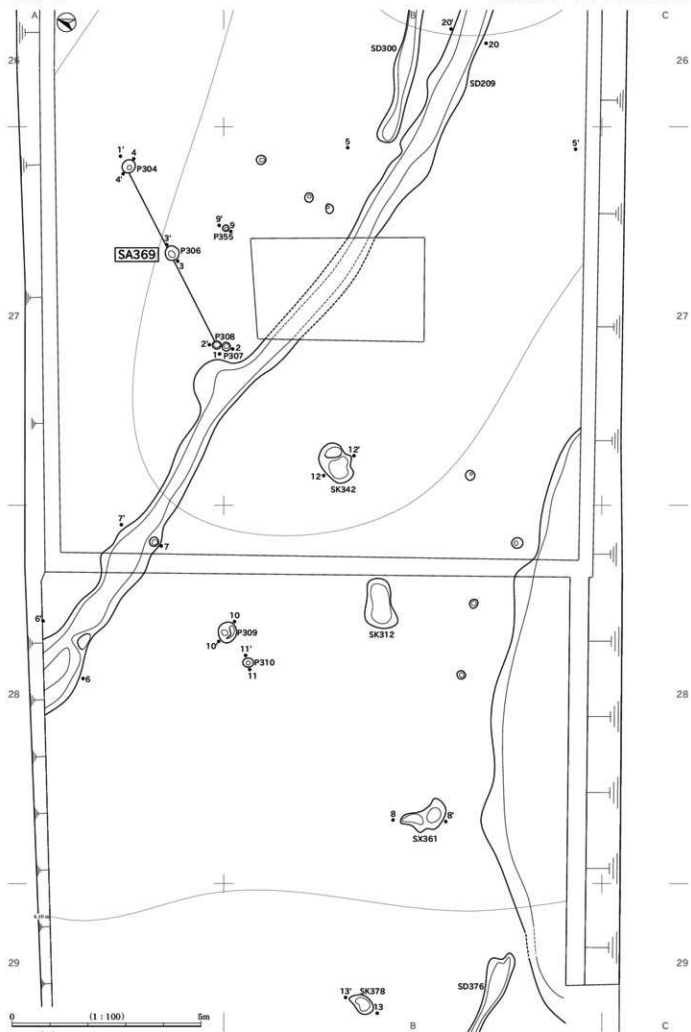
- SR202**
 1 黒褐色粘質シルト 厚層を基調とする、φ3mmの炭化物わずか、薄鉄の沈着わずか、土層露出。
 2 オリーブ黒色シルト しまりやや弱い、φ5mmの地山粒わずか、土層露出。
 3 黄色粘層物 炭化物層と炭素層の互層。
 3-1 黄色粘層物 しまり強、層下層(4層との境)に層理に沿って(粗3cm位)炭化物層と茶色有機物の互層がみられる。
 3-2 オリーブ黒色粘質シルト φ1cmの炭化物わずか、しまり弱い、4層との境で炭化物が若干集まる。
 4 褐色粘土層 しまり強く、比較的均質、φ1cmの地山粒わずか、積などの木製品や自然土を含む。
 5 黒褐色粘質シルト しまり弱く、4層よりやや砂質、地山ブロック多量、φ1mmの炭化物わずか。
 5-1 褐色粘土層 5-2よりやや粘性が強い、ただし粘りが強い粘質土の混入率が高く、基本的に5-2と同層か、φ3mmの地山粒、φ1mmの炭化物わずか。
 5-2 褐色粘質シルト 5-1と基本的に同層だが混入物がある、地山ブロック多量、φ1mm~1cmの炭化物、黒色粘質シルトブロックわずか、混入率がより高い。
 5-3 褐色粘土層 地山ブロックをマール状に多量、φ4mmの炭化物わずか。
 5-4 褐色粘質シルト 地山ブロック極めて多量、黒褐色粘質シルトブロックをわずか、5-3層より砂質が強い(混入物の入り方違)。

断面図 (1:40) 2m

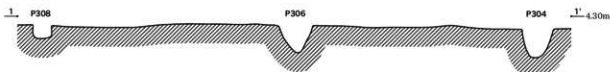
SD209遺物出土状況

- 土器
- ▲ 石





SA369



2_ P307 P308 2' 4.30m



P307
1 黒褐色シルト 炭化物、地山ブロックわずか。

P308
1 黒褐色シルト 炭化物、地山ブロックわずか。

3_ P306 3' 4.30m

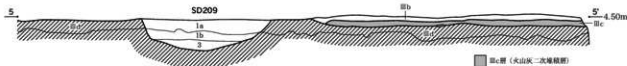


P306
1 黒褐色シルト 炭化物、地山ブロックわずか。

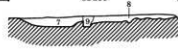
4_ P304 4' 4.20m



P304
1 黒褐色シルト 炭化物、地山ブロックわずか。
2 褐色黄色シルト 1層に比べやや砂質、黒褐色シルトブロック含む。



6_ SD209 6' 4.30m



7_ P363 SD209 7' 4.20m

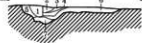


P363
1 黒褐色シルト 炭化物多量、しまり強い。
2 黒褐色粘質シルト 炭化物多量。
3 褐色シルト 地山粒多量。

SD209

- 1a 褐色粘質シルト φ2mm~5mm程の炭化物をわずか、下段に地山を小ブロック状にわずか。
- 1b 黄灰色シルト φ2mm~1cmの炭化物、φ1mm~2cmの地山ブロック多量。SD209でも上層が大きく広がる地層に広がる層土。
- 2a 炭灰色シルト 炭化物をまばらに含む。中、5mm~2cmの黒褐色シルトブロックを解めてまばらに含む。
- 2b 褐色黄色粘質シルト 粒感が強く粗砂に近い。
- 3 黒褐色シルト 1層に比べ粘性、しまりやや弱い、地山ブロック粒が多量含まれる。
- 4 黒褐色シルト 地山ブロック、砂質シルトブロックとの混土。
- 5 黒褐色シルト 炭化物をわずかに含む。褐色シルトブロックわずかに含む。
- 6 褐色黄色シルト 1層をベースに黒褐色シルトブロック多量含む。漸移層。
- 7 黒褐色シルト 炭化物わずか、地山ブロック多量。
- 8 黒褐色シルト 炭化物わずかに含む、地山ブロックわずかに含む。
- 9 黒褐色シルト 粘性、しまりやや弱く混入物はほとんど見られない、SD209とは別のビット層土。

8_ SK361 8' 4.50m



SK361

- 1 黒褐色シルト φ2mmの地山粒わずか。
- 2 黒色シルト 炭化物多量。
- 3 黄土
- 4 褐色シルト 炭化物多量、6層をブロック状にわずか。
- 5 褐色粘質シルト 地山ブロック極めて多量。
- 6 褐色粘土 黄白色粘土小ブロックわずか、しまり強い。
- 7 褐色粘土 黒褐色粘質シルトをわずか、地山粒を多量。

9_ P305 9' 4.40m



P305
1 黒褐色粘質シルト φ2mmの地山粒、φ2mmの炭化物わずか。

10_ P309 10' 4.20m



P309

- 1 黒色シルト 炭化物多量。φ2~5mmの地山ブロックわずか。
- 2 褐色粘質シルト 1層をベースに黒褐色シルトが混入、硬の崩れ層土。

11_ P310 11' 4.20m



P310
1 黒色シルト 炭化物多量。φ2~5mmの地山ブロックわずか。

12_ SK342 12' 4.30m



SK342

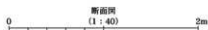
1 黒褐色粘質シルト 地山ブロック多量。

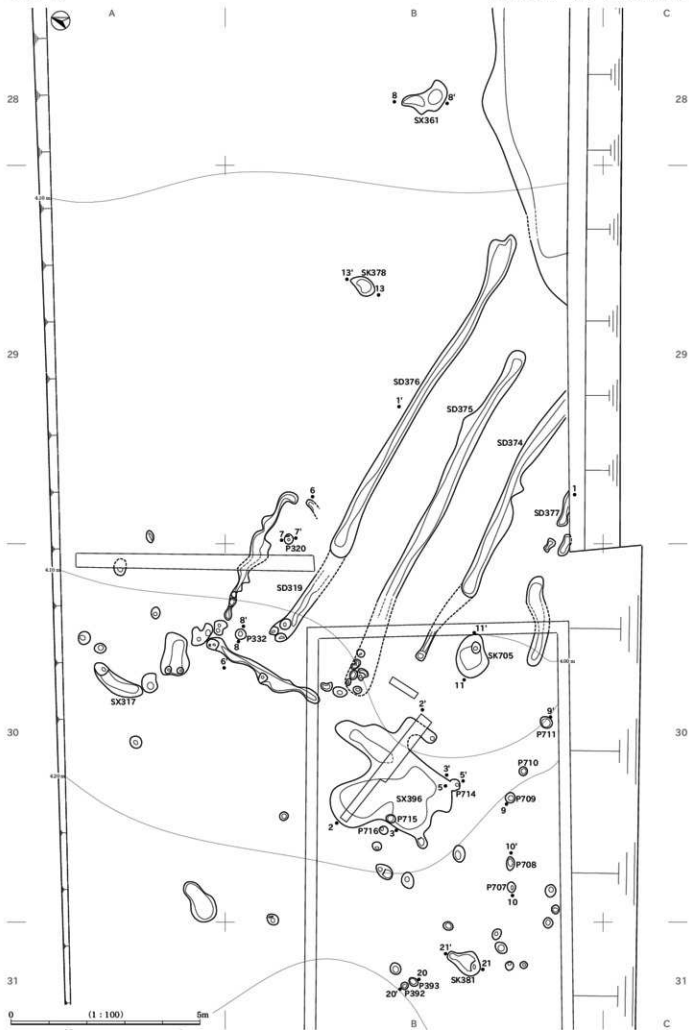
13_ SK378 13' 4.20m

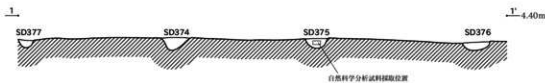


SK378

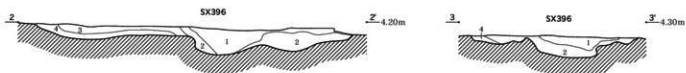
- 1 黒褐色シルト φ2mmの地山粒わずか。
- 2 黒褐色粘質シルト 1層より色調弱い。



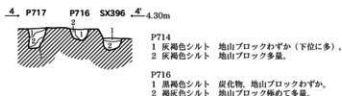




SD374~SD377
1 黒褐色シルト



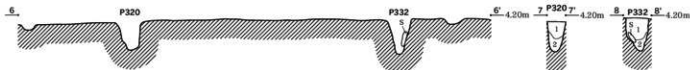
SX396
1 黒褐色シルト 炭化物多量。
2 黒褐色シルト 地山ブロック多量。
3 灰オリーブシルト 4層をブロック状にわずが、黒褐色粘質シルトブロックわずが、地山小ブロック多量。
4 褐色シルト



P714
1 灰褐色シルト 地山ブロックわずが(下位に多)。
2 灰褐色シルト 地山ブロック多量。
P716
1 黒褐色シルト 炭化物、地山ブロックわずが。
2 褐色シルト 地山ブロック極めて多量。

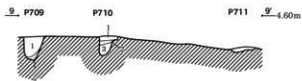


P717
1 黒褐色シルト 色調濃い、φ1mmの炭化物わずが、
2 黒褐色シルト φ3mmの地山粒わずが、
3 褐色シルト 地山ブロック極めて多量。

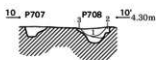


P320
1 黒褐色シルト 炭化物、φ2mm~1cmの地山粒わずが。
2 黄灰色シルト 粘性、しまりやや弱く、混入物は見られない。

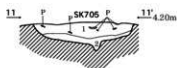
P332
1 黒褐色シルト φ1~5mmの地山ブロック多量、炭化物わずが。
2 褐色シルト 粘性、しまりやや弱い、φ1cm以上の地山ブロック多量。



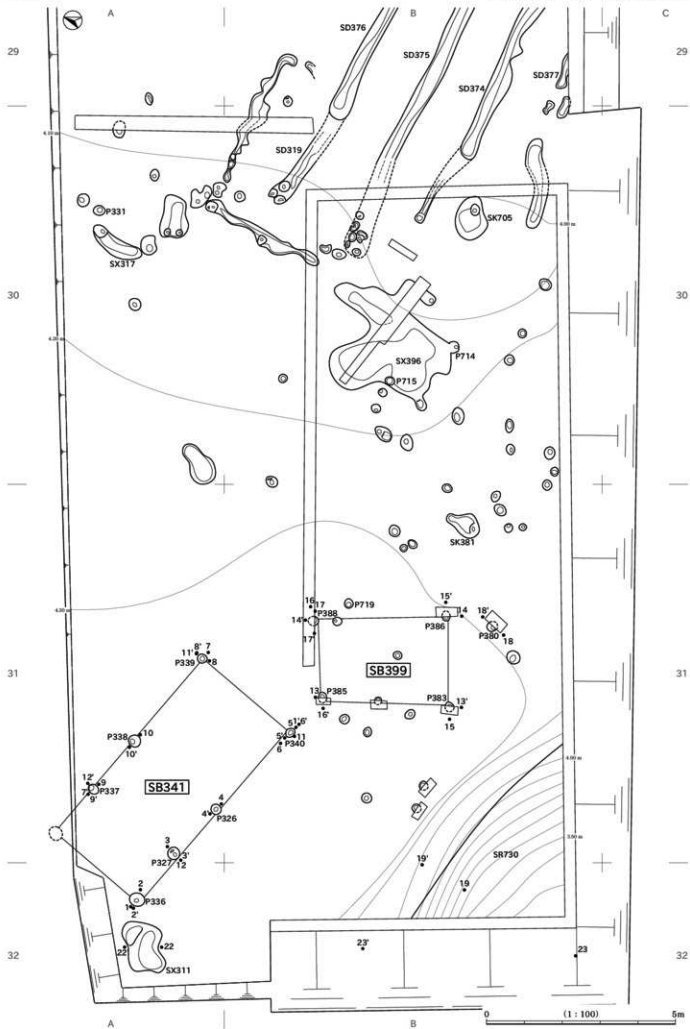
P709
1 黒褐色シルト φ2mmの地山粒わずが。
P710
1 黒褐色シルト φ4mmの地山粒、φ1mmの炭化物わずが。
P711
黒褐色シルト φ4mmの炭化物多量、φ2mmの地山粒わずが。



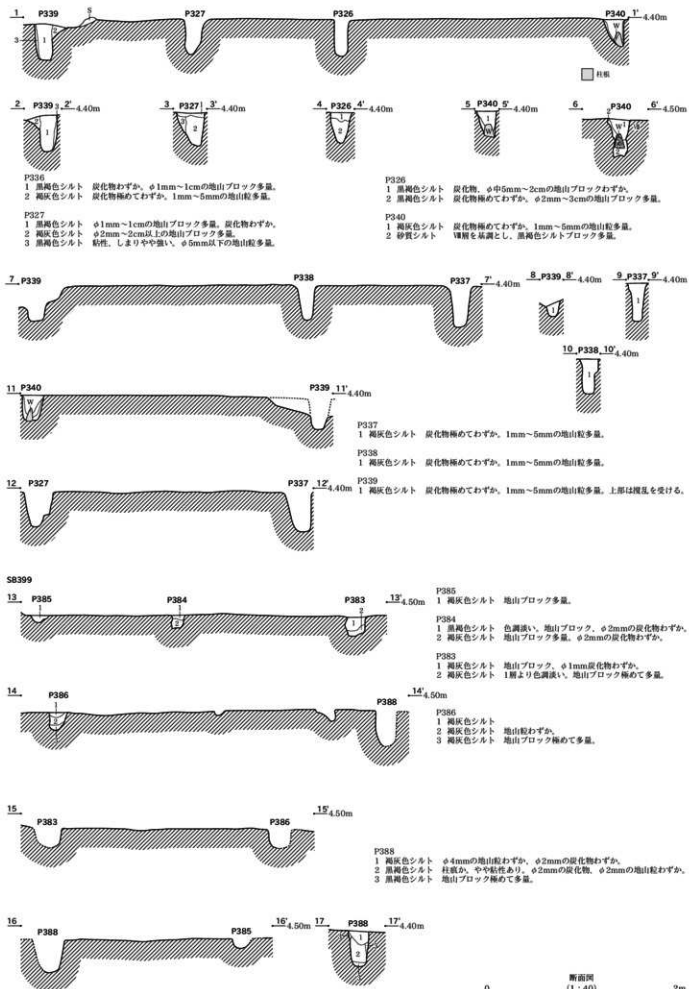
P707
黒褐色シルト 地山粒、φ2mmの炭化物わずが。
P708
1 黒褐色シルト φ2mmの炭化物、φ2mmの地山粒わずが。



SK705
1 黒褐色シルト 炭化物多量、土師断片を多量に含む。



SB341

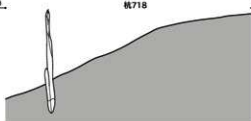


18. P380 18' 4.50m



P380
1 黒褐色シルト 地山ブロック、φ2mmの炭化物わずか、
2 褐色シルト 地山ブロック極めて多量。

19. 杭718 19' 4.30m



20. P392 P393 20' 4.30m



P392
黒褐色シルト

P393
1 黒褐色シルト φ2mmの炭化物わずか、地山較多量。
2 黒褐色シルト 1層より濃い色調。

21. SK381 21' 4.30m



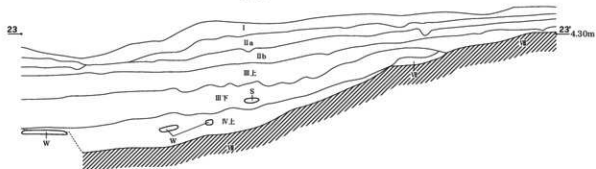
SK381
1 黒褐色シルト φ2mmの炭化物わずか、樹木痕か。
2 黒褐色シルト 地山をマーブル状に多量、樹木痕か。

22. SK311 22' 4.40m



SK311
1 黒褐色シルト φ1mm~1cmの地山粒、φ2mm~1cmの炭化物多量。下位に砂状に堆積。
2 オリーブ褐色シルト 粘性、しまりやや弱い。炭化物わずか、φ2mm~5mmの地山ブロック多量。
3 濃い黄褐色シルト 炭化物わずか。粘性、しまりやや弱い。

SR730



24. 24' 3.90m



24-24'
1 黒褐色シルト 地山ブロック、炭化物わずか、草層に対応か。
2 灰黄褐色シルト 火山灰の二次堆積物が白色粒上化。
3 黒色シルト 粘性、しまりやや強く、地山ブロックわずか。

25. SX509 25' 3.90m



26. SX510 26' 3.70m



27. SX511 27' 3.60m



28. SX562 28' 3.40m



29. SX530 29' 3.70m



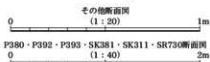
30. SX531 30' 3.85m



31. SX560 31' 3.80m



32. SX532 32' 3.70m



36



35

34



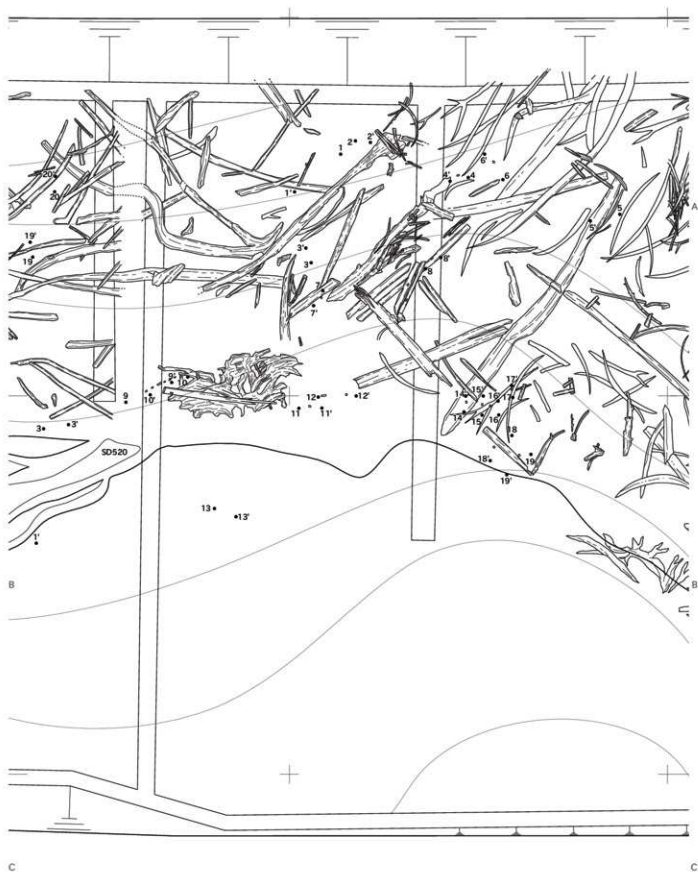
C

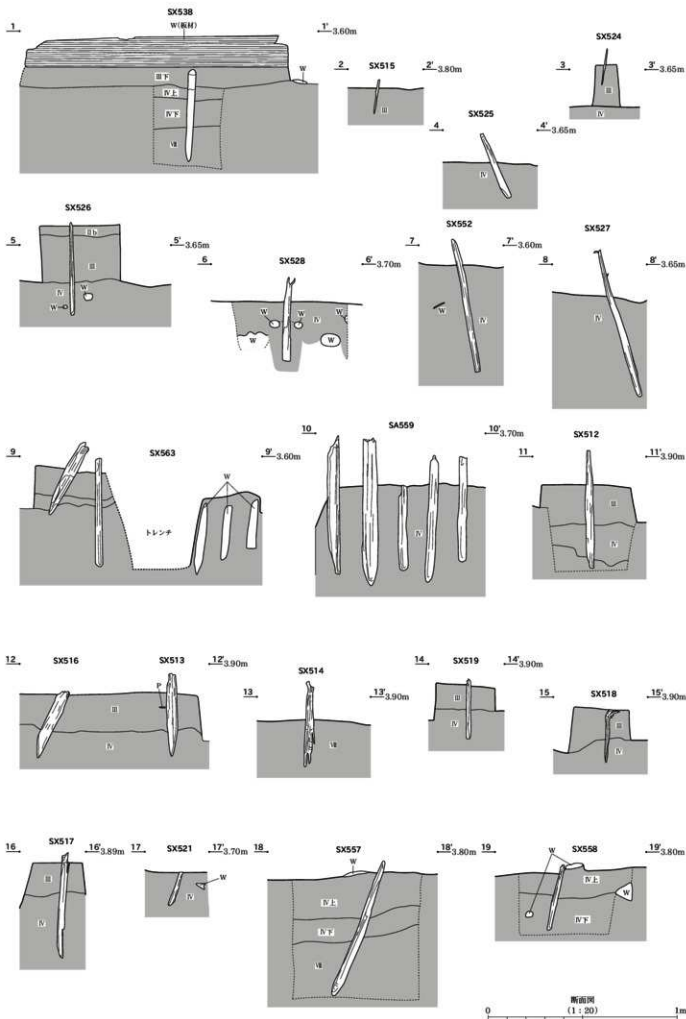
C

36

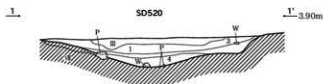
35

0 (1:100) 5m

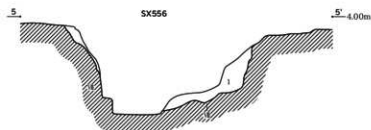
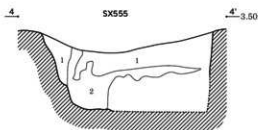
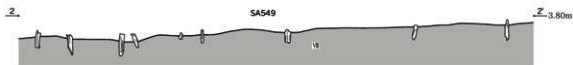






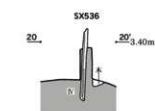
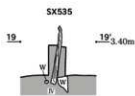
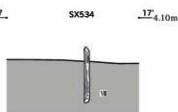
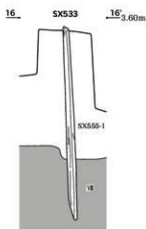
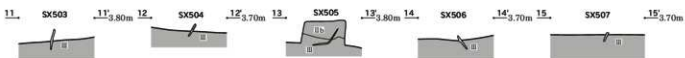
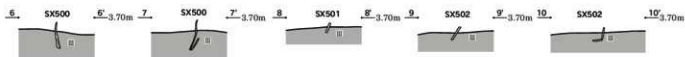


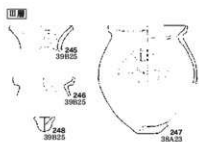
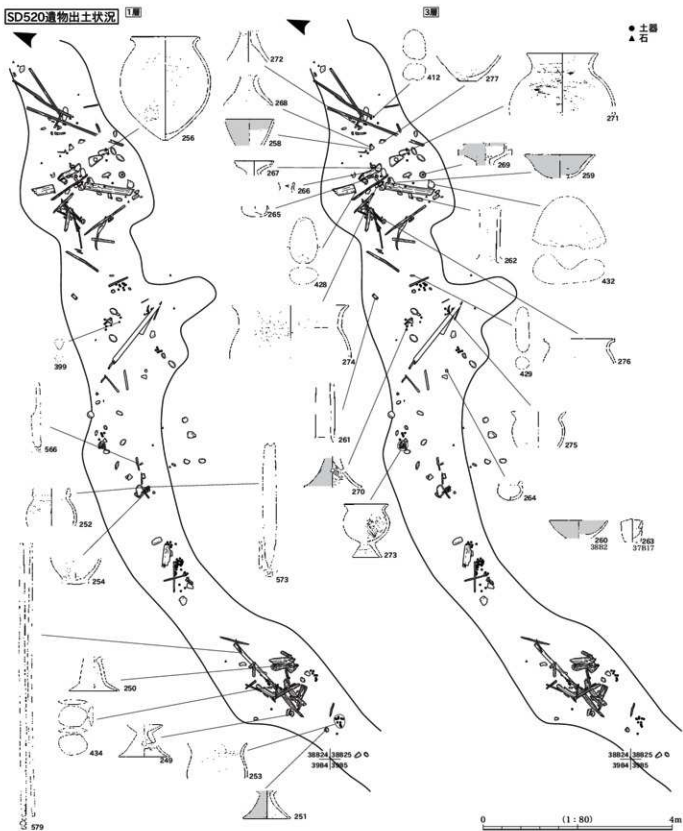
SD520
 1 黒褐色シルト 地山ブロックわずが、炭化物多量。
 2 黒褐色シルト 地山ブロック多量、炭化物わずが。
 3 灰色砂質シルト 黒褐色シルトと混交。
 4 黒褐色シルト 植物遺体多量、炭化物極めてわずが。
 5 黄灰色砂質シルト 埋物を基調とし、黒褐色シルトを混入。



SX555
 1 暗オリーブ灰色砂質シルト 混入物少なく、黒褐色砂質シルト極めてわずかに混入。
 2 黒褐色シルト 炭植物多量、地山ブロックわずが。

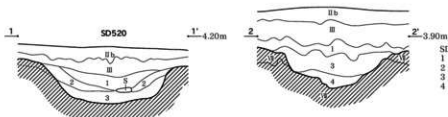
SX556
 1 暗オリーブ灰色砂質シルト 黒褐色シルト多量。







SD520



SD520

- 1 黒褐色シルト
- 2 黒褐色シルト
- 3 灰色砂質シルト
- 4 黒褐色シルト

地山ブロックわずか、炭化物多量。
地山ブロック多量、炭化物わずか。
黒褐色シルトと混交。
植物遺体多量、炭化物極めてわずか。



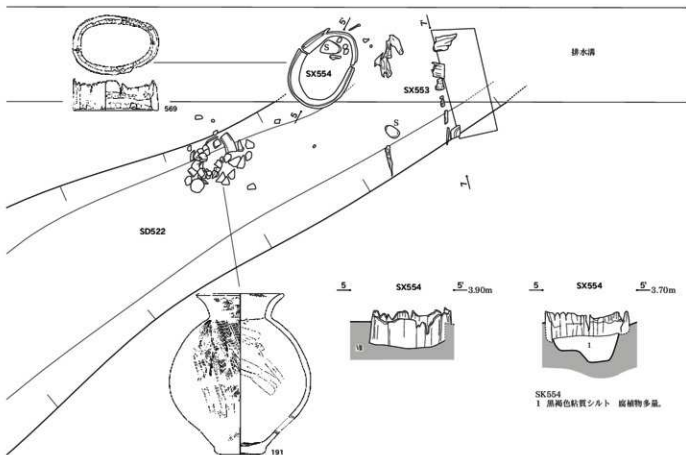
SD522

- 1 黒褐色シルト 混入物少なく、地山ブロック極めてわずか。
- 2 黄灰色シルト 粘性、しまりややあり、炭化物、地山ブロック極めてわずか。



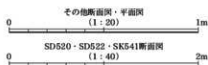
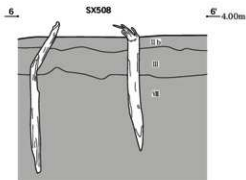
SK541

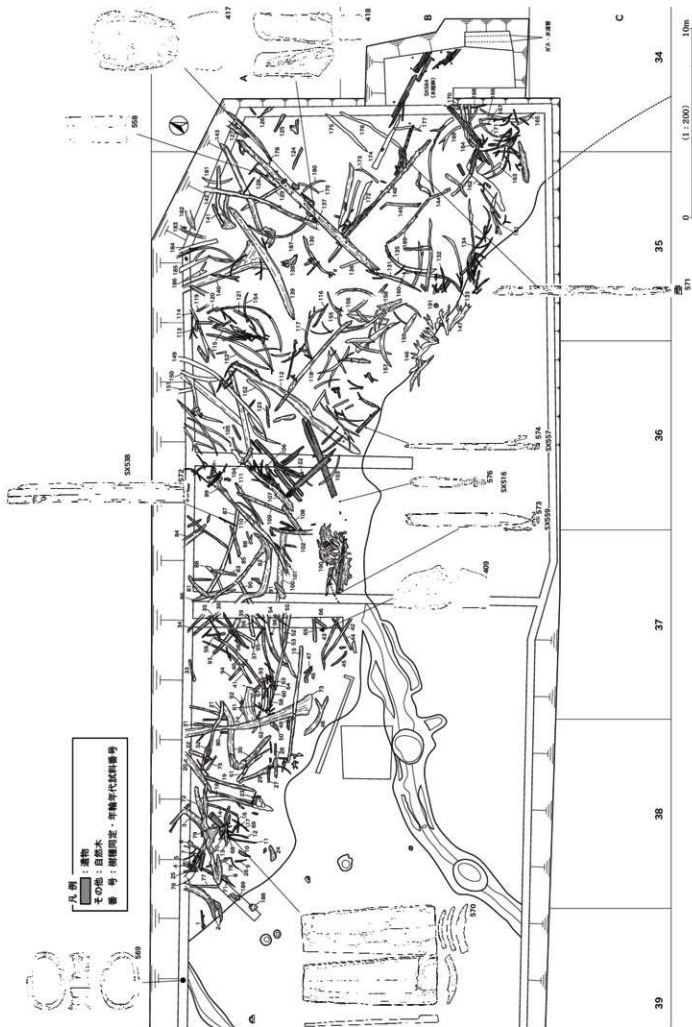
- 1 褐色シルト 炭化物多量、地山ブロックわずか、黒色シルト混入。
- 2 黒褐色シルト 粘性、しまりややあり、炭化物、地山ブロックわずか。
- 3 黄褐色砂質シルト 上層の黒褐色シルト混入。
- 4 黒褐色シルト 炭化物、地山ブロックわずか、炭化物多量。



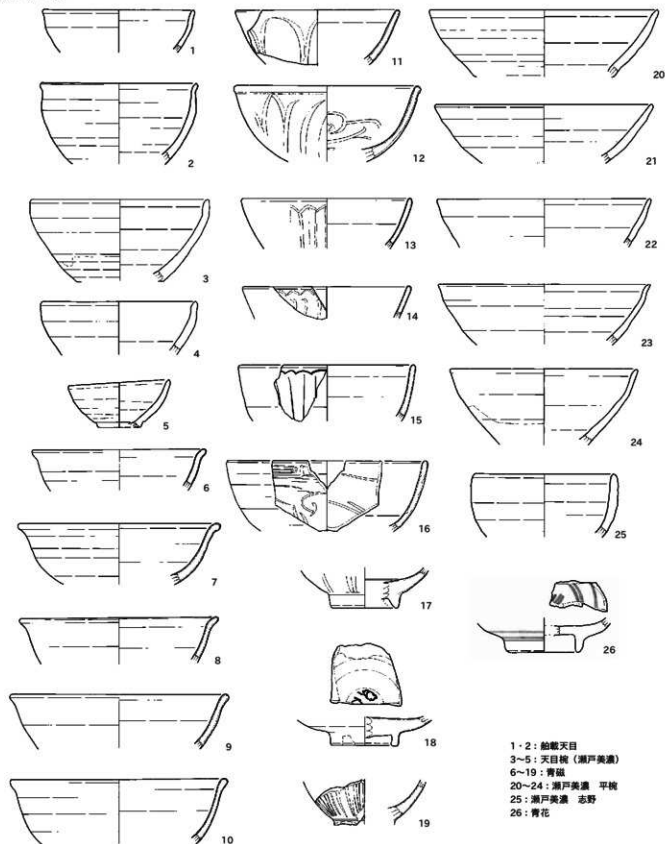
SK554

- 1 黒褐色粘質シルト 炭化物多量。



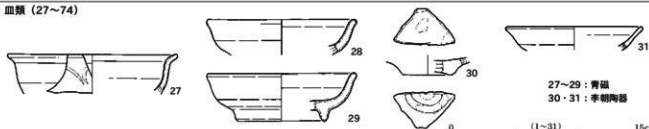


中近世の土器・陶磁器
碗類 (1~26)



- 1・2：船載天目
- 3～5：天目椀（瀬戸美濃）
- 6～19：青磁
- 20～24：瀬戸美濃 平椀
- 25：瀬戸美濃 志野
- 26：青花

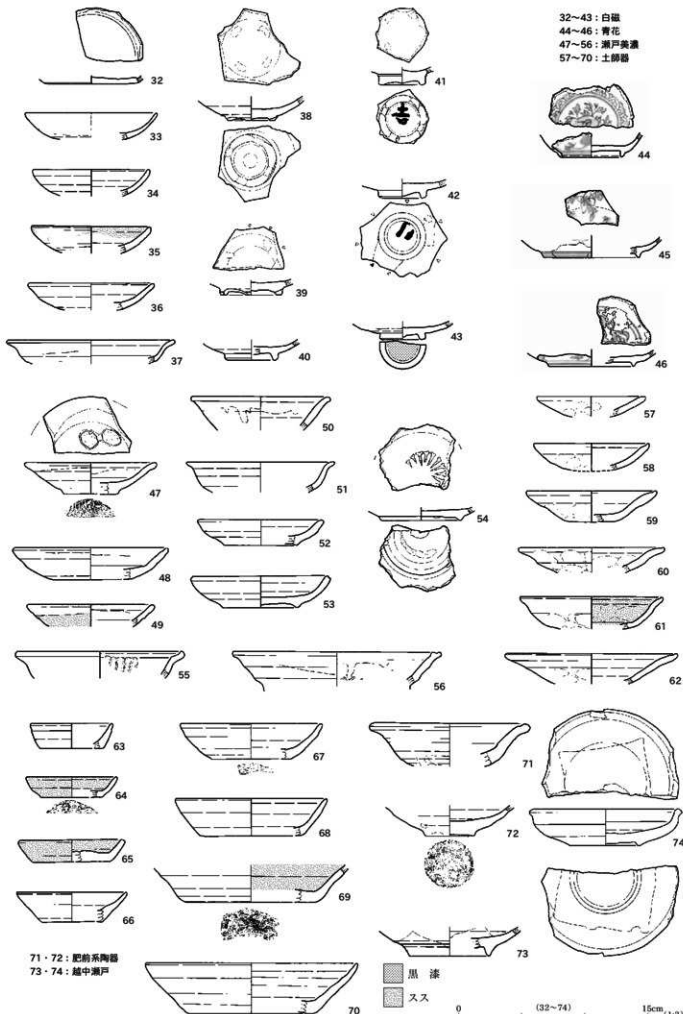
皿類 (27~74)



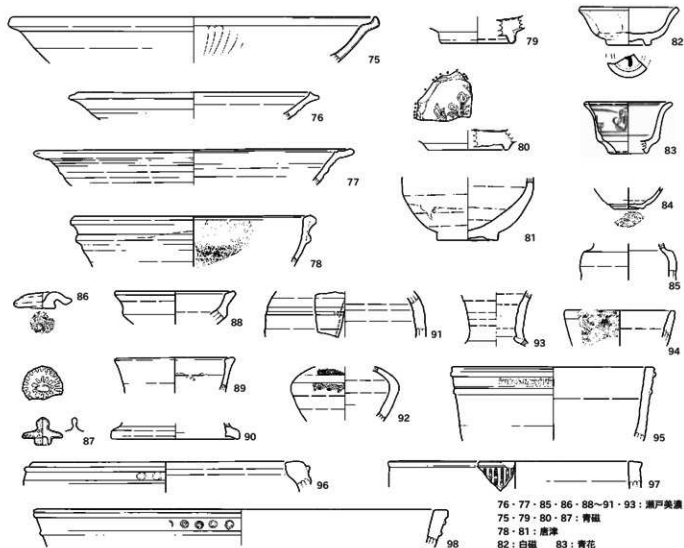
- 27～29：青磁
- 30・31：李朝陶器

0 (1~31) 15cm (1:3)

32~43: 白磁
 44~46: 青花
 47~56: 瀬戸美濃
 57~70: 土師器



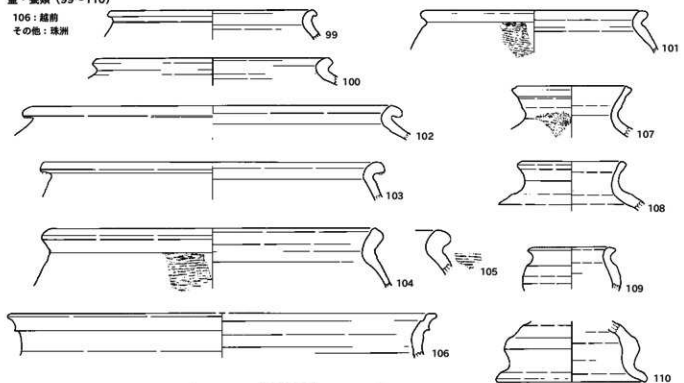
鉢・盤(75~81), 小杯(82・83), 茶入(84・85), 蓋(86・87), 香炉(88・89), 瓶・花瓶(90~93), 瓦器(94~98)



76・77・85・86・88~91・93: 瀬戸美濃
 75・79・80・87: 青磁
 78・81: 唐津
 82: 白磁 83: 青花
 84: 中国 92: 珠洲

蓋・甕類(99~110)

106: 越前
 その他: 珠洲

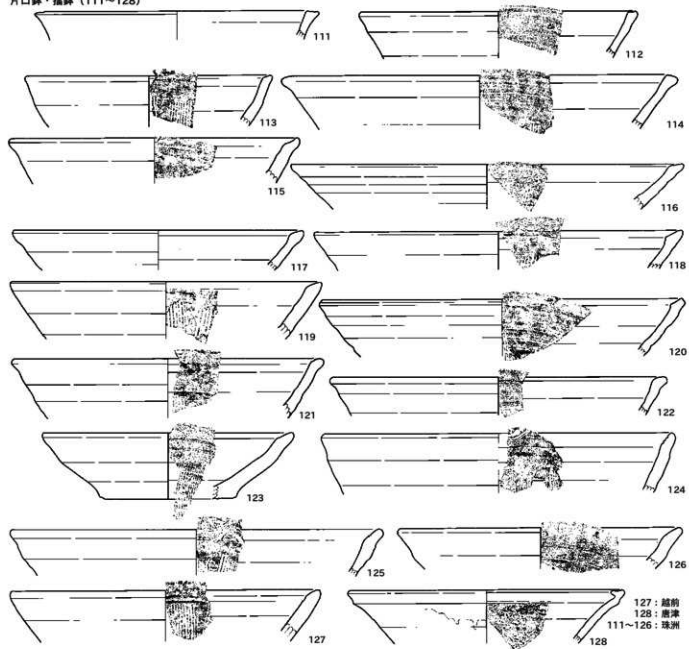


0 (78,82~89,94) 15cm (1:3)

0 (その他) 20cm (1:4)

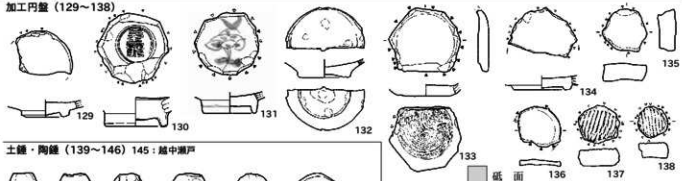
0 (99~101) 30cm (1:6)

片口鉢・楕鉢 (111~128)

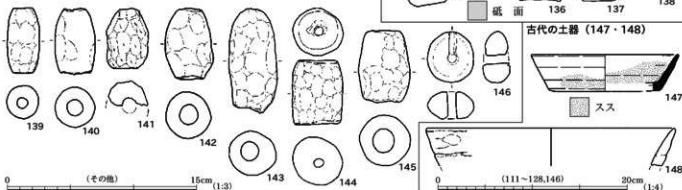


127: 越前
128: 唐津
111~126: 珠洲

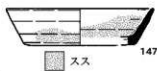
加工円盤 (129~138)



土鉢・陶鉢 (139~146) 145: 越中瀬戸

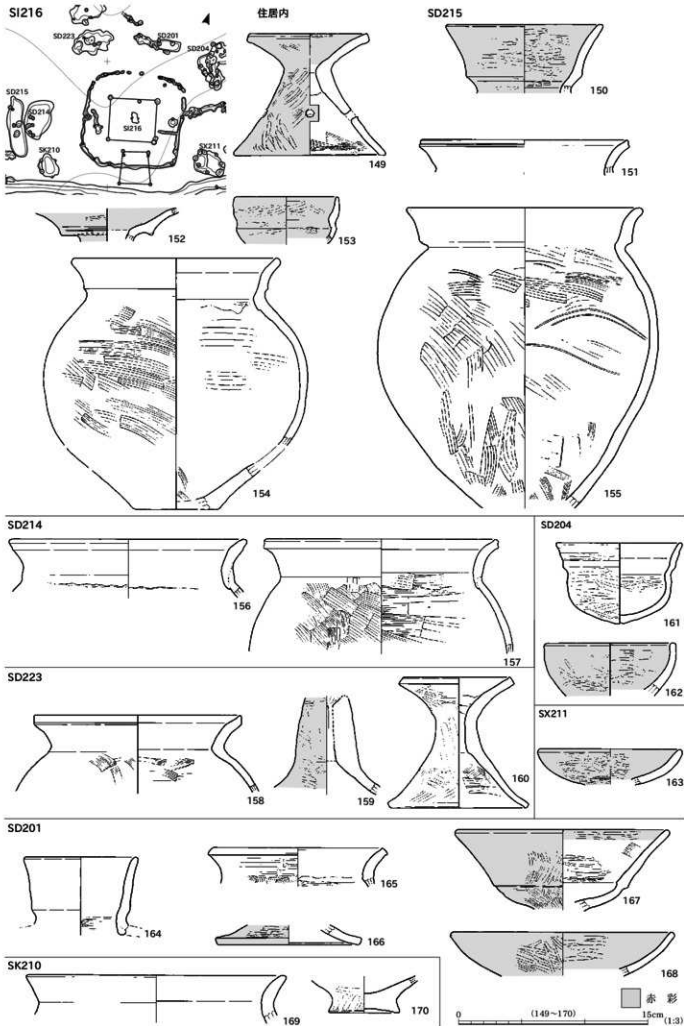


古代の土器 (147・148)



0 (その他) 15cm (1:3)

0 (111~128,146) 20cm (1:4)

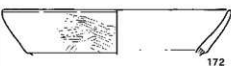




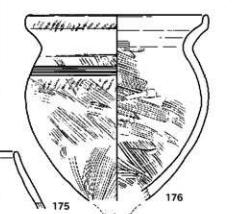
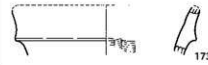
SA429(P404)



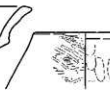
SI402卍



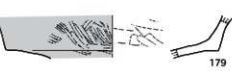
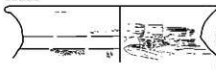
SK229



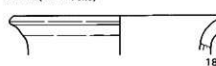
SX284



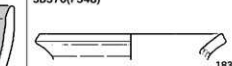
SD233



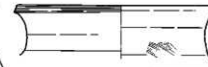
SK208(SI410周溝)



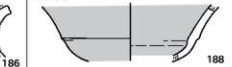
SB370(P348)



SK705



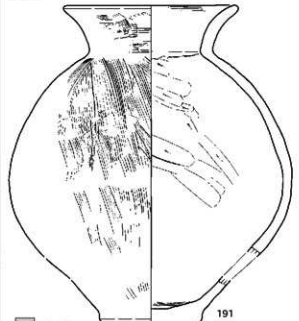
SD375



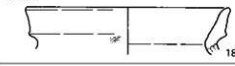
SD522



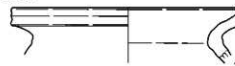
SD522



SD522

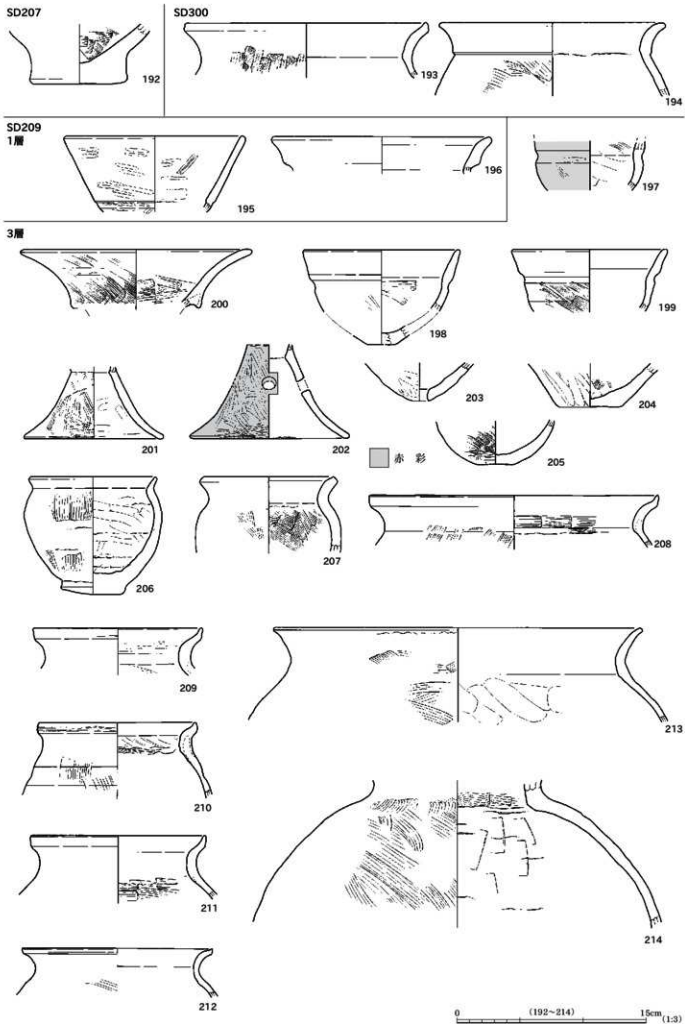


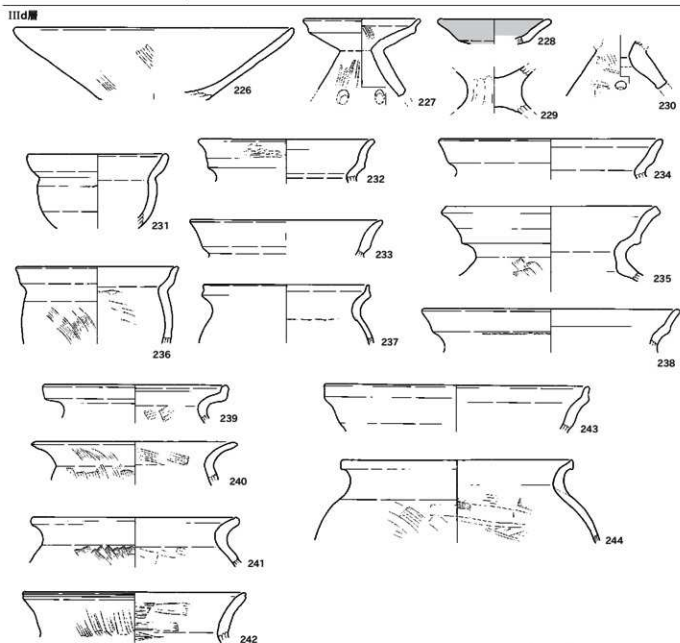
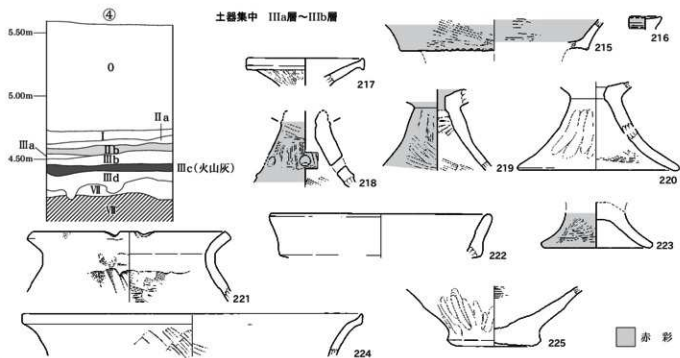
SX554



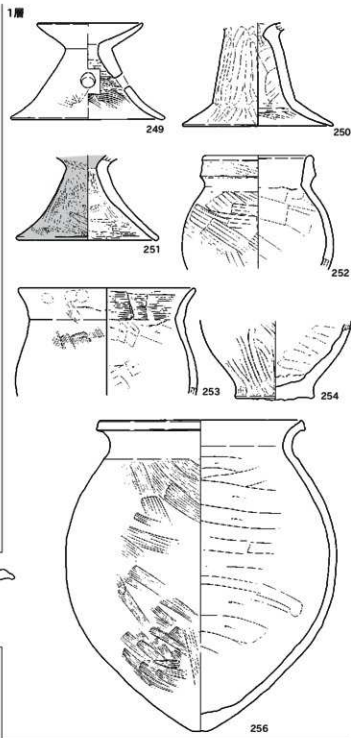
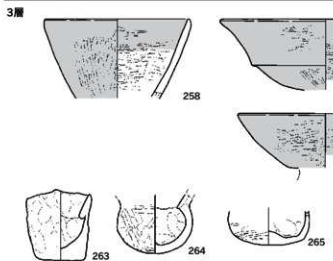
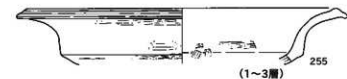
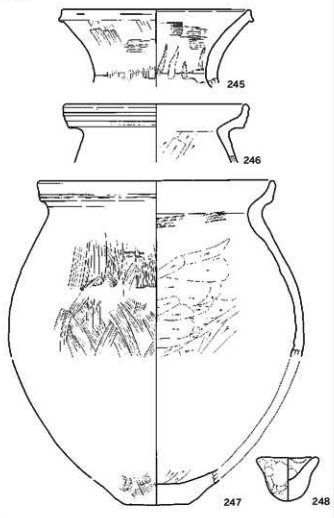
赤彩

0 (171~191) 15cm (1:3)





SD520
III層

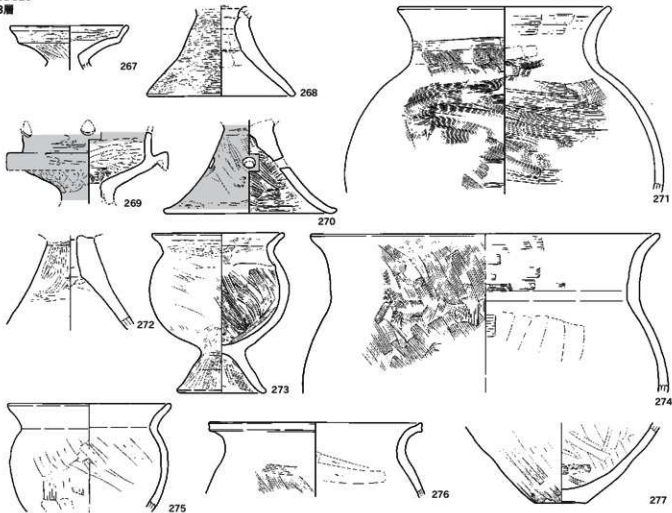


■ 赤彩

0 (245~266) 15cm (1:3)

SD520

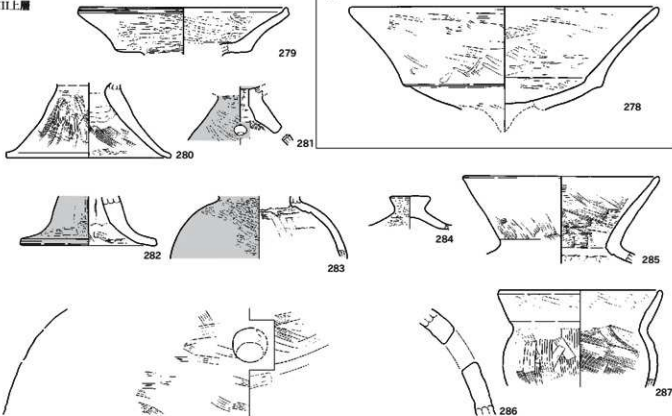
3層



SR730

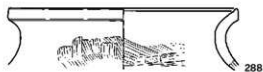
III上層

4層

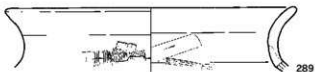


赤 彩

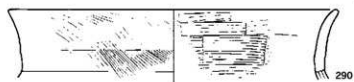
0 (267~287) 15cm (1:3)



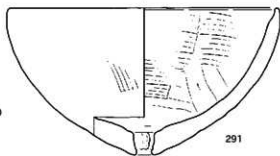
288



289



290



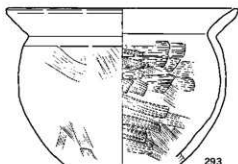
291

Ⅲ下層



292

Ⅳ上層



293

SR202
5層



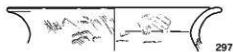
294



295



296

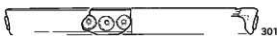


297

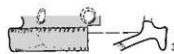
遺物包含層
Ⅲ層



298



301



302



303



299



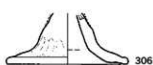
304



305



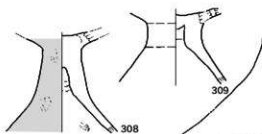
300



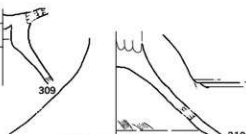
306



307



308



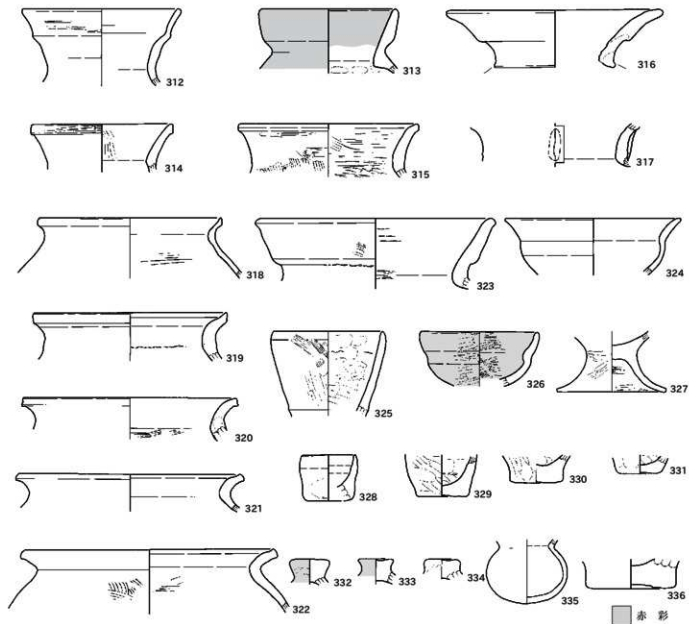
310



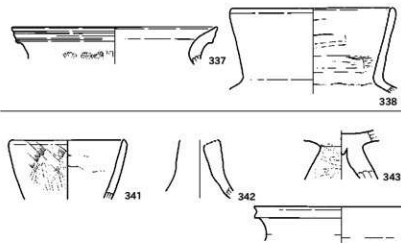
311

赤彩

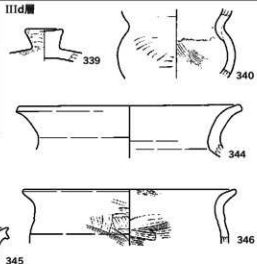
0 (288-311) 15cm (1:3)



遺物包含層IIIc層



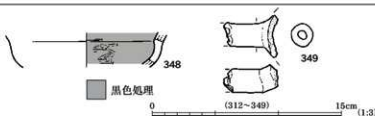
IIIId層

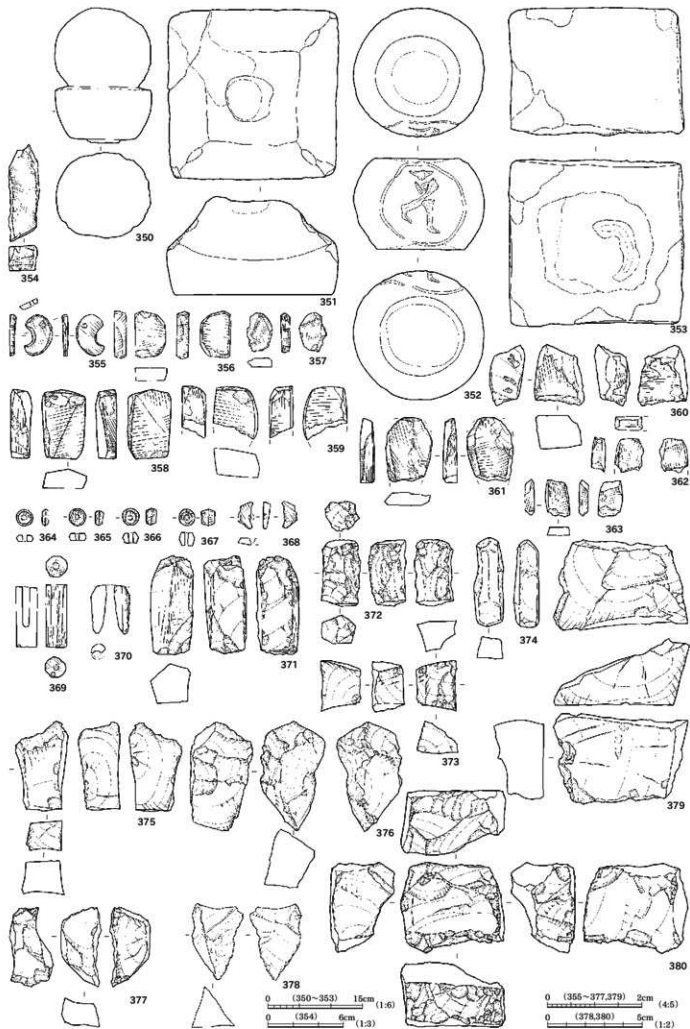


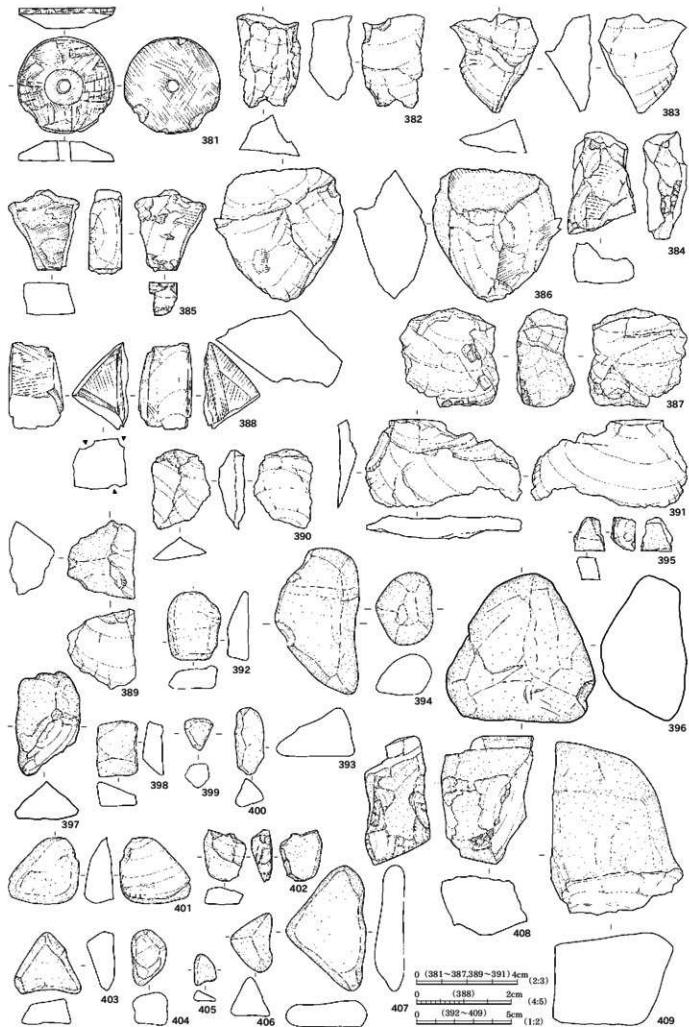
IV層

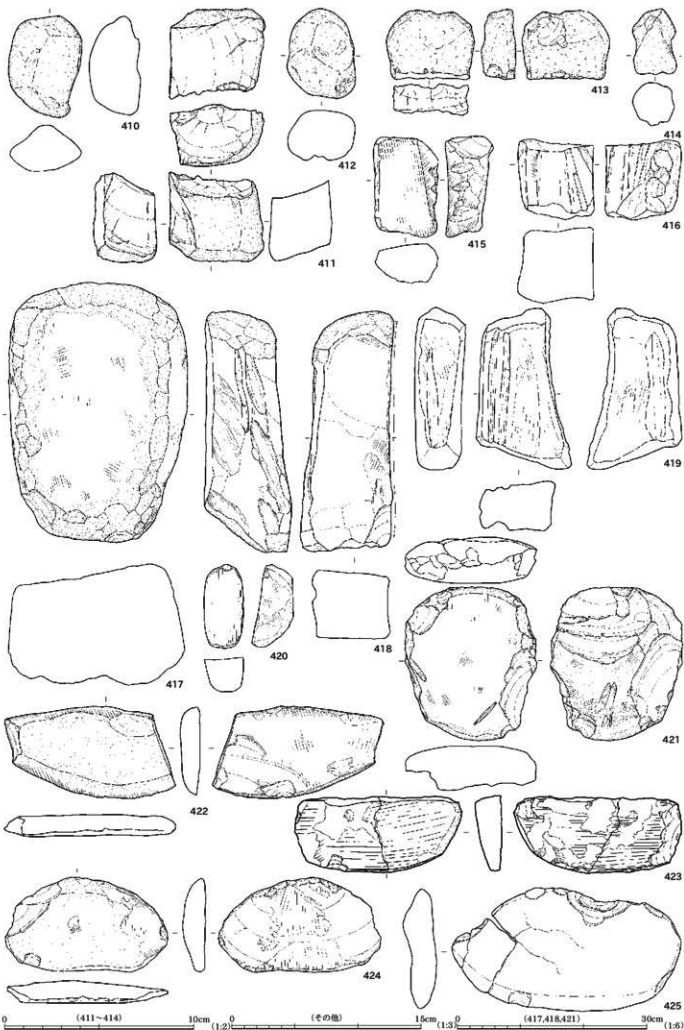


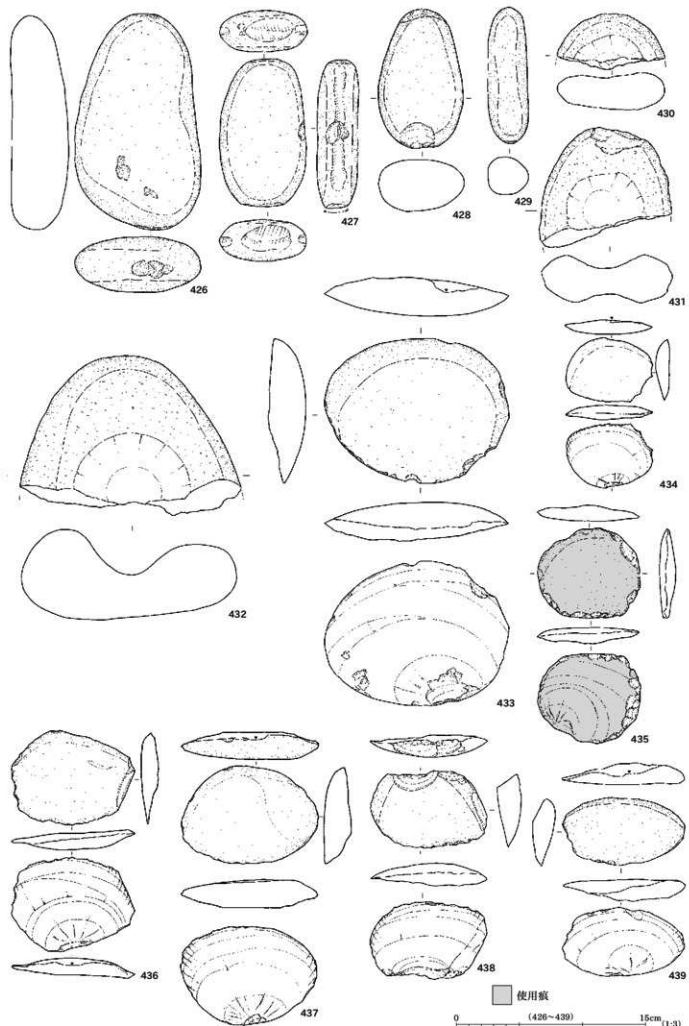
IIb層

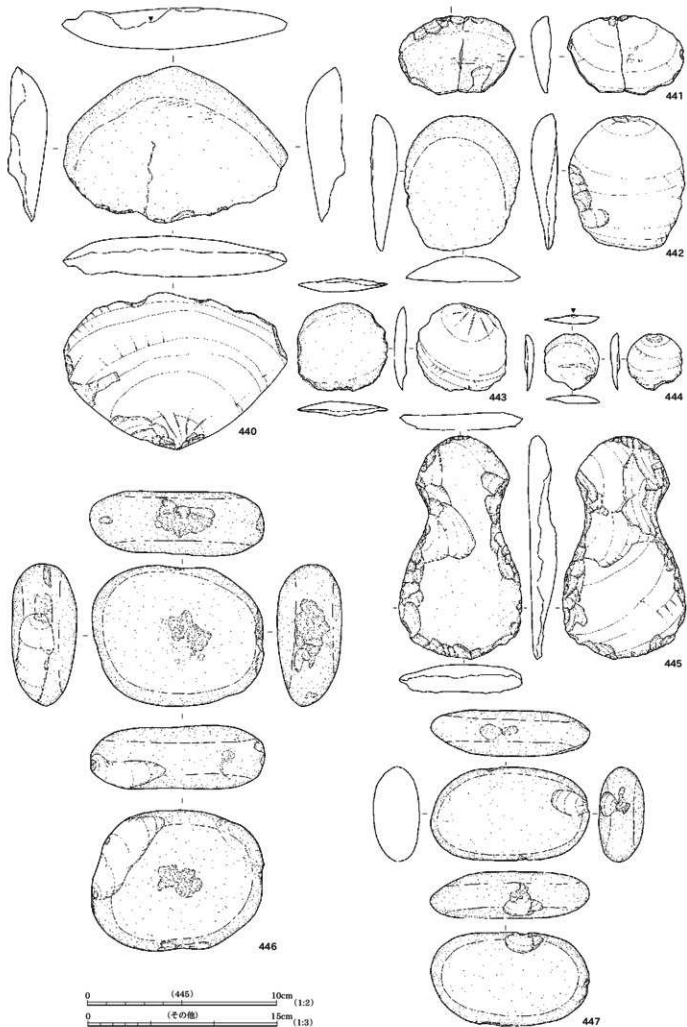


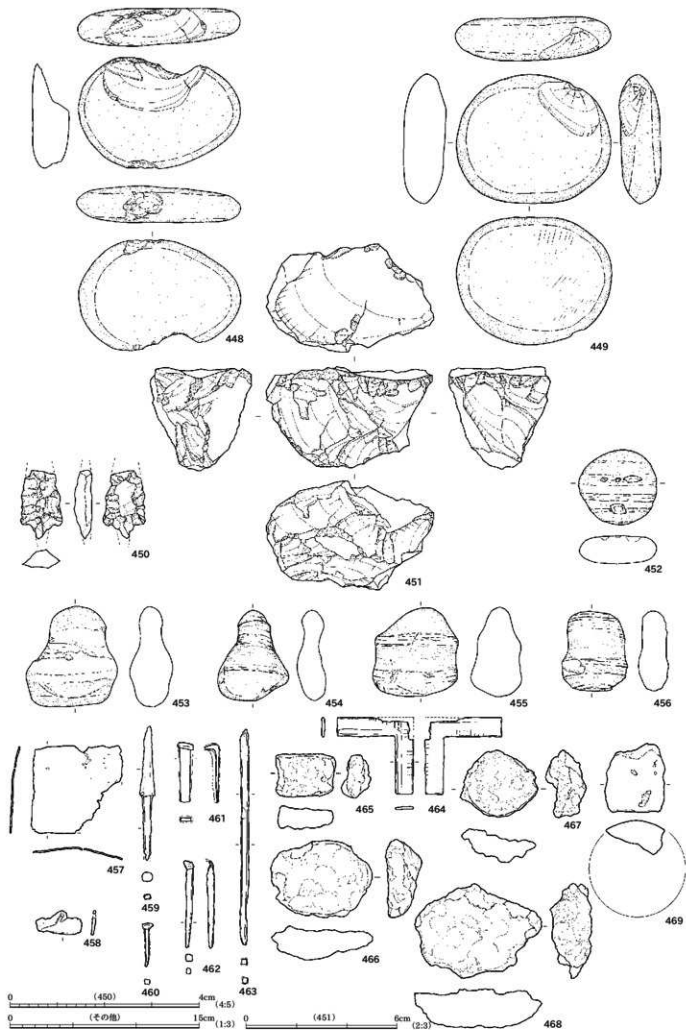




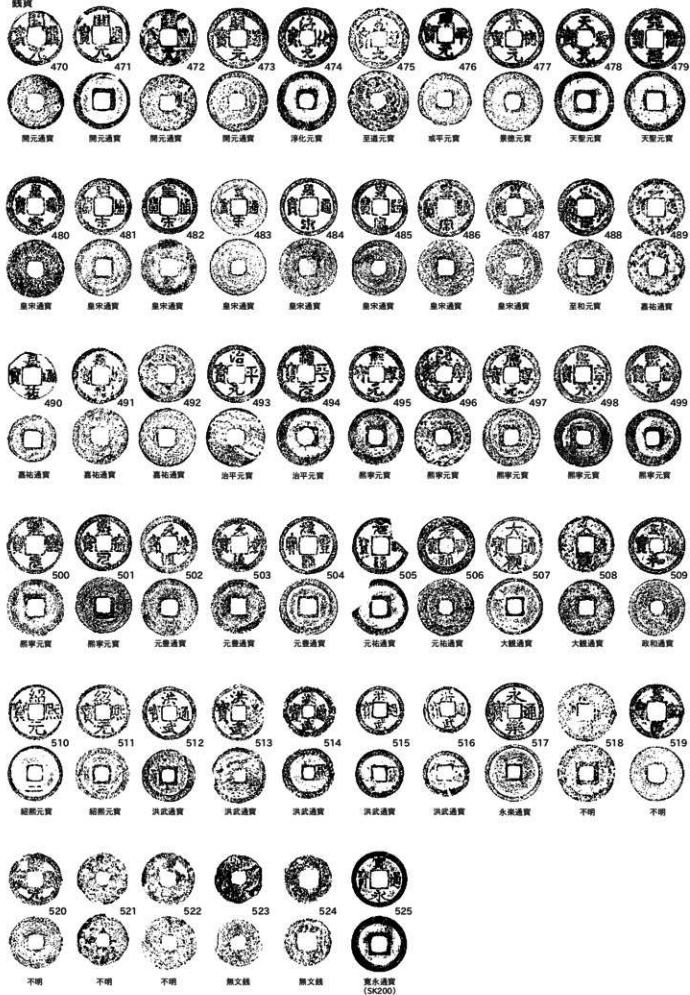


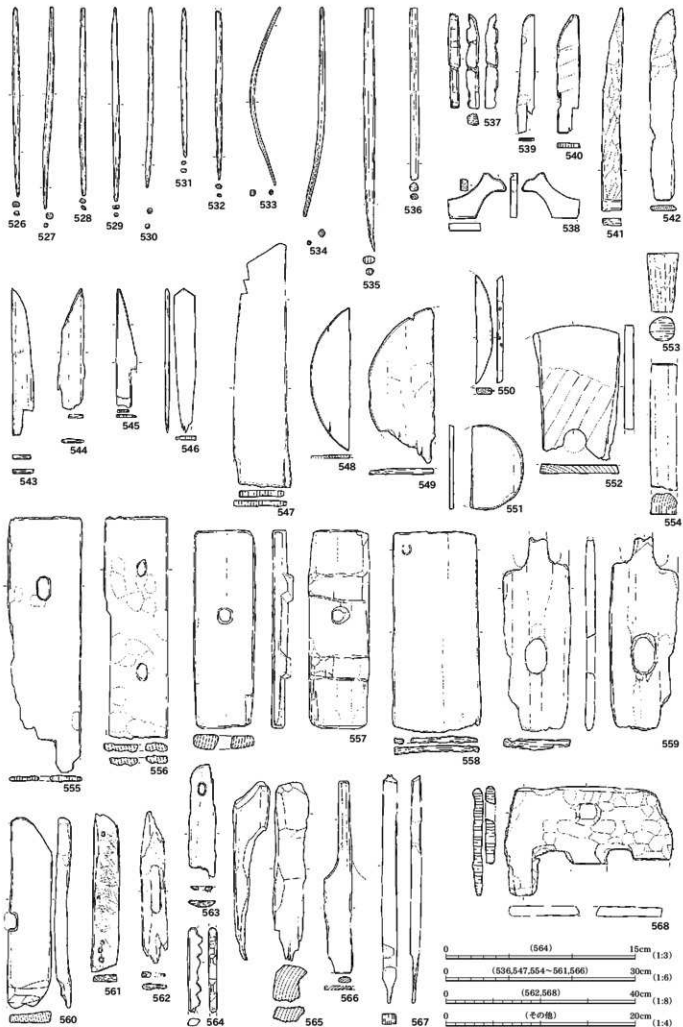


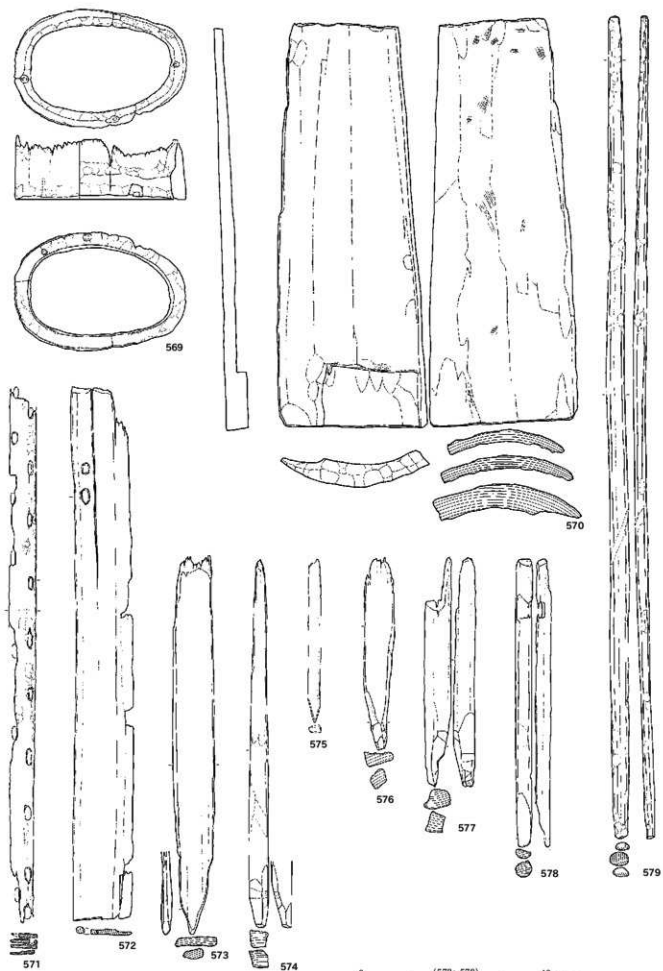




錢貨





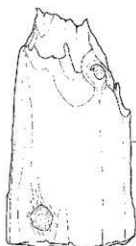


0 (573~578) 40cm (1:8)
 0 (569,570,572,579) 50cm (1:10)
 0 (571) 100cm (1:20)

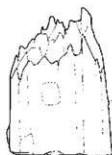
SI216



580
(P247)



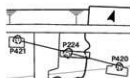
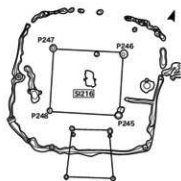
581
(P246)



582
(P245)



583
(P248)



SA199



584
(P420)



585
(SX224)



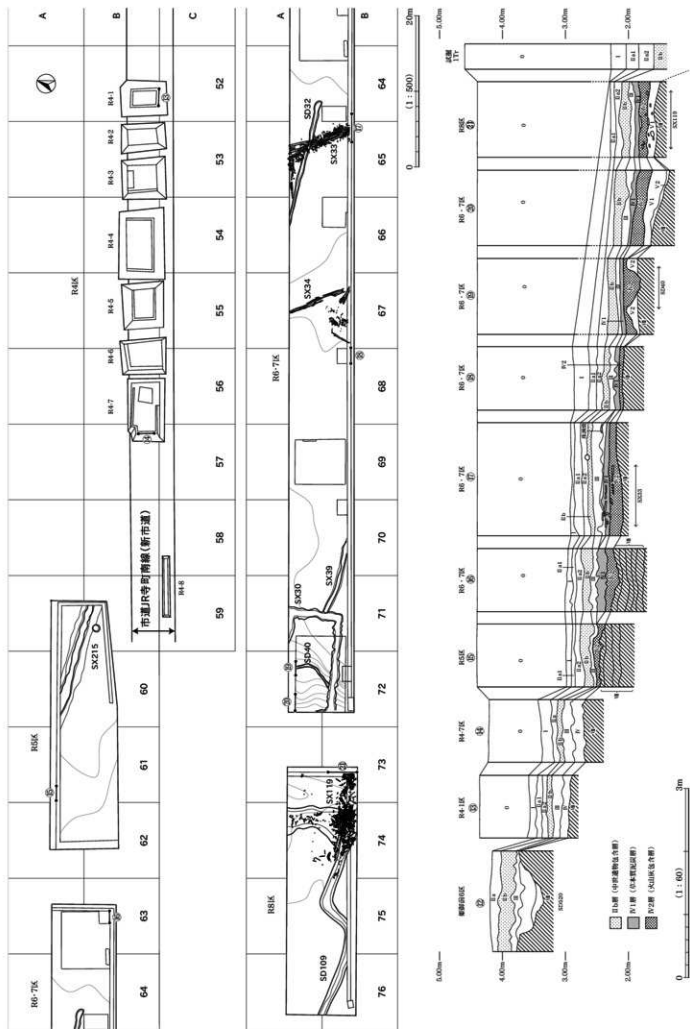
586
(P421)

SB341



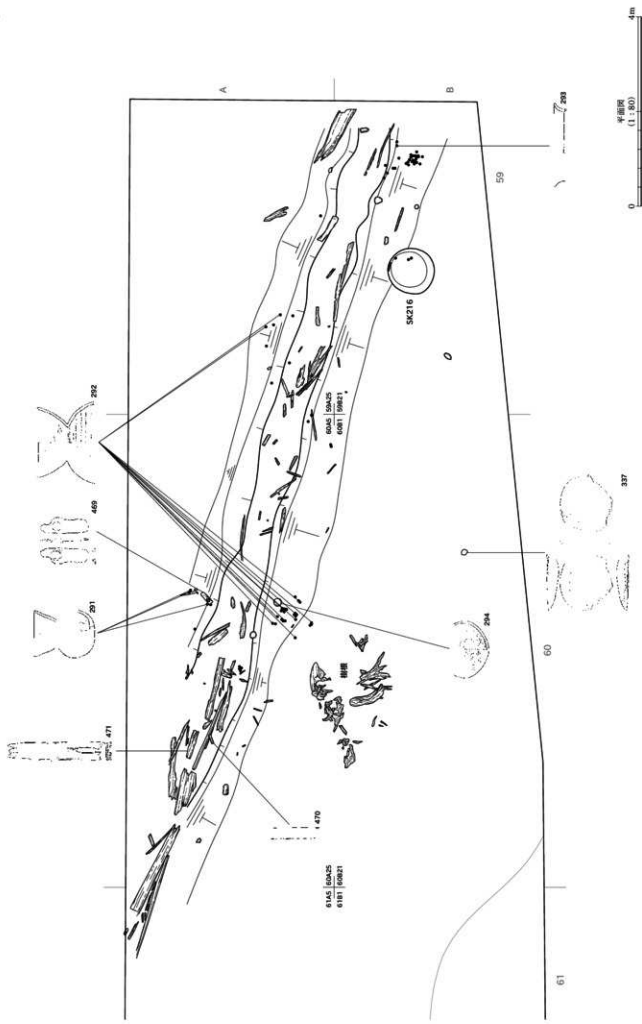
587
(P340)

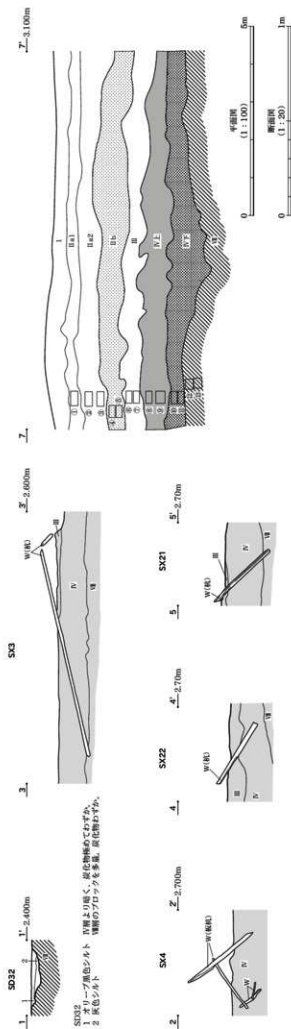
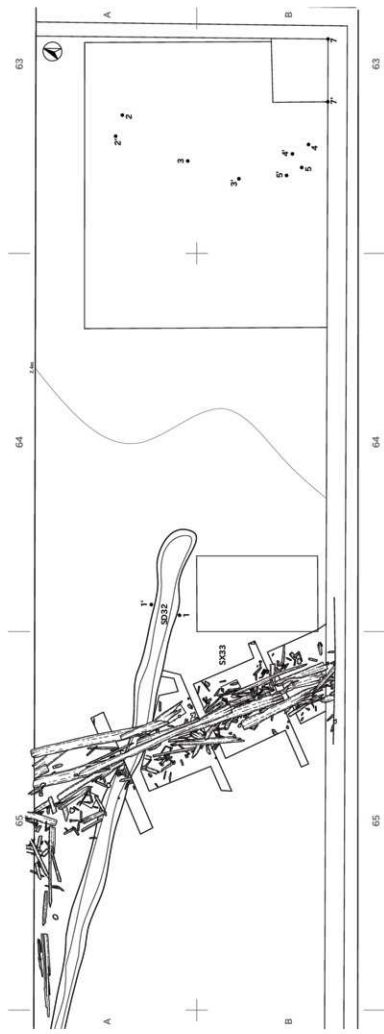
0 (580~587) 40cm (1:8)



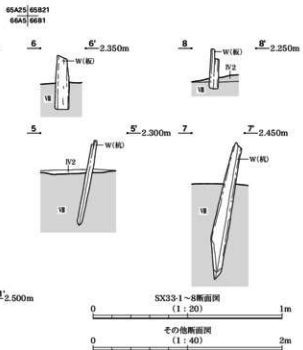
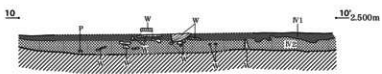
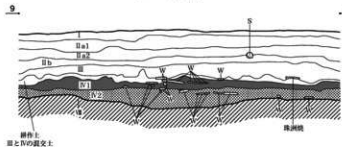
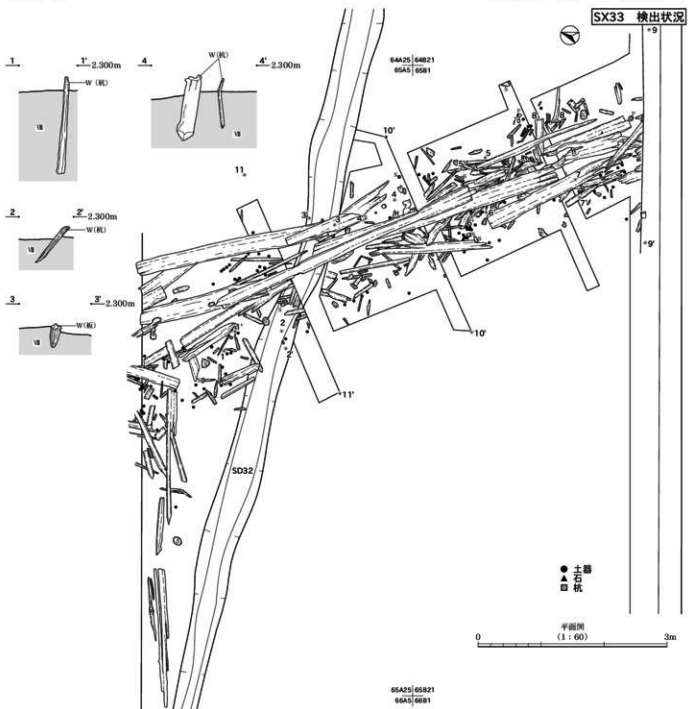


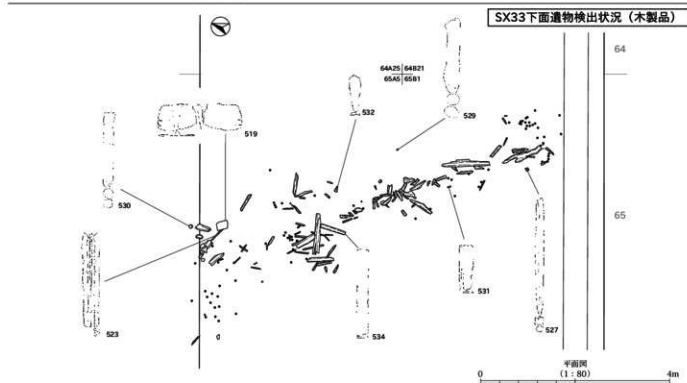
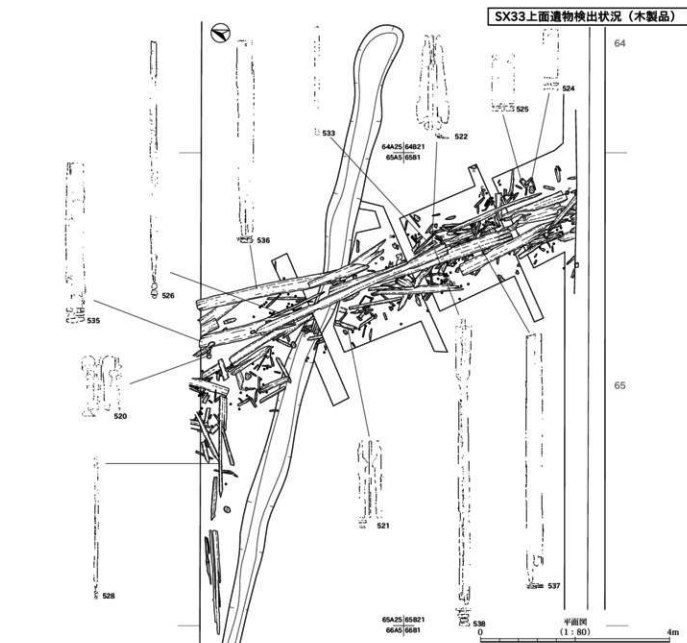
SX215遺物出土状況



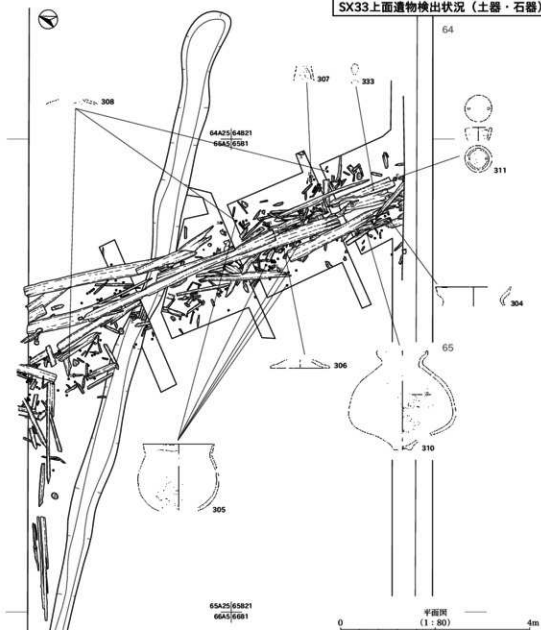


SX32
IV層より厚く、灰化層様のおよび、
1 オリーブ褐色シルト
2 灰色シルト
III層のプロットを多数、灰化層が若干、

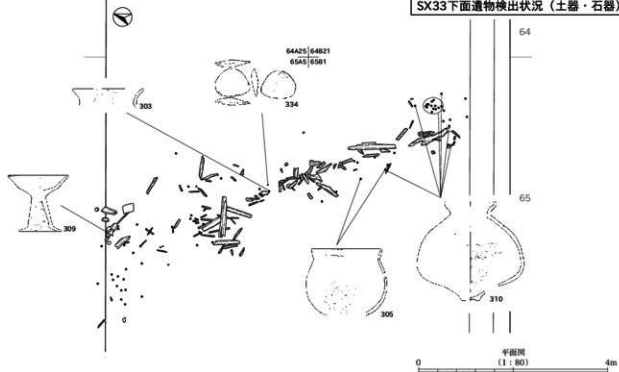


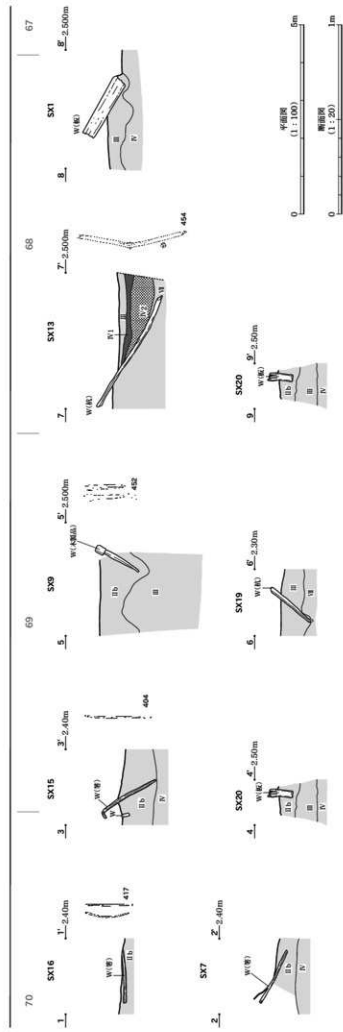
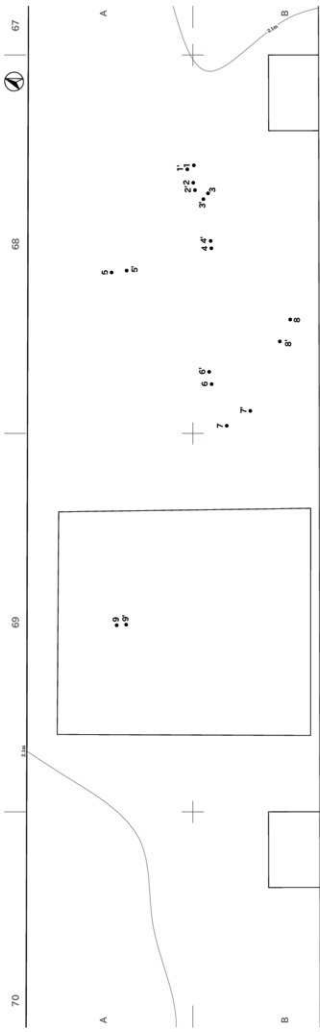


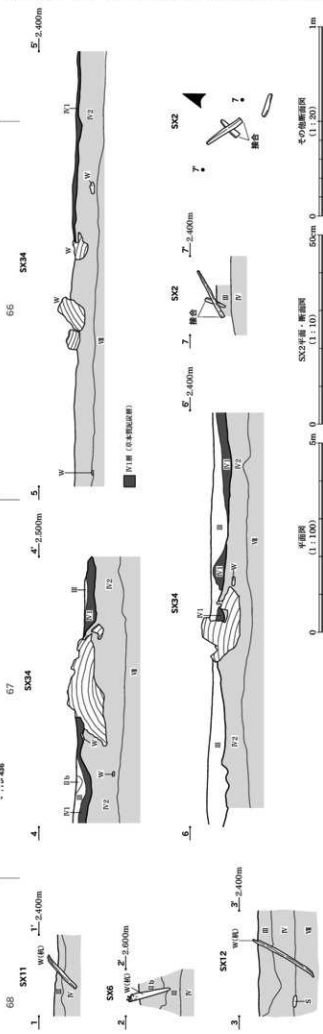
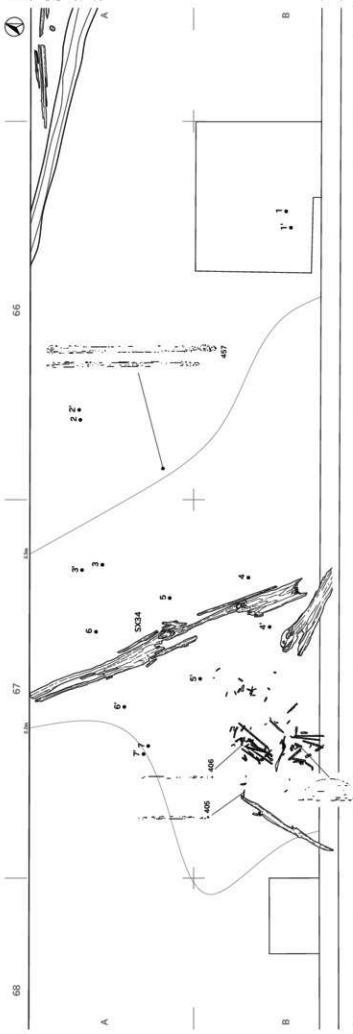
SX33上面遺物検出状況(土器・石器)

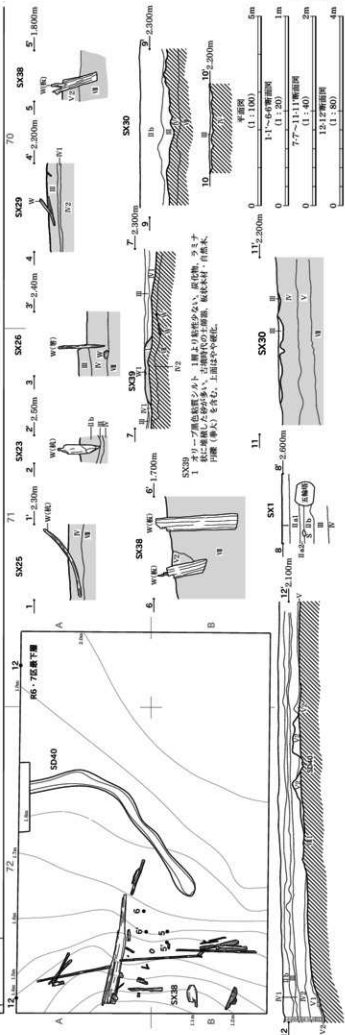
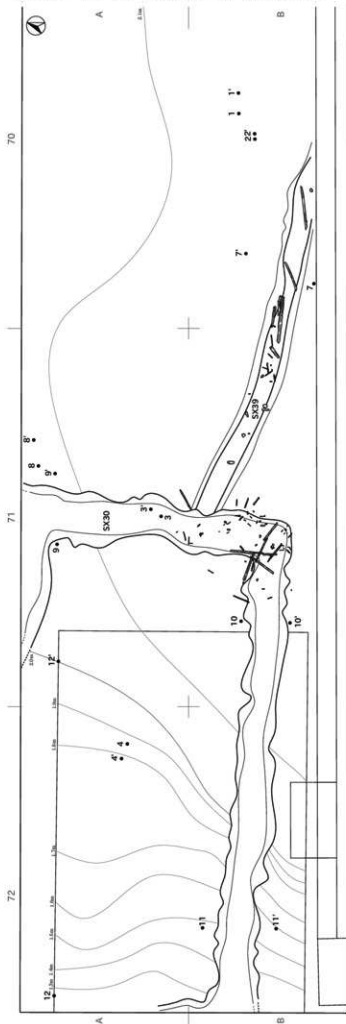


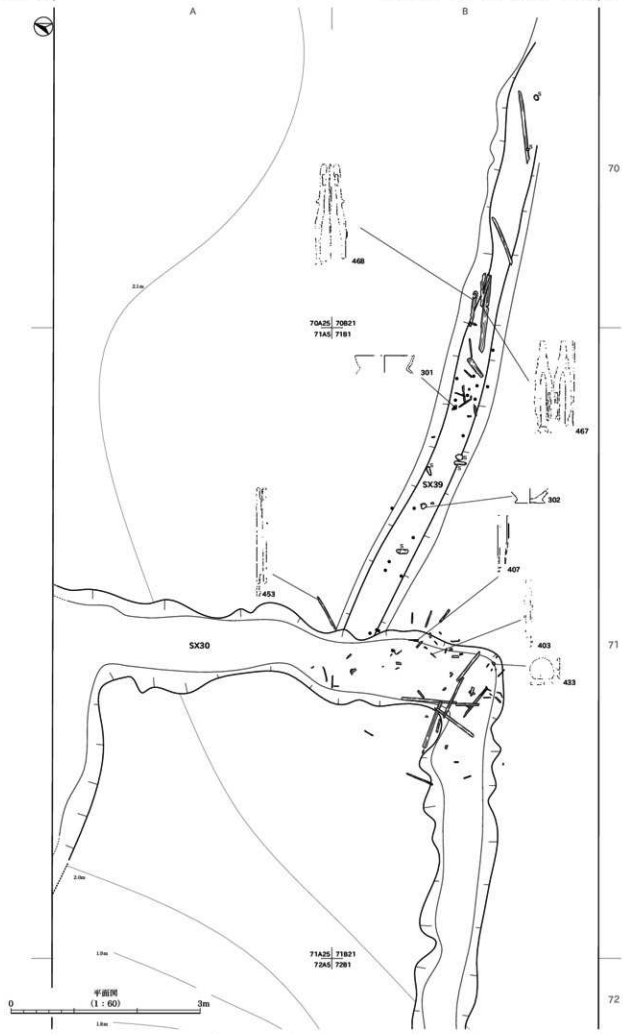
SX33下面遺物検出状況(土器・石器)



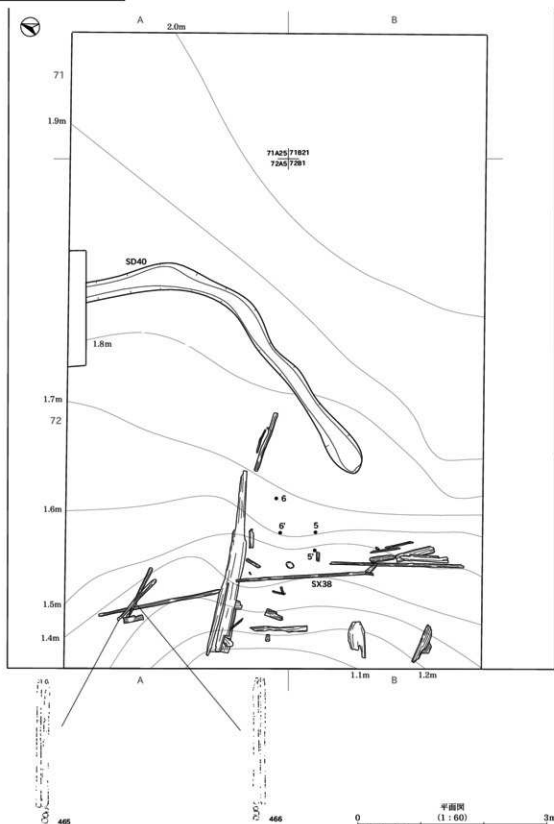








R6・7区 SX38 (最下層)



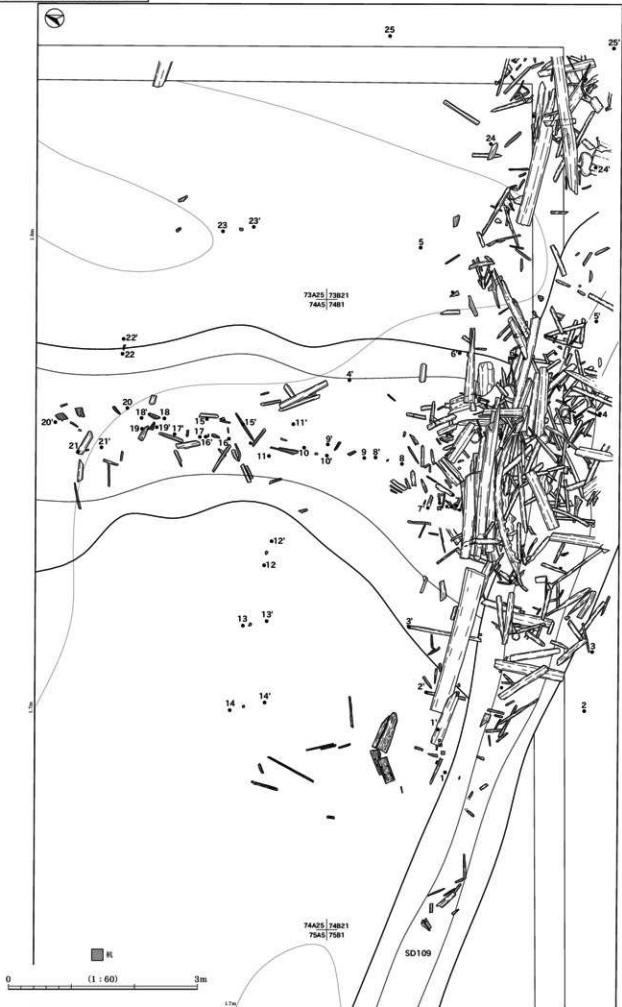
465

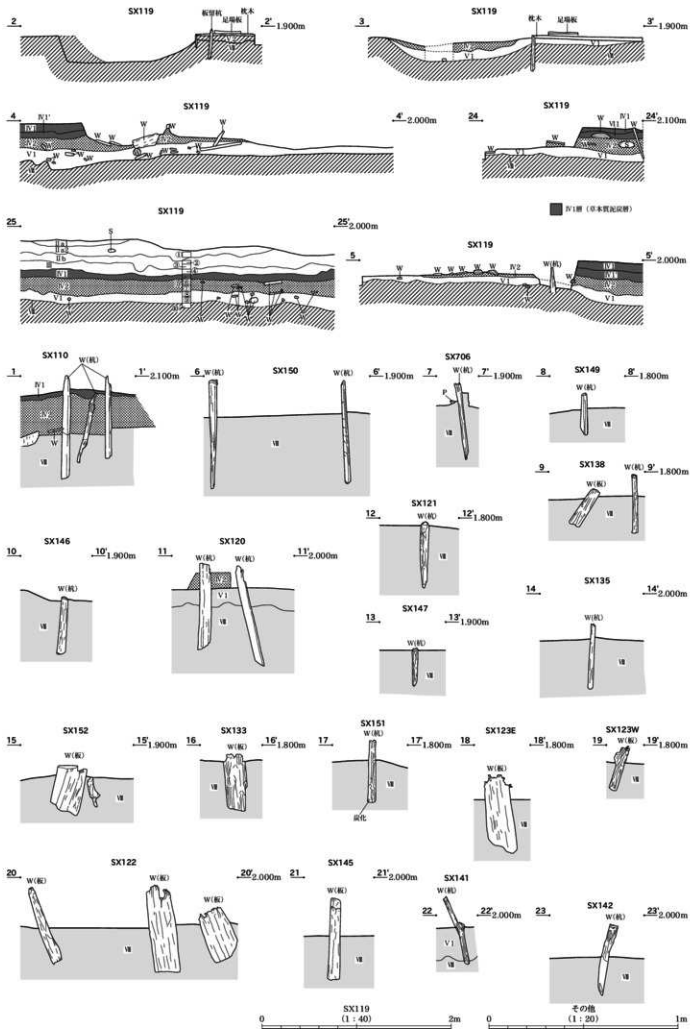
466

平面図 (1:60) 3m

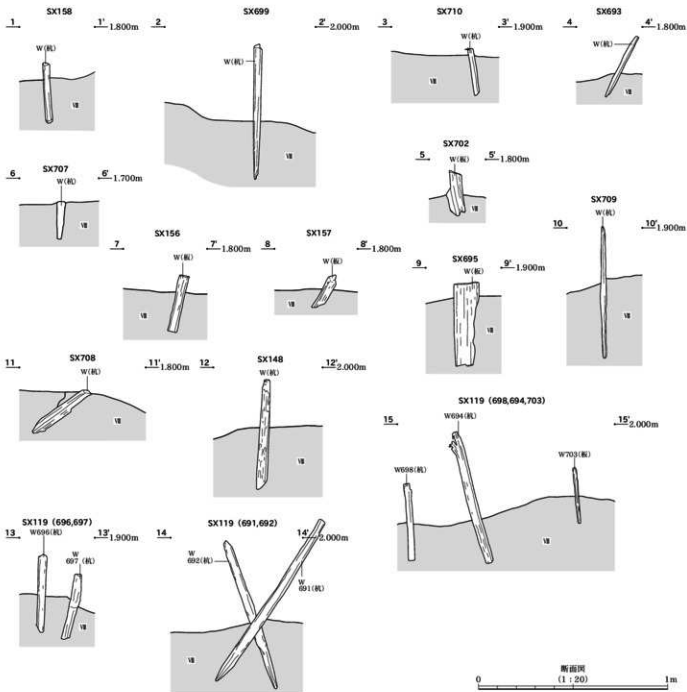
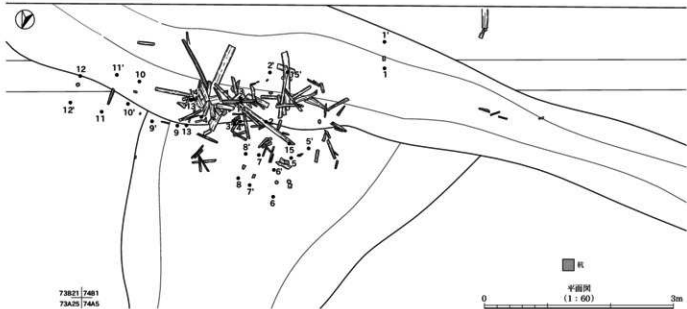


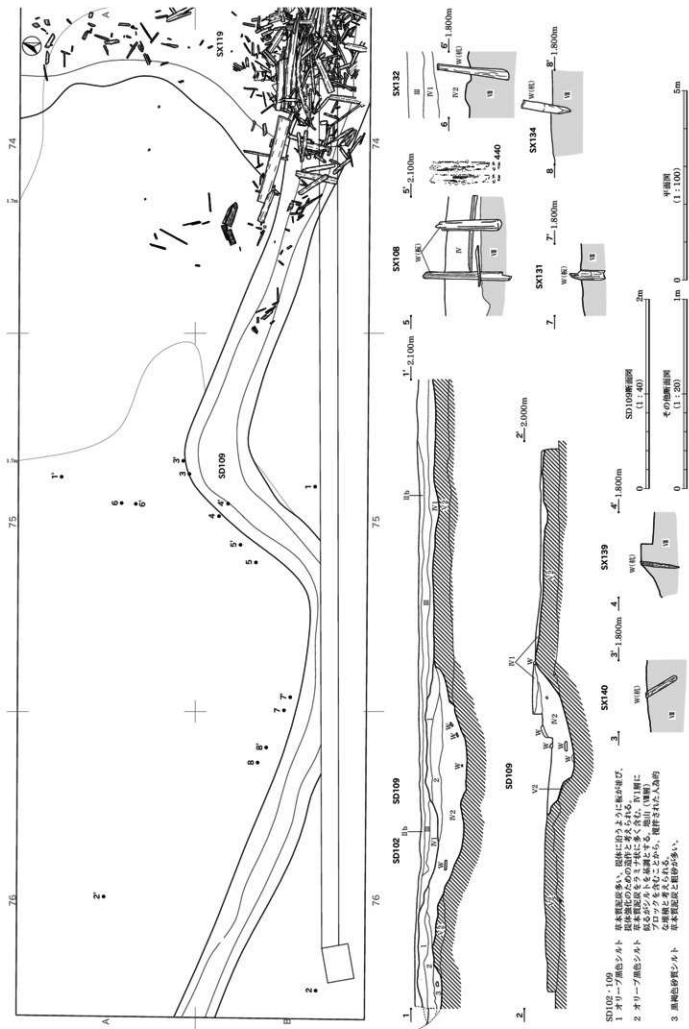
SX119 検出状況 (上面)



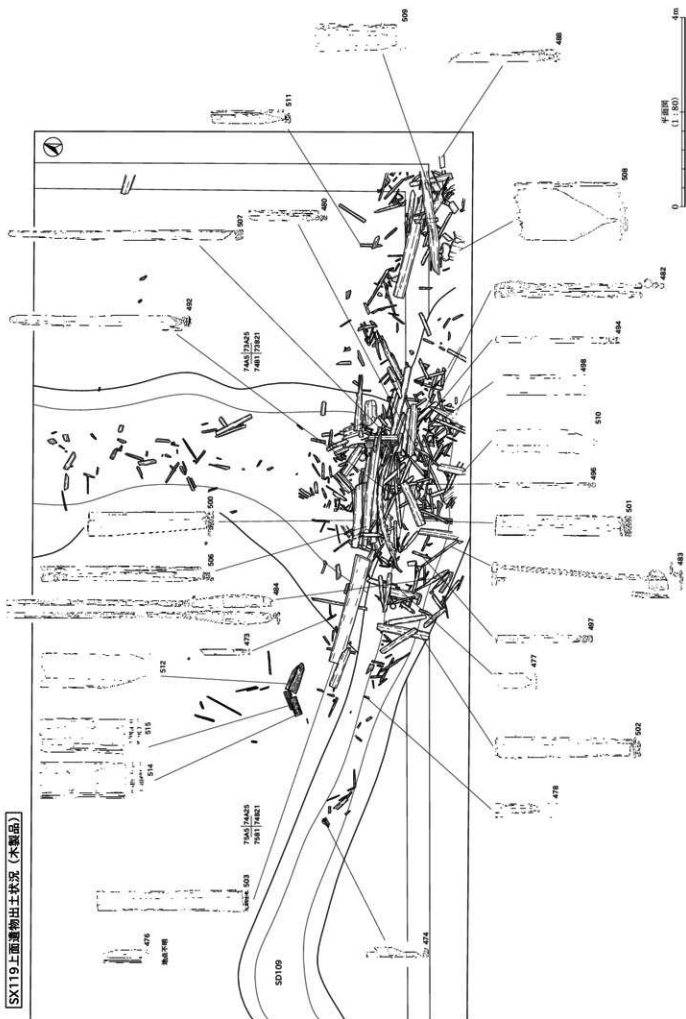


SX119 検出状況 (下面)



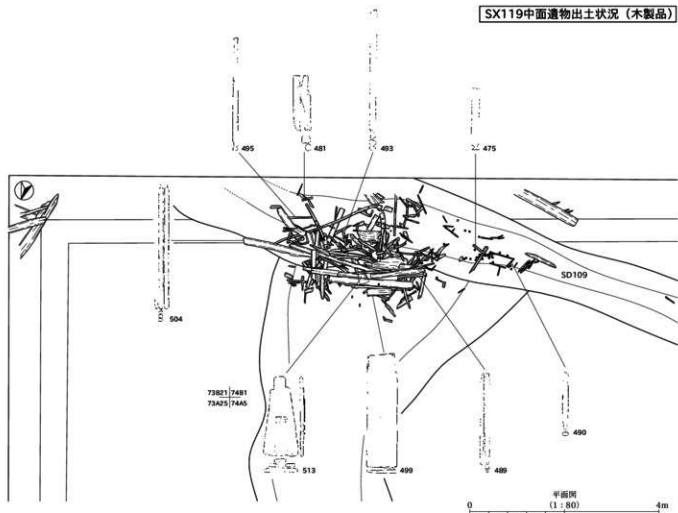


SD102・109
 1 オリーブ黒色シルト 断面に若干の黒が混じり、
 ほぼ黒色の土の層中に含まれ、1層に
 2 オリーブ黒色シルト 断面がシルトを混濁する。越山(Ⅴ層)に
 フロウダを含むことから、埋作された人工的
 な層であると見られる。
 3 黒褐色砂質シルト 断面に混濁して混砂が多い。

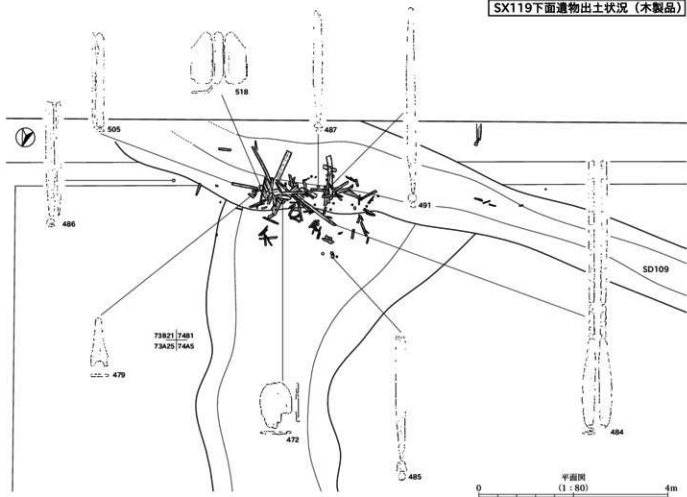


SX119 上面遺物出土狀況 (木製品)

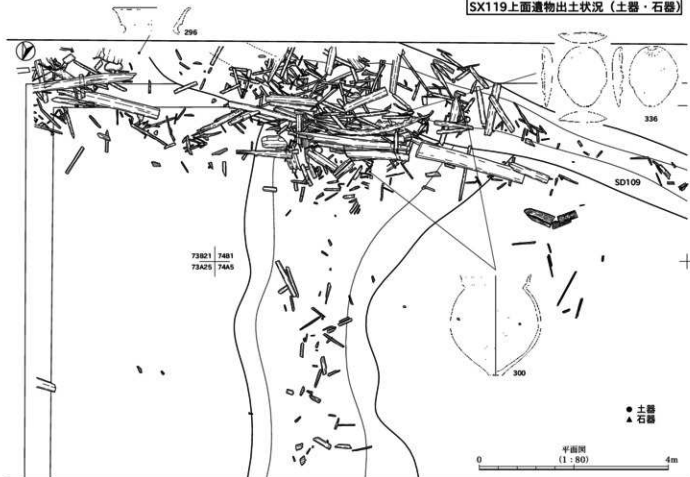
SX119中面遺物出土状況 (木製品)



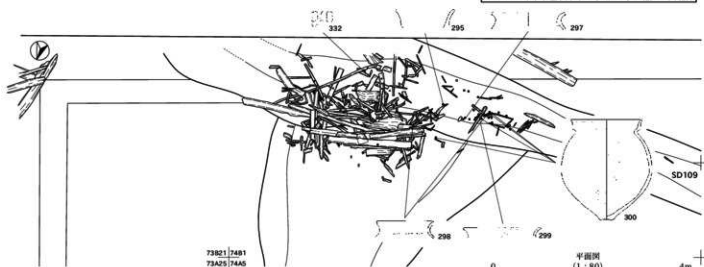
SX119下面遺物出土状況 (木製品)



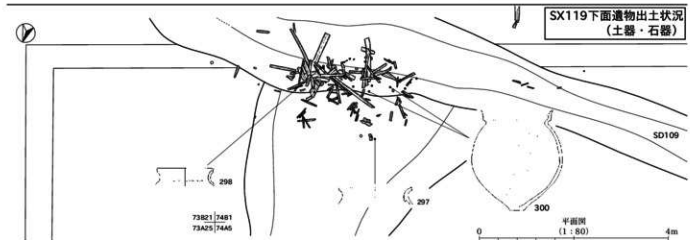
SX119上面遺物出土狀況 (土器・石器)



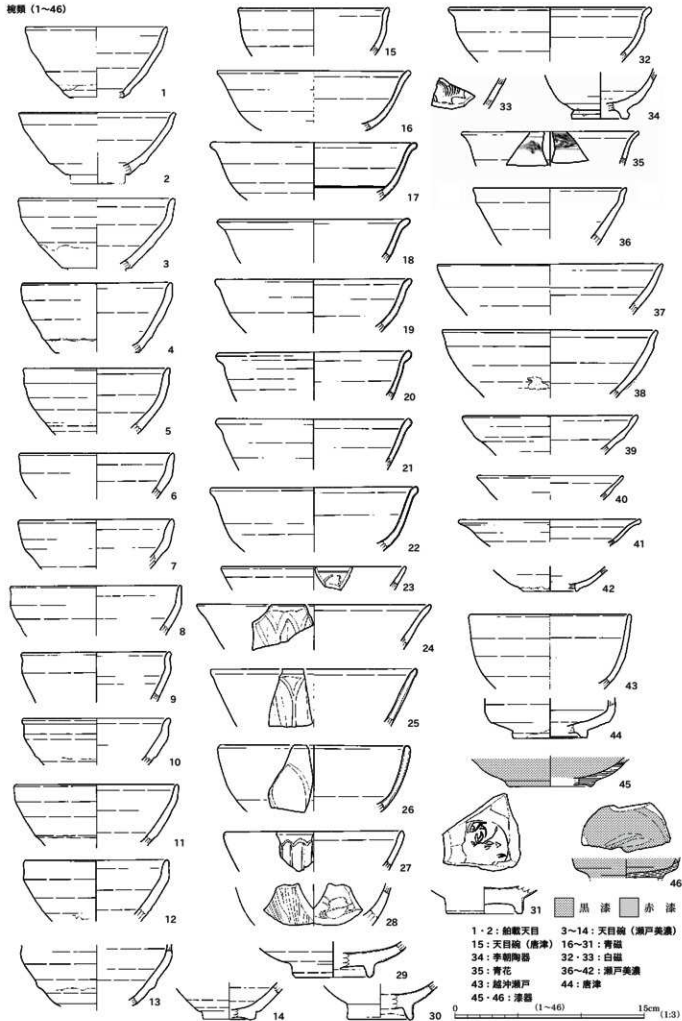
SX119中面遺物出土狀況 (土器・石器)



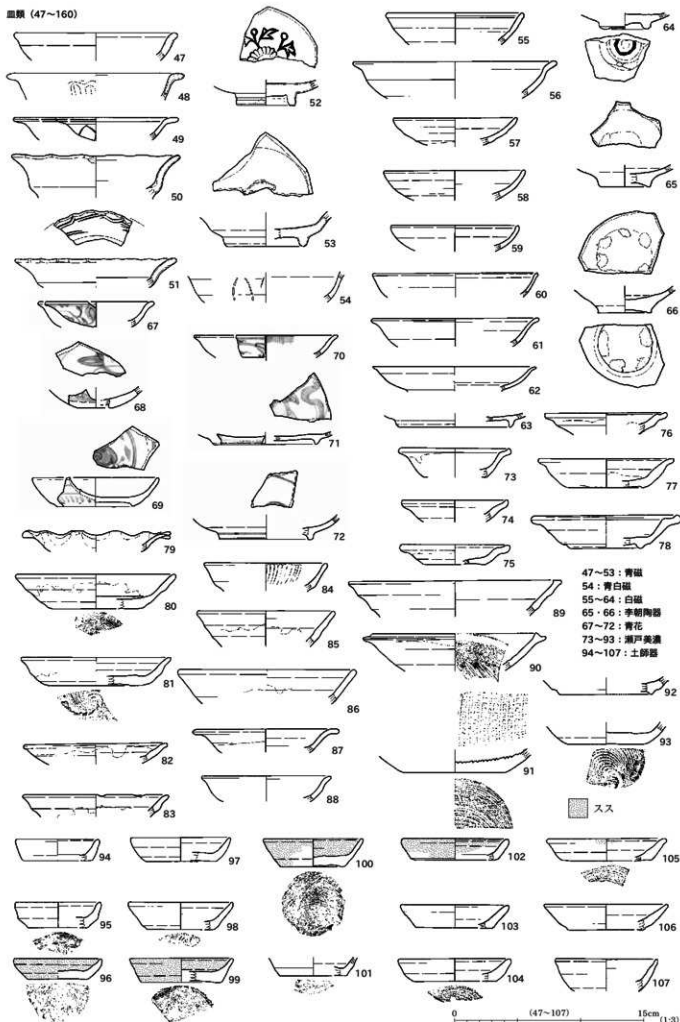
SX119下面遺物出土狀況 (土器・石器)



視類 (1~46)



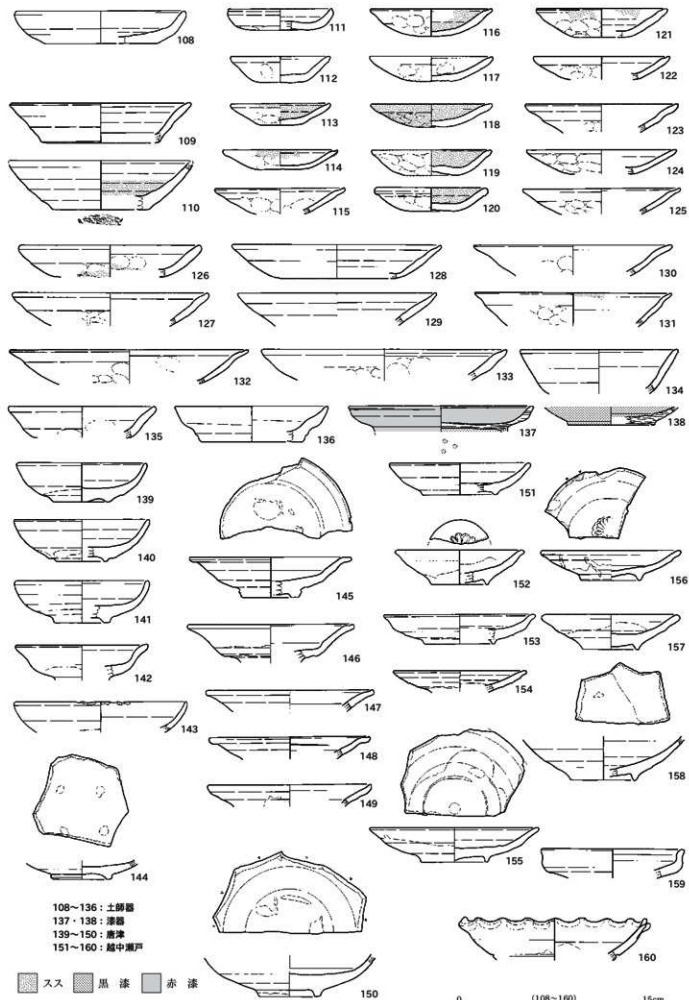
皿類 (47~160)



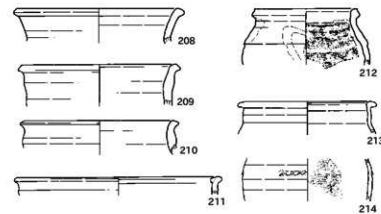
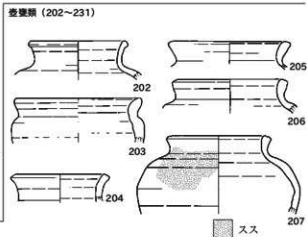
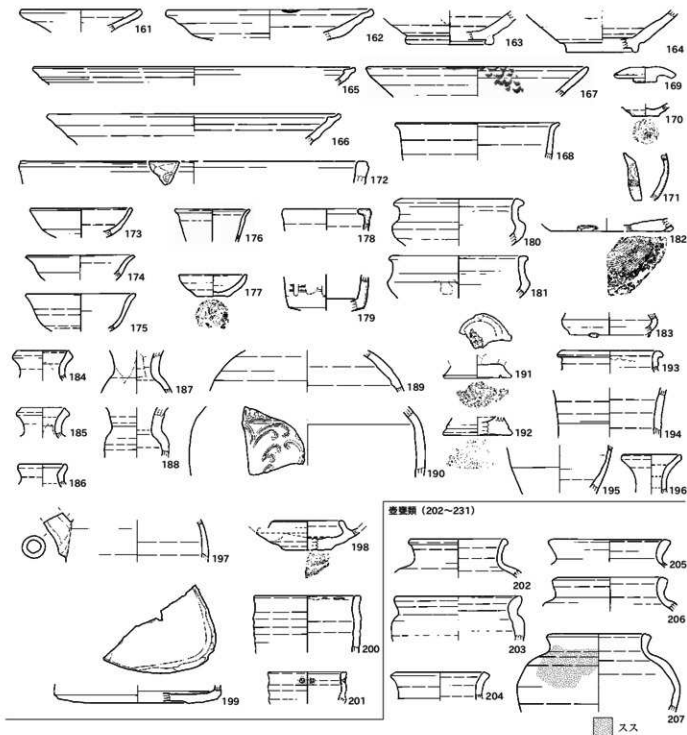
47~53: 青磁
 54: 青白磁
 55~64: 白磁
 65・66: 李朝陶器
 67~72: 青花
 73~93: 瀬戸美濃
 94~107: 土師器

■ スス

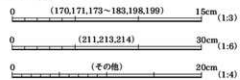
0 (47~107) 15cm (1:3)

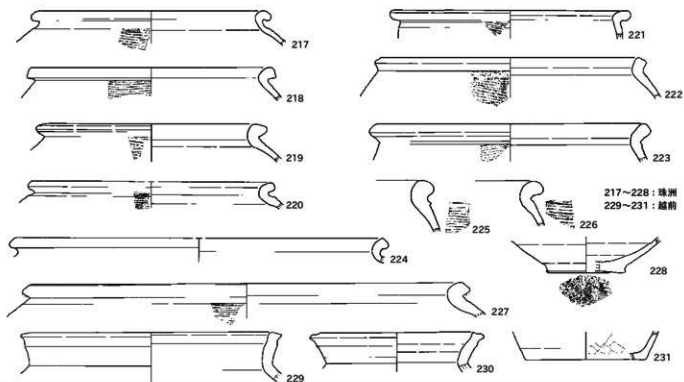


鉢類 (161~168)、蓋 (169)、茶入 (170)、合子 (171)、瓦器 (172)、杯 (173~177)、香炉 (178~183)、瓶子 (184~196)、
水注 (197)、灯明受皿 (198)、志野盤 (199)、蓋鉢型容器 (200・201)

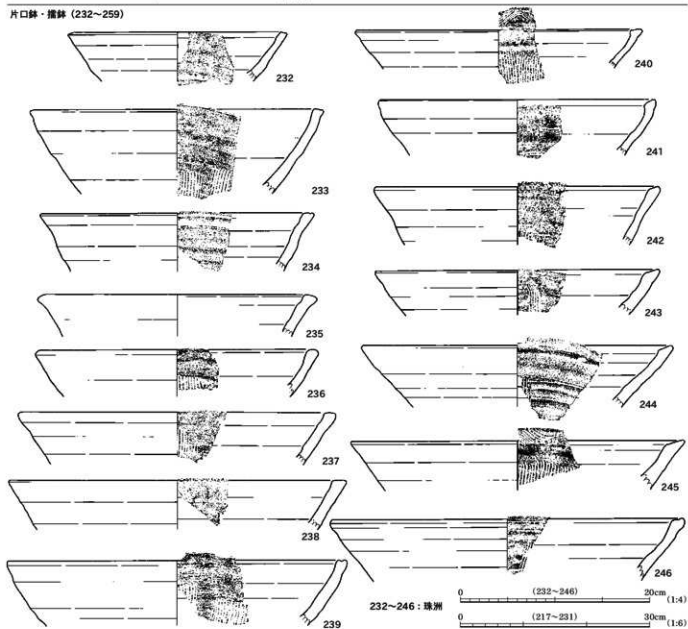


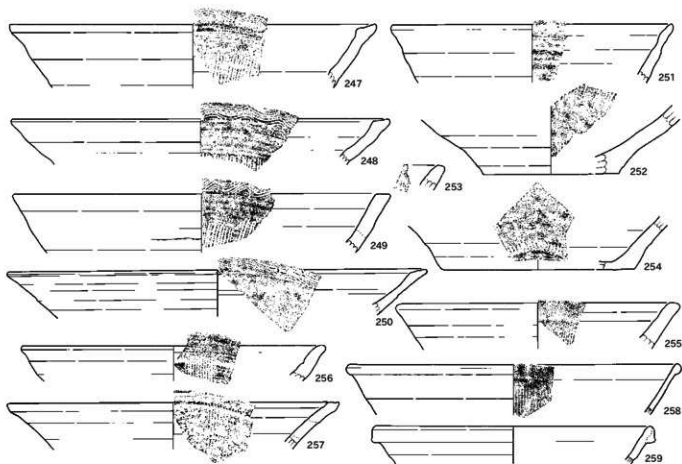
161~166・169・170・177・180~194・197・199：瀬戸美濃
167・168・196・198・211~214：唐津
171：青白磁
173~175・195：白磁
176：青花
178・179：青磁
200・201・215・216：越中瀬戸
202~210：珠洲



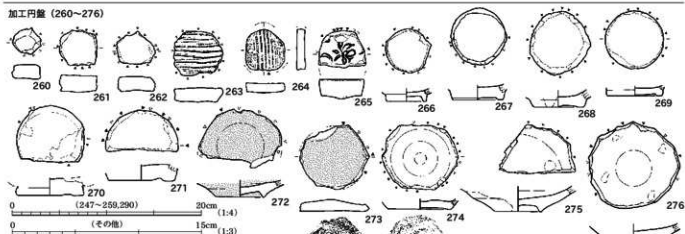


片口鉢・楕鉢 (232~259)

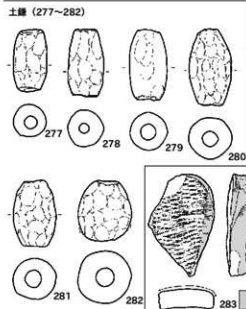




加工円盤 (260~276)



土鏝 (277~282)

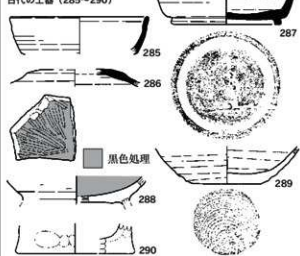


転用研削具 (283)

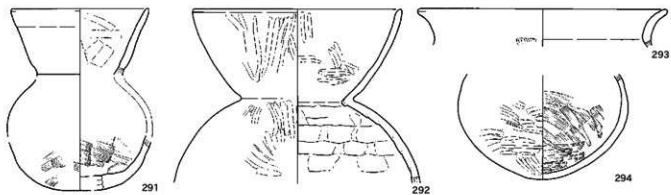
転用硯 (284)



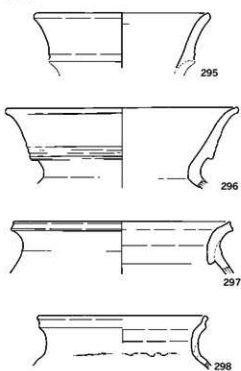
古代の土器 (285~290)



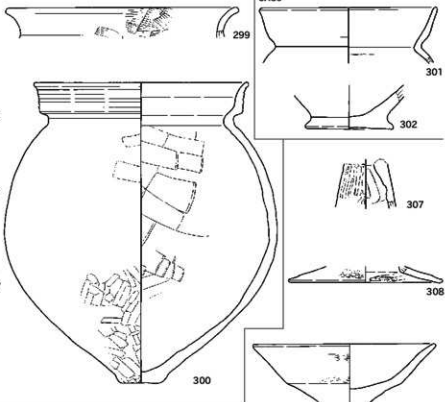
SX215



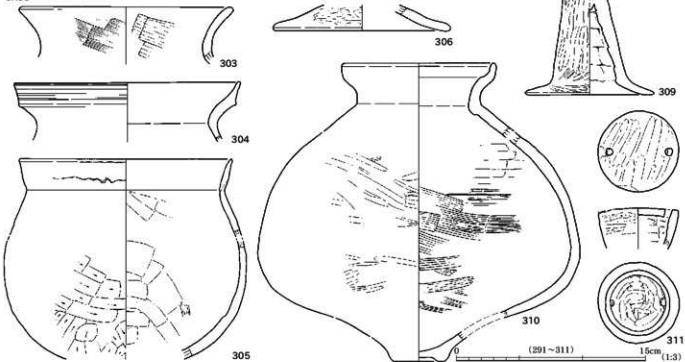
SX119

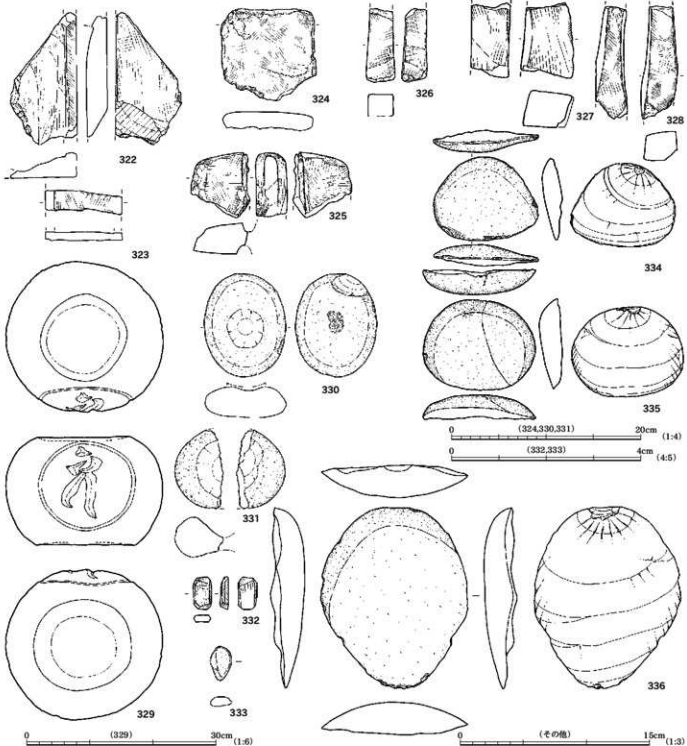
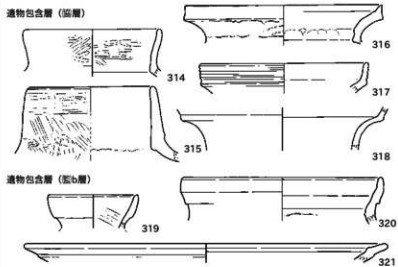
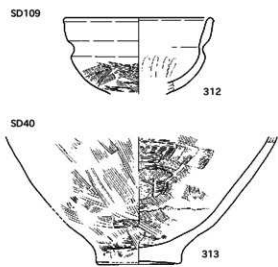


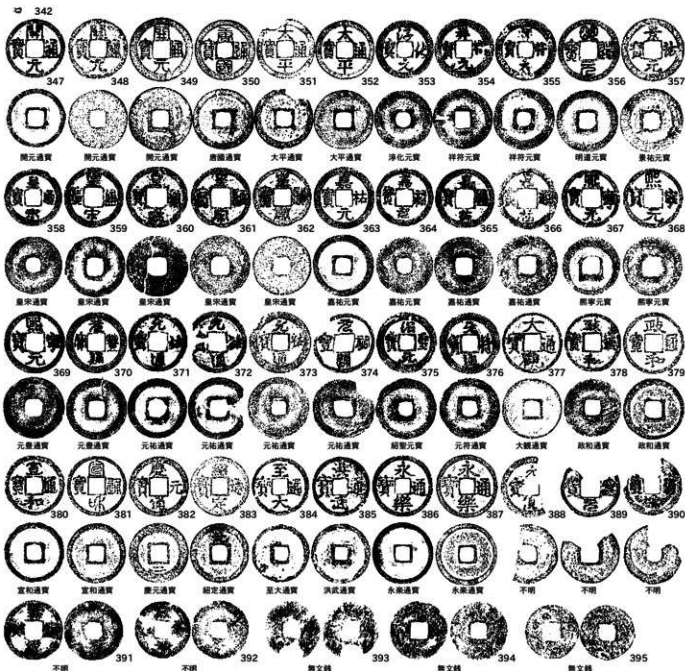
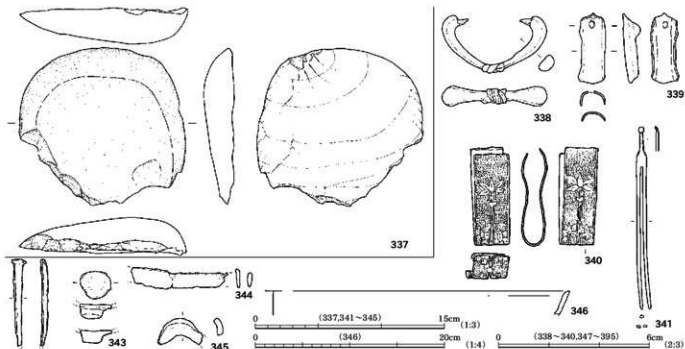
SX39

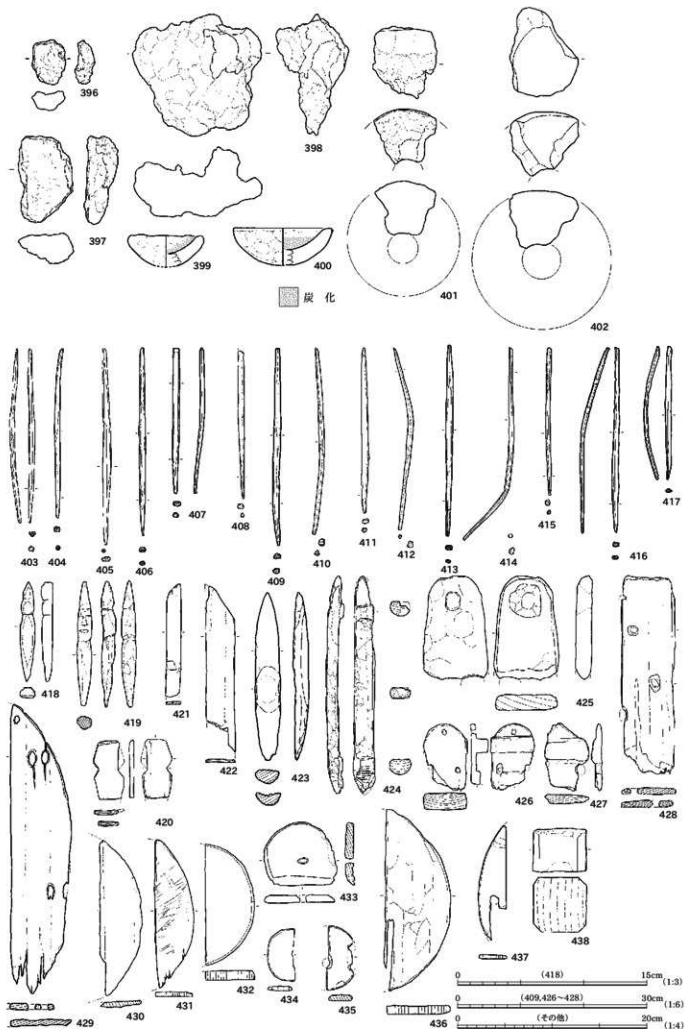


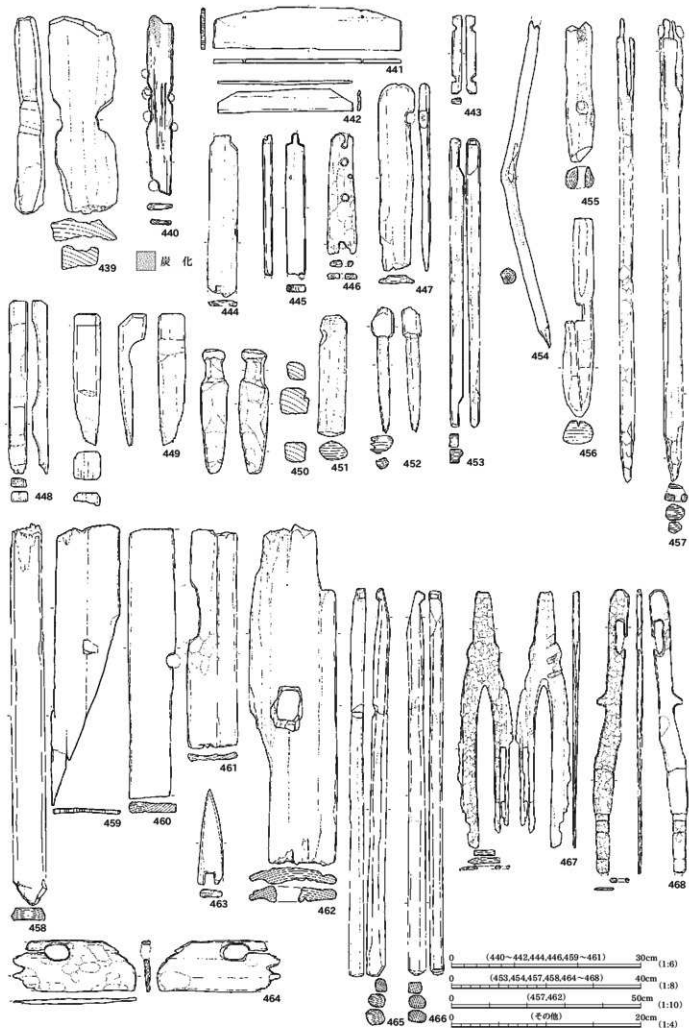
SX33

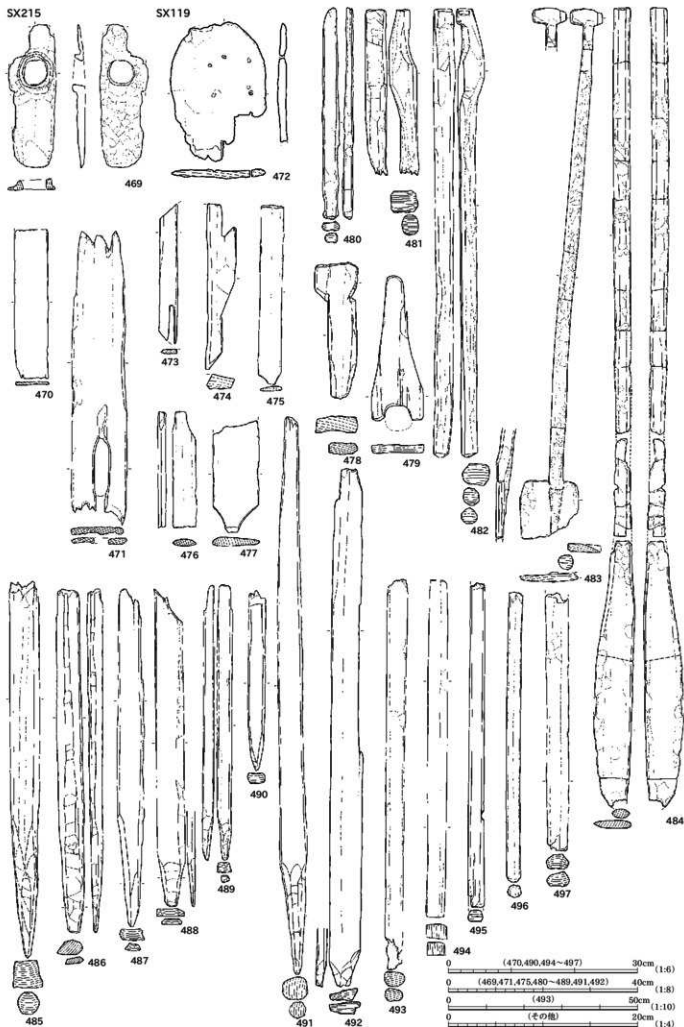




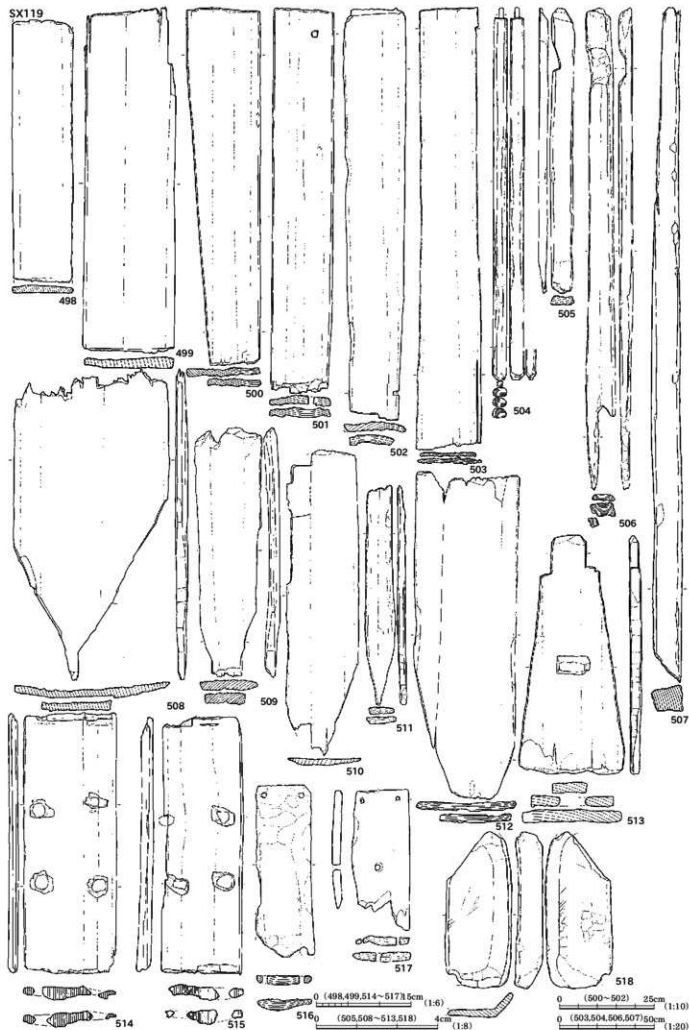








SX119



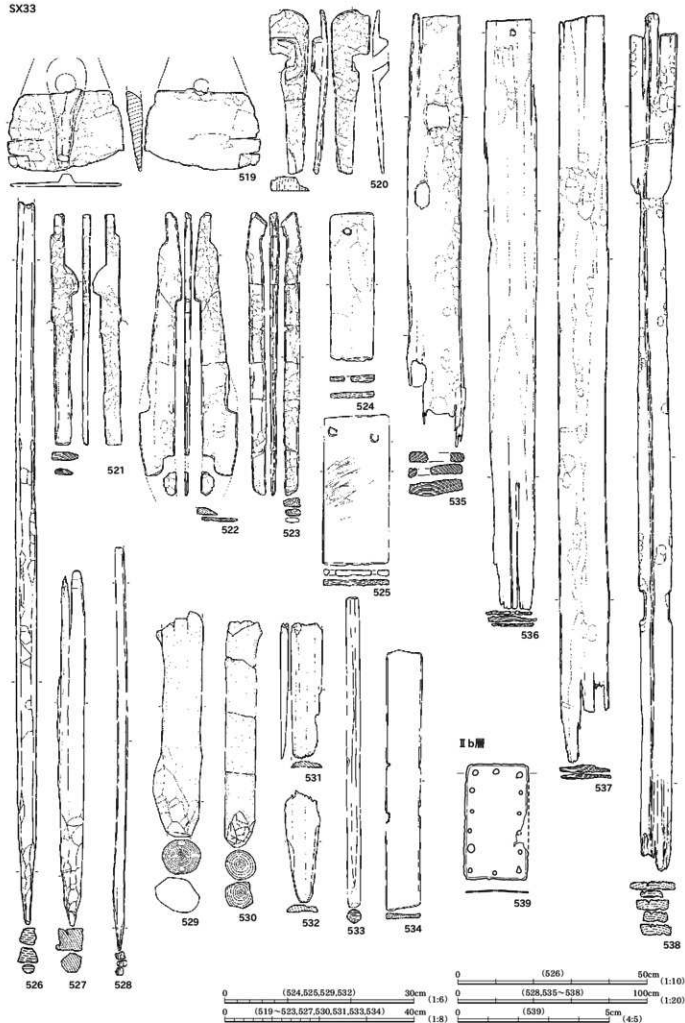
0 (498,499,514~517) 5cm (1:6)

0 (505,508~513,518) 4cm (1:8)

0 (500~502) 25cm (1:10)

0 (503,504,506,507) 50cm (1:20)

SX33





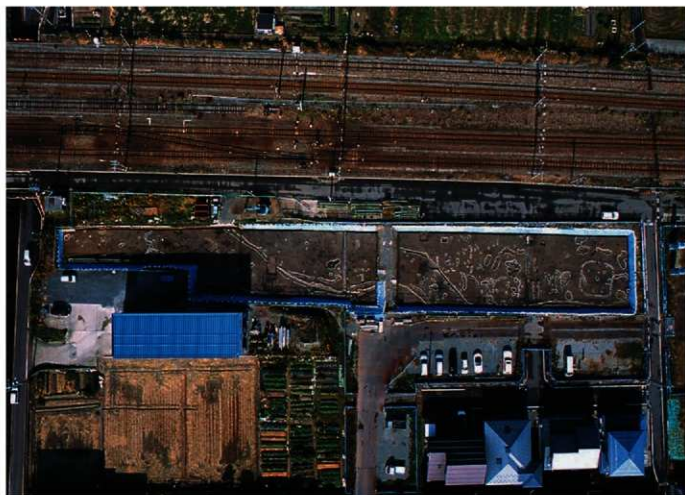
姫御前遺跡・竹花遺跡遠景(北西から)



姫御前遺跡近景(東から)



姫御前遺跡近景 (西から)



古墳時代前期の集落 (5区、上空から)



古墳時代前期の平地建物 SI216 (南から)



平地建物 SI216 の柱根 P247 (東から)



平地建物 S1216 の周溝 SD214・SD215 における遺物の出土状況（南から）



平地建物 S1216 の周溝から出土した土師器（南西から、左：155、中央下：153、右：151）



平地建物 S1401・402・410 周辺完掘 (東から)



SD209・SD300・SR202・SB370 完掘 (東から)



流路から出土した多数の自然木(東から)



溝 SD520 から出土した古墳時代前期中葉の遺物(中央やや左の器台は 250、北から)



SI216の検出状況(西から)



SI216の周溝 SD201 における遺物出土状況(北から)



SI216 地床炉の検出状況(西から)



SI216 壁溝出土の鉢(153)



SI216 床面相当レベル出土の器台(149)



SD209 における遺物出土状況(西から)



SI402 完掘(南から)



SI401 完掘(南東から)



5区基本層序③(南から)



5区基本層序④(北から、Ⅲc層がテフラの二次堆積)



5区近景(南西から)



流路岸に設置された割り抜き桶 SX554(東から、桶は569)



溝 SD520 における遺物の出土状況(西から、右端の高杆は259)



6区近景(西から)



6区基本層序③(南から、IV上層が草本質泥炭)



6区流路から出土した多数の自然木(東から)



平地建物 SI216 完掘(南西から)



SI216 壁溝断面(南から、図版5 8-8')



SI216 壁溝 断面(南から、図版8 12-12')



SI216 土坑 SK253 断面(西から)



SI216 地床炉 断面(東から)



SI216 地床炉 完掘(東から)



SI216 床面相当レベルから出土した土師器(19812 グリッド)



SI216 周溝 SD201 完掘(北から)



SI216 周溝 SD124・215 遺物出土状況(北西から)



SI216 周溝 SD215 遺物出土状況(西から)



SI216 周溝 SD214 遺物出土状況



SI216 周溝 SD214 遺物出土状況(土師器壺157)



SI216 周溝 SD223 断面(東から)



SI216 周溝 SD223 遺物出土状況



SI216 周溝 SD223 遺物出土状況(土師器器台160)



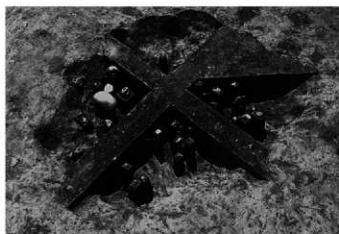
SI216 周溝 SD204 完掘(北から)



SI216 周溝 SX211 と SD207 断面 (西から、図版 7 32-32')



SI216 周溝 SD207 断面 (東から、図版 7 34-34')



SI216 周溝 SK210 遺物出土状況 (東から)



SI216 周溝 SK210 完掘 (南西から)



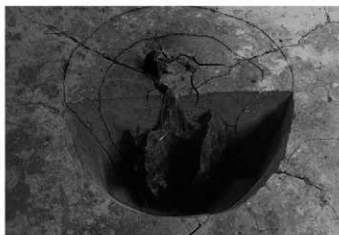
SI216 主柱穴 P246 検出状況 (南から)



SI216 の主柱穴 (P246) (東から)



SI216 主柱穴 P245 断面 (東から)



SI216 主柱穴 P245 におけるヒスイの出土状況 (東から)



SI216 支柱穴 P247 断面 (東から)



SI216 支柱穴 P248 断面 (東から)



SI401・402・410 完掘 (上空から)



SI402・410 付近 完掘 (南西から)



SI401 周溝 SX238 断面 (南から)



SI401 東側周溝 完掘 (南から)



SK229 断面 (南から)



SK235 断面 (東から)



SD233 遺物出土状況 (東から)



SD233 完掘 (東から)



SX284 断面 (南東から)



SX284 完掘 (南東から)



SA199 (P420・421・SX224) 完掘 (東から)



SA199 P420 断面 (南から)



SA199 P224 断面 (南から)



SA199 P421 断面 (南から)



SA429 P259の柱痕から出土したヒスイ(西から)



SA429 P404から出土した土師器壺(171)(北から)



SD219 完掘(西から)



SD220 完掘(東から)



SI402 周溝SD249断面(北から)



SI402 地床炉 断面(東から)



SI402 地床炉 完掘(東から)



SD203 作業風景(北東から)



SI402 周溝 SD236 断面 (北から)



SI402 周溝 SD236 遺物出土状況 (北から)



SI402 周溝 SD236 完掘 (北から)



SK227 検出状況 (南から)



SK227 断面 (南西から)



SK227 完掘 (南から)



SI410 周溝 SK208 検出状況 (北から)



SI410 周溝 SK208 遺物出土状況 (北から)



SK208 断面 (北から)



SK208 完掘 (北から)



SD203 断面 (北西から)



SD203 断面 (南東から、図版 11 38-38')



SD203 断面 (東から、図版 11 39-39')



SD203・P205 断面 (北西から、図版 11 41-41')



P205 における珪石 (421・424) の出土状況



P205 最下層から出土した石英原石



SD209・SR202・SB370 完掘(上空から)



SD206 断面(西から、図版 11 42-42')



SR202 断面(南東から、図版 16 28-28')



SR202 断面(北から、図版 16 30-30')



SR202 断面(西から、図版 16 29-29')



SR202 完掘(27・28B)(北東から)



SR202・SD209 断面(南西から、図版 16 27-27')



SR202とSD209の切り合い関係(西から)



SD209 断面 (西から、図版 16 22-22')



SD209 遺物出土状況 (西から)



SD209 土師器 (214)・石器 (446) 出土状況



SD209 最下層の遺物出土状況 (右端の土師器完形品は 206)



SD209 断面 (西から、図版 16 20-20')



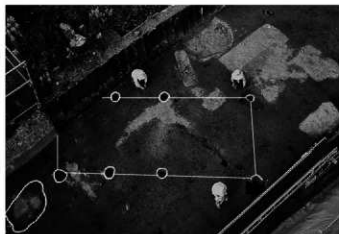
SD209 完掘 (南東から)



SD300 断面 (西から)



SX362 断面 (南西から)



縦立柱建物 SB341 完掘 (上空から)



SB341-P340 (柱根) (南から)



SK311 断面 (東から)



SK311 完掘 (北から)



25～30 グリッド 完掘 (西から)



SD374～377 (煙作溝) 完掘 (北から)



30～32B グリッド 完掘 (東から)



SX396 完掘 (南西から)



SK705 断面 (南から)



P380 から出土したヒスイ原石 (408)



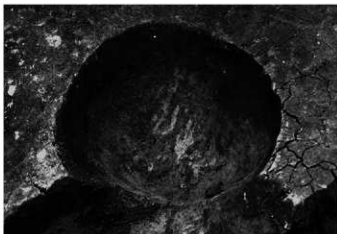
SR730 断面 (東から)



SR730 完掘 (東から)



SK200 (近世墓) 断面 (東から)



SK200 出土の漆器と鉄質 (525) (東から)



ST225・ST226 (近世墓) 断面 (南から)



ST225・ST226 (近世墓) 完掘 (南から)



6区全景(西から)



流路の検出状況(東から)



流路(35Aグリッド)出土の自然木(北東から)



流路(35Aグリッド)出土の自然木(北西から)



流路(36Aグリッド)出土の自然木(北東から)



流路(35グリッド)出土の自然木(上空から)



流路(36Aグリッド)の基本順序(南西から)



流路 (37A グリッド) の基本層序 (南東から)



流路 (38-39A グリッド) 完成 (西から)



流路岸の板杭列 SA549 (西から)



SA549 断面 (西から)



流路岸の板杭列 SA550 (北東から)



流路岸の板杭列 SA559 (南西から)



流路岸の杭 SX516 (南から)



SD520 内の杭 SX533 (北から)



SD520 断面 (北から、図版 32 1-1')



SD520 断面 (東から、図版 32 2-2')



SD520 遺物出土状況 (北東から)



SD520 遺物出土状況 (273) (北西から)



SD529 (40グリッド) 完掘 (南東から)



SD520内の落ち込みSX555 断面 (北東から)



SX555 完掘 (北東から)



SD520内の落ち込みSX556 完掘 (北東から)



SD522・SX554 遺物出土状況 (南西から)



設置桶 SX554 と板杭列 SX553 (東から)



設置桶 SX554 (東から)



Ⅳ上層直上から出土した割物桶(570) (南西から)



Ⅳ上層直上から出土した田下駄? (559)



Ⅳ上層直上から出土した田下駄(558) (北から)



Ⅳ上層から出土した準構造船舷板(571) (南から)



Ⅳ上層中から出土した筋砥石(418) (北西から)



打製石斧 (445) 出土状況



横刃形石器 (436) 出土状況



箸状木製品 出土状況 (SX505) (南から、図版 29 13-13')



箸状木製品 出土状況 (SX502) (北西から、図版 29 10-10')



箸状木製品 出土状況 (SX511) (南西から、図版 24 27-27')



箸状木製品 出土状況 (35B18)



箸状木製品 出土状況 (37A13)



箸状木製品 出土状況 (37A7)



瀬戸美濃合子蓋 (86) 出土状況



動物形 (538) 出土状況



下駄 (557) 出土状況



曲物底板 (551) 出土状況



五輪塔空風輪 (350) 出土状況



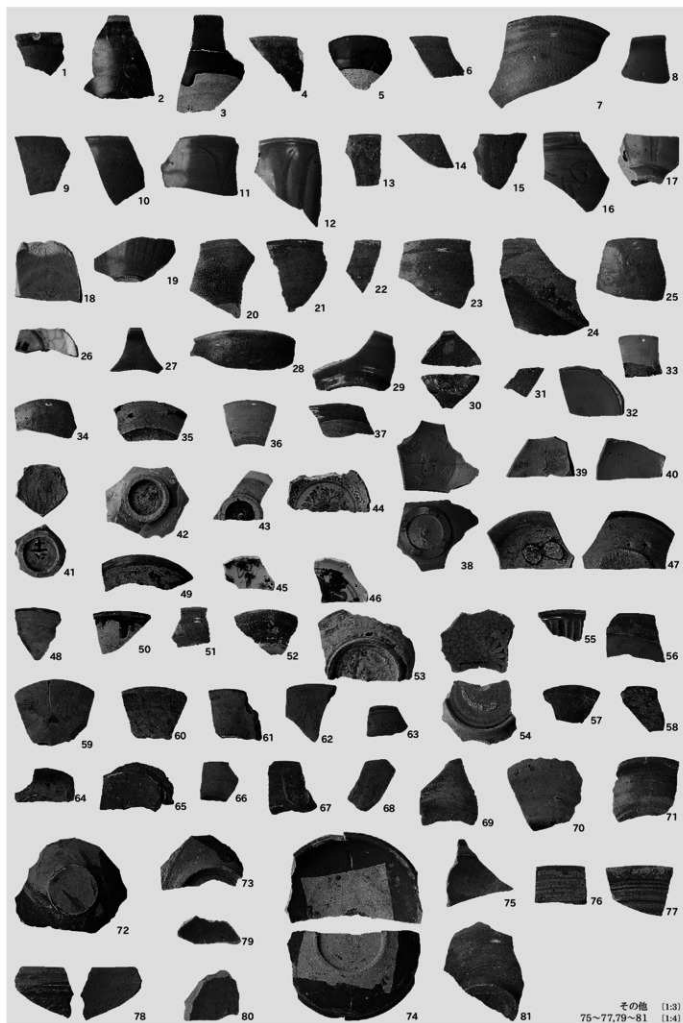
五輪塔水輪 (352) 出土状況

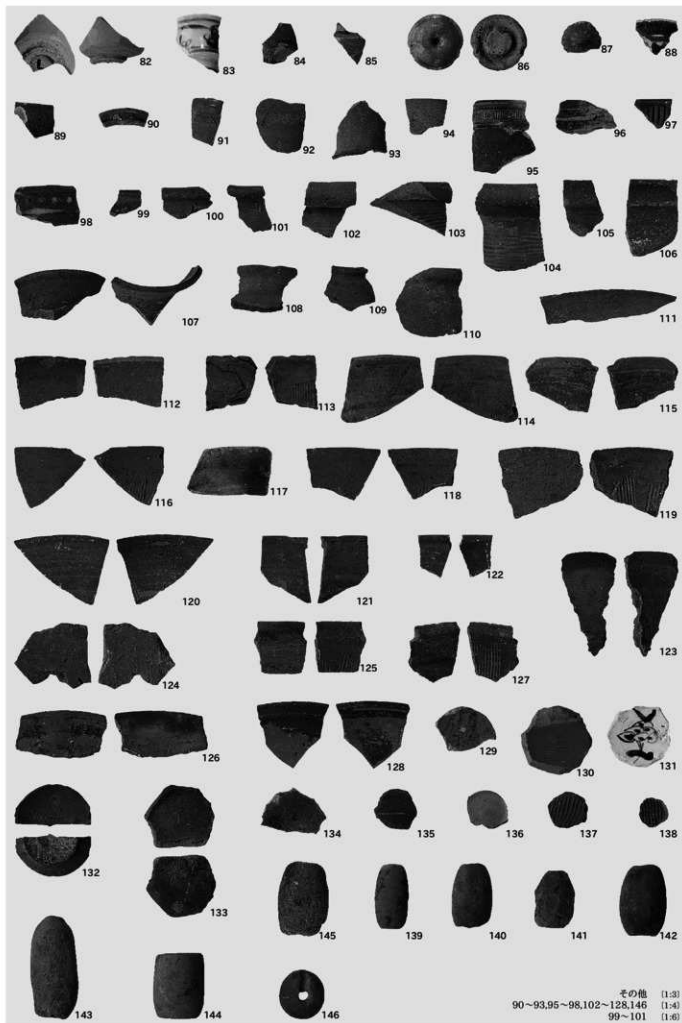


調査風景 (34B グリッド拡張区)



流路調査風景 (東から)

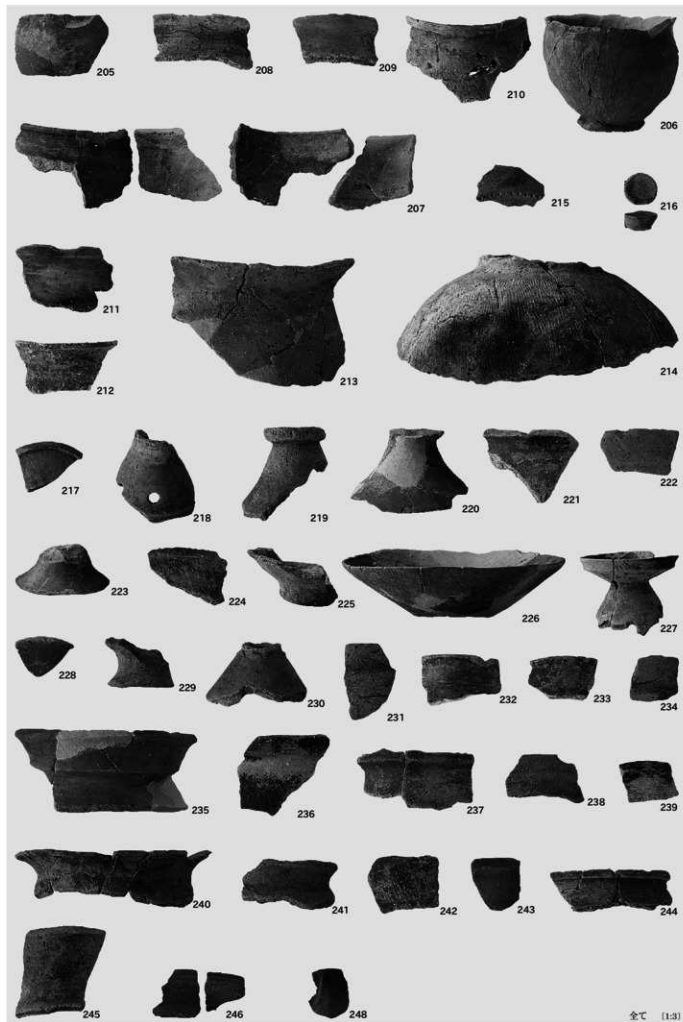




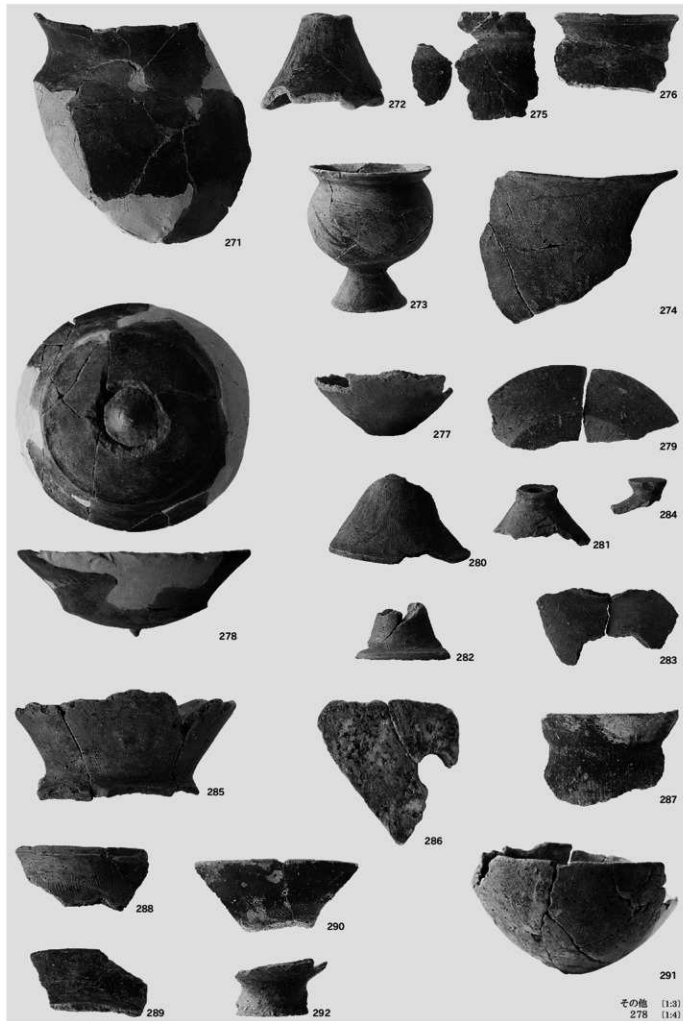
その他 (1:3)
 90~93,95~98,102~128,146 (1:4)
 99~101 (1:6)

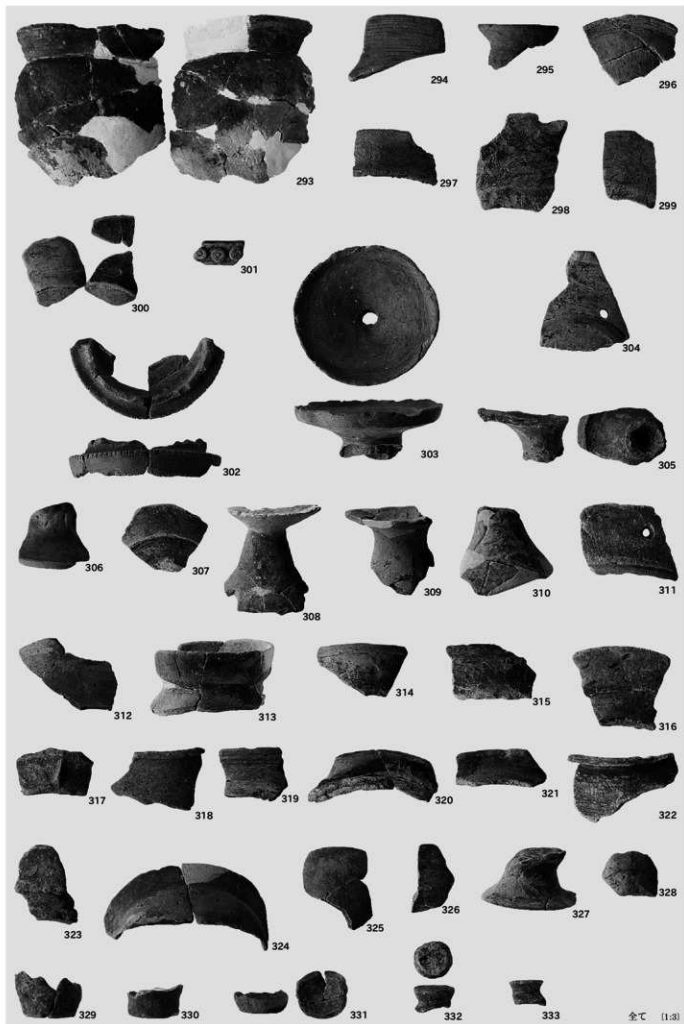


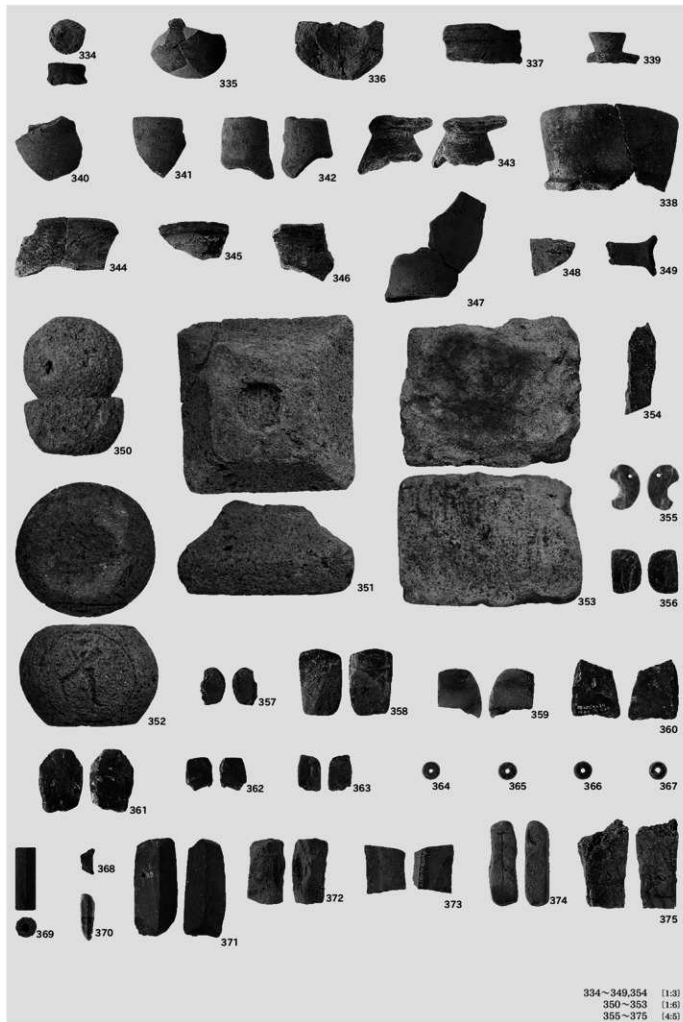




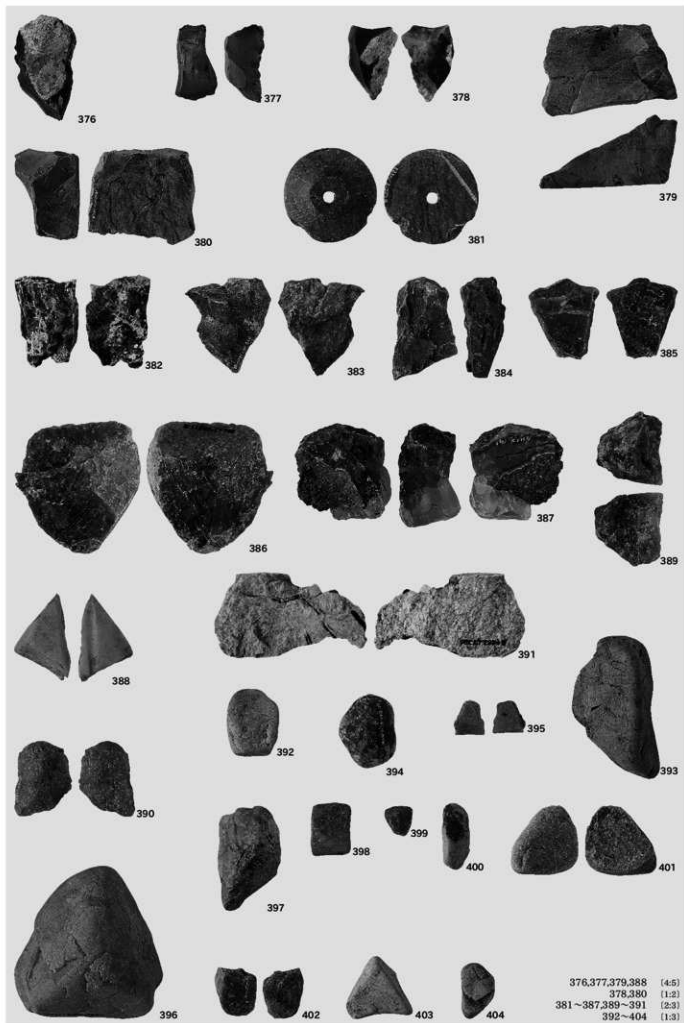




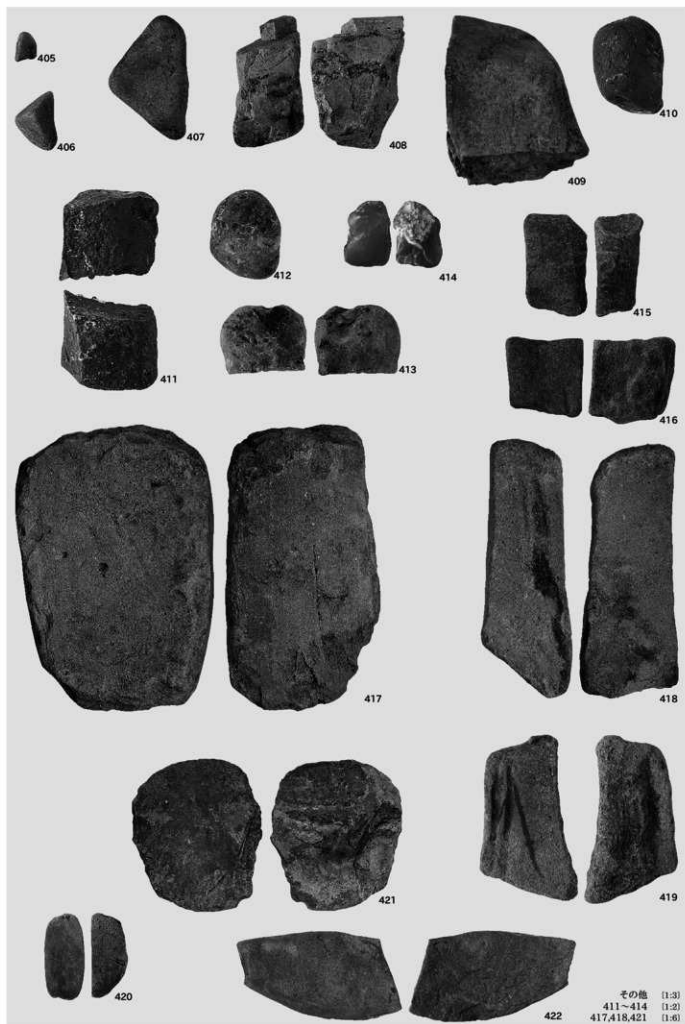


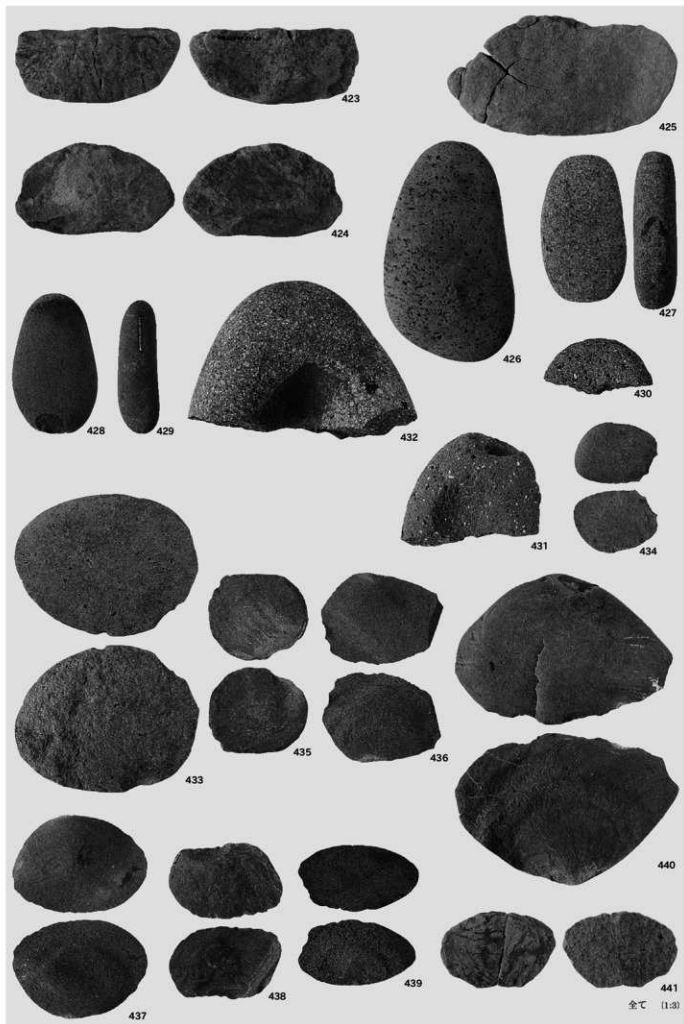


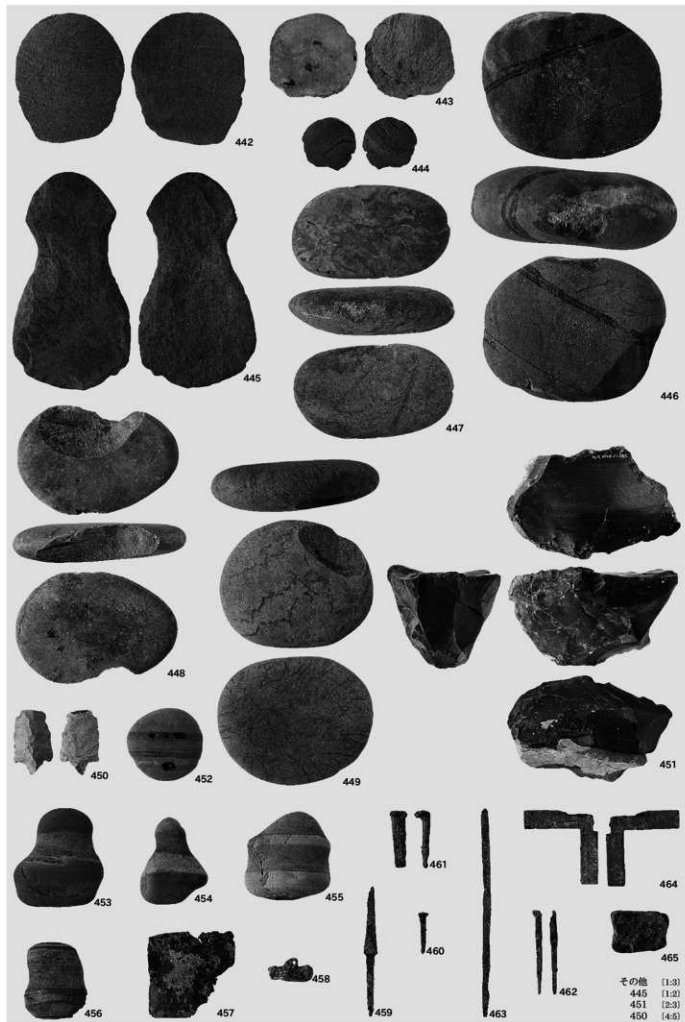
334~349,354 (1:3)
 350~353 (1:6)
 355~375 (4:6)

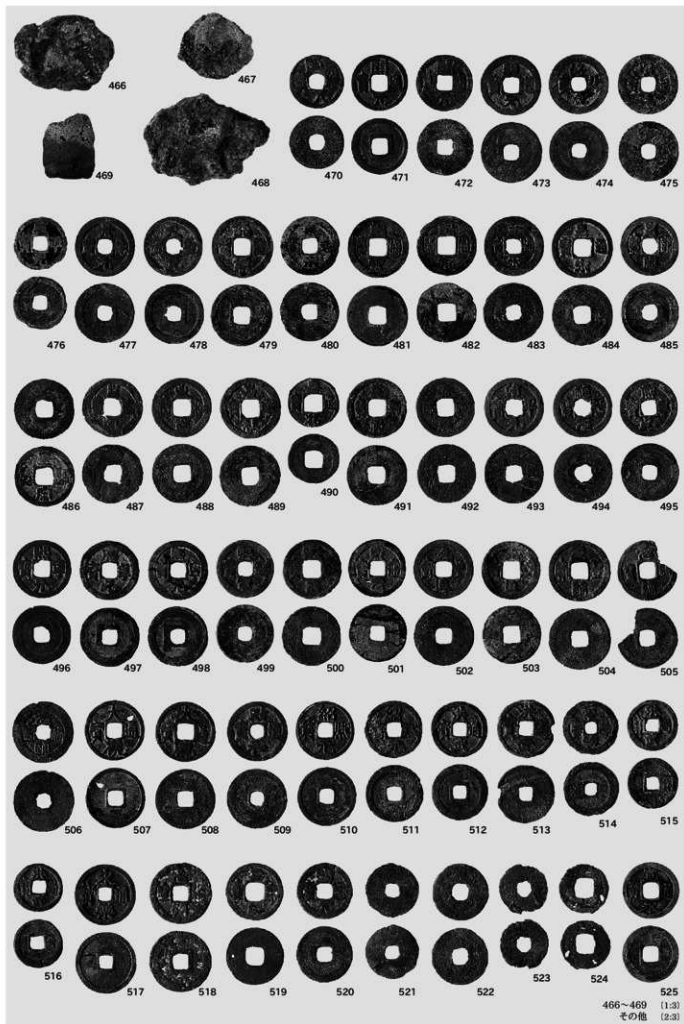


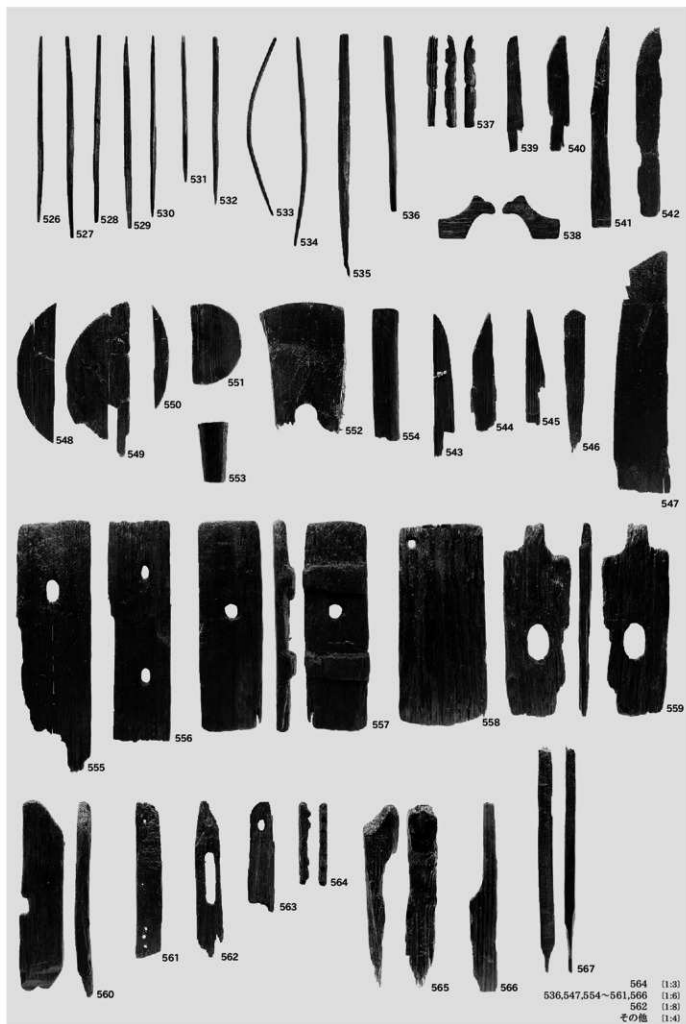
376,377,379,388 (4:5)
 378,380 (1:2)
 381~387,389~391 (2:3)
 392~404 (1:3)

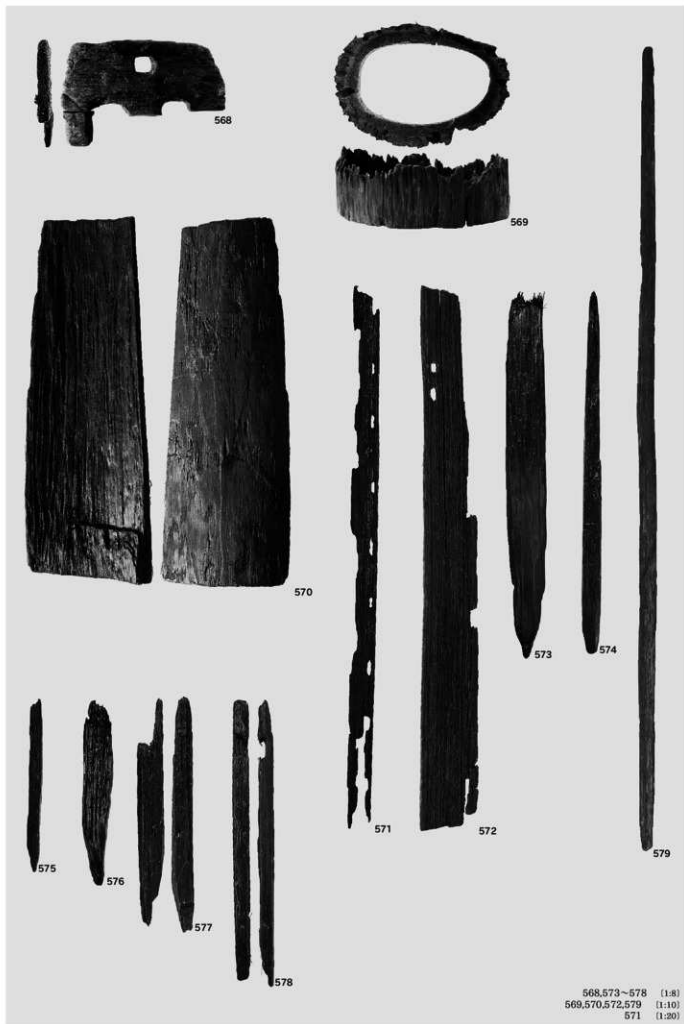














580



581



582



583



584



585



586



587



遺跡近景 (東から)



遺跡近景 (南から)



遺跡近景 (南西から)



R5 区 畦畔 SX215 検出状況 (西から)



R6・7区 木趾群 SX33 検出状況 (北から)



R6・7区 木趾群 SX34 検出状況 (北から)



R6・7区 中世の水田 SX30 と古墳時代の畦畔 SX39 の検出状況 (西から)



SX39 検出状況 (東から)



SX39 盛土中から出土した木製農耕具 (北から)



SX30 コーナーの木製品集中部 (西から)



五輪塔水輪 (329) 出土状況



R 8 区 木趾群 SX119 検出状況 (北東から)



SX119 の検出面 (基本層序①、図版 71 25-25')



SX119 検出状況 (南西から)



SX119 検出状況 (南から)



SX119 における足場板と枕木 (南から)



SX119 と SD109 (下面) 検出状況



SX119 検出状況 (北西から)



SX119 から出土した木製農具の柄 (482) (北から)



SX119 遺物出土状況 (北東から)



SX119 足場板下部の枕木と杭 (南から 図版 70 2-2)



SX119 田下駄 (514・515) 出土状況 (南東から)



SX119 の木材下位から検出した杭 (東から)



R5区 SX215断面(東から)



SX215盛土中から出土した平楸(469)(西から)



R6・7区 完掘(上空から)



R6・7区 基本層序等(北から)



R6・7区 SX33断面(北東から)



SX33足場板の下から出土した平楸(520)



SX33足場板の下から出土した土師器蓋(311)



SX33足場板の下から出土した土師器片



古墳時代前期の木製農具



古墳時代前期の建築材 (左: 535、右 538)



中世の銅製品 (340) 長さ 3.9 cm



多数出土した中世の銭貨



R5区 畦畔 SX215 横出状況 (北西から)



SX215 セクション (南東から)



SX215 に打ち込まれた杭 (東から)



R5区 作業風景 (東から)



R4-1区 完掘 (北東から)



R4-2区完掘 (北から)



R6・7区木畦畔 SX33 横出・SD32 完掘 (東から)



SX33・SD32 横出状況 (北から)



SX33 断面 (北から、図版 60 9-9')



SX33 足場板の下から出土の高杯 (309) (南から)



SX33 足場板の下から出土した木製農耕具の柄 (523)



SX33 出土の田下駄 (524・525) (北東から)



SX33 周辺の板杭 (南から、図版 60 1-1')



SX33 周辺の板杭 (北西から、図版 60 2-2')



SX33 周辺の板杭 (東から、図版 60 3-3')



SX33 周辺の杭 (北東から、図版 60 4-4')



SX33 周辺の杭 (北東から、図版 60 5-5')



SX33 周辺の杭 (西から、図版 60 6-6')



SX34 断面 (北から、図版 64 4-4')



SX34 断面 (北西から、図版 64 6-6')



畦畔 SX39 断面 (南東から、図版 65 7-7')



SD40 断面 (南から、図版 65 12-12')



SD40 完掘 (南から)



SD40 出土の土器壺 (313)



SX30 断面 (南から、図版 65 9-9')



SX30 断面 (東から、図版 65 11-11')



箸状木製品出土状況 (67A20)



箸状木製品出土状況 (SX2) (南西から、図版 64 7-7')



箸状木製品 (404) 出土状況 (SX15) (北から、図版 63 3-3')



箸状木製品出土状況 (SX209) (北から、図版 57 10-10')



箸状木製品出土状況 (SX7) (北西から、図版 63 2-2')



杭状木製品 (452) 出土状況 (SX9) (西から、図版 63 5-5')



板状木製品出土状況 (SX4) (北から、図版 59 2-2')



板状木製品出土状況 (SX29) (北から、図版 65 4-4')



棒状木製品出土状況 (SX19) (北西から、図版 63 6-6')



棒状木製品出土状況 (SX12)



把手状金属製品 (338) 出土状況



舟形木製品 (424) 出土状況



M1層直上から出土した須恵器 (287)



作業風景 (R6・7区、東から)



SD102・SX103 完掘 (東から)



SD102 断面 (西から)



SD102・109 断面 (東から)



SX119 検出状況 (東から)



SX119 木製品 (504・513) 出土状況 (中面、北東から)



SX119 足場板下の枕木 (西から、図版 71 3-3')



SX119 に打ち込まれた杭 (西から、図版 72 2-2'付近、SD109 沿いに多数打ち込まれる)



SX119 に打ち込まれた杭 (西から、図版 72 13-13'・14-14')



SX119 杭 SX699 (北から、図版 72 2-2' 付近)



SX119 杭 SX699 (南西から、図版 72 14-14' 付近)



SX119 板杭 SX695 (南から、図版 72 9-9')



SX119 周辺の板杭 SX120 (南西から、図版 71 11-11')



板杭 SX108 断面 (西から、図版 73 5-5')



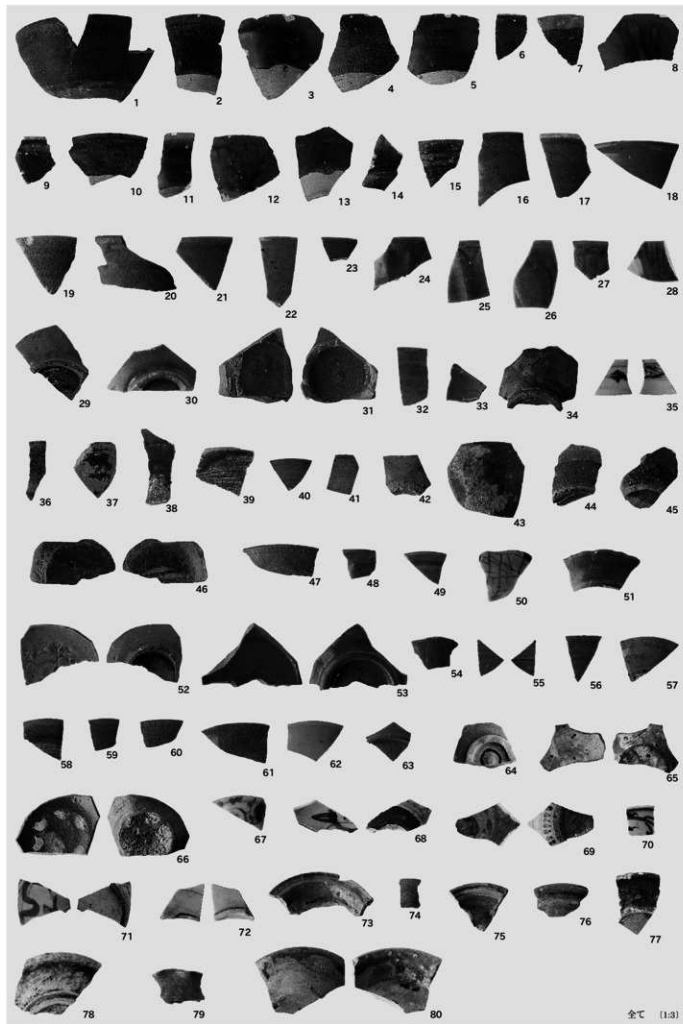
SX119 作業風景 (北東から)

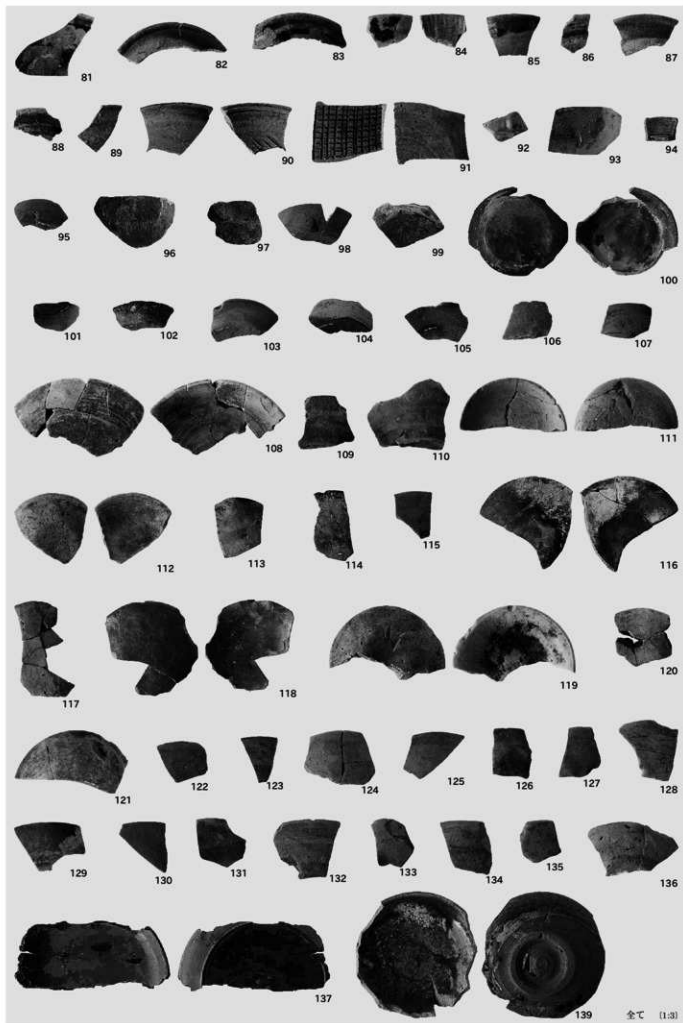


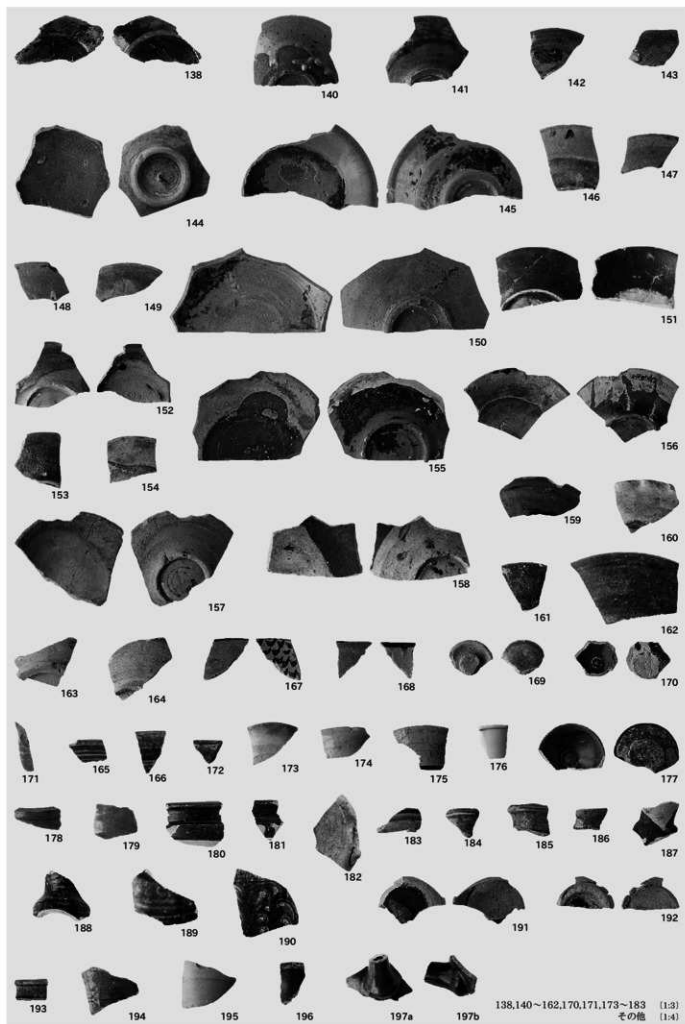
SX119 作業風景 (西から)

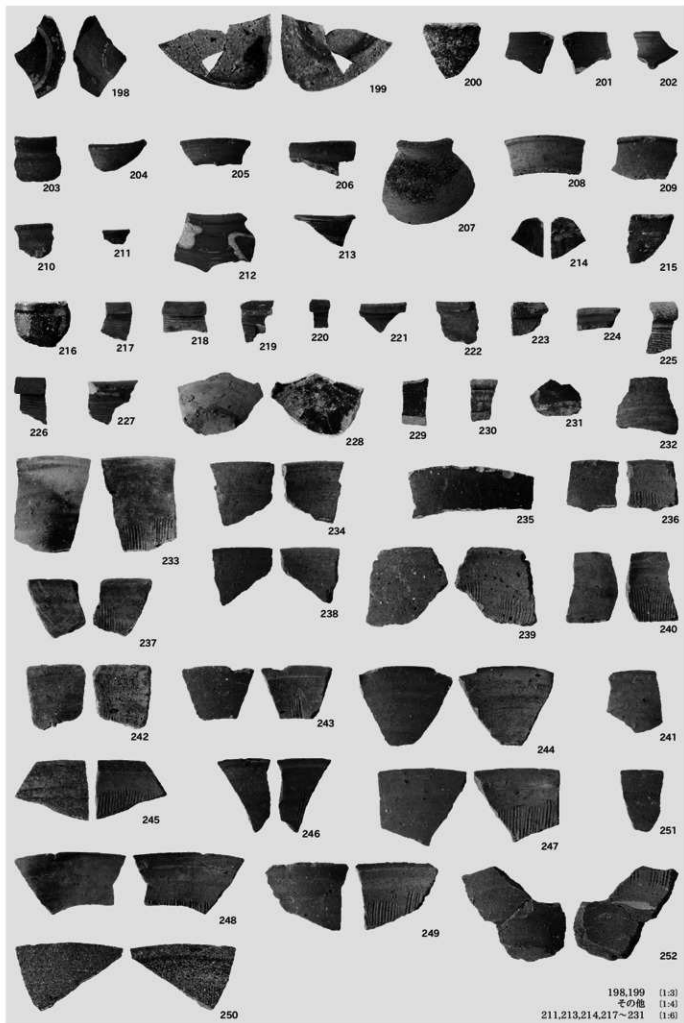


SX119 作業風景 (西から)

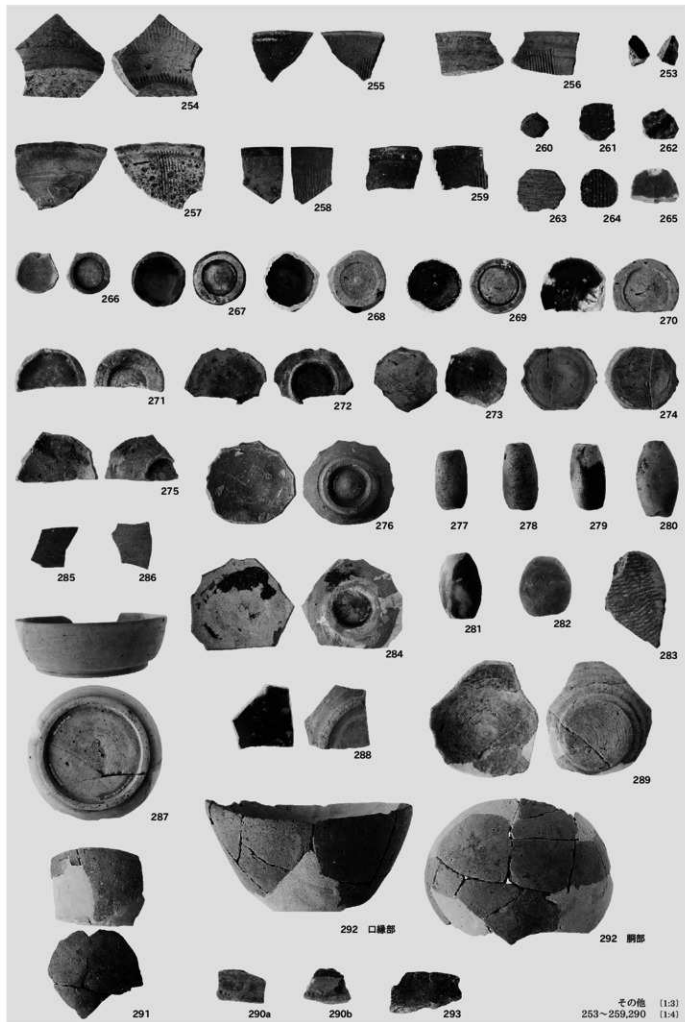




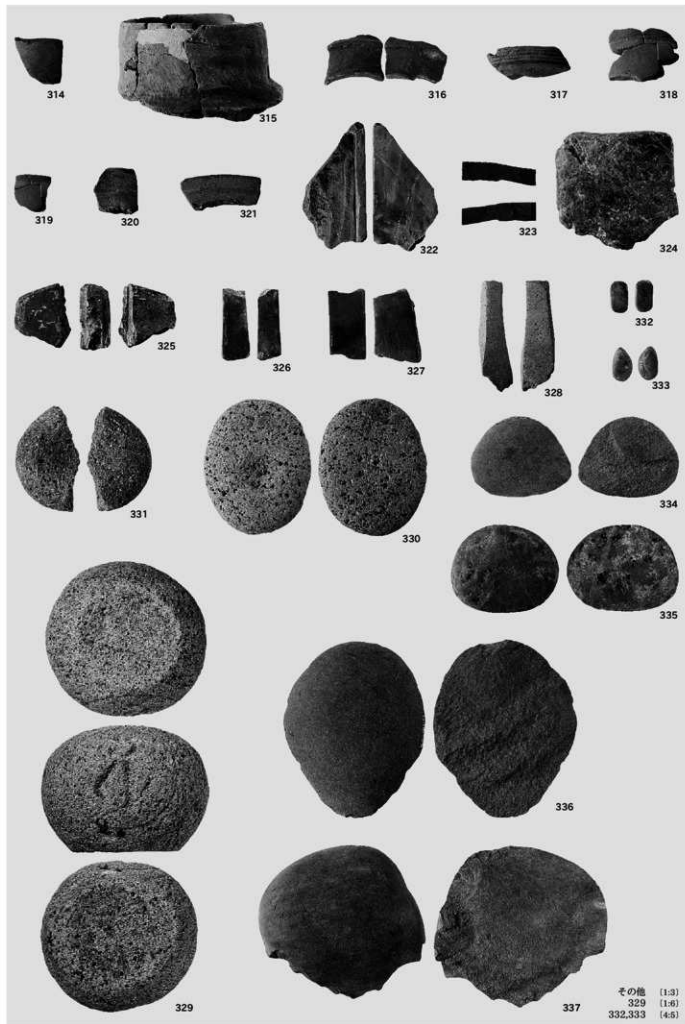




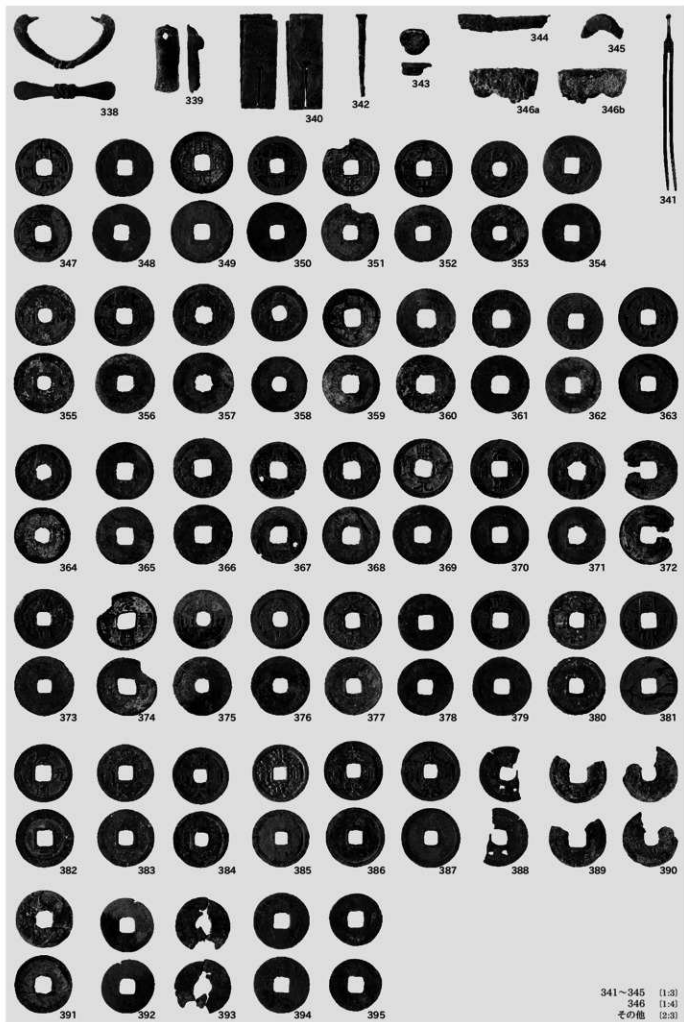
198,199 (1:3)
 その他 (1:4)
 211,213,214,217~231 (1:6)

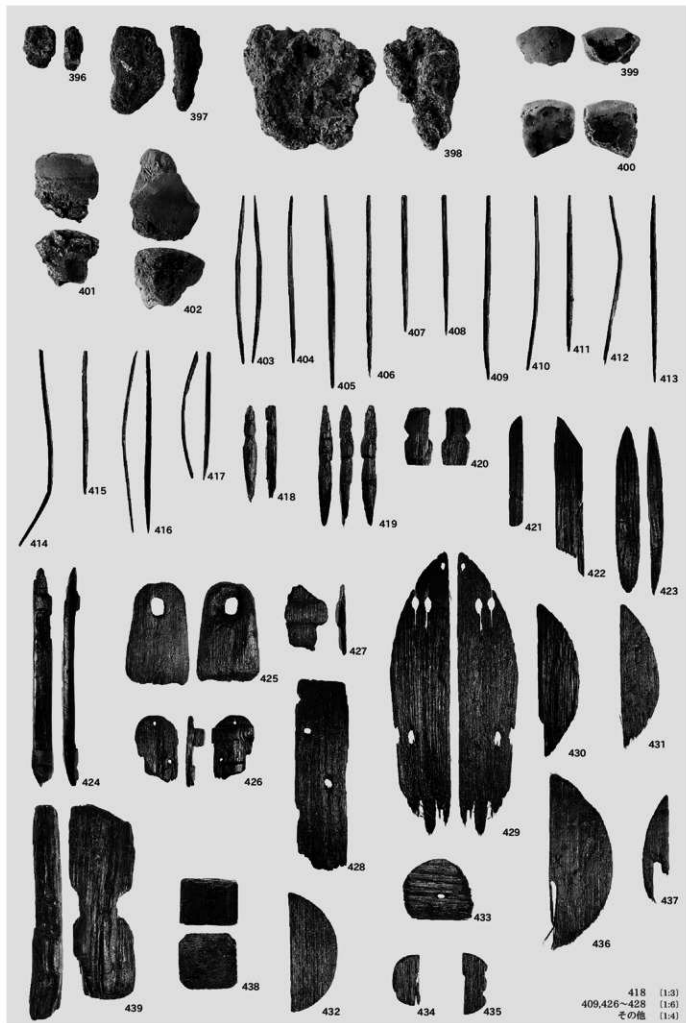




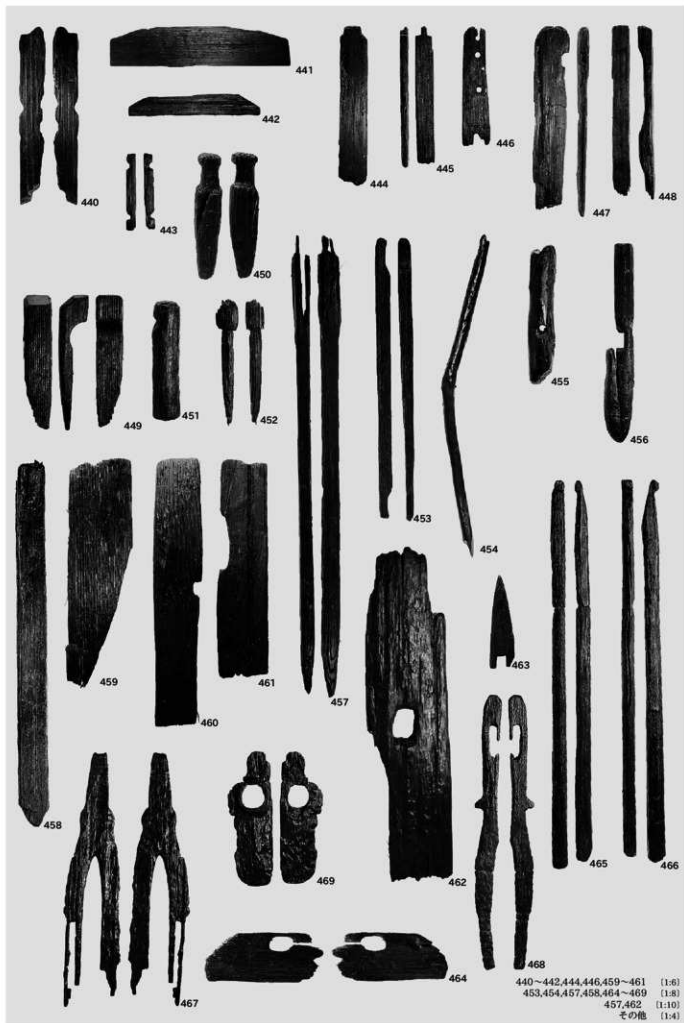


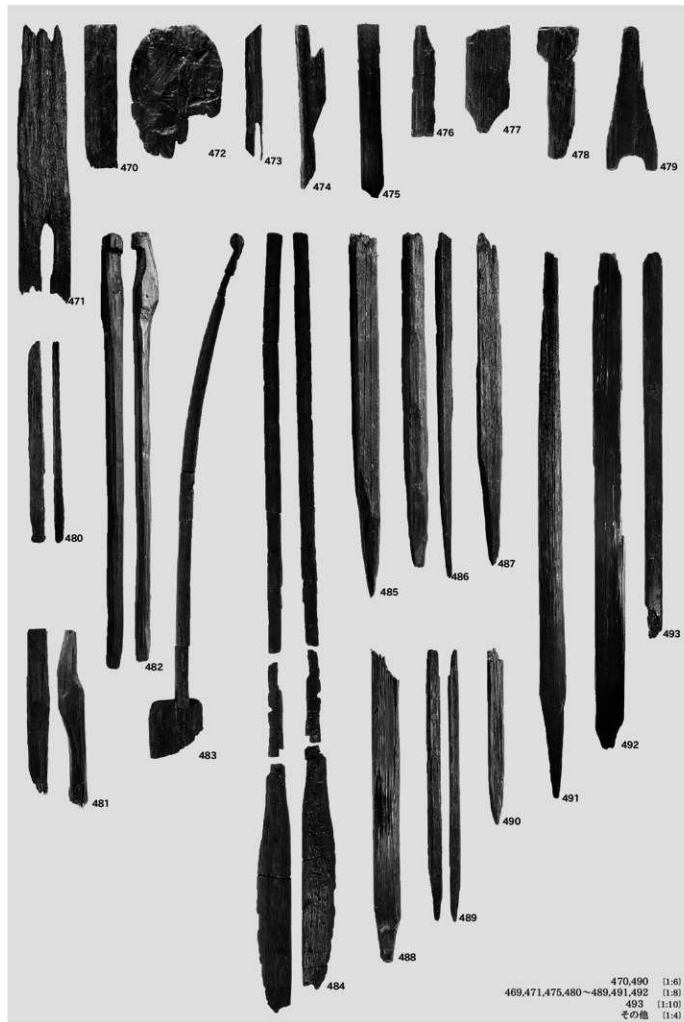
その他 (1:3)
 329 (1:6)
 332,333 (4:5)

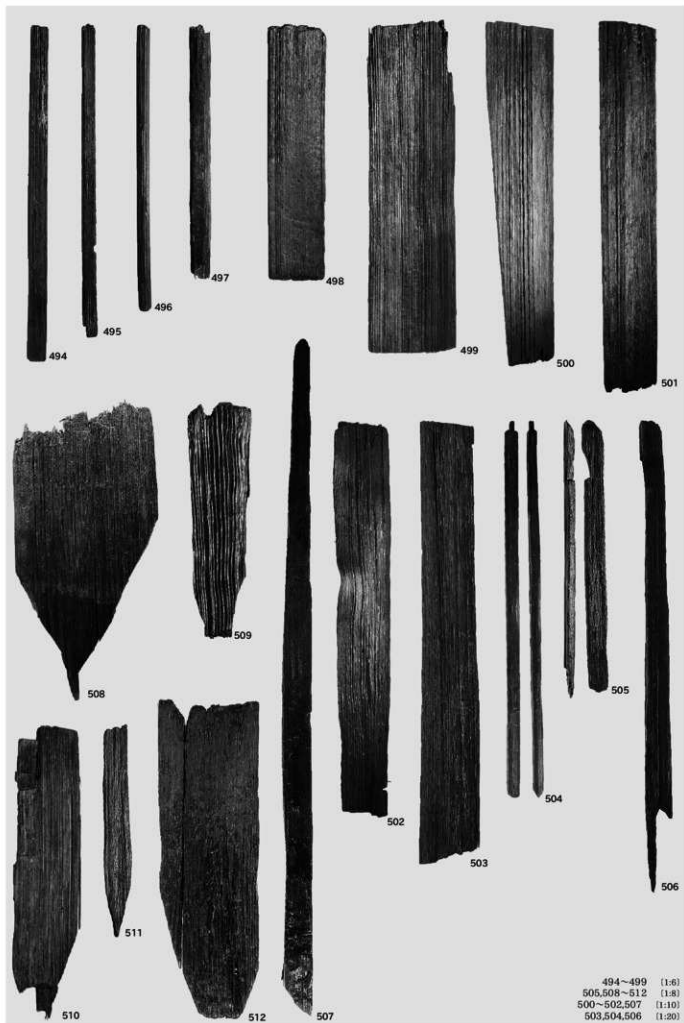




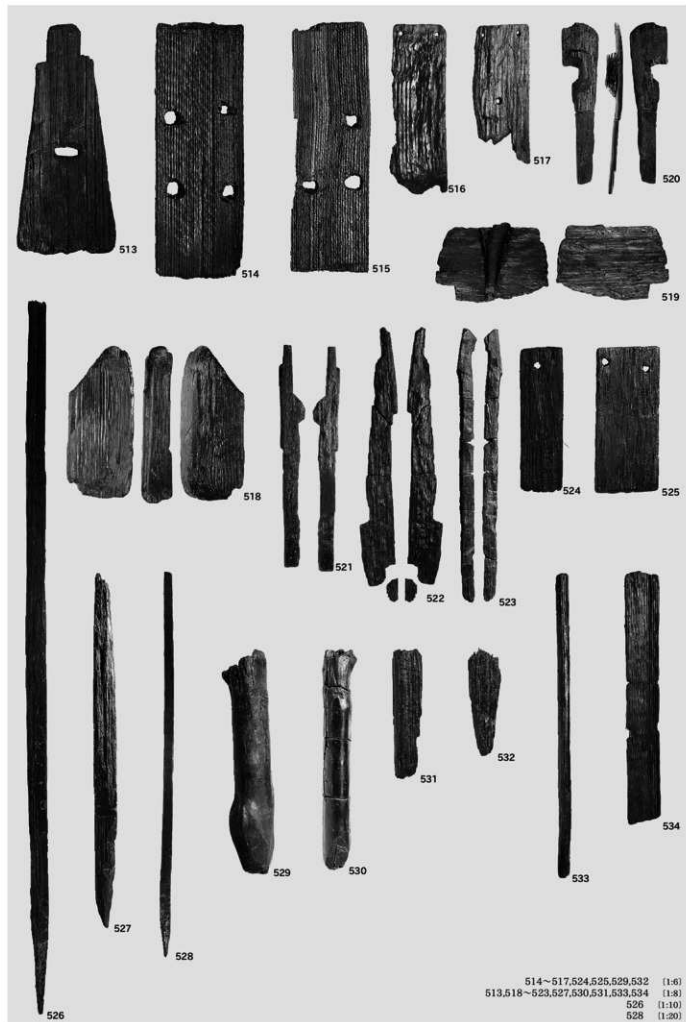
418 (1:3)
409,426~428 (1:6)
その他 (1:4)







494~499	(1:6)
505,508~512	(1:8)
500~502,507	(1:10)
503,504,506	(1:20)





535



536



537



538



539

報告書抄録

ふりがな	ひめごせいせきに・たけはないせきいち							
書名	姫御前遺跡Ⅱ・竹花遺跡Ⅰ							
副書名	北陸新幹線関係発掘調査報告書							
巻次	XIV							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第207集							
編著者名	加藤学(埋文事業団)、相羽重徳・渡辺大士(以上、株式会社古田組) 金原正子・杉山真二・金原美奈子・岡山邦子(以上、株式会社古環境研究所) 卜部厚志(新潟大学災害復興科学センター)、鈴木三男・稻崎真隆・小川とみ(以上、東北大学植物園) 株式会社加速器分析研究所、木村勝彦・法井光輝(以上、福島大学共生システム理工学類) 菊地大樹(京都大学大学院人間・環境学研究科)、橋本裕子(奈良文化財研究所埋蔵文化財センター)							
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒956-0845 新潟県新潟市秋葉区金津93番地1 TEL 0250(25)3981							
発行年月日	2011(平成23)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
ひめごせいせき 姫御前遺跡	新潟県糸魚川市東 寺町1丁目1060 番地1ほか	15216	24	37° 02' 44"	137° 52' 15"	20080414～ 20081216	3,680㎡	北陸新幹線建設
ひめごせいせき 竹花遺跡	新潟県糸魚川市寺 町2丁目458番 地ほか	15216	157	37° 02' 40"	137° 52' 00"	20080508～ 20080805 20080924～ 20081028	1,775㎡	北陸新幹線建設
所収 遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
姫御前 遺跡	遺物 包含地	弥生時代後 期～古墳時 代前期	平地建物4棟、 掘立柱建物3 棟、杭列8条、 木趾群1条、溝、 畑作溝、土坑	土師器、玉作関連資料(滑 石製勾玉・管玉・白玉、ヒ スイ原石)、石器(横刃形石 器・打製石斧)、木製品(割 物桶・天秤棒・準構造船舷側・ 建築部材・杭・板杭)		周溝を有する平地建物S1216を良 好な状態で検出した。また、旧蓮 台寺川の流路から弥生時代～古墳 時代の埋没林を検出し、古墳境の 復元、年輪解析を行った。		
		室町時代～ 戦国時代		土師器、青磁、白磁、青花、 瀬戸美濃焼、珠洲焼、五輪塔、 木製品(箸状・棒状・人形・ 動物形・刀形・斎串・笹塔婆・ 下駄)、金属製品、製鉄関連 資料、銭貨		祭祀関連遺物が多く、水辺におけ る祭祀が行われたと考えた。		
竹花 遺跡	遺物 包含地	弥生時代後 期～古墳時 代前期	畦畔5条(盛土) 畦畔2条・木趾 群3条)、溝4 条	土師器、玉作関連資料(勾 玉未製品・ヒスイ原石)、石 器(横刃形石器)、木製品(鎌 身・鋤身・鋤鍬柄・田下駄・ 建築部材・杭・板杭)		水田の大畦畔を検出した。盛土に よるものと、板材を敷き詰めるも のが認められ、沈下防止の対策が 講じられていた。また、畦畔中か ら多数の木製品が出土した。		
		室町時代～ 戦国時代	水田	土師器、青磁、白磁、青花、 李明陶器、瀬戸美濃焼、珠 洲焼、五輪塔、木製品(箸状・ 棒状・人形・刀形・動物形・ 舟形・下駄・曲物)、金属製品、 製鉄関連資料、銭貨		祭祀関連遺物が多く、水辺におけ る祭祀が行われたと考えた。また、 陶磁器の質・量・種類の豊富さから、 近隣に有力者が存在したことがう かがえ、観音寺との関係を想定し た。		

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第207集

北陸新幹線関係発掘調査報告書XIV

姫御前遺跡Ⅱ・竹花遺跡Ⅰ

平成23年 3月30日印刷 編集・発行 新潟県教育委員会

平成23年 3月31日発行

〒950-8570 新潟市中央区新光町4番地1

電話 025(285)5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1

電話 0250(25)3981

FAX 0250(25)3986

印刷・製本 新高速印刷株式会社

〒950-0963 新潟市中央区南出来島2丁目1-25

電話 025(285)3311

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第207集『姫御前遺跡Ⅱ・竹花遺跡Ⅰ』正誤表

ページ	行	誤	正
131	第47図	2a.アスナロ NIG-26479.	2a.アスナロ NIG-2647.
182	第68図	鍬の装着模式図	鋤の装着模式図
図版84	上段右側	遺物包含層((協)層)	遺物包含層(IV2層)
図版84	上段右側	遺物包含層((監)層)	遺物包含層(Ⅱb層)